THE KAIZO

改造

四月特別号

1924



改造四月特別號 目次



夢の話

作

福田德三著

社會政策と階級鬪爭

（定價參圓 送料十九錢）

廿三版

「資本主義は必然的宿命によつて崩壞するものではない、この儘に放擲する時は人生眞の厚生幸福は全くその爲に蹂躪せらるゝの外はない我々は人爲の政策を以てこれに對抗せねばならぬ」といふ立場より博士が深刻な視察を下したもので刻下の如き階級鬪爭を高唱せらるる折、何人も本書に就く必要がある。

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

賀川豊彦三名著

星より星への通路

五十版

定價貳圓
送料十七錢
四月上旬出來

賀川氏の震災後の東京に於る活動は全く感謝に値する。氏の人類愛の半面を語る本書は、震災と共に全然東京に影を潜めたが、今回改版して玆に讀書子に相見ゆるを得るに至つた。乞ふ一書を購つて氏の得意とせる散文に親め。

死線を越えて

（二八五版）

定價參圓
送料十九錢
四月中旬出來

太陽を射るもの

（一八三版）

定價貳圓八十錢
送料十九錢
五月上旬出來

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二



（四月號）

大衆と共に動け

この數年來、所謂知識階級を以つて居る靑年達が、官僚、軍人、富人、資本家、老人をあまりに侮蔑し現實の政治に超然することを以つて、聊か得意とする風潮あるは嘆くべきことだ。彼等は自己が社會的に生存してゐるのを忘れたるかの如く、自己の地盤を開拓するの苦惱を飛び越えて、一躍新理想に就かんとす。その愚や笑ふべく憫むべきである。新しき社會、理想の樂園は決して一日にて來らず、そして努力なくして新社會への到達は不可能である。現存の地上には拱手してばかりいては、懷に這入てくる一人の味方もなければ、そして黃金箱もないであらう。寸地尺土と雖、皆それが敵地であり、努力による戰ひでなくば彼等の手から奪取出來ないのである。

現在の靑年たちは、自分がけなす資本主義の柱によりながら、官僚の雨露に霑ひながら、却つてそれを呪咀し、冷罵し、袖手しつつ時機の到來をのみ夢みつつある。

普選問題にしてもその通りである。——普選になつたら自分も出るが——普選になつたら一擧にして老輩を驅逐することが出來るが——そして普選を招來すべき努力には我不關焉の態度である。官僚や、軍閥の一壘を陷落せしむるにも血ににじむ努力がなくては、それは不可能だ。

我々の政治的理想は決して普選位を以つて滿足するものでない。しかし一步、一步と自分達の天地を擴大するため、脚下に展開せる現實政界の渦中に勇敢に飛込まねばならぬ。その渦中に投ずることを潔とせざる人々は永遠に革新を論ふる資格のない人々だ。

今回の總選擧にも、ただしは勞働代表選擧にも、常に大衆と共に動き、自己の陣地を確立することは現在の最必要である。現存の機能を無視して得意然たる新人あらば、我々は先づその顏に唾棄一番し、汝盾を乘ることを忘れたかと叱咤し、それから左翼の戰線につく。

すべては戰による。そして大衆と共に動くことによつて我々が社會人として有意義な生活を齎らして得ることを忘はなければならぬ。

倫理及び法理の基底としての生活

長谷川如是閑

一　生存否定の生活觀念

古來生存に對する懷疑的精神が、一定の時期に於いて必ず起つたのであるが、それには二つの原因がある。一つは生存そのものが苦痛であると感ぜらるゝ環境であり、他の一つは、生存と云ふことに關する觀念の進化である。而も所謂懷疑的精神は、前者に基いたものではなく、必ず後者に基いたものである。云ひ換へれば客觀的の境遇よりは寧ろ主觀的の事情が懷疑的精神を持ち來たすのである。生存の苦痛は、牛馬に於いてもある。けれども彼等の意識狀態からは、懷疑的精神は湧いて來ない。人間に於ても　その生存の苦痛のみからは懷疑的精神は起らない。却つてその反對の、强

い生存肯定の衝動作用が起る。懐疑的精神は生存の意識狀態と生存狀態そのものとが喰ひ違ふ所から起るのである。此の生存の狀態と生存の意識との喰ひ違ひは、所謂文化の發達に伴つて起る現象である。生存の事實が、盲目的に衝動的に人間を支配してゐる場合には、決して生存そのものを疑ふ心理は成立しない。從つて生存衝動の強烈に働く場合には、生存に對する懐疑的精神は存在しない、言ひ換へれば、生存を疑ふ心理は、生存がその衝動的の力を失つた場合に起る。生存が衝動的の力を失ふとは、どう云ふ場合であるかと云ふに、生存の意識に就いて或る觀念的作爲が成立つた場合である。

觀念的作爲とは、本來生存の一つの作用である觀念が、その自然の働きを離れて、觀念そのもの丶機構に依つて獨立に働き出した場合を云ふのである。觀念は屢々、觀念自體の有機的發展を遂げるのであるが、生存の意識に就いても、觀念は生存と離れた理解を試みるに至るのである。何故に觀念がそのやうな作爲的の過程に入り込むのであるかと云へば、それはその觀念を生み出だす人々の生活そのものが作爲的となつた結果である。而して所謂文化の系統は往々生活をさう云ふ作爲的の構造に變化させるものである。

文化が生活の構造を作爲的ならしめると云ふのは寧ろ顛倒した言ひ現はし方で、實は生活の組織が作爲的となつたことが、文化現象を生む過程だつたのである。昔から有力な懐疑的精神は、必ず所謂文化階級から起つてゐる。此の階級は、歴史上の事實を見れば判明する通り、彼等の生活樣式を、有ゆる方面で作爲的ならしめてゐる。言語、衣服、習慣に於て彼等が甚だしく自然を離れた典型を造り出してゐるやうに、彼等の宗教、道徳、哲學等の觀念生活に於いて、同じく複雜な人工的構造を持つたものを造り上げてゐるのである。その結果、生存と云ふことは彼等の間には特殊の觀念的意義を持つことになる。それは前にも言つた、本能的な又衝動的な、生存そのものに較べると、極めて人工的な、形

式的な生存樣式なのである。古來の文化階級の、生存に對する觀念はそれ〳〵特殊の形式化に依つて本來の生存そのものと離れて了つてゐるのである。

此の特殊の文化的意義を持つた生存の觀念が、現實の生存そのものと喰ひ違ふ場合に、即ちそこに生存に對する懷疑的精神が成立するのである。委しく言へば、特殊の階級的生活が、特殊の觀念的生活を誘起せしめた場合に、その階級的生活が社會の進化の必然の爲めの變革を惹き起す時期に遭遇すると、その階級生活者は自己の生活の上で作爲的に構成した觀念的意義と現實の生活とが次第に懸離れて行くことを感ずる、そこから生活否定の觀念が生れるのである。而して完成した階級生活の崩壞する場合は必ず一定の文化過程が極度に向上した場合であるから、懷疑的精神は必ず文化の極度に於いて發生する。それはいろ〳〵な形で起つて來る。或は全然の人間否定であつたり、或は人間と神との合一に依つて間接に人間を否定することであつたり、又或は一切の文化形式の否定即ち單純な道德破壞又は藝術破壞となつたり又或ひは神と人間との合一とは正反對に、人間性と獸性の合一となつて人間を否定したり、其他時と場合に依つていろ〳〵の形を採るが、要するに文化過程の生んだ觀念的作爲に依つて現實の生活から回避する態度に於いて一致してゐた。故に之等を一括して文化的頽敗の心理と云ふことが出來る。

文化頽敗の心理に依つて構成された生活の觀念的意義は、殆ど正反對に異る澤山の差別を持つて現れるが、必ず一樣にその生活の階級組織の典型に囚はれてゐるのである。宗教的法悅を生存の極致とするものも、權力保持を生存の絕對の目的とするものも、また生存を生きるよりも、道德的理念そのものを生きることを生存とするといふやうなものも、皆等しく彼等の生存樣式に囚はれてゐるのである。それは社會的生存の、必然の過程とは必ずしも一致することを要さ

ない生活であつて、その階級的觀念そのもの丶存立に一切のものを犠牲とするのである。

それ故に生存に對する懐疑的精神は、社會的生存の必然の過程を離れたもの丶心理である。戀に敗れたものが生存を否定するのも亦性的衝動の異常の昂奮の爲めに生存過程から脱線したのであるが、古來の文化階級は、その文化過程の昂進の極度に於ては往々、戀する男女と同じやうに、生存の必然の過程から脱線するのである。生活に對する懐疑的精神は即ち此の脱線の産物である。

今生活を此の脱線から引戻して、これを生存の必然の過程として見る時には、それは實は文化過程が作り上げてゐるやうな觀念的組立てよりも、もつと單純な、もつと粗朴的な基礎の上に成立してゐるものであることを發見するのである。時々の文化形式が生み出した觀念的意義の生活は、つまり此の基礎を離れゝば離るゝほど、生存否定の精神を生み出す所の機構となるのである。それは生活觀念が、生活そのもの丶機構を離れて、觀念自體の機構に依つて發達する結果である。それはいつも崩壞して行く側の文化階級の中に生れる自己崩壞の作用である。それは決して一般の生存を否定する力なく、自己の階級だけの生存を否定して、社會的變革を引き起す消極的動因となる作用である。

それ故に社會的生存を此の文化崩壞の過渡的時代に於いて築き上げる階級の間には、決して生存の懐疑的精神は起らない。之に反して、此の階級の間には生活の極めて粗朴的な肯定が起るのである。而して此の粗朴的の肯定は極めて非文化的の生活意識を生み出す。所謂ゆる啓蒙時代に起つた心理、又中世紀の文化崩壞に次で起つた近代的心理等は何れも煩瑣的な觀念的構造を、より粗朴的な心理で破壞したのである。今日の資本主義文化が、再び舊世紀の法悦的な信仰、又は煩瑣的な理念等を復活させたに對し、此の資本主義文化の崩壞に次いで起る階級の意識は同じく粗朴的な特徴を持つのである。從つて生活の法則の上にも、當然その影響が現はれねばならないのである。

今社會的生活の內的並に外的法則を倫理及び法理といふ二つの概念的構成に總括したとすれば、現代の文化の完成に伴ふ倫理と法理とが、法悅的並に煩瑣的な根柢を持つに對し、進化の過程に應ずる倫理と法理はそのやうな信仰と理念とから脫しやうとしてゐるのは當然である。本論は完成された階級的文化觀念が構成せしめた生活の法則としての倫理及び法理の共調から離れて、生活そのもの丶社會的構成の根柢に於て求め得る約束を見出さうとするのである

二　生活的行動の諸相

生存を、文化的作爲の結果たる觀念的意義から引き離して、生存行動として見、それを惹き起す動因を假りに生存衝動と名づくるならば、此の衝動の形式は通常三つの條件を持つと解釋される。第一は、榮養を攝らうとする衝動であり、第二は、繁殖の衝動であり、第三は、此二つの根本的衝動を完成する爲めの智的衝動である。第一のそれは、個體の生命の有機的作用を存續せしむる働きであり、第二のそれは、個體の有機的生命が、一定限度に達して消滅する場合に種を存續せしむる働きである。此の二つの作用は、生物の生活の根柢的のそれであつて、人間の生存が社會的に發達し又種々なる文化形式を探りて發達すると云ふとは畢竟、此の二つの衝動が完成される過程なのである。從つて第三の知的衝動は、つまり此の二つの作用を完成せしむる人間的方法として發達したものである。

此の人間的行動の、衝動としての性質を單純な形ちで保つてゐればゐる程人間生活の樣式は低級であると謂はれる。文明發達の跡を見ると、そこに此の二つの根本的衝動が最も粗朴的に現れた時代がある。それが次第に文明に進むに從つて第三の衝動が社會の外殼を蔽ひ盡すやうになる。榮養及び生殖の衝動も、文明の社會に於ては智的衣裝を被つてゐるのである。

そこで文明が第一「胃」の文明、第二「腰」の文明、並に第三「頭」の文明と云ふやうな、三つの容態を持つと云ふ風に解する人もある。發達した文明の社會に於ては、頭の作用が過度に尊重されて、根本的の二つの作用は却つて無視され又は壓迫されるやうな外觀を呈する。けれども最近の研究が之を明かにしてゐる通り、榮養並に生殖の衝動は、社會的生活に於ては、根柢的に重要の地位を占むるものであるとは、決して第三の衝動に讓らない。意識の作用を過度に尊重する人間的思惟は畢竟、さう云ふ特別の生活上の立ち場を持つ階級文化の成立した結果であつて、これらの總ての文化樣式を通じて、之を根柢づけ動機づけるものは榮養並に生殖の衝動であると云ふことは、疑ひない事實である。

されば社會的生活の法則を、人間的意識の上で組み立てやうとする場合に、生活上根柢的である所の、榮養並に生殖の衝動の作用を無視する態度は成立しないのである。然し此の事實を意識せしむるに至つたのは、之れを無視した組織の崩壊に基づくのであつて、その崩壊が著しくなつたのは全く近代に至つてであるから、そこで此の事實の認識も近代に至つて特に著しくなつたのである。

それはつまり、複雜な作用のために畸形的になつた生活の構造を、その本質的事實を發見することに依つて、正常の狀態に引き戻さうとする人間的努力である。そこで生活の外部構造である所の文化的諸現象を、此の裸かの事實に立ち戻つて理解する必要が人間的生存持續の爲めに生じたのである。然して此の意味から、先づ生活の本質的の事實を檢討すると、いろ／＼の生活の觀念的の意義が、何んな風に作爲的に構成されてゐるかを知ることが出來る。

此の意味から生活を檢討する爲めには、先づ三つの衝動の中の第一の、榮養の衝動に生活を集約して考察せねばならぬ。生活の種々なる觀念的意義を生み出だした第一次的の動機は此の榮養衝動が人間的行動として現れたその行動自體

今社會的生活の内的並に外的法則を倫理及び法理といふ二つの概念的構成に總括したとすれば、現代の文化の完成に伴ふ倫理と法理とが、法悦的並に煩瑣的な根柢を持つに對し、進化の過程に應ずる倫理と法理はそのやうな信仰と理念とから脫しやうとしてゐるのは當然である。本論は完成された階級的文化觀念が構成せしめた生活の法則としての倫理及び法理の共調から離れて、生活そのものゝ社會的構成の根柢に於て求め得る約束を見出さうとするのである

二　生活的行動の諸相

生存を、文化的作爲の結果たる觀念的意義から引き離して、生存行動として見、それを惹き起す動因を假りに生存衝動と名づくるならば、此の衝動の形式は通常三つの條件を持つと解釋される。第一は、榮養を攝らうとする衝動であり、第二は、繁殖の衝動であり、第三は、此二つの根本的衝動を完成する爲めの智的衝動である。第一のそれは、個體の生命の有機的作用を存續せしむる働きであり、第二のそれは、個體の有機的生命が、一定限度に達して消滅する場合に種を存續せしむる働きである。此の二つの作用は、生物の生活の根柢的のそれであつて、人間の生存が社會的に發達し又種々なる文化形式を採りて發達すると云ふとは畢竟、此の二つの衝動が完成される過程なのである。從つて第三の知的衝動は、つまり此の二つの作用を完成せしむる人間的方法として發達したものである。

此の人間的行動の、衝動としての性質を單純な形ちで保つてゐればゐる程人間生活の樣式は低級であると謂はれる。文明發達の跡を見ると、そこに此の二つの根本的衝動が最も粗朴的に現れた時代がある。それが次第に文明に進むに從つて第三の衝動が社會の外殼を蔽ひ盡すやうになる。榮養及び生殖の衝動も、文明の社會に於ては智的衣裝を被つてゐるのである。

ここで文明が第一「胃」の文明、第二「腰」の文明、並に第三「頭」の文明と云ふやうな、三つの容態を持つと云ふ風に解する人もある。發達した文明の社會に於ては、頭の作用が過度に尊重されて、根本的の二つの作用は却つて無視され又は壓迫されるやうな外觀を呈する。けれども最近の研究が之を明かにしてゐる通り、榮養並に生殖の衝動は、社會的生活に於ては、根柢的に重要の地位を占むるものであることは、決して第三の衝動に譲らない。意識の作用を過度に尊重する人間的思惟は畢竟、さう云ふ特別の生活上の立ち場を持つ階級文化の成立した結果であつて、これらの總ての文化樣式を通じて、之を根柢づけ動機づけるものは榮養並に生殖の衝動であると云ふことは、疑ひない事實である。

されば社會的生活の法則を、人間的意識の上で組み立てやうとする場合に、生活上根柢的である所の、榮養並に生殖の衝動の作用を無視する態度は成立しないのである。然し此の事實を意識せしむるに至つたのは、之れを無視した組織の崩壞に基づくのであつて、その崩壞が著しくなつたのは全く近代に至つてであるから、そこで此の事實の認識も近代に至つて特に著しくなつたのである。

それはつまり、複雜な作用のために畸形的になつた生活の構造を、その本質的事實を發見することに依つて、正常の狀態に引き戻さうとする人間的努力である。そこで生活の外部構造である所の文化的諸現象を、此の裸かの事實に立ち戻つて理解する必要が人間的生存持續の爲めに生じたのである。然して此の意味から、先づ生活の本質的の事實を檢討すると、いろ／＼の生活の觀念的の意義が、何んな風に作爲的に構成されてゐるかを知ることが出來る。

此の意味から生活を檢討する爲めには、先づ三つの衝動の中の第一の、榮養の衝動に生活を集約して考察せねばならぬ。生活の種々なる觀念的意義を生み出した第一次的の動機は此の榮養衝動が人間的行動として現れたその行動自體

の差別に之を求めることが出來る。殊に文明と呼ばるゝ生活様式を本位とする生活の觀念的意義の上の差別は、此の榮養衝動の行動としての發達に於ける差別と離るべからざる關係にあることを認めねばならないのである。

榮養の衝動が、人間的行動として現るゝ場合を理論的に考へれば、三つの様式となる。第一は榮養に必要な資料を採集する行動であり、第二は、その資料を貯藏する行動であり第三には之を產出する行動である。

此の三種の行動は矢張り發生的に、順序がある。最も單純な行動は第一の採集である。如何なる生物も榮養衝動を充たさんとすれば必ず此の榮養資料を採集すると云ふ行動は出ないものはない。赤兒が生れ落つると直ちに乳房を求める行動に出るやうに、如何なる單純な生物も、榮養採集の行動に於いては可なり發達した腦力を持つてゐるのである。從つて人間社會の、所謂ゆる社會的行動もその最も單純な形に於いては榮養採集の行動に止まるのである。が、然し人間以下の動物に於いても、既に採集するだけに止まらないで、貯藏の能力を持つてゐる。猿が兩方の頬に食物を貯へ、或は他の器物にそれを貯へる。又犬は食物を地に埋める。尤も大規模に貯藏の能力を發揮してゐるのは蟻と蜜蜂とである。そこに、既に複雑な組織が生れるのである。社會的制度として無形の約束がそれ等の生物の間に成立つと同時に、有形の組織即ち蜂窩並に蟻の塔等は極めて巧妙な構造を具へた建造物である。それは人間社會に譬へたならば、文明の無形の制度並に有形の文明の都會の發達と等しいものである。文化様式が、第一次的の要素にして榮養の衝動を有すると云ふことはこれに依つても察しられる。其處から、人間社會に於いても採集の行動と同時に、貯藏も亦可なり複雑に組織的に發達してゐたことを想像するに足りる。

此の採集及び貯藏の生活を一括して普通の用語例に從つて假りに「蒐集の生活」と呼ぶならば、此の蒐集の生活は、恐らく、一切の生物の榮養衝動に基づく行動の全部であつて、人間を除く他の總ての生物は、此の蒐集生活以上に出られな

かつたのである。人間の生活も又從つて、最も原始的のそれに於いては當然此の蒐集生活以上に出られなかつたのである。今日に於いても野蠻地方の原住民族は、接觸した文明人に教育せられない限り、皆此範圍に止つてゐるのである。

生活に何んの進化もない生物に於いても、此の蒐集の生活はある。そして生物に此の生活の存ずることは、少しもその生物の進化を持ち來す事が出來なかつたのである。

その意味で、蒐集の生活は全く動物的生活であると云ひ得る。されば、動物生活以上に人間生活を發達せしめた動因は此の蒐集生活にはなかつたと云はねばならぬ。然らば如何なる生活が人間のそれを、動物の生活から引き離して發達せしめたかと云へば、第三の衝動即ち、榮養の資料を產出する行動である。で、今第一第二を一括して蒐集生活とし、之に對する他の生活を假りに、生產の生活と名づくるならば、榮養の衝動が現れる行動としては、第一蒐集の行動、第二生產の行動との二つに分けられる譯である。

榮養の資料を產出する行動の發生については、只だ理論的に考へられる丈けであるが、その理論上の推察に依れば、その過程は比較的單純になる。それは、心的能力の發生學的の研究に於いて明らかである通り、記憶及び聯想の作用の特別の發達に基いてゐるのである、自然の經濟即ち、種々なる有機體の發達に於て、個體の生命を短期にして、その中に發生した胚種の發達に依つて種を保存すると云ふ過程が、人間的經驗に利用されるそれが即ち生產行動なのである。而も此の經驗的事實は、人間の心理の特別の發達に依つたものであることは云ふまでもない。動物の經驗的事實がそこ迄で進まなかつたのはつまり、彼等の心的特徵の、人間のそれと岐かれる所以であつて、その缺陷が彼等の社會をして人間社會と隔絶せしめたのである。

その事情から察せらるゝ通り、榮養資料の蒐集から資料の生產に進むに至つては、前述の第三の智的生活の衝動が缺

く可からざる條件となるのである。生活が蒐集に止まる間は、その生活の心的作用は全く動物のそれに同じでよかつたのであるが、生産の生活に移るといふことのために、始めて生活の心的作用が人間的生活の特徴とならねばならなかつたのである。そこでこう云ふ結論が生れる。蒐集の生活は動物的生活の特徴であり、之に反して生產の生活は人間的生活の特徴であると。

次に此の二つの生活の特徴について研究せねばならぬのであるが、此の研究の結果發見せらるゝ事實に就いて豫かじめ一言するならば今掲げた結論は、從來の總ての文化意識が生んだ生活觀念に依る結論とは正反對のものである。それは後に述ぶる所に依つて明かであるが、在來の文化の構造は、生活の基調を蒐集行動に基づけてゐるのであつて、生產行動はこれを非文化階級の生活行動たらしめてゐるのである。歴史を見れば明瞭である通り、それは多くの社會では奴隸の行動だつたのである。その程度には差もあるが、總ての文明社會は、悉く同様の觀念的立ち場に依つてゐたのである。之は今云つた結論と反對に、蒐集の生活を人間的のそれとし、生產の生活を寧ろ動物的生活としたのである。（斯様な顚倒が何うして生じたかは、本論の進行と共に證明しやうとする點である。）

三　蒐集行動の特徴

蒐集の生活と生產の生活とが齎らす社會的特徴は、それ〴〵それらの生活の本質上の差違から派生するのである。先づ蒐集の生活について考察すれば、蒐集生活を構成する條件を（イ）自然的條件、（ロ）人間的條件として考へると、

（イ）自然的條件　蒐集的生活を可能ならしめる條件は自然的生產物の豐富なことゝ、自然條件に對する人間的生

活の關係とである。自然物の豐富と云ふことは必ずしも客觀的たるを要しない。無論蒐集の生活が長く有力に成立するには自然の産物の豐富な地方を便利とするのであるが、然し謂ゆる自然物の豐富と云ふことは必ずしも今日の市場に於けるやうな意味ではなく、人間的生理がそれに適合すれば、可なり自然物の乏しい方面に於いても、蒐集の生活が存續するのである。人間の發育は或る程度まで自然狀態に順應するものであるから、其所に一定の自然狀態が繼續するならば、人間の生活的機構もそれに應じて變化し、そこに單純な蒐集の生活が成立する。即ち極熱のアフリカにも極寒の北氷洋にも同じやうに蒐集の生活が成立する。が此等の兩極端の自然の狀態に於て蒐集の生活が長く保存されたのは、これらの環境の下に於いては、生産の生活が或ひは不必要であり或は又不可能であると云ふ事情に依つてゐるのである。人類の初期の生活は總べて蒐集のそれに限られてゐるのであるが、他の地方に於いては、次第に生産の生活が優越を占め、遂ひに兩極端の地方だけにその特徵を完全に止めるのみで、一般には生活は蒐集のそれから離れて了つたのである。此の意味から考へると、今日文明の社會を形造つてゐる人類の棲息地は、一般にその自然條件が蒐集の生活に適せなくなつたと見なければならない。それは必ずしも原始時代からそうであつた譯ではなく寧ろ人類繁殖の結果次第にさう云ふ自然條件は失はれた事情もあるのである。何れにしても、今日の文明社會の分布されてゐる地方は最早や蒐集生活に適せない自然狀態となつてゐるのである。言換へれば、文明の進む程生活を生産的に進めなければならない自然的必要があるのである、此の點から言つても人間的發達と生産の生活との、必然的關係が認められるのである。

（ロ）人間的條件　　蒐集の生活を特徵付ける人間的條件は、蒐集と云ふ行動に伴ふ有形無形の人間的生活の特徵に一致するのである。

蒐集の行動が、生活の行動と異なる點は、自然の生産道程に人間が參與すると、しないとの點にある。自然の生産過

程は、前に云つた通り、有機體の個體を水、空氣、土壤其の他の營養によつて發育せしむると同時に、胚種の保存發育に依つて、種を存續せしむる道程であるが、生産行動は要するに此の自然の過程に人間が参加するのである。それが所謂ゆる生活の經濟である。反之、蒐集の生活は、此の過程に人間的行動を以つて参加するのではなく、自然がその過程に依つて産出した動物なり植物なりと云ふ生産物を人間の手に收めることである。之を一言で云へば生産は創造への参加であり、蒐集は創造された物の收得である。

此の二つの行動の根本的差違が當然、その行動に伴ふ心的作用の差違を呼び起すのである。二つの行動の一方は、創造への参加である。故に、之に伴ふ心的態度は、謂ゆる『創造的衝動』となつて現はれる。反之、他の一つの行動は、或る衝動を充たす爲にその必要物を收得する作用である故に、之に伴ふ心的現象は所謂『所有の衝動』となつて現れる。此の行動的並に心的態度の根本的差違は、後の生活組織の構造並に意識に對して極めて重大な結果を齎らすものであることを記憶せねばならぬ。

生産の行動は自然に對する人間の協力である。種子が地に落ちて實を結ぶと云ふことを自然過程に任かせずに、人間的行動を以つてそれを調節、補導することに依つて社會的の過程が成立するのである。されば生産の行動は自然＋人間の關係であるが、反之、蒐集の生活は、自然對人間の關係である。自然の生産過程即ち、自然が動植物を育て、種を地に落し、又有機物を地に委して土壤を沃やすといふような自然の作用に、毫も参加しやうとしないのが、蒐集の生活である。而してそれは、自然の産物を、個體の發育や種の保存やを無視した方法で收得しようとするのであるから、蒐集の生活は即ち或る意味で、自然と人間との敵對關係である。此の根本的の關係は後の文化形式の發達と離るべからざる關係に於て保存されてゐることを記憶して置く必要がある。

蒐集の生活が自然と人間との敵對關係であると云ふ事實は、あくまで蒐集行動の生活につき纒つてゐる。植物の蒐集に於いては此の性質はそれ程顯著でないが然し、その要素はそこに既に存在する。生産の生活者が、土を耕し草樹に營養を與へてそして果實を得やうとするやうな互助的の行爲及び心理は、植物に對する蒐集の行動に於いては決して存在しない。されば蒐集生活は植物にとつても既に一種の敵對行爲である。更に動物に對する蒐集的行爲となれば、最早や純然たる戰鬪的行爲として發達する。自然の生産物たる動物は、生産生活に於ける家畜のやうに、育てられたのではなく、全く自分で成長したものを、蒐集生活者は、全く戰鬪の行爲で狩り立てることによつて蒐集するのが蒐集生活的行動である。されば、此生活に於ては、動物と人間との間に生産者と動物との間に於けるやうな親密な關係は決して存在しない。全く敵味方の地位を持つて相對する外はない。その蒐集の行動及びこれに伴ふ心理は、互の畏懼、恐怖、攻撃、逃走、殺戮、陷穽等有ゆる敵對行爲に伴ふ戰鬪的行動及び心理である。之が蒐集の生活に伴ふ必然の心的現象であつて、それは蒐集の生活が極めて文化的に粉飾された後までも必然に伴ふ心理である。後代の所謂ゆる軍國主義の生活は、此の原始的蒐集の生活が、文化的に發達したものであるが、それは如何に文化的に粉飾されても右の原始的特徴は少しも減少されずに殘存してゐるのである。

前言つたやうに、此原始的の蒐集生活は自から生産の生活にまで發達したのであるが、然し之も前言つた如く、或る生物が、何時までも此の蒐集生活に殘留してゐるやうに、人間社會に於いても或る種の人間は――野蠻人社會に於てでなく、文明社會に於て――彼等を包含する社會の生活が次第に生産的に發達するに係はらず、依然として生産に對する無能力者として、長年月間殘存すると云ふことがあるのである。多くの文明社會はさう云ふ形式の構造で進んでゐるのである。その社會の全體が、蒐集の生活を脱し、生産の生活に於て偉大の人間的進歩を遂げ來つたに係らず、その文明

社會の一部には必ず生産無能力者の集團がある。そしてその集團は、何時までも蒐集の生活に立脚してゐて、決して創造に參加しない。即ち創造物の收得に依つて生活すると云ふ樣式を取るのである。そして同時に蒐集生活に必然の要素たる戰鬪的行動と道づれで生活してゐるのである。歷史を通じて社會の一部に常住的に存在してゐた軍國貴族の生活がそれである。

蒐集生活は右の樣に自然と人間とを敵對關係に置くのであるが、それと同時に右に言つた如く、社會的集團の裡に蒐集行動に立脚する集團の存する場合には、此集團と他の生産行動に立脚する集團との關係が同じく、敵對關係となるのである。此の敵對關係は、社會事實としては顯著な狀態であるけれども、人間的意識の上に於いてはさう顯著に現はれては來ない。蒐集生活の集團が、生産生活の集團と接觸する場合には必ず、そこに力の强制が行はれ、生産生活者は蒐集生活者に壓迫され、その結果兩者の間に支配と隸屬とが成立ち、そこから一定の社會組織が生れるのであるが、そこに至るまでの敵對關係は、その當初に於いては顯著に意識に反映するのであるが、やがて兩者の共同生活が成立すると、兩者の關係は敵味方のそれから變じて、支配と隸屬との關係となる故に、敵對の心理も亦變じて、支配と隸屬との心理に變化する。此の支配と隸屬との心理が一般に行き渡るに及べば、自から原始的の敵對心理は忘れられ、——潛在意識としては有力であるにしても、——意識的には、その痕跡を薄められるのである。然し乍ら兩者の關係が、互助的となつた後の社會構造に於いても、蒐集者と生産者との生活利害は一致するよりは寧ろ反對する場合が多いので、敵對的の潛在意識は折りに觸れて現はれることを免れない。これ蒐集生活の集團が常に、生産生活の集團に對して充分の警戒を怠ることの出來ない所以である。

此の敵對關係の意識が、潜在的となるに就いては、蒐集者と生産者との互助的關係から成立つ仕組が圓滿に進行してゐることを條件とする。此の互助關係が圓滿を缺くに到ると、蒐集者の集團と生産者の集團との原始的關係たる鬪爭狀態の起ることを免れない。歷史を見ても、すべての社會に於て、一定の平和が續いた後には定期的に此の鬪爭を繰り返すと云ふのが常態である、此定期的還元の來ない間は、此の兩者の互助關係が圓滿に進行してゐるのであるが、特別の社會構造に伴ふ文明は、畢竟その間に發展するのである。數千年の間起つては亡び、亡びては起つた文化社會は即ちその兩者の互助關係が平和に進行した期間の産物である。

此の期間に於ける社會狀態の特徴は、蒐集生活の集團が、その他の集團――生産生活の集團――の創造的行動に依つて豐富にされた生産物の消費を目的とした生活を發展せしむることである。言換へれば、それは消費の生活の完成である。總べての文化社會は畢竟此の消費の態容を表現した生活に外ならない。此の意味から言へば、蒐集生活の特徴は此の文化社會そのものであると云はねばならぬ。古代文明の燦爛たる様式は此の蒐集生活の蒐集の極めて豐富であつた結果の、消費の態容の現はれに外ならないのである。

無論蒐集と消費との間には、行動上範疇を異にするものがある。蒐集は、手段である。消費は目的である。けれども生活そのものが、蒐集と消費との何れを目的とするかといふ問題はさう容易くは斷定されない。成程食物を得やうとするのは之を食ふ爲めである。けれども通常の解釋に依つても、生活とは活動である。活動は力を發散せしむることである。蒐集の生活も亦蒐集の過程に於ては力の發散である。それは蒐集を目的とするのであるが、然し、生活としては、その蒐集の活動自體が意義を持つてゐるのである。して見れば物を食ふことが生活の目的であるか、食ふ物を得るが目的であるかは容易に斷定されない。客觀的に言へば寧ろ、過程が生活の一切である。此の事は蒐集と生産との場合の何

れに於ても同樣に理解される。生產は創造されたものを消費するのが目的であるけれども、生活の意義は却つて、その生產行動そのものに於いて存在する。人間社會の生活とは、此の生產過程そのものの外にはない。生產に依つて完成したものは既に生活を離れた存在となる。家でも衣服でも食物でも出來上つたものは既に自然物と同じく生活の範疇を離れた存在である。生活とは、その生產過程それ自體を言ふより外はない。

故に蒐集の生活が消費の生活に對して手段である、と云ふよりは寧ろ蒐集の行動に立脚する集團の生活は、その蒐集の活動そのものを生活とすると云ふのが妥當である。只だその蒐集生活の結晶たる文化社會は蒐集物消費の成果であると云はねばならぬ。鳥の羽毛の美しさは消費の生活の表現であると同じ意味で、文化社會は、消費の生活の表現なのである。

そこで蒐集生活の特徵は消費にあるが、此の消費は蒐集行動に立脚する集團の人間的生活であつて、生產の行動に立脚する集團の生活ではない。生產行動の生活者は、創造過程に參加する行動それ自體を生活それ自體としてゐるのであつて、その生產物の消費に依つて美しい文化的羽毛を飾ることとは、之を蒐集生活者の集團に委ねてゐるといふのが歷史的事實である。即ち人間的生產を享樂する地位にある集團は、蒐集生活者のそれである。この事も亦蒐集生活が、如何なる文化的粉飾を持つて現れても、常にその生活に必然に伴ふ特徵なのである。

四　生產行動の特徵

蒐集生活の右のやうな特徵に對し、生產生活を特徵づける條件も亦、自然的及び人間的の二つの方面から觀察することが出來る。

（イ）自然的條件、生產生活を發生せしむるには、自然の條件は蒐集生活の場合と正反對に、自然が缺乏の狀態にある場合である。自然の供給が、充分豐富な場合には、生活は、自然の生產物を集めることに依つて故障なく存續するが、此の供給が次第に缺乏することは、先づ人間に貯藏の必要を敎へる。生物が、冬期の缺乏の經驗に依つて、夏期において冬期の蟄居に備へる爲めの必要物を貯藏することを學ぶのも自然の過程である。人間も此の同じ過程に依つて貯藏の經驗を得るが、恐らく生產の過程は此の貯藏の經驗から偶然に發見されたものらしく思はれる。生物を捕獲した場合にそれを生き乍ら貯藏すると云ふことは可なり早くから發達した經驗である。動物の中にさへ他の動物を飼育することがあると云ふが、人間の經驗に於ては、此の動物を生き乍ら貯藏すると云ふことがなか〱意味のある經驗となつたのである。最も原始的な生產行動即ち牧畜は此の貯藏から發達した一つの生產生活である。而して、種々なる生產行動は、此の牧畜の經驗を起點としてゐるのである。奴隸制度は生產の結果に重大の影響を及ぼしたのであるが、家畜の飼養は原始社會に於いては、奴隸同樣に、重大の生產的結果を生んでゐたのである。その後の社會に於いても、牧畜生活なしには、社會的生存は殆ど不可能であつたと云ひ得る。此の事は實に貯藏の生活が生產生活の先驅的條件であつたことを說明する。

　更に植物の貯藏に於いても恐らく、それが生產生活を生み出す前提となつたと思はれる。種子を直ちに食用としないで一定期間それを貯藏して後に徐ろに消費すると云ふことは、更にその貯藏物を消費せずに之を地に蒔いて、非常に多量の供給を得ることに進むと云ふことが自然である。殊に、貯藏の間に偶然、種子が芽を出したと云ふやうな經驗が組織的の食料生產の口火となつたであらうと云ふことが考へられる。何れにしても貯藏は人間的抑制――即ち生產の第一次的條件――の初步的の現れである。此の消極的勢力が發展して、積極的の生產行動となつたのである。

この原始的の貯藏の心理は極めて單純な作用であつて、後の意味の貯藏のやうに必ずしも將來に對する洞見がそれをさせた譯ではない。唯生理的の飽滿がそのものを消費する行動を差控へさせると同時に、その物に對する本能的慾求がそれを全然放棄することを躊躇せしめ、又それを他のものに奪ひ去らるゝことを防がうとする本能を有するところから發生した行動である。けれどもその貯藏の經驗は必然に生産の行動にまで導かるゝ性質を含んでゐたのである。それだけ此行動に伴ふ生活の意識的作用は、單純の蒐集行爲に於けるよりも、遙か進歩したものでなければならないのである。同時にそれが、積極的の生産行爲に轉ずるに至つては、其處に一層進んだ、より復雜な意識の作用を作つてゐるのである。言ひ換へれば生産の行動は必然にそれに伴ふ特殊の智的作用の發達と相伴ふものである。

此の智的作用は、人間的生活を特徴づける本來の智的作用なのである。尤も此點に就いては異論がある。人間的生活の智的作用は主として、蒐集の生活に伴つて發達したと云ふ見地がある。それは即ち狩獵の生活が人間の集團的生活を發達せしめる力のあつた協同行爲である、卽ち人間的行動の最も重大な作用は此の狩獵生活の賜物であると云ふのである。例へば言語の如きも體力の弱い人間が猛烈な獸類を征服するに組織的行動を取らねばならない場合に尤も必要とす相圖が自づと組織的に發達したのであつて、それは猛獸を狩り立てる時の共同動作の間から發達したと云ふ觀察である。それと同じく此蒐集的活動が、人間的社會生活の發達に最も有力な生活であつたとするのである。之は一理ある見地であるが、然し、此の原始的事情と、後の社會生活との關係は、或る程度まで有力であつたにしても、この發生事情のみが唯一の有力な作用であつたとはいはれない。さう云ふ緊張した生活から澤山の人間的生活要素が作り出されたことは有り得るが、人間の生活は必ずしもさう云ふ樣式に於てのみ發達したのではない。寧ろ人間的社會群の發生した後に於ては異常の戰鬪狀態が生み出した要素よりは、寧ろ平和的協同生活が生み出した要素的作用か、目立だゝずに却つて重

大な影響を生活進化の上に及ぼしたと考へなければいけない。凡ての人間的行動は、此の平和協同の生活の中に含蓄されてゐるのである。此の生活の互助作用の發達が遂には、蒐集の生活から生産の生活へと人間を押し進めたのであるが、此の進化に伴ふ心的作用は、即ち生産行動の智的作用であつて、それこそ將來の文明の要素として最も有力な智的作用だつたのである。

生産行動の極めて單純な形式に於てさへ、それが必要となる智的作用は可なり複雑を極めたものである。戰鬪行爲に於ける智的作用即ち、蒐集生活の智的作用も、その狡猾さや機敏さに、可なり複雑な智的要素を含んでゐるが、生産行動の智的作用は、一層複雑なさうして一層人間行動の本質的作用としてのそれなのである。

生産行動が、意識の生活の發達に於いて極めて重大の動因を含んで居つたと云ふことは、生産手段の發見とその發達とに於いて働くところの智的作用が、最も社會的の性質を帶びたものであると云ふ點に存する。後來の生活に於いては、生産行動は比較的單純な人間的動作のやうに考へられてゐるが、實はさうではないのであつて、如何に文明の進んだ社會に於いても生活上最も重大で且複雑な生活動作は、矢張生産に關係したそれなのである。一括して科學的經驗と云はれてゐるものは、要するに悉く生産生活の上の經驗である。社會が冥想的な思惟の極度の發達に依つて、生産能力を失ふと云ふことは、即ち此の科學的經驗を失ふことなのである。文化的頽廢の心理が、幻想的の生活を昂進せしめた爲めに、生存維持の力を失つた場合に、その社會的變質狀態から回復するには、必ず生活の回復に依らねばならないのであるが、その場合の意識の作用としては、所謂科學的意識が勃興せねばならぬのである。而して此の科學的意識は即ち生産生活の意識に外ならない。

單純な生活行動に於いても、實際に生活を組み立てゝ行く要素的行動は必ず生産のそれである。その生産の產物が如

何なる目的に消費されても、それを生み出すものは生産行動である。ピラミツドは決して生産的ではないが、然しピラミツドを建設する人間的能力は即ち生産的能力そのものである。此能力なしには、ピラミツドも出來なければ、戰爭も出來ない。故に生産行動は有ゆる社會的行動の根柢に在つて、その組織を維持する所の動作なのである。その意識の發達に對する地位は恰度蒐集行爲が戰鬪の生活に對して有する地位と同じである。蒐集行動は戰鬪の生活に於ては正に要素的である。それと同じく生産行動は、一般社會的生活に於いて、行動的にも又心的にも要素的なのである。

かくて生産行動の特徴は生活の常態に於ける特徴と一致する。生活の常態とは戰鬪的狀態でなく、協同的狀態を言ふのである。生産行動は行動的にも又心的にも此の常態に一致する生活である。そこで蒐集生活が根本に於いて戰鬪的であるのと正反對に、凡ての生活行動は平和的協同に立脚する。

そこから、生産行動に根柢する集團の生活は、當然に、互助的であり平和的である。生産階級とは即ち此の平和的互助の生活に沒頭する階級のことである。古代に於いては此の集團は、戰鬪的行動に立脚する蒐集生活の集團の爲めに征服されることを免れなかつたが、それは即此の集團の平和的性質が、暴力の點に於いては到底蒐集行動に立脚する集團の敵ではなかつたからである。今日の兩者の間にも無論此懸隔は存在してゐる—故に古代社會に於いては此の集團は即ち奴隷の集團であつた。それが爲めに自から生産行動を奴隷的行動と認める意識が發達したのである。

けれども社會的生存の維持が此の生産行動に依る外に無いことは、此の事情の爲めに少しも變りはしなかつた。言ひ換へれば、社會生活と生産行動との關係の重大であるといふことは、生活が如何に觀念され、生産行動が如何に蔑視され虐待されても依然として變らなかつたのである。それが生産生活の最も顯著な特徴である。

五　蒐集生活の文化的發展

社會が如何に文化的に發展しても、蒐集行動は、自然と人間との敵對關係に於いて成立し、生産行動は自然と人間との協同關係において成立すると云ふ特徴は毫も失はれず、その後の文明樣式はその特徴が決定してゐるのである。されば文化的現象を此の二種の生活行動に關係して區別しようとすれば、文明の生活の根抵に作用してゐる人間的本能の性質を知らねばならぬ。

蒐集行動の衝動を分解すると、二つの重なる衝動に分れる。第一は欲望するものを獨占しやうとする衝動であり、第二は此の獨占を持ち來すために、之を妨ぐる物に對して戰鬪を仕掛ける衝動である。蒐集の行動は必ず此の二つの行動の現れである。通常前者を所有の本能、後者を鬪爭本能と稱する。故に蒐集行動に立脚する生活が、次第に文化的に發展し、蒐集生活者の集團が立派な文化階級を構成するに至つても、その階級の生活衝動は矢張り所有の本能並に鬪爭本能の現れであると云ふ性質を失はない。

歷史上社會的集團の中に於いて、文化樣式の階級と認められてゐるものの生活は、何時も決して生産生活ではなかつた。時代に依つて此の階級を構成する人々の生活狀態に變化はあつたが、その凡ての變化を通じて此の階級の生活行動が生産のそれでなかつたことは一致してゐる。此の階級の生活は大體において、第一宗教的生活、第二軍事的生活、第三政治的生活、第四經濟的生活の諸項に岐かれてゐたが、之等は、何れも蒐集の生活に立脚するのであつて生産のそれに立脚するものはない。宗教的階級生活者は、今日もさうであるが全く生産的と離れた生活であつた。政治階級の人々も又決して生産行動を取るものではない。假令生産生活者から出立しても、政治生活に這入れば生産行動を離れる。軍

事的生活者も無論生産については全く無能力である。また經濟生活についても、生產行動を離れた階級が存する。今日の經濟組織即ち貨幣經濟が生れてからの經濟生活は、生產行動の生活ではなく、生產物を獨占する行動、即ち蒐集行動の生活なのである。かくの如く、古來文明を生んだ階級は、社會生活において生產行動を分擔した人々の集團ではなく、生產者の果實を組織的方法で蒐集し、之を消費する階級の生活表現が文明なのである。だからこの文明を本位として生活を價値附けるならば、蒐集行動こそは人間的生活中の最も人間的なるものであると云はねばならぬ。けれども、歷史の示す通り、それ等の文明は必ず崩壞する。そして、この文明を崩壞せしむる社會的動力の上から生活を批判するならば、之等の文明の興廢の底に生存の力を續けて居つた生活を、人間的生活の根柢的なものと見ねばならぬ。而してその根柢的なものは即ち生產の行動である。文明は眞の行動から離れることに依つてその文化上の價値を增大せしむることを得たが、社會的生活そのものは、文化的昂進と沒交涉である程、生存上の價値を持つ譯である。

文化が生存の根柢的條件を離れる程價値を持つと云ふことは、果して何う云ふ機構の上に可能のことであるか。言ひ換へれば文化を完成せしめた社會的機構は、何う云ふ性質のものであつたらうか。

それは古代文化に於いても又近代文化に於いても同じ機構であらねばならぬ。が先づ古代文化を成立せしめた機構に就いて觀察すると、何人も異義をさし挿むことの出來ないことは、それ等の古代文化が誠に偉大なる消費であつたと云ふことである。今日も蒐集生活者の消費は可なり偉大なものではあるが、然し古代のそれに至つては全く言語を絕してゐる。歷史あつて以來、エジプト　バビロン、アツシリヤ等の軍國々家の大消費に較べ得る生產行動の大濫費は、到底その後の國家には見出されない。殿堂、宮殿、庭園、墳墓、記念碑、其他の古代文化の產物が、その當時の生產能力

を濫費した事は、今日の文化的消費と、生產能力との比とは較べ物にならないほど膨大なものである。古代文明は、殆ど生產力の全部を文化的に濫費したと云つて宜い。

何故に斯樣な濫費が可能であつたかと云へば、それは二つの事情に依る。第一には、生產行動を少數者の消費の爲めに强制する組織が極めて有力であつたことであり。第二には、生產行動の果實が蒐集生活者の所有となる作用が極めて極端だつたからである。それは要するに、社會的集團の生活を支配するものが、その蒐集生活の本能を自由に極端に働かすることが出來たからである。一言に言へば所有本能と鬪爭本能の組織的發展に依つたのである、

所有本能の組織的發展は、後代に至つては次第にその個人的性質が保障され、階級的差別が減退さるゝに至つたが、古代及び中世の社會に於いては、所有本能の徹底的保障は唯蒐集行動本位の階級に對してのみ與へられ、生產者には個人的所有が存在しなかつた。それは恰度牛馬の生產勞働が、牛馬の所有本能を充たす作用でなかつたのと同樣である。元來文明社會に見るやうな意味の個人的所有は、蒐集行動を本意とする階級生活が成立つ以前には決して存在しなかつたことである。その時代の生產は決して個人的所有を生む過程ではなかつた。今日でも、父母が子の爲めにする生產行動は決して個人的所有の生產過程ではない、それと同じ樣に、社會的集團に於いて行はれた生產行動は、その集團の生存を充たす過程であつて、必然に個人的所有を生む過程ではない。生產行動が個人的所有を生む過程となつたのは、つまり蒐集の生活を本意とする組織の成立した結果である。

生產行動が個人的所有を目的とするものであると云ふ意識は、凡ての時代の人間が懷いてゐた意識であるが、それは實は生產行動に伴ふ必然の意識ではなく、蒐集行動に必然に伴ふ意識なのである。原始的には、生產したものは自らのものだと考へる意識はなかつたのである。その時代の意識に依れば、生產したものは自分のものではなく。神のものであつ

た。米を造つても家を造つてもそれは神の米、神の家であつた。今日尙ほその意識が習慣に跡を留めて種々なる郷土的儀式になつてゐるのである。生産されたものが神のものであると云ふ意識は、即ち、生産物が社會的生活に役立つ爲めの資料であると云ふ意味である。それは神の私有物ではあるが人間の私有物ではない。土地の如きも神のものであつて人間のものではなかつた。土地から産するもの、土地の上に存するもの、土地の上に作らるゝもの等が、人間の私有物でなかつたのは當然のことである。而して之を社會的に解釋すれば、個人的所有の否定は即ち社會的所有の思想である。神の意識は集團の個人々々の生活の意識ではなく、集團そのものゝ生活の意識の表現である。

此の生産條件並に生産物に關する社會的意識が、次第に個人的意識に變じたのは、生産生活の集團に於ける生活意識が、蒐集生活の集團に於ける生活の意識に依つて打ち勝たれた爲めである。蒐集生活の集團は、前に言つた如く、所有の本能に立脚しその本能の充足の爲めに、戰鬪的行動を主たる生活態度としてゐる集團である。それ故に生産物は、神の所有ではなく、自己の現實の所有でなければならない。されば此の蒐集の生活は或る意味で神の生活と共通してゐる。神は自ら生産せない癖に、有ゆる生産物を所有するのである。人間から言へば凡ての生産物は、神に捧げられ、神から人間に分配せられるのであるが、神から言へば、人間の生産物を蒐集し、更にそれを人間に下し給はるのである。蒐集行動に立脚する階級の行動は、即ち此の神の行動並に意識なのである。それは古來蒐集生活の階級が、宗教的生活の階級と離る可からざる關係で成立してゐる事實と關聯してゐる。今日でも古代の蒐集生活者その儘の蒐集生活をしてゐるものは宗教家の團體である。昔の支配は必ず此の宗教的蒐集生活と兄弟關係にあつたのである。

此の宗教的蒐集生活は今日に於いてこそ平和的蒐集行動と認められてゐるが、古代に於いては、それは必ず戰鬪的蒐集行動と結び付いてゐたのである。蒐集生活者の戰鬪行動には必ずその蒐集行動を價値付ける宗教的信仰が伴つてゐた

のである。——軍事的征服は必ず宗教的征服と協同したのである——それは恰度獸を狩るものが、その蒐集行動を信仰に基づけ、謂ゆる山の幸を神に祈つたのと同じ心理である。蒐集の行動も、生産の行動も共に神的意識を伴つたが、生産行動に於いては神は、生産協同者として生産の果實を收めるのであるが、蒐集行動に於いては神は、戰鬪行爲の協同者としてその果實を收めるのである。蒐集生活に立脚する人間は、右の後の場合の神と合同してその行動を完成せしむるばかりでなく、その合同の當然の結果として、神の所有と同じ所有を人間的に成立せしめ、そこに個人的所有を完成せしめたのである。

故に個人的所有の確立は宗教的起原を有する蒐集生活者の階級から始つたのである。何處の國に於いても、始めて個人的所有が成立つた時には必ず宗教的起原を有する蒐集生活者の社會管理が始つた時なのである。斯くの如くにして所有の本能は社會的制度として成立し、所有權の濫觴となつたのである。同時に蒐集生活を完成せしめるに必要なる鬪爭本能の組織が此の階級の組織と結合し、古代の軍國々家が完成した譯である。

蒐集生活の此の本質は、それに基づく社會構成が存續する限り、その本質から派生した文明の特徴を以つて進行して行くのである。即ちそれは社會集團の中心が生産行動に對して無能力なる蒐集生活者に依つて維持せられ、同時に蒐集行動に伴ふ戰鬪本能の組織的生活に立脚する集團との協同に於いて、中心的の存在を維持すると云ふ組織である、之は僧侶の支配が軍人の支配となり、貴族の支配となり、商人の支配となつても、それ等の變化を通じて一貫して變らない特徴である。されば現代までの文化的發展は之を要するに蒐集生活の進化したものであつたと云はねばならぬ。

六　生産生活の文化的發展

蒐集生活の文化的發展が、所有本能と闘爭本能とを以つて一貫してゐると云ふことは、必ずしもそれが絕對に生産生活に禍をなしたと云ふことではない。その反對に、蒐集生活の組織的完成は、或る意味で生産生活の發達に有力な動機となつたことは疑ひない。前にも云つた如く、古代文化の偉大な産物は生産能力の大濫費であつたが、然し謂ゆる需用供給の法則に依つて、此の消費の爲に、又此の偉大な消費を可能ならしむる組織の爲めに、生産生活を向上發展せしめた事は決して否定する譯に行かない。古代の、又近代の蒐集生活者の濫費生活は、或る意味に於ては生産生活の旋條だつたのである。次に生産行動の著しい發達は必ず蒐集生活の組織の發展と相應じてゐるのである。生産性が微妙の果實を産んだギリシャ時代のそれは、蒐集生活に立脚するギリシャ市民の生活の組織の完成と伴ふたのである。ローマ時代の驚く可き大規模の生産能力の發揚は、羅馬の國家の蒐集生活に立脚する組織の大規模の完成と伴つたのである。近代の生産能力の夥しい發展も亦蒐集生活の世界的統一に基づく組織即ち資本主義の組織的完成と伴つたのである。之を要するに蒐集生活は、生産行動の完成に取つて大恩人だつたのである。

斯く生産の生活は蒐集のそれと離る可からざる關係にあつたが、然し蒐集生活と生産生活の本質的差別に基く原始的の對蹠的關係は依然として失はれなかつたのである。此の傳統的の組織に於ける蒐集行動は、本質的に生産條件と敵對的關係に於て存在してゐたのである。言ひ換へれば、そこでは生産行動に立脚する集團は、恰度牛馬の行動が人間生活に役立つてゐる意味と性質とで、その時代の文化に役立つてゐたのである。エジプトの壯麗偉大の文化的産物を創造した生産行動の生活者は、まるで牛が自分の肉を美味として人間に供してゐると同じ態度で、自己の生存の犧牲に於て時代の

文化を建設したのである。ギリシヤの文化も蒐集生活の閑暇が生んだ哲學の外悉く奴隷の犧牲的生產行動に依存してゐたのである。中世の文化も亦、その蒐集生活者の心的文化の外は、生產生活者の犧牲的所產だつたのである。今日の歐羅巴文化の產物も生產生活者の生產行動の成果であるが、これ亦生產生活者それ自からの生活とは沒交渉に蒐集生活者の間に享樂せらるゝ爲めの文化を生み出す犧牲者の生產行動に基いてゐるのである。斯樣な特徵は凡て蒐集行動が原始的に備へてゐる特徵に外ならないのである。即ち自然の果實を、敵對關係に於て收得すると云ふ性質が存續して社會構成の上に作用してゐるのである。

生產行動は自然との協力に於て創造の過程に活動するものであつて、その果實は必ずしも、生產行動それ自體と必然の關係にあるものではない。之に反して蒐集行動は、生產の過程には這入らないが、その果實はどうしても收得しなければならないと云ふ衝動である。その根本的性質の相違は、何處まで行つても失はれない。

然し蒐集生活が今言つた樣に生產生活の旋條であると云ふならば、それも亦生產行動への參加ではないかと考へられそうだが、然し實際上、蒐集生活者は、決して生產生活そのものに參加してゐないといふ事實を如何ともすることは出來ない。實際如何なる時代に於ても、蒐集生活の階級は決して生產行動に參加しやうとはせず又參加する能力を持つてもゐなかつた。如何に生產行動が蒐集生活者の保護を受くると云つても、決して蒐集生活者が生產行動に參加することはなかつた。畫家を保護してゐる貴族も、その畫家のカンバスの上にまでその手を延ばす譯に行かないのである。それはかりでなく、その樣な手傳ひは、必ず生產行動の墮落を引き起すものである。古來生產行動に沒頭するものが、如何に蒐集生活者の保護を受けても、その生產行動に對しては、寸毫も蒐集生活者の干渉を容れないと云ふのが、生產者の良心であつた。蒐集生活者は此の意味で生產行動から全く排斥されてゐるのである。そして此の排斥は、生產行動そのもの

の發達の爲めに絶對的必要の條件なのである。生産者の間に、蒐集生活者を生産行動に參加せしめることは生産行動の墮落である、と信んぜられてゐるのは、決して誤つた信仰ではない。

生産生活者が右の樣に蒐集生活者を反撥するのは、生活の本質的差別が兩者の間に存するからである。兩者の生活の衝動は全然異つた本能に基づくものであるから、互に妥協しないことが、その本能の完成の爲めに必要の條件なのである。

生活衝動が生産生活に於いては、蒐集生活に於けるそれと全く異ならなければならぬ事情は、生産の行動が、既に述べたやうな、より人間的の本質に立脚してゐるからである。蒐集の生活は動物的生活であると云ふことは、それが比較的單純な所有の本能と鬪爭の本能に立脚してゐるからであるが、生産行動はその生産過程を生み出だす衝動に於いて動物的本能に較べて著るしく性質を異にする作用が働いてゐるのである。例へば食はんが爲めに果實又は生物を收得するには格別複雜な作用を必要としないが、その蒐集が稍々困難に遭遇した時には、其處にたゞ所有の衝動、又は鬪爭の衝動のみが働くだけでは、効果は得られない。即ちその困難に打ち勝つ爲めに、發達した複雜な心的作用が働くことを要するのである。斯樣に複雜な要素を包含する本能は即ち生産行動を動機づける人間的衝動なのであつて、所謂創造本能と呼ばれてゐるのがそれである。

創造本能は人間以下の社會的生物の生活に於いても既にその原始的な現れを示してゐるのは事實である。けれども人間以外の生物に於いては、その創造は絶對的に類型的であつて彼等の生産行動は其の類型の繰り返しの外に出でることが出來ない。何千年經つても彼等の生産行動は同一類型の反覆であるが、人間の生産行動は此の類型を破る所にその特徴

を持つてゐるのである。人間の生産もやゝもすれば此の類型に固定する傾向を以つてゐるけれども、さうして或る種の生産は確かに類型の外に出でることが困難なものであるには相違ないけれども、人間的生活の有機的存續は常に此の類型を破つて進む所の過程なのである。だから或る場合に、人間的集團が全く此の類型を破る力を欠ふと、その集團は衰亡に傾き、生存上困難な地位に陷るのである。

原始人が動物的類型を脱して創造の生活に這入つた場合の創造力に就いては、誠に驚嘆すべきものがある。或る種の生産に於ては、人間は如何に進歩しても此の原始人の創造した類型を破り得ないものがある。例へば器物の形、或る種の模樣、各種の生活必需品や裝飾物の意匠其他建築物、彫刻等謂ゆる造形美術の方面に於いて、原始的創造が最早、人間的極致に達してゐると思はれる位である。(石器時代や銅器時代に、人間は既に或る點に於て優秀な創造能力を發揮したことは、その時代の遺物に於てこれを見ることが出來る。又紋樣、建築等に於ては、文明人も、數千年前の埃及、ギリシヤ、印度等の社會的產物を凌駕することは出來ない有樣である。)それ程人間の創造力も既に優秀な類型を生じ、なか〳〵その類型を脱することは困難なのであるが、然も人間の生活は、あらゆる方面に於て、現代は前代に比して必ず異る類型を創造すると云ふ所にその特徴を有することは言ふまでもない。)

人間の生活行動の中でも、生產行動だけが、此の創造本能の生活なのである。之は恰度蒐集の生活に於いて所有の本能だけが働いてゐるのと正反對の作用である。即ち生產行動の場合は全く個人的所有と沒交渉の働きである。人間が創造本能を働かせる場合には、その創造行動それ自體を生活そのものとする心意を伴ふのであつて、所謂創造の本能を働かせると云ふことの外に生活がないのである。而して生產された物は最早創造の生活とは必ずしも關係を保つてはゐないで、そのまゝ他の手に委ねられて差支ない。そして更にまた創造行動を起すことに依つて再び生活の興味を得やうと

する。創造者は、決してその創造したものゝ享樂に於てその創造衝動を殺して了ふやうなことはしない。創造したものを投げ捨てゝ更に創造の生活に這入る所に生産的生活の本能の人間的性質が存在するのである。これが人間的創造の不斷に湧出する譯である。之に反して蒐集の生活は、少しも創造の過程に這入り込まずに、その創造されたものゝ獲得を衝動の目的とする生活であるから、此の生活には何等創造的の要素がない。從つて人間的進化の動機を含んでゐるとはいへない。千年經つても萬年經つても蒐集の生活は依然として同一類型の生活を繰り返すに止まる。獲得の動作には進化はあり得ない。

そこで文化は、蒐集の生活者の階級に發達した外觀を有してゐるけれども、實はその文化の內容は悉く生產行動の創造的能力に依存してゐるのである。言ひ換へれば、文化は蒐集生活者の階級に現れ乍らその一切の動機を生產生活の階級の中に藏してゐるのである。之は即ち人類の文化的發展は一に生產の生活の有機的生長の結果であることを示すものである。此の事實は更に生產行動の組織が蒐集行動の組織と全く沒交涉であることを認めることに依つて一層慥かに證據たてられる。

生產行動の組織は、蒐集生活者の干涉がそれを有効に發展せしむると云ふこともあるが、然し生產行動は此の關與によつてよりは、それ自からの組織に於いて有機的に發展したものである。生產行動の組織的機構は、如何なる時代に於いても必ずその生產の生活を完成せしむるそれ自からの有機的構造を持つて、蒐集生活の妨害に對して己を擁護してゐたのである。

凡ての時代の生產行動の組織を觀察して見ると、そこに何程か蒐集生活者の獲得本能に依る干涉から回避して、さう

してそれ自からの生産的行動の有機的發展を完成する機構を持つてゐないものはない。蒐集生活者の干渉が有害の結果を生産行動の組織に及ぼす惡が大きくなればなる程、生産行動の生活も又その組織を強固にして之に對抗することになるのである。中世記のギルドは、封建國家と云ふ蒐集生活者の階級の蒐集行動に對抗する爲めに生産行動の生活を最も強固に組織立てたものなのである。蒐集の生活とは全く別な機構を有するそれ自からの組織を、生産生活者の間に有してゐたことは、有ゆる時代、有ゆる國家を通じて共通の事である。

生産行動の組織內構造の特徴は、社會的生活の協同的方面の行動と意識とを基調として組立られしたところに存する。生物の生存樣式に於いて闘爭と互助との兩方面の存することは生物學者のいふ如くであるが、生産行動の組織は此の互助の關係を社會的にする構造なのである。蒐集生活の組織はこれに反し既述の如く此の互助關係が生み出した人間的生産物を、敵對關係に於いて收得する組織である。隨つて社會的生存の意識が兩者の間に於いて正反對の地位にある。而して二つの集團の接觸は此の反對關係が當然生み出す可き生存上の競爭となつて現れる。生産生活の集團と蒐集生活の集團との接觸はそこに決定的の生存競爭を生ずるのである。

此の生存競爭の結果は、既に二つの集團の本質で決定されてゐる。即ち蒐集生活の集團はその所有と闘爭の本能を以つて終始し、生産生活の集團は、その生活本能の平和的互助的本質で終始する。斯くて兩者は當然、その爭ふべからざる結果に到着する。即ち蒐集生活の集團は、生産生活の集團に對して優越の地位を占むるのである。而して此の優越關係は、兩者の集團がその本來の特徴に於いて生活してゐる限り決して變動しない。數千年の政治上の歷史は即ち此の優越關係に依つて建設されてゐるのである。生産生活の集團は、その生産本能に終始する限り、平和的互助的生活衝動に基づく社會的行動に於いて生活の目的を實現せしめようとするのである。それが生産行動の人間的悅樂であつて、

等は如何なる壓迫がその集團の上に襲來しても、此の人間的悦樂の誇りを捨てない。蒐集階級に現れてゐる文化は、實は此の生産階級の人生觀に依つてのみ內容的に充實に築き上げられたものである。生産生活者の此人生觀が崩るれば社會全體が墮落する。現に文化の墮落を生産能力の墮落に依つて說明し得ると說く歷史家もある。生産生活の墮落は、社會生活を救ふ可からざる衰亡に導くのである。蒐集生活の墮落は、生産生活の力强い生活衝動に依つて救ふことが出來るが——歷史上屢々さういふ經過による生活の回復があつた——、生産生活の墮落は、蒐集生活に依つては救ふことが出來ない。尤も、蒐集生活は生産生活の此の墮落は救へないが、往々生産生活と沒交涉に文化的に昂進することはある。ギリシヤの生産生活が墮落しても、蒐集生活者の特徴たる觀念生活は、或る期間昂進狀態をつゞけたのである。

七　法則の根柢としての蒐集行動と生産行動

生活行動をその要素に分解して、蒐集の行動並に生活の行動に大別することが承認されるならば、生存の法則意識が右の二の生活態度に依つてそれ〲異るに至る可きことが思はれる。即ち蒐集の生活に立脚した法則の意識は必然に蒐集生活の本質と一致すべきものであり、生産生活に立脚する法則の意識は自から生活行動の本質と一致せねばならぬ。其處から兩者の間に生活の法則に關する意識に於いても、敵對的相違を生じない譯にいかないのである。

生活の法則と云ふことを、こゝでは假りに生活の組織的構造に一致する心并に行動についての觀念であるとするならば、それは即ち一定の有機的體系の機構に依存する作用である。即ち組織が有機的に進轉するに當つて如何なる運動を取れば最もよくその組織の目的に合致するかといふことが法則の意識である。即ちそれは有機過程の選擇作用である。而も此の有機過程の體系はその選擇作用を行ふに當つて必ず、更にその體系と化合的に作用する他の體系との關係に

於いて、その選擇作用を行ふのであるが、而も有機體系の性質として、往々それ自からの體系の目的にのみ依存して選擇作用を行ふことがある。例へば政黨と云ふ有機體系は、國家、社會、家族、其他の有機體系と化合的作用に於いて共存するものであるから、政黨としての有機體系の法則即ち選擇作用も自ら右の諸體系から相互關係に基いて行はるべきであるが、然し政黨と云ふ有機體系は、たゞ全く自己の體系の有機過程の目的にのみに依存して選擇作用を行ふ場合が多い。依つて他の體系の存在と連絡しないのみか、反對の態度を取ることもある。此のことは其他の國家とか寺院とかいふ有機體系に於いても同じであつて、他の國家、社會との有機的結合に依存して選擇作用を行はずに、それ自からの目的だけに依存する場合が多い。之は有ゆる有機體系の特徴である。例へば植物のやうなものでも、一本の木は一つの有機體系であるが、それの根とか、枝とか、葉、花、實等もそれ〲一つの部分的有機體系である。その場合に花なり葉なりと云ふ有機體系は、それを包含する全體の有機體系の目的、即ち、その樹木の目的に依存する筈であるのに、葉や花が、それ自からの體系だけに依存して、全體の生存を弱めることを顧みないことがある。之れ人間が、樹木の葉を摘んだり花を切つたりして、部分的體系を犧牲として、全體の體系を生かさなければならない所以である。それと同じく人間の集團に於いても、一つの有機體系は往々それ自からの體系の目的にのみ依存して法則を立てる。蒐集生活の集團と、生產生活の集團とが法則の意識を異にするのは、右のやうな理由によるのである。

然らば集團生活の法則の意識と、生產生活の法則の意識との何れが、人間的生活に本質的に一致する意識であるか、それを決する標準は何であるか。これに對して此の問題は有ゆる部分的生活意識を超越した全體的意識がそれを決定する、と云ふ風に多くの時代、多くの人々に依つて考へられてゐたが、然しさう云ふ全體的意識なるものを決定するのも亦實は部分的意識なのである。即ちこれは蒐集生活の集團の意識なのである。蒐集生活は全く生活の行動を取らない生活

があつて、而も有ゆる生産物を取得する生活である。それは即ち有ゆる部分的の生活を總括して支配する所の生活である。此の總般的蒐集の態度は恰度神の態度である。神は部分的生活をしないで、全體から蒐集する生活をする人格である。即ち神は全體的生活だけを生活する人格である。蒐集生活者は即ち此の神の生活を踏襲するものであつて、從つてその意識は全生活的である。けれども人間に於ける全體的意識なるものは、全く蒐集生活と云ふ部分的生活に於ける意識なのである。而して蒐集生活は、社會的生活の中で、最も社會的性質に乏しい部分的生活であるから、此所謂全體的生活意識は、畢竟部分的生活の生んだ意識であつて、決して全體的意識ではない。

されば蒐集生活の意識と生産生活の意識との社會生活の法則としての地位を決定する全生活意識なるものはさういふ意味では、在り得ない。

生活の法則が社會的に成立つたのは、決して全生活意識なるものがそれを決したのではなく、その集團の構造が、蒐集行動を本意とするか、生活行動を本意とするかに依つて、それ／＼異つて定められたのである。而して現在に於て之を決定したものは、生存競爭に外ならなかつた。蒐集生活本位の集團が決定權を握るに至つたのは即ちその生存の鬪爭關係に於いて、その集團が優者の地位を占めた爲めである。そこから蒐集生活本位の法則が道德的に又法律的に成立つたのである。

此の競爭に於ける優者の地位は、常に物理的均衡狀態に依存した故に、その物理關係が變化するとその地位は轉覆せざるを得なかつたが、然し、歷史を見れば、常に同じく蒐集系統の集團がそれ／＼の時代を通じて制度上の中心を爲してゐたのである。從つて生活の意識にも根本的な變化は起り得なかつたのである。蒐集生活の法則の意識が一貫して社會的に支配してゐたのである。

されば、生活の法則は斯様な生存競爭の事實が決定したと云はねばならぬ。即ち社會と云ふ有機體系の選擇作用は、蒐集生活の集團の有機體系の選擇作用に依存せしめられてゐたのである。何が法則を決定すべきかと云ふ問題は別として、斯くの如くに法則は決定されてゐたのである。

然も此の事情は毫も社會的生存に於ける蒐集行動又は生産行動の本質上の地位に變化を與ふるものではない。言ひ換へれば如何なる法則が意識されてゐたに係はらず、生産行動の集團が社會的生存の動因をなしてゐたことは、既に述べた如く、有ゆる國家、有ゆる時代を通じて一貫した事實である。たゞ此事實は、人間の衝動的作用の現れであつたので意識の上にはさう顯著に現れて來なかつたのである。古來、生存行動の集團は、衝動的に生産行動を營んだものであつて、頗る法則の意識に乏しい集團なのである。それ故に、これまでの社會意識としては、生産行動の生活を基調とする意識は甚だ不鮮明であつたのである。反之、生産行動を殆ど人間的生活と考へないやうな生活意識が、すべての時代を通じて、蒐集生活者の意識生活を一貫してゐたのである。近代の人間主義の哲學系統に於いてすら、生産行動は人間的生産としては、言ふに足らない性質のものに考へられたのである。蒐集生活者の文明が生産能力を失つた爲めに崩壞する度ごとに、右のやうな生産蔑視の意識を否定する實際行動が起るにも係らず、再び蒐集生活の文化が起るに及べば、その時代の意識は依然として蒐集生活を基調とするものになつて、生産行動は生活意識の上では、矢張り言ふに足らないものとしか考へられないのである。蒐集生活者は、その生活の慾望を充足せしめんが爲めにはいつも全く生産生活者の生産行動に依頼しながら、たゞ自分達の生活の本據が生産行動に依存してゐないと云ふことの爲めに、彼等の生活意識を構成する場合に定まつて生産行動を無視するのである。さうして生産行動を尊重する思想を、破壞的とか懷疑的とか危險的とか呼んで、之を生活意識の上の邪道と考へるのである。それは要するに、たゞに生産行動の生活が蒐集行動

のそれと全然根柢を異にする爲めに、彼等がその生產行動の社會生活に於ける地位を、理解することが出來ない爲めばかりでなく、生產生活に立脚した生產意識は、自づから、蒐集生產に立脚する生活意識を否定する處があるからである。

されば法則と云ふことを、蒐集生活者は、蒐集の生活を可能ならしむる組織上の約束と限定するのは當然のことである。即ち所有の本能と鬪爭の本能とを無拘束の狀態で發展せしむる組織を法則と考へたのである。實は其の法則こそ懷疑的、破壞的の要素に富んだそれなのである。既に言つたやうに、生產行動の生活は嚴重に互助的である。互助的とは自己の生活と隣人の生活とが、有機的に、離るべからざる關係で關聯して作用してゐることである。さう云ふ關係こそ、嚴重な約束の下に始めて可能なのである。生產行動を、集團の各々が互ひ〱の有機的關係の下に營むと云ふこと程、法則的の生活はない。之に反して蒐集生活は、隣人の生產物を收得するのであつて、それが約束となり、制度となり、有機的に圓滑に行はれるに至つても、尚ほ、その行動の本能は原始的獲得の行動と異らないのである。それが制度上有機的の過程となつた場合には、生產行動の有機的關係同樣に、互助的の形を有するに至るのであるが、然しその心理の差異を研究しても分る通り、蒐集行動の心理は生產行動の心理に較べると、慥かに物理强制を感じてゐるのであり場合に依つては戰鬪的であつて、生產行動が何等さう云ふ心理的反映を持つてゐないのとは性質が異るのである。

されば生產行動の互助作用こそ社會的生活の最も法則的な作用であるとせねばならぬ。唯だその法則の作用は、頗る無意識的であつて、生產行動の生活者その人の意識にすら鮮明に現はれて來ない。蒐集生活を中心とする社會が、さう云ふ生產行動の法則を認め得ないのは當然である。唯だ此の無意識が、意識の表てに持ち來たされる可き生存上の作

用が起ることに依つてのみ此の法則が認識されるのである。

如何なる事情が此の法則を意識の表面に持ち來すかと云ふに、それは蒐集生活本位の社會的機構が崩壞しやうとする際に屢々起る現象なのである。古來幾度か蒐集本位の文化が崩壞した際に、さう云ふ生産生活本位の意識が現れたのである。さうして、その生産行動に基づく生活意識が、いつも傳統的思想系統を動搖せしめたのである。けれども歴史の示す通り此の崩壞に次いで起つたものも又蒐集本位のそれであつた故に、やがて又その意識は潜在的になつてしまつたのである。たゞさう云ふ進化が積り積つて一層力強い傾向を以つて現はれたのは現代に於てゞある。それは生産行動の機構が社會的中心の方へと押し進められたのが全く近代的現象だからである。その結果、生産階級の擡頭と云ふことが、初めて歴史的時期を劃する作用として働き出したのである。

それは即ち、法則の意識が蒐集生活のそれから生産生活のそれへと進展すべき機運に向つたことである。倫理及び法理の根柢として如何なる行動の生活が認識されるかも、また自から此の傾向に依つて決定されるのである。

八　生産行動の生活に於ける法の力

生産行動が法則の根柢として認められるに及べば、生産生活の本質がその法則の基準にならねばならぬ。此傾向の下に生活が法則化するに當つて、それを特徴づける生産行動の本質は、生産行動そのものが生活組織自體の機構に於いて有機的關係で働き出される作用ないである。言ひ換へれば、行動が外部からの強制又は契約等に起因せずに、それ自からの機械に於いて自から働き出されるのである。それは例へば父が子の爲めに、又夫が妻の爲めに、隣人が隣人の爲めに、互の生活を一系の有機的機構として組み立てることに於いて自然と存立する行動である。尤も蒐集生活者は、常

のそれと全然根柢を異にする爲めに、彼等がその生産行動の社會生活に於ける地位を、理解することが出來ない爲めばかりでなく、生産生活に立脚した生産意識は、自づから、蒐集生産に立脚する生活意識を否定する處があるからである。

されば法則と云ふことを、蒐集生活者は、蒐集の生活を可能ならしむる組織上の約束と限定するのは當然のことである。即ち所有の本能と鬪爭の本能とを無拘束の狀態で發展せしむる組織を法則と考へたのである。實は其の法則こそ懷疑的、破壞的の要素に富んだそれなのである。既に言つたやうに、生産行動の生活は嚴重に互助的である。互助的とは自已の生活と隣人の生活とが、有機的に、離るべからざる關係で關聯して作用してゐることである。さう云ふ關係こそ、嚴重な約束の下に始めて可能なのである。生産行動を、集團の各々が互ひ〳〵の有機的關係の下に營むと云ふこと程、法則的の生活はない。之に反して蒐集生活は、隣人の生産物を收得するのであつて、それが約束となり、制度となり、有機的に圓滑に行はれるに至つても、尙ほ、その行動の本能は原始的獲得の行動と異らないのである。それが制度上有機的の過程となつた場合には、生産行動の有機的關係同樣に、互助的の形を有するに至るのであるが、然しその心理の差異を硏究しても分る通り、蒐集行動の心理は生産行動の心理に較べると、慥かに物理强制を感じてゐるのであり場合に依つては戰鬪的であつて、生産行動が何等さう云ふ心理的反映を持つてゐないのとは性質が異るのである。

されば生産行動の互助作用こそ社會的生活の最も法則的な作用であるとせねばならぬ。唯だその法則の作用は、、頗る無意識的であつて、生産行動の生活者その人の意識にすら鮮明に現はれて來ない。蒐集生活を中心とする社會が、さう云ふ生産行動の法則を認め得ないのは當然である。唯だ此の無意識が、意識の表てに持ち來たされる可き生存上の作

用が起ることに依つてのみ此の法則が認識されるのである。

如何なる事情が此の法則を意識の表面に持ち來すかと云ふに、それは蒐集生活本位の社會的機構が崩壞しやうとする際に屢々起る現象なのである。古來幾度か蒐集本位の文化が崩壞した際に、さう云ふ生產生活本位の意識が現れたのである。さうして、その生產行動に基づく生活意識が、いつも傳統的思想系統を動搖せしめたのである。けれども歷史の示す通り此の崩壞に次いで起つたものも又蒐集本位のそれであつた故に、やがて又その意識は潜在的になつてしまつたのである。たゞさう云ふ進化が積り積つて一層力强い傾向を以つて現はれたのは現代に於てゞある。それは生產行動の機構が社會的中心の方へと押し進められたのが全く近代的現象だからである。その結果、生產階級の擡頭と云ふことが、初めて歷史的時期を劃する作用として働き出したのである。

それは即ち、法則の意識が蒐集生活のそれから生產生活のそれへと進展すべき機運に向つたことである。倫理及び法理の根柢として如何なる行動の生活が認識されるかも、また自から此の傾向に依つて決定されるのである。

八　生產行動の生活に於ける法の力

生產行動が法則の根柢として認められるに及べば、生產生活の本質がその法則の基準にならねばならぬ。此傾向の下に生活が法則化するに當つて、それを特徴づける生產行動の本質は、生產行動そのものが生活組織自體の機構に於いて有機的關係で働き出される作用なのである。言ひ換へれば、行動が外部からの强制又は禁厭等に起因せずに、それ自からの機械に於いて自から働き出されるのである。それは例へば父が子の爲めに、又夫が妻の爲めに、隣人が隣人の爲めに、互の生活を一系の有機的機構として組み立てることに於いて自然と存立する行動である。尤も蒐集生活者は、常

に蒐集生活者と生産生活者との間に斯様な有機的機構が存在してゐると云ふ意味を高調してゐた。それは畢竟蒐集者生活と生産者の生活とが、自然の有機體系として協同的に成立てば、生産者は蒐集者の爲めに牛馬の役を務める行動をおのづからなる有機的機構として働き出すからである。蒐集生活と生産生活との斯様な一致は、必ずしも常に不可能であつたのではない。或る期間にさういふ有機的作用が圓滿に成立したことは、古來屢々その例があつた。天下泰平とはその時を指すのである。けれども此の有機體系は、生産と蒐集との生活を同じ人間が營んでゐると云ふことの爲めに遂ひに崩壊せずにはゐられなかつた。一方が牛馬であつたならば恐らく永久に圓滿に成立したであらう。雙方人間である爲めにそこに公正の事實が破られ、物理的均衡が破られ、その結果右の狀態は屢々成立したが、何時も一定時間の後に崩壞した。ところが生産生活の機構に於ては、苟しくもその一部のものが、蒐集生活的態度に陷らない限り、その集團の有機的機構は存續し、互助的關係は互の衝動的生産行動となつて無意識的に圓滿に現れてゐたのである。それが撞着を生ずる場合は、必ずその集團内一部のが蒐集生活者と化した場合である。制度化した生産行動の組織が崩れるのは、その制度の中に必ず蒐集生活者を發生せしめたからである。

　生産行動の有機的組織に於いて、一方の意識が他方の意識を壓迫することをその約束の基調としないと云ふことは、その生活を根抵とする倫理と法理とを特徴づけるものである。

　蒐集生活の意識は、既にいつた如く蒐集者の意識を神の意識と同地位にまで持ち來たした。從つて、その倫理も亦神的絶對性に淵源する。蒐集生活を營むものゝ人格的生活は既に言つた如く、神的人格のそれと共通點を持つのであるが、そのことは遂ひに、蒐集生活の法則に於いて、その絶對的性質を繼承するに至つたのである。人格の絶對と云ふことが蒐集生活者の特徴となつたのはさう云ふ意識に基づいてゐるのである。昔は神だけがさう云ふ人格であつたが、次には

神に近い英雄と云ふ人格がその絶對的人格となり、その次には神及び英雄の蒐集生活を受けついだ凡ての人格がその絶對的性格を受け繼ぐに至つたのである。今日に於いても、此の絶對人格を意識してゐる人間は、必ず蒐集生活の階級に屬する人間に限られてゐるのである。即ち『市民』といふ人格がそれである。

同じ樣に蒐集生活の法理が、此の絶對性の上に成り立つてゐるのである、人間を外的に拘束せる力即ち法の力はその人格の絶對性に依存するといふのが蒐集生活者の集團の法理である。昔はその人格は矢張り神であつた。法の力は神的意志の力であつた。それは蒐集生活の最も絶對的のものは神であつたからである。その後神の蒐集生活が次第に人間に轉化されるに及んで、人格の絶對性はさう云ふ人格即ち英雄の上に移つて行つた。此の時代には、法の力はさう云ふ人格の力であつた。然るに蒐集生活の範圍が次第に擴大され、謂ゆる市民階級一般が蒐集生活者となるに及んで、法の力はその一般平民の人格の絶對性の上に轉化された。今日に於いても法の絶對性は平民的人格の上に依存してゐるのである。それが蒐集生活の法理である。

蒐集行動の生活が論理及法理の根抵として認識される唯一の生活であつたといふ事實に對し、現代の社會進化が與へた變化は、更に生産行動の生活を論理及法理の上に根抵を置くといふ傾向を生ぜしめたのである。即ちそこでは法則は人格的絶對と云ふやうなものに依存せずして、前に云つたやうに、生産行動の生活の體系を組成する機構の上に置かれるのである。生活の法則は、生産行動の互助的有機關係の作用としてその動力を持つものである。隣人同志が互に生産行動を組織立てた機構の上に働く約束が、堅固に守られるのは、即ち有機的生活に於ける人間的行動の最も自然の作用である。此の本能的に自然なる作用が法則として認識された場合に、それは、有機體系の目的の爲めに隣人の間に強制される力を得るのである。力がかういふ性質のものなればそれが神によつて行使されやうが、人間によつて行使されやう

が、迷信的に守られやうが、哲學的に守られやうが、そんなことは何うであつても、その力の本質は社會的なのである。從つて法則的に最も有力なのである。

生活行動の內的及び外的の法則がさう云ふ有機的關係の意識に於いて發展すると云ふことは、生產行動の生活に於いて初めて可能なことである。生產生活初つて以來、それは無意識的に又は迷信的に生產行動を拘束してゐた作用である。

反之蒐集生活の倫理と法理とは、所有本能と鬪爭本能の生活組織と相應すべきものである爲めに、如何してもそれに伴ふ性質を法則の形で現はさない譯には行かなかつたのであるが、生產生活の創造本能は、如何に組織的構成を持つに至つても、所有の絕對若くは、それに伴ふ鬪爭の肯定を必要とするものではない。生產生活の意識が有力となつた時は既に、蒐集生活の法理に於いて私有の絕對と云ふことが否定されるに至つたのは、此の進化の方向を暗示してゐるものである。生產生活の組織的構成が未だ完成されない今日、その倫理と法理とが、如何なる形に於いて完成されるかは將來の問題であるが、今日でも之等の法則の根抵として認められる生活が、蒐集生活に限定されずに、生產行動の生活もその根抵として認められるといふことは、最も確かに云ひ得る事である。それにもかゝはらず蒐集生活本位の倫理と法理とを蒐集生活特有の煩瑣な組み立てによつて保存させやうとしてゐるのは一種の錯誤である。



大杉榮君の追憶

（社會思想家としての彼の一面）

森戸辰男

センデイカリスト等は信者の如く行爲すると同時に、又懐疑者の如く思索する——勞働運動と個人主義——研究や思索は遊戯ではない。僕等は僕等の日々の生活に於て、必ず何事かを考へ、又其の考へを、飽くまでも進ませて行かねばならぬ、或る要求に當面する。どうしても放つて置けない何等かの事實にぶつかる。僕等の思索は研究は、此の事實に對する、僕等自身の止むに止まれぬ內的要求であるのだ——個人的思索——

一

生は永久の闘である。

自然との闘ひ、社會との闘ひ、他の生との闘ひ、永久に解決のない闘ひである。

闘へ。

闘は生の花である。

みのり多き生の花である。(漫文漫畫)

みのり多かるべき彼の『生の闘爭』の半ばに於て、大杉君は悲壯な最後を遂げた。嘗て大杉君は「花が咲けばすぐに枯れて了ふ草がある。けれど草の生の擴充のためにはどうしても咲かねばならぬのだ」と、どこかに書いてゐる。彼の生涯はたしかに開花と共に枯死する草ではなかつた。まだ寒空の下に、來るべき陽春の前ぶれとして咲いた、此の花と草とを枯死せしめる前に、自然はどれだけの脅威と暴戾を振はねばならなかつたか。併し『民』草の生の擴充のためには、やがて無理強ひに散らさるべき運命を持ちつつも、花は咲かねばならなかつたのだ。恐らく、それは我がプロレタリアの解放運動の榮え行かんがための避け難き犧牲の一つであつたのだらう。我國社會運動の殉道者の一人として彼は、その鐵鎖よりの解放を悶闘しつつある我がプロレタリアによつて、また一般に、自由と正義との追求者たちによつて、永く記念さるべきであると、私は確信してゐる。

斯樣な氣持から、昨秋、大杉君が反動的狂暴の犧牲となつて斃れたときに、私は考へた、彼の生活と事業とは、震災史の單なる一エピソオド一悲話としてのみ過ぎ去つてはならぬと。そして私は我國の社會運動及社會思想の發展の上に、一大寄與をなした所の、一人格としての彼を記念するために何か書きたいと思ふた。それは單に尊敬する一知人の死を悼む私情からだけではない。此の點から云へば、研究上のことで生前兩三回の面識をしか持ち得なかつた私、社會思想に於て彼と必ずしも立場を合一にしない私などの出る幕でないことを承知してゐる。私は唯、主義に殉じたる人道の戰士、無産者解放の闘士に對して、──たとへそれが凡ての先驅者の共同運命だとは云へ──酬すべくして拒まれたる榮譽の

一部分をでも、彼に與へたかつたのである。永遠の反抗者は此の如きものを期待もせず、また、たとへそれが差し出されても、之に一顧を呉れなかつたかも知れない。併し、目醒めたる民衆の精神は、彼等の『正義を求める心』は、眞實の榮譽をば、眞實にそれに價する人々に歸屬せしめないでは置かぬであらう。

かれやこれやに妨げられて、私は久しく私の此のかすかな願を果すことができなかつた。が、其の間には、物々しい警戒の下に行はれた彼の葬儀と、それに關聯した芝居がかりの遺骨事件によつて、彼の記憶が新にされた以外、私のひそかに豫想したやうな方法に於ては、彼はまだ記念されなかつたやうだ。それで、私は今この一文のために筆を執ることにした。がいぶ長らく、私の心を壓してゐた負擔の一つが取除れると言ふ豫感のせいか、私の心にかろらかさが歸つて來た。

二

大杉君の眞の面目は社會運動者としての彼にある、と私は考へてゐる。無政府主義の先覺に比較の例を求めるならば、大杉君は、全人として見れば、その思想上に於ける前者の重大なる感化にも拘らず、クロポトキンよりはむしろバクウニンにヨリよく似てゐるやうだ。

彼も明かに云つてゐるやうに「天成の平和と自由との無政府主義者」であり、「本當に學者中の學者らしい生活と態度とのクロポトキンの魅惑は」彼を捉へて、長い間しつかりと彼を抱きかかえてゐた。併し、クロポトキンのやうな「無政府主義者を見てゐるだけでは、彼等に對する尊敬の念は起るが、親愛の心は湧いて來ない。どうも馴れ近づき難い。それよりも、同じ天成の無政府主義者でありながら、無政府主義社會ででも、やはり謀反人であるだらう程の、本當の

生れつきの謀反好きで、そして餘りきちようめんでない。だらしない日常生活を送つてゐる人の方が、僕にはよほどなつかしい。そして僕は、僕等の父バクウニンの生活を思ふたびに、おのづからの微笑みを禁ずることができない」彼は記してゐる。(『二人の革命家』一三頁) 彼の言ふ所に從へば、其の昔、彼は無政府主義を知り始めた多くの青年のやうに、一度バクウニン熱に罹つた。かなりに長い間のクロポトキンへの私淑によつて中斷せられた後、最近數年以來、此のバクウニン熱は再び彼を虜にしたと。彼は此の變化の原因を次の言葉を以て暗示してゐる。

「バクウニンは亂世の人間だ。封建制度が破れて、資本主義の新制度がまだ確立しなかつた亂世の人間だ。そしてクロポトキンは其の資本主義萬歳の泰平の時代の人間だ。そして今、世界大戰は、そしてそれに從つて起きたロシアやドイツの革命は、再び又此の世界を、資本制度から更に新しい正義と自由との制度に移らせる、亂世に導きつつあるのではあるまいか」(『二人の革命家』二一三頁)

彼の心理の轉化は、そしてまた同時に、彼の本領への復歸は、此の世界の大勢よりも更に手近な我國内に於ける社會事情の變遷からよりよく說明できると思ふ。即ち、幸徳事件に續く社會的沈滯期に於て、彼が人道的やさしみの豐多な、科學的思索者クロポトキンに惹きつけられたと同じやうに、米騷動に次ぐ我國民衆運動勞働運動の新機運に際會て、彼はその心中に、惡魔的反逆者であり『永劫の運動力』であるバクウニンの魅力を感じたのであらう。最近彼がものしたバクウニンの傳記的記述三篇『無政府主義の父』『革命の失敗』(又は『農民問題に就いての一考察』)及び『マルクスとバクウニン』は、恐らく彼のバクウニンに對する此の思慕の表白と見ることができよう。

更にまた、最近ロシヤに於けるボルシェヴィキ革命に關聯して、彼は「極力反革命軍や外國の侵入軍と戰つてロシヤ革命其者を防護しつつ、同時に又民衆の上に或る革命綱領を強制する謂はゆる革命政府とも戰つて、飽くまで民衆自身

の創造的運動でなければならない社會革命共者を防護しようとした」と言はれてゐるマフノヰチナ、「全く自主自治た自由なソヰエトの平和な組織者であると共に、その自由を侵さうとするあらゆる敵に對する勇敢なるパルティザンであつた」と言ふマフノヰチナ、此の運動の最も有力な代表者ネストル　マフノ、その「大膽不敵と、其の神出鬼沒の行動と、其の策略的才能とが敵軍の非常な恐れと憎みとを加へると共に、ウクライナの民衆には非常な喜びと力とを與へた」所の此の『無政府主義將軍』によつて、最も強く感激させられてゐたようである。（無政府主義將軍『日本脫出記』の中）マフノヰチナ並にマフノに對する彼の此の強い共鳴の中にも亦、社會運動者たる彼の本領が反映してゐるやうだ。

餘事ではあるが、大杉君の小供の名前は、間接ながらも、此の彼の本質をよく表はしてゐる。彼はフランスから歸つて間もなく生れた男兒を、ネストルと命名した。言ふまでもなく、それはマフノヰチナ運動の中心であるネストル・マフノに因んだのである。第二女、次いで第三女はエマと呼ばれた。それは野枝氏の思想の母であり、「奴隷を奴隷根性より解放し、暴君をその暴戾より解放し、好んで艱難に向ふ精神」のみによつて動かされつつあるエマ・ゴルドマンから來たのだ。第四女はルイズと名づけられた。「フランスの無政府主義者ルイズ・ミッシェルの名を思ひ出したのだ。彼の女はパリ・コムミュウンの際に銃を執つて立つほど勇敢であつたが、しかしまた、道に棄ててある犬や猫の子を、其儘見棄てて行くことのできなかつたほどの、慈愛の持主であつた。」（「二人の革命家」四頁）彼れが若しもつと多くの男兒を持ち得たであらうならば、その中には、きつとバクウニンやマラテスタやもゐたことであらう。彼が次代に求めた理想は、また同時に彼が現にその胸裡に搏動しつつあるのを感じた所の彼の衝動の投影であつたに違ひない。

若しさうであるとすれば、大杉君を記念するに最も應はしい文筆上の仕事は、「社會運動者としての彼」を取扱ふこ

とでなければならぬ筈だ。併し、今のところ、私はまだ此の問題を論ずるだけ充分に準備されてゐない。そこで私は、茲に、私の力の及ぶ範圍内に於て、たとへ二次的であるとは云へ、極めて重要なる『社會思想家としての大杉君』に就いて、私の所見の一端を述べる。

三

大杉君の本領はむしろ實際運動家たる彼にある。が、それが彼の本意からでないにしても、著作者としての生活が彼の生活の重要部分をなした、と云ふことも亦事實だ。彼が比較的短かい三十九の生涯の間に、單行本の形で發表した出版物だけでも、二十四種に上つてゐる。その中には幾分の重複もあり、他の人々、殊に野枝氏との合著もあるが、何にせよ、非常な多産と言はねばならぬ。

併し此の著作上の多産には土臺がある。即ち、彼は非常な勉强家であつたのだ。總じて、單なる暴漢と信ぜられてゐる、我國の先輩社會主義者たちは、非常な勉强家であつた。彼等は單身空拳以てあらゆる有利なる地位に置かれた官的思想の代辯者と對抗しなければならなかつた。多くの官私大學のエライ先生がたからは、彼等の望む何ものをも求めることは不可能である。讀まうとする本は禁斷の書で、たやすく手に入らない。彼等は獨學自修で行かなければならぬ。更に、彼等は多く其の主義のために、他の生活の道を閉ぢられて、文筆の道のみが彼等に殘された。而も彼等は俗人を瞞着すべき何のイカメしい肩書も持たない。彼等の據る所は、ただ一に彼等の實力のみであつた。かくして彼等はグングン勉强したのである。

皮肉にも主義嫌ひの官權は彼等の此の勉强を助成した。勿論、之れは彼等に研究室を建ててやつたり、研究費を出して

やつたのではない。彼等を壓迫し彼等を投獄すると言ふ方法によつてだ。幸德事件に續いた反動時代は、志操の挫けなかつた彼等のためには、最も苦しい壓迫の時代であつたと共に、最もよい勉强の機會であつたに違ひない。大杉君が「知的手淫」として稍々蔑視するにも拘らず、彼の著作的活動の重點は、むしろ此の時代に存するやうだ。來るべき日に準へるために、彼等は政府が彼等に無理押付けに强要した所の、此の「手も足も出ない時代」に、一生懸命に勉强したのである。そして彼は特に社會科學の研究に於ては、「何よりも先づ、政府的思想による一切の學者と書籍を斥けて、自らの眼を以て社會的の物を觀察し、自らの頭を以てこれを判斷し得る力を造る」ことを心がけた。(個人的思索)

『獄中記』の中で大杉君は「僕は監獄で出來上つた人間だ」「僕の今日の教養、知識、思想、性格は、總て皆、其後の入獄中に養ひあげられ、鍛えあげられた、と言つてもよい」と書いてある。多少詩人的の誇張はあるが、該博な彼の知識と彼の達者な語學の少からぬ部分は、たしかに彼の數年の監獄生活の賜物であつた。自由な(?)世界では、生活と運動とのために忙殺されてゐた主義者たちは、監獄を以て思索と勉强との天與の機會であると考へた。彼等にとつては、監獄行は大學入でもあり留學でもあつたのだ。大杉君も亦此の「勉强の機會」を遺憾なく利用した。彼の獄中通信中の大切な用事は、實に讀むべき本の注文であつた。彼の猛烈な勉强振りを示すために、千葉監獄よりの通信の一節を引用しよう。

「去年の十月から殆んど毎月の手紙のたびにドイツ文を注文してゐるのだが、どうしたのだらう。更に送つて來ないぢやないか。折角出來上りかけた大事なところを半年も休みにされては、又もとのもくあみに歸つてしまふ。大至急何か送つて呉れ。目錄の中から安い本を抜かう。

「フンボルト著アンヂヒテン・デル・ナトウル、ヤコブセン著ゼツクス・ノベルレン、キツセンシヤフトリヘ・ビブリヲ

テク○—8.17.73、ヘルタ・フオン・ズツトネル著デイ・ワツヘン・ニイデル「暫くドイツ語を休んだかはりに、ロシヤ語に全力を注いだので、こつちは案外に早く進歩した。生ひ立の記（トルストイ）のやうなものなら、何の苦もなく讀める。來月中に又何か送つて呉れ。

「先月の末からの差入れものは、大がい不許になつた。近日中に送り返す。なほ、次ぎのものを至急送つてくれ。(之は實は一旦不許になつたものを別名で差入れる指圖をしたものだ」

「佛文。プロプリエタ（經濟學）、フオンヂユアリヤ（哲學の基礎）ロヂカ（論理學）以上—の著。英文。ルクリユス著プリミチフ（原人の話）ドラマチスト（文學論）スカンヂネビヤン（北歐文學）フレンチノベリスト（佛國文學）。佛文。ラポポルト著歷史哲學、ゴビノオ著人種論。「猶ほかに英文で、ウオドのピユア・ソシオロジイとサイキカル・フアクタアス、ギイデイングスのプリンシプル・オブ・ソシオロジイ」（獄中記二四七—四九頁）

彼の達者な語學は大部分監獄出來だ。彼は『一犯一語』の原則を立てた。一犯毎に一外國語を修得すると言ふ意味である。最後の未決でエスペラント、次の巣鴨でイタリヤ語、二度目の巣鴨でドイツ語をやり、それからロシヤ語と言ふやうに進んで行つた。(彼の得意な英語佛語は勿論である)「敢てエンゲルスを氣取るわけではないが、年三十になるまでには、必ず十ケ國の言葉が吃つて見たい」と言ふ彼の希望が成就したかどうか私は知らぬが、少くとも彼は、「ほかになんにも藝はないが、六ケ國ばかりの歐洲語なら、堅いものでも、柔かいものでも、何んでも、御意のままに翻譯する」と言ふ自信を持つ所にまでには辿り付いたやうである。今日吾々の親しみ得る彼の著作の大半を占めてゐる立派な而して確かな翻譯は、彼の監獄生活の餘澤である。

なほ、此の外國語の知識は我國の第一期社會主義者にとつては、丁度、明治時代の新文化の場合に於けると同じやう

に、特に重要な武器であつた。あらゆる努力を以て一般西洋文化の吸收消化に努めた我國の政府は同じやうな努力を以て、社會主義の思想の普及を妨げた。あらゆる種類の西洋文化の邦語化は、全力を擧げて奬勵されたにも拘らず、社會主義のそれだけは同じく全力を擧げて嚴重に禁遏された。此の國禁の思想は、秘密に刊行された少數文書の外は、全部、外國語で書かれた書物によらなければならなかつた。斯樣にして外國語の知識は我國第一期の社會主義運動者の一つの重要なる資格であつた。そして我が大杉君は最も精鋭なる此の武器を持つてゐたのである。

四

大杉君の著作的活動は極めて廣い範圍に亘つてゐた。主義に關する著作は勿論、其の他にも自然科學を初めて社會學より哲學文藝にまで及んでゐる。

西洋の無政府主義者によくあるやうに、彼は自然科學、殊に、生物學人類學、そして、その進化論的方面に對する非常なる興味を持つてゐた。云ふまでもなく、彼は此の方面に於ては一箇のディレッタントではあつたけれども、頗る造詣が深く、ダアウインやウオレイスなどの有名な本は、大概讀破してゐた。併し彼の此の方面の勞作は全部飜譯であつた。單行本としてはハワド、ムウワの『萬物の同根一族』、後、増補再刷された。『人間の正體』、ギユタヴ・ルボンの『物質非不滅論』、チヤアルスダアキンの『種の起源』、クロポトキン』の相互扶助論』がある。此等の著作は主として宇宙又は生物進化論を説いた通俗的又は古典的書物である。

我國に於ては、生物進化論及その社會的適用は主として加藤弘之氏や丘淺次郎氏によつて一般に普及せられた。けれども、それは其の當然の歸結であるべき變革的意味に於てでないどころか、却つて保守的若くは反動的傾向をさへ屢々

帶びてゐた。官學者たちの進化論の此の誤れる社會的適用を指摘して、其の眞の社會的使命を明かにしたのは、彼等名もなき民間の社會主義者たちであつた。マルクスの階級闘爭論が人類社會の革命的進化の社會的論據であるやうに、ダアキンの生物進化論は、その生物學的論據である。第一期の社會主義者たちは進化論の此の社會的意義を認識して、進化論的智識の普及を計つた。堺氏の編輯した『平民科學叢書』は大體に於て斯の如き使命を擔つてゐたのだ。そして我が大杉君の『萬物の同根一族』はその第六篇をなす。更に、大杉君は此の方面の研究を一層進め、クロポトキンの相互扶助說によつて、生存競走說の資本家的又軍國主義的濫用を檢討したことは、未だ人々の記憶に新なる所であらう。

なほ、この點に關聯して大杉君はルトルノウの『男女關係の進化』を譯出し、ルトルノウやモルガンやエンゲルスに據つて男女問題の進化を說明し、(羞恥と貞操と童貞、男女關係の進化、以上『社會的個人主義』羞恥と貞操、新しい女、婦人問題二題、以上『生の闘爭』)彼の抱持してゐた自由戀愛論の論據とした。大杉君が自由戀愛論の理論家であるよりはむしろ勇敢な實行者であつたことは讀者の夙に知る所である。

此等の自然に關する諸研究は、上記のような實際的な社會的意味を持つてゐるほか、彼の社會學的研究の理論的土台をなしてゐた。彼は巣鴨監獄からの手紙の中に、「バクニン、クロポトキン、ルクリユス、マラテスタ、其他どのアナアキストでも先づ卷頭には天文を述べてある。次ぎに動植物を說いてある。そして最後に、人生社會を論じてゐる。…そして僕は、僕の自然に對する知識の甚だ淺いのに、いつも恥ぢ入る。これからは大いに此の自然を研究して見ようと思ふ。讀めば讀むほど、考へれば考へるほど、此の自然は論理だ。論理は自然の中に完全に實現されてゐる。そして此の論理は自然の發展たる人生社會の中にも、同じく又完全に實現せられねばならぬ。僕はまた此の自然に對する研究心と共に、人類學や人間史に強く僕の心を引かれて來た。……」と書いてゐるし(『獄中記』六四—五頁)又千葉の監獄に

還入る時には、次のやうに考へた。「以前から社會學を自分の專門にしたい希望があつたので、それを此の二ケ年半に本物にしたいときめた。がそれも今までの社會學ではつまらない。自分で一個の社會學のあとを追つて行く意氣込みでやりたい。それには先づ社會を組織する人間の根本的性質を知るために、生物學の大體に通じたい。次ぎに、人間が人間として社會生活を營んで來た經路を知るために、人類學殊に比較人類學に進みたい。そして後に、此の二つの科學の上に築かれた社會學に到達して見たい」と。彼は「今考へると、誠にお恥かしい次第だが、ほんの素人考へに考へてた」のだと附け加へてゐる。（『獄中記』八八―九頁）

此の部類に屬する彼の著作には、なほ有名なフランスの昆蟲學者アンリ・フアブルの諸著『昆蟲記(1)』『自然科學の話』『科學の不思議』の飜譯がある。第二第三はそれぞれ安成四郎、伊藤野枝氏との共譯である。後の二つは「文明の母」である「科學の知識」を「苦しんでではなく面白可笑しい話しの中に容易に得させ」る目的で出されたもので非常に面白い、小供の發育のためには極めて有益な本ではあるが、彼の思想と直接關係はない。世界的昆蟲學者フアブルの畢生の著『昆蟲記』の譯はヨリ多くの科學的價値を持つてゐる。それは「哲學者のやうに考へ、美術家のやうに見、そして詩人のやうに感じ且書く」所の昆蟲學者にふさはしいよい飜譯である。併し、此等の數著と大杉君の思想との關係は頗る稀薄であるやうだ。それはむしろ『科學の詩人』に對する大杉君の興趣と彼れの生活上の必要とに由來するものであらう。尤も、フアブルがエスピナやプレエムやと共に屢々クロポトキンの相互扶助論に引用されてゐることや、それが理性論者でなくて本能論者――動物界の――であることなどは、大杉君の社會學說と全然無關係であるわけではないが。

五

幾多の無政府主義者に見るやうに、大杉君はまた幾多な藝術的天分を持つてゐた。我國の社會主義者中、恐らく彼は、全人として最も藝術的な人の一人であらう。而して幸徳事件後の我國の事情は、また彼を此の方面に向はせるに與つて力があつた。彼は千葉監獄出獄後「どうせ當分は政治運動や勞働運動は許されまいから、せめては、文學にかこつけて、平民文學とか社會文學とかの名のつく文藝運動をやつて見やうかと思つた。」（『獄中記』一二一―一二頁）そして此の希望は、彼と荒畑寒村君とが中心になつて創めたところの文藝雜誌『近代思想』の發刊によつて實現された。「この雜誌は哲學社會學等の抽象論、または小説などにかくれて、知識階級の青年を相手に宣傳し、又は學者評論家のゴマかし論への思想戰を開いたもので、彼は主として社會學哲學方面を受持つた」のである。（『自叙傳』二三四頁）此の時代の彼の勞作の大部分は『生の鬪爭』及び『社會的個人主義』中に收められ、その主なるものは『正義を求める心』に再錄されてゐる。『近代思想』及びこれに續く數年の彼の所謂『知的手淫』の時代に亘つて、大杉君は彼の社會學説に關する主要な論文の大部分を出しゐるが、文藝に關しては、主として歐洲文藝の紹介と我國の文藝運動の批評とであつた。

其後、大杉君は彼の長い間の宿望であつたと言ふ自分の生ひ立ちや自分の周圍の出來事を書いた自傳及び其他の隨筆的作品を通して、半ば創作家としても現はれて來た。彼れの性格のよく出てゐて、此上なく面白く讀める『獄中記』（『自叙傳』中にも再錄）と『日本脱出記』との外、生ひ立ちの記たる『自叙傳』野枝氏との關係を取扱つた『死灰の中から』（『乞食の名譽』の中）葉山事件を主題として『お化を見た話』（『自叙傳』の中）其他『悪戯』及『漫文漫畫』中に

收められた數篇がある。唯一の空想的なアレゴリカルな作品としては『正義を求める心』に再錄することを禁ぜられた『鑛工場』があり、其他手際のよい幾つかの詩と多くの短文とがある。此等の作品に就いては門外漢の私は何物をも言ふ資格はない。自らも亦謙遜してその一つを『非藝術品』と呼んでゐる此等作品に對する玄人筋の批評が何であれ、それは彼の餘業であつて、本業ではなかつたのである。

なほ、西洋文藝の飜譯には『生の鬪爭』の中の『共和祭』以下の四篇があり、紹介にはゴルキイを紹介した『ヴアガボンド魂』やショウ劇を評論した『超人の戀』フランス文學の革命的新機運を指摘した『近代佛文學一面觀』などがある。

併し、吾々にとつて最も興味のあるのは文藝批評家としての彼の態度である。彼の文藝批評の對象になつた主なるものが二つある。一つは我が文學界の自然主義的個人主義的傾向であり、他は民衆藝術論である。

大杉君が千葉から出獄した時代は自然主義的個人主義的思潮の最盛時であつた。『生』『生の惱み』『生の充實』『自己の完成』はその合言葉であつた。「何よりも先づ自己の生命の充實、周圍との沒交涉、殊に自己を煩はし若くは害はんとする周圍からの逃避、靜かな內省と觀照これが當時の個人主義の理論であり實際であつた」。此の態度に對して彼は鋭い批評を向けた。近代人の『生の惱み』は自我の分裂と外圍の壓迫より來る。そしてそれはその根底をつきとめれば、『征服の事實』の直接間接の反映である。故に、眞に『生の擴充』を希ひ、自己を完成せんとするものは、此の「生の惱み」の根源であり、『生の擴充』の障害たる『征服の事實』に當面しなければならぬ。階級的對立は社會の根本事實である。かくて「僕等の周圍は政治的にも經濟的にも又廣く社會的にも、餘りに僕等を抑壓しすぎる。僕等は此の抑壓をはねのけなければ、僕等自身の完成は素より、僕等の生命の生長發達すらも覺束ない。」(『乞食の名譽』四六頁)「ここ

此に於てか生が生きて行くためには、かの征服の事實に對する憎惡が生ぜねばならぬ。憎惡が反逆を生ぜねばならぬ。此の征服の事實に觸れざる限り彼等の作物は遊びである。戯れである。吾々の日常生活にまで壓迫し來る此の事實の重さを忘れしめんとするあきらめである。組織的瞞着の有力なる一分子である。(『生の鬪爭』一二四―五頁)そして「此の生の鬪爭を逃避して、ひたすらに內省や觀照に耽ることによつて、自己の完成を謀らうとするのは、虛僞である、故麻化しである、一時遁れである。」と彼は强ひ言葉を以て彼等を難詰した。

斯くして、彼は當時流行の心理的內觀的個人主義を外方に向けて、『社會的』たらしめた。而もそれは個人と社會との不徹底なる妥協的調和論や、個人を無視若くは輕視したる機械的社會論であつてはならない。それは征服の事實とそれに對する反抗とより生ずる要求の對象たる新生活、「人の上に人の權威を戴かない、自我が自我を主宰する、自由の生活、自由聯合の組織、個人本位的團體主義であらねばならぬ。此の階級的社會組織の否定と之に代るべき自由聯合の要求とを以て裏付けられた心理的個人主義を、彼は提唱したのである。彼は彼の第二の論集の表題とした『社會的個人主義』の名を以て之を呼んだ。社會的個人主義は社會學說上の普通の稱呼に從へば、疑もなく無政府主義と呼ばるべきものであらう。玆に彼の文藝批評は結局彼の社會學說にまで導いた。

民衆藝術論の批評は、其後此の問題が文壇で論ぜられた時、大杉君がその仲間入りをした際の所產である。『新しき世界ための新しき藝術』外二篇で、『正義を求める心』の中に收められてゐる。彼の議論の大部分は當時彼の譯出したロメン・ロランの『民衆藝術論』に基いてゐるやうだ。當時の民衆藝術の問題は今日やかましいプロレタリヤ藝術の問題である。彼に從へば、征服の事實の桎梏の下に懊惱しつつある現代社會に於ける民衆藝術は「憎惡美と反抗美との創造的文藝」であらねばならなかつた。ロマン・ロランの云つたやうに、それは「新しき社會の其の感情の、其の思想の、己

むに已まれぬ表現であると共に、老い傾いた舊い社會に對する其の鬪爭の手段」であらねばならぬ。然るに、當時の民衆藝術の一提唱者は憎惡の美、反抗の美を否定した。そこで彼はロマン・ロランの次の句を引用して、之に論難を加へた。

「暴擧と云ふ事は決して藝術のつきものではない。人間の良心が、それに衝突して、そしてそれを打破つて行かなければならない。不正不義のつきものである。藝術は鬪爭を絶滅する事を目的とするものではない。藝術の目的は生を豐富にし、力強くし、更に大きく更に善くする事にある。されば、若し愛と結合とが其の目的であるとすれば、憎惡は或る時期迄は恐らくは其の武器である。セント・アントワヌ郊外の一勞働者が、一切の憎惡は惡であると云ふ事を切りに說いて聞かせた一講演者に云つた。『憎惡は善である。憎惡は正義である。被壓制者をして壓制者に反抗して起たしめるのは此の憎惡である。私は或る男が他の人々を壓制してゐるのを見れば、私は其の事を憤慨する。其の男を憎む。そして憤慨し憎惡する自分が正しいのだと思ふ。惡を憎まないものは、又、善をも愛せないものである。不正不義を見て、それと闘ふ氣を起さないものは、全然藝術家でもなければ、又全然人間でもない。」（「正義を求める心」三〇一頁）

此の大杉君の民衆藝術論は改革者としての彼自身の藝術論に根ざしてゐる。彼は「生の擴充に至上の美を見た」。然るに此の生の擴充は現代社會にあつては、『征服の事實』とこれに基づく諸種の制度によつて妨げられてゐる。故に、今日にあつては、此の事實に對する××××××××××は、生の拒み難き要求であり、そして故に「生の至上の美がある」。「征服の事實がその頂上に達した今日に於ては、諧調はもはや美ではない。美はただ亂調にある。諧調は僞りである。眞はただ亂調にある。」「吾々をして徒らに恍惚たらしめた靜的美は、もはや吾々とは沒交涉である。吾々はエクスタシイと同時にアンツウジアスムを生ぜしめる動的美に憧れたい」。「今や生の擴充はただ××××××××××れる。

新生活の創造、新社會の創造はただ××××××である。僕は僕自身の生活に於て、此の×××××、無限の美を享樂しつゝある。そして僕の所謂實行の藝術の意義も亦、要するにここにある。實行とは生の直接の活動である。そして頭腦の科學的洗煉を受けた近代人の實行は……多年の觀察と思索から、生の最も有効なる活動であると信じた實行である。實行の前後は勿論、その最中と雖も、猶當面の事件の背景が十分頭に映じてゐる實行である。實行に伴ふ觀照がある。觀照に伴ふ恍惚がある。恍惚に伴ふ熱情がある。そしてこの熱情は更に新しき實行を呼ぶ。そこにはもう單一た主觀も單一な客觀もない。主觀と客觀とが合致する。これがレヴォリューショナリイとしての僕の法悦の境である。藝術の境である」「僕のこの生の充實は又同時に僕の生の擴張である。そして又同時に人類の生の擴充である。」(『生の鬪爭』一四〇―三頁)大杉君の藝術論は此の場合にも亦個人若くは民衆の解放鬪爭共者に歸着する。茲に再び吾々は、彼の藝術論と社會學說との間に緊密なる交涉の存在するのを見る。

更に、彼は民衆藝術と社會運動との關係に關して、當時の民衆藝術論者に挑戰してゐる。ロマン・ロランは言ふた。「諸君は藝術を欲するのか。然らば、民衆を持つことから初めよ。其の藝術を娛しむことの出來る自由な精神を持つてゐる民衆を。容赦のない勞働や貧窮に踏みにじられない、ひまのある民衆を。あらゆる迷信や、右黨若しくは左黨の狂信に、惑されない民衆を。自分の主人たる、目下行はれつゝある鬪爭の勝利者たる民衆を。ファウストは云つた。『初めに行爲あり』」と。民衆藝術の當然の結論として、藝術的運動と共に、と言ふよりもむしろそれに先だつて、社會的運動に從はなければならぬ、ことを提唱したロマン・ロランに、彼は共鳴した。嘗て樂聖ワグネルは「私の若さや健康を再び見るためには、自然を娛しむためには、限りなく私を愛する女のためには美しい子供のためには、私は私の全藝術を與へる。さあ私の全藝術を今此處へ出す。其の殘りの物を私に與れ」と言ふたさうだが、大杉君は、ロマン・ロランと

共に、之に附け加へて「吾々が『此の殘りの物』の僅かでもを、不仕合な人々に與へることが出來たら、生に少しの喜びを與へることができたら、よしそれが藝術を犧牲にしてでも、吾々はそれを悔まない」と附け加へてゐる。（『正義を求める心』三一五―七頁）かくして彼は文藝批評から社會運動に這入つた。そして彼の藝術論は三たび彼の社會學說に導いた。私の敍述も亦彼の社會思想へと遷り行くであらう。

六

大杉君は『近代思想の』廢刊の辭の中に「僕はもう、此の『近代思想』のやうな Intellectual Masterbation にはあきて了つた。吾々の情慾の、しかも極めて强烈な情慾のある以上、それは何等かの方法を以て、常にもらさなければならぬ。Masterbation も時によつては必須事である。けれども僕等は僕等に取つての、この不自然事に、つくぐ厭氣がさして來た。僕等は僕等の自然に歸らねばならぬ。… Bourgeois の青年を相手にして、譯の分らぬ抽象論をするかはりに、僕等の眞の友人たる勞働者を相手にして、端的に進みたい。」（『生の鬪爭』一頁）と書いた。そして彼は再び勞働者の中へ、社會運動の中へ這入つて入つた。彼の此の態度の思想的背景、思想的表白が即ち大杉君の社會思想である。

大杉君の社會思想はアナルコ・シンディカリスムの語を以て、最も簡單に言ひ表はし得ると私は思ふ。即ち、理想としては、哲學としては、無政府共產主義を、實現手段としては、實際的組織としては、シンディカリズムを、提唱するのである。

併し彼の社會學說を組織的に又は積極的に論述した纏つた論著は一つもない。彼が自由な時を持ち得た時にも、峻嚴

な資本家國家の檢閲は遂に之が公表を許さず、其後、實際運動に忙しい彼は、此の目的のためにする學問的研究に費すべき多くの自由の時間を持たなかつたに違ひない。此の方面に於て彼の根本思想を、比較的に最もよく伺ひ得る小冊子に、『勞動運動の哲學』は出版も間もなく禁止された。併し其後、その重要部分は幸にも『正義を求める心』第三章中に轉載されてゐる。

彼は思想發表の自由を有しなかつた。彼れの最も言ひたいことは、彼の大量の著作にも拘らず、彼の望むやうな表現方法に於ては、終りまで語り得なかつたであらう。例へば彼の第二の論集『社會的個人主義』は總頁數三一四の中、約三十五頁ほど抹殺されてゐるし、『正義を求める心』に再錄されてゐるクロポトキンの最も温穩の著だと言ふ小篇『青年に訴ふ』ですらが、近々三十餘頁の中、全一章と約二千三百字と四ケ所とが抹殺されてゐる、と云ふやうなわけだ。

故に、彼の發表し刊行した論著は彼の社會思想の全部ではない。從つて、彼の讀者は常に或る程度の推理力と想像力と著者に對する同情を持つことなくしては、彼の眞意を理解し得ないであらう。そして又彼の不徹底、矛盾、不遠慮を以て、直ちに彼の責めに歸してはならない。十二分の言論の自由を有する官的思想の代辯者たちは、彼等の論著の矛盾、不徹底不十分に關して、何ら言ひ遁るべき理由を持たない。併し、大杉君は多くの進歩思想の代表者と同じく、彼の表白したる思想は官的壓迫のために、常にその本來の形がゆがめられ、傷けられ、泥水されてゐるのである。なを、此の思想表白の不自由は、大杉君をして直接勞働の中に行かしめ、彼等との個人的觸接による宣傳に向はしめた一原因をなしたらう。かくして、我が勞働界に於けるシンヂカリズムの勢力は思想壓迫を通じて、官權が之を助成したものだ、と言ふ大なる逆説も此處にあるのである。

彼の社會思想は彼れ自身の認むるやうに、大部分外國出來である。彼は自ら言ふてゐる「僕は飜譯的社會主義者と言

はれても、否やさうではないと、大威張りに威張る事のできない、いかにも飜譯的の社會主義者である。僕の社會主義的智識や思想は、大部分西洋の社會の主義や社會運動を記した書物の飜譯である。……けれども此の飜譯的智識や思想は僕自身の及び僕自身に最も近い周圍の事實の觀察によつて、僕自身のものとなり、僕自身の中に生きて來る」と。彼が、否、一般に我が社會主義者たちが、此の意味での飜譯社會主義者であることは、彼又は彼等の短所どころか、却つてその長所であると私は思うてゐる。此の飜譯的社會論の方が、我國古來の美風を宣揚する、特殊國の特產物たる獨創的社會論よりも、どれだけに眞理に近かつたらう。我國の憲法も議會制度も民法も商法も刑法も、その大部分に於ては、西洋のそれの飜譯ではなかつたか。我國の教育制度や陸海軍の軍備制度はそれが西洋の模倣でないと言へるか。更に、國民生活の基礎たる經濟組織は絕えず西洋化、即ち資本主義化しつつあるではないか。我國民生活の發展自身が、西洋文化、即ち資本主義文化の飜譯の過程なのだ。此の時代に於て、我國民生活を根本的に變革しつつある所の、資本主義文化の必然の所產で、同時にその對抗原理、その克服原理である所の、社會主義が飜譯されずにゐることこそ、却つて不合理である。恰も『名勝保存會』の運動ででもあるやうに、此の社會學說の方面にだけ我國古來の特殊的美風を保存しようとするのは、丁度燕尾服を來て自働車に乘つたハイカラ紳士の頭上にチョン髷を殘して置かうとするの努力と同じやうなものだ。

勿論我國に於ても資本主義が發展して行けば、或る時の經過の後には、之に對抗して、その矛盾より自らを解放せんとする社會學說が起るであらう。併し、吾々には民衆の痛苦をその時まで引き延ばして置く必要も理由も更にない。吾々は丁度支配階級が西洋の既に出來上つた資本主義とその文化を移入したと同じやうに、その同じ資本主義發展の必然の所產である所の社會思想の武器を用ひて、一日も早く現代の生活苦を除き、新社會の建設に資することに從事しなけ

ればならぬ筈である。自覺的な勞働者の解放運動のまだ微弱であつた當時の我國の事情を背景にすれば、それからのみ生れ出て來る社會學説は、西洋ではもうとうの昔に打ち克れた空想的社會主義であるか、さもなければ、同樣に時代遲れの復古的温情主義であつたに違ひない。故に、西洋に於て既に此等の諸階段を經て發展し來つた社會學説を我邦に輸入することは、我國に於ける解放運動に無用な勞力の失費を防ぐことになるだらう。かくて我國に於ては他の後進諸國に於けるやうに、諸種の系統の飜譯社會主義者があつたし、又現に存在してゐる。そして彼等はまた十分にその存在の理由を持つてゐるのである。

それでもなほ執拗に、大杉君に獨創の社會學説のないことを非難する人があるならば問者に向つて私は反問する。社會學説の研究を本業として、國家によつて生活を支持され、多くの研究の便宜を與へられてゐる、我國の教授學者たちはどうでもよいヨタ論やペダンテックなコケオドシ論以外に、どれだけ多くの眞に獨創的な學説を樹立したかと。生活と權力との壓迫に對して絶えず抗爭しつつ、社會運動の實際に全力を傾倒しつつあつた彼に對して、學問的創造の結果を要望することの理不盡な注文であることに彼等は氣付かないのであらうか。或は大杉君はうなづきながら、問者に答へる代りに、微笑を以て、『一革命家の思出』中の次の一句を指摘したかも知れない。

「けれども自分のまはりには、ただ貧窮と、泥の塊のやうなパンのための鬪爭としかない時に、どうして私にそんな高尙な樂しみに耽る權利があらう。私が此の高尙な情緒の世界の中に生活するために費さなければならぬ一切のものは、自分で麥を作つて、しかも自分の子供のための十分なパンをも得られない、それな憐な人々の口から、もぎ取らなければならぬのだ。とにかく、何人かの口から、それをもぎ取らなければならないのだ。」（二九三頁）

七

哲學的方面に於ける、大杉君の主張は、抽象的分析的な科學派の主知主義主理主義と、「感情や本能や傾向や欲望や又情憬を尙ふ」所の、プラグマチズムの主意主義行爲主義との融合統一に存してゐたらしい。(勞働運動とプラグマティズム)彼の考ふる所によれば「此の主知的主理的眞實の中には、本能や意志や感情や情憬を無視した所に、全的人間味が欠け、又不完全な人間の知力や理性を過重した所に、必然の誤謬があつた。從つて所謂社會的法則や眞實は理屈攻めのもので、實際に於て人間離れのした、又實際の生活と適合しない場合が多かつた。從つて彼は「此缺點を補ひ此の誤謬を正さんがために等しく觀察と實驗とに據る科學的方法を用ひつつ、唯だその觀察や實驗を知力や理性の上よりも寧ろ本能や行爲の上に基づかせたプラグマティズム、即ち固有の意味の實際主義」によリ强い共鳴を感じたやうである。

彼は此の同じ考へ方を、更に社會科學の方へ進めて行つた。從來の社會的法則若くは眞理が、多くの場合虛僞であり又容易にその眞僞が判斷されないのは、一つには社會科學の上記の如き研究方法の缺點によるが、更により多く、社會の階級的構成、即ち征服階級と被征服階級との對立の事實に起因してゐる。

即ち社會科學者の多くが征服階級に屬し、若しくは之に奉仕してゐることのために、彼等の提唱する所の、所謂社會的眞理は被征服階級の生活事實に適合しないのである。勞働運動、更に廣く云へば、一切の民衆運動は、此の征服階級の所謂社會的眞理に對する生活上からの、最初は無意識的の反逆であつた。そしてプラグマチズムは、社會の此の階級的區別を少しも考察の中に入れない、唯主知的の所謂社會的眞理に對する、方法上の最初からの意識的の、反逆であつた。玆に兩者の照應がある。そしてシンデイカリズムは勞働運動に於ける此のプラグマティズムの最もよく具體化した權化

である。

シンディカリズムは無知なる勞働者の日常生活の間に、其の日々の資本家との鬪爭の間に、殆んど自然に出來上つた運動であり、理論である。彼等は長い努力の間に、種々なる社會學說に賴つて悉く失敗した結果、一切の出來合ひの社會的理論を斥けて、唯だ彼等自らの經驗にのみ賴ることとなつた。ヨリよく生きんとする意志から、其の障碍となるべき一切の事物にぶつかつて、其の結果の中から、彼等自身に利益のあるものを選び出した。彼等の運動方法も、彼等の團體組織も、彼等の將來の理想も、彼等の道德も、哲學も、すべて理屈でこね上げたのではなくて、唯だ有らゆる事物に打つかつて見て、其の結果として獲得したものである。(勞働運動とプラグマテイズム)

進んで、彼は、此の社會運動に於ける實際的方法によつて形成せられたシンディカリズムの最後の結論が、之れと全く違つた科學的方法によつて形成された無政府主義の結論と、略ぼ相合致した、ことを興味を以て指摘した。そして彼は、「人間の本能や感情や意志や憧憬やを無視する、又社會の階級的分離を無視する、所謂主知主理的の學派でない」所の「觀察と實驗とによつて、幾多の事實を歸納しつつ、又人間を全人的に取扱ひつつ、社會的眞理を求めんとする「學派である」所の無政府主義と「單にヨリ善く生きんとする活潑な本能の衝動から有らゆる社會事物に打つかつて來た結果」のシンディカリズムとの融合の可能を信じた。此のアナルコ・シンディカリズムこそ彼の社會思想の根本となつたものである。

八

、彼の主意的見地から、大杉君は、その社會學的研究に於て、『生』『生活本能』『生の要求』『生の擴充『生の鬪爭』と言ふや

うな事實をその起點となしてゐる。即ち、個體及種族の生命が、絶えず自己を生長擴充させやうとする要求即ち生活本能と、此の衝動に促されて起る行爲とが彼の出發點である。そして此の客觀的事實は、個體の主觀にとつては「自由」の要求である。換言すれば、自己の上に何等の支配者を認めず、自ら自己の主人たらんとする要求、自己が自己の運命の決定者たらんとするの要求、人間が自主の人格者たらんとするの要求である。この見地から彼は、「勞働運動は、勞働者の自己獲得運動、自由自治的生活獲得運動、人間運動、人格運動である」と言ふた。

然るに『生』の要求は、その發展の過程に於て、種々の障害にぶつかる。玆に『生の鬪爭』が始まる。此の自然と外敵とに對する生存鬪爭に於て、高等なる生物及び人類はその最も有効なる鬪爭手段として、相互扶助の方法を發明した。共存のためにする自由の組織である所の相互扶助は、實に人類否、生物界の傳統である。

併し、間もなく人類史に一つの悲しむべき事實が移入された。それは『征服の事實』である。即ち、社會の階級的分裂の發生である。これ以來、社會は征服者と被征服者との二階級に分裂し、被征服者は征服者のために掠取掠奪されるやうになつた。相互扶助の組織でさへも屢々此の征服者によつて、自己の地位の擁護と被征服者掠取との手段に濫用されるやうになつた。斯様にして被征服者階級の生活は壓迫され、その生の要求は無視せられた。玆に於てその生長を壓迫された階級の人々に『生の悩み』とその反抗とが起る。さうして現代は此の『征服の事實』の頂上に達してゐる。此の絶えざる擴充を求むる『生の要求』と、之れを阻害せんとする社會的事實即ち『征服の事實』との對立と發展とに、大杉君の社會的思索の核心が存してゐる、と私は考へる。

大杉君が『生の悩み』や『生の要求』を高唱しつつ、内省と觀照とのみに沈潜した個人主義的思索家を警めて、その本源たる征服事實を正視し、その變革への努力を奬めたことは、私の先に擧げた所である。彼は其の際此の『征服の事

實』に關する社會的知識の必要を力說した。彼は人間の歷史が征服の事實の連續であることを云ふてゐる。征服は鬪爭の結果であるから、それはまた人間の歷史が鬪爭の歷史であると言ふと同じである。彼はグンプロウツチに倣ひ、此の鬪爭は初め人種的鬪爭であり、後に階級的鬪爭となつたと考へたらしい。(征服の事實) そして彼は、其後に於ける征服の事實が私有財產制度を起點として發展して居り、現代に於てはそれが資本家勞働者の階級對立に於て、そのクライマックスに達してゐるとなした。彼はこのことをエンゲルスの『社會主義發展史論』を援用して說明したこともある。(現代社會觀) 又彼は資本家制度の中に社會主義が成熟するためには一定の工業技術的發達が必要であり、社會主義は十分に發達した且つ不斷に進步して行く生產力の上にのみ基く一經濟組織であることを認めた。(生の創造) 更に、彼は政治的制度は常に社會の經濟的制度の忠實なる發想であると言ひ、(個人主義者と政治運動) 又、此の『征服の事實』即ち社會の階級的構成が個人の思想、勿論感情にも、更に本能否生理狀態其者にでさへも、甚大の影響を與へてゐることを主張した。(自我の離脫)

此等の漠然たる思想の要旨は、言ふまでもなくマルクスの唯物史觀に該當するものである。果してさうであれば、此の『征服の事實』の社會學的研究は、史的には生產力の發展即ち經濟史の根本研究であり、現在に於ては、資本主義經濟組織の解剖とその發展法則の闡明であらねばならぬ。『征服の事實』と『生活本能』の要求とを對置して、前者の不合理を宣言し、若しくは後者の反逆を指示するだけでは、新運動の理論的基礎、新社會到來の保證としては、頗る不充分である。資本主義社會を解剖し、その內在的矛盾と不合理とを指摘し、その發展が遂にそれ自身の崩壞に導くことを學問的に論證しなければならぬ筈だと私は考へる。そして之れが唯物史觀の任務である。

然るに私にとつては極めて遺憾なことは、大杉君の『征服の事實』の研究は彼自の指示した處の此の方面に、深く突き

進むことがなかつた。經濟學者ではなく、主として社會學者であつた大杉君にとつては、求むる者の無理かも知れぬが。彼は或る所では、「僕は歴史を解釋する主要なる一導線として所謂唯物史觀說を懷いてゐる」と明言してゐるにも拘らず（『社會主義的個人主義』一一七頁）他の處では、「社會主義は此の所謂物質的史觀に立脚して、社會進化の要素として經濟的行程、工業技術的行程を過大視する結果、彼の必然から自由への飛躍を、外的强迫から內的發意への創造を、單に到着點としてのみ强調して等しく亦之を出發點としなければならぬことを忘れた」（『生の鬪爭』一五五頁）ことに不滿を懷き、社會進歩の行爲を、必要的の又は機械的のものと見る。マルクス及その祖述者の「宿命論」的唯物史觀を以て「恐ろしい汎理論」「恐ろしい機械的定命論」だと呼んでゐる。（『勞働運動の哲學』八一―八三頁『生の鬪爭』一五四頁）他方に於て、彼は個人的社會主義者ラヴロフの主觀的歷史觀を、或程度の共鳴を以て編みて更に、彼は人間の生活本能、生活意思及之に基づく行爲の創造力を非常に信任する處から、生活本能の轉化的形式であり、生の鬪爭に於ける生活意思の有力な武器であるべき客觀的社會眞理に對してすら、頗る之を輕視すると云ふ他の經濟にまで至つてゐる。彼は言ふ「僕は精神が好きだ。しかし其の精神が理想化されると大がい厭やになる。理想化と言ふ行爲の間に、多くは社會的現實との調和、事大的妥協があるからだ。まやかしがあるからだ。…社會主義も大嫌ひだ。無政府主義もどうかすると厭になる。僕の一番好きなのは人間の盲目的行爲だ。精神其儘の爆發だ」（『漫文漫畫』一六三―四頁）彼は更に言ふ。「其の氣分が理論を生むのだ。…理論はいつでも作りかへられる。しかし氣分はさう容易に作りかへられるものでない。此の點では理論よりも氣分が大事だ」と。（『無政府主義者の見たロシヤ』一四九頁）併し、唯物史觀は精神を理屈で絞め殺さうとするのでもなく、氣分を理論で壓伏しようとするのでもない。唯、斯の如き精神や氣分が如何なる經濟條件の下に發生し、前者の變化發展が如何に後者の變化によつて制約されてゐるかを說明せんとするものである。恐らく大杉君も亦精神や氣分を

實』に關する社會的知識の必要を力說した。彼は人間の歴史が征服の事實の連續であることを云ふてゐる。征服は鬪爭の結果であるから、それはまた人間の歴史が鬪爭の歴史であると言ふと同じである。彼はグンプロウヰッチに倣ひ、此の鬪爭は初め人種的鬪爭であり、後に階級的鬪爭となつたと考へたらしい。（征服の事實）そして彼は、其後に於ける征服の事實が私有財產制度を起點として發展して居り、現代に於てはそれが資本家勞働者の階級對立に於て、そのクライマックスに達してゐるとなした。彼はこのことをエンゲルスの『社會主義發展史論』を援用して說明したこともある。（現代社會觀）又彼は資本家制度の中に社會主義が成熟するためには一定の工業技術的發達が必要であり、社會主義は十分に發達した且つ不斷に進步して行く生產力の上にのみ基く一經濟組織であることを認めた。（生の創造）更に、彼は政治的制度は常に社會の經濟的制度の忠實なる發想であると言ひ、（個人主義者と政治運動）又、此の『征服の事實』即ち社會の階級的構成が個人の思想、勿論感情にも、更に本能否生理狀態其者にでさへも、甚大の影響を與へてゐることを主張した。（自我の離脫）

此等の漠然たる思想の要旨は、言ふまでもなくマルクスの唯物史觀に該當するものである。果してさうであれば、此の『征服の事實』の社會學的研究は、史的には生產力の發展即ち經濟史の根本研究であり、現在に於ては、資本主義經濟組織の解剖とその發展法則の闡明であらねばならぬ。『征服の事實』と『生活本能』の要求とを對置して、前者の不合理を宣言し、若しくは後者の反逆を指示するだけでは、新運動の理論的基礎、新社會到來の保證としては、頗る不充分である。資本主義社會を解剖し、その內在的矛盾と不合理とを指摘し、その發展が遂にそれ自身の崩壞に導くことを學問的に論證しなければならぬ筈だと私は考へる。そして之れが唯物史觀の任務である。

然るに私にとつては極めて遺憾なことは、大杉君の『征服の事實』の研究は彼自の指示した處の此の方面に、深く突き

進むことがなかつた。經濟學者ではなく、主として社會學者であつた大杉君にとつては、求むる者の無理かも知れぬが。彼は或る所では、「僕は歷史を解釋する主要なる一導線として所謂唯物史觀說を懷いてゐる」と明言してゐるにも拘らず（社會主義的個人主義』一一七頁）他の處では、「社會主義は此の所謂物質的史觀に立脚して、社會進化の要素として經濟的行程、工業技術的行程を過大視する結果、彼の必然から自由への飛躍を、外的强迫から內的發意への創造を、單に到着點としてのみ强調して等しく亦之を出發點としなければならぬことを忘れた」（『生の鬪爭』一五五頁）ことに不滿を懷き、社會進步の行爲を、必要的の又は機械的のものと見る．マルクス及その祖述者の「宿命論」的唯物史觀を以て「恐ろしい汎理論」「恐ろしい機械的定命論」だと呼んでゐる。（勞働運動の哲學」八一―八三頁『生の鬪爭』一五四頁）他方に於て、彼は個人的社會主義者ラヴロフの主觀的歷史觀を、或程度の共鳴を以て編みて更に、彼は人間の生活本能、生活意思及之に基づく行爲の創造力を非常に信任する處から、生活本能の轉化的形式であり、生の鬪爭に於ける生活意思の有力な武器であるべき客觀的社會眞理に對してすら、頗る之を輕視すると云ふ他の經濟にまで至つてゐる，彼は言ふ「僕は精神が好きだ。しかし其の精神が理想化されると大がい厭やになる。理想化と言ふ行爲の間に、多くは社會的現實との調和、事大的妥協があるからだ。まやかしがあるからだ。…社會主義も大嫌ひだ。無政府主義もどうかすると厭になる。僕の一番好きなのは人間の盲目的行爲だ。精神其儘の爆發だ」（『漫文漫畫』一六三―四頁）彼は更に言ふ。「其の氣分が理論を生むのだ。…理論はいつでも作りかへられる。しかし氣分はさう容易に作りかへられるものでない。此の點では理論よりも氣分が大事だ」と。（『無政府主義者の見たロシヤ』一四九頁）併し、唯物史觀は精神を理屈で絞め殺さうとするのでもなく、氣分を理論で壓伏しようとするのでもない。唯、斯の如き精神や氣分が如何なる經濟條件の下に發生し、前者の變化發展が如何に後者の變化によつて制約されてゐるかを說明せんとするものである。恐らく大杉君も亦精神や氣分を

强調することによつて、社會理論や社會理想を全然無視若しくは輕視する積りではないであらう。彼の云はんとする所は「觀念や理想は之れ自身旣に大きな力であり、光である。しかし其の力や光も、自分で築きあげて來た現實の地上から離れれば離れるほど、それだけ弱まつて行く。卽ち、其の力や光は、其の本當の强さを保つためには、自分で一字一字、一行一行づつ書いて來た其者から放たれたものでなければならない」（『正義を求むる心』二三〇頁）と言ふのだらう。

九

大杉君の社會思想は無政府主義から發展して來た。此の方面に於ては、彼はルクリユス、スティルナア、バクウニン其他より多くの感化影響を受けてゐるが、彼の思想に最も大なる感化を及ぼしたものは、彼が長い間その魅惑に捕へられたと言ふクロポトキンである。大杉君は社會運動に身を投ずると間もなく、無政府主義の研究を始めた。そして明治四十年にクポトロキンの『青年に訴ふ』を日刊『平民』に譯載して、秩序紊亂罪として三ケ月の刑に處せられたのを手始めに、彼はクロポトキンの著書『革命家の思出』『相互扶助論』及『革命の研究』を飜譯し、且つ彼の所論を要約し紹介した『クロポトキン研究』『近代科學の傾向』（『生の鬪爭』の中）を出してゐる。併し、此等の譯著はその頗る重要なものにも拘らず、『革命の研究』と『青年に訴ふ』を除いては、クロポトキン本來の無政府共產主義の主張に直接關連するものではなく、むしろその個人的及社會科學的背景をなすものに過ぎない。若しそれが自由の世界であつたなら、彼が恐らくクロポトキンの社會學的著作目錄中最後に譯出したであらう所の著書である。此の一事を以てしても、言論の自由なき我國に於ける社會的研究が如何に困難なるかの一事がよくわかると思ふ。私も亦今此處に彼に許されなかつた範圍への突入と言ふ冒險を試みることはすまい。

クロポトキンは人も知る如く、主として彼の『謀反人の言葉』に於て、強權主義の表現たる國家とその法律及裁判制度と資本主義の土台たる私有財産と自由競争の制度と、その政治的反映なる代議制度とに對して痛烈なる批評を加へ、彼の『パンの略取』に於て、來るべき理想社會は、人々が能力に應じて働き、必要に應じて消費する所の××××××××××××××××××であり、同時にそれは、何等の強權の存せざる自由的聯合の組織であることを明かにすると共に、斯の如き社會は、部分社會として、現に今日の社會内に嚴存して且つ益々發展しつつあること、並に現在の人間性と生産力との下に於て既に、此の無政府共産の社會の實現の可能なることを指摘したのである。

併し現在の社會が將來の社會に轉化する道行きに關してはクロポトキン自身すらも未だ當時に於ては、はつきりした具體的觀念を持つてゐなかつたやうだ。勿論、彼は此の社會的變革は市民的議會による政治的活動ではなしに、××××××××によらなければならぬことを説き又『革命の研究』や『革命的政府』に於て、從來の革命の失敗の原因を指摘し、例へば、將來の革命に際しては民衆は政治的野心家の手先に使はれないために、來るべき新社會に關するハツキリした觀念を持つてゐなければならぬこと、又將來の革命は、よし、それが無産者のであつても、決して民衆の自由と發意とを絞殺する所の、獨裁の形を採つてはならぬことを主張してはゐる。併し、來るべき解放運動の採るべき積極的具體的組織に就いては何等的確な觀念を持つてゐなかつた。それは單にクロポトキンだけではない、一般に無政府主義は此の欠點の故に久しく惱んでゐたのである。

此の時、フランスの勞働民衆は其の階級鬪爭の過程に於て、　　　　　とする、生産者の自由聯合の組織を造り出した。そして多くの無政府主義者たちは此のシイデイカリズムに於て、無政府主義の實行上の適切なる補足を見出した。クロポトキンは兩者の近縁に就いて言ふてゐる「吾々、無政府主義者にとつては此の

運動は新しいものではない。吾々は此の傾向が國際勞働者協會の綱領中に定式化された時に、之を歡迎したものである」そして今日シンディカリズムの主要目標をなしてゐる其等の思想は、吾々が當初よりその此上なき重要さを認識し來つた所である」と。（シンディカリズムと無政府主義）斯樣にして、無政府主義は哲學であり、理想であり、シンディカリズムは實踐であり實現手段であると言ふ、此の兩者の結び付きが、多くの無政府主義者及シンディカリストによつて遵奉さるるに至つた。

一〇

大杉君も亦無政府主義に續いてシンディカリズムの研究に沒頭した。そして彼が實際派と科學派の調和の意味に於て、兩者の調和を主張したことは既述の通りである。

當時、我國に於てはシンディカリズムの研究はかなりの流行となつた。併し、それは一方に於ては、ソレル又はゾムバルトの所說を通して、マルキシズムの革命的修正學派であると解せられ、他方では、またベルグソンの創造的進化論に關聯して、一思想論として興味を持たれた。此の時に方つて、シンディカリズムは勞働運動に關係する知識者の提唱又は指導によることなく無學なる勞働民衆自身が彼等の解放鬪爭に於て自ら生成したる民衆の創造物であること、マルキシズムではなしに、無政府主義との思想的近緣を持てゐることを强調したのは、我が國のシンディカリズム研究上に於ける大杉君の大なる功績である。

彼は特にCGTの組織を研究し、それが個人の自由を尊重し、之を出發點とする自由の組織であることに心を惹かれた。此のCGTは、第一に個人、次に「勞働組合、次に地方同盟、若くは全國同盟、そして最後に總同盟と言ふやう

に、下から上に、又單純から複雜に、組織されたものである。そして其組織の各段毎にも、又其の各段内にも、常に自由なる個人的發意が最も大なる役目を爲してゐる。」即ち玆には各個の個人の人格が强調され、各個の組合の人格が强調され、其の綜合によつて、强力なる戰闘力と將來社會の萠芽とが實現されるのである。即ちCGTの組織は「數人が生產と消費との經濟的關係の上に協力して、其の生活の基礎を固めた上で、各人の自由自主なる發達を期する」ものであつて、それは無政府主義の根本原理と一致するものである。(勞働運動と個人主義)

併しシンディカリズムが大杉君を惹き付けたのには更に他の理由がある。自己の中に生活本能と反抗本能の躍動を感じつつあつた彼は、シンディカリズムに於て、「勞働者の有する强烈なる生活本能と反抗本能と及び其等の本能が行爲となつた結果の、偉大なる個人的及び社會的創造力に打たれ」て之に共鳴した。シンディカリズムの本質は不斷の創造的活動にある。そしてそれは不斷の闘爭によつて實現される。此處にあつては創造即ち闘爭である。彼は自由組織としてのシンディカリズムと同樣、此の闘爭手段としてのシンディカリズムを說述したかつたであらう。併し、それは彼に許されざる所であつた。私は賀川君の勞働運動に於ける無抵抗主義を批評する場合に、彼の用ゐた彼の言葉を引用して、此の方面に於ける彼の思想を暗示しよう。

「勞働者は闘爭其事を目的とするものでもなければ、又强い對手方の人間を撲滅しようとするものでもない。自分の生長のために闘ふのだ。其の障礙物を撲滅するのだ。そして此の障礙の撲滅のために、自分も救はれ、又同時に其障礙物の代表者である對手方も救はれるのだ」(「正義を求める心」二五五頁)

更に、大杉君をしてシンディカリズムに趣かせた他の原因は、當時の我國の社會狀態にあると思ふ。第一に、當時我國の社會運動は未だ充分勞働運動と結びついてゐなかつた。その代辯者は知識階級者か又は個々の非集團的勞働者であつ

た。從つて彼等の見解は直接我國の勞働運動の實狀に制約されることがなかつた。そして政府の激しい壓迫は益々彼等を左方に追ひやつた。そこで實際運動の現實的基礎に立たなかつた彼等は、ぐんぐん急進的意味に於て、感情的に潔癖となり理論上に徹底した。

十九世紀末以來穩和化し來つた社會民主主義も勞働組合主義もも早彼等に對する魅力を失ふた。而して彼等は更に新しい光と力とを渇望した。丁度此の時、歐洲の一角に、革命的傳統を繼承して、勞働運動に一生面を開いたのがシンデイカリズムの運動であつた。我國の社會運動の左黨は競ふて此の新なる思想に趨いたのも尤もである。なほ當時我國に於ては普通選擧の希望極めて薄く、從つて勞働者の政治運動が殆んど絶望的であつたことも、民衆をしてシンデイカリズムの政治否定論に共鳴せしめる一要素であつたに違ひない。更に、當時に於ける組織勞働者の數が極めて少數であつて、その組合が殆んど何等の物質的資力を持たなかつたことも亦、自覺的な少數者の英雄的鬪爭に於て勞働者解放の曙光を認め、組合の財政的充實と頭數の多衆よりも、その革命的精神と行動とに組合の精華を認めた所の、シンデイカリズムを彼等に首肯し安からしめた。

斯様にして、我が大杉君は理論上に於ても、實行上に於ても、一個のシンデイカリストとなつたのである。

二

大杉君は彼の研究主張の歸結の命ずるやうにアナルコ・シンディカリストとして實際的社會運動に這入つた。彼の思想の影響は、非友愛會系の戰鬪的勞働組合運動によつて具體化され繼承されてゐる。同時に、彼は彼の得た此の社會思想、即ちアナルコ・シンディカリズムの立場から我國に於ける勞働運動及社會思潮を批評した。此の批評とその影響と

は、我國の勞働運動の實際には、極めて重要な關係を持つたものであるが、理論的見地よりすれば、特に獨立の興味を持つものではない。既に、アナルコ・シンディカリズムの中に當然含まれたものであり、それより當然に演繹され得るものである。換言すれば、此の方面に於ける彼の議論は、我國の社會運動の發展に伴ふて起つた個々の思想上及實際上の問題に對する、アナルコ・シンディカリズムの理論の實際的適用である。此の意味に於て、私は此の方向に於ける大杉君の社會思想の發展を、簡單に通覽して、思つたよりも長くなつた私の此の敍述の終りに急ぎたい。

第一は、議會運動、從つて普選運動又デモクラシイに對する彼の批評である。若し今日の國家が階級國家であり、此の國家内に於ける階級間の勢力關係を政治的であると解すれば、無政府主義は勿論此の意味の政治否定論ではない。それは現今の市民的代議制度を肯定し選擧人の投票を爭奪し、その多數を制することによつて、平和の裡に合法的に新社會に移遷し行くと言ふ議會主義と、之に基く政治運動を否認するのである。今日の代議制度は市民的産物である。それは無産民衆に自由と創造の機會を與へ得ないのみならず、之れを妨げさへする。議會を通しての自由の獲得は、錯覺であつて、實は議會外の運動によつて民衆が直接に克服したる權利の形式的承認に過ぎない。代議制度は資本家社會の上建築である。社會運動の使命は、此の資本家社會の土臺其者を改造するのであるから、吾々の努力の對象は此の土臺其者に向けられねばならぬ。即ち、吾々の運動は經濟的領域に於ける資本家との鬪爭と此の領域に於ける生産者の合理的新組織創造の努力と、即ち××××・×××でなければならぬ。此の意味から、彼は社會主義者の選擧運動への參加を批難し(個人主義者と政治運動)更にデモクラシイ、普選運動、就中、勞働組合の普選運動に鋭い批評をむけた。此の議論は最近に至るまで我國に於ける殆んど凡ての戰鬪的勞働組合の基調となつてゐた。

第二は、勞働運動と知識階級との關係に關する議論である。我國の勞働運動が新機運に際會し、世間でもてはやされ

るやうになると共に、多くの知識階級者が勞働運動に這入つて來た。のみならず、彼等は、屢々彼等の優越なる知識によつて無知なる勞働者の運動を指導すべき使命を持つてゐるとさへ揚言した。そこで、勞働民衆の生活本能の創造力を強調する大杉君は、斷乎として、此の傾向に反對した。

無政府主義は半ば知識者の運動であつた。從つて知識階級者共者に對する反感は極めて少く、唯、勞働運動を利用せんとする煽動的政治家に對して鋭い反感を向けた。然るにシンディカリズムは此の煽動政治家に對する反感を擴張して、勞働運動に於ける一般知識階級者の排斥とたした。大杉君も亦此の見地に立つた。大杉君は云ふまでもなく、勞働運動を他の目的に利用せんとする不誠意なる知識階級者を完膚なく糾彈した。のみならず、彼は、知識階級共者が大體に於て支配階級の思想的武器であると言ふ點から稀に正しい認識に立つ場合にも、その有閑階級である所から、勞働階級の感情氣分に觸れ難いと言ふ點で、知識階級共者が勞働運動に適しないと言ふ考を持つてゐたやうだ。そしてそのまた奥には彼の主意說の見地から、生活意思、生活本能の創造力を重要視し、理論は勿論知識共者の價値を輕視する思想が背景をなしてゐるやうだ。

知識は生活意思の道具である、併し複雜なる社會的條件の上に於ける生活意思の擴充は、その赤裸の行動よりも、適切な知識の武器で裝はれて遂行された方がヨリ有効ではあるまいか。故に、問題は知識や理論の否定ではなしに、其種類の如何に係る。又知識階級が階級として革命的であり得ぬことも無論である。併しこれは個々の知識階級者に包括的には適用できない。云ふまでもなく、野心を持つた勞働運動への闖入者は用捨なく擊退されねばならない。また、知的優越の高處に立つて自己の理想理論の押賣りをやり、以て勞働運動を指導せんとする、身のほど知らずの知識者の傲慢も亦遠慮なくぶち壞されなければならない。併し、誠意のある、自分の正當な地位を自覺した、正しい社會的知識を

持つた知識者の協動は、殊に初期の勞働運動にとつては、その健全なる發達に欠ぐべからざる一大要素である。それは、過去の歴史が之を裏書してゐる。マルクスやエンゲルスやバクウニンやクロポトキンや近くは我が大杉君のことを考へて見ればよい。むしろ大杉君の議論の重點は以上の前提の後に、彼自身の言ふた通り「勞働運動は勞働者の專有物ではない、知識階級がそれに加はるのに、何んの差支のあらう筈もない。しかし勞働運動の主體はやはり勞働者でなければならぬ」（『正義を求むる心』二四〇頁）と言ふことにある、と私は考へる。

第三には、勞働組合運動の本質、使命、組織等に關する彼の一聯の議論がある。彼は勞働組合の目的を賃銀增加と勞働時間短縮に局限しようとする俗論に反對し、その眞使命は勞働者の賃銀奴隷よりの解放、即ちその自主自由の獲得運動でなければならぬことを力説した。彼に從へば勞働組合は、それ自身が勞働者の自主自治的能力の益々充實して行かうとする表現であると共に、外に對しては、其の能力の益々擴大して行かうとする機關であり、そして同時に又斯くして勞働者が自ら創り出して行かうとする將來社會の一萌芽であらねばならぬ。（勞働運動の精神）更に、彼は此の勞働組合の內容組織の完備が組合の救濟施設と罷業基金の充實にあるとの通説に反對した、「組合員の物質的利益のみを謀る乞食根性の滿足を計ることが組合の完備ではない。勞働組合のソリダリテの精神は此の物質的互助共濟よりももつと深い意味を以てゐる。それは鬪爭によつて生ずる階級的連帶心である。實際にも、基金なしでも資本家と戰つて之に勝てる事實がある。そして吾々は此の戰法を編み出さねばならぬ、と言ふてゐる。彼は勿論サボタージュの名によつて總括されてゐるシンディカリストの主張する、特殊の消極的積極的鬪爭方法を暗示してゐるのである。更に玆には、組合運動に於ける自覺せる少數戰士の英雄的なる『生の飛躍』の創造力に對する彼の信仰がある。併し、大杉君の意味は、勞働組合の物的資力の充實への發達を無條件に否認することではあるまい。それが鬪爭精神の犠牲に於てであつてはな

らぬと言ふのだらう。組合の外的膨脹に伴ふて、愈々その階級鬪爭的精神を涵養して行かねばならぬことを指摘したのである。最後に、大杉君は、勞働組合の聯合組織は各個組合の自主權を認むる自由聯合であらねばならぬことを主張した。それは大阪に開かれて、遂に物別れに終つた所の『全國勞働組合聯合創立大會』に關聯してである。其處では勞働組合の戰鬪能力を增進するに格好なる全國的組織に關して、友愛會側の民主的中央集權論と非友愛會側の自由聯合論と、前者の『ボルシェヰキ的組合帝國主義』と後者の『無政府シンヂカリスト的組合個人主義』との激烈な衝突があつた。私は今此の議論に立入るつもりはない。唯、私は、大杉君の持說の如く、若し我國の組合運動が、現實としつくり一致しない社會學說――それがボルシェヰキズムであれシンディカリズムであれ――の固定觀念に煩はされなかつたら、實際の上に適切な聯合組織を創造し得たのではないかと言ふ私の疑念を表明するに留めて置く。

第四は、ボルシエヰキ革命に對する大杉君の批評である。ボルシエヰズムは無政府主義が初めより反對し來つた强權的社會主義の最も典型的な體現である。無政府主義者は、恐らく反動階級に對する共同の鬪爭の續く間、或はその反對を隱忍したかも知れぬ。併し結局、兩者の衝突は避け難いものである。そして我が大杉君も亦無政府主義思想の代表者として、最も激烈に專制的恐怖政治なるボルシエヰキの獨裁制を攻擊し初めた。(『無政府主義者の見たロシヤ』『二人の革命家』中のソヰエト政府と無政府主義、『日本脫出記』中の無政對主義者) 彼はソヰエト政府の下に於ける無政府主義迫害の事實を擧げ、勞農政府の暴政が勞働者農民の自由と創意とを梗塞することによつて、革命の進行を停止したことを指摘し、無政府主義的シンデイカリスト的意味に於てボルシエヰキ革命の墮落を救はんとした所のウクライナのマフノヰチナの運動と過激派內に於ける所謂勞働反對派の運動を紹介してゐる。彼は彼の所論を要約して、「ケレンスキイの民主政府を倒した十月革命は、主として『革命は如何にして爲されねばならないか』を僕等に敎へた。そしてそれ以來の謂はゆるボルシエヰキ革命の進行は、主として『革命は如何にして爲されてはいけないか』を僕等に敎へた」。(『無政府主義者の見たロシヤ』二頁)と言つてゐる。此の場合にも亦私は今彼の議論の內容に對してボレミジイレンする考へはな

い。唯、大杉君が彼の見地から、ボルシエヰキ革命の形態はロシヤ並に世界の經濟的社會的條件によつて決定されるよりは、むしろボルシエヰキ等の自由意思によつて決定されたものゝやうに考へ、從つてロシヤ革命の經濟的社會的政治的條件を明かにするとよりも、ボルシエヰキの暴政に對する道德的責任を糾彈するとに急であつた、ことを指摘して置かう。

我國に於ける勞働運動の發展に際して起り來つた實際的諸問題に對する彼の諸評論の歸着する所は、勞働運動に於ける自由の精神と改革的熱情との强調と、「勞働者階級の解放は結局勞働者階級の仕事であらねばならぬ」と言ふ勞働運動の傳統の闡明とであつた。此等の精神に基づいて、彼は、我國の幼稚なりし勞働運動が種々の侵入者によつて傷はれ迷はされんとした危機に際して、よく此の外敵を斥けて我が國勞働運動の健全なる發達を擁護した。吾々は今日論爭の個々の場合に於て彼が走つた戰略上の極端に追隨する必要は毫もない。又過去に於けるそれぞれの事情の下に達せられた彼の結論を、今日其儘に繰返すことは、むしろ彼のプラグマチックな精神に反する。要は我國の勞働階級が、多くの社會思想家と同樣に、大杉君の勞働運動への遺産である所の、自由の精神と改革的情熱と、そして「勞働者階級の解放は勞働者階級自身の仕事であらねばならぬ」と云ふ思想とをしつかりと把持し、進展止まざる社會的事情に應じて、之れが最大限の實現を謀り行くことである。彼等の解放のために殉じた所の大杉君を眞實に記念する道は、此の外にはない。そして大杉君の精神は此の發展する我國の勞働運動の中に永く生きるであらう。私は嘗てクララ・ツエトンキンが同じく反動的凶手に斃れたローザ・ルクセンブルヒとカアル・リイプクネヒトの死を惜んだ文の次の一節を引用して私の此の敍述の結びとする。

「暗殺者の手は唯、熱火の如き鬪爭者の死屍のみを斃すことが出來たのだ。被暗殺者は死んではゐない。彼等の心臟は依然として歷史の中に脈動してゐる、そして彼等の精神は、此等の陰欝な、がしかし丸で絶望的ではない、日日を越えて遠く彼方を照してゐる。プロレタリヤは彼等が言葉に於て、行爲に於て、事績に於て、範例に於て、彼に遺した遺産を相續するであらう。被暗殺者は生きてゐる、彼等は將來の勝利者となるであらう。」

講壇のカント・社交のカント・家居のカント

朝永三十郎

一

カントの先批判期の著書、殊に人類學、地文學等に關する著書を見ずして、唯批判書のみを讀んで、其迂餘曲折を極めた概念的思索や晦澁の文章や難解の語句やに苦められた者は恐く、彼れが大學で講じた講義も亦無味、乾燥、難解で嘸かし聽衆を苦めたことであらうと想像するであらう。又た彼れが其の八十年間の生涯を全く獨身で通したこと、其間足一歩も鄕國プロイセンを出でず、而して後年に至てはコエーニツヒスベルクすらも容易に出でなかつたこと、コエーニツヒスベルク市民が彼れの散歩時刻によつて時計を直し得たであらうほど朝は正五時に起き夜は正十時に臥し其間また判で押したやうな生活を毎日毎日繰かへしたこと、此の如き逸話のみを聞きかぢつて詳しく彼れの人物性格を詮索しない者は、恐く彼れをば人間味の少ない、偏屈な、融通のきかない、交際嫌ひの唯の書齋學者であつたように想像するであらう。併し事實は全く之に相違する。

一七六二年より六四年までの間コエーニヒスベルク大學の學生としてカントの講筵に侍したヘルデルがそれより三十年の後に當時彼れがカントより受け得た印象を下のやうに記して居る。

私は私の師たりし一哲學者を識る幸運を享受した。彼は壯年にして尚ほ青年の快活な元氣を有つて居たが、私は尚ほ彼れが老年に至るまで之を失はなかつたことを信ずる。彼れの開いた、考へ深き額には、不壞の晴やかさと喜ばしさとが宿つて居た。意味深き談話は彼れの唇より流れ出でた。諧謔と頓知とは自在に用ゐられた。其講義は最面白き會話であつた。彼れはそのライプニッツ、ヲルフ、バウムガールテン、クルージウス、ヒューム等を批評し、ケプレル、ニュートン、諸物理學者の自然法則を追窮したと同じ才智を以て、又た當時公にせられたルソーの著書、彼れの「エミール」、「エロイース、」並に彼れに知られた自然界に關するあらゆる發見を取上げ、其れを評價し、而して常に必ず再び公平なる自然の知識と人間の道德的價値とに戻つて來た。彼れが其講演と會話とに生氣を與へるところの源泉は人類史、民族史、自然史（博物）、自然科學、數學及び經驗であつた。苟くも知るに値するものにして彼れが無關心なものは無かつた。黨爭や、宗派や、利欲や、名聞やは彼れに取ては眞理の增進と開陳と對して毫末の魅力をも有たなかつた。彼れは自主的思索の必要を勸奬し、人を之に鼓舞した。專制は彼れの心には緣なきものであつた。此人、それを私は最大の感謝と崇敬とを以て名ざす此人こそ、イムマヌエル・カントである。

此記述は種々の意味に於てカントを知るに最重要な材料と見做され、屢引用されて居る。先づ第一に、ヘルデルは學說上批判哲學に對して同情と理解とを欠いで居た思想家である。彼れは多くの場合カントを誤解してこの誤解に基いてカントを攻擊した。殊に此記述を含む Briefe zur Beförderung der Humanität （一七九三―七年）は彼れがカントの「純粹理性批判」を攻擊した Metakritik （一七九九年）「判斷力批判」を攻擊した Kalligone （一八〇〇年）の直

前の著書であるから、此記述は明かにカント哲學に對する同情が極めて薄い時の彼の手に成つて居る。而かも彼れがカントをば三十年後の此時に尙ほ恩師として「最大の感謝」を以て記念するといふことは、彼れの讃辭が決して偏見や盲目的崇拜や誇張やに基いたものでなく、（カントの弟子にして崇拜者たるヤツハマン、ボロースキー、ワジヤンスキーの手に成つた傳記は重要な資料ではあるが、事實の記述は別として、カントに對する其評價判斷には此恐れが幾分無いでもない）學說の相違に依つても歲月の經過に依つても到底磨滅することの出來ぬほど深く受けた眞實の印象を談るものとして、充分に信頼し得るものと考へて差支ないと思ふ。

次に此記述の內容に就て見るに、第一にそれは、カントの先批判的發展に關して內面的理由に基いて推定されて居ることを更に外面より支持する適切な材料を含んで居る。即ち之に依つて吾々は彼れが恰かも此時期に於て、ケプレル、ニユートン、ライプニツツ、ヲルフ、バウムガールテン、クルージウス等に依て試みられた數學的自然科學的思惟と哲學的思惟との結合の結果たる唯理論を繼續して居たこと、而かも亦之と並んでヒユームの經驗論の影響をも受け入れて、批判哲學に於ける唯理經驗兩派の綜合の素地を作りつゝあつたこと、而して更に其實踐哲學の形成に重要な役目を演じたルソーの影響をも受けつゝあつたこと、等を知ることが出來る。尙ほ又た吾々は之に依て、カントの講義が乾燥無味な概念の堆積でなくして、打解けた、活氣あり、機智に富み、而して人類史、民族史、博物及び經驗よりして得たる豐富なる材料に訴へた、直觀的要素に富んだものであつたといふことを知り得るのである。カントが異常な記憶力と直觀力とを有つて居て、その談話が（而して先批判期の著書の或ものも）東西古今に亘つて諸國の地理、人情、風俗、文化に關する具體的材料に富みその描寫の詳細に亙ることに依て座人を驚かしたことは其他にも傳へられて居る。一例を擧ぐれば、彼れは或日ロンドン人の面前に於て談偶ウエストミンスター橋のことに及び、その形、構造、長さ、廣さ、高さ、

各部分の寸法まで事細かに記述したので件の英人はカントが幾年間ロンドンに住したか、又た彼れは特に建築を學んだことがあるかを問ふた、それに對して彼れは建築家でもなく又た一歩もプロイセンの國境を出でたことのないことが答へられた、とヤツハマンは傳へて居る。斯の如き所傳と人類地文語學に關する先批判前期の著書の内容及形式とは實によくヘルデルの記述と一致する。

上述に依て講壇に於けるカントが其批判書を通して想像さるる様な乾燥無味な概念のみを取扱つた單なる書齋學者でなく、身は書齋に閉ぢこもりながら廣く世界の事情に精通し深く人間の性情を解した Welt und Menschenkenner であつたことを知ることが出來るが、然らば私的生活に於けるカントは如何なるものであつたか。

二

カントの異常なる思惟の力が、從來は全然正反對であると考へられて居た經驗論と唯理論との異常なる結合を成遂げたやうに、彼れの異常なる人格は又た深閎なる學識と社交の才といふ普通結付きがたきものを緊密に結付けて居た。カントの批判書のみを通してその人柄を想像して居たものは誰でも、一たび彼れと食卓を共にするに至て其想像を裏切られぬものは無かつたといふ。

彼れは心から社交を好んだ。而して其巧みなる談話によりて同席のあらゆる職業、あらゆる階級の人を魅し之に快感を與へる微妙な呼吸を心得て居た。併し其呼吸は決して技巧の結果でなくして、彼れ自身の人格のおのづからなる發露に外ならなかつた。世界及び人生に關する異常な博識は彼れに無盡藏な話材を供給した。事物の複雜な縺れを解きほぐして其最遠最微の關係を追窮し行き得る其細微なる觀察力は如何に微小な事物の中にも至大な意義を見出さしめ、如何

なる對象をも興味ある話題となすことを得せしめた。其異常な記憶力と直觀力とは事物を抽象化せず生きた姿を以て精細に表現し得せしめた。而して又此能力は彼れの博識と結付いて高遠なる觀念を具體化してあらゆる人に理解せしめ得る力を彼れに與へた。「最微小なものでも一たび彼れの手に渡れば偉大となり、瑣細なものでも重大となる」と共に、極めて高遠なるものが又た彼れの手に依て極めて卑近なものとなつた。而してこの內容に於て豐富にして變化に富んだ彼れの談話に言ふべからざる溫味を與ふるものは彼れの性格の根柢に存する人間愛から沸き出でる Gemütlichkeit であつた。而して更に彼れは此談話をば輕妙にして上品な諧謔に依て賑はすことを忘れなかつたことは、かのヘルデルの記述に依ても推察せられ得るであらう。

併し玆に一の疑問が起るであらう。斯の如き社交的な、溫か味に富んだ彼れの性格と、他面に傳へらるゝ彼れの極端に氣むづかしがりの氣質や規則づくめの生活の仕方やとは如何にして調和し得るであらうか。

彼れの氣むづかしさに就ては幾多の逸話が傳へられて居る。彼れは隣家の庭に飼養されてあつた牡雞の鳴聲に依て度々思索が妨害せらるゝに當惑して、如何なる高價を拂つても之を買ひ受けて此妨害を除去したいと飼主に申込んだが、併し雞の鳴聲が何故に學者の邪魔になるかを解し得なかつた飼主は之に應じなかつたので、カントは遂に轉居したといふ。尙ほ他の住宅では、其處に近き監獄で囚徒が大聲で祈禱をし歌をうたふのをいやがつて、其れを停止せしむることを市長に懇請したといふことがあつた。彼れの規則癖も亦有名である。單に時間を嚴守したのみでなく、例へば「自ら雇はぬ馬車には決して乘るべからず」又は「散策の誘引には何人よりなさるゝとも決して應ずべからず」といふやうな一見何の理由に出でゝ居るか了解し難き多くの規則や格率を設けて嚴重に其生活を律した。此の如き行動や性癖は彼れのペダントリーや標榜好きの道學者氣質を示して居るやうに考へられて前に述べた性格や氣質とは一見調和が困難であ

るやうに思はるゝのである。

併しそれは唯之を外面的に見るからであつて、之をカントの内面的生活に關係せしめ、且つ此氣むづかしさと規則癖とが後期に進むに從つて次第に高じて來たといふ事實と結付けて考ふれば、それは單なるペダントリーや道學者氣質から出たことではなく、却て其處にカントの偉大さが認めらるゝのである。カントの先批判的發展の研究によれば彼れの批判的思想の基礎が半ば出來上つたのは一七〇〇年代の終り頃、即ち彼れの四十五歲の頃のことであつて、それより約十ケ年間は此基礎を更に精錬し確立するに費やされて、終に一七八一年の「純粹理性批判」の著となつて現はれたのである。此時カントは五十七歲に達して居た。即ち彼れは將に六十歲に垂んとする頃に其體系の僅かに一部を發表し得たのである。而して彼れが一七七一年マルクス・ヘルツに送つた書信に『私は今は「感性と理性との限界」といふ標題の下に、感性界に定められた基礎概念と法則との關係并に趣味學、形而上學、道德學の本性を構成するものゝ設計を含むべき著作を幾分より週匝に完成することに從事して居る』と言つて居るところによつて見れば、後に至て三批判書に別たれた認識論、道德論、宗教觀、美學等の批判哲學の諸問題は此時に既に此書の計畫中に含まれて居たことが分る。併し次第に其計畫を實行し行くに連れて數々の難問に逢着し之を克服せんが爲めに約十ケ年を費やして漸く出來上つたものが其計畫の唯一部たる認識論のみであつた。かくて彼れには尙ほ多くの難事業が殘つて居た。恐く彼は屢「日暮れて途遠し」の感に堪えなかつたことであらう。餘されたる彼れの生涯に於て此難事業を成遂げて哲學上の大革新を完成せんが爲めには彼れは、利用せられ得るほどのあらゆる時間と能力とを此事に專注し、思索と著作とに聊かの妨害を與ふるものと雖も之を排除することに努力せねばならなかつた。のみならず、彼れは一方異常に强固なる意志を有すると共に又た社交性に富み且つ極めて人情に脆かつた。（此點に於ても亦彼れの人格は普通結び付き難き反對を結付けて居る。）

其結果として人に不快の感を與へること、殊に親友の好意や親切に背くことを非常に心苦しく感ずる性質を有つて居た。例へば前に引例した散策に關する規則の如きも全く此性質の結果であつた。或日カントは常例の散歩を了えて將さに其住居のある街にはいらんとした時、丁度手づから馬を馭して、小馬車を驅つて來た友人伯爵某に邂逅した。某伯は彼れを見つけて—此人は極めて慇懃な人であつたので—直ちに馬車を停め、降車してカントに挨拶し、且つ散策を共にすることを勸めた。カントは忽ち其慇懃と好意とに動かされて何の思慮もなく其意に從つて同乘してしまつた。併し間もなく、此馬の嘶きと伯爵の叫び聲とは、伯爵が馭馬の術は充分心得て居ると保證するに拘らず、少からず彼れに氣を揉ませた。のみならず伯爵は近郊に暫く車を驅つた後更に市より約一マイルの距離に住ふ友を見舞ふといふことを申出した。カントは禮儀として之を辭することが心苦しく當惑しながら其意に從ひ、其結果不安と不快とに滿たされて全然常例を破つて十時近くに初めて歸宅することが出來た。此事あつて以來彼れは前の二つの規則を立て几帳面に之を實行したのであつた。斯る方法を取ることに依て彼れは、他人に對しても自己の脆き心に對しても、「許して呉れ、私はもう私の理性に約束してしまつたから」と心の中で其ぎごちない行の申譯をすることが出來たのであつた。

尤もカントの規則の凡て若くば多數が斯の如き動機のみより起つたものでは無い。單純に自己の攝生の爲め、若くば其他の薄志弱行を防止する爲めに成立つたものも多かつた。而して一たび斯る規則を立つるが最後、それは彼れに取ては他人に對する約束と同樣絶對に破るべからざるものであつた。此點に於てカントには自他の區別が全然無かつたと言ふことが出來る。カントが他に對する約束に忠實であつたことは有名であり、之に就ても若干の逸話が傳はつて居るが彼れの內部に於ける理性の命令と傾向性や自然的衝動の欲求との關係は毫も人と人との關係に異なるところが無かつた。傾向性としての彼れが理性としての彼れに一たび約束したことは彼れが他人に約束したこと同樣絶對的に不可壞的

であつて、兩者の間には毫の妥協の餘地をも剩さなかつた。此點に於ては彼れは飽くまでも、アンテイノミーの上に立つた彼自身の嚴肅主義の權化であつた。

尤も此規則癖は晩年に及んで變態的に增進して、單に規則が數に於て增加して彼れの生活を極端に硬化せしめたのみならず、其質に於ても寧ろ滑稽に類するものが多くなつて來た。一例を擧ぐれば、彼は何時頃からか此秘結を緩和する爲めに醫師の勸めに從て每日一粒づゝの防秘劑を服用することゝなつて居たが、其後此秘結の度が進んだので又た友人の注意によつて其れを二粒に增した。併しさうすると間もなくカントは、かやうに殖やして行ては終には止め度が無いであらうといふことを氣にし出した。其結果彼れは其藥に就て「生涯二粒以上を服すべからず」といふ規則を立てた。其後彼れは他の藥劑を服用することをも肯んじないので醫師の意見は此持藥の量を增すがよいといふことに一致した、けれども彼は頑としてかの規則を嚴守した。蓋し斯の如き事は頽齡と共に理性が生命を失つて老年の固意地となり、固定した觀念や習慣に打克つ力を失つて唯之に引づられ行くやうになつた結果であつて、道學者氣質の表現であると見るは當らぬと思ふ。最晩年に於ける彼れの固意地は其他のことに就ても現はれ、若干の逸話を殘して居る。

カントは社交界に於ては如何なる人に對しても肩のこるやうな感を與ふる話題と話材とを一切避けんとした。從つて多人數の社交の席に於ては決して純學術的の談話をしなかつた。殊に自己の哲學や哲學的著作を話材にすることを避けた。ヤツハマンの傳ふるところに依れば、彼れはカントが社交の席上に於て甞て彼自身の著書を引用し若くば其內容に言及したことを目擊したことはなかつたといふ。偶學術的問題が話材に入り來ることがあればそれは全然專門的衣裝を擺脫して實際生活に適用せられ全く具體化せられて居た。

カントの交際の範圍は決して狹く且專門のもの、若くは更に廣く學者のみにすらも限られて居なかつた。彼れの交

擇の標準は唯一般的教養ある、人情に厚く、誠實、率直にして表裏なき人といふことであつた。此尺度をもつて測つて彼れは商人、銀行家、軍人、官吏、牧師といふが如きあらゆる職業、あらゆる階級よりして其友人を選んだ。是等の交友との打解けた世間話しが彼れの無上の樂みであつた。彼等とカフエーや定食料理屋に於て玉突や骨牌遊びを樂むこともあつた。

カントの交友中彼れが最親密に交際し且信賴したもので、彼等を戯畫的に代表する人物はグリーンといふ英國商人であつた。グリーンは其學識に依て深くカントに尊敬せられ、其率直にして僞はらざる性格に依てカントの厚き親任を受けて居たが、併し奇癖に富みカント以上の時間嚴守癖の持主として有名であつた。下の如き面白き逸話が傳はつて居る。或夕カントは翌朝八時にグリーンと馬車で散策を共にしやうと約束した。グリーンは斯る時にする何時もの習慣に倣つて七時四十五分に時計を手にして部屋中を歩きまはつた。五十分に帽子を被つた。五十五分に杖を手にし、八時が鳴るや否や馬車の戸を明けて之に乘込み、出かけた。間もなく僅か二分後れて來たカントに途中で出會つたが併し見向きもせず其まゝかけ過ぎた。カントが此奇人と最親密に交際したのは彼れの中年の頃、まだ住宅を有たぬ頃であつたが、此時期に於てカントは殆と毎日グリーンと晩餐を共にし、長き時間を彼れの家で暮した。カントは毎午後グリーンを尋ねると、グリーンは臂掛椅子に眠つて居る。カントは又其傍の椅子に腰掛て沈思に耽る。間もなく又眠入る。次に同じく變人仲間の一人で銀行頭取のルフマンが來る。又腰掛けて眠る。最後に英國の商人でカントの最親友の一人モータービーが定刻に這入つて來て一同を呼び覺す。一同はそれより七時まで樂しき會話に耽る。七時になると一秒も過たず一同退散する。コエーニツヒスベルクの住民が、カント先生がまだ通らないからまだ七時前だらうと言つたのを屢聽いたことがあるとヤツハマンは傳へて居る。

カントは獨身で終つたが、獨身主義者ではなかつた。彼れの獨身は彼れの規則又は格率の結果ではなかつた。唯青壯

年期には生計上の事情の爲めに婚期を後らし、事情が結婚を許すやうになつた時には斷行力が思慮分別の爲めに鈍らされて居たゝめに機を失した結果であつた。ボロースキーの傳ふるところに依れば彼れが知れる範圍丈けに於ても現に二人のカントに相應しい婦人が前後して彼れの心を惹付けたが、併し彼れが決行さへして居たらば必ず成立つべかりし結婚申込みに狐疑躊躇しつゝありし間に、一人は他の地方に轉住し、他の一人は他家へ緣付いてしまつたといふ。但し前後兩期に亘つて、婦人への愛着が彼れの所謂「形而上學への愛着」にけをとされて居たといふことが彼れをして結婚の機會を逸せしむる有力な原因となつて居ることは否定することは出來ぬと思ふ。

婦人との交際はカントは喜んで之をなし、又其興味ある談話を以てよく彼等を喜ばし、彼等も亦カントに接することを喜こんだ。のみならず彼れは婦人との交際を後進に勸奬した。其理由として傳へられて居ることは下の如くである。カントが最忌み嫌つたことは虛僞あり表裏ある人物であつた。誠實と率直とは彼れに取つて最高の德であつた。其故に彼れは高慢な容體ぶつた、已れを眞價以上に見せようとする人物が大嫌であつたが、併し又其反對の、內に尊きものを有つと思ひながら故意に簡素を裝ふて其眞價をかくさんとすることをも非難した。彼れによれば人は自己の有のまゝを露はし示す可きものであつて、故意に眞をかくして人をして判斷に苦しましむるは忌むべき事である。此理由に依つて彼れは氣取屋、伊達者（Gigerl）と共に流行を無視して故意に磊落を裝ふ者をも排斥した。而して此理由に依て彼れは親しき青年に機會が許す限り教養ある婦人と交際することを奬勵した。彼れによれば青年の行儀を上品にし高尙にするには教育ある婦人との交際が唯一の道であつた、とヤツハマンは傳へて居る。

今述べた理由によつてカントは自ら服裝其他身の廻りに細心の注意を拂つた。彼れは「人は流行を無視せんより寧ろ流行に盲從せよ」といふ原則を奉じ、自己の地位、年齡、境遇等を綿密に考慮して綿密に服裝に注意した。コェーニッヒ

スベルクの市民は初め彼れを「美しきマギステル」と呼んだといふ。六十歲代のカントの身形として下の樣に傳へられて居る。小さな三角帽、髮袋の付いた小さな、ブロンド毛の、白粉をぬつた鬘、黑き襟飾、首飾とカフスの付いた上肌衣、綺麗な、普通黑、褐、黃の霜降の切れ地で絹裏の付いた上衣、同じ切れ地の胴衣、及び半洋袴、灰色の絹地の長靴下、銀の掛錢の付いた靴、及び當時尚ほ交際社會に流行して居た帶劍、後に至つて普通の藤杖。當時の流行に從つて上衣、胴衣及び半洋袴は金紐を以て緣取られ、ボタンは金又は絹を以て被はれて居る。以上は晴れ着姿であるが、併しカントは着古した晴れ着を教場に於て用ゐることにして居たから、教場でも亦同樣の服裝であつたことになる。斯くてカントは出來る丈け教養ある社交界の流行に逆らはぬやうにと力めたが、併し彼れは決して流行に盲從はしなかつた。恰かも當時存在した一切の思想を自己の思惟の鎔爐に入れて其獨特の哲學を鑄鎔したやうに、當時行はれた流行を其獨自の好尚に依て批判し同化してカント一流の身形を造り上げたのである。

三

カントは住宅は有つて居たが、嚴密な意味に於ける家庭は一生有たなかつた。而かも其住宅を有つやうになつたのも余程晚年に至つてからであつた。十三歲の時母に別れ、二十二歲の時父を喪ひ、大學在學中にも卒業後にもつぶさに貧苦を味つたが、三十一歲の時にコェーニッヒスベルク大學の私講師となり、此地位に止まること十五年、四十六歲の時正教授に進み、位置の昇進と名聲の高まりしとに比例して生計を徐々に改善されて來たが、併し彼れが住宅の持主となつたのは五十九歲の時、此家で愈世帶を有つ樣になつたのは六十三歲の時であつた。これまでの間、彼れは最初は質素な定食料理屋、後に至つてホテルに於て晝餐を取り、而してそこで常に種々の知人と卓を共にして雜談に耽ることを樂し

みとして居たが、世帶を持つに至つてからは自宅に於て每日小人數の客を招待することゝして居た。招待さるゝ卓友は普通は一人若くば二人であつたが、時には五人、而してそれが最大限度であつた。彼れの食卓と經濟とが許す最大限度は彼れによれば六人であつたからである。その卓友の招待の仕方にカントの細心と遠慮深さとがよく現はれて居る。彼れは幾人かの友人中より招待すべきものを選び出して當日の朝始めて招待の通知をした。即ち義理がたき友が自分の質素な食事の爲めにより手厚き他方の招待を犧牲にすることを恐れて、最早他方の招待の來る恐れのない當日の朝を選んだのであつた。

カントは季節に拘らず每朝必ず五時に起床した。彼れの侍僕は正四時四十五分にカントの寢臺の前に立ち、彼れを呼び覺す。そして主人が起き上るまでは決して其場を去らない。時々カントは起きづらひのでもう暫く寢かして置いてくれるやう侍僕に賴むこともあつたが、併し侍僕は豫てカント自身からかゝる場合には決して讓步してはならぬといふ命令を受けて居るので、強制的にカントを呼び起すのであつた。カントは健康を維持せんが爲めには十時より五時に至るまでの七時間の睡眠を取ることが最善の道であると信じて、老衰の爲め到底此規則に堪えられなくなるまで峻嚴に此規則を守つた。起床後部屋着に着かへて直ちに書齋に行き、そこで二椀の茶と一服の煙草よりなる簡單な朝餐を濟ます、七時までは讀書、著作、又は講義の準備等に費やす。七時に寢室に入り衣服を改めて講義室に入る。九時に又部屋に歸り、部屋着に改めて十二時四十五分まで勉强。ついで晝餐の爲めに又衣服を改めて再び書齋に歸り、正一時に招待客に應接する。一同と直ちに食堂に入り、其處で普通は四時まで、多人數の來客の節には時には六時過ぎまで食卓に殘る。次で大凡一時間、若し好天氣の際であれば稍長く散步。散步は始めの間は所謂「哲學者道」Philosophenweg にときまつて居たが、其處で腰をおろし獨り思索に耽り、重要な思ひ付きがあれば其れを手控へに書き留めるといふやうた

とをして居たのが時々心なき乞食や無遠慮の友人などの追跡の爲めに妨害されることがあるので時々、場處を變へることゝなつた。散歩を濟まして十時までは讀書。十時に就寢。かくてこの日程は季節天候の如何に拘らず嚴守せられる。

家庭のカントに關してはこれ以上記すべき重要なことはない。若し尙ほ何か殘つて居るとすれば之れは晝餐の料理や飮料やの內容、彼れがビールを排斥して赤葡萄を通常飮用したこと、其葡萄酒が四半リーターの小瓶に入れられて各來客の前に一瓶づゝ置かれたといふこと、料理の皿數がいくつであつたといふこと、カントに肉のしやぶり精を皿の上に出して其れを麵麭の皮で蔽ひかくすといふ妙な癖があつたといふこと、老僕ランペとの關係等、等、等と數へ立つれば數限りもないが、之れを記述するは唯「ボスエリズム」に陷るのみである（今までゞも旣に大分之に陷つて居るが）。要するに嚴密な意味に於て家庭を有たなかつたカントの本體は講壇と社交とに於て旣に大部分盡されて居ると言ふが至當であり、而して其事が又たやがて人としてのカントの本體の一部分を構成するのである。



社會運動と政治運動（其一）

——社會政策序論の一節として、殊に勞働黨內閣の成立に連想して——

福田德三

（一）

「生活は運動を意味す。人格生活の運動は、人格性と非人格性との戰鬪である。此戰鬪に於て、人格性とは絕へず又繰返し〳〵非人格性を支配せんとする努力の現はれである。生くる人格たる限り、人格性、非人格性共に全部の征服をなすものではない、兩者は相互に支配し合ひ、征服し合ふものである。人生は一の矛盾であり衝突である、而して然る限り鬪爭であり競爭である。此鬪爭は昔に在つては、小なる組織、小なる共同生活體たる經濟單位——家族經濟、莊園經濟等——の內に於て行はれた。單位と單位との交涉が一般の事となり、其れが組織化せられ、社會化せらるゝに至つた今日に於ては、此鬪爭、此競爭の舞臺は、主として、大なる組織たる經濟卽ち國民經濟——殊に其の流通組織——である。

而して經濟生活の内外を通じて、一切此くの如き鬪爭、此くの如き競爭の行はるゝ舞臺、之れを名けて社會と云ふのである。國民經濟も、社會も、今日に於ては、我々の人格生活の運動たる生活鬪爭、人格性と非人格性との角逐を網羅する共同生活組織たることに至つては、共に一である。之を約して云へば、社會とは、一切の人格鬪爭、生活鬪爭の總名稱であり、國民經濟とは、其の最要部を占むる經濟生活鬪爭の總名稱である。其鬪爭當事者は、兩者の何れに於ても、人格性と非人格性との二者である。

國家は、今日までの人間共同生活に於ては、此の人格性、非人格性兩者間の鬪爭の一切を盛り盡した一の容器であつた。此容器は國家法律と云ふ堅牢なる外圍を有して居る。大抵な鬪爭は、此の堅牢なる外圍を打破して、其容器以外に脫出することとなかりしものである。然る限り、我々は、眞の意味に於ける「社會」を發見するに至らなかつたのである。然るに、人間共同生活に於ける人格性、非人格性の鬪爭衝突の勢が激烈となると、此の容器は、之れを容れ盡くすことが出來なくなる。其の最も激烈なるは、此外圍の非人格的拘制の爲めに、最も重き壓迫を感ずるものである。其れは勞働である。而して、此の外圍の壓力强ければ强いほど、それに對する反撥力は又た强くなる。此の强き壓力を有する非人格性は、シユタインの云ふ如く、綜合意志を有せざるが故に非人格的たるのではない。然らば其れは何であるか、答へて曰く、其れは物格の支配者たり、物格の支配を通じて成立つて居る人格の支配者たる財產是れである。財產による支配こそ、今日までの我々の共同生活に於ける非人格性の代表者であるのである。之れに對して、人格性の代表者は何であるか。其れは勞働である。財產擁護本位の國家は、其の本位を維持する點に於ては、人格性の正面の敵手なる非人格性の最有力なる一代表者となつたのである。人格性の代表者たる勞働は、今日は何れも此の非人格的なる財產の爲めに、其の人格性を著しく限局せらるるもので、殆んど全く人格性の認められざるゝ如き狀態にある。之を名けて雇傭勞

務關係と云ふ。今日普通謂ふ勞働なるものは、此く其の人格性を殆んど全く、若くは甚だ多く、奪はれた一の畸形兒たり、一の不具者たる屈傭勞働を指して云ふのである。此の不具者が其人格性の缺陷を自覺し、其の恢復を求むることは卽ち今日現在の勞働を、其本性に立返らしめようとすることであつて、而して此れによつて、現在の社會運動の最先頭に立つて居るものである。此の意味に於いて、社會運動とは、人格を蹂躙せられて居るもの、毀傷せられて居るものが、完全なる人格性を、共同生活の中に、其の組織の内に、獲得しようとする運動を云ふのであつて、共同生活内に於ける非人格性に對する人格性の鬪爭の一の形態、而も、今日までに於ける其最有力なる現はれである。』(以上拙著『社會政策と階級鬪爭』一四〇至一四七頁より摘記、但し若干辭句を修正した。)

人格解放――自由の運動――の要求を、國家と其の憲法とによつて、完全に實現し得ると思ふは、大なる誤謬である。此誤謬は、今日に於いても、未だ多くの人を支配して居るように見へる。此の謬想は、ロレンツ、フオン・シユタイン等の主張を淺薄に受入れて、國家は、其の觀念に於いて、自由の負擔者であり、其の憲法は、社會秩序の表現として、端的且つ現成に自由の表現なりとし、從つて、國家によつて、自由は完全に實現せられ、人格の解放的完成は、國家の憲法によつて、成就せられ得るものとする速斷から起つて來たものである。此くして、社會不自由の大偉力、物格の支配から來る人格の毀傷に、完全に對抗し得るものは、獨り國家あるのみとする謬想が可なり多數の人々の間に勢力を得つゝあるのである。

國家は、社會以外に存するのではない。國家の臣民は、必ず先づ一定の社會秩序、社會的關係の中に生れるのである。其以外に生るゝ餘地は、寸毫も存して居らぬのである。生れたる國民各自の敎育は、必ず一定の社會關係の中に於いて行はれる。長じて經濟行爲を營むに至れば、其行爲は必ず一定の與へられた社會秩序、社會權力體系の中に於て營

まれるの外はないのである。社會の中に生きざるは、全く生きざると殆んど同意義に歸着するのである。トエニースは云つた『我々は恰かも外國へ行くが如くに社會へ行く』"Man geht in die Gesellschaft wie in die Fremde" (Gemeinschaft u. Gesellschaft. 3. Aufl. 1920. S. 3.) と。此れは、彼れが『社會』と『共同體』との區別を力說せんとする餘り、强いて言葉を强くしたのであつて、此一句丈けを切離すのは、彼の眞意を傳ふる所以ではない。兎に角社會と其の秩序、其の所定關係との一切を抽象し去つた『純粹國家』なるものは、實際に於いて存在し得ないものである。社會觀念によつて交錯せられて居ない國家觀念なるものは、思想上の化物たるに過ぎない。國家の意思は、社會の中に活動する人々によつてのみ代表せられる。國家の行動は、一定の社會秩序の下に於いて、而かも此れに應ずる各種の特殊利益の保有者によつてのみ營まれ得るのである。更らに又た、國家の機關は純粹に國家のみの機關たるものではない、其樣なものは一もないのである。國家が社會の力に對向する手段は、社會以外の那邊からも將來し得るものではない。約して云へば、國家は其の最大の努力を捧げても、社會と其の力との支配から、全然離脫する道を見出し得るものではないのである。

(二)

國家と社會との內に行はれる一切の運動、換言すれば、政治運動も社會運動も、何れも以上の約束を蟬脫すること能はざるものである。國家の純粹觀念に順應する憲法の獲得を必する政治運動によつて、人格性の完全なる恢復を實現し得可しとするは、此の基調的約束を無視する所以である。これは恰かもトエニースが指摘した次の根本原理を無視するに均しいのである。曰く『……從つて社會に於いては、ア・プリオリに而して必然的に既存する單一體から導き得可き

接な行動はあり得ぬのである』前揭書三十三頁國家は其の意志の發動たる行爲（政治）によつて、社會的不自由人格の社會力による壓迫に打克ち得るとする所謂デモクラシー主義――誰れが、如何なる形に於いて主張するものであつても――は、此の根本基調を無視する誤謬に陷つて居るものである。――從來の經濟學をデモクラチツク・サイエンスと呼ぶのは、此意味に於いて大いに有意義である。社會政策に目ざめざる經濟學は、此誤謬を根抵に於いて保藏するといふ廉を以て、最も適當にデモクラツチク・サイエンスと呼ばる可きであつて、アダム・スミスも亦其列外に置かる可きでない。（近刊商學研究所揭の拙文『厚生哲學の鬪士としてアダム・スミス』參考。反對に故神田乃武先生をデモクラツトであつたと神の名をかつぎ出さん斗りに斷定的に宣告した内村鑑三氏は、神田先生をも、デモクラシーをも全く誤解して獨斷せられたものと思ふ。私は内村氏が果して、現代の政治運動と社會運動とを理解して居るかを、疑ざるを得ないものである。神田先生には美點は澤山なり、缺點も少しはあつたが、美點としても、缺點としても、デモクラツトたりしことは、斷じて無いものと、私は確信して居る。（内村氏編『聖書の研究』最近號『神田乃武君を葬むるの辭』參考）――デモクラシー主義と稱するものは、此の誤謬の上に立つものなるが故に、其は何れの日か、行詰りとならざるを得ざるものである。社會と其の秩序とが、國家と其憲法とに對抗するに至るとき、デモクラシーは無力なる運動となるを免れ得ない。デモクラシーの無力とは、國家觀念が、社會と其の秩序とに對抗して、無力なることの反映である。而して其のイムポテンツが認識せられる瞬間は、政治運動に、一の新しい要素の附け加られる瞬間である。國家が其れ自らの力によつては、人格自由解放の完全なる實現者たることが出來ず、之れと對抗する社會は、トエニスの言ふが如く『一切の連絡あるにも拘らず、常に相離れんとする人々の一範圍』として自由の負擔者たり能はざるものとすれば、人格自由の實現の爲めには、更らに兩者の上に立ち、而して兩者の何れよりも力強い一要素が見出されるのでなければならない、國家と社會と此の兩者

を包攝するより高き要素とは何であるか。答曰、其れは人格性に固有なる最高自由決定の本質是れである。人格性の此の本質こそ、國家に於ける一切の政治運動と、社會に於ける一切の社會運動とを、一のシンテーゼに導き得るものでなければならない。

國家と社會とは、種々な點から之を觀察し得るものである――種々な見方の近頃の一二例として左右田博士の評價社會、之れに對する土方教授の批評、土方説に對する高垣寅次郎教授の批評（商學研究最近號所揭）などを擧げて置かう――然し乍ら、如何なる觀察も、必竟は、國家と社會とを、人格の最高自己決定の要求と引離しては成り立ち得可きものではない。國家と社會とは、此要求に向つての條件として、存在の意義を持つものであつて、然らざる限り、結局此のより高きものと矛盾せざるを得ないのである。人格性と其の最高自己決定の要求とは、國家と社會との兩者の何れよりも、力强いもの、より高いものである。政治運動と社會運動との眞面目は、此の見地からして釋明せられなければならないのである。兩種の運動は、云はゞより高いより深い大運動の一部として、又は其の條件としてのみ、眞の意義を持つものである。より高いより深い大運動とは、多言するまでもなく、人格自由解放の實現の運動である。而して、此の大運動の一部、又は條件としての政治運動と社會運動との交渉に就ては、次の三原則が立て得る。（一）社會秩序の本體が、人格自由の壓迫であり、此の壓迫は、自由の體現者と見られる國家と其の觀念とよりは、遙かに力强いものであるが故に、人格自由解放の運動は、決して國家の範圍内に終始しない、社會秩序の範圍内に發生し、經過する。換言すれば、政治運動は、其れが繼續する限り、早晩社會運動を招來せずに已むものではない。（二）社會の秩序は、國家の秩序を決定し支配するものであるが故に、社會の秩序が、人格自由の意味に於いて改造せらるゝときは、國家秩序も亦それ

に順應して改造せられる。其改造の手段は、一は改良であり、一は革命である。換言すれば、社會運動に、政治運動を前提とする、而して其れは政治上の改良若くは革命を手段とする。（三）國家は、人格自由の原則を代表するものと考へられる限り、如上の改造は、自由なる社會要素が、先づ國家觀念に構成せられ、新しい社會思想と社會運動とは、新しい政治的原則の發生の原因となる。今日までのあらゆる社會運動が、政治的新原則の發生と、前後提携したのは、此爲めである。

（三）

所有階級の支配は、國家に於ける政治權力の獲得を必要條件とする。一階級が政權を獲得して之を專用するときは、其處に自由の社會が存し得ぬことは言ふまでもないことである。所有階級の支配は、人格性に對しては、一の外的權力であり又た暴力である。其れと同時に、種々なる形態に於ける此支配の繼續は、其の事實に於いて、確かに內的根據を有つものである。社會秩序と社會運動とによつて基調せらるゝ國家憲法の眞實は、被支配階級が、此の內的根據を認識する勇氣を有ち、支配階級が其の限度を認識する寛容を有つのでなければ、到底之れを見究めることは出來ないであらう。國家は、其の存在の爲めに、各種の異つた個人を必要とする。此等の個々人は、單に社會の一員たりと云ふ丈けでは足りないものである。其多くは、社會に於いては優秀の個人であらう。少くとも、現前の社會に於いては、彼等は、より高き地位を保ち、より優れたりと見らるゝ社會階級に屬するものである。其人々の實能力如何は姑く措き、兎に角社會秩序の中に於いて、より上層に屬すると云ふことは、此等個々人が、國家權力の實用に有力に參加するに必要な條件とせられて居るのである。從つて、此等の人々――之を治者階級と呼ぶのは誠に適當である。新渡戸稲造博士は、嘗

て慶應義塾に來つて、學生に講演して曰く、自分は治者階級の養成所たる帝國大學の教授であり、諸君は、被治者階級の養成所たる私立大學の學生であると!?――が被治者階級を支配することは、所有階級が無所有階級を支配するの必然的なるが如くに、必然的であり、自然的であり、而して又た內的根據を有することであると考へられて居るのである。此の內的根據は、國家の本質に深く且つ不可動的に存すと考へられる。少くとも、此の事實其ものは、決して國家を不自由、壓迫の機關たらしめるものでないことは之を許容しなければなるまい。又た下層階級は、國家の政務が所謂上層階級の人々によつて運營せらるゝことと其事を否認するものではあるまい。現在に於いては、タトへ否認しても、其否認は、現實に對して全く無力であるであらう。從つて、單に此否認の上に立つ政治運動には、多くのことを期待し得ないのである。所謂普選運動に勞働運動を化合しようとする人々は、タトへ其企てが善意に出でゝも、少くとも風車との鬪を慫慂するものなりとの非難を辭し能はざる理由は、玆に存するのである。

所有階級の無所有階級に對する支配は、所有階級の物質的實力又は暴力に基くものであると考へる人が尠からずある。從つて、彼等は云ふ、所有階級は其の物質的實力を失ふときは、此の支配も亦た失はれるであらうと。此れは甚しい謬想である。社會史と經濟史とは、十二分以上に、其れが謬想なることを我々に敎へて居る。史的事實は我々に示して云ふ、所有階級の物質的優勝は、所有に內在する權力、實力の原因でなく、却つて其の結果であると。『此の現前の事實を回避して、階級の成立を說明せんと試みた學說中、最も有力にして代表的なるは、グスタフ・シュモラーの階級成立論である。曰く、カーストや僧侶武士商人やの貴族政治、ギルド制度、今日の勞働制度やは、何れも皆社會の分業と分岐とが鑄出した其時期々々に從つて異る形態に外ならぬ。各個人夫々自己に特有な任務を取るに至つたのは、決して

異に、個人的熟練と運命とのみに依るのではなく、遺傳的稟性に基因する彼の肉體的及精神的構成、彼の神經、彼の筋骨により、數代に亘る因果連鎖によつて定められるものである。社會的順位の高下や、財產、名譽、所得の差異は、社會的分岐の第二次的結果たるに過ぎないものであると。此を分り易く言直して見ると、財產、所得の差異は、遺傳に基く人の才能の大小の結果であつて、其の原因ではない。財產多く所得多きが爲め、人は社會に於て高き地位を占めるのではなく、人の遺傳に基く稟性勝れて居る結果、財產多く、所得大なるのである。財產の種類、所得の種類が、人の社會的差異を生ずると云ふよりも、人の遺傳による血肉の稟性の異るが爲めに、財產、所得の種類に差異を生じたのであると云ふことである。シュモラーの此說位舊獨逸の貴族的、官僚的偏見を露骨に公言したものはない。……歷史の事實は、シュモラー說の反對を示す。社會上の分業の結果、財產と所得との量的及質的の差異が生じたのではなく、原則としては財產と所得の量並に質の差異が分業の原因であつたのである。希臘、羅馬に於ては勿論のこと古獨逸民族、ロマン民族に就いても、財產殊に土地所有の大小及其所有形態の差異が社會上の分岐を惹起したのである。」(拙著『社會政策と階級鬪爭』三四九至三五一頁より摘記)而して我々は史的事實として次の二點を看過することは出來ない。(第一)所有階級により大なる恒心を與へ、より鋭き觀察を可能ならしめ、より大なる個人的才能を具備せしむるものは、其所有財產の賜である。(第二)所有財產は、無所有階級をして所有階級の使役に甘ぜしめる作用を爲すものである、此二個の作用は、何れも、所有財產の大體に存する力によるものである。從つて、財產は權力によりて支配せらると云ふよりも、却つて其反對に、權力は財產によりて支配せらると云ふ方が妥當である。

(四)

社會に於ける支配のみならず、國家意思の決定と其發動たる政治への參加は、不易的に財貨と其の分配の性質を基調とするものである。從つて、被支配階級の政治的隷屬關係を撤廢せんとするには、其の運動――政治運動――は、同時に、社會的隷屬關係撤廢手段としての財貨の所有の獲得と相伴ふにあらざれば、無用にして又た無力である。元より、下層階級が暴力に訴へて、或時期の間に亘つて、所有を領得することはあらう。然し此くすることは、決して、所有による支配と隷屬關係とを撤廢することにはなり得ぬのである。此くするによつて實現せらるゝことは、階級の廢止では勿論ない、否階級の變更すらも成し能はない。其成し得ることは、唯だ階級内の人間を交迭するに止まる。即ち從來被支配者たりし人々が支配階級に入り、支配階級に屬したりし人々が被支配者に降ると云ふことだけである。所有階級の支配其ものは、それによつて毫も變化を被むることなきものである。而して實力により又は暴力に訴へて、支配、被支配兩階級の人々を交迭す可く、所有の領得を無理に實行したと云ふ大なる害を殘存する外はないのである。人格自由解放の上に於いては、寸毫の進歩をも認むることは出來ないのである。眞の意味に於ける自由の實現には、被支配階級の社會的獨立が、階級全體として得られるのでなければならない。階級中の或人々の解放は、此事業に向つては、何等の意義を有つて居らぬのである。勞働黨中の或人々が内閣員となつたこと丈けでは何等の新面目を見出さないのである。

支配隷屬階級に社會的獨立を與へ、それに政治的自由を與ふる道は、唯一つしかない。曰く、其の基礎となる可き經濟財の收得を可能ならしめること是れである。此の基礎を與へずして、現在の秩序を改造すると云ふことは、一の空想たるに過ぎない。經濟財を有するによりて、事實上自由たるの可能が與へられるにあらざる限り、如何なる政策も、如何なる改良も、被支配階級を自由ならしめる力を有するものではないのである。單なる主義、單なる運動は現實の自由基礎によつて伴はれざれば、何等の効力を有しないのである。何と云ひ彼と云ふ許の主義は、其學理上若くは實際上の

誤謬や缺點の爲めに無力たるよりも、寧ろ其の主張に根據を與ふ可き、經濟財の收得によつて伴はれざるが爲めに無力なるのである。反對に、一の學說として、一の主義として、缺陷を有するものでも、其れによつて促成せられる運動が、被支配階級に、自由伸張の條件たる經濟財の獲得を得せしむるときは、其の學說、其の主義は、甚だ有力有効であり得るのである。否、甚しく誤れる主張でも、其の實行が有力に此條件を實現するときは、其れは極めて力張い主張たり得るのである。一切の政治運動と社會運動とに就て、我々は言ひ得る、運動の理論的强さよりも、其れが自由に處分し得られる所得を下層階級に與ふるものたるときは、其勢は侮る可からざるものである。他方に如何に理論的に勝れたる主張でも、其主義に歸依する爲め、貧者をして益々貧ならしめるような運動は、結局は消滅する外ないものであると。

(五)

斯く經濟財を所有すると云ふ一事が、被支配下層階級の向上に不可缺前提たること疑なしとする以上は、國家と社會とに於ける一切の運動、一切の鬪爭は、被支配階級に經濟財の收得を可能ならしめることによつてのみ、永續的に有效となり得ることは明白であらう。然るに、此の簡單明白な道理は必ずしも常に記憶せられて居るとは云へない。否、却つて其の反對に、被支配階級には政治上の自由、國家に於ける地位の向上——例へば普通選擧權の附與など——を與ふるのみで事足り、それに社會的自由獨立の物的條件を與ふることは、必ずしも絕對的必要とは云へないと信ずる人の數はまだ尠くないのである。此れは不可能事を追求する所以である。道德上の善惡などの問題ではない、事物の自然の上から見て一のユートピアを信ずるものである。ユートピアを奉ずることは、差支なしとするも、其結果は、被支配階級の犧

向上に一の寄與する處なきのみならず、却つて事實上に於いて、其の壓迫、其の不自由の程度を尠からしめることに終る外はないのである。何故となれば、被支配階級に經濟財を附與することを絶對不可缺條件とせずして、種々なる改良改善を要求する主義や主張やは、此の條件を有するによつて其の政治的並に社會的支配を握つて居る人々に取つては、誠に都合よき口實を與ふるに外ならぬものであるから。一方に種々なる政治上又は社會上の讓歩を爲しつゝ、此等支配階級は、其支配の實質的根抵を一も讓歩せず、却つて彌々益々之を堅く把持するに至るであらう。普通選擧權――而も其の骨拔きの殘骸――を讓歩しつゝ、社會的支配隸屬關係は、却つて益々緊張せられるに至るであらう。諸々の運動は此の緊張をより大ならしめて、結局は支配階級の御用を立派に勤め終つたことになる外はないのである。

斯くの如く、社會的支配關係は、人格自由解放の實現を壓迫するものであり、而して、政治上の自由を求むる一切の運動は、必ず社會に於ける此の支配關係の解放を前提條件とせざる可からざるものであり、更らに又た、社會に於ける支配關係の解放を求むる社會運動は、經濟財產の獲得てふ條件に伴はるゝに非ざる限り、永續的有效のものとなり能はざることを知る以上は、政治運動と社會運動との眞相は、其れが如何なる方法に於いて、又た如何なる度合まで、社會的所有の分布、經濟財の分配に於ける變化によつて伴はれるかを究めずしては、之を知ること能はざるものなること架設を須たないことであらう。私は此を以て、一切の自由解放の運動――政治運動と社會運動――の共同出立點なりと確信するものである。其れと同時に、あらゆる政治運動と社會運動との眞正の歷史は、此の出立點の上に立ちてのみ之を究め得べきものである。政治史と社會史との秘密を開く可き鍵は、經濟史のみ之を有すと信ずるものである。而して此の考察は、他方に於いて、經濟政策と社會政策との交涉を說明す可き唯一の行程を供するものであると思ふものであ

る。

（十八）

共同生活に於ける自由は、物質と精神との兩面に於ける人格性の自己決定の謂である。其れは各個の人格に就いて云へば、精神的と物質的の財貨の支配を意味する。精神的財貨の所有は之を名けて教育と云ふ。教育を求むる度合の强弱は、軈て自由を求むる度合の强弱を示す。今日の教育は、教育せられるものを平等と見る。生存權の實現の中最も平等に普及して居るものは、初級の教育——國民教育、庶民教育、義務教育！——である。生活資料の上に於いて、未だ生存權を認めざる諸國に於いても、國民に初級の教育を受くる權利——日本にては、却つて之れを義務と名く——を認めて居るのである。

教育は單に精神的財貨の所有を意味するのみでなく、同時に物質的財貨獲得の必然條件を與ふるものである。其れは必ずしもパンの勉强、即職業教育のことに限られたものではない。教育が國民に普及するときは、經濟財の收得に對する向上心も亦强くなる。精神の支配は其の物質的素材を支配することによつてのみ確保せられる。素材の支配を伴はざる精神的修養は、現實生活に對して有意義たり得ない不具畸形のものであつて、其不具的たるによつて、却つて有害ともなり得るのである。此關係に二つの場合があり得る。（一）一國、一社會に存する經濟財の分配が圓滿であつて、各員に對し、其の精神的發達又は教育の程度に應ず可き丈けの經濟財の獲得を可能ならしむる場合、（二）反對に經濟財の分配が偏頗であつて、教育の普及又は發達を可能ならしめるけれども、教育の程度に應ずる經濟財の獲得を必ずしも各員に確保し得ない場合是れである。人格自由解放の運動は、此二つの場合の何れに於て起るかによつて、其趣きを異

にせざるを得ない。政治運動の成立と發展とは、先づ此點から觀察せられなければならないのである。

(七)

教育の普及は、之れに應ずる經濟財の收得を要求するものであり、而して經濟財の收得は、現在の社會に於いては、社會内に於ける支配關係、權力關係の爲めに妨げられて居るものとすれば、下層被支配階級は如何にして其の教育、其の精神的發達に應ずる所有を獲得し得るか。此問に答ふることは、取りも直さず、人格自由解放の運動が、先づ第一に取る形態を明かにする所以である。其れは即ち、政治運動である。

人が所有を獲得せんとする所以は、物質物格を支配せんとの根本的欲望を充さんが爲めである。人格には、意思と行爲とは、必ず離すことの出來ぬものである。意思と行爲とあつて、初めて自主自決と云ふことが現實せられるのであつて、現實の自主、自決か缺けては、人格と云ふことは、唯だ言葉の上の話たるに止まつて仕舞ふ。意思と行爲とは、其對象を捉らへて、之れに其盡くす可き任務を決定してやるものである。其れは任務の決定であつて、其代行でもなければ、其の與奪でもない。對象は其性質に從つて、或る任務を盡くす。盡くし得る任務には幾多選擇の可能性がある。我らが決定してやると云ふのは、其幾つかある任務の或る一つを選んで、其場合、其時、其事情の下に於て、此く選んだ任務を盡させることの謂に外ならない。對象に具つて居らぬ任務を盡くせと命ずることは、無駄なことであつて、左樣な事は出來る譯のものではない。否我々は、我々の意思と行爲の對象存在を無くなす可きものでもなければ、又は其要素の一をも滅ぼす可きものでもない。從つて我々の意思の對象客體となるものは、我々の人格に捉らへられたときは、二重の存在を持つことになるのである。人格の意思が働くときは、我々の對象は、此意思に服從する、從つて對象は服從

的存在を持つ。其反對に、我々の意志が働いて居らぬ時は、對象は、對象自らの存在を繼續する。此意味に於ては、自然は極端なる怠け者である。我々が絶へず意思を働かし、行爲を爲すにあらざれば、自然は其怠惰狀態に復歸しようと復歸しようとしつゝあるものである。

我々は意思と行爲とを、絶へず活動させることによつて、土地と其上にあるあらゆる對象を喚起して、それに其盡くす可き任務の決定を爲さねばならぬものである。我々はしかと我々の力を以つて、土地と其上にある自然對象をつかまへて、居らねばならぬ。放すと、自然狀態即ち怠惰狀態に直ぐ戻つて仕舞ふ。

經濟單位は、國家の其れに均しい獨立の自決的意思を有し、其意思を發現す可き自決的の行爲を爲すものであつて、少くとも經濟上に於いては、個人は赤裸々に國家と相對立するものではない。國家と相對立するものは、何人かの共同組織たる經濟單位である。而して其意味に於て、經濟單位は、共同生活に於いて、國家に盛り切れず、國家生活に包攝されない生活の代表者として現れる。

然し乍ら、我々は更らに一歩を進めて、國家てふ共同生活も、經濟組織てふ共同生活も共に人間の力の不足有限を共同化によつて取去らんとする人間の文化要求から出たものなることを、確かに念頭に置くのでなければならない。基く所が一であると云ふことは、何れもが、同一の歸趣に向つて發動するものなることを暗示すると同時に、又た其の趨向の上に於いては、他の何者よりも激しく、又た正面的に衝突する可能が最大なることをも暗示するのである。國家と經濟とは、到底一日も他人同士ではあり得ない、一心協力完全に調和するか、又は仇敵の如く相嫉視し、相反目するか又は一が他を征服するか、兎に角相互に沒交渉であることは出來ないのである

從つて我々の經濟生活は、其本質は財の爲めの共同生活であるが、其面目は、國家の伴侶であり競爭者である。而し

て經濟生活存立の樣式は、皆此の關係から定められて居ると云つても大過はないのである。否、今日現在の經濟組織は其根本形式は、之を國家の手から受取るものであつて、此點から見て、國家は、經濟生活の守護者、監督者たることが、其第一義だと速斷した學說が、永く行はれて居たことも一應無理ならぬ次第と云ふ可きである。然し其は單に一面の觀察であつて、全部の觀察でないは言ふまでもない所である。

今日の我々の經濟生活は、凡て財產を出立點として居る。財產とは、國家によつて保障せられた所の物格に對する支配の謂である。即ち我々の經濟生活は、其出立點を國家の保障に待つものである。我々が經濟組織の內にあつて、個人として又は團體として、獲得する物格即財は、個人人格又は團體人格と共生活とに歸屬し、之と相分つ可からざるものとなる。物格が我々に歸屬するとは、我々の人格の內に包攝せらるゝことで、恰かも我々の人格の一部となつて仕舞ふ樣なものである。此事は、英吉利の大哲學者ジョン、ロックが甚だ力強く論じて、所謂勞働價値說の根柢を築いた。勞働の產物は、其勞働人格の一部に體化せられると彼は云つた。從つて、此れは人格同樣に、尊重せられなければならぬ人格は獨立自決を認められなければならぬ。其認承は、人格に屬する一切のものに及ぶのでなければ、完全とは云へぬ。一人格が其行爲によつて、取つて已れに歸屬せしめたものは、無體人格と同一なる尊重を要求す可きものである。人格が不可侵であれば、勞働の所產も亦た不可侵でなければならぬと彼は云ふのである。

國家は、其構成分子たる個人人格の尊貴、不可侵を認めると共に、勞働所產の尊貴不可侵を認める。其認承は即ち名けて『權利』と云ふのである。國家の認承する權利によつて、人格と不可分的に不可侵とせらるゝ支配財の一體を名けて『財產』と云ふ。即ち財產と云ふものが成立つたのは、國家の認承あるが爲めである。然し其認承は、自主自決なる獨立人格の意志の發動たる行爲の結果であり、此の如きものは、當然人格に歸屬すとせらるゝのでなければならぬ。

從つて、人間の自主自決の行爲の結果でないものは、決して當然に財產と認めらる可きではない。然るに一度財產の制度が確立すると、其處に主客顚倒が起つて、財產であるが故に、其れは當然に人格に附屬す可きものとせらるゝことになることが甚だ多いのである。財產たるが故に不可侵であり、尊重せらる可きであるのではない。人格の發露として尊重す可く、從つて侵す可からざるものであるか故に、國家は之を認承して財產たらしめるのである。然るに實際は却つて其反對に財產であるが故に尊重す可く不可侵たる可しとし、其財產たることが、果して眞に人格の發露の結果であつたか否かを措いて問はないことになる。これは、明かに、財產制度の濫用である。曲解である

兎に角、我々の經濟生活の出立點は財產にある。而して其は國家の認承と云ふ手續を經て確立したものである。ダカラ、經濟生活の保護を以て殆んど國家の第一要素なりとする學者は、國家存在の理由は、生命及財產の擁護にありとさへ主張した時代があつたことは、如何に此形式が重要であるかを、逆行的に立證する所以である。少くとも、文明國家の重要なる任務として、財產の擁護を認めてゐるのが現狀で、所謂民の法たる民法は、其實は財產擁護法であつて、財產なき者は、今日の民法とは殆んど沒交涉であると云ふ事實が最も雄辯に物語る處である。（以上前掲拙著自八七頁至一〇六頁より摘記、但し若干辭句を修正す。）

（八）

物格を支配せんとする欲望を充し、兼て、此支配より來る享樂を收受する手段は、即ち勞働である。勞働すること其れ自らが一の享樂たる場合は無論ある。然し其れは勞働の結果たる所有と其の享樂とが、勞働を費用とせざるときに限るのである。欲望する丈けを作り出す勞働は決して享樂でなく、其れは費用であり犧牲である。費用、犧牲を避けて、享樂收受を大にせんとするは、最も強い經濟動機である。換言すれば、全く勞動することなき所有の享樂を得んことは、吾々を支配する最有力の動機である。更らに換言すれば、無勞所得を收めんとする要求は凡ての經濟行爲を支配する。最根本の力である。社會の秩序は最も力強く此の力によつて左右せられる。物質財の所有は、其利用が與ふる價値によ

つて、其所有者に自己の勞働を須ゐず唯此利用の全部又は一部の提供によつて、自己の欲望の充足を可能ならしむるのである。かくして、所有階級は、其所有財産によつて、萬人の均しく欲する無勞所得收得の手段を支配するものである。社會の秩序　此の手段の支配を所有階級の手に確保するのである。從つて社會秩序と其の法制とは、所有階級をして、費用、犧牲としての勞働から全く免がれしむるのである。其結果は、所有によつて支配者たる階級は、然る以上自ら勞働することなく、無所有階級を强制して己れの爲めに勞働せしむる權力を得せしむることになる。而して所有と無所有との對立は一轉して、無勞對勞働の對立となる。支配階級は單に所有階級、所有特權特典階級たるに止まらないで、無勞にして多くの所得を有する階級となり、無所有階級は單に所有なしと云ふに止まらず、他人の爲めに勞働する階級、其勞働の產物を他人に捧げねばならぬ階級となるのである

乍去、所有をして價値あらしむるものは、依然として勞働たることに何の變化はないのである。故に勞働階級は、其勞働に從事する限り、短き又は永き期間の內には、所有階級の手に存する所有の價値を其手に歸せしむ可き可能性を有つものである。殊に勞働階級間に教育が普及し、其の精神的所有が增せば增すほど、而して他方に所有階級が現實の勞働から遠ざかれば遠ざかるほど、勞働階級の價値囘收の可能性は大となるを免れないのである。――富豪名門の降替、土地所有の消長は幾多の事例を我々に敎へて居るではないか――死物たる財產を固守することのみを知つて、之を活用して價値を產み出すことを忘れたる支配階級は、活きたる勞働によつて向上の力を增大する被支配階級の驀進に對して、之を防ぐ可き手段は、漸次に失はれて、最後に殘すものは、唯一つ卽ち國家權力による庇護の外一も之を有せざるに至るは免れ難い趨勢である。玆に於いてが彼等は死力を盡くして、此の金城鐵壁の守備を守るのである。向上驀進する勞働階級は、唯だ此の最后の防壘を突破すれば事足れりとするに至る。何となれば、其以外の天地は悉く彼等の手に歸し、風に靡くが如くに彼等に從ふに至り殘る所唯此一點のみとなるからである。卽ち一切の鬪爭、一切の運動は先づ國家權力に於ける此の分け前の爭奪に集中し、玆に人格自由解放の運動は、政治運動に集中することとなるのである。此の政治運動は二つの形を取る。一は政治改良であり一は政治革命である。（以下削除）

本質研究の方法

エドムント、フッサール

本質研究の下にわれわれの理解するものは、既にソクラテス、プラトーンによりて、學問外に導入されたる理念考査と立言的理念認識——また等しく先驗的認識と名づけらるべき——との方法を、純粋に、且つ合理的に實行することである。

（註1）「再新」に關するわたしの第一の論文（本誌一九二三年三月號所載、「再新の問題及び方法」）に於て、わたしは總ての研究に對して、從つてまた精神科學上の原則的諸研究に對して、唯一の有効なる方法として、本質研究の方法を推賞した。先づこの論文並びに引き續き本誌上に發表された「個人倫理問題の再新」（本誌一九二四年二月號所載）に關する論文の讀者に對しては勿論、その他、哲學に興味を有する他の一般讀者に對してもまた、現時多くの論爭の對象となつて居るこの方法の一般性質論は必ず歡迎されるであらうと確信する。

しかし、この研究に於ては、そこにわれわれは、毫も何れかの哲學的解釋を豫定してかゝるものではない。それ故に、「理念」及び「アプリオリ」の概念を以て、歴史的に拘束されて居る何等かの形而上學的遺産に——それが、假りにプラトーン的のものであるにせよ、若しくば、後プラトーン的のものであるにせよ——われわれは毫も拘泥するものではない。われわれは先驗的なるものをば、實践的に、純粋數學から、これを認識する。われわれは、數學的方法そのも

の特有なる本質とは、毫も關係するところのない形而上學的若しくは經驗的解釋に先つて、先づこの數學的思考法を採用し、是認する。われわれは、これに據りて、われわれのアプリオリの概念を方向づける。これを一般的に言ふならば、われわれは單に經驗されたるあらゆる實在だけではなしに、また自由なる想像的直觀に於て想定されたるあらゆる實在を、これを略言すれば、「經驗的なるもの」の凡てを恰かも「純粹なる」數學者が、彼れの思惟の過程を通じて彼れに役立つべき、凡ての經驗的物體、空間の形態、時間の大きさ、運動、及びその他に關して、それを爲すと同一の方法に於て、取扱い得るものである（從つて、またこの方法に於て、それのアプリオリに遡進し得る）。彼れが、彼れの思想を、究竟的には彼れの根本的概念を――凡ての彼れの概念構成に對する原質料を――「本源的」に創造する場合に、若しくば、彼れがこれ等の概念を「明化する」場合に、更らに言ひ換へれば、彼れが、空虚なる言語的理解から、「本源的なる」純正の概念に復歸する場合に、特にそうなのである。この凡ての場合に於て――そして、それは凡ての「先驗的なる」思索の一つの根本的性質を表示する――數學者は――原則的に、現實的實在に關する各個の判斷を差控へる。固より、經驗の現實態は彼れに役立ち得るでもあらうが、しかし、それは實在として彼れに役立つものでもなければ、また、彼れに妥當するものでもない。それは、單に、任意の、即ち自由なる想像に於て任意に變形される見本としてのみ、彼れに妥當する。それ故に、想像的現實態もまた、かくのごとき見本としては、等しく彼れに役立ち得るものであらうし、實際また、一般に役立つて居るのである。純數學的思索の題目的範圍に屬するものは、決して實在的性質ではなく、一つの可能的性質一般、即ち一般に一義的意味に於て表象され得るものたるべき一つの性質である。數學の自由は、純粹なる想像と純粹なる想像的思索との自由である。そして、數學の頑固なる法則羈束性は、等しくかくのごとき想像的思索そのものに屬する羈束性にほかならない。即ち、數學的想像が、それの任意的に想定する凡ての形成に於

て、合理的意思により、それ自からを拘束する限り、一度想定的實在として定立されたものは、更らに自同的意味に於て維持されてあらねばならぬ。

更らに詳細に說明すれば、この純粹なる想像的思索の自己規定の意味は、次ぎのごとくである——數學的（從つて、一般に先驗的）思索を遂行するといふことは、何の連絡もなき雜多の思ひ附きの百色眼鏡的交錯に、遊戲的に沒頭することを意味するものではなしに、想像的に形態を創造し、それを可能的實在として定立し、そして、それを爾後、同一形態として支持し續けることを謂ふのである。從つて、凡ての想像的に定立されたるものを、一義的に、同一の可能的實在として、そして、凡ての他の被定立態と調和し得べき實在として、表象可能的たらしめ、且つ認識可能的たらしめ得る任意的なる想像の變形は、かくのごとき方面に於てのみ許される。この意味に於て、數學は、事實的自然實在の斯かるものとしての現實的空間、物體、平面その他に關するものではなく、一般に表象せられ、且つ一義的に思惟せられ得る自然實在、即ち「理想上可能的なる」自然實在に關するものである。しかし、かくのごとき純粹なる想像的思索は、想像の中に隨時に形成せらるゝ偶然的、特殊的可能性に定着するものではなく、寧ろ、それ等の可能性を介し、普遍的なる本質思惟に於て、そして、本源的には、普遍的なる本質直觀に於て、純粹なる「理念」、若しくば「本質」及び「本質法則」に高められるのである。こゝからして、それは、漸時、直觀的演繹に於て證明せらるる結論にまで發展する。そして、やがて、數學的學理の無限なる世界を展開せしめる。數學者が、本源的に、普遍的直觀に於て創造する基本概念は、想像された個別態から直接に觀得された純粹普遍性である。そして、これ等の純粹普遍性は、かくのごとき個別態の自由なる變型に基きて、同一的にかくのごとき個別態を一貫する一般的意味として關渉すると等しく、またそれ等の個別態の中に分在して居るのである。

かようにして、例へば、一つの明晰にして一義的なる想像が、われわれに觀取せしめる個々の純粹可能性は、自由なる變型によりて、就中、かくのごとき變型の任意的繼續可能性の意識中に、同時に、可能的物體の一つの悠久なる無限性の本源的意識を獲得する。かくのごとき變型中に確保されたる同一態は、明白なる異相の悠久なる無限性を通觀することに於て、それを一貫する同一態として、それに共通なる「本質」として、それの「理念」として發現する。これを言ひ換へるならば、かくのごとき直觀的洞察によりて、共通する「純粹概念」、即ち特殊的なる、理想的なる可能性のこの無限性こそ等しく、またそれの「範圍」に關係を有たせられた或る物體一般の「純粹概念」が發生する。數學はかくのごとく、本源的に創造された概念を以て、作用するのである。そして、それは、「如何なる例外を可能として許されざるべき必然的なる、そして嚴正なる意味に於て、普遍的なる眞理」（カント）として、それの直接なる本質法則（所謂公理）を創造する。しかも、數學は、それの純粹概念の考へらるべき凡ての個別態に對し——かの完結されたる變型の無限態若しくば先驗的「範圍」に對し——絕對的同一性に於て創造され得ると共に、また、かゝるものとして明確に認識され得る一般的本質態容として、これ等の本質法則を洞觀する。そして、數學は、再び、創造の任意的反覆に於て洞見され得る理想的同一性として、これ等の本質法則から更らに、演繹的直觀により（必然的結果の先驗的明證）、それの理論と派生的定理とを創造する。

凡ての經驗的概念、例へば、獅子、蜥蜴、菫菜、及びその他の博物學的概念に於て、それ故にまた、凡ての經驗的に普遍的なる原則に於て、それが見出されるがような、經驗的實在のあらゆる判斷上の共同定立は、そこには嚴正に禁止されて居る。この意味に於て、數學的思索が確立するところのものは、凡ての經驗に對して、全然先驗的のものである。しかしながら、苟くもそれの「純粹」概念の個別化として考へらるべきもの、從つて、可能的存在の同一性を維持

し得べきものは、凡て適當なる「純粹概念」若しくば「本質法則」の下に立つて居るのである。

事實的實在に對するこの適用は、あらゆる實在は、明證的に、それ自からの中に純粹可能性を包藏するといふことに基くのである。各實在は、たゞ凡ての實在定立を拒否すること（自由なる抑制）によりて、それの全構成的規定內容を以て、さながらに、純粹想像中に移植される。かくて、無限に多數なる他の同樣的なる可能性と並んで、實在的のものから、純粹可能性の一つの場合が成立つのである。是に生て、經驗によりて與へられた、そして經驗的思惟によりて判斷されたあらゆる實在は、それがかゝる判斷の正當性に關する限りに於て、それは、先づ第一に、可能的經驗及び可能的經驗思惟の先驗的條件に適合せねばならぬといふ無制約的規範の下に立つて居る。そして、その先驗的條件とは、一つの一義的に同一的なる意味に於ける客觀性としての、それの純粹可能性と、それの表象可能性及び定立可能性との條件を謂ふのである。自然の數學は、それの凡ての原則を以て、自然（物的經驗の實在）に對して、かくのごとき先驗的條件を表明する――しかも、彼れは、「先驗的に」、即ち、事實としての「この」自然に就て、何物をも語ることなしに、それを表明する。事實に對する關係は、如何なる場合に於ても先驗的に可能であつて、しかも、この可能性に於て明確に理解され得る適用に屬する事柄である。

そこで、一般的に、次ぎのごとく斷定される――凡て實在を、それの純粹可能性の法則に從つて判斷するといふことは若しくば、それを、「本質法則」に從つて、先驗的法則に從つて判斷するといふことは、あらゆる領域の實在に關係を有するだけではなく、また絕對に必然的なる一つの課題である。あらゆる實在は、それの合理的成分として、それの純粹なる「本質」を有する。各實在は、凡て、それの合理的なる、「正確なる」認識を可能ならしめると等しく、またそれを要求する。しかし、それは、第一には、それの純粹本質が、一つの本質科學に、即ち純粹合理性の一つの完結した世界

〔實質的に共屬する本質的眞理の世界〕に整序される限りに於て、第二には、この本質科學の適用が、與へられたる實在と、それが皈屬する全實在界の、一つの合理的、理論的認識をも可能ならしむる限りに於て、そうなのである。經驗的實在の科學的認識は、これによりてのみ、初めて「正確」の域に達し得る。彼れが、この實在を、それの本質的可能性に遡源せしめることによりてのみ、從つて、適當なる本質科學の適用によりてのみ、彼れは、初めて、純正なる合理性に與り得ることになるのである。

「原則」からの認識としての純正なる合理性は、要するに、本質法則からの認識にほかならない。卽ち、純粹數學の適用に基く科學としての「精密」自然科學の原型に於て、われわれがそれを學び得るがように、純正合理性は、實在の純粹可能性の法則からなされた實在の認識である。それ故に、われわれが、今、數學的思索と數學的自然科學とに於て解明したところのものは、實際、あらゆる種類の對象範圍に、普遍的に妥當する各對象範圍には、それぞれ一つの可能的なる先驗的思惟が、從つて、一つの先驗的科學が屬する、そして、われわれが、あらゆる領域に亘りて、先驗性に、この合理的にしてしかも唯一の有意義なる意味を與へる限りに於てそれに對しては、この先驗的科學の同樣なる適用機能が屬するのである。先驗的思索の方法論は、われわれが、それの普遍的なる本質的特調を、數學的思索に於て解說したかように、これを數學的領域に專屬的なる特性と看做すべき理由は、毫末も存在しないばかりではなしに、むしろ、かくのごとき制限を認めることは、實在性と可能性との、經驗と純粹想像との普遍的本質關係を理解する上に於て、救ふべからざる矛盾に到達せざるを得ないであらう。それぞれの具象的實在と、それに於て現に經驗され、且つ經驗され得る夫れ夫れの個別的性質から、理想的なる若しくば純粹なる可能性の世界への、從つて先驗的思惟の世界への道は、そこに、自づから開かれてゐる。そして、最も一般的なる見地に於て、個々の純粹可能性、並びにかくのごとき可能性の

無限なる「範圍」を形成する方法（本質的には、ソクラテス――プラトーン的なる）は、如何なる場合に於ても、常に同一なのである。從つて、適切にして純粹なる本質的普遍性の、「理念」の（本質、純粹概念）、そして本質法則の、本源的、直觀的構成に關しても、また固より同一なことが言はれ得る。

出發點の如何によりて、且つ、その場合に生ずる理念、及び本質的共屬性の見地の下に生ずる先驗的領域の如何によりて、また特殊方法學と、先驗的理論の凡ての原型とが、著しく異つたものとして構成され得るし、また構成されねばならぬといふことは、當然、期待さるべきことである。從つて、また、それが看過されてならないのは、言ふまでもない。

先驗的諸科學――尠くも、可能的なる、從つて、形成され得べき――は、それ故に、單に自然と自然に獨特なる本質形式とに就いてだけではなくして、人格的精神、即ち個人的及び社會的精神に就いてもまた存在する。そして、自然の範圍に於ては、單に單純なる物理的事物に就いてだけではなしに、有機體に就ても、精神物理的なる兩面的「實在」に就ても、また存在する。そしてまた、その凡てに就てだけではなしに、文化の客體に就ても、純粹に構成せらるゝあらゆる範疇の文化價値に就ても、また等しく存在する。しかし、この場合、われわれは、われわれが上來特に考察した特別的なる自然數學（純粹幾何學、純粹時間學、純粹運動學等）から、一つの純粹形式數學（分析學、變形學等）を區別することを看過するものではない。蓋し、謂ふところの純粹形式數學は、それが精密自然學に、常住的に適用されるものであるにも拘らず、特別的に自然に屬するものではなしに、むしろ、これを一般的に解するならば、「形式的本體論」（註2）として、一般に可能なる凡ての對象と對象域とに、同樣に、從つてまた同時に屬するものだからである。更らにまたわれわれは、命題の形式論理、意義の先驗的形式學（註3）（純粹文法論）若しくば理性論のごとく、普遍的、歷史的には、既に、意匠中に、若しくば暗示中に存しては居ても、しかし、尙ほ先驗的方法の特有の意味を充分に意識

せる一つの新らしき組織的取扱ひを、切に渇望しつゝある。類似の意味に於て形式的なる、他の先驗的學問の、尙ほそこに存在することを注意せねばならぬ。

(註2) 拙著「論理的諸研究」第一卷第六五節乃至第七十二節參照。

(註3) 同書第二卷第一、第四研究參照

要するに、われわれが遂に舊來の偏見を振り棄てゝ、凡ての先驗的諸科學を建設することの、極度に必要なる大事業に向て、漸時進み行くべきは、單に時の問題にほかならない。そして、これによりて、われわれが、同時に、一つの(ライプニック的理念を遙かに超克したる)一般數學の最完全にして最高なる理念を、漸時充足するに至るべきは、また恐らく時の問題に過ぎないであらう。實際、凡ての可能的なる先驗的諸科學が、それの認識質料に於て見出されるあらゆる偶然性から解放されて、一つの相關的「普遍性」を形成し、雜多の中に一つの最內的統一を構成し、そして、それが、可能的なる凡ての意識的及び存在的關聯の、一つの先驗的本源科學に、一つの「超越的現象學」(註4)に發祥すると共に、それの本質的必然關係に基く分化として、それが取扱はれねばならないといふことは、一つの重要なる認識である。しかし、この點に關する論議は、固より別の機會に讓らねばならぬ。

(註4) 拙著「一つの純粹現象學及び現象學的哲學の理念」參照。

上述する先驗的方法に於ては、それが人間に關するかぎり、われわれは、單にそれを例示的に取扱つたにすぎないものとすれば、經驗から、最高の原則的統一としての純粹可能性の世界への轉移は、結局、一つの動物的、精神物理的、靈肉的本質一般の純粹理念を形成せしめる。この最高理念は、標本的に活動する個別人一般に見出さるゝ凡ての趨變可能的素因の最も自由なる趨變により、かくのごときものとして發生する。この理念の純粹分化は——固より空虛なる書

語的思惟に於てゞはなく、直觀的に、戀愛の適當なる拘束に於て行はれたる——一つの特別なる、そして等しく純粹なる構成として、人間の理念（「理想」ではない！）及びこれに對する相關理念として、「單純なる」動物のそれを形成せしめる。かようにして、われわれが、人間を、例へばそれの可能的人格生活の特徵に從つて差別づけるであらうならば、そしてわれわれが、職業生活及びそれの可能的類型、並びにその他の理念を構成するであらうならば、これは即ち、常に新らたなる先驗的分化の設例をなすものである。本質的に適當なる肉體と「心靈」とを共有する「動物」の理念の正確なる本質內容を、組織的に、直觀的に、原質概念と本質規定の法則とに從つて明かにせむがためには、極めて廣汎なる獨特の研究（文獻的には尙ほ全く缺乏せる）を必要とする。そして、それの更らに精緻なる分化に於て遙かに充實的なる、勝れたる本質形態、即ち彼れに適應せる理性（若しくは「非理性」）の理念を具有する「人間」に對して、それは、更らにより特別なる意味に於て必要とされる。

或る領域、例へば、人間性のそれに關する本質研究の第一段に於ては、固より、純粹ではあるが、未だ分化せざる、全く普遍的なる一つの理念、例へば、人間のそれが、指導的思想として働くものであることは、言ふまでもない。それ自體に未分化なる最高理念に就ての模索的なる原質分析が、最後の原質理念を直觀的に捕捉するに至るまで、押し進められると否とに拘らず、その手續が、單に空虛なる文學的思想に果はさるゝことなく、直接、本質諦觀の深さに於て爲さるゝ場合にのみわれわれは、切めて洞見的本質認識に到達し得るものであることは、蓋し否定すべくもない。しかしかくのごとき意味に於ける正確なる洞觀に於て、今日まで、數學は、まだ一度も、充分に成功することが出來なかつたそれ故に、それの最終的基本に就ての爭と、逆理の交錯とは、遂に絕ゆることがない。

しかし、この暗示は、次ぎの確信——それのより深き基礎つけは、この小論文の克く企及し得るところではないが、

——即ちそれが、完全なる直觀の最終の源泉(現象學的に純粹なる主觀性のそれ)から汲み取られたものでないかぎり、凡ての認識は、未だ最終的强さと、最終的科學性とに到達して居るものではないといふ確信を喚び醒すことのために、蓋し貢献するところが尠くないであらう。兎も角も、散漫なる豫覺や、非啓蒙的豫料の視野から未だ脱し切つて居ない凡ての證驗は、尙ほより以上の開明と規定とを必要とする一つの中間的認識價値を有するに過ぎない。一つの認識は、それが、他方に於て、無原則の經驗に對して、一つの著大なる進歩を意味するものであるかぎり、それだけに恐らくは先驗的であり、また「本質的に」正しきものであり得ても、しかし、同時に尙ほ相對的に不完全なものであり得るのである。

等しく本誌に於て、曩きに發表したわたしの論文「個人倫理問題の再新」は、實にこの見地を基礎とするものである固より徹底的意味に於てゞはなく、たゞ現時に於て、それが唯一の可能事とされる所謂中間程度に於て、倫理人の純粹理念を、一つの本質研究に服せしむると共に、一方に於ては、一つの原則的倫理學の建設を、他方に於ては、一つの實踐的なる人間性の改造を、準備しようと試みたのが、即ち彼の論文の志向であることを附記せねばならぬ。

現下の諸問題批判

政治上の階級鬪爭

馬場恒吾

一、

階級鬪爭と云へば、資本家と勞働者との間に起る經濟的鬪爭に限られてゐるかの如く、今迄世人一般に解せられてゐたが、今日日本に於て叫ばるゝ階級鬪爭恐怖の聲は、政治上の階級鬪爭に向つてである、貴族對平民の階級鬪爭に對してゞある。階級鬪爭までが、日本に移植されると、日本の特殊國情に感化されて、一種の變態的階級鬪爭になる。それも面白い。それが成功するものである乎。失敗に終るべきものである乎。それが危險である乎。否乎。それを勞働者對資本家の經濟的階級鬪爭に比較して考へて見るところに面白味がある。

淸浦內閣が成立して、政友會總裁高橋是淸氏が子爵たる事をやめ、政友會の貴族中心の內閣に反對して來た時、元老の西園寺公は政友會の誰れかを興津に呼んで、政友會が淸浦內閣に反對して、憲政擁護の運動を起すのはよいが、之が貴族對平民の階級鬪爭にならぬやうに心掛けろと注意したさうだ。それから氣を注けてゐると高橋總裁は演說して吾々は華族制度の廢止を叫ぶものではない。今日の政情やゝもすれば階級鬪爭を惹き起す惧れがあるから、其危險のないやうに憲政擁護の運動をしてゐるのであると云つた。

西園寺公が何故階級鬪爭を恐れるか、其理由は直接聞かぬから分らぬ。華族一列に一掃されるならば、自分の公爵も何うな

るか分らぬと、そんな吝ちな考へで云ふとは誰も思はぬ。それよりは寧ろ其以外に深く心配してゐる所があつての事であらうと想像されるが、彼自身に清浦内閣を推薦しておいて、即ち階級闘争が起るとすれば、自ら其端緒を開き其動機を作りておきながら、今更、階級闘争が恐ろしいなどゝ、公人ならば云へた義理でない。併し彼を元老など、常に黒幕の後ろにのみ隱れて動く人々を公人と稱すべきか、否か、之も疑問となし得られるのである。

高橋政友會總裁が階級闘争を避けたいと云ふ演説も之を一場の模範として聞くべきである。如何に階級闘争を避け度いと口で云つて見た處が、彼れが乘つてゐる時代の潮流、運動の流れそれ自身が階級闘争に向つて進みつゝあるものならば、彼れ自身が如何に踠いても、又彼の周圍の意志が如何に穩健着實であつても、此潮流の大勢を如何ともする事は出來ぬのである。古代專制時代ならば、秀吉一人の意志、家康一人の意向が天下の大勢を決定したかの如く見へる時もあつたであらう。今は人民が動く世の中である。人民は流轉する。或は進み、或は退く、其中に一人や、二人、特別な考を抱いてゐるものがあつても、それは問題にならぬ。彼等は皆、民衆と共に行くべき處に行き、停まる處に停まるの外はないのである。

高橋氏などの說によれば、憲政擁護運動は階級闘争ではないこれは高橋氏及其周圍の人々のみの說でない。憲政會總裁加藤高明子は現に子爵であり、華族である。故に自から華族征伐など爲すべき筈がない。其他民間に於ても今度の戰争は華族に對する戰争でなくして、貴族院中の研究會に對する戰争であると其態度を明かにしてゐる人が少くない。我々から云へば、それはどちらでもよい事である。薔薇は何と云ふ名前を付けても薔薇の香がする。階級闘争に對して、假りに之を階級調和の運動と云つても、或は之を憲政擁護の運動と云つても、其實質に於て大なる相違を生ずるものでない。問題は今の大勢が、實質的に見て階級闘争であるや、否やに存する。

二、

今迄にも超然内閣は度々出現した。超然内閣は珍らしくない然るに今迄の超然内閣に對しては階級闘争の氣分が今日ほど濃厚でなく、今日の清浦内閣に對してのみ、これほど執念く、これほど深刻に、階級闘争的の氣分が燃へてゐる所以は何處にあらう。もとより所謂人心の惡化が此大勢の根底にある事を忘れてはならぬ。併し人心が如何に惡化してゐやうとも、之を爆發せしむる導火線がなくては、階級闘争が現實化するものでない

人間の爆發力は、取扱様によりては色々の安全な方面にも轉換せしむる事が出來る。不幸にして、不幸な場合に、不幸な政治家が出て來るときは爆發しなくてもよい人心が、强いて爆發せしめられる。清浦内閣出現などは此不幸の實例として、歴史に殘る價値がある。

清浦内閣が他の超然内閣と異つて、階級闘爭の目標なるかの如く見らるゝに至つた原因として、見逃すべからざる事情は、貴族が政權を握らんとして、白晝公然、見得も外聞も關はずして、積極的に運動した事である。今迄の超然内閣にも貴族院の連中が閣員に列した事はある。固より彼等も大臣になる事は嫌ひでなかつたであらう。併し其當時は貴族は自分の地位と品格を省みて、假令、喉から手が出るほど大臣になりたくても、露骨に大臣運動をなさなかつた。まして内閣を乘取ると云ふ如き大膽な運動は思ひも及ばざる事であつた。先づ人に勸誘されて恐る〳〵内閣に列すると云ふ位が關の山であつた。其處には華族心理のづるさと及び善意に解すれば幾分か廉耻心があつたと云へやう。然るに昨年十二月二十七日、虎の門事件があつて、山本内閣が崩壊しての後の貴族院研究會幹部の行動はそれとは全く行き方を異にして、積極的に自分等の手に政權を捉へると云ふ運動に出でたのである。消極的に据膳を待つと云ふのでなくして、自から要所を占領せんとしたのである。其さもしい根性に對して、國民は輕蔑の念を禁ずる能はざると同時に、華族と云ふものを憎悪の眼を以て見るに至つた。

三、

貴族院の研究會は百七十余名の議員を有つてゐて、云ふ迄もなく貴族院の絶對多數黨である。最近四五年來、政府は貴族院操縦の必要からして、此研究會に喰はすに利權を以てして、種種御機嫌を取つたものだ。一度味を覺えた者は、段々其方面の情慾を昂奮せしめて來るのが、人間の弱點であつて、研究會の幹部は政權の味を覺へて以來、益々政權慾を盛んにして來た。貴族院は震災中に成立したる山本内閣に對しては、割合に縁が薄かつた。其縁の薄い山本内閣に對してすら、小笠原伯、水野青木兩子と云ふ如き幹部は、後藤内相と會見して、接近出來るものならば、接近しても見やうかと云ふ態度を示した。それは研究會なるもの、政權から遠ざかつては、お茶を引いたる藝者の如く、手持無沙汰ならざるを得ざる、會の素質を遺憾なく曝露したものである。山本内閣との接近は、内閣の不時の沒落の爲めにおじやんになつたが、内閣沒落と共に、此好機逸すべからずとして、研究會幹部は、政權獲得の爲めに、目さましき活

動をした。政權奪取はプロレタリヤの標語であつたが、それを逸早く實行したのは貴族であつた。

此政權獲得運動を行ふ事も、貴族は貴族らしき口實を作つた即ち彼等の云ふ處によれば、十二月廿七日の虎の門事件に鑑み華族は皇室の藩塀として、國體擁護の任に當らなければならぬと云ふ事であつた。僅かに九百許りの數を有する脾弱い華族が何を賴みにして國體擁護の一手專賣を吹聽するか、其心根は見へ透いてゐたが、彼等は兎も角もかゝる口實を作つて、自分等の政權獲得の運動を尤もらしく見せんとしたのである。

其當時、僕は屢々貴族院關係の人々から、此際は人心の險惡になるのを防ぐ爲めに、皇室の藩塀である華族が、之を具體的に云へば華族の互選議員の多數黨たる研究會が政權を握らねばならぬと云ふ理由を聞かされた。一言にして云へば、國體は華族に依つて支持せられる。故に研究會が中心となつて政府を組織せねばならぬと云ふ事であつた。それならば衆議院を何うすると云へば、其人々の考へでは若し出來る事ならば、衆議院の絕對多數黨たる政友會と結んで、政局の安定を計る。併し之は絕對の必要條件でない。衆議院の黨派と云つても、何日かは自から政權を握らんと念掛けてゐるものである。彼等は貴族院の研究會に反對されては、一日も政權を維持する事は出來ぬ。故に彼等は如何なる事があつても將來研究會の怨みを買ふやうな事をなしうるものでない、と云ふのであつた。僕は華族が斯くの如く衆議院を見くびつてゐるのを聞いて華族と云ふものは、付け上がらしむれば、何處迄圖太くなるものかと、少なからず驚かされたのである。

四、

十二月廿七日山本內閣が辭表を出したが、二十九日に攝政宮より優諚があつて留任を勸められた。山本首相は閣議を開いて何うしても辭職せねばならぬと決めて、同日の午後四時に參內して重ねて內閣辭職を奏上した。これは二十九日の事である。然るに研究會の領袖小笠原伯は二十九日の朝の特急で興津に行き、西園寺公を訪問して、其日の中に東京に歸つて來た。優諚降下しても山本內閣は留任せぬであらうとは前日から分つてゐた所ろであるから、研究會は山本內閣の兩度の辭表を見越して政權獲得の運動を始めてゐたのである。所ろが小笠原伯なる人研究會仲間の評判では勿論其人の藝術的天才は認めるにしても天才は往々にして突飛な事を行るものである。小笠原伯が西園寺公の處へ行つてどんな事を云つたか甚だ心元ない。此所は研究會の眞の意志の存する所を西園寺公に傳へねばならぬと云ふ

事であつて、研究會の最高幹部である所の青木、水野兩子が同夜即ち二十九日の夜出發して興津に向つた。これは山本内閣兩度の辭表を捧呈した後ではあるが、後繼内閣に關する御下問の勅使が興津に行く前である。勅使の先潜りをして、西園寺公に研究會の意見を吹き込まうと云ふ方針である。殿樣と云ふものおつとりしてゐて、ぼん暗であると思はれたは昔しの事であつて、今の華族は生き馬の目を拔くほどの敏捷さを有つてゐる。

平田内大臣は勅使となつて、翌卅日に興津に行き、其夜は興津に泊まつて卅一日に歸京し、其夜は疲れたと云ふので、翌元日に參内して、清浦子を内閣組織者として奏上した。

研究會の小笠原伯が何んと云つたか知らぬが、青木水野兩子が西園寺公に云つた事は大抵分つてゐる。それは今日人心險惡になつてゐる時に際しては、何うしても政局を安定せしむる必要がある。それには強い内閣を作らねばならぬ。貴族院の研究會と衆議院の政友會を連契せしめた如き内閣がそれであると。此意味を婉曲に述べたものだ。彼等は原内閣の時、加藤内閣の時の如く再び政權に近いて旨い事をせんと思つた。而してこの進言に對して、西園寺公も反對でなかつたらしく彼等は諒解して、得意な顏をして歸京したのであつた。

此下心があつたものだから、彼等は二日に清浦子から内閣組織に關する援助を求められた時、直ちに活動を開始して、先づ政友會の援助を求めた。彼等は研究會が政權に近づく爲めには見得も外聞をも捨てた如く政友會も亦政權に近づく爲には見得も外聞も捨てるものと思つてゐた。然るに今度ばかりは其豫想が外づれて、政友會は研究會の作る清浦内閣を援助すると云はなかつた。これが政黨内閣の次ぎに出る一度の超然内閣ならば何んとか、援助の口實もあらう。二度目の超然内閣と來ては、反對黨が不信任案を出して來る時、如何に絶對多數の政友會でも、其矢面に立つ勇氣はないと云つて援助を斷つたのである。研究會の連中は當てにした政友會に逃げられて、今迄の情誼を忘れて怪しからぬ政黨だと憤慨した。其憤慨には多少の理由はあるかもしれぬが、根が慾から出てゐる憤慨であるから、世間誰れも之に同情するものもなかつた。

それで研究會は清浦内閣組織を中止して、政權に近づく事をあきらめたかと云へばさうでない。憤慨は憤慨政權慾は政權慾と、別々に考へ直して、飽くまで政權に近づくべく企てた。政友會に見離なされた代りに、貴族院各派から大臣を容れる事に作戰を立て直して、遂に現在見る如き内閣を作り上げた。其間に種々さつたの經緯があるが、くだ〳〵しき故略する。

要點は、研究會幹部が初めから政權獲得を企てゝ、清浦内閣

を作つたと云ふ事である。只淸浦子から頼まれたから、内閣組織に援助したと云ふのでなく、自から進んで、政權の旨い味を味はんが爲めに積極的に働きかけたと云ふ事である。成程人間の慾には限りがない。華族は爵位を授けられて普通の人民よりはより以上の名譽を與へられてゐる。普通の人民は何千人、若しくは何萬人の投票を集めねば衆議院に列する事が出來ぬのに、華族の互選議員は一人當り僅かに五六名の選擧人を得ればよい割合になつてゐる。これほどの特權を利用して、貴族院に列してゐるに關はらず、尙それにも飽き足らずして、政權を獲得せんとあせる。それが國家の爲めとか何んとか云ふのは、只口實のみであつて、其眞意が何處にあるかは其平生の行動を見れば分かる。

元より華族と云つても一種特別の優秀な人種であらう筈がなく、彼等とても普通の人間並の權勢慾、名譽慾、利慾、其他凡べての情慾を有してゐる事は恕してやらねばならぬ。彼等が近年政權の味をしめて、何時迄も同じ味をしめんとする事も亦、人間普通の弱點として恕してやらねばならぬ事であらう。只吾吾の憤慨するのは、彼等が華族なるが故に、政治上の特權を有して居り、其特權を利用して政權を壟斷しうる事態其物に對して深刻な不平を感ずるからである。普通の人民が政權に近づく爲めには、衆議院選擧に當選すると云ふ難關を經て、一生を政爭に沒頭して尙且つ政權に近づき得るものは稀れである。殊に普通選擧の布かれてゐない今日に於ては、國民の大多數は政治に對して何等の發言權を有つて居らぬ。然るに華族の中、公侯は世襲的に貴族院議員となり、伯子男は五六名に對して一名の議員を出す。華族世帶數九百餘りで二百名以上の議員を出してゐる。其貴族院は不時の解散を喰ふ心配もなく、其權能は豫算を衆議院の後に議すると云ふ差があるのみで、實質に於ては衆議院と全く同等の權限を有してゐる。華族制度が、只其祖先若しくは自分の勳功に依りて得たる、社會上の地位名望を表彰する制度であつたならば、其存在と否とは、政治上に何等の影響を及ぼさなかつたであらう。然るに現在の制度の如く、華族は華族なるが故に政治上の特權を有して、我等が目前に見る如く、政權を握つて天下に號令し得る時には、我等は華族制度の根底に向つて批判の目を向けねばならぬ事になる。

今度の政權壟斷の策源地が研究會であつた事は無論である。併し我等は研究會のみを責むれば、それでよいかと云へばさうは行かない。研究會幹部は淸浦内閣組織の當初、貴族院の中心勢力を無視して作られたる内閣は、到底永續きせぬものとあると、殆んと己等に組織せしめなければ直ちに打たき壞はしてや

るぞと云ふやうな、脅迫的文句を吐いてゐた。彼等が斯の如き事を云ひ得るのは特權に依りて生れたる貴族院が、衆議院と同等の權利を有するからだ。貴族院に解散の恐れがないからだ。七年目毎にある貴族院互選議員の選擧が選擧母體幹部の二三人の意志で何うでもなるやうな制度になつてゐて、議員は平生幹部の前には猫のやうにおとなしくなつてゐなければならぬからだ。そして、此貴族院の制度を改める事には、衆議院は容喙する事が出來なくて、貴族院自身が賛成してのみ行はれる規則になつてゐるからだ。凡べて現在の制度が華族をして斯の如く横暴ならしめる。斧鉞を華族制度と貴族院の組織の根底に向つて下さゞれば、貴族横暴の弊害は、今日起りたる如く將來も亦起り得るのである。此事は事理明白で誰れにでも諒解され切つた事であり、一般人民の頭は純理に動くから、夙くの昔しより此事を叫んでゐたのである。只華族に遠慮するもの、現在勢力を怖がるもの、或は自個の特權を維持せんとするものが、生半熟の改革論などで、貴族院の反省を促がすと云つてゐるのである人間は反省する動物か、否乎が疑問である。勿論、少數の心懸けのよい人々は自然的に反省する事もある。併し大多數の人々は外部の壓迫で余儀なく反省せしめられる迄は反省しない。我等の任務は、華族と貴族院をして反省せさらんと欲するも、反省せざるを得ざる、余儀なき立場に置く事である。さうしたければ人民が堪らない如く、國家も堪らないのである。

五、

これは恰も貴族對平民の階級鬪爭であるかの如く響く。然るに立憲政治と云ふものは階級鬪爭を主張する政治ではない。否寧ろ階級鬪爭を避ける爲めに、即ち言論に依つて、社會の秩序を破壞せずに、政治の進歩を行はうと云ふ目的をもつてゐるものだ。然るに立憲政治の行はれて居る今日、貴族對平民と云ふ如き階級鬪爭が起らんとする情勢が生じたのは何う云ふ譯け乎

立憲政治と云ふものは何である乎。其定義や解釋や、形式は色々であらうが、其本態は畢竟するに、人民を政治に參與せしめると云ふ事である。だから立憲政治の國では、人民が賢こければ政治も賢こくなるが、人民が愚であれば、政治も愚になる。これは免れ難き弊害のやうに見へるが、人民全體としては年々少しづゝは進歩するものであるから、立憲政治は人民の進歩と共に自然に進歩しうる組織になつて居る。專制政治の國では、政治を改革する爲めに、一々支配者を變へなければならぬけれども、立憲政治の國では、支配者が變らなくとも、時勢の變化と共に政治が自働的に進歩して行くと云ふ妙味がある。英

國で勞働黨内閣が出來て、勞働者本位の政治を行ふにしても、何處に一つ革命らしい氣分を發見する事が出來ぬ。平常通りの總選擧で、平常通りの内閣組織があつたのみだ。そして内容が何時の間にか勞働者政府と變化してしまつた。憲政の運用宜ろしきを得れば、この位の變化は何んでもなく行はれる。只憲政の運用宜しきを得ざる國に於てのみ政治に階級鬪爭的氣分が現はれる。

然らば如何なる點に於て、憲政の運用宜ろしきを得ぬかと云へば、日本の上下共に、憲政の何物であるかに付いて、ハツキリした頭を欠いてゐるからである。立憲政治とは人民を政治に參與せしめる事である。故に支配階級の方から云へば人民に政權を頒けて與へようとする事が、憲政に忠實であるものであると同時に、人民の方から云へば政權を頒けて取らうと努力する事が憲政に忠實である事になる。之に反して、支配階級の常に努力してゐる事が、人民には成るべく政權を與へまいとする事であり、人民の方でも遠慮して成るべく政爭に加はるまいとする事は、却つて立憲政治を害するもの、延いては國家國民の發達に大なる損害を與へるものである。人民を參加せしめずして、何處に政治の進歩が望まれる。人民が參加してゐればこそ、人民の進歩と共に、政治の形式は變化せずとも其内容が進步して行きうるのである。それが少數の特權階級の手に政治が獨占されてゐる時は、政治は其形式の變らざる以上、固定し、化石し、どうにもかうにも始末につかぬ事になる。

今日の思ひは、支配階級が政權を、人民に與へる事を措しむ事と、人民も亦政權を取るに遠慮する事にある。問題は政權であつて、政治の善惡でない。人民は自から治める力があり、權利がある。憲法は其力と其權利を認めてゐる。人民は惡政を布き度ければ、惡政を布き、善政を布き度ければ善政を布く。超然内閣は好んで善政を布いてやるのだと宣言する。之は政治を以て慈善事業と心得てゐるからである。政治は慈善ではない。人民は善政を布いて貰い度いと望んでゐるのでなく、善惡共に、自から治めうる政權を取り度いのである。さう思ふ事が立憲政治の精神である。人民をしてそうした慾望を起さしめる事が、憲法の目的であり、立憲政治を發達せしめる所以である。

憲法は人民に選擧權を與へて、立法府の議員を選擧せしめる。それは人民に政權を取れと敎へてゐるのである。人民は選擧權を行使して、代議士を選び、之に政黨を組織せしめ、之に政權を取らして、人民が欲する政治を行はしめんとする。政治が其通りに行はれるならば、憲政の運用よろしきを得たのである。然るに實際は其通りには行かぬ。政權は政黨の門を素通りに

して、已に二度も連續して、政黨とは何の緣もなき軍人若しくは官僚政治の手に落ちた。人民は失望せざるを得ない。

日本の選擧界が腐敗して、選擧の投票が一圓三圓の金で賣買される事實を嘆くものがある。元より之は痛嘆すべき事柄であらう。併し事の茲に至ることは已むを得ざる事情がある。人民は政權を取らんが爲めに、或は少くとも自分等の代表者をして政權を取らしめんが爲めに、代議士に投票するのである。然るに、幾度投票しても自分の選んだ代議士、若しく其代議士の組織した政黨には政權が來ぬとすれば、人民の方では何の爲めに投票するか了解に苦しむと云ふ狀態になる。政權を取る目的の投票か、政權を取る目的を遂げぬと云ふのでは、寧ろ二圓でも三圓にでも賣つた方が利益だと計算するに至る。僕は敢て投票賣買を辯護するものでない。投票は政權を人民の手に取る爲めに使用すべきものだ。それを二三圓の金で賣るのは羹一杯の爲めに自分の靈魂を賣つた者ほど愚かな仕業である。併し人民を斯く絶望的にならしめた罪は、超然内閣のみを推薦して、投票の効力を無効ならしめた所の、元老自身が負はなければならぬ。

人民を政治に參與せしめる。人民の方から云へば、政權を取る。之が立憲政治の基礎的道德である。機を見るに敏なる貴族は、人民よりは一足先に政權奪取を試みて成功した。人民は自分達に頒與されべき政權か、貴族の手に依つて横取りされるのを見て開いた口が塞がらぬのである。併し人民は何日迄、口を開いてぼんやりして居らう。政權奪取は貴族が其範を示めしたのである。人民が之に模倣せずに居るであらうか。

貴族も固より人民である。それが政權に有付かんと思ふも敢て惡るい事ではない。只彼等が華族の特權を利用して、貴族院に立籠つて政治を獨占するのは、人民に向つて不平等の戰爭を強いるものである。若し彼等が政權を取り度ければ、宜ろしく貴族院に出る選擧權被選擧權を得て他の人民と對等、同等の權利で政治を爭ふべきである。一段上の階級に陣取つて、平地に居る民衆と爭ふ。之が階級戰爭と見られるのは、貴族自身の責任であつて、我等の知つた事でない。我等は政權を取るべき憲法に依つて、運命に依つて、許されてゐる。之を妨げるものは、何者であらうとも之を排斥せねばならぬ。我等人民は最早元老や貴族などに慈善的に支配されねばならぬほど耄碌してはおらぬ。人民は自ら政治を行つて、自から生活を安定する事に努力せねばならぬ。人民が政權を取る。各自が政權を取る事を目標として進む。之が國民の決心でなければならぬ。

今日の貴族對平民の政權爭奪は其形が階級鬪爭の如く見える

が、それは只立憲の進歩の過程に於ける小なる爭である。貴族が立憲政治を横取りしたのを人民が、當然の權利で之を奪還せんとするのみである。資本家對無産者の階級闘爭の如く、社會革命を目的とするものでなくして、只立憲政治を當然行くべき處に行かしめんとする、單なる政治の行進曲の一節に過ぎない。例令それが爲めに華族制度が犧牲になつても、社會革命を目標とする眞の階級闘爭に比較すれば何んでもない。只鳩の如へ憶病な心臓を有つてゐる者のみか、階級闘爭の聲に其小さな胸を驚かしてゐるのが現在の狀態である。

農民大會に對する私見

青野季吉

一

日本の農民運動は比較的新らしい運動である。初めて小作組合なるものが產聲をあげたのは、明治八年といふ可成早い頃であるが、その頃の組合精神は飽までも消極的で、地主に對する個人的哀願が小集團の哀願に變つたものに過ぎなかつた。それ眞に農民運動の面目を持ち、積極的、反抗的、鬪爭的の形態をとつて來たのは、漸く大正元年頃からである。かう言ふ比較的新らしい運動であるに關らず、それが一度び生起すると非常な勢ひをもつて進展して來た。勿論そこには當時の大凶作その他の直接原因もあつたが、要するに長い間の我國の農村經濟の行詰りが、一擧に土の底から大地へ浮び上つた結果に外ならない。それを小作組合の數に見ても、大正元年までに組織された組合數は僅々六十五に過ぎなかつたが、大正十一年までの十ケ年間に九百二十といふ巨數に上つたのである。運動の直接表現たる爭議に見ても、大正六年には一ケ年を通じての爭議件數は八十

五件であつたが、大正十一年には上半季に於いて既に八百二十五件を數へたほどである。かうした大いなる社會的動搖に對して、現在のブルジョア政府はどんな對策を執つてゐるか。彼等に殆んど策無しと言つてよいのである。「農村振興」と云ふ標語は、どの政府からも聞く所であるが、嘗て農村の振興したためしが無い。農村の貧化と、それに基く爭議は上の如く增大するばかりである。本日（六日）の新聞で見ると政府はいよいよ自作農創定案を作つたとのことであるが、小作人は自作農たることによつて、地主からは解放されようが、ヨリ大いなる壓迫と搾取が金融資本から來ることは當然の成行である。そこで結局する所農村の貧化は到底間ぬがれないのである。これを言ひ換へると農村問題を解決し得るものは、小作人自身をおいて他に無いのである。農民組合の發達、その進行の階段について、深甚な注意を拂はなければならぬ所以はそこに在る。

日本農民組合は小作組合の聯合團體として最大のものである。總同盟が勞働團體中の代表的なものであるより以上に、日本農民組合は農民團體中の代表的なものである。したがつて農民運動の代表的組織である。その第一回大會は大正十一年二月大阪で開かれたが、その時は僅か七名の正式代議員しか出席せず、支部十五、組合員二百五十名しか持つてゐない極めて微々たる團體であつた。然るに翌十二年二月神戸で開かれた第二回大會には、出席代議員は二百五名を數へ、支部七十八個、組合員は一萬人を算した。而して本年二月二十九日三月一日の兩日に亘つて大阪天王寺で開かれた第三回大會には、代議員數に於ても、支部、組合員數に於ても、前年の倍數を示すことが出來たのである。この成績を見てもいかに日本農民組合が物凄い勢ひを以つて發展してゐるかが分るのである。しかも約二萬に近い組合員は、正式組合員として組合費を納入し登録したもので、正式組合員でなくて組合と共に行動してゐる小作民の數は、組合員數に幾倍すると見て差支へないのである。この事實は初期の組合運動には脱れ難い現象であつて、組合の實勢力を測定する場合には忘れてはならぬ事實である。

さてこれだけの前置きをしておいて、私は、日本農民組合第三回大會の內容について卒爾の印象を綴つて、日本の農民運動の發展過程を知る一資料としたいと思ふ。

二

最初の農民大會に於いて私の注意を惹いたのは、代議員の質の問題であつた。それを約一ケ月前に開催された勞働總同盟の全國大會、すぐ農民大會に引續いて開かれた水平社の全國大會

と對照して考へて見ると、よほど考ふ可き點があると思ふ。總同盟の場合では、代議員の質によほど差違があつたことが特に注意を惹いた。卽ち所謂組合運動の闘士は、非常に進んだ階級意識を持ち、思想的にもかなり徹底した所を見せてゐた。それに反して、代議員の他の一部は、まだ職業組合的の想念と、低い階級意識に低迷してゐて、それと所謂闘士との思想的距離は可成りに遠いものであるやうに考へられた。したがつて討論などの場合に於いて、主として闘士と闘士との論戰が主となつて、多數者はそれに率ひられて行くと云ふ形態を執つて現はれて來た。發言などしても、主として闘士に限られて代議員の多數が發言を求むる場合は餘り見られなかつた。この事實は工場勞働者の手を以つて組織せられた總同盟には、蓋し或時期まで自然なことであつて、都市工場勞働者と地方工場勞働者との質の差異がそこに發現したものであらう。然し他面に於いて、組合の統制といふ上から見ると歴史が舊いだけ相當に完全してゐる。卽ち質の相違による各層が、段階を成して密着してゐる所にその基礎があるのであらう。水平社の場合では總同盟ほどの程度ではないにしても、團隊の統制は相當に保たれてゐると考へられたが、構成分子の質に到つては總同盟と反對に、相互に餘り大した差異は認められなかつた。いづれも同一程度の精神に被光された平面がより多く活現されてゐて、その間に思想的の遠い距りを持つてはゐなかつた。これは水平社が階級闘爭的と云ふよりも人道主義的であり、經濟的といふよりも觀念的な運動團隊であるが爲めであらう。もし水平社の內部の構成分子の分ち持つ經濟的事情が外部に發現されたら、そこにまた異つた色調が生ずるに違ひない。

農民組合になると勿論優れた闘士もあり、その思想的覺醒も餘程の點まで進んではゐるが、そしてまたその點で多數の代議員との距離も相當あるが、大體に於いて總同盟などに比して代議員の質に差異がないやうである。これは農民運動が比較的新らしい運動であり、全般的に同じ高さに於いて隆起してゐるが爲であらう。したがつて代議員の多數が闘士に率ひられると云つた點はまだ稀薄である。たとへば議案の討議などにしても闘士對闘士の討論といふよりは、多數の代議員が各々その立場から發言すると云つた傾向が強いやうである。それらの事情からしていかにも質實な實力主義的な、がつしりした趣が農民大會の特色であつた。たとへば「朝鮮へ宣傳隊を派遣するの件」の討議などを見ても、關東側乃至小數闘士は、國際的團結、親和といふどちらかと云へば思想的な方へより外く傾斜し、多數の代議員はその思想的方面を理解はしてゐるが、「現在の農民組

合の實力」からは尙早だと云ふ方へ、つまり實際的な方へより多く傾斜する。そして闘士の活躍にも關らず、大勢は「實力」の方へ加擔すると云つた質實な結果を見たのである。この結果を見て農民組合に無産階級の國際運動的意義の自覺が未しと言ふは當らない。實力から遊離して思想的に走らないところに農民團隊の通則的な特質があると思ふ。組合の統制と言ふ方面から見ると、日本農民組合はまだ〳〵訓練が必要であると思ふ。然し一度び訓練を經たならば、總同盟などに見られない力强いものとならうことは豫想するに難くはない。

三

次に議案について考へて見たい。私は議案の意味について、その實行的方面と教育的方面との二面の意義を同じ位重大視してゐる。これは運動の成長期に於て特にそうであると思ふのである。一端通過したならば徹底的にその實行を期すといふ方面は勿論重大である。然し現在の社會に於て、可決された議案が必ずしも實行的意義を十分に特つていないのは止むを得ない。可決倒れ決議倒れの運命も現在では或程度まで甘受しなければならぬ。しかしそれかと言つて議案を提出して討議することは決して無意義ではない。議案は卽ち要求である。それは同じ陣營内の比較的進んだ分子、乃至は一定の問題なり事業なりについて、より痛切に感じた分子の要求である。故にその要求を議案の形にして大會に提出し、多數代議員の質問討議を求むることによつて、比較的遲れた分子、その問題の重大さを直接に痛感しない分子を教育することが出來るのである。この意味に於ける議案提出及び討議の教育的、宣傳的價値は決して忘却されてはならない。持に階級意識、經濟意識、政治意識の稀な層を多分に持ち、一方內部的には階級の覺醒と結束とを呼び起し、外部的には支配階級に抗爭しやうとする現在の程度の運動の場合には、特にその教育的價値の方面を重大視していい理由があると信ずる。

その觀方から農民大會の議案を見ると第一に五十五件の中から二十一件を採用したのが多過ぎはしまいかと思ふ。採用された二十一件はいづれも相當議案となすに足るものであることは認めるが、まだまだ選擇取捨の餘地はあつたと思ふ。一瀉千里と云つた風なやり方はブルジョア議會乃至は會議に於いてこそ無理もなからうが、前に言つたやうな事情の下に於ける農民組合大會では餘りに無意味である。議案を少くして十分な討議を用ひ混迷せる議論、不透明なる事實を十分に打破闡明して始めて、議案として大にかけた大半の意義が生じ、且つそれが實行

的方面へも權威が加はるのである。

議案の説明に於いても「不十分」の感なきを得ない。私は前述の教育的意義に於いても、説明乃至提出理由に重きを置き度いのである。何故に議案とされたか、その事實的根據と理論的根據とを仔細に説明しなければ、第一に討論の基礎が生れて來ない。且つ其の説明によつて多數の代議員と、その背後にある組合大衆の、或は蒙を啓き、或は新たな注意を喚起することが出來て、したがつて討議に意義が生じて來るのである。例へば「勞農ロシア承認の件」を見ても、勞農ロシアを承認したる結果の、我國經濟に及ぼす有利を説明しただけでは足らない。勞農ロシアの大體の政策の變遷、日本の國家經濟が勞農ロシア即時承認を要する事實的根據、日本の無産階級のよつて受くる直接間接の利益等に亘つて説述して始めて、討議の基礎が生じ引いて日本無産階級の大衆の勞農ロシアに親しませ得るのである又例へば「國際勞働會議に關する件」と云ふ第三回大會の重大議案にしても、提議賀川君の説明とも思へないほど簡單にして要を得ず、不十分不徹底なものであつた。あれでは、國際勞働會議なるものが如何なる使命を持つものであるか、これに對して日本の勞働階級の從來の態度が何故に當然であつたか、その後の事情に如何なる變化が起つたか故に態度を變更する要が生じたかそれらの點に就いては代議員の多數と、代議員を通じて徹底さるべき組合大衆は、遂に解することが出來なかつたであらう。これらの事情は眞に目醒めた、そして常に周圍の事情に注意を怠らない都會の勞働者にとつても、一度び議案としてのその協議に提出する場合、十分なる説明を要するものであると信ずるが、今の程度の農民代表の協議に於いては、特にそれが重要であらうと思ふ。私はこれも決議の權威と云ふ意味よりも、前述の教育的價値といふ方面から特に遺憾とするのである。しかもあの重大なる議案が、賀川君のそのやうな説明だけで討議を用ひられないで「一擧に」可決されたことは、いろんな意味から大不滿を感ぜざるを得なかつた。

議案の提出理由説明の不十分から來る結果は、對議の基礎となる事實及び理論のないところから生ずる對議の錯雜混交である。議案の説明などはそつちのけで、各々前以つて考へて來た、ことを一應は述べておくと云つた傾が強く見えて來るのはそのためである。たとへば贊成者の贊成理由にしても、提出者の説明の不足を補ふとか、事實的根據を强めるとか云ふのでなしに、結局提出者と同じことを述べるに止まつてゐる。私達は農民運動と云はず、他の無産階級運動が、一擧進展するにつれて一歩づゝ科學的理論的實際的となつて行くことを願つて止まぬ

ものである。しかもそれは多く闘士の努力を待つて始めて、組合大衆をそこに導くものである。日本の無産農民解放運動は今や一大方向轉換をしやうとしてゐる。私はそれを右傾とか改良主義化と云ふのは、余りに概念的な觀方だと考へてゐる。右傾とか改良主義化と云ふ重き意味のものでなく、センチメンタルな、ロマンチツクな、非科學的、非理論的——眞に理論的なることは眞に實際的なることとである——な運動から、リヤルな、科學的な實際的な運動へ轉換、否、必然に進行して行つたのに過ぎないと觀てゐる一人である。かう云ふ僕に於いて、都市勞働組合運動よりは少くとも十年は遲れてゐると云はれる農民運動の指導者等は、特に運動の前途から科學的理論的實際的の方へそれを迎へ取ることに努力しなければならぬと思ふ。しかも農民團隊は都市勞働團隊に比して、質實にして實際的な要素を多分に蓄へてゐると云ふ强味さへあるのである。

四

昨年神戸の第二回大會でも農村無産階級と都市勞働階級との提携について、關西側と關東側とに、だいぶ見解の相違が認められたが、その空氣はまだまだ第三回大會にも持ち越してゐた。關東側は比較的都市勞働階級と密着した態度を持つてゐるが、關西側の大部分は依然として、分立的であり獨自的である。これは日本農民組合の關東側が總同盟と人的に可成り密着してゐるのに反して、關西側は總同盟とまるで隔離された狀態にあるのが一つの理由であらうと思ふ。しかし今年は昨年に比してそれがよほど緩和されることだけは認められたやうである。私一個の見解からすると、農村無産階級と都市階級とは、經濟的行動の範圍では、密着することはかなり困難である。然し政治的行動に於いては、かなり密着す可き斷面が廣いと思つてゐる。そこで現在の農民組合に見る職業的に强い意識が、次第に階級的に强い意識に變つて行くに隨つて、都市勞働階級との抱合は次第に實現されて行くものと信じてゐる。その度合は農民組合が政治行動を取入れる度合によつて決定されると見なければならない。

現在に於いても經濟行動よりは多少離れて政治的意味のある行動では、當然都市無産階級と結合して差支へないし、結合して行動することがより有力である場合が多いのである。例へば今回の大會を通過した諸の議案の中で、勞農ロシアの承認とか、過激法案の反對とか、支配階級による勞働立法の排斥とか云ふ政治的意味を含んだ行動では、既に都市勞働階級も同一の理由と同一の見地から要求乃至反對を表明してゐるのであるか

ら、尠くとも是等の行動に於いては都市勞働階級と提携し、共同に運動することが運動をしてヨリ有効にヨリ有力ならしめる所以であるが、まだそこまでは突入しないところに、都市勞働階級との提携にまつはる偏見があると思ふ。

「來る可き總選擧に對する對策」はこれも今回の大會の重大議案の一つで、いろんな意味で多大の注意を惹いた。討議も非常に白熱したものであつた。結局する所、サンジカリズムの思想と、ボルシエヴイズムの色彩を持つた思想傾向との鬪爭がそこに現はれたもので、一頃まではサンジカリズムの單純な運動原理の支配してゐた農民組合に、とにかくにもボルシエヴイズムの運動原理の幾分が輸入されたことは大いに注目に値すると思ふ。しかし討論が主として純理論の形をとるか、乃至はすつと局部的な實際に偏した形をとつたがために、この重大な討議があまりに有意義でなかつた事を遺憾とせざるを得なかつた。

選擧權行使の問題や、普選の問題でいつも政治忌避の態度に出る人々には、少くとも二つの先入觀念があると思ふ。一つは政治活動をやれば組合の勢力が殺がれ、或る場合には組合の結束をゆるめた結果組合の死活に影響すると云ふ偏見である。一つは政治行動の提唱には必らず背後に野心家がゐて、代議士になつて納り度いが故に、それを力說すると云ふ偏見である。經濟行動と政治行動との論議が、理論的に運ばれ、日本の解放運動の大局から、日本の支配階級の陣容から推斷論議されれば、解決に必ずしも困難する問題ではない。しかし以上の偏見から放射する氣分に於て、論議された場合はその解決と解決に基く統一的行動は容易で無い。しかも今回の大會での論議では、理論的方面も可成りに究明されはしたが、日本の資本主義の現實、無產階級運動の現在、選擧權行使、普選の實行に依る政治的光景の變化、それの無產階級に及ぼす關係等については、殆んど論議されなかつたと言つていい位である。そして主として以上の偏見の支配する論議を見たのである。その結果で見るとまだまだサンジカリズムの思想は、特に關西側の一部に深く根を張り、人物中心であつて團隊中心でなく、勢力中心であつて機能中心でない氣分がまだ〳〵濃厚である。これが日本の社會主義運動の或る時期に現はれた「潔癖」と同じものであるか否かは知らないが、とにかく一種の潔癖性が大衆的運動へのスムースな進行をさまたげてゐることは事實である。

そうした氣分でありながら小作人自身の作つた小作法の制定を要求し、過激法案、治警法、土地制などに對する、政治的意味を持つた決議をなしてゐるのである。これらを徹底的に貫徹す

るためには、統一的の政治行動を必要とし、それにはまた必然に政治行動、議會行動へと續く道であるが、要求はするがそれが實現のための行動はしないと云ふのが、その落ちである。私は農民組合に向つて今直に政治の積極的行動に向へと云ふのではない。たゞ潔癖と偏見と疑惑とに基く論議を拂拭して、理論的であるが故に實際的な解決の道を執つて貰い度いと思ふ。關東側の努力も認めねばならない。賀川氏の解決案も結構である。だが結合大衆が本統に納得がいつて、眞に動き出すことが何より大切である。

五

知識階級の排斥は、一度は工場勞働者運動も通つた道である。しかし現在では或る意味に於て解決のついた問題である。少くとも問題とされなくなつた死んだ問題である。ところで農民大會では、「規則改正の件」の討議に於て、農民以外の者を組合に入れるかどうかの問題で、端なくも知識階級の問題が展開されて來た。そして農民組合の一部特に岡山には極端なる知識階級排斥派があり、それほど極端でなくともそれに賛同する多くの人々のあることが明白となつた。勿論他の一方に於ては、關東の一部に見る如きこの問題を問題とせぬ程度に達したものもあつた。そこでこの知識階級排斥の聲が、一時の都市勞働階級に於いて見たように全般的なものとなるかどうかであるが、私はそうは考へない。堺氏は農民組合も一度はその道を通らなければなるまいと云ふ意味のことを述べてゐられたが、その通り方が、工場勞働者の場合とよほど趣が異ふと思ふ。しかもあれほど全般的なものとならうとは考へられない。この現象は大會中に現はれたところとして讀者諸君の注意を促すだけでよいと思ふ。討議の結果、やはり原案通りに知識階級も區別をおかぬことゝなつたが、そこには少しの無理もなかつたことを附加へておく。

最後に總同盟の「宣言」のやうな形式でなくても、大會の最頭に過去一ケ年間の戰積と、日本の資本主義の進展の實狀と、今後の、尠くとも來る一ケ年間の農民運動の行動方針を樹立したアクション、プログラムが欲しかつた。それは農民運動の統一の上からも、覺醒しない大衆に對する敎育としても、是非共必要のものである。それでないと根本方針の互に交錯した團隊の單なる協議會のやうな結果に陷り、議案の取扱ひ方に對する各代議員の根本精神にまつはる到底相容れない豫備が最後まで持續されることになるからである。私一個の考へからすれば、各議案の討議の重要さよりも、それに先立つて協議　樹立さるべきプログラムをヨリ重要視するものである。それの樹立は即ち本部員の周到なる知識と代議員の實地經驗の融合であり、運動進展のランドマークであると共に、行進の正確は羅針盤だからである。

來年東京で開かれる第四回大會には、更に一段の進展を觀得するであらうことを深く信じてゐる。（終）

外債に依つて暴露された我國財政の不信用

堀　江　歸　一

外債に關する善惡の兩説——外債條件の不利益であるとされる諸點——（一）外債の利率——（二）外債の發行價格と利廻り——（三）既發公債の乘換應募——（四）据置年限並に償還期限——（五）償還方法其他に對する外國の干渉——外債不成績の原因——外債の不成績は天災の結果なるか——財政當局者の自慢と外債の不成績——震災損害額の算出——生產者資本と消費者資本との別——經濟復興策の閑却されたこと——外債募集の必要の急迫したこと——正貨維持策の無效——外國資本家に足許を見透さる——何故に政府は斯く急迫した事情の下に居つたか——財政と國民經濟との關係——金融の緊縮——物價の騰貴——貿易の逆勢——外債不成績の責任者——外債募集後の經濟社會——北蒙らんとする二種の打擊——外資輸入の杜絕——金融市場に對する財政の壓迫

一

二月十三日官報を以つて布告された勅令並に大藏省令に依つて、我國が紐育に於て六分半利付米貨公債一億五千萬弗、倫敦に於て六分利付英貨公債二千五百萬磅を發行することゝなつた事實は世人の周知する所であつて、何等の細説を要しない。唯之に對しては、事情已むを得ざるに出るものであるとし、條件の如きも、現に成立した所のものが最善であつて、此以上に一步だも進めるを得なかつたと云ふ財政當局者の辯解に接して、世間では必ずしもさうと考へず、之を以つて甚だしき失態であるとし、國辱的外債であるとすら叫ぶ者もある。而して當局者以外に、當局者の說に贊成し、又之を承認する者が世間に廣きに拘はらず、今日に至るまで殆ど一人として見出されない有樣であるとすれば、外債國辱の極端論は兎に角として、今回の外債を以つて、餘程我國に取つて、不利のものであるとすることに就ては、殆ど輿論の一致した所と認められるであらう

何故に今回の外債は其條件に於て、不利なる點がありとされるか。第一は利率の高いことであり、第二は發行價格低く利廻りの極めて高きに至つたことであり、第三は償還期限の到來に若干の猶豫のある四分半利付英貨外債の乘換應募を認めて、殊更に巨額の債務を負うたことであり、第四は据置年限並に償還

年限の永いことであり、第五は償還方法や、將來に於て發行される擔保付外債の利益に均霑するに就て、外國の干渉の加へられたことであつた。是等不利の諸條件は相重なつて、外國市場に於ける我國財政の信用程度を第三等以下の標準點に低下するに至らしめた嘆なきを得ない。

二

第一、今回の外債が倫敦に於て六分、紐育に於て六分五厘であると云ふのは、今日まで我國の發行した外債の利率から考へても、兩市場に行はれる内外諸國の公債利率に徴しても、不當に高いものであることは、何人も疑を容れないであらう。從來我國の政府は外國市場に於て、財政上の信用を維持するに就て、種々の施設を爲し其内には餘りに信用維持と云ふ目前の事ばかりに齷齪して、他を顧みざるが如き無理の算段も少なしとしなかつた。即ち減債基金制度の下に勉めて多額の外債を償還したり、在外正貨を置いて、外國債權者の安心を繋がうとしたり、其一部分を利用して、外國市場に於て、我國の外債を買入れ、以つて市價の維持を計畫したり、在外正貨が缺乏すれば、特に多少の犠牲を忍んでも、之を補充する道を講じたりするが如き、幾多の手段が實行された。是等手段の一般的又は永久的効果に就ては、自ら議論なきを得ないが、目前の事實だけに就て、批評すれば、其間我國の財政的地位は外國市場に於て、上進したもの丶如く、四分利付又は四分半利付を以つて、倫敦市場に外債を發行することを難じとせざるに至つた。然らば今回六分又は六分半利付の外債の發行されたことは、我國が積年の努力に依つて、外國市場に築き上げた財政的信用の程度を一瞬の間に、墜落せしめたものであつて、何人も之に對して遺憾の念なきを得ないであらう。

第二、斯の如く今回の外債は利率の高いに加ふるに、發行價格の低きを以つてする。紐育に於ける發行價格の九十二弗五十仙であるのは、著しく低いとはしないが、倫敦の發行價格の八十七磅半であるのは、異常の低額であつて、斯く發行價格の低い結果として、兩市場に於ける外債の利廻りは共に七分前後の高きに上ることゝ爲るのである。斯くては英貨公債を表面上六分利としたことの如き、誠に有名無實の話であつて、米貨公債と共に、七分の利廻りに當る。斯くまでに利廻りを高くしなければ、當時我國の外債は倫敦並に紐育に於て、到底發行するを得なかつたものであるか。募債の局に當つた財政當局者並に當局者を助けた在外財務官が最善の努力を致して、尚ほ斯る結果を擧げ得たに止まると云ふならば、其說に贊成する外なきも

のゝようであるが、然らば愈々外債が市場に賣却された場合に、其市場が著しく騰貴し、最初の發行價格に對して、大なる開きを生じた事實に就て、當局者は何と辯解するであらうか當局者の凡腕は一方に徒に公債引受人に暴利を獲得せしめると共に、他の一方に於ては國庫に莫大の損失を蒙らしめた非難を免かれるを得ないであらう。外債は之を內國債に比較して、利率の低廉であることを以つて、特色とする。然るに新外債の如き、內國債に於けるよりも、遙に利廻りの高いことの歴然たるものがある。內國の資本家が斯る高利の放資物に着目して、外國から新外債の輸入を計畫し、一方に倫敦や紐育に於て、應募の旺盛である爲に、輸入の行はれ難いと云ふ事實に徵しても、今回の外債が利率に於て、利廻りに於て、法外のものであることは、之を疑ふの餘地なき次第である。

三

第三、我國官民が從來注意を拂つて居つたのは大正十四年二月十五日を以つて、第一回四分半利付英貨公債一億七千四百十五萬餘圓が滿期と爲り、續いて同年七月十日を以つて、第二回四分半利付英貨公債一億七千七百十二萬餘圓が滿斯と爲る一事であつた。我國財政の對外的信用が優秀なる程度に居る以上は、斯く公債の期限の滿了するに隨つて、低利公債に借換へ、以つて國庫の負擔を輕減する方針に出ることを當然とするが、我國近年の財政的信用を以つてして、果して低利借換の行はれるかどうかは、一個の疑問に屬した。又斯る借換が行はれ得る狀態に居るとしても、尙ほ外國の資本家なり、其代表者なりをして我國の足許を見透さゞらしめるには、右二口の外債に對して、償還を行ひ得るだけの現金は我國として必ず用意して、置かなければならないものと考へて居つた。從來在外正貨の豐富であつた時代から、昨今其乏しきに至つた時代に至る間、右外債の償還に必要なる分即ち三億五千萬圓は在外正貨の內に用意されて居つた筈である。然るに今回外債を發行するや、特に四分半利付第一回並に第二回英貨公債を以つて、新外債に乘替應募を爲すことを許容した。即ち政府は低利公債を態々利公債に借換へ、然も償還期限の到來する一年前又は一年半前に斯る高利の借換へを行つて其、の間國庫に利子の差損を蒙らしめたことは、掩ふ可からざる事實である。或は四分半利付公債所有者にして同公債發行の當時から、次に發行される高利の公債に對して、乘換應募を爲すを得る特典を認められ、此特典あるが故に、公債募集の容易に行はれるを得たと云ふが如き場合には、公債の高利借換も亦已むを得ざる所であるかも知れない。斯くの如きは

歐洲戰時交戰諸國が連續して公債の發行を行つた際に、現はれた事實であるが、我國の如く一方に外債償還の用に供されるものとして、豫め準備された正貨を擁しながら、他の一方に態々高利の公債を發行して、低利の公債に借換へるに至つては、徒に外國の資本家に暴利を貪らしめるの嘆なきを得ないであらう。

四

第四、今回の外債は英貨の分も、米貨の分も、据置年限は共に十五年であつて、右年限經過後前者は二十年間に、後者は十五年間に償還される規定である。償還年限は兎に角として、私は十五年と云ふ据置年限の餘りに永きに失することを認めざるを得ない。今回我國が斯る高利公債を外國市場に發行せざるを得ざるに至つた事情に就ては、別に之を論ずるが、假に我國財政の信用を以つて、昨年の震災火難の爲に、傷けられたものとする。然らば其傷けられたる今日に於て、高利公債を發行することは、事情の已むを得ざる所であるとしても、復興計畫が官民の手に依つて、着々進捗した曉には、一旦傷けられた信用も漸次舊に復するものとしなければならない。其の時に際して、財政當局者の先づ第一に爲す可き所は今回の如き特別の事情に基いて、發行された高利の外債を相當の信用程度に恢復した時に比例する低利の外債に借換へて、以つて國庫の負擔を輕減するに外ならないのである。然るに外債の据置年限が十五年と定められて居つては、其れに妨げられて、遂に借換の行はれることを期するを得ない。現在の財政當局者は今後十五年間我國財政の信用程度は遂に向上進展の機會を得ざるものと見極めて、斯る長期の据置年限を約定したのであるか、其れとも外國の公債引受業者が永く高利の獲得される保障の存する外債を發行して、市場の人氣を盛ならしめる爲に、此の條件を固執したものであるか。孰れとも之を判斷しかねるが、兎に角一面に於て我國をして永く高利の負擔に苦しましめ、他の一面に於て、後の財政當局者をして國民の負擔を輕減するに就て、自由の手腕を揮はしめる妨害の設けられたことを認めなければならない。

五

第五、今回の外債募集に際して、外國の引受業者から擔保提供の要求が出で、而して我國の代表者が之を容れなかつた爲に、遂に利率其他の點に於て、我國に不利なる外債の成立するの已むを得ざるに至つたと云ふ說もある。果して然りや否やは、他日當局者から僞らざる告白を聞かなければ、之を確めるを得ないが、如何に震災直後の我國經濟狀態に多少損傷の跡を

りと云ひながら、外債に對して、擔保を提供するとか、其提供を要求するとか云ふことが本來間違つた話ではなかろまいか。日露戰爭當時の外債に於て、擔保を提供したことすら、日本人としては心外であつたが、是れは戰爭の前途に對して、日本人の持つ豫想と歐米人の懷いた豫想との間に大なる相違のあつた結果として、姑く認容するの外なかつた。然も今日の如き平和狀態の繼續する日本の外債に擔保の提供を見るが如き、全然無用の事としなければならない。故に今回の外債に於て、擔保が提供されなかつたと云つて、其れを以つて、何等の誇りとするを得ない。啻に之を誇るを得ないばかりではない、今回の外債に於ては、擔保こそ提供しないが、他に之に代る可き束縛の我國財政に加へられたことを看過するを得ない。其一は公債の償還に就て、定額年賦償還の制限の存することであり、他の一は將來擔保付外債の發行される場合に於ける均霑の約定である。即ち英貨公債發行規程第九條に於ては「政府は大正十三年二月十三日より起算し、五個年を經過したる後は、本公の償還期日に至るまで、六個月每に九十萬三千三百二十四磅を支出し、本公債元利金の支拂に充つ可し」とあり、更に米貨公債發行規程第十條に於ては「政府は每年左の金額を支出し、本公債の元金償還に充つ可し。

一、大正十三年八月一日より起算し、五個年間每年五百萬弗、

二、前號の期間經過後の五個年間每年四百萬弗、

三、前二號の期間經過後償還期日に至るまで、每年四百萬弗、

前項の償還は大正二十八年二月一日前に於ては、買入銷却の方法に依り、同日以後に於ては、買入銷却又は抽籤償還の方法に依る、

第一項の金額は每月分割して、之を支出し、其支出金額に使用殘額あるときは、遞次之を爾後の月割支出額に充當す」

と定められて居る。即ち外國資本家の代表者が我國の外債引受に當りながら、飽くまでも此外債を確實の點に於て、安全の點に於て、無比のものとし、以つて放資者の需要を盛ならしめようと勉めたことは、右の償還規定を一瞥すれば、明瞭と爲るであらう。右の如き償還法は所謂定期定額の償還法と稱するものであつて、彼の濟崩償還法と共に、財政的信用の乏しき國に向つて、課せられたり、又は斯る國が其財政的信用を增進する爲めに、行つたりするのである。其方法が今、我國の公債償還法に適用されたことの如き、如何に擔保提供の要求を免かれる爲に、必要であつたとしても、我國自ら其財政的信用を蔑視した

嫌を免かれないのである。更に外國の資本家が我國の財政に干渉を加へた第二の點として、見る可きは、彼我代表者の間に、今後我國の發行する外債に擔保が設けられた場合には、今回發行の外債所有者亦其擔保の利益に均霑することの規定された一事である。此事は日本の財政は將來引續いて外債を募集しなければ、到底存立するを得るものでないと云ふ考への外國資本家の間に懷かれて居る證據であると認められるし、又將來日本が外債を募集すれば、其支拂能力は自ら危險と爲り、無擔保で發行された今回の外債に對しても亦擔保を以つて、其安全を保障しなければならないと考へた結果であると云へる。要するに今回の外債に對して、外國資本家の代表者が擔保の提供を要求しなかつたのは、必ずしも我國財政を信用した結果ではなく、寧ろ其之を要求しないことに依つて、公債の利子を高率ならしめんとする掛引に出でたものであると云へる。即ち無擔保に伴う危險を補う爲めに、定額償還法と將來の擔保に對する加入とを約定した點から考へれば、彼等の肚裡に藏されるものゝ何たるやは之を推すに難しとしない。

六

右の諸點から論ずれば、今回の外債が條件に於て極めて不利であつて、我國財政の不信用を中外に暴露したものであることは、何人が如何なる詭辯を弄しても、之を否定するを得ない。

然らば斯の如き不成績なる外債の募集されるに至つた原因は如何なる邊に存するであらうか。當局者は之を以て彼の如き震災火難に依つて、我國の經濟組織に大なる損傷を來したことに歸するであらうし、又斯くするのことを以て、彼等の責任を輕くするを得る所以と考へるであらう。果して然らば我國財政の信用程度の低き事實を中外に示す外債の發行されたのも、震災火難に次ぐ天災であり、前者の不可抗力であつた如く、後者亦不可抗力の一種であると云ふことに歸着する。如何にも彼の如き天災の後に於て、我國が外債を募集するに就ては、平生の場合に之を爲すものと比較して、相當の困難の伴ふことは、私と雖も之を認めるに躊躇しない。然しながら唯幾多の困難があつた爲めに、成績が不良であつたと云ふのでは、如何にも子供の使ひと同樣、智慧の無い話であつて、當局者としては、何處までも此困難を排除して、外債募集に進む可き道を平坦にし、以つて成績の良好を期しなければならない道理であつたが、當局者は果して此事を爲したであらうか。私は此點に就て、遺憾の念を懷くもの大ならざるを得ない。左に當局者の怠慢甚だしきものと認められる諸點を列擧する。

第一、震災火難に依つて、東京市を始め罹災諸地方の蒙つた物質上の損害に關する數字を過大に見積つたこと。

元來震災火難に基く損害の幾何であるかを調査することは容易の業ではない。然るに震災直後政府は或る筋を通じて、損害額の百億圓に上ることを公表した。後に臨時議會に臨んで、大藏大臣自ら此調査の絶對的權威を有せざるものであることを辯じて頻に之を打消すに勉めたが、當時世間に於ては之を半官的のものと認め、其意味に於て、海外にも傳承されたことは、明白の事實に屬する。或は燒失した財産や、其財産の運用に依つて、獲得され可き富の生産の停廢したこと等を一に數へ立てたならば、震災火難の損害が百億圓に上ると云ふことも、是認されるかも知れないが、私は考へる、此種の損害を調査し、眞に其國力に及ぼした打撃を知らうとするには、經濟學の所謂生産者資本と消費者資本との間に嚴重なる區別を爲し、前者を以て眞實の損害額としなければならない道理であることを。蓋し前者は其滅失と共に、直に之を補充する必要があり、これを怠つたならば、生産上に缺陷を生ずるに至るに反し、後者は滅失した所で、其所有者に取つて、損失であるに相違ないとしても、社會全體に對しては、必ずしも大なる不便を加へる次第でなく随つて之を補充するに就ても、或る期間を猶豫するを得るのであり、猶豫しても國民の生活に苦痛を及ぼすに至らない。東京市の如き帝都として發達し來つた大都會に於ては、特に斯る消費者資本の多額に上つたことは、疑を容れざる事實であつて、而して帝都樞要の地域の燒失した以上は、此種消費者資本の損傷も亦大であつたに相違ない。當局者が非公式に發表した震災損害額百億圓の内に、此種消費者資本に屬するものが幾何に上るであらうかは、之を計算するを得ないが、兎に角當局者が生産者資本と消費者資本との間に何等の差別を設けず、總ての損害を一列平等に計算して、百億圓と云ふ數字を捻出し來つたことは、内外國民をして我國の震災火難に依つて、蒙つた損害の如何に大であるかに一驚を喫せしめる所以と爲り、或は外國民をして日本經濟社會の再起の不可能を想像せしめる原因と爲り今回の外債にも亦不利の影響を及ぼすに至つたものと考へられるのである。

七

第二、我國に於ける民間經濟の復興計畫が今日に至るまで、其緒に就くを得ないこと。

震災以來今日に至るまで、既に半年以上の歳月を經過して居るに拘はらず、民間の經濟復興に對して、何等の對策が講じら

れて居らないことは、我國經濟社會に於ける一大不祥事であるとしなければならない。固より其斯の如くであつたのは、山本内閣の瓦解、清浦内閣の下に於ける議會解散等を以つて、重なる原因としなければならないことは勿論であるが、其原因の何れに存するを問はず、目前の事實として、經濟復興の計畫が全然閑却され、民間經濟社會は震災の損害を復舊するに就て、自己の力の外に、何等の頼む可きものを持たない。然も自己の力と雖も、資金の關係に於ては、金融著しく梗塞し、諸銀行の總てを擧げて、資金の融通に嚴重なる制限を施して居る爲めに、充分に之を發揮するを難しとするの趣きであるとすれば、我國の震災地の商工業が衰微沈滞の甚だしきを極めること、必ずしも不思議であるとしない。而して震災地は我國の帝都であつて消費地として、全國に冠たる地位を占めるものであるからには其消費地の衰微が全體の生産地方にも不利の影響を及ぼすのは當然の勢である。我國が斯る狀態を以つて、外國に臨むとすれば、外國の債權者が容易に我國に向つて、信用を與へず、外債の條件をして不利のものたらしめることも、免かれ難き所であるとしなければならない。

第三、外債募集の必要の急迫した事情の頗る明瞭であつたこと。

右の如き經濟狀態は次第に我國貿易の不權衡を誘致し、昨年來輸入超過は夥しき數量に上り、之を決濟する爲めに、在外正貨は近來著しく減少するに至つた。斯くて政府は昨年來頻に正貨の拂下を制限し、之を拂下げる場合に、輸入品の種類を選擇し、奢侈品の輸入に對しては、容易に其拂下げを行はないとか、爲替銀行の輸入信用狀發行に對しても、亦嚴重なる制限を施すとか、種々の策略を試みたに拘はらず、毫も效果を收めるを得ず、大正十四年を以つて、償還期限の到來する二口の英貨公債の償還財源を差引けば、在外正貨の餘裕は僅々一億圓を數へるに過ぎざる狀況と爲り、何としても外債を募集して、正貨を補充しなければ、我國對外支拂の行はれる望みなきに至つたのである。即ち政府が外債の募集に就て焦燥の態度を持するに至つたのも、事情の諒とす可きものがある。然しながら之を諒とするのは獨り内國人のみである。外國資本家の代表者から云へば斯く急迫した事情の下に、外債を募集しなければならない國ありとすれば、其弱點に乘じて、出來るだけ有利なる條件を要求し、高利を貪つて、其間に利益を占めようとするのが當然であると考へられる。我國から海外に派遣されて居る財務官なり、今回の募債に臨んで、特に在外財務官と事を共にした橫濱正金銀行重役某々氏なりは實際に如何なる手腕を揮つたであらう

或は彼等の努力の足らざりし爲めに、斯る不成績なる外債の成立を見るに至つたと云ふ非難を生ずるかも知れないが、如何に財務官に非凡の才能を備へる人物を得たとした所で、我國今日の急迫した事情に驅られながら、外債を募集して、能く外國資本家の代表者に乘ぜられるを得なかつたかは、大なる疑問であると考へられる。

是等の外に政治上の原因としては、我國の政界が近來頗る安定を缺き、政黨内閣にしろ、官僚内閣にしろ、國民的基礎の上に築かれたものでなく、些細なる原因に依つて、倒壞することを免かれない。殊に清浦内閣の如きに至つては、成立の當初から、天下に囂々たる非難を惹起し、今や總選擧に依つて、其運命を賭しつゝありと云つても、今後如何なる始末と爲るか、測り知る可からざる一事の如きも、慥に外國の資本家をして日本に對する信用を薄からしめたと云へる。

八

斯くて問題は他の方面に移る。何故に我國の財政は外債を急速に成立せしめなければならない程に窮迫した狀態に陷つたであらうか。多くの人々は震災に基く經濟社會の疲弊を以つて、其原因とするであらう。然しながら斯の如き震災があつたとした所で、我國の財政が平生から整理され、緊縮されて、年を閲すこと久しく、國民の財力亦豐富であつたとしたならば、復興復舊兩事業に要する公債の如きも、亦或る程度まで容易に内國に於て發行され、對外拂の債務を決濟するに就ても、外債募集に惶惑する必要を存しなかつた道理である。然るに我國に於ける實際の狀況は總て是等と正反對に爲つて居るではないか。財政は何時に爲つても根本的に整理されず、年々の歲計には募債を財源とする事業費があり、其募債の行はれる爲めに、常に金融市場を壓迫する一方に、政府が尨大なる財政を遂行する結果として、一方に通貨膨脹の勢を促すと共に、他の一方に勤勞並に物資に對する不自然の需要を招き、兩者相重なつて物價を騰貴せしめ、貿易に逆勢を惹起して已まなかつた次第である。果して然らば今日の如き窮迫した經濟狀態は多年に亙る秕政の結果として、釀成されたものであり、其事が原因と爲つて、今回の外債に於ける不成績を誘致したものであると斷定されなければならず、隨つて直接の責任者は清浦内閣であつても、此外に間接の責任を負はなければならないものが他に多々ある。原内閣の如き、高橋内閣の如き、實に其責任者として最も重荷に當る可きものである。私は新聞紙上に於て、高橋是清氏の新外債に對して、何か批評ケましき談話を爲したことを知つて、氏の

厚顔なるに一驚を喫せざることを得なかつた。

九

併し斯の如き不成績の外債の募集された今後の我國經濟社會は如何に推移するであらうか。外債の成立は當面に於ける對外支拂の困難を緩和したと云へるが、一方に支拂資金の充實するだけ、輸入は自ら容易に行はれるであらう。左なきだに復興材料の輸入に依つて、輸入超過の大ならんとすることは、何人も認める所である。或は本年一月中の輸入超過が殆ど一億圓に近かつたことは、少しく常軌を逸したと思はれるかも知れないが、之を全體から見て、輸入季節に於ては、輸入が特に多く、一方に輸出季節に至つて尙ほ全體の輸入超過と爲る可き傾向を抑制するを得ないと云ふのが本年中に於ける貿易の趨勢であると考へられる。

固より此趨勢に對しては、之を緩和し、抑制することに就て、政府は懸命の努力を致すであらう。然も其れが多くは無用の勞に終り、結局本年度の入超が空前の高に上ることは、想像に難からざる所であつて、隨つて一旦外債募集に依つて、充實された在外正貨の如きも、數個月の後には、再度の缺乏を訴へ、更に之を補ふ爲めに外債募集を必要とするに至りはしないであらうか。其必要なしとするからには、今後の數個月間に貿易の逆勢を一轉するだけの成算が當局者の胸裡に藏されて居らなければならず、啻に藏されるばかりでなく、實行の緒に就かなければならない譯であるが、實際に如何なるものであらうか、私の疑惧の眼を以つて、眺めざるを得ざる所である。

十

若し其れ我國が近き將來に於て、第二回の外債を募集するが如きことであつたならば、其條件の我國に取つて、不利なることは、今回以上であつて、益々我國財政の不信用を中外に暴露せざるを得ないであらう。左ればとて今回の外債は表面の發行額五億五千萬圓であつても、手取り金額は四億七八千萬圓に止まり、其內から三億五千萬圓の英貨公債を償還する以上は、在外正貨を補充する點から云つても、復興復舊財源を得る點から見ても、其效果は極めて小なるものである。復興復舊兩事業に要する公債の大部分は依然として內國市場に發行されることを必要とする問題を存するのである。而して此問題の解決當を得ざる限り、內國經濟社會が不安の狀態を脫するを得ないことも亦已むを得ざる所に屬すると認められる。

斯の如く推して來ると、私は今回の外債募集に依つて、以

の金融市場に打撃の加へられるに至ることを感ぜざるを得ない。打撃の一ッは高利外債の發行に依つて、民間事業家の行はんとする外債輸入の沮害されるに至ることである。蓋し國債の條件が或る程度まで私債の條件を支配するのは、當然の事實であるが、外債の場合に於て、此事實は特に著しく現はれ、外債の利子に若干の步合を加へたものが民間の會社なり、事業家なりの外國に於て借入れんとする資金の利子と爲るのである。然らば今回の如く國家自ら利廻り七分の外債を發行したと云ふことは、民間の行はんとする外資輸入の標準點をして一割内外の見當に引上げしめる所以であつて、斯る高利の標準が民間の外資輸入を妨げる原因となることは論を俟たない。蓋し如何なる事業家と雖も、一割の高利を拂つて、事業資金調達をしたのでは、爲めに感ずる負擔大ならざるを得ないからである。昔は外資輸入は低利の資金を調達する一の便法を以つて目され、内外の利鞘は三分以上に達するを例とした。然るに今國家の信用を以つてして尙ほ七分内外の利子を拂はなければならず、而して其れが民間外資の輸入される標準となるとすれば、民間當業者の外資借入れには、一割又は之に近い利子を負擔せざる可からざるに至るであらう。斯くして高利外債の發行は自然民間當業者の行はんとする外資輸入を杜絕し彼等をして自然内國市場に於て、資金の調達を計畫せしめる結果内國に限りある供給の本を官民兩者の間に於て、爭奪し、益々金融緊縮の大勢を馴致せざれば、已まざることゝ爲るであらう。高利外債の弊害は茲に於て愈々顯著なりとしなければならない。

然らば何を以つて將來に於ける對外的信用を增進し、今日窮地に陷つた我國財政に一道の光明を見出すことゝす可きであらうか。此點に就ては、簡單に事の一班を述べる。我國財政の信用を快復し、又增進するに就ては、其内國に關するものと、外國に關するものとに依つて、何等の區別を存しない。財政の全體に亙つて、緊縮を施し、經費を節約すると共に、公債發行の必要を除却し、財政上の關係から、物價を騰貴せしめた勢を制し、輸入超過を抑へて、貿易の均衡を求め、寧ろ有利なる貿易上の差額に依つて、單に外債の利拂に充てるに止まらず、其元金を償還する方法に出でゝ始めて財政的信用の恢復に資するを得るである。是等の諸點に於て、政府の意る所、從來の如くであつたならば、我國の財政的信用は永く三等國標準に居り、或は其以下に下ることとなしとしない。是れ吾人の深く憂いとする所である。

勞働總同盟の劃時代的宣言

赤松克麿

一、

過ぐる二月十日から三日間、東京市芝區協調會館に開かれた日本勞働總同盟第十三年大會は、勞働總同盟の運動上、劃時代的の意義を有し、且つ廣く我國一般の勞働運動に重大な影響を與ふるものとして、世上の注意を惹いた。それは今年の大會そのものが重大だつたといふよりも、此の大會が重大な宣言を發したからである。總同盟は、毎年時宜に適した宣言を發する慣例になつて居るが、今年の大會宣言は、從來の其れに比して最も重大であり、從つて劃時代的だと言はれるのである。宣言の冒頭に於て

「今や我國の勞働運動は、最も重要なる轉換期に立つて居る。吾等が大正十三年大會に於て、茲に本宣言を發するは、獨り日本勞働總同盟の運動のみならず、廣く我國勞働運動史上に於ては特に重要なる意義を帶ぶるものであることを確信する」

と述べて居るのは、今年の大會の幹部及代議員が、非常な意氣込みと愼重な考慮とを以て、此の宣言を發したことを物語つて居る。

二、

一體、社會運動は、其の時代の社會的環境に應じて必然的に生じた運動である。そして運動の方針及形態も、部分的には多少自由裁量の餘地もあるが、大體に於て必然的のものである。故に、或る時代に於ける勞働運動の形態の方針が、奇激狂躁に見えても、それに依つて直ちに勞働運動者の道義的責任を問ふ譯には行かぬ。今回、勞働總同盟が過去の運動形態及方針を變改して、新しい宣言を發したとしても、それは總同盟全組合員の人爲的所爲でなく、社會的環境の變化に應じた戰術方針の必然的變化に過ぎないものであつて、今後、社會的狀勢の變化に應じて又總同盟の態度が如何に變化するか、到底豫測を許さな

いのである。宣言は冒頭の文句の次に「抑々無產階級運動、勞働運動は、其の對象たる資本主義の發展階段と其の階段の示す社會狀態及び味方の勢力の變動に應じて絕えず戰術を變更して行かねばならぬ。」と述べて居る。總同盟の今回の新宣言を以て、總同盟が過去の罪過を悔悟して、本質的に右傾し、そして今後永く此の態度を以て一貫するものと早合點する論者も相當あるやうであるが、それは飛んでもない見當違ひであることを述べて置く。

さて我國の勞働運動は、歐洲大戰後則ち大正八年頃から漸く活潑の步調を取つて來たのであるが、宣言は、歐洲大戰の結果に依る世界的社會不安より、之れが我國勞働運動に及ぼした影響、我國資本主義の特殊的發達と世界的社會不安とに條件づけられた我國勞働運動の今日までの過程等を次の如く述べて居る。

「歐洲大戰に依つて打開された社會不安の暗影は、資本主義社會の內部的矛盾を益々增大せしめて之を崩壞の危機に近づかしめ、それと同時に無產階級運動の飛躍的進展を見るに至つた。一方に於て支配階級は必死の努を揮つて、現制度の維持に努力し、無產階級に對しては、假借なき彈壓の刄を揮ひつゝある。

翻つて歐洲大戰後の我國勞働運動を見るに、無產階級勃興の世界的氣運に刺戟せられて、我國勞働運動は、非常なる意氣と自然的奮鬪とを以て階級鬪爭に參加して來た。これに依つて我國勞働階級の戰鬪分子は、勞働階級解放の目的と使命とを自覺するに至り、幾多の試練を經て、漸く戰鬪的勞働組合の基礎を確立するを得たのである。

元來我國の資本主義は、順潮なる發達を遂げざる間に、世界の激烈なる帝國主義的形勢に脅迫された結果、早熟のまゝに資本主義發達の最後の段階たる帝國主義の形態を採るに至つた。故に我國の資本主義は、自由主義を經ずして直ちに帝國主義化し、從つて專制的色彩を多分に帶び、無產階級運動の自由を抑壓する幾多の障碍を橫へて居るのである。其の上に、正に高潮に達して居る世界的階級鬪爭の氣運は、歐洲大戰後漸くにして自覺せる我國無產階級の少數分子をして、其の思想的水準を急激に高めしめたが、一方に於て、勞働組合の無產階級解放運動に於ける使命と職分とを充分に認識する事を得しめなかつた。斯くの如き形勢は、必然的に無產階級運動の大衆化を困難ならしめ、理想に燃ゆる少數者の運動を、動もすれば潔癖と生硬に傾かしむるに至つたのである。我等は過去に於ける我國勞働運動の過程は、必然的に我資本主義の跛行的發展に應じたるものなることを聲言する。

三、

我國は、言ふまでもなく、資本主義國家として後進國であり、從つて勞働運動發達の點からしても後進國である。我國の國民性や地理的條件等の種々なる要素も影響して居るだらうが、主として此後進國としての特殊的立場が、我國勞働運動の特殊的發達の過程を、有力に條件づけて居ることは確かである。

我國は明治維新後、歐米の資本主義經濟様式を輸入して、漸く資本主義の萠芽が成育しようとする時、先進諸國の資本主義は帝國主義化して、國際競走の形勢が次第に熾烈に向はんとする傾向にあつた。斯くの如き形勢に當面して、未だ封建勢力に左右された明治政府は、富國强兵を國策の標語とし、國家の庇護の下に資本主義の發達促進を圖ることになつたのである。産業革命も政府首唱の下に行はれ、鐵道も海運業も海外貿易も諸種の大工業も、政府の厚き保護の下に成長して來たのである。先進國の資本主義が、封建勢力に對抗し之れを驅逐して、獨自の支配勢力を獲得したのと違つて、我國の資本主義は藩閥官僚軍人と結托し、其の庇護と恩惠に依つて地歩を開拓して來たものである。我國の大企業に官營若くは半官營のものが多く、經濟界の有力者に政商が多いのは、之れが爲めである。

我國の資本主義は戰爭毎に著しい進展を示した。而して其の進展は、激烈なる世界の帝國主義的競走を背景としたものであつて、資本家的自由主義の發達を見る餘裕もなく、獨自の支配的立場を取る事も出來ず、早熟のまゝに資本主義發達の最後の段階たる帝國主義の形態に進むに至つたのである。未だ自由主義の發達を經驗しない我社會にあつて封建的傳統に依る幾多の障碍が、無産階級運動の自由を抑壓して居ることは當然である。我國には今日尚ほ治安警察法其他の×××法律が儼存し、官憲は單なる勞働爭議ですら之れを犯罪視して居るのである。

我國の勞働運動は、歐洲大戰後の世界不安に刺戟せられて、大正八年頃より擡頭して來たが、長い間專制的抑壓の下に鬱積して居つた無産階級の反抗的氣運は一時に勃發して、非常な勢を以て運動は躍進して來た。そして階級鬪爭の後進國としての特徴は、先進國の白熱點に達した階級鬪爭の思潮がドシ／＼流れ込んで來て、まだ組合の基礎を固める暇もなく、勞働運動者の思想的水準を著しく引き上げてしまつたのである。其中で特に我國勞働運動者の心を捉へたのはサンヂカリズムの思想であつた。サンヂカリズムが勞働組合員の階級意識と鬪爭精神の訓練に與つて力のあつたことは認めなければならないが、勞働運動者に組織と實力を與へるよりも、空想と幻影を與へたことは

明かである。其他種々の思想的潮流が、我國の現實的社會狀勢に當てはめられないで、直輸入のまゝに縱横に論議せられたのであつた。

四、

我國支配階級の無産階級運動に對する專制的態度と我國勞働運動者の急激なる思想的水準の昂騰就中サンヂカリズムの浸染とは相俟つて、宣言の中に述べてあるやうに、必然的に勞働階級運動の大衆化を困難ならしめ、理想に燃ゆる少數先驅者の運動を、動もすれば潔癖と生硬に傾かしむるに至つたのである。量よりも質を重じ、現實的利益を輕んじて理想を追ふに急であるかの如き風潮を生ずるやうになつた。日本勞働總同盟が創立以來十三年を經過する今日、未だ社會的一大勢力を築くことの出來ないのも之れがためであつた。宣言の中に、右の如き諸種の社會條件が「勞働組合の無産階級解放運動に於ける使命と職分とを充分に認識することを得しめなかつた」と述べてあるが、此の言葉の意味は、之れを宣言中に挿入することを提議した代議員の說明に依れば、過去に於て勞働組合の指導精神が、同盟組合的な舊式な勞働組合主義に囚はれたり、サンヂカリスチックな勞働組合萬能主義に支配されたり、勞働組合で政治的職分をも果さんとする八百屋的組合主義に累されたりして、勞働組合の無産階級解放運動に於ける正當な使命と職分に就いて無定見なのであつた。それは無定見ならざるを得なかつたのであつた。勞働組合の思想的水準が正しい意味に於て昂騰したのではなく、唯だ外氣に煽られて漫然と昂騰したのである。勞働組合の指導精神の不定不安は、勞働運動の正常の發達を甚しく沮害する結果になつたのである。

五、

宣言は更に進んで次の如く述べて居る。

「然れども若し吾等が、今後猶ほ依然として舊來の態度を持續するならば、それこそ大なる誤りであり、過失を犯すものである。何故ならば、今や吾等は過去に於けるよりも、其の政策をヨリ現實化し、積極化せねばならぬ必要に迫られて居る。而して其の必要は最近に於ける我國資本主義の示しつゝある傾向と勞働階級の勢力の増大を、吾等が正確に觀察することを得たからである。我國の勞働組合運働は、少數者の運働から轉じて、大衆的運動に向ふべき一階段に到達したのである。改良的政策に對する從來の消極的態度は、積極的に之を利用することに改められなければならぬ。例へばブルヂョア議會に依つて勞働階

氣の最大的無實を期待する所毫もなきは勿論なれども、普選實施後に於ては、選擧權を有效に行使することに依りて、政治上の部分的利益を獲得すると共に、無產階級の政治的覺醒を促し又國際勞働會議に就いても之が對策を愼重に考慮し、以て我國勞働組合發展の爲めに計るべきである。

吾等は階級的利害の一致に依り、分立せる勞働組合の合同は勿論、組織されざる勞働階級の結束を計り、現實的利益を獲得しつゝ、終局の目的に向つて進むべき勞働組合運動本來の面目を發揮しなければならぬ。

明徹なる批判力と階級意識に目覺めたる今日の吾等戰鬪的勞働組合員は、支配階級が勞働階級の革命的精神を鈍らすために與へんとする改良的政策を利用するとも、斷じて墮落せざることを信ずるものである。」

六、

勞働總同盟が其の政策を、過去に於けるよりも「現實化し積極化せねばならぬ必要に迫られた」其の動因たるべき「最近に於ける我國資本主義の示しつゝある傾向と、勞働階級の勢力の增大」とは何を意味して居るのであるか。

一國の支配階級は、無產階級の戰鬪的前衛に對して、一方に彈壓の刄を用意すると共に他方に階級鬪爭を緩和せんとする民主的手段を備へて居る。聰明なる支配階級は、常に巧みに兩個の手段を並用して、無產階級の戰鬪分子に對峙して居る。最近、我國の支配階級が、從來の彈壓手段一點張りの方針を改めて、幾分民主的手段をも並用せんとする傾向の見えて來たことは明かである。普選問題にせよ、勞働立法にせよ。國際勞働會議にせよ、勞働運動取締りにせよ、支配階級就中彼等の中の進步分子は、相當の程度に改良主義的態度を示して來た。社會主義者征伐を一專業とする警視廳の一幹事の口から「第三インタナショナルは困るが、第二インタナショナルならば差支ない」といふやうな言葉を聞くやうになつた。

翻つて我國勞働運動の勢力を見るに、其の數量及び規模に於て甚だ微弱なるを否み難いけれども、最近五個年間の惡戰苦鬪を重ねた幾多の試練に依つて、鮮明なる階級意識と明徹なる批判力と堅實なる階級道德と小規模ながら戰鬪力集中組織とを備へ得るやうになつた。之れは內容的に見て、勞働階級の勢力の增大と認むべきものである。かくて勞働階級は今日漸く、支配階級の與ふる改良手段を利用し、之に依つて勞働組合運動の大衆化を裨益する自信を有するに至つたのである。勞働階級の一隅は、尙ほ一切の改良手段を否定して突進すべきことを說く

論者もあるが、勞働總同盟は、現下の社會的形勢に於ては、改良手段に對する消極的態度を積極的に改め、以て勇敢に大衆運動に向ふべきことの妥當なるを斷定したのである。そして若し今後、勞働階級の戰鬪的前衞が、猶ほ依然として舊來の態度を持續するならば、それこそ大なる誤りであり、過失を犯すものであることを言明したのである。

宣言が、改良手段利用に依つて墮落せざるは勿論、改良手段の本質に就き其の部分的價値しか認めて居ないことは、議會政策の利用に關して「ブルヂョア議會に依つて勞働階級の根本的解放を期待するところ毫もなきは勿論なれども、普選實施後に於ては、選擧權を有效に行使することに依りて、政治上の部分的利益を獲得すると共に、無產階級の政治的覺醒を促し」云々と述べて居ることに依つて明かである。尙ほ國際勞働會議に就いても、總同盟は之れに滿幅の信頼を繼ぐ譯でもなく、また從來の態度を一變して無暗に之れに對して色氣を示す譯でもない。唯だ從來採つて來たおほまかな否認的態度を改めると共に、若し政府にして、勞働代表選出方法其他に就いて勞働組合に誠意を披攊するならば、之が對策を愼重に考慮して、以て我國勞働組合發展のために計らんとするのみである。

七、

無產階級運動が、時の社會的狀勢の變化に應じて、絕えず變更すべきものであることは、旣に宣言の述べたところであるが宣言は之を繰り返して最後に次の言葉を以て結んで居る。

「吾等が無產階級解放運動は、今後と雖も隨時敵の狀勢と味方の勢力の變化に應じて、其の戰術も變更されなければならぬ。併し乍ら、如何に現實の必要のために、政策の上に變化が行はれやうとも、無產階級解放の根本精神に就いては、毫も變りなき事を聲明する。」

形勢の變化に應じて、絕えず戰術を敏活に且つ正確に轉回して行く練達な智謀と、如何なる環境に處しても、純眞なる階級情操を失はない道德性とを兼ね備へることは、實際困難なことである。併し、たとへ其の完全は期し難いけれども、勞働總同盟は今や大膽に積極的方針を取るの必要に迫られたのである。過去の潔癖と生硬を棄てゝ、勇敢に大衆を基礎とする運動へ轉じたのである。そしてまた斯くするに就いて自信も獲たのである。敢て數量に於て我國最大の勞働組合と僭稱はしないが、其の組織の全國的且つ全產業的になると、勞働階級の最も優秀なる戰士の包擁されて居ると、勞働組合として最も古き歷史と經驗とを有する等の點に於て、我國代表的の勞働組合たる勞働總同盟が、我國無產階級運動の重大な轉機に際して、此の宣言を發したことは、日本の勞働運動史上特筆すべき事件であることを斷言して憚らない。

水平社大會の印象

堺利彦

三月三日の寒い朝、私は水平社の第三回大會を見るべく、二三の友人と共に京都に入つた。

その直ぐ前、大阪では農民組合の大會を見た。二月の初には東京で勞働總同盟の大會を見た。此の三つの大會を比較した記事を作る事は非常に面白いと考へたが、今は改造社の注文に從つて水平大會の記事だけを作つて見る。只だ折々、他の二大會の事をも引合に出す事にする。

或る停留場で電車を待合せてゐると、急に突進して來た自働車の上から、我々の群に向つて叩きつけるような勢ひで多數のビラが撒布された。見ると水平大會の知らせだ。『來れ岡崎公會堂へ』『荊冠旗を高くかざせ』『人間禮讃のよき日の爲に』と云つたような調子である。これで先づ會場の氣持が豫感された。

岡崎公會堂、京都の町にはふさわしい共の舊日本式の御殿作りが、水平大會にはチト不似合に感じられる。先年、我々も一度こゝで演説會を開いたが、何んとなく落ちつきのわるい氣持だつた。私はそんな事を考へながら公會堂前の廣場を歩いてゐた。會場の方から岸野重春君（水平社青年同盟の代議員）が走つて來て、私の手を取つて早く來いと云ふ。何んでそんなに急き立てられるのかと思つてゐると、今度はうしろの方から三四人の洋服男がやつて來て、チョツト來てくれと云ふ。勿論、警察だ。岸野君が色々と斷つてくれた甲斐もなく、私は川端署に檢束された。然し程なく援兵が來た。水平社の長老栗須七郎君が驅けつけてくれた。どういふ風に署長を說き落したものか知らぬが、兎にかく私の檢束は解かれた。私は栗須君に連れられて、裏の入口から公會堂にはいつた。正面から故障なく入場するのとは、大ぶん違つた緊張味を感じた。

大會は今正に始まつた處であつた。議席も、二階の傍聽席も、ギツシリと人で埋まつてゐた。優美な、高雅な、きらびやかな、貴族趣味の場内が、水平民族の爲に踏みにじられてゐた。

壇上には顎髯の長い老人が座長席に就いてゐた。其のうしろには數十本の黑色の『荊冠旗』が飾り立ててあつた。旗の作り方は、こゝでも農民組合でも、たぶん友愛會（勞働總同盟）以來のを手本にしたのだらうと思はれる。棹の先の鎗の穗など、皆な同じ恰好に出來てゐる。然し色にはそれぞれの相違がある。總同盟には赤が多い。農民組合では靑が目についた。そしてこゝは總て黑だ。この黑色にどういうイワレがあるかは知らない。

荊冠、卽ちイバラのカムリ、このマークの上に、水平社の諸君が自ら猶太民族に比してゐるらしい所が見えて甚だ面白い。農民組合のマークなる、鎌と鍬と稻との組みあはせは、何處やらの新しい國のマークに善く似てゐるといふ評がある。總同盟は其の點に於いて著るしい特色がない。

座長が議事に不慣れで混雜を起したり、行惱みを生じたりする所も、僅に第三回目の大會の趣きを示してゐた。やがて議長南梅吉氏が着席した。小柄な、溫厚らしい、品の好い風采である。別に副議長席があつて、栗須氏と松本氏とか指名されたが二氏は辭退して其の任に就かなかつた。『私には別に命がけの仕事がある』などゝ栗須氏は氣焰を吐いてゐた。

私は農民大會で杉本氏に紹介されたが、氏は福岡の人で、其の大きな堅つたりした體軀がたしかに親分といふ風采に見受けられた。然し肉付のいゝ赤味を帶びた顏に、チヨビンとした顎髯をつけてゐる其の洋服姿には、多分の新らしい味があつた。農民大會の傍聽席で、小作爭議の寄附金を募る爲に帽子が廻された時、私も自分の近處を集めるだけの手傳ひを仕ようと思つて、鳥打帽をぬいで隣席隣々席あたりに差出した時、丁度そこに松本氏の顏が見えて、十圓札を一枚ほりこんでくれた。

南議長の隣りに『議事進行係』として駒井氏が着席してゐた。南氏は餘り大膽でもなし、テキパキと議事を進行させるには、少し溫厚すぎるように見受けられた。そこで駒井氏が補佐役といふ格で、半分以上、議長の職務を實際に行つてゐた。これは前大會以來の慣例だそうだ。總同盟の大會で鈴木文治君が、十年來の經驗とは云へ、いかにもあざやかな議長振を見せてゐるのを思ふと、こゝにも一人、是非あゝいふ『名議長』が欲しいものだと痛切に感じた。議長といふものは一種の技術者なのだから、德望や人格ばかりでは十分に出來ない。

然し、議事法などに拘泥さず、いつも多少の混亂の中に議事がズン〳〵運んで行く所に、又一種の面白味が無いでもない。或時など、議案の說明者が質問者に對して『馬鹿』よばわりをしたと云ふので、しばらくの間、大混亂に陷り、進行係まで壇下に飛びおりて來て鎭撫に努めるといふ騷ぎであつた。結局、說明者の謝罪的取消で鳧がついたが、馬鹿よばわりに對する詰責の理由が特に面白い。即ち『人間禮讃』をモツトーとしてゐる我々水平社員が、自ら同族の兄弟に對して侮辱的言辭を弄するのは最も不都合だと云ふのであつた。

總じて議場に活氣の多い事、熱の高い事は、他の二大會に比べて、こゝが一番だと思はれた。去年に比べると緊張味が少い、今年は多少ダレ氣味だといふ批評も聞いたが、それでも他の二大會よりは餘ほど多く緊張してゐた。總同盟大會は久しく議事に慣れて全體が秩序立つて居り、殊に肝腎な討論を委員會の樂屋で片づけてしまふといふ處まで達してゐるし、農民大會は素樸で剛健な風はあるに相違ないが、中年老年の人が多くて二重廻しを着てバスケットを提げた恰好など、隨分不活潑に見える點もある。然るに我が水平大會には、飽くまでデモンストレーションの意氣込が見えて、事務的な所は甚だ少い。

傍聽者の一人なる山本宣治氏は、農民大會に於ける二重廻しバスケット姿の年長さを指摘すると同時に、勞働運動に於けるルバシカの流行と、水平大會で目立つた長髮とは、青春期的現象として擧げて居られた。青春期といふ言葉の中には、個人の青春期と、運動の青春期と、二つの意味が含まれてゐると思ふ。我々の社會主義運動の中にも、ルバシカと長髮とが青年の間に多少の流行氣味は示した事がある。日本の社會主義運動はもう二三十年の歷史を持つてゐるが、それでも猶ほ青春期の特徵が亡び盡きないでゐる。水平社の長髮もまだ暫らく續く事だらう。

此のついでに私の失策を一つ記しておく。私が赤松君その他二三の傍聽者と共に、二階の廊下に立つて、大會に對する多少の批評をしてゐると、赤い襷をかけた何かの委員らしい人が來て、行きなり私共を叱りつけた。「しやべるなら外に出てしやべれ！」。如何にもしやべるのは惡かつた、たとひ直接に議事の妨害にはならぬにしても、議事中に廊下で談話するのは宜しくないわけであるから、私共は其の罪を謝して直ぐに又傍聽席に就いた。然し委員は單に私共のしやべつたのを叱つたのではなかつた。ハツキリとは聞えなかつたが、『生意氣な事を云ふとヒネりつぶすぞ！』と云つたような棄ぜりふで、彼は私共を睨みつけた。私共の批評が無禮な惡口と認められたのであつた。こう

いふ處にも、『徹底的糺彈』を高調する水平社員の意氣込の一端が現はれてゐる。

議案の數は何十件といふ多數であつた。然し私の記事は事務的の報告ではないから、單に思ひだしただけの事を書きつける。現に私は今これを書きながら、一枚の材料書類も持つてはゐない。

最初、決議として例の『徹底的糺彈』が現はれた。水平社運動の全般に漏れなく行きわたつてゐる所の根本精神は、實に只だ此の一事であらうかと思はれる。言語を以てするにせよ、行動を以てするにせよ、苟くも彼等に對して侮蔑の意志を表示する者があるならば、彼等は其者に對して『徹底的糺彈』を加へると云ふのである。彼等は實に此の『徹底的糺彈』の五字を法悦の題目としてゐる。そして彼等は此の題目を實現し遂行する爲には、謂ゆる『命がけ』を以て突進するのである。此の決議案が滿場の大喝采と大歡喜とを以て可決された事は無論である。

徳川家の一門に對して位記返上を勸告するの件、本願寺の募財を拒絶するの件などは、水平大會以外に見られない、最も特色のある議題であつた。殊に後者に於いて、水平社が飽くまで眞宗の教權に反抗する所は痛快を極めてゐる。從つて水平社出身の僧侶は『黒衣同盟』といふを作り、本願寺の朱衣や紫衣から獨立してゐるさうだ。農民大會が小學教員に對する不信任を表明したのも、少しく之に似てゐるが、意氣込は比べ物にならない。

勞農ロシヤの承認を大多數で可決したのは、水平社として明白な一進歩と考へられる。コムミユニストとして知られた高橋貞樹君が賛成演説をやつた。然し、水平運動は政治運動と違ふ、從つて勞農ロシヤの承認などは問題外だといふ反對もあるにはあつた。その時、有名な、山田少年が演壇に飛びだして、『今ごろになつてロシヤ承認の可否を論ずるのは餘りに悠長過ぎる』といふ大氣焔を吐いて大喝采を博した。

山田少年は水平運動の一名物である。年は十六七くらいだと聞くが、體格はそれよりもズツト小さく見える。それに係はらず、彼は非常の雄辯である。演説には慣れきつてゐる。傍聽席から浴せられた皮肉の野次に對して、『馬鹿！』の一語を以て一蹴し去つたほど場慣れがしてゐる。聲にはまだ子供臭い音調があつて可愛らしく聞えるが、其の思想は既に十分成熟してゐる。

外にも二三の少年が演説をやつたが、山田少年に負けないく

らいの雄辯家もあつた。どうしてこうまで少年雄辯家が揃つたものかと怪しまれるくらいであつた。思ふに、多數の少年が特殊民として學校で侮蔑されてゐる其の苦難が積り積つて、遂にこうした代表的の反抗者を生じたのであらう。

婦人水平社の問題の時には、數人の若い婦人が演壇に立つた。『私共は穢多の子といふ事と、女といふ事との爲に、二重の壓迫を受けてゐる』といふ樣な憤慨が漏らされた。若い婦人が自ら『穢多の子』と稱して其の反抗的の意氣精神を誇るまでに、世の中は進んで來たのである。私はそうした若い婦人や少年の演説を聞いた時、窃かに涙ぐむ事を禁じ得なかつた。

農民大會にも總同盟大會にも少年はゐない。殊に農民大會には老人が多い。少年は水平大會の一特色である。婦人は農民大會にもゐた。殊にお齒黑をつけた中年のおかみさん姿が頼もしく見えた。彼女は恐らく後家さんだつたらう。强味のある熊本辯が非常によかつた。この點に於いては、總同盟大會は話にならない。一人の婦人代議員もない。婦人部設置の問題の時、僅かに代議員以外の一婦人を演壇に招きだして議場を飾つたに過ぎなかつた。

水平社は政黨政派に超越するといふ提案もあつた。これは勿論、現在の政友會や憲政會に超越するといふ意味であらうが、然し一面には、總ての政治運動に反對するといふアナキスト流の態度もあるらしく見えた。勞農ロシヤ承認に反對した態度も矢張りそれらしく見えた。謂ゆる『徹底的糾彈』にしてもが屢々政府權力との衝突に歸着してゐるのに、政治運動に超越して『善き日』に到達しようとするのは、隨分無理な空想ではないかと我々には考へられるけれども、そこに又水平社一流の、殊に其の青年期に於ける、誇りがあるのだらう。

水平社の聯盟本部が執行委員と稱する役員を置いて全國の水平社に號令してゐる形があるのは宜しくない、聯盟本部は單なる電話交換局でなければならぬ、從つて執行委員といふ名稱を變更して單なる事務員とすべきだといふ提案があつて、一時だいぶん賑はつた。こゝにもアナキスト流の『地方分權説』が現はれてゐた。

この地方分權は、水平社が部落々々に成立して行つた歴史に考へて、誠に當然の事と思はれる。然し運動が大きくなり、强くなり、盛んになるには、モット組織的な、モット緊密な、モツ首尾一貫した、全國的の大團體にならねばならぬ譯合だらうと我々には考へられる。尤も、今度かうした提案が現はれたのは、そういふ組織的の發展に逆行する意味ではなく、別に現在

の幹部に對する反抗といふ意味合があるのかとも察せられる。それならば改革的意氣として大いに愉快な事である。

一體、今年の大會が去年に比べて緊張味が薄いと云ひ、少々ダレ氣味があると云ふのは、畢竟、水平社の内部に斷乎たる改革を必要とする點が生じてゐるのに、それを暫らくの間、曖昧の中に葬らうとする姑息の態度に依る事だといふ批評も聞いてゐる。我々には内部の事情など委しく聞き知る便宜はないが、水平社が一時にあれほどの反抗的勢威を示した以上、それに對する一面の壓迫と、一面の誘惑とがやつて來るのは當然である。壓迫と誘惑、そこには必ず沈滯腐敗の氣が生ずる。さすがの潑溂たる水平社も、早く既に何等か改革を必要とする事態が發生してゐるものらしく見える。

若し謂ゆる幹部に面白くない事があるとするならば、それの改革は固より速かにやるべきだが、現在の幹部に對する不信任の結果が、若し水平社全體の組織を弛緩させて、只だ漠然たる無力の大團體に化せしめる樣な事になるとすれば、それは誠に惜むべき限りである。地方分權の空疎な理想は、戰鬪的の實際組織と兩立しないものと我々には見える。

朝鮮の衡平社運動に關する議案もあつた。衡平社は水平社に倣つた朝鮮の『白丁』族の新運動だと聞いてゐる。

印度のガンヂーに對して見舞の電報を送るといふ提案もあつた。民族運動の勇者に對して敬意を拂ふと云ふのである。これにつき、南アフリカで黑人解放の爲に働らいてゐる勇者にも同樣の敬意を拂へといふ議論が出た。然し其の時、朝鮮民族一般としての解放運動に對する敬意が問題とならなかつたのは、どうしたわけだらう。

水平社は運動上、他の社會團體と提携するか否かといふ問題もあつたが、これは議論が多くて、たしか保留になつた。勞働運動、農民運動、水平運動、この三者が次第に接近しつゝある事は明白な事實であつて、問題も何もないと我々は思つてゐる。現に農民大會には、水平社の創立者として有名な西光萬吉君などが農民組合の代表として出席してゐるといふ事實もある。然るにどうしてそれが『保留』されるほど困難な問題になつたのだらう。私は其の議事の時、ちようど傍聽席を離れてゐて詳く其の成行を知らない。然し水平社の社會主義化などいふ或筋から出たらしい宣傳的風評もある折柄だから、そういふ意味での物議だとすれば、如何にも尤もな事である。

然し又、そこには別に、水平社の本質上から來る異議もあるらしい。水平社が民族運動である以上、民族的でない他の如何

なる實體とも抹殺すべきでないと云ふ理屈も、一應理屈がある様に聞える。政黨政派に超越すると云ふのも、政治運動を否定するのも、あらゆる改良政策に反對するのも、皆な同じような心持の發現と見る事も出來る。

然し政黨政派に超越すると云ひながら、實際には一種の政治運動にならずには居られないのと同じく、又地方分權を主張しながら、實際には努力を集中した緊密な戰闘體とならずには居られないのと同じく、民族的運動、民族的運動と稱しながら、實際には是非とも無産階級運動とならずには居られないものだと我々は見てゐる。水平社同人諸君の中、今日ではまだ此の考へ方に反對する人が少なくないだらう。從つて右の議案が『保留』になつたりしてゐる。然し遠からずして、水平運動が勞働運動および農民運動と密接に結び合つて、日本無産階級の三大陣營となる事は、もはや疑ひのない明白な事實だと考へられる。

右の諸議案の議事中、少年雄辯家、婦人演説者の事は前に書いたが、その外、一般に雄辯家の多いのに感服した。殊に栗須氏が長髪をゆるがせながら、手を振り、卓を叩いて滿場を熱狂させる、其の絶妙な演説振りに驚かされた。技巧が過ぎるといふ批評も聞いたが、それにしてもあれだけの技巧が優れた技巧として薦れるものではない。この大雄辯家を有する點に於ては、水平大會は遙かに農民大會、總同盟大會の上に立つてゐる。

栗須君の外、私の知る人としては平野小劍君があつた。平野君は古くからの勞働運動者であつて、信友會に屬する印刷工であつた。思想上から云へば、アナキスト系の人であつた。君も可なりの辯者である。平野君と栗須君、私はこの二つの舊知人を演壇の上に望んで、特別な親しみを水平社に感じた。

泉野君も知らぬ人ではない。大きなガツシリした體格、大きな膨れたような顔、まだ若いのに、どことなく落ちつきが見える。水平運動の勇者としての今後が屬望される。

『佳き日』といふ言葉が初めて水平運動に依つて使用された時おとなしい、親しみのある、好い言葉だとは思つたが、、それと同時に、少し弱いといふ感じがしてゐた。然し今日になつて見ると、其の弱い言葉の中に、一種の强味が生じたような氣がする。つまり『佳き日』とい言葉に內容が添はつて來た。空虚な形容詞でなく、實質のある、含蓄のある、一新語となつて來た。そして水平運動以外でも、漸く使はれかけて來た。現に私は農民大會でも此の言葉を聞いた。『佳き日』は即ち『××、

×』を意味する。或は××××『×××』を意味する。

水平運動は種々なる新語を作り出だした。恐らくこれは、水平運動の創始者と認められてゐる西光氏の造語だらうと思ふ。西光氏は僧侶であり、畫家である。宗教的アナキスト、藝術的アナキストといふ傾向もあるかと思ふ。兎にかく理想家であり、理想主義者である。『佳き日』といふ言葉の擇び方にも其の趣味傾向が窺はれる。

『人間禮讃』といふ言葉が又、一種の新らしい意味を以て盛んに使用されてゐる。人間を冒瀆する事は罪惡である。人間性の原理に覺醒せよ。そして人間禮讃の佳き日を來らせよ、と云ふのである人間禮讃！。賤められた者、虐げられた者の心の中からして、此の『人間禮讃』の咒文が發してゐる。私は是を、勞働運動に於ける『勞働神聖』の標語に比べて考へた。勞働が賤視され蔑視されてゐる事實の上に『勞働神聖』が唱へられたのと、誠に善く相似てゐる。

然し勞働運動に於ては、『勞働神聖』と云つたような、觀念的な、精神主義的な、内容の空虚な慰めよりも、モツト現實的な實質的な、經濟的な生活を要求する事になつて來た。そして××××××××××××××放の日を作り出ださうとして働いてゐる。水平運動も矢張りこれと同じく、人間禮讃の根本精神はそれとして、更に一層實質的な要求を持ち、水平民族と共に一般無産階級を解放する『佳き日』の、政治經濟運動になるべきだと考へる。

最後に、『兄弟』といふ言葉が水平社同人諸君の間に甚だ多く用いられてゐる。『兄弟』といふ言葉は、古い勞働者の間には最も自然に使はれて居り、クリスチヤンの間には甚だ氣障に使はれてゐる。若しこれが廣く一般無産階級の間に、氣障でなく使はれる事になつたら、非常に面白いだらうと思ふ。西洋のコムレード、或はタワリーシユに相當する日本語は、今のところ出來てゐない。『同志』といふ譯語は日常の通用語にはなり得ない。

さらば、レーニンよ!! さらば!!

トロツキー

(本文はトロツキイが、レニンの死に對する哀切なる告別の辭である、玆に譯載することとした。)

レーニンは最早やゐない。レーニンは吾々の中から消え去つてしまつた。

血液の脈絡を、活動を支配するあの陰暗な法則が、レーニンの生命を斷止せしめた。幾百萬の人間がこれから期待し、要求したことを、醫藥も終ひに、如何ともなしがたかつた。

偉大なるレーニンのために、イリイッチのために、唯一無二、比類なき指導者のために、若しもその血液の循環を再生し、恢復せしめえたとしたら、躊躇なしに、自己の血液の最後の一滴をも注ぐ事を敢てしたもの、如何に多かつたらう。併し、科學の力のなしえないところには、奇蹟は絶對に起らなかつた。

レーニンは死んだ、レーニンは最早やゐないのだ。此れ等の言葉は、海中に投ぜられた巨巖のやうに、吾が全意識の上に落ちてくる。

如何にして、これを信ずべきであるか? 如何にして、これを認容すべきであるか?

全世界の勞働者の意識は、此の事實を受け入るることを、拒否するであらう。何故ならば、敵は、强力にして威嚇的であり、縱斷すべき道は、遠く、且つ艱難に滿ちて居り、偉大なる事業、歴史上に於ける最大の事業は、未だ成就してはゐないのだ。

レーニンは、人類史上に於ける、他の何人よりも、全世界の勞働階級にとつて、必要缺くべからざる人間であつた。

彼の第二病症は、最初のそれよりもはるかに重く、旣に十ケ月の長さをつゞいてゐた。主治醫達によつて使用された痛烈な表現に從へば、レーニンの肉體内に於ける、循環の諸機關は、遂に賭博してゐた。イリイッチの生命を賭けた、怖るべき賭勝負!!

快方に向ふことも、又、彼の健康の恢復することも、彼の生命の崩壞が見遁はれると等しく、期待さるゝことができた。しかし、やつて來たのは、滅亡であつた。呼吸を調整するための神經中樞は、もはや活動することを拒否してしまひ、この思想の天才の松明を消してしまつた。

然うなつてしまつたのだ。イリイッチはもはや、此の世界にはゐないのだ。

×』を意味する。或は××××『×××』を意味する。

水平運動は種々なる新語を作り出だした。恐らくこれは、水平運動の創始者と認められてゐる西光氏の造語だらうと思ふ。西光氏は僧侶であり、畫家である。宗教的アナキスト、藝術的アナキストといふ傾向もあるかと思ふ。兎にかく理想家であり、理想主義者である。『佳き日』といふ言葉の擇び方にも共の趣味傾向が現はれる。

『人間禮讃』といふ言葉が又、一種の新らしい意味を以て盛んに使用されてゐる。人間を冒瀆する事は罪悪である。人間性の原理に覺醒せよ。そして人間禮讃の佳き日を來らせよ、と云ふのである人間禮讃!。賤められた者、虐げられた者の心の中からして、此の『人間禮讃』の咒文が發してゐる。私は是を、勞働運動に於ける『勞働神聖』の標語に比べて考へた。勞働が賤視され蔑視されてゐる事實の上に『勞働神聖』が唱へられたのと、誠に善く相似てゐる。

然し勞働運動に於ては、『勞働神聖』と云つたような、觀念的な、精神主義的な、内容の空虚な慰めよりも、モツト現實的な實質的な、經濟的な生活を要求する事になつて來た。そして×××××××××××××放の日を作り出ださうとして働いてゐる。水平運動も矢張りこれと同じく、人間禮讃の根本精神はそれとして、更に一層實質的な要求を持ち、水平民族と共に一般無産階級を解放する『佳き日』の、政治經濟運動になるべきだと考へる。

最後に、『兄弟』といふ言葉が水平社同人諸君の間に甚だ多く用いられてゐる。『兄弟』といふ言葉は、古い勞働者の間には拔も自然に使はれて居り、クリスチャンの間には甚だ氣障に使はれてゐる。若しこれが廣く一般無産階級の間に、氣障でなく使はれる事になつたら、非常に面白いだらうと思ふ。西洋のコムレード、或はタワリーシュに相當する日本語は、今のところ出來てゐない。『同志』といふ譯語は日常の通用語にはなり得ない。

さらば、レーニンよ!! さらば!!

トロツキー

《本文はトロツキイが、レニンの死に對する哀切なる告別の辭である、故に譯載することとした。》

レーニンは最早ゐない。レーニンは吾々の中から消え去つてしまつた。血液の脈絡を、活動を支配するあの陰暗な法則が、レーニンの生命を阻止せしめた。幾百萬の人間がこれから期待し、要求したことを、醫藥も終ひに、如何ともなしがたかつた。

偉大なるレーニンのために、イリイッチのために、唯一無二、比類なき指導者のために、若しもその血液の循環を再生し、恢復せしめえたとしたら、躊躇なしに、自己の血液の最後の一滴をも注ぐ事を敢てしたもの、如何に多かつたらう。併し、科學の力のなしえないところには、奇蹟は絶對に起らなかつた。

レーニンは死んだ、レーニンは最早ゐないのだ。此れ等の言葉は、海中に投ぜられた巨巖のやうに、吾が全意識の上に落ちてくる。

如何にして、これを信ずべきであるか？ 如何にして、これを認容すべきであるか？

全世界の勞働者の意識は、此の事實を受け入るることを、拒否するであらう。何故ならば、敵は、強力にして威嚇的であり、縱斷すべき道は、遠く、且つ艱難に滿ちて居り、偉大なる事業、歷史上に於ける最大の事業は、未だ成就してはゐないのだ。

レーニンは、人類史上に於ける、他の何人よりも、全世界の勞働階級にとつて、必要缺くべからざる人間であつた。

彼の第二病症は、最初のそれよりもはるかに重く、既に十ケ月の長さをつゞいてゐた。主治醫達によつて使用された痛烈な表現に從へば、レーニンの肉體内に於ける、循環の諸機關は、遂に賭博してゐた。イリイッチの生命を賭けた、怖るべき賭勝負!!

快方に向ふことも、又、彼の健康の恢復することも、彼の生命の崩壞が避はれると等しく、期待さるゝことができた。しかし、やつて來たのは、滅亡であつた。呼吸を調整するための神經中樞は、もはや活動することを拒否してしまひ、この思想の天才の松明を消してしまつた。

然うなつてしまつたのだ。イリイッチはもはや、此の世界にはゐないのだ。

黨(パールチヤ)も、勞働階級も、孤兒として取りのこされてゐる。

主腦であり、且つ指導者であつたところの彼の死を聞いて、人々が、先づ何よりも感ずることは次ぎのことである。同志(タワーリシチ)よ！　吾々は今後、如何にしてわれわれの道を進むべきであらうか？　レーニン逝いて、吾等と共にあらざる今、吾々は、果して迷はないであらうか？

併し、併し、レーニズムは生き殘つてゐる。レーニンは、吾々の中に生き、彼の創造した黨中に生き、また、彼が嘗つて其首腦たりし、第一勞働者國家の中に生きてゐる。また、彼の綱領、事業、方法、また範例によつて、不滅であり、不朽である。

吾々の苦痛は、吾々の損失の如く大である。しかし吾々は、吾々をして、レーニンと同時代者たらしめ、同僚(タワーリシチ)たり、且つ彼の弟子たることを許した歴史に向つて感謝を捧げやう。

吾々の黨は、活動してゐる。それは、レーニズムを體現したものである。

吾々の黨は、勞働者の集合的指導者である。吾々は、いささかなりとも、レーニンの片影をもつてゐる。

吾々は、掌中にレーニズムの鉅火を握つた。吾々は正しき道を發見しうるだらうか？

集合的思想と、集合的意志とをもつて、吾々はそれを見出しうるであらう。

明日も、明後日も、一週間經つても、一ケ月經つても、われわれは、われわれ自らに向つていふであらう。レーニンが最早や、この世の人ではないなどといふことは、有りえないことだ、と。

彼の死は、われわれにとつては信憑することのできないやうに、また許容することのできない出來ごとのやうに見へるであらう。自然の專擅なる怪物的罪惡として映ずるであらう。

この偉大なる死を、記憶に甦みがえらせる時、吾々、個々のこゝろに再開する傷痕をして、常にわれわれの責務は倍加した、と思起せしめよ。

われわれは、われわれに偉大なる教訓を垂れた、彼に、耻ぢない者とならうではないか？　われわれの悲愁のなかにあつて、われわれは、われわれの隊列を閉ぢ、新しき戰闘のために、お互の心を結合しやうではないか？

同志(タワーリシチ)よ!!　兄弟(ブラーチヤ)よ!!　レーニンは最早やわれわれと、共に居らないのだ……

左様なら、イリイッチ!!　頭主(ナチヤーリニク)よ、　左様なら。(茂森唯士譯)

日米の關係

片山潜

一　日本の對米地位

現在日本は、米國に對して二個の重大な關係、即ち經濟上及び移民の關係を持つてゐる。日本の對米經濟關係は、最も重要なるものである。日本は米國に對して、一九一九、一九二〇及び一九二一年に於いて、八二八、〇九七、〇〇〇圓、五六五、〇一七、〇〇〇圓、四九六、二八三、〇〇〇圓を輸出した。この各々の期間の全輸出額は、二、〇九八、八七二〇〇〇圓、一、九四八、三九四、〇〇〇圓、一、二五二、八三七、〇〇〇圓であつた。これによつて觀れば、日本は米國に對して、全輸出の三分の一內外を輸出してゐる。而して對米輸出が日本の工業に重大なる所以は、日本の最も重要なる工業、即ち生絲業が、殆んど全く米國への輸出に依存してゐるからである。一九一九—一九二一年の三ケ年　對米生絲輸出は六〇〇、八四三、〇〇〇圓、三四一、五九九、〇〇〇圓、三九四、四五三、〇〇〇圓で、その各年の生絲の全輸出は六二〇、三〇八、〇〇〇圓、三八一、三〇六、〇〇〇圓、四一六、二四一、〇〇〇圓であつた。若し何等かの變化が勃發して、日本の輸出の三分の一が不意に止まり、それが他の產業に影響を及ぼすならば、極めて危險なる事態である。

右の如く日本の輸出業は、その重要なる市場を米國に持つてゐるのである。そればかりではない。日本はまた工業上重要な

る原料を、主として米國からの輸入に仰いでゐるのである。そのうちの主たるものは棉花である。吾人はこの三年間（一九一九—二一年）に於いて、總額一、八八九、〇〇〇、〇〇〇圓の商品を米國へ輸出したが、その中一、四二五、八五五、〇〇〇圓は輸出生絲の價格である。然るに他方吾人は、右三年間に於いて、總額二、二二三、九五八、〇〇〇圓の商品を米國から輸入した。つまり三二四、九八五、〇〇〇圓の輸入超過である。この期間に於ける米國からの棉花の輸出は八四三、七一一〇〇〇圓で、棉花の總輸入價格は一、八二七、四七五、〇〇〇圓であつた。かくの如く日本の大工業への原料及び製品たる棉花及び生絲は、賣買共に米國の市場に依存してゐるのである。

　生絲業は如何なる意味に於いても日本の工業であるが、吾人はその商品を賣捌くためには、外國市場に手頼らなければならず、而かも此市場は大部分米國に在る。かくして生絲業さへ獨立業と呼ぶことは出來ない。一方唯一の確立せる工業たる紡績業に於ては、吾人は全然外國からの棉花に手頼らなければならず、それも大部分米國からである。日本は、原料、機械の輸入、及び生絲市場を、斯く米國に負ふてゐるけれども、米國にとつては、日本の輸出入は、その全貿易に比較して、些々たるものである。その上、生絲は絶對必要品では無く、奢侈品であり、米國は生絲無しにも濟ませることが出來るが、日本の生絲業は米國市場無しには立つて行かない、又日本はその紡績業を維持するためには、米國の棉花なしには不可能である。かくの如く日本の對米地位は、不安にして且つ極めて薄弱である。

　米國に對する日本の經濟的地位のこの薄弱は、一種の障害であり、日本の外交家及び支配階級は、その對米關係に常に不安を感じ、その結果、日本の對米政策は極端に保守退嬰的となつた。移民問題に關する日本の軟弱政策は、日本をして窮地に陷れ、在米日本人はその犠牲となつた。これに關しては改めて論じやう。經濟的薄弱は、日本をしてその現狀維持のためにあらゆる利益を犠牲にさせた。一時日本は貿易のみの爲めに圖る政策を執つて、米大陸に渡航せんとする國人を失望せしめた。然し此政策は不成功に終つた。當時既に相當多數の日本人が米國に在り、間もなく學校問題、次いで土地問題が起り、重大なる形勢を惹起せんとしてゐたからである。經濟的薄弱及び日本工業の窮境、更らに、歐洲大戰中米國が不意に日本への鐵及び鋼鐵の輸出を禁止せるために受けたる日本の工業生活の致命傷は、日本が工業國として米國に依存することのいかに甚大なるかを、明示せるものである。實際日本は、近代工業の必須原料は殆んど凡て是を欠いでゐるのであるから、一個の工業國とし

て出發す可きではなかつたのである。日本は、鐵も、石炭も、石油も、棉花も、獸毛も、その他近代工業の必要物を何等持つて居ない。最初の二つは多少は持つてゐるが、普通の使用量を充すに足らず、良質の石炭は全く缺いてゐるのである。

日本は最初、ランカシヤーの紡績業の例にならつて、原料を輸入して其工業を建設し得べしと思惟した。然し日本は英國に非ずといふことを忘却してゐた。英國は豐多の石炭と鐵とを有し、就中多くの植民地を持ち、そこから原料を輸出し得るが日本はその何ものも持たない。工業發展の第一階梯に於いては、日本は外國から原料を得るに少しの困難も感じなかつた。當時日本の工業は決して大規模のものに非らず、主として國內消費のために生産するもので、その輸出は外國競爭者のそれと抵觸する所が無かつたからである。然し現在の日本の工業は、以前とは全然異つてゐる。今や十分なる進歩を見て、たゞに國內消費のためのみならず、海外輸出のためにも、商品を生產し得るに到り、海外輸出は益々工業の支配的地位を占め、外國貿易特に輸出は、日本の工業生活にとつて死活を制するものとなつた。然し日本の工業の逢着した困難は、上に述べたものばかりでなく、眞の困難は外國市場の獲得に在る。日本は遲れ馳せに世界市場の競爭場裡に參加したが、その時旣に諸國の商業關係は確立されてゐた。その結果、日本がその商品を賣らんがためには、質を良くするか又は安價にしなければならない。ところで現在の工業發展の程度に於いては、質を以つて競爭することは出來ず、隨つて安價を以て競爭しなければならない。安價なる商品を生產するためには、二つの條件が必要である。安價なる勞働と安價なる原料是れである。日本は最近まで安價なる勞働を持つてゐたが、更に安價なる勞働を、しかも豐富に持つ大いなる隣人がある。それは支那である。支那は今や工業的に目醒め、急速に日本の競爭者とならんとしてゐる。一方日本國內の勞働賃銀は、生活標準の向上のために、騰貴しつゝある。地方原料產地は競爭國によつて占められてゐるから、日本は安價なる原料を手に入れることが出來ない。斯くて日本は、競爭國の勢力範圍又は領土から原料を買入れ、安價に原料の手に入る、又は自身で原料を有する競爭者と、競爭しなければならぬ破目に立ち到つてゐるのである。

日本はかゝる薄弱なる地位を以つて、賣手であると共に買手であり、同時に又極東に於ける大競爭者たる米國と對立しなければならない。極東市場に於いて日本の有する唯一の强味はその地理的地位であるが、それとても、極東に於ける日本の帝國主義的野心と、その結果たる支那の排日運動及び屢々惹起す

る日貨排斥とによつて、損傷されてゐる。今日如何なる人も、現に支那に蔓延しつゝある有力なる日貨排斥の背後に、米國商人達に在支米人の在ることを拒まないであらう。更に進んで米國は屢々、「門戸開放」、「滿州鐵道中立」及びその他の、弗外交の支持を受けて、支那に對する同情を示せる主張によつて、政治的干渉を試みてゐる。これらの一切の事象は、極東に於ける日本の平和的經濟發展を阻害し、支那及び太平洋に於ける二個の帝國主義政策の鬪爭の伏因をなすものである。この問題については項を改めて說くであらう。

日本の經濟的立場から觀察すれば、その對米經濟關係は暗澹たるものである。日本の對米外交が軟弱であり、米國との平和的關係を維持するために在米日本人の利益を犧牲としつゝあるは、何等怪しむに足らない。日本人の大いなる經濟的損失たる外人土地法の通過によつて、加州及び華盛頓州の日本移民は、甚だしき屈辱を嘗めたが、日本には米國と折衝して事を處理する能力なく、在米同胞の利益を保護する能力がない。

日本のこの經濟的地位の薄弱は、移民問題に於て、重ね重ね慘澹たる失敗を演ぜしめた。それればかりでない。日本は、メキシコ及び南米諸國との外交關係に於いて、常に束縛を感じてゐる。日本がその國民をしてメキシコに經濟的發展を爲し得ざるは、單に米國に不安を與ふることを惧れるが故である。またかのコロンビヤは、日本と通商關係を開かんことを希望してゐるが、日本は極めて非友誼的に同國をあしらひ、今日に到る迄何等の關係も成立してゐないのである。その理由は單に、コロンビヤが米國と良好なる間柄でないと云ふだけの事である。メキシコも友誼的關係を希望し、一度ならず接近して來たに拘らず、日本が直擊にそれを迎ふることを拒んだのも、同樣の理由からである。

二　經濟上に於ける米國の對日態度

世界大戰中に於ける米國の經濟的膨脹は目醒しきものがあつた。米國は實際歐羅巴聯合諸國に對して、百八十九億圓を融通し、自身戰費として四百五十一億圓を消費した。然し米國は、歐羅巴聯合國へ貨物を供給して、三百二十億圓の巨利を得た。米國の國債は二十三億萬圓（一九一四年）から六百億萬圓（一九一九年六月）に增加したが、一九二三年（六月）には四百四十八億萬圓に減少した。外國貿易は過去數ケ年減少してゐる。一九二〇年に米國の外國貿易額は百三十三億萬弗に達したが、一九二一年には百一億萬弗となり、更に翌一九二二年には六十三億萬弗に減少した。而して一九二三年では六月末日までに四十

三億二千九百萬弗である。やはり此年の六月までの日本の外國貿易額は、十億五千百四十五萬七千弗である。前記四十三億二千九百萬弗に於いて、一億一千二百卅弗の輸入超過となつてゐるか、日本にあつては、十億二千五百萬弗に於いて、四億三千五百萬弗の輸入超過である。

米國は今日世界に於ける最も富める國である。米國は世界の金全體の四割五分を持つてゐる。その富源はいかなる國よりも大である。實際一個の自足國である。その外國貿易は英國のそれに比して些少なものである。だが英國の外國貿易は、國内商業の六割二分であるが、米國のそれは、國内商業の一割一分六厘に過ぎない。

米國の人口は日本の二倍で、その富は十四倍、一人當り七倍以上である。米國は一九一九年に於て、鐵條、鐵竿、鐵板等の日本の輸入總額七千八百萬弗中、六千六百七十六萬一千九十九弗を供給し、機械及びエンヂンの輸入總額四千四百四十七萬七千百三十五弗の中、四分の三以上を供給した。一方米國は同年中六億萬圓の生絲を買取つた。然し米國が日本に賣却したものは、特許機械にしても棉花の如き自然産物にしても、何處からも買ふことの出來ぬものである。どつち道日本がそれを買ふといふことを彼は知つてゐる。ところが、米國が必要物として日本から買ふものは生絲である。この場合彼は、若し米國が日本の生絲を買はぬならば、日本は非常に窮境に陷るといふことを知つてゐる。そんなわけで事實米國は優者の地位に立つてゐる。されば他の國々と取結んでゐる如き相互的通商條約を、日米と締結しやうなどとは夢にも思はない。米國は數十年來萬里の關税を設けてゐる國である。勿論米國が關税賦課上合法的基礎に於いて日本を差別的に取扱つてゐると云ふことは出來ないが、日本品に對して差別的關税を賦課した實例は多々ある。議會の關税委員會は、在米日本人によつてのみ輸入され、日本人のみが消費する日本貨物に對して、鋭き眼を放ち、何等の考慮を加ふることなしに、その關税を引上げた。然し米國が日本人を差別扱ひにするのだとは云へない。何となれば、日本人が輸入したいと欲する如き品物を輸入しやうと思ふ國民は他に無いし、又他の國では米國に輸出しなくともよいであらうから! 兎に角、日本は通商關係に於いて、米國から尊重されなかつたし、又尊重される筈がない。斯く日米問題の通商的紐帶は、極めて薄弱且つ危殆である、未だ米國が製造品の輸出國でなかつた時、日本が諸條約國の餌食で、その國々の國内の過剩生産物の投げ賣場であつて、商業的自治といふものが無く、事實上條約の强制による自由貿易國であつた時、日本は自身の工業を維

することは出來なかつた。その時代、日米の關係は圓滿で平和であつた。當時米國は日本から若干の茶と、少しばかりの骨董を買つてゐたに過ぎず、生絲などは丸で考へにも上らなかつた。

然し日清戰爭後、委しく言へば、四十年間の懸案であつた條約改正の行はれた後、事態は變化した。日本はそれによつて商業自治と共に政治的自治を恢復した。日本は長年の希望たる商業自治を恢復するや、陸海軍を建設するために、自ら關税を制定した。勿論米國が、滿足の眼を以つて是を眺める筈はない。彼も亦日本の生絲に對して、高き障壁を築いた。

米國は絹織物の最上品たる羽二重に六割といふ高率の關税を課し、他の商品にも夫に準じて課税した。その間に日本は自國の工業の樹立に努め、やがて遂に米國から輸入してゐた商品を、國内で製造し得るやうになり、更に他の國々へ輸出し始め、それらの國々に於いては、日本は實際上米國の競爭者となつた。特に極東に於いてそうである。事實、米國が日本に賣らんとする商品と、日本が米國と競爭せんとする商品とは、同一種類のものである！　かくて全體として、日米間の經濟關係は益々惡化して行つた。日本は軍國主義と資本主義とを以つて、隣國支那を支配せんと欲し、その地理的位置を根據として、或る時には支那に於ける特權的地位さへ要望した。その結果生れたものが、日米間の所謂「石井ランシング協定」であるが、同協定はその後米國の希望によつて廢棄された。西歐の諸強國は支那に於いて各々自國の利益を確立せんと計つてゐるが、同國に於ける日米の經濟關係は刻々に脅威されてゐる。經濟的衝突は支那が政治的經濟的に覺醒して來るに随つて、ますます激烈となり、米國は次第に支那に於いて確固たる地位を占め、支那國民の信任を博して來た。かくの如くにして日米の經濟關係は正に破裂せんとしてゐる。更にそれに油をそゝぐものは、日本移民問題に對する米國の政策である。私は更にその點に論述を進めるであらう。

三　米國に於ける日本移民問題概觀

在米日本人に對する米國の取扱は度々變つた。私自身、過去數十年間に於てこの變化を經驗した。一八八四年の十一月、私は加州の桑港に着した。當時は何等の制限もなかつたから、日本人の米國入國は容易であつた。旅行劵も要らなければ、移民官の取調べもなかつた。それは支那人入國禁止法の制定實施されてから二年後であつた。然し私の乘つてゐた汽船サン・ポーロ號には、かなり多數の支那人が乘込んでゐた。彼等は支那人で

はあるが、英國市民となつてゐるので禁止法に觸れず、入國を許されるのである。彼等は最初に先づ香港へ移住して、英國市民と化り、それから英國の旅行券を持つて、米國に渡航して來たのである。移民官は、この英國市民たる支那人に對し、阿片の携帶如何を取調べるだけであつた。所持金額については何の規定も無かつた。私は米貨の約七十仙に相當するメキシコ貨幣一個しか持つてゐなかつた。勿論當時日本人移民問題などは無く、日本人學生及び若き政治家は、本國の政治的壓迫と、自由黨抑壓政策のために、米國に渡航した。私が桑港に着した時其處には約二百人の日本人が居て、日本人の下宿屋一軒と、教會二個と、協會二個があつた。その人々の多數は海員で、その中若干は宣教師に救はれた者であつた。支那人を世話してゐる宣教師は、日本人の世話もしたのである。

それより二年後の一八八六年日本政府と當時の布哇政府との間に、日本人移民に關する正式の協約が締結された。米國は支那人の入國を禁止したが、ポートランド、タコマ、シヤトルに終點を持つ鐵道の敷設者又は鐵道會社は、廉價なる勞働を欲求し、日本人の安き勞働を求めた。北方及大北方ジェームス・ヒルの鐵道敷設者は、日本人勞働者の質の善きことを認めた第一人者で、その鐵道工事に日本人を雇入れ、今日猶、一部隊としての日本人がそれらの鐵道に雇はれてゐる。ワシントン州には最近まで排日運動を起さなかつたが、その理由は、同州の開發が比較的遲く、シヤトル、タコマの二港は、アラスカのコロンダイクに金鑛が發見されて後、隆盛に赴いた港だからである。日本人が其處に移住したのは比較的早く、その市部及び田舍に於いては、加州に於けるよりも強固なる地位を占めてゐる。加州は排日運動の根據地である。その譯は同州が布哇に最も近接し、布哇合併以後、多數の日本人勞働者が同州に渡航し、いづれも桑港に上陸したがためである。かくて排日運動勃發の機會が其處に作られたのである。布哇の正式合併は一八九八年に宣言され、その時以來、日本勞働者はヨリ善き賃銀と待遇とを得るために、米本土に渡航した。

排日運動の發展には幾多の階段がある。最初の階段は、勞働組合の排日運動である。勞働組合員は政治屋共に煽動されて、排日運動に協同したので、その政治屋共は、日本人勞働者は安き賃銀で勞働し、その結果組合員の生活標準を低下せしめると主張した。現在もそうであるが、當時白人勞働者と競爭しやう・思つてゐた日本人は一人もなかつた。然し日本人が安い賃銀で働かず、少くとも白人より安く働かないといふことを知るや、その政治屋共は、日本人は米國化しない民族であると說き出した

この標語は今日なほ排日運動の理由の一として使用されてゐる。排日運動の爲めに如何なる標語を案出し、如何なる理由を構へても、何れも失敗に歸したので、最後の彼等の發見した塹壕は、「日本人は米國市民たり得ない」と云ふのであつた。この標語の下に、無數の下らない立法手段が企てられ、「米國市民たり得る者」と平等の特權を享受することから、日本人を排斥する立法手段が講ぜられた。

四　米國人は何故に排日運動に參加したか？

米國に於ける排日運動は、日本外交家の退嬰的性質と、米國政治家の進擊的政策の結果である。米國に渡たれる歷代の公使、大使、並に領事等は何れも、保守的、退嬰的で、如何なる障碍の前にもたじろぎ、日本がその利害と義務のために當然爲す可き主張をさへ差控へた。言葉を換へて云へば、排日運動の道を拓いた者は日本である。日本の保守的臆病外交は、勿論、日本の外交政策の傳統的軟弱によるものである。獨り外交家の弱腰ばかりでない、その世界的知識の缺乏は、外交的折衝に於いて當然爲す可き主張をさへ爲さしめなかつた。日本外交家はその國民に對しては內辨慶で、いかにも大外交家らしく振舞ひ、一度び外國の外交家に會ふと、猫か羊の如く、たゞ自國民の前に外貌を裝ふことを忘れず、ひたすら空虛な威嚴を維持することに之れ努める。日本外交家に對するかゝる批評は、決して誹謗では無い。こゝに若干の實例を示さう。

前章で言及した如く、日本國民は一八九四年の日米條約の所謂「二條の但書」を削除したいと希望した。此但書の日本移民についての米國の保留によると、米國は何時如何なる時でも、日本人を米國から制限し、若くは放逐する法律を制定することが出來ることになつてゐる。日本人がその改更を要求し、平等の立場に於ける條約を希望するは、極めて自然である。

狡猾な米國外交家は、日本外交家及び外務省官吏の心理を知り拔いてゐる。當時の大統領ルーズヴェルトは、問題の但書の代りに有名な「紳士協約」を締結して、日本外交家の面目を立てた。紳士協約はあらゆる性質あらゆる型の日本外交家に打つてつけである。協約の辭句は立派に正しく見え、それを以つて彼は容易に國民を瞞着した。紳士協約の內容は米國人はよく知つてゐるが、今日に到るまで日本國民には知られてゐない。この協約によつて日本は、自國の意志を以つて、米國への旅行劵の下附及び協約中に含まれてゐない布哇への旅行劵の下附さへ停

止した。而して勿論、米國に接する國々への旅行券も余り下附しない。一方米國は、この協約に基いて、メキシコ及び加奈陀への旅行券を有する日本人を米國へ入國させぬ旨の通牒を發した。右は布哇又は南米各地への旅行券の携帶者へも適用されるのである。かくて日本はその軟弱なる外交のために、米國から日本人を斥けたばかりで無く、日本人がメキシコ及び南米（ブラジルを除いた）へ赴くことも、殆んど止めたのである。これはまた當時布哇及びメキシコに在つた日本人にも適用された。此協約締結前に布哇に入つた日本人は、また大陸に入國する憲法上の權利を持つてゐたのであるが、空威張り屋の日本外交家は、日本人のために此權利をさへ主張する能力が無かつた。フエルヂナント・ラツサールは或る時ドイツ勞働者を攻撃して、英國人は勞働者を鎖でつないで始めて奴隷とすることが出來るが、獨逸勞働者は憶病であるから、鎖でつながないでも家の中に監禁することが出來る、彼等は膽力もなければ誇りもない、と言つたことがある。日本外交家の行動は、此の勞働者と同じに憶病で女々しく、外國のために働く點から云へば、獨逸勞働者より更に惡い、その理由は唯一つ、國民の前に空虛な威嚴を保ち、空威張をしたいがためである。

日本の軟弱外交の他の實例は、「寫眞結婚」である。米國民は日本人の寫眞結婚に反對し、それを以つて排日運動の理由の一とした。

日本人にとつての結婚は家庭的事柄で、今日も猶双方の友人と兩親が事を取計らつて、新郎新婦はたゞその人々に服從するだけである。「見合」といふ習慣があつて、婚約を交す前に本人同志が對面することになつてゐるが、それもほんの形式に過ぎず、「見合」のない場合が澤山ある。この「見合」の代りに寫眞の交換によりて成立するのが寫眞結婚である。寫眞結婚によりて呼寄せた寫眞新婦（ピクチユアー・ブライド）が米國の港に着いて新郎に會ふと、米國官吏は兩人を引連れて市公會堂に赴き、そこで結婚式を擧げて、五弗の金を納付させる。これは全然余計な事で且つ侮辱である。何となれば新婦はその夫の妻として、日本政府の外務大臣から發行された旅行券を持つてゐるのだから、且つ彼女は六ケ月前に入籍を終つてゐるのである。米國は、日本人が如何なる方法習慣で結婚しやうと、それに干渉する權利はない。既に合法的の夫婦であり、政府が彼女に旅行券を下附した以上、米國に日本の內政、別けても一切の社會的慣習に干渉することは出來ない。然し米國は事實干渉を敢てし、輿論を起して此上寫眞新婦を送らぬやうに日本に強要した。

斯くの如く合法的、合理的なる寫眞新婦に對し、米國人は何

等干渉し批難す可き權利ないに拘らず、日本政府はこの背理なる批難に對して、確固たる立場を執ることが出來ず、茲に又外交い傳統的軟弱を示し、その外觀の威嚴を保つために、秘かに在米日本人協會に哀願し。或る意味において強要して、日本政府に寫眞結婚制の撤廢を要求せしめた。かゝる段取で政府は直ちに寫眞結婚制を廢止した。これは正に、寫眞結婚の完全なる合法性を擁護することも出來ず、徒らに屈辱的輿論に叩頭した日本外交の痴愚と小心とを示して余りあるものである。日本政府はかくしてその地位のみじめさを暴露し、大いなる經濟的損失を招き、在米日本人に不當の苦痛を嘗めさせた。寫眞結婚禁止の結果、結婚せんとする日本人は凡て、數ケ月間その業務を放擲し、本國に歸つて適當な妻を捜し、相當長き期を經て後、相携へて米國に歸り、この結婚歸國に一千弗乃至二千弗を消費しなければならなくなつた。多くの場合金に於いても時間に於いても、かゝる不經濟な企てを爲すことは、全く不可能である。太平洋岸の諸州は何れも、日本男子と白人婦人との結婚を法律を以つて禁じてゐる。かゝる次第であるから日本人は米國を去るか、獨身で暮すかするより外はない。これ全く日本政府の軟弱外交の賜物である。

排日運動に對する日本の反對論據と抗議とは、日本人を差別的待遇するといふ點にある。日本は國內に於いて、內地人と植民地住民とを差別的に取扱ひながら、巴里平和會議に人種平等案を提出したと同樣に、在米日本領事及び大使は、二種類の旅行券を發行することによつて、在米同胞を差別的に待遇してゐる。一つは「移民」と記入せる旅行券で、他は「非移民」の旅行券である。是は日本官憲が强いて設けたる不自然な差別である。米國移民法に依れば、外交官を除いた一切の人々は移民であり、米國當局によつて同樣に取扱はれる。いかなる人も入國稅を納付し、上陸港に於いて移民官及び稅關吏によつて、精密な取調べを受けなければならぬ。然るに日本は自身の手で同胞に不自然な差別を設けてゐるのである勿論移民と非移民との二階級の間に明確な區別のある譯はない。如何なる日本領事と雖も移民旅行券を持つ可き者と非移民旅行券を持つ可き者とを、識別し得る筈はない。そこで日本人會なる半官的施設を創つた。凡ての地　日本人會は、領事から正式證明書を取るために、會員證を與へる機關に過ぎぬもので、領事は日本人會の保證が無ければ、一切證明書を渡たさない。母國に歸る日本人で再び米國に歸らんとする者は、居留證明書を貰ふ必要があるが、その爲めには余計な入費をかけ煩瑣な手續を踏まなければならぬ。領事からこの證明書をとるために、彼は先づ日本人會

に赴き、その會員となつて少く共一年間の會費その他の經費を支拂はなければならぬ。かゝる團體に半官的權能を與ふることは、屢々弊害を伴い易く、現に弊害を來してゐる。日本人會なるものは、領事に何等かの用向ある日本人を搾取せんがためにのみ存在するものである。この團體は又現に寫眞結婚の時に述べた如く、日本官憲のために在米日本人間の輿論なるものを製造する。日本人會は寫眞結婚の撤廢を日本政府に要請したが、それは自發的でなく、日本政府の內意を受けたものである。寫眞結婚を禁止された日本人は、妻をめとるために本國に歸り、數千弗を消費しなければならぬが、それはたゞ形式以外の何ものでもない。寫眞結婚權の撤廢の如きは、たゞ米國公衆の前に日本の特權を低下させたばかりで、他方それによつて益々排日運動を助成したのである。

駐米日本官憲が在米日本人の利益のために計ることが出來、また計らなければならなかつた場合は澤山あつたが、彼等は當然爲す可き事を爲さなかつた。かくて米國の公衆は日本代表の操縱し易きを知り、愈々益々激烈に排日運動を起したのである。

五　同前　その標語

私は日本政府及駐米代表の失策の結果、米國人をして排日運動を起さしめた所以を說いて來たが、更に進んで何故に米國人が益々激烈に排日運動を煽りつゝあるか、その理由について說くであらう。排日運動は今や頂點に達し、四十二年前支那人に與へた「支那人は退去せよ！」との有名な言葉を玆に新らたにして、「日本人は退去せよ！」と宣言せんとする形勢である。私が今この一文を草しつゝある時、米國下院に於ては現にその事が進行しつゝあるのである。

排日運動は何故かくも拾收す可からざるまでに熾烈となり、結局日本人の米國退去といふどん詰りまで、自然の成行に委せて置くより外なくなつたのであらうか？　排日運動の理由に多々あり、既に述べた如く、幾度かその標語を變更した。日本人は安き賃銀で勞働し、生活程度が低いから、その影響で米國勞働者の賃銀が低下し、生活水準が下降すると云ふのが、最初の言ひ分であつた。これは排日煽動家にとつて誠に都合のよい理由であり。多數の勞働者及び組合勞働者は、それを信じて排日運動に參加した。然し乍らこの好都合な理由も事實と一致しないといふことが間も無く認められた。賃銀は年と共に高まり、日本人勞働者の數は增した。太平洋岸に於ける日本人の數は增加したが、組合勞働者の生活は年を追つて向上した。實際加州に在る日本人は特殊な商業や勞働に從事してゐるのであるか

ら、決して米國の組合勞働者の競爭者であり得ない。彼等は新らたなる産業を起し、加州の發展を助けた。例へば加州の日雇勞働及び日雇勞働者は、日本人の起した新職業で、組合勞働者及び一般無産階級は、一人の下男をも使用することが出來ない所から、日本人の日雇勞働者を重寶がつた。砂糖大根の栽培、梨爪栽培、和蘭三葉の栽培、その他の多くの園藝は、明らかに日本人の起したもので、或るものは全國に供給し得るまでに發展した。

そこで排日煽動家は、安價な勞働(チープ・レーバー)といふ標語を、「日本人は好ましくない」「日本人は米國に同化しない」「日本人は白人と結婚しやうとしない」といふ標語に變更した。現在これからの標語は排日煽動家や、驅り出された無智な組合勞働者や白人勞働者によつて盛んに使用されてゐる。然し日本人はその選ばれたる分野に於いて默々として堅實に、そして着實に地歩を進め、米國人と實際に於いて衝突を來すことは決して無かつた。まことに排日煽動家の意味する日本人の「好ましからざる事」は、普通の言葉の意味とは多少異つてゐる。こゝに有名な排日煽動家サクラメント・ビー誌(加州)社長兼主筆マックラチーの與へたる、日本人の「好ましからざる」ことについての、米國人の觀方がある、彼は曰く、

「日本人は勢力的で野心家である。彼は長時間の勞働をする。彼は最初低廉な賃銀で勞働する。彼の持つ共同の精神は、米國の組合勞働者の如何なる者もよりも強いと言つてよい。彼は眞摯で、しまり屋で、働き手である。彼等は一般に法律をよく守る、長上の者及び兩親を尊敬する。警察統計の示す所では、市當局は少しも日本人に困ることはない。然らば日本人を排斥する理由何處にあるか? これらの諸の性質の結合が日本人をして一個の經濟的な機械たらしめる。それに對しては到底白人は競爭が出來ない。日本人排斥の理由は、彼等の非同化性にある。彼等は白人と結婚しやうとせず吾人白人も彼等との結婚を欲しない。日本人は常に日本人である。日本人は刻々凡てのものを支配しつゝある。白人はそのために離散した。」

日刊國民新聞の社長兼主筆德富猪一郎氏は、その名著「日米關係」に於いて、米國の排日運動は日本の軍國主義によつて誘發されたと解釋した。併し、米國人の言ふ所は、日本人は非同化的で、米國化し難い、白人と結婚しないといふのである。この攻撃は虚僞で、毫も公平でない。加州には米國人との通婚を禁止せる法律がある。米國人は日本人を劣等民族扱ひにし、痛く迫害する。白人に與へてゐる多くの特權を日本人に拒み、資

際日本人に對して米國の精神と習俗に本統に同化する機會を與へない。米國人は殆んど不可能事を日本人に要求してゐるのである。恰かも足枷を施しておいて、踊れない、歩くことさへ出來ないと非難すると同樣である。

一個の國民としての日本人は適合的の國民である。彼等は嘗く支那文明を採り入れ、過去五十餘年間に、西歐文明を採り入れた。かくもよく他の文明を採り入れた國民は、將來に於いてもさうであることは確實である。在米日本人は、西歐諸國の國民と同一の取扱ひを受けるならば、必らずや米國の文明と精神とに同化し、善良なる米國市民となるであらう。

排日米人等は、日本人は加州の最上等地を獨占したと云ふ。然しこの事實は、日本人が荒蕪の地に赴いて、その犧牲と勤勞とによつて、その地を豐饒ならしめ價値あらしめた事を語るものである。日本人に對する如何なる突撃語も反對も、公平なる心意を有する米國人の前には、何等の價値もなかつた。

然し排日米人等は最も有力な標語を發見し、今やその武器を以つて排日煽動家と排日政治家とは、巨大な資金を造りつゝある。その標語は何か？「外人は米國市民たり得ない」と云ふのである。太平洋岸に於いてこれまで幾度かこの標語が利用された。それは米國市民となる資格がないと云ふ單なる理由で、日本人に對して多くの營業や勞働を禁止する法案を可決させて、無援の日本人を迫害せんが爲めであつた。租税の點では日本人は、市民權を得る資格ある白人よりも、多くの税金を支拂はせられてゐる。桑港では釣漁の税金は日本人に對しては三弗であるが、白人には一弗である。紐育に於いては、米國市民たる資格ある日本人でさへ、或る業務に從事する權利がない「米國市民たり得ない」との標語は、過去に於いても、廣く米國に使はれたが、一九二二年十一月十三日、米國大審院が日本人は米國市民たる資格がないとの判決を下して以來、排日煽動家及びその盲動者はその目的を達し、在米日本人を米國から放逐せんと努めてゐる。

かくの如く排日運動は、彼等の不屈の煽動と謀策とによつて殆んどその最終の目的を達せんとしてゐる。米國人は一八八二年の支那人放逐の勝利の記憶を持つて居り、今や日本人に向つて同一の勝利を占めんとしてゐるのである。しかし彼等が成功するや否やは未だ明らかでない。

六　同前　一種の蹴球戲（フットボール）

米國に於ける排日運動は、多數の選手によつて各々自個の目的の方へ蹴られる蹴球に似てゐる。大選手も小選手もてんで

その球を掴んで、自分の標的へ蹴込んだ。排日煽動者の最大なる者は故ルーズヴェルトであつた。彼は日本人に關して多くの尤らしい言説を爲し、或時には、日本人に米國市民權を與ふ可きであると言つた。かの紳士協約の發案者は彼であつた。然しルーズヴェルトは、如何なる國民を米國に許容す可きや否やを決するのは、米國の權利であると頑強に主張した人であつた。この重大なる權利を有效に働かす爲めに、彼は强大なる海軍の建設を主張した。かくてルーズヴェルトはその蹴球たる排日運動を大海軍建設の方へ蹴つたのである。大統領ルーズヴェルは、一八五二年ペルリ提督を日本に送つた大統領フイルモアに倣つて、一九〇八年スペリー少將を指揮官として、戰鬪艦全部を太平洋に送り、日本を訪問せしめた。大統領の意志ある所は何處にあつたか？　米國は何時如何なる時でも日本と戰ふことが出來る。しかもこの强大な海軍を以つて……といふことを日本國民に印象せしめんが爲めであつた！　我々は世界巡航艦隊の出發に際して、大統領の與へたる熱烈なる訓示によつて、それを確信することが出來る。ルーズヴェルトは日本を假想敵國と爲し、强大なる海軍の必要を力説した。德富氏の言へる如く、ルーズエルトは日本が移民問題のために何時か米國に攻寄せるであらうといふことを、米國民に信ぜしめた。曰く、吾人米國々民が强大なる海軍を備えておかなければ、日本を太平洋から撃退することは出來ぬであらうと。かく彼は周密熱心な排日煽動家で、巧妙に太平洋岸の排日運動を助成した。多くの日本人は彼を以つて排日運動の當の張本人とは信じてゐない。と云ふのは彼は極めて狡猾な政界家で屢々日本人に對して同情らしきものを示したからである。然し、精神の奥底に於いては、彼は大いなる國民主義者で、紳士協約の場合に指摘したやうに、外交的奸策の達人であつた。大統領ルーズヴェルトの大海軍は、移民問題のために米國に追撃し來る可き日本を擊破するためばかりでなく、更に大いなる意圖を以つて建設されたものである。即ち米國帝國主義を極東に擴張すること是である。當時既に米國は極東に羽翼を伸し始め、菲律賓群島にその海軍根據地を建設してゐたのである。

太平洋岸及び中西諸州には無數の政治家がゐる。排日運動は、地方、州及び全國的の政治に於いて、政治屋共の個人的利益の具となつてゐる。排日運動にとつては、これらの煽動家は恰も蹴球選手の如くである。或者はそれを踏台として政治的階段を攀ぢ登り、排日運動を獨占してゐるジョンソン、フイランの如く、上院議員にさへ登第する。彼等は日本人問題の專門家であるが、それを除けば何ものでも無い。而して是等の凡ての

因を爲したるものは實に、日本政府の軟弱外交に外ならない。

米國の帝國主義とその發展とは、排日運動存在の賜物である。されば帝國主義者等はそのパンとバタとが排日運動の産物であるが故に、その長く存在せん事を欲してゐる。強き民族的偏見は米國人の生得の國民的性質であるらしく、米國人の外人迫害史は相當舊いものである。近代米國はその迫害を一つの民族から他の民族へ、一つの國民から他の國民へと移した。アメリカン・インヂヤンの迫害史は米國史と共に古く、數世紀に亘つて慘虐を極めてゐる。或る時代には、米國人は獨逸人を、次いで愛蘭人を迫害嫌惡し、一八九〇年代には伊太利人が迫害の的となり私刑にさへ處せられた。一八九一年三月ニユー・オルレヤン市に於いて、十七名の伊太利人が獄から引出され、市の郊外に運出されて、火焙りの刑に處せられた。この火焙り祭には、近郷から數千の見物が蝟集し、全市は熱狂の極度に達し、十七名の伊太利人は定めの私刑所まで市中を引廻された。市民の老若男女はこのお祭りの見物に出掛け私刑團を喝采し火刑が終つて後は賞牌獲得の競技が演ぜられた。被私刑者の頭蓋骨を拾つたものがその勝利者で、市民共は杖の先に頭蓋骨を捧げて勝利者を先頭に歡呼して全市を練り歩いた。一八八五年から一九二一年までに、四千九十七人の人間が私刑に會つたが、その中三千六十人は黒奴で、四十七州中私刑のなかつた州は四州に過ぎない。

伊太利人に次いでは波蘭人、ハンガリー人及び歐羅巴の他の後進國民が迫害された。猶太人及び黒人に對する嫌惡は恒久的で、前者は民族的宗教的であり、後者は社會的政治的である。黒人に對する迫害憎惡は増大する一方で、最初は南部に主として行はれ、白人婦人の凌辱が唯一の理由であつたが、現在では全米に蔓延し、最近では私刑が大仕掛な殺人及び人種暴動と化し、機關砲及び軍隊を以つて黒人を射殺し、その住家を燒くに到つてゐる。

然しこの黒人私刑の多くは東部乃至は南部に行はれてゐる。太平洋岸ではこの國民的性質を表示する他の方法を持つてゐる。最初に人種的偏見の現はれたのは、支那人に對してであつた。桑港　金鑛の發見されたのは一八四八年で、支那人勞働者は鑛山企業者の募集に應じて加州へ來たのである。企業者等はコツクにしたり、皿を洗はせたり、家の掃除をさせたりするのに、支那人を要求したのである。支那人が米國へ來たのは單に斯う云ふ譯で廣い意味に於いて鑛山企業者に招聘されたが爲めである。加州に於いて多くの鑛山が開發され、數千の支那人が

入込んで來た。間も無く支那人は米國人の爲めに虐待され、既に一八五〇年には多數の支那人洗濯屋は破壞され、支那人コック及び勞働者は迫害され、私刑さへ行はれた。百五十名の支那人は瀕死の狀態に陷るまで毆打され、事實上私刑に處せられた。然し一方支那人は勞働や業務に於いてその能力を發揮した。桑港金鑛の發見から丁度二十年後、米國はバーリンゲーム條約によつて、支那人の入國を公認した。當時五萬六千の支那人が米國に在り、四百六十七名を除いては全部ロッキーの西に住んでゐた。その後間も無くして「支那人は退去せよ！」との標語が起つた。最初にこの言葉を叫んだ者は愛蘭人ケルネーで、彼は雜馬のカトーに眞似て、演說の終りには必らず「支那人は退去せよ！」との標語を以つて結んだ。彼はいつも桑港の「砂地（サンド、ロット）」で演說會を開いたので。排支黨を人呼んで砂地黨と言つた。彼等は一八八二年支那人放逐法の議會通過によつて最後の勝利を占めた。

私が最初に米國に渡つた時は、支那人放逐法の實施されてから丁度二年後の一八八四年で、當時可成り多數の支那人がゐたが、大部分は歸國の準備中で、米國に居殘つたのは下男か、洗濯夫か商人であつた。支那人街は桑港でも最も殷盛な街で、賭博宿は到る所に在つた。然しオークランド賭博宿は最も有名で、今日猶オークランドの白人文明の下に於いて、大いに隆盛を誇つてゐる！。

米國人特に桑港市民は支那人街の撤廢を欲したが、市の樞要部に深く根抵を下してゐるのでその實現が不可能であつた。そこへ一九〇六年の大地震が來て、支那人街は全く灰燼に歸した。そこで白人市民等は支那人街の復興反對の叫びを擧げたが、この問題審議のために集つた地主會議は滿場一致で復興贊成に決議した。この地主中には三十六名の支那人地主があり、彼等は支那人街の大部分を所有してゐた。何故かゝる結果を見たか？　桑港にこの問題が起るや、ポートランド、タコマ、シヤトルは各々桑港の支那人に運動を開始し、自分の市に來て支那人街を再建せんことを求めたのである。桑港の支那人は言明した、桑港が吾人の店舖や住宅の再建を欲しないならばそれでよろしい。吾人はタコマかシヤトルへ行く。桑港の市民覺えておれ！　吾人は桑港諸銀行にある全部の金と吾人の營む東洋貿易業を携へて立去ると。この言明は桑港市民を戰慄させ、支那人街の移轉は中止され、直ちに再建に着手され、市のどの部分よりも立派に復興された。

日本人が米國に來たのは支那人放逐のすぐ後であつた。當時在米日本人の數は比較的尠なかつた。在米日本人數は統計によ

れば次の通りである。

一八八〇年　一四八人
一八九〇年　二、〇〇〇人
一八九五年　六、〇〇〇人
一八九九年　三五、〇〇〇人
一九〇八年　一〇三、六三八人

一九二〇年の在米日本人數は最高だと思ふが、それにしても十萬人余に出でない。然し排日運動は惹起され、從前よりは一層峻烈で、既に述べた通り、在米日本人に悲しき宣告が下ろうとしてゐるのである。

七　布哇に於ける日本人

五十名から成る最初の日本移民隊が布哇に渡つたのは今から約半世紀前である。彼等は布哇の甘蔗栽培主の求めに應じ、三年間の勞働契約で渡航したのである。これらの貧しい移民は栽培主からひどい待遇を受け、その報道か本國へ傳はつて來たので、日本政府はその上移民を送ることを停止した。當時日本は余り移民を海外に送る必要がなかつた。然るに布哇の栽培主等は日本人勞働者を非常に要求し、繰返し日本人の渡航を求めた。一八八四年頃かと記憶するが、栽培主等は布哇王カラカワに乞ふて日本を訪問させ、王は日本政府に移民の送附を懇願した。その結果九百五十五人の日本人が渡航した。それは最初の移民後丁度十六年目の一八八四年であつた。然るに待遇改善の誓約があつたに拘らず、結果は依然として面白くないので、再び日本は移民送附方を中止した。

一八八六年日本は布哇と移民條約を結び、同條約は一八九一年まで持續した。その後布哇政府から要請があつたが、條約の再締結を見なかつた。然し當時既に多くの移民會社が起り、日本人は移民周旋人の手を經て布哇に渡つた。契約移民として渡航した多數の日本人は、甘蔗栽培主のひどい搾取の下に多大の苦痛を嘗めたが、その中の奮闘的の人々は小金をためてホノルルに來たり、小店舖を開いて獨立の生計を立てた。かくして同市に於ける日本人居留地が生じたのである。一八九八年の米國の布哇併合の當時、既に數萬人の日本人が同地に在つた。

米國の布哇合併後、一切の契約勞働制度は撤癈され、布哇在住日本人は自由に米大陸に渡れることゝなつた。事實多數の日本人はよき賃銀とよき待遇とを求めて、太平洋沿岸に渡つた。一八九八年から紳士協約實施の一九〇九年まで、多數の日本人は米國入國の便宜のために布哇に赴いた。當時日本政府は米國の勞働組合が日本人勞働者に反對してゐることを知つてゐたの

で、一切米國への旅行劵を交附しなかつたが、布哇へ渡る者には旅劵を下附した、その爲め布哇併合から紳士協約の實施まで、布哇は眞に米國への通門で、數萬の日本人はこの門から米國に入り、その中大多數は直接布哇から赴いた。一九〇二年から一九〇八年までの七年間に、七萬四千の日本人が布哇に赴いた。

一九一〇年に於ける在布哇日本人數は七萬九千六百七十五人で、一九〇九年から一九二〇年までに三萬一千四百七十四人の移民が布哇に渡つた。而して一九二〇年に於ける在布哇日本人數は、十萬九千人余であつた。これによつて見ると多數の日本人が米大陸に入つた譯で、現在米國大陸には一萬二千人以上の布哇生れの日本人がゐる。かくの如くこの數年間に三萬乃至四萬の日本人が、布哇を足場にして乃至は布哇から直接に米大陸に渡つた譯である。

日本人の米大陸への急激な入國増加は全く米國の布哇併合の結果である。この併合は政治的陰謀と特有の陋劣な戰術によるもので、それは過去に於いて米國の常に執つて來たものである。その最近の實例はパナマ共和國の建設である。米國はパナマ人を煽動してコロンビヤ共和國に對して叛亂を起さしめ、直ちにそれを承認して條約を締結し、かくしてパナマ運河地帶の租借獲得のために、新共和國を建設したのである。最近米國はコロンビヤ國民の感情を緩和するため、同共和國へ二千五百萬弗を貸附け、漸次その金權を伸張してゐる。隣國に對する米國の帝國主義的侵略の古き實例は、テキサスのそれである。テキサスをメキシコから奪取するために、米國人は同地に移住し、米國へ併合を要求する決議を作り上げた。勿論米國はそれを承諾し、かくてテキサスは一八四五年パナマ共和國の場合と同樣にメキシコの主權を無視して米國に併合されたのである。

布哇に於いては米國人は最初（一八二二年）土人を基督教化せん爲めに渡航して來たのであるが、間も無く甘蔗栽培家等が土人搾取の目的で來るやうになつた。ところが甘蔗栽培に土人の不向なことを知るや、しきりに日本人勞働者の渡航を求めた。斯くしてゐる中に米國の甘蔗栽培主等は寧ろ布哇を合併するにしかずと爲し、革命を誘發して革命政府を樹立し、女王の政治的權力を奪ひ、布哇の併合に就いて本國政府と協議し、一八九三年一月十六日その目的を達した。然しそれより前、ホノルル駐剳米國公使は本國政府の訓令を待たないで、一八九三年一月九日布哇群島を以つて、米國の保護領なりと宣言したのである。

かくて布哇は米國の領土となつたが、それは布哇の人民の意志にも女王の意志にもよるものでなく、布哇にある米國資本家

の意志と希望によつたのである。

日本はその當時まだ布哇に在る同胞の利益を擁護するだけの力がなかつた。布哇の女王とその人民の獨立權が消滅すると共に布哇政府と取結んだ諸條約は效果を失つた。現在米國人は布哇諸島に在る日本人を闖入者か邪魔物のやうに取扱つてゐる。彼等は日本人の布哇移民は全く日本及び日本人の發意に成るものでなく、米國の資本家の要望に基いたもので、現在憎惡してゐる日本移民のお蔭で米國の資本主義が建設されたのだといふことを忘却してゐる。大陸の米國人は布哇群島における日本人の増加を惧れ、布哇の米國資本家と結托して、日本人を制限又は放逐せんと畫策してゐる。

布哇の白人資本家は他の國の勞働者を以つて日本人に代へやうと努めた。ポートリカ人、葡萄牙人、比律賓人を以つて試みたが、すつかり日本人に代へることが出來なかつた。更に彼等は賃銀の安い支那苦力を輸入しやうとして、期間を定めて一萬人の支那苦力の輸入を許可されん事を議會に請願した。然し今日までまだ成功してゐない。現在では彼等は手段を變へて、布哇の日本人に不快な思ひをさせ、生活の便宜を奪はうと努め、日本人語學校の初年級や幼稚園で正課後一時間乃至半時間小供に日本語を敎へることにさへ干渉しやうとしてゐる。小供達は日本人語學校へ行くことを非常に喜び、それは小供達の肉體及び精神に何等害を及ぼすものでないのに、布哇政廳がこれを禁止しやうとするのは、たゞ日本人父兄に不快な思ひを味はせんがためである。然し米大陸とは異つて、布哇に排日運動を起すことは極めて困難である。何故なれば布哇の日本人は米本土よりは非常に有利な條件の下に發展して居り、米本土に於けるよりはよく組織され米國化されてゐるからである。その布哇の日本人は數に於いて一切の他の民族及び國民の首位にあるからである。

一九二〇年の國勢調査の結果によると、布哇の全人口の構成は下の通りである。布哇人二三、七二五人、亞細亞布哇人、六九五五人、高加索布哇人一一、〇七二人、葡萄人二七、〇〇二人、ポートリカ人五、六〇二人、西班牙人二、四三〇人、他の高加索人一九、七〇八人支那人二三、五〇七人、日本人一〇九二七四人、菲律賓人二一、〇三一人、朝鮮人四、九五〇人。布哇の日本人の増加率は極めて高く、愛國的米人は布哇群島の將來を非常に憂慮してゐる。猜疑深い彼の眼を以つて見れば、それも一應尤である。現在布哇生れの日本人が一萬二千二百十六人居り、有權者は僅か二百八十七人（一九二〇年）であるが、一九三〇年には二萬二千九百二十一人に増加し、一九四〇年に

は三萬五千百三十七人となるわけになる。即ち二十年後には、米國が布哇からも米國大陸からも放逐出來ぬ日本人が、絶對多數に近き投票數を持つことになるのである。勿論米國憲法の保證せる彼等の生得の權利を奪ふ方法が只一つある。それは憲法の改正である。それで無ければ私刑を以つて南方黑人に爲したやうに、日本人を恐怖せしめて投票させぬことである。

在米日本人迫害の第二段は、米國生れの日本人から米國市民たる政治的特權を奪ふことであらう。加州選出上院議員ジョンソンは次には憲法改正案を提出し、米國生れの日本人は米國市民たる權利を有せずとなすであらう。然る時日本人は米國生れの日本人非人と化するであらう!。

八　加州に於ける排日運動の特質

排日運動及び米人の日本人迫害は、運動の方法や標語を幾度か變更して、歩一歩と發展してゐる。戰術や方法は場所と時によつて變るが、排日運動の中心は依然として加州であり、桑港はその中にあつて中心の中心である。私は加州の排日運動に現はれた若干の事實を簡單に記述しやう。

加州の排日運動は諸の方面に亘つてゐるが、主なる運動は立法部、新聞雜誌、映畫で行はれ、團隊行動や示威運動がそれに伴つてゐる。勿論それらの間に明確な區別が付けられるわけで無く、相互に錯交し、屢々共同の目的のために聯合する。私はこゝに重立つたもの若干を說かう。

A、排日運動の有力な武器が二つある。立法と新聞である。兩者は效力があり米國に排日運動のある間生命のあるものである。米國の新聞紙は一般に骨の髓まで腐敗してゐる。太平洋岸の新聞は猛烈に宣傳を行つてゐる。その筆頭はハーストの「桑港エキザミナー」紙で、排日記事を製造して盛んに米國人の排日感情を煽つてゐる。エキザミナーは他の多くの日刊新聞と同樣に、日本人に關する事實を曲筆捏造し、力めて米國人讀者に對して不快を與ふるやうな記事を造り上げる。ハーストは紐育、ボストン、市俄古の如き大都市に一流の日刊新聞六個を有する米國の新聞王で、民衆の間に偉大なる勢力を持つてゐる。そのハースト系新聞は過去二十年間排日記事、論說を掲げ、日本に關する眞事實を曲筆捏造して、排日記事に仕立ててゐる。彼はまことに排日運動の一方の指導者で、その上彼は全米に亘つて日刊新聞及び雜誌に大勢力を持つてゐるので、それらの新聞雜誌は却つて排日記事や漫畫を掲載する。彼はまたそれらの無數の地方新聞を供給するため、自身で通信社を持つてゐる。かくして米國の新聞紙は排日運動の發展に大いに貢獻するところがあつた。

B、排日映畫は排日運動の一つの有力な武器である。日本人にとつてはそれは單に早川雪洲を立役とした普通の映畫に過ぎない。英國では駐英大使の懇請で撮影が禁ぜられて居り、日本では勿論見られない。然し排日映畫は數百數千を數へ、米國及び加奈陀の到る處の活動寫眞館で撮影されてゐる。この映畫に全く侮辱的な、まるで噓の、日本人の低劣な性格や好ましからざる點が、生々と露骨に表現され、十分に米國人の排日感情を煽るやうになつてゐる。またこれらの映畫には、日本人の性格の最も惡い半面たる陋劣奸惡な點が現はれてゐるが、これは特に日本人に限つたものでなく、どんな民族にも國民にも見出されるものなのである。それを排日映畫では明らかに日本人獨特のものとなし、排日運動者の口實としてゐる。

新聞や排日映畫は營利事業で、米國人がこの問題に興味を持つ間、又は尠くとも目下下院に提出されてゐる排日法案の目的通り日本人を放逐し得るまでは、彼等はいつまでも排日運動を營利のために利用するであらう。

C、排日團體は全米特に加州に於ける組織されたる排日運動の機關で、同州には種々なる名稱の多くの排日團體がある。これらの團體によつて排日煽動家等――大部分は下等な政治屋である。――は個人的の政治的名聲や地位を得、生計の資を得てゐる。猶これらの團體は資金を蒐め排日文書を配付してゐる。

D、次にはモップの排日運動がある。この方法は排日煽動家が眼前の或る目的を遂げやうとする時、いつでも使用される。排日モップは米國の公衆に向つて排日運動がどんなに猛烈であるかを示めさうとする場合屢々必要で、特に議會の傍聽席に於てそうである、モップ行動が排日運動の常套の手段となつたのは、一九〇六年の桑港震災の直後である。

排日モップの起つた原因については一寸說明の要がある。桑港の地震は米國人に非常な驚愕を與へた。彼等の大多數はまだ地震にあつたことがなかつたからである。そんな譯で彼等は周章狼狽、茫然自失の體であつた。この非常時に桑港の日本人は子供時代から地震には慣れてゐるので少しも驚かず、殆んど平生通りに勞働や業務に從事して金を儲けた。震災後最初に仕事を始めたのは日本人で、市内の燒殘りの個所を借入れ、諸種の店舖を開き、恰かも日本人町を建設しやうとするかのやうであつた。勿論日本人は普通白人が拂ふよりも高い家賃で家を借りた。それで桑港の米國人等は、震災後家賃の騰貴したのは、日本人が震災前より高い家賃を拂ふからだと考へた。桑港の中流民や基督教の牧師等は、日本人を好ましからざる國民だとして攻撃し始めた。つまり日本人が高い家賃を拂つて、善い家

占領したので、彼等は家賃の安い善い家に棲めなくなつたと考へたのである。この時以後米國人は、日本人が奮闘的な鬪徒な國民だといふことを知り、排日運動はモツプ運動の形を執つたのである。モツプは屢々日本人店舗や料理屋を襲撃し、手當り次第に投石破壞した。一九〇六―七年の頃は、煽動家に使嗾された少年や青年が隊を組んで襲ひかゝるので、日本人は一人で往來を歩くことが出來なかつた。日本人が一人で停留所に待つてゐたのでは電車は停車せず、白人の乘客か來るまで何時までも待つてゐなければならなかつた！　日本人に對してあらゆる迫害が加へられ、全く誰彼の見さかひがなかつた。桑港地震の後世界的な地震學者である東京帝國大學の一教授が太平洋岸の罹災地帶を視察した。サンダ・バルバラに赴いた時、彼はモツプに投石され帽子は奪ひ取られ衣物は引裂かれた。しかし日本政府はかゝる侮辱に對して、抗議する勇氣もなく、教授は米國官憲から一言の辯明も得ずに米國を去つた。

かう云ふモツプの迫害に對して日本人は何等抵抗せず、靜かに忍從した。然し排日煽動家やモツプは日本人の無抵抗によつて益々勇氣を得て愈々猛烈に攻擊を加へ、今やその直接行動は酷烈野蠻に達してゐる。全國に支部を持つて立派に組織された米國在鄕軍人團（アメリカン、レヂオン）、クー・クラツクス・クラン、それにI・W・Wまで加はつて、排日暴動を起し哀れな日本人に直接行動を浴せてゐる。二三の實例を示さう。「スタニスロー郡の果樹園に雇はれてゐた五十八名の日本人は、白人勞働者のために亂暴に自働車に詰め込まれ、本日（一九二一年七月二十日）タ－ロツクの六哩北方のキースに運ばれ、郡外に放逐された。……この放逐の結果日本人勞働者とその家族は全部は引上げたが……彼等は何等抵抗しなかつたに拘らず、手荒に取扱ひを受け、中には掠奪された者もある……日本人放逐は今週中これが二度目である。數日前マースド郡リビ－グストン附近で白人勞働者は大勢の日本人勞働者に退去を命じた。」（ニユー・ヨーク・コール紙一九二一・七・二一）紐育タイムス紙はこの事件を報じ附言して曰く、「同地官憲の言に依れば、約七十五名からなる暴民の一隊は、日本人の退去を急き立て、一軒の日本宿屋と二軒の住宅を燒拂ふと威し附けた」と、タイムス紙もコール紙もこの白人勞働者はI・W・W・の會員だと云つた。二日後に紐育タイムス紙は社説を掲げて曰く、「タ－ロツクの平和なる日本人は眞夜中に叩き起され、自働車に詰め込まれて、市外五哩の地點に運ばれ放逐されたが、この暴行に對してI・W・W・の會員が責任あるといふことは重大な事である」と。

一九二三年一月二十七日（土曜日）フロリダ州レーク郡レー

ク・トラシー在住の澁谷氏は深夜覆面せる一隊の市中に襲はれ、暴徒等は氏に對して二十四時間に退去せんことを求めた。之に對し澁谷氏は、余は十七年間米國に在り嘗て米國の法律を犯したことなく、他人に迷惑をかけたこともなく、この家は自分の家である」と答へた、するとクー・クラックス・クランの團員たるこの一隊は、「吾々が汝に言ふ所が卽ち法である」と捨臺辭して立去つた。その際彼等は入口の扉に一葉の書面を貼つて行つたがそれには「レーク及びヴネルシヤ郡の市民は汝が廿四時間内に此處を退去す可きを信ずる。汝は廿四時間内に此處を、退く可しとの命令を受取つた！」と記してあつた。

農業家澁谷氏は數年前レーク・トラシーに一枚の畑地を買ひ、二萬弗の經費をかけて將に業成らんとしてゐたのである。氏はミネソダの或る農學校を卒業し、その後經育に在つたのであるから、米國の道德慣習をよく呑込んでゐる。敎養ある日本人が米國ファスチスチ團隊たるクー・クラックス・クランの犧牲となつたのは是が最初である。

E、最近排日運動の方法は非常に頽廢的、不道德的となつた。一二年前南部加州に於いて、一隊の白人靑年は中年の日本婦人の營める小店舖を襲撃し、その中の一人は右婦人を凌辱したが、同地官憲はこの犯人を罰さなかつた。かく排日運動は日に日に惡化し、急激に米大陸全般に蔓延してゐる。而してその最後の仕上げは米國の立法權によつて殆んど完成されんとしてゐる。

F、排日法の數に於いて最も多く質に於いて最も苛酷なのは加州で、次は華盛頓州である。直接行動威嚇・强迫は排日立法運動と手を携へ進んだ。運動の第一段は排日煽動家に使嗾された勞働組合によつて起されたもので、片々たる政治屋の是等煽動者はそれによつて勞働者の投票を得己れの政治的地盤を造らうとしたのである。勞働組合は日本人店舖や洗濯屋をボイコットするとか、組合員の日本人製靴の購入を禁止するとか云つた規定を設けたが、勞働組合のかゝる排日手段が十分に奏功しないことが發見された。桑港、オークランド、バークレー・アルメダの日本人洗濯屋に對し、白人の蒸氣洗濯屋に使嗾された勞働組合は、ポスターを揭げたり日本人の顧客に脅迫狀を送つたりして、盛んに脅迫を加へたが、一般公衆は割に公平で勞働組合の規定に服さなかつた。

桑港市長ユージエン・シユミツを盟主とした勞働組合の排日運動が失敗に歸すと、次に桑港市廳は日本人兒童が普通學校から除外し、特殊學校へ隔離するとの訓示を出した。その公布されたのは一九〇六年十月十一日であつた。米國生れの日本人兒

童をも含めて日本人全體的に差別的立法を爲したのは是が最初である。當時桑港全市に於いて日本人兒童は總數九十三名で三十校に編入されて居り、十七歳以上の學生は十二名に過ぎなかつた。日本人兒童隔離問題が高潮に達した時、教師及び市の教育主任は隔離に反對した。その理由は日本兒童は米國兒童と少しも變るところなく、學校では何等迷惑を感じないと言ふのであつた。

勿論名譽と人種的衿持を持つ在米日本人と日本とは、この種の人種差別待遇に反對した。又たとへ兒童の父兄が此規定に服從したとしても、距離と不便のために兒童を隔離學校に送ることは全然不可能であつた。米國の市立學校では、兒童に余り遠距離を步行させて學校へ通はせてはならぬ規定であつた。然るに隔離學校に通ふことになると、日本兒童は數哩を步行せねばならぬ譯になるので、市當局は日本人兒童を支那人街の支那人學校に收容しやうとした。かゝる取扱ひが日本人の希望に添ふ譯はなく、玆に國際問題を惹起し、大統領ルーズヴエルトは巧みに此問題を處理して、日本當局者と妥協を遂げたが、實際に妥協條件はルーズヴエルトと市長シユミツの間に作製されたものである。ルーズヴエルトは學校問題の解決に際して日本側へ同情的態度を示し、日本人の滿足を買ひ日本外交家の信任を博した。彼は日本人のこの單純な信任を利用して遂に紳士協約の締結に成功したのである。紳士協約は一九〇七年に締結された。德富氏は日米問題の著述に於いて、この點に關說して右協約の締結は米國外交の勝利であるとし、「周到銳敏なる大統領ルーズヴエルトは、この出來事（兒童隔離問題）を利用して吾人を壓迫し、紳士協約と名づくるものを吾人から獲取した。」と述べてゐる。

排日運動は三つの立法的司法的舞臺によつて行はれた。州議會、國會及び裁判所是である。加州議會は外人土地所有法を制定して排日運動に一貢献を爲した。經濟的の排日立法は、日本人に米國市民たるの資格無しといふ米國憲法の規定による、種差別の基礎の上に樹てられた。加州議會は一九一一年から一九一五年までに五十一個の排日法案を議し、一九一三年五月かの外人土地所有法が議會を通過した。この法案の規定するところに依ると、米國市民たるの資格ある外人は不動産を獲得し所有し讓渡し使用し相續することが出來るが、米國市民たるの資格無き外人は三年以下の期間中耕地を賃借し得るに過ぎない。かくて日本人は加州に於いて土地を所有することが出來す、賃借も三年に制限された。此法案は五月五日に可決され、同十九日知事ジヨンソンの裁可を得、同年八月十日を以つて嚴

重に實施された。

G、右の外人土地法は、一九二〇年十一月の選擧に於いて採用された排日「イニシアチーヴ」土地法（人民投票）によつて修正された。一九一三年の土地法實施後、排日民等は同法に多くの缺陷があつて、制定當時に意圖した眞の目的を達成することが出來ぬの譏つた。何故なれば、日本人が總株の四割九分を持ち、米國生れの日本人少年が兩親の保護の下に殘りの五割一分を持つて不動產會社を設立し得るので、この手段によつて日本人は依然として加州に土地を所有してゐたからである。その上日本人は三年間の土地の賃借によつて、十分利潤を擧ぐるやうにその土地を開發したからである。そんな譯でほんの數年間の經驗で土地法修正の必要が感ぜられた。そこで大規模の排日運動が組織され、加州東洋人排斥同盟の指導の下に猛烈な運動を開始した。この同盟は米國全土に活躍したが、彼等が要求した立法の草案の大要は次の通りである。

一、紳士協約の廢止。

二、寫眞結婚の禁止。

三、日本人移民の絕對禁止。

四、亞細亞人を永遠に米國市民と爲さざる政策の確立と法律化。

五、米國憲法第十四條第一項を修正して、外人を兩親として米國内に生れたる小供は、兩親が米國市民たるの資格ある人種に非らざれば、米國市民と見做さるゝを得ずと改むること。

これに對して櫻府ビー紙主筆で排日運動の指導者のマックラチーは更に一項目を附加した。米國が勞働者を必要とする場合には　期間を定めて支那人を輸入し、一定地域に於いて勞働に從事させ、期間の終ると共に直ちに放逐することといふのである。以上の立法草案は排日運動をして徹底的に有効たらしめんがために構へられたものである。

一ケ年余の激烈な宣傳の結果、排日煽動家等は排日「イニシアチーヴ」土地法の成立に成功した。新外人土地法は次の諸規定を設けてゐる。

一、日本人の土地所有禁止。

二、日本人の耕地賃借禁止。

三、兩親の保護の下にある米國生れ日本人少年少女（米國市民たる）の不動產權獲得の禁止。

四、日本人兩親から不動產に關してその子女の保護者たる權能を剝奪すること。

五、一切の米國會社に於いて日本人が不動產に關して利害關

係を結ぶ事を禁止すること。

六、推定價格を以つて不動產を州に沒收すること。

この法案が一對三の比率の大多數を以つて加州投票者に採用されるや、西部の多くの州はそれに倣つた。

華盛頓州の排日土地法は加州のそれよりは苛酷なもので、次のやうに簡約して差支へないであらう。

一、外人の土地所有を禁止し、相續または債權擔保として外人の獲得せる土地の所有は二ケ年に制限すること。

二、外人の耕地賃借は絕對に禁止すること。

三、外人の非耕地賃借は六ケ月に制限すること。

四、外人兩親から不動產に關してその子女(米國市民たる)の保護者たる權能を奪剝すること。

五、外人所有の不動產を推定價格によつて沒收すること。

六、外人が利害關係を有し又は株を所有すと認めらるゝ一切の不動產會社は嚴重に之を監視すること。

七、之れを犯す者は二年以下の禁錮又は五千弗以下の罰金若くは同時に禁錮及び罰金を課すこと

この建議案は四萬二千名の署名者を得ることが出來なかつたので、一般の投票には附せられなかつた。然し立法部に於いては、排日同盟が米國在鄕軍人團の援助を得て、强迫威嚇等の手段を以つて更に一層苛酷な排日土地法を通過させ、一九二一年三月知事はそれに署名し、二ケ月後に同案は兩院を通過した。

これより前華盛頓州は米國市民たる資格なき外人の土地所有を禁じたので、同州に於いて土地を獲得する唯一の手段は擔保沒收であつたが、今や新法律の下では、此方法によつても僅々二ケ年しか土地を所有することが出來なくなつた。

二州の土地法によつて、日本人は收獲物分割契約さへ結ぶことが出來なくなり、農業から全く放逐されたのである。

且、米國大審院は最近右二州の排日法を憲法違反に非らず有効なり〻の判決を下した。日本人の土地賃借も一九二三年十一月十三日の大審院の判決によつて禁止され、收獲物分割契約で日本人が土地を耕作することを禁止し、又日本人が土地會社の株を所有することを禁止した加華二州の法律も有効と認められた。かくの如く二州の外人土地法によつて、日本人は土地を所有し、賃借し、收獲物分割契約で耕作し、土地會社の株を持つことを全く禁ぜられた。これらの法律は州立法部の票決で制定され、大審院の判決で認められたものであるから、最終的のものである。

米國大審院は排日土地法支持の理由を説明して曰く、

「米國政府は市民權を得る資格ある者と無き者とを區別す

る。米國市民となるの資格なしと闡明された者は州住民として好ましからぬ事は之を承認せねばならない。されば其の州の安寧から見て、好ましからざる住民の手に土地の所有の移ることを阻止するために、防禦的手段を執るは當然である。」

「加州には人種的差別を設ける意志はない。たゞ米國政府が市民たるの資格なしと思惟せる住民に對し、その市民を保護せんと欲するに過ぎない。」

「好ましからざる」といふ形容詞は、私の記憶に誤がなければ、大統領ルーズヴェルトが無政府主義者の入國に關して用ひたのが最初である。今やこの不快な形容詞は米國に在る日本人全部に適用されることゝなつた。米國は勞働者たると商人たると外交官たるとを問はず、今や明らかに日本人を差別視し、大審院の判決に基いて日本人全部を「好ましからざる」もの、米國各州の利益に反するものとなしたのである！　この掃蕩的な判決が下された以上、駐米日本大使は行李を纏めて直ちに旅行券を要求し米國を退去す可きであつた。皇帝の親任せる大使の面前に於いて、大審院がかゝる侮辱的な判決を下したるに對し、その反對意志を表明する如上の行動を執らずして、當時の駐米大使埴原正直は默々として華盛頓に留まり、判決に對して抗議をさへ提起しなかつた。彼は嘗て米國に駐在した最も憶病な、最も軟弱な大使であつた。

九　日本の帝國主義と資本主義

「不言實行」は日本軍閥の標語で、日本はそれを以つて日清、日露の二大戰爭に成功した。然し日本の帝國主義は外交談判においては極めて弱く、此薄弱はポーツマウス平和會議に於て遺憾なく暴露された。日本全權小村伯はポーツマスで米國の新聞記者通信員に「不言實行」政策を用ひ、米國輿論の同情を失つたに反し、露國全權ウイッテ伯は米國新聞記者通信員の好感と支持とを買ひ折衝に勝利を占めた。日本の帝國主義は外交折衝に於いて、常に弱い。その事は巴里會議及び華盛頓會議でも證明された。

日本の帝國主義は日露戰爭後得意の絕頂に達した。日本は此戰爭で歷史あつて初めて歐羅巴の最大强國を破り、世界强國の一に列したからである。間も無く日本は××××××××××××××××、同國のブルジョアー及び頽廢貴族に五百萬圓の公債を支出支給した。哀れなる×××××その貴族及び大ブルジョアから裏切られたのである。日本の帝國主義は朝鮮に於いて最も×××××××××××敢てした。

其時まで日本の資本主義は國內の餌で生存してゐた。即ち陸

海軍及び國內產業を、直接その工場職場に於いて、或は又政府特に陸海軍と有利なる契約を結ぶことに於いて、それらを××××××してゐた。然るに戰勝の結果新らたな領土が加はり、××の範圍が擴大したにつれて、日本の資本主義はその觸手を伸し、××××××××××××××始めた。日本の帝國主義と資本主義とは常に相携へて進んだのである。シベリヤに於ける日本の帝國主義の失敗後漸く、日本の資本主義は一九〇五年以來の常套手段に多少の失望を感じ、間もなく政府の保護の下に東洋拓殖會社を組織し、×××××××會社の手に收めたのである。××は日本資本主義の××××××舞臺となり、勞働者及び貧農の××××××××、××××××××××××支持されてゐる。

日本の帝國主義は××××××××××によつて朝鮮人を日本化せんとする無謀な企てに於いて、その×××を暴露した。××××××××××、××××××××××××××と化し、××××××如く立つて××××××××××××××××××、その勇氣と實力を示した。××××××××××××××するであらう。日本の帝國主義は既に失敗に歸し、三月暴動以來日本は統治方針を變更して、憲兵政治から警察政治に變じた。

世界大戰中日本の帝國主義は非常に不評判となり、世界の輿論は日本を極東のプロシヤ、第二の獨逸と呼んだ。この呼びが最初に上つたのは米國で、それがまた排日運動及び米國の强大な陸海軍建設の急務に對する理由の一として利用された。勿論日本は歐洲戰爭を利用し、嘗に歐洲諸國に占められてゐた市場に觸手を伸し、更に私有及び國有の大軍需品工場及び造船所を營利のために使用し、××××彈藥を聯合諸國に賣付けた。日本は聯合國側に參加してゐたから最もよく世界の形勢を利用し、戰時工業及び戰時商業を伸張した。商工業に於いて帝國主義は立派に成功し、武器彈藥の賣却から生じた戰時利得によつて軍事的地位を强固ならしめた。

然し日本の資本主義は、關係諸國が內政及び軍事に忙殺されて支那を顧る暇のない時を利用して、支那を支配せんと企て、政治的に重大な失敗を演じた。日本は侮辱的なる二十一個條の要求を提起し、支那は周圍の事情から止むなく一九一五年それに調印した。この條約は一九一四年三月三日に組織された大隈內閣の仕業である。

此時に大隈伯が何故に內閣を組織したか？　大隈伯を起用した事情と理由を想起することは興味がある。それは丁度山本內閣が海軍大不正事件で仆れた後で、同事件は最初カール・リー

ナクスヒトによつて伯林の法廷で暴露され、日本の輿論を惹起し、續いて國際問題となつたのである。山本内閣の仆れるや軍閥派は現首相清浦をして内閣を組織せしめんとし、清浦もそれを承諾したが一ケ月餘の努力の末遂に失敗に終つた・輿論は軍閥派を猛烈に攻撃した。狡猾なる軍閥派は清浦の失敗に鑑み、且つ他の官僚を以つての組閣の不可能なるを知つて、大隈伯を起用して内閣を組織せしめた。然し勿論陸軍擴張案を實行するといふ誓約を執つた。老大隈は軍閥の命ずるがまゝに、忠實に陸軍擴張案を實行した。彼は更に日本の帝國主義をひつさげて支那を支配せんと欲し、支那に迫つて廿一個條の要求に調印させた。この要求は實に日本の資本主義を以つて支那を支配し、殆んど永久に南滿州を統治せんとするものである。世界大戰の當初大隈内閣の下に於ける山東占領は、軍閥派を喜ばせ、大隈は英國に×××て獨逸に宣戰した。勿論日本のブルジヨアジーは、獨逸の建設せる所を占領して、對支貿易を進展せんがために、山東占領に贊成した。

歐羅巴諸國が内政及び軍事に忙殺されてゐる間のどさくさまぎれに、日本は支那に向つて帝國主義的勢力を張らうと企てた。日本のこの我利的行爲は、必然に歐羅巴諸國別けても米國を憤怒させ、米國は公々然と支那に味方し、支那の利益を支持し、支那を國際罪案に押し出し、常に支那を助けて日本の利益を沮んだ。米國の弗外交は着々支那に於いて成功し、他の諸國の多少共支配してゐた支那の搾取市場に割込んだ。最近の無線電信利權の獲得はその著しい實例で、諸搾取國は支那に於ける米國の弗勢力の偉大なることを感じてゐる。

日本は支那に於ける米國帝國主義の强き壓迫を受けて、刻々にその勢力を失墜してゐる。國際聯盟條約の第十條は本來大統領ウイルソンの挿入したもので、ウイルソンの調印は米國にとつて何等の意義もなく、上院は同條約の批准を拒絶したとは言へ、米國は問題の第十條を利用し、敢然として支那を援助して日本を抑へ、遂に日本を山東から放逐し、更に日本の經濟的勢力に割込まんが爲め「門戸開放」の宣傳を行つてゐる。

米國は華盛頓會議の結果日英同盟を撥棄させ、次いで日本を山東から驅逐し、石井ランシング協定を取消し、日本のヤツプ島無線電信建設權を放棄させた。今や進んで米國は支那を援けて二十一箇條を無効ならしめんと努めてゐる。その結果支那は日貨排斥を宣し、民族暴動を起し、在支日本人の迫害さへ敢てしてゐる。支那人の日貨排斥は日本の經濟生活にとつて大打撃であり、日本はその苦痛に堪えず、日本の帝國主義は今や所謂對支政策を變更し、歐羅巴の侵略に對して支那を保護し、以つ

て支那の排日熱を緩和せんとしてゐる。日本は外國債權者の支那鐵道管理問題に於て始めて支那に味方した。それ以來日本は日貨排斥と在支日本人の迫害あるに拘らず支那の善友たらんと努力してゐる。

日本の帝國主義の×××××で、國民に對する信望を失つたものは、西比利出兵でなる。この××××××る戰爭に於いて七億の巨額が消費され、約五千の日本無産者は西比利の鬼となつた。これらの兵士は×××、×××××××××××××××！ かく帝國主義は不人氣になつたとは言へ、まだ日本の帝國主義が勞働者及び農民に對して強大な權力と抑壓力とを持つてゐることは、最近の大震災に於いて證明された。

最近日本の帝國主義は以前の特權と勢力を失ひ、國民間に不人望となつたが、然し未だ猶大いなる勢力を保ち、豫算の大部分をその用途に奪つてゐる。數年來日本は豫算の四割乃至四割五分を軍備に消費して來たが、今年度の陸海軍豫算は、全豫算の三分の一以上である。之に依つて見れば日本の帝國主義は未だ決して死滅せず、次の戰爭のために着々備へてゐるのである。

十　日米關係の將來

日米兩國間に介在する諸の問題を考察して來たが、それから得た解釋では、兩國關係の將來は極めて暗澹たるものである。勿論いかなる人と雖も、日本は米國に向つて武器を執つて立つ可しとは、早速に結論しないであらう。然し同時に、米國がより強大な海軍を有し、凡ての方面に於いて富有であり、大砲の數に於て優つて居り、何よりも先づ經濟的實力を持ち、支那、朝鮮、濠州、加奈陀の如く必然の味方を持つてゐると云ふ單なる理由で、日本は米國に向つて戰端を開かないと豫斷し得る者は無いであらう。××と支那は日本と戰ふ可き軍隊を持つてゐない。濠州及び加奈陀は英蘭が米國と手を執つて日本の帝國主義打破を決意しない以上、英蘭の意志に叛いて戰ひを開きはしないであらう。而も英蘭と米の提携は現在の狀態では考へ得られない。何となれば若し英蘭が米國と提携して日本を打破すれば、極東に於ける英蘭の地位はその爲めに强められず、反つて米國の地位が强國となり、米國は事實上英蘭の競爭者となるであらう。英國の政治家がこれに滿足し、日本を擊破しやうと考へられない。それよりも先づ、日本が開戰に先立つて二個の強大な敵を持つことを知れば、いかに英米が戰爭を希望しても、日本の政治家は最初から左樣な形勢の逼迫を齎らすことを廻避し、×××××××するであらう。

然し若し英蘭がその植民地たる濠州及び加奈陀を率ひて日米

爭議に對して中立を保つならば、日本は少くとも極東に於て支那及び滿州問題に關し米國に對抗する上に、いささか心强さを感ずるであらう。形勢がそうなつたとして、日本は米國と戰ひ得るであらうか？　それに對する答は、「戰ひ得るであらう」である。日米關係に於ける英國の中立は、英國の政治家が抗爭によつて兩國が疲弊した場合自ら戰爭の仲裁者たらん事を希望してゐることを意味する。たとへ英國の植民地特に加奈陀及び濠州が、移民問題の故で日本を嫌惡し打破を希望するとしても、英蘭は容易には植民地の希望に隨つて米國に味方しはしないであらう。何となれば、英國は既に述べたる如き世界に於けるその窮極の地位の問題以外に、他の利害關係、即ち印度革命の問題を持つてゐる。印度革命諸黨は、若し日本が徹底的に打破されゝば、革命の將來について多少不利を感ずるであらう。何故と云ふに彼等は英國を仆すときに於て、日本を必然の味方と考へてゐるからである。而して印度は刻々に覺醒しつゝあり、勞働者の組織は次第に進み、國民主義者は壓制者搾取者に對し一叛逆の機會を覗つてゐる。英國の政治家等は米國の後援を得れば、印度の革命を厭殺し得て、國内及び太平洋に安きを得極東に全力を灑ぎ得ると思惟するかも知れない。朝鮮人の利害關係は印度人のそれと多少異り、支那人に於いても同樣である。支那及び×××米國にも、また日本の敵たる誰にも味方するであらう。かくの如く、前途に可能なる事實と情勢とに連れて、事態は極めて複雜して來る。

然し極東に於ける來る可き鬪爭に、ヨリ大いなる一個の要素がある。それはソヴイエツト・ロシアである。勿論ソヴイエツト・ロシアは來る可き形勢を最もよく利用して、極東並に中東近東に於けるその××××××鬪るであらう。若し次の戰爭がロシアに向けられたものでなく、他國間の戰爭であるならばこれほど顯×××××ない。この一角から眺むる時、日米關係は非常に變化しなければならない。支那はなほその味方として米國に頼り、ソヴイエツト・ロシアに頼むよりも寧ろ全力を擧げて米國を助けるであらう。×××××××××××××××××、××××××××××××に參加するで×あらう。××××××××、××××××××××××を減殺し、能ふならば××××××せんと努めるであらう。然しこの事は現在の形勢では非常に疑問である。××××××は全然×××持つて居らず、兵隊は大部分農民階級から徵集されたもので、隨つて保守的で、自己の利益の見地に立つて形勢を觀る力がない。而も軍閥は、たとへ以前ほど國民に對する支配力はないとしたところで、未だ猶全國民を動員し得る力を持つて居

り、日本が一端戰爭を開始すれば、全國民を惹付ける力を持つてゐる。

然し乍ら日本の資本主義は、よし帝國主義閥が欲するとしても、容易に次の戰爭を容認し、左樣な冒險を敢てしないであらう。とは云へ日本及び日本人は又容易には在米同胞に對する米國の取扱ひを忘却せぬであらうし、日本のブルヂョアジーは極東に於ける利益を蹂躙されて默認しないであらう。一方、日本が單獨で戰爭を開始すると見れば、英國は日米間の將來の仲裁者として、中立を守るであらう。

要するに日米の關係は、それだけ單獨に考察することは出來ない。何となれば日本は既に世界の一强國となつて居り、尠くとも極東に於いては最强國だからである。歐羅巴の形勢を考慮に入れないで日米の關係を豫斷することは殆んど無意味である。歐羅巴の形勢は非常に重大で、最後の階段まで進んでゐる。豫期さるゝ獨逸の革命が成功すれば、全世界の形勢は一變するであらう。英佛の關係は日米の關係よりは一層重大で且つ逼迫してゐる。經濟的見地からすれば、獨逸革命は遲かれ早かれ成就するに違ひない。最近の英國の總選擧の結果は、選擧以前よりは歐洲の革命的形勢を有望ならしめた。世界の形勢を論ずるは此の論文の目的ではないが、昨年五月二十七日エヂンバラに開かれた基督教世界平和協會の席上で、英國の大政治家ロイド・ジョージが述べた數言を引用することは又興味があるであらう。私が今彼の言葉を引用するのは、彼はあらゆる點から世界の形勢をよく觀てゐるが、歐羅巴の形勢について最も重要な一面、即ち勞働運動の形勢を見落してゐる點を示さんがためである。

ロイド・ジョージは言ふ。「一九一四年(世界大戰勃發)に比べて世界はその後一丁字も學んでゐない。國民間には依然として猜疑と、憎惡と、惡意がある。大軍隊は依然として訓練して居り、將軍等は額を集めて進軍地攻擊地を考究してゐる。いま隊化したばかりの小國は、大軍備の負擔の下に呻吟してゐる。學者は人命を傷ふ新方法の發明に汲々としてゐる。嘗て歐洲の大政治家は、人類は文明の半にしか達しないと言つたが、國際關係に於いては、人類は未だ野蠻である。」

ロイド・ジョージの悲觀と絶望を見よ! 世界の帝國主義と資本主義とは、勞働者のより峻烈な搾取を除いては、一九一四年以來一丁字も學ばなかつたかも知れないが、世界の無產階級は戰爭以來多くの事を學び、又現在學んでゐる。ロイド・ジョージは人類は國際的にはまだ野蠻だと言ふ。彼は、無產階級の前衞が世界無產階級の協同戰線を造り、現在造りつゝある事實を認

る可く、余りに老いたのである。協同戰線は未だ弱く、資本家の攻勢に對抗する力はないが、刻々に力は增大しつゝあり、新戰士は續々と來り投じつゝある。更に一層それを强大ならしめるの要に、アムステルダム・インターナショナルの幹事エド・フインマンが英國勞働組合大會に於いて述べた演說によつても明らかである。フインマンはロイド・ジョージよりもよく歐洲の形勢を觀察し、協同戰線は野蠻ならざる人々によつて着々と形成されてゐる。勞働者協同戰線に立つそれらの人々は、貧苦と飢餓との眞唯中に在つて、合理的樂天家である。

歐羅巴、亞米利加、極東の協同戰線は、やがて日米關係の如き國際問題を解決する上に、大いなる要素となるであらう。協同戰線の範圍は刻々全世界に擴がりつゝあり、それを考慮に入れないで、未來を論ずることは出來ない。勿論極東に於ける協同戰線は、未だ極めて薄弱であるが、××。

十一　結論

日米關係に關するこの小論を終るに當つて、私は最近の大慘事、即ち九月一日の東京及橫濱附近の震災について、數言を附加しなければならぬ。それは忘却す可く余りに事新らしく、全世界はその出來事と國家に及ぼせる影響とをよく知つてゐる。

震災後の日本の情勢を觀れば、日本は靜かに苦を忍んで一意復興を圖つてゐる。またそれが當然である。日本が震災前の常態に復するには今後數年を要するであらう。工業について見ると、大戰中日本は不相應にその工業能力を擴張した結果、最近數年間凡ての工業は非常な不況にあり、何れも生產を制限してゐる。されば復興に際して工業能力に不足はないであらう。若干を除いては現存の工業設備は、相當大規模の生產を爲し得るであらう。例へば造船業にしても、浦賀、橫濱、神奈川、石川島の造船所が全に失はれ若くは大破損を來したところで、國內にはまだ多數の造船所があり、國內の必要に應じ得るであらう。紡績業は非常な災害を受け、多くの大工場は全く失はれたが、紡績業の中心は大阪及びこの近郊であるから、これまた國內の需要を充すに足るであらう。

政府の工場も多數失はれた。橫濱船渠、砲兵工廠、海軍工廠がそれである。しかし平時の必要には大した差支へはないであらう。これらの主要工業は震災によつて大打擊を受けたとは言へ、國內には當面の需要を充すに足る剩餘能力がある。左樣な譯であるから日本は一般が考へるよりも豫想外に早く復活する

であらう。何れにしても日本は自己の發意で他國と戰爭はしないであらう。然し今回の震災に拘らず、他國の起す戰爭には參加するであらう。米國の差別待遇、在米同胞の迫害に一矢を酬ゆるには、恐らくこれ以外に機會はないであらう。日本が單獨で米國と開戰するやうなことは毛頭無い。

然し日本は在米同胞に對する愈々益々激しい米國の迫害、不道德を忘れることは出來ぬであらう。私の觀る所では日本は紳士協約を忠實に履行し、その締結以來勞働者の渡航を停止した。それにも拘らず米國は世界及び自國民に向つて、「無數の日本人」「無制限の大多數の日本人」が米國に流れ込み、「日本移民の出產率は非常に高い」などと呼號し、排日運動を煽つてゐる。然し日本は移民問題を以つては米國と開戰しないと決意してゐるらしい。世界の何れの部分にか何事か勃發して、米國もそれに卷込まれて多忙を來す時、その時日本は立つて劍戟を衝き付け、在米同胞の差別迫害、モンロー主義の解釋と適用に關して、問ふ所があるであらう。その時の來るまでは、日米の關係は靜穩であり平和であらう！。

（一九二四・一・一九・）

典籍の廢墟

失はれたる文獻の追懷

内田魯庵

(一) 亡佚は典籍の運命

"Vita brevis, ars longa." といふが、夫は人壽の餘り短きに比べてこそ藝術の生命は長からうが、希臘のアクロポリスや爪哇のブルバドールの廢墟の死火山の如きを見て誰か藝術の永遠を信ずる事が出來やう。金石でさへ千年の風餐雨蝕に堪えた完璧は殆んど無い。斷碣殘碑の偶存するものは古代の遺物として眺められてるので文獻として扱はれてるのでは無い。況してや地水火風に亡び易い書籍が湮滅し亡佚するは當然の運命で、藝術は永しへであつても之を盛るの書籍は決して不朽不壞では無い。古今各國書籍の散亡が屢々繰返さるゝは書籍を構成する材料が耐久的で無いからで、永しへの生命あるべき藝術や思想が不慮の災禍の爲めに灰となり土となつて空無に消えて了つたのも亦必ず少なくないだらう。

が、翻つて復た考ふれば、書籍は結局滅亡するが當然の運命といふ條、埃及のピラミッドや新疆の流沙から發掘される一千年乃至二三千年以上の古記錄もある。名山石室の是等の秘書を別とするも七百年や八百年を生き永らへる書籍は必ずしも珍らしくない。森羅萬象且生れ且消ゆる無常迅速の世の中に火にも水にも脆い書籍が案外に比較的長壽であるとも云へる。

且書籍は汎通洽布が本來の性質であるから相傳秘密を旨とするものすら屢々傳寫流布されてをる。隨つて刻版本は本より抄寫本も亦四方に散在して、幾度自然淘汰されてもドコかに厄を免かれて殘存するものがある。外殼は亡びても內容は不滅であ

るので、"Ars longa" は此意味に於て多少の眞理がある。が、著者の面影や時代の背景の偲ばれる原刊初印本が年を經るに從つて次第に乏しくなるは勿論、二つとない自筆稿本に到つては一と度失へば復た再び返らざるものである。何百年間火にも燒けず水にも潰らず濕氣にも鼠害にも蟲蝕にも堪へて無事に傳へられたといふは眞に鬼神加護で、恁ういふ運命の強い書籍は百戰武功の老將軍に對すると同じ尊敬を拂つて益々手厚く重貴しなければならない。

今度の震火災で恁ういふ鬼神加護の貴重なる古文獻がドレほど失はれたらう。人壽の限りあるは如何なる拔山翻海の勇士も免かれ得ない運命であるを誰知らぬものは無くても、偉人の最後には慟哭し佳人の玉碎には斷腸の思ひあると同樣に、寶冊秘卷の滅亡に對しても亦萬斛の哀愁を抱いて痛惜し追懷するは讀書子の至情である。

(二)　國史創まつて以來の書籍の最大厄

蘇我氏が誅に伏した時、蝦夷が國造史其他の朝廷の記錄を燒いて自ら火中に焚死したといふは國史に載る焚書の大事件である。が、之が爲めに日本の上古史が全く亡びて了つたといふほど其頃文獻が完備してゐたもんだらう乎、疑問である。

藤原氏時代には文獻が禍ひされた顯著な事蹟が無いが、武家統治後の絕間の無い戰爭、就中南北朝から應仁へ掛けて元龜天正に到る間斷なき大亂の爲め京畿の縉紳や寺院の記錄は殆んど大半亡びて了つたと傳へられてをる。が、文教が曾て振はず文獻が頗る貧しかつた中古以前の圖書の災厄が支那や歐羅巴に於ける著名な焚書の如くに甚だしくなかつたのは容易に揣摩される。

日本では文教が振ひ刻板が盛んになり文獻が稍や完備したのは德川期の慶長以後である。が、明曆の大火を初め火事や地震は度々あつたが文獻の災厄が殆んど記錄に見えないのは案外罹災したものが少なかつたのだらう。現に中世以後の戰禍に記錄が殆んど亡びて了つたと傳へられるに拘らず舊記や文書が割合に多く殘存し、支那や朝鮮に亡びた逸書が日本に屢々發見されるのを以て推すも。歷代の焚書が支那ほどに嚴厲で無かつたのが想像される。

之といふのは日本では文獻が乏しかつたのみならず學術的にも好事的にも或は公共的にも私人的にも蒐書に志すものが少なかつたから、天災や人災に禍ひされた書籍が必ず有つたのだらうが、後の語り草に殘るほど時人の視聽を聳えさした大きな蒐

集の要領が無かつたのであらう。

昔しは萬卷が藏書の欲望の標的で、鄴架萬卷だとか萬卷書屋だとか萬卷は藏書の富の表現であつた。且萬卷を讀破するのが學者の抱負でもあれば學者の卒業とも見られた。が、今は學者でも何でも無いタヾの讀書子でも二萬や三萬の藏書を備へてるものはザラで、萬卷やソコラの涉獵は家常茶飯で誰も何とも思なくなつた。殊に公共圖書館の近時の成長は頗る目鮮しく、マダ歐米と比肩する事は出來ないでも近年小圖書館は次第に增設され、藏書の量も亦昔しの藩の文庫や學問寺の經藏のやうなもので無くなつて來た。夫だけ書籍の分野は昔しと比べて著るしく展開されてをるから、隨つて天災や人災に禍ひされる場合の損害も亦之れに比例して昔しに數十倍する。恐らく今度の大震火の爲めの官私大小十數文庫の全滅は國史創まつて以來の書籍の最大厄であらう。

單なる數量を以てしても帝大圖書館の何十萬冊を筆頭として神田の古本屋町の連甍の肆頭に積まれたものまで合算すれば罹災した書籍の總數は何百萬冊が何千萬冊にも上るだらう。之だけの書籍があつたら八百八町の各町毎に小さな圖書館を作つて全市の少年や青年に學校教育以上の薰陶を與ふる事が出來る。が、書籍の最大厄といふは罹災の量をいふのでは無い。震災の當座之だけの書肆が全滅したのでは神田の古本屋町の再起は商品缺乏の爲め難かしたらうと危ぶまれたが、復興のバラック肆頭を覗いて見ると能くも書籍は盡きないもの哉と誰をも呆れさせるほど青卷黃帙が堆高く積まれてをる。然ういふ書籍は鼠が子を產むやうに濫出される消耗品であるからマダ五度や六度は燒けても毫も缺乏を憂ふるに及ばないほど繁殖してをる。時折は塵芥處分の大掃除をした方が却て文獻の整理になる。

實を云ふと今度の焚書も、帝大其他二三の文庫が厄を免かれて大橋圖書館ぐらゐを損害の筆頭とするなら文獻の最大厄と痛恨するほどの大事で無かつたのだ。唯だ此の數個の文庫の懸換の無い歷史的資料や金に見積る事の出來ない寶冊稀本は永久に償はれない文化的大損失であつた。之が爲めに或る時代の、或る地方の、或る方面の歷史が永遠にブランク・ページになるのもあるし、日本の文化に光輝を添ふべき思想や藝術で恰も流星の如く或る二三者の眼に輝いたゞけで闇から闇へと消えて了つたものもある。此の如きは神田の古本屋町の肆頭の何十億冊とも取換える事の出來ない損失である。

どんな高價なものでも金で買へるものなら、無くなつた處で金の損害にはなるが品物の喪失にはならない。巨億を積んでも二度と再び決して獲られないもの、滅亡であつて初めて眞の大

損失であると言ひ得る。帝劇や三越や其他の建造物の損害が何千萬圓であらうと何億圓であらうと金さへ出せば二三年經たぬ間にヨリ以上の壯觀を再現する事が出來る。が、文献の損失に到つては一片紙だも再び獲られるものでは無い。醫すべからざる損害といふは實に此の文献の最大厄である。

(三) 國家的記錄の滅亡

官公衙で燒災したのは内務、大藏、文部、農商務、遞信の五省を初め大小數十衙の多きに達し、殆んど全部が全滅で一片紙さへすら持出されなかつた。のみならず、如何なる書類が燒けた乎さへ、直接事務に交渉するもの丶外は殆んど解つてゐない。が、上記の五省を初め警視廳、檢査院、印刷局、帝室林野局等には我がナショナル・レコードともいふべき重要記錄が備はつてゐたのは當然明白である。

之に就き多少手を盡して調査したが、官憲に緣故の淺い我々野人には調べる手蔓が無い。且秘密の惰力を持つてる官憲は之を洩らすを好まざる風がある。何れ委しくは他日官憲から發表される機會も有らうから、爰には世間に洩れた噂を拾つて片鱗を以て全甲を彷彿する外は無い。

官廳中、最も重要なる記錄に富んだのは大藏省であつた。藏儲は二十萬卷を超え、特に文庫を設けて一部篤志家に公開する計畫が震災前既に進行中であつたさうだが、其の重なるものは次の通りである

『大日本租税史』……約一千册
『自神功皇后至明治初年 貿易史』未定稿(明治十八年着手二十三年マデ繼續)
『徳川幕府理財會要』……十册
『藩制錄』並附圖(册數頗ル多シ未詳)
『御仕置類例集』……百六十册
金庫銀庫關係書類……約三千册
『勘定所記錄』(册數未詳)
『元祿鄉帳』……約六十册
正保武藏圖副本

以上は僅に其一端であるが、其中『租税史』は最も重要なる記錄として著聞してをる。其の編纂の資料となつたもの丶中には今日既に亡佚したものもあつて再び調査する道は無いのだから、日本の税制の一部分は此燒失に由て永久に失はれて了つたのである。『貿易史』も亦未定稿といふ條、官府の力を以て採集した豐富な資料を基礎として六年を費やして編纂したので、前者と同じく此資料の中には散亡したものも多いから再び纂輯する事は困難である。眇たる一青年菅沼氏の小さな貿易史を唯一の研究とする此方面に於て此の官撰の大通商史を喪つたのは

我が交通商業史の大損失である、

『理財會要』と『裁判記』は德川時代の中央及び地方財政の重要記錄であつた。『藩制錄』の附圖なる各藩の所領圖は亦大名の采地の勢力を徵すべき古圖であつた。『お仕置類例集』は大藏省よりは寧ろ司法省に所管すべきものであつたが一括して幕府より引繼いだので我が斷訟史の重要記錄であつた。金座銀座關係書類は金銀座に關する全資料を殆んど剩さず包羅したもので、此燒失は我が造幣史の全滅である。

『元祿鄕帳』は大學で今度罹災した幕府官撰の元祿圖と共に各藩から差出した各村の草高及び領地別等の記錄であつて中川飛彈守忠英（寛政文化頃の人）の舊藏であつた。本と幕府から引繼いで內務省に保管されてゐたが、地租改正當時に大藏省が參考資料として借覽したのが其儘今日まで留置かれて燒いて了つたのである。幸ひ內閣文庫に『天保鄕帳』があるから各藩所領の經濟狀態は大凡研究出來るが、此の最始の完備した幕府時代の全國の地方經濟誌が一冊殘らず燒けて了つたのは最も殘念である。（此の『元祿鄕帳』の越後と佐渡の部の副本を震災前齋田伊人氏が新潟圖書館から依囑されて作つたのが同圖書館に殘つたのは偶然の幸福であつた。

勝伯の『吹塵錄』は往年印刷されて關係者に頒たれ、一時は坊間にも度々現はれたが、近時は全く跡を絕ちて市價が著るしく騰貴してをる。然るに此の『吹塵錄』の稿本は猶ほ若干の殘剩があつたさうで、此の殘剩部數と勝伯自筆の原本と、マダ印刷されない五十面の附圖と、其の編纂に使用した浩澣なる資料全部が盡く燒けて了つた。

大藏省には又、無數の古圖があつたさうだ。其中、正保圖は殊に著名であつたが、此の正保圖は副本といふ條可成古い摹寫で頗る美彩であつたさうだ。（之に就ては別項大學の條下に再記する）

何しろ大藏省の藏書は二十萬卷以上であつたさうで、上記以外にも貴重な記錄が少くなかつたのは想像するに難くない。震災前既に半公開と決定されてゐたのが實現されない中に燒けて了ひ、印刷されてゐたと聞く目錄さへも殆んど誰の目にも觸れないで、燒けて了つた書名をだに知る事が出來ないといふは何等の痛恨事であらう。

○

內務省には太政官から引繼いた幕府の記錄が澤山あつた。大部分は大學へ引渡して大學で燒けて了つたが、內務で保管してゐたもの、中に慶應元年調査の『舊高舊領取調帳』といふ全國各村の實收草高の記錄や幕府の治水に關する『全國河川治水誌』、

があつた。(其中荒川と江戸川に關するものは市役所に副本が殘つてをる。)內務は一般行政の中樞であるから、町村制度寺社法規、地方自治制、土木道路、宗教祭祀、舊慣風俗等に關する資料や記錄が富んでゐたのは當然想像される。是等の根本資料の滅亡は取も直さず我が行政史の全滅である。

今は半ば忘れられてるが、琉球併合は明治の初期の最も興味ある重大事件であつた、此の琉球併合に關する記錄は本とは外務省に保管されてゐたが、沖繩縣が置かれてから內務省に引繼がれた甲乙二部に分れて甲は併合に關する淸國との交涉始末、乙は內政上の處理を專らとする記錄である。此中、乙冊だけは先年副本を沖繩縣廳に交附し今も安全く保管されてるが、最も興味深い對外機密に關する甲冊は今度の火災で烏有に歸して了つた。沖繩縣が置かれたのは明治十二年であるが、併合交涉の初まつたのは六七年頃からである。琉球は二百年來薩摩の藩屬であつたから、其併合は事實上には地圖の塗更へ以外の面倒を伴はなかつたが、琉球を中心とする日支の政治上、文化上、民族上の複雜なる關係は極めて興味深い問題であつた。隨つて日琉併合は日本の膨脹史の第一頁を作るのみならず數百年來の歷史的懸案の解決であつたので、此の併合顚末の重要記錄が喪はれたのは明治の歷史上極めて遺憾である。

內務省には又何十年來の納本の圖書が五車どころか五十車も五百車も蓄積されてゐた。此の納本は尋常書肆の資本以外に官廳其他の非賣刊行物をも含んでるので、此種の官版及び私刊本は想像以上に多數であるのみならず其中には尋常賣本には見られない貴重な文獻がある。元來納本の一部は上野の帝國圖書館に分配される規定になつてるが、事實は必ずしも交附されなかつた。殊に是等の非賣本の多くが不思議に圖書館に分配されなかつた。夫故に從來から屢々話頭に上つた內務省の書庫の公開が愈々實現されたなら從來未知の貴重な官版や私刊本で初めて世間讀書子を稗益するものがあるだらうと期待されてゐたのが、今や一夜に盡く灰燼となつて了つた。

○

文部は森有禮以後の大臣は一人として伴食ならざるは無いほど各省中最も無力不振である。が、創設から明治十年前後に到る文部は文明移入の策源地として最も力を文獻に費したので、朝野の學者に囑して盛んに著述編纂せしめたもんだ。浩瀚なる『大日本敎育資料』やチエンバーの百科全書の邦譯や尺振八の『斯氏敎育論』や中江篤助の『維氏美學』や『理學沿革史』が文部省から出版された如き以て其一班を知るべきである。然るに當時學者に囑して著譯編纂せしめたもので今猶ほ鉛槧に附せら

れないで其儘高閣に束ねられてゐる稿本が數百に留まらなかつたさうだ。大部分は今日では最早陳腐で用を成さないものや所謂質譯の覆醬をだも値ひしないものであらうが、中には眞面目に費心勞思したものも少なくなかつたらうと想像する

本とは內務に隸屬し今は文部の所管に移つた古社寺保存の大帳其他の關係文書も亦文部省の重要記錄であつた。現行古社寺保存法の設定は明治三十年十二月であつて、社寺の建築及び寶物を調査し、ナショナル・トレジュアとすべきものを指定登錄して不融通物とする代りに修理保存上の補助を與へた。此原簿は昨年の分まで併はして凡そ五十四五冊もあつて、社寺に限られたと云ふ條、日本の代表的美術の根本記錄であつた。登錄されたものゝ中には既に滅亡して再度の調査が不可能になつたものもあり、三十年間を費やした調査を再びするといふ事は一朝一夕の業では無い。此の記錄の燒失も亦文化上の重大なる損失である。文部省には又國語調査に關する種々の未定稿の稿本や資料があつて、其中には頗る貴重な研究や再び獲られない資料もあつたさうだが、是等が皆一炬に附せられて了つた。

農商務省や遞信省は他の九省よりも創設が遲れてゐるが、產業交通に關する幕府以來の記錄や文書を引繼いでゐた。且此方面に於ける民間資料をも能く蒐めてゐたのは前者の『大日本農史』や後者の『驛遞志稿』を以ても想像出來る。怎んなものが有つたか不幸にして知る事が出來ないが、此の二省の記錄の失はれたのは日本の產業史や交通史の重要なる頁の滅亡である。(『驛遞志稿』は近來坊間に出づる事極めて稀れで市價著るしく騰貴し、稀覯書として扱はれてゐるが、遞信省にはマダ殘部數十部あつたさうで、是も亦盡く燒けて了つた。)

何れの官廳にも調査課や記錄課があつて各々管掌事項に關する資料を蒐め且記錄を逐次編成してゐた。其中に印刷されたものもあるが、大部分は稿本のまゝ政務の基礎資料として保管されてゐた。印刷されたものさへ我々野人の眼に觸れるものは極めて少ないのだから印刷されない稿本に到つては怎んなものがあつた乎、燒けて了つた今日想像するだも困難である。且ドコの省にも施設事業の原案とか或は決議書とかいふものが保存されてゐたに違ひなく、其中には大臣や其他の當事者の意見を加筆したものもあたつらう。恁ういふ國務及び國勢及國情に交涉したナショナル・アルヒーヴともいふべき重要記錄や資料が內務大藏を初め各官廳で盡く烏有に歸して了つたといふは明治の政治史の湮滅である。止むを得ざる天災とは云へ亦當局者の重大なる失態である。

(四) 世界の大文庫の全滅

日本の圖書館は最近に於て一千を越した。數から云へば必ずしも少くは無いが、其内容の貧弱なるは一年の圖書購入費僅に金十圓といふやうなのがある。此のお咄しにならない哀れな圖書館界にあつて世界の大圖書館に對抗して些かなりとも日本の文化の面目を維持したのは東大圖書館であつた。假に若し世界の圖書館の番附を作つたなら（幕尻にせよ）入幕出來るのは日本では帝大圖書館だけであつた。殊に近年の成長は極めて目醒しく、此勢ひで進めば世界の圖書館の五六位を占むるやうになるのも餘り遠くは無からうと期待された。殊に近年東洋研究の漸く盛んなるに伴れて地理的便利から東洋文獻の蒐集の豐富を以て鳴る帝大圖書館は世界の學者の羨望であつた。

帝大圖書館で燒失した書籍の總數は七十萬冊と云ひ或は五十萬冊と稱し或は三十五六萬冊ぐらゐだらうとも云ふ。當事者各自の言が一致してゐないが、所詮は目錄さへも燒けて了つた今日各自の記憶や目擊の感じから推定するので正確な數字の解りやうが無い。一個人の小さな家が燒けてさへ家財の總點數が正確に解らんのだから何十萬といふ數量の概算がマチ／＼なのは當然である。

何しろ餘震の間斷なく搖れる最中だつたし、燃上つて盛んに火を吹く危險な建物の奧深く踏込む事は出來なかつた。居合はした少數の館員と學生とが必死になつて搬出したが五六百冊はあつたさうだが、閱覽室のテーブルや手近の書架から手當り任せに屋外へ投出したので、貴重書といふでは無かつた。其上に水濡れになつたり泥塗れになつたり中には缺冊となつたものもあつて火を免かれたといふだけで助からないも同樣であつた。支那人流に云へば百萬と號しても左程誇大でない藏書の全部が灰燼となつて了つたので、日本では實に有史以來である。

帝大圖書館の書庫は完全な耐火建築では無かつたが又決して可燃性でも無かつた。不幸にしてゴシック式であつた爲め、地震の爲めに屋蓋の方尖塔が顚墜して木骨が露出した處へ直ぐ隣りの化學實驗室から發火した火の子が盛んに落ちたんだから堪らない。其上、生憎にも塔の下の三階が一番大切な貴重書室であつたので、地震がマダ間斷なしに搖つてゐる最中と云ひ最高層で手の着けやうがなかつたので、第一番に金に換へられない貴重書から燒けて了つた。

帝大圖書館は明治の初年に開成校南校と稱した頃には眇たる一小室で學生の教科用書や參考書のみを扱つてゐたのが五十年間に文化の增進に伴ふて今日の大を成したのである。震災の折

から清朝の一局でなかつたとは云へ同日燃えて消えなかつたといふが如き昔しのアレキサンドリヤの火を擴出させた。三十年一日の如く書庫に住して之を守育てた和田萬吉博士が茫然自失して浩嘆に繼ぐに歔欷を以てしたといふは眞に同情するに餘りがある。

帝大圖書館は多くの貴重なる蒐書を合併した併合文庫であつた。其の重なるものは左の通りであつた。

(1) マックス・ミユラー文庫…………………………一萬册
(2) デルップルヒ文庫…………………………………六千册
(3) エンゲル文庫………………………………………五千二百册
(4) ヨセフ・コーラー文庫……………………………凡二萬五千册
(5) 西村茂樹文庫………………………………………一萬册
(6) 星野恒文庫…………………………………………一萬册
(7) 白山黑水文庫………………………………………五千册
(8) フルベッキ遺書……………………………………一百册
(9) オードリー遺書……………………………………三百册
(10) 瓜生寅遺書…………………………………………一千五百册
(11) 神居牛三郎遺書……………………………………一千册
(12) 島田蕃根遺書（册數未詳）

以上の中最も著名なるはマックス・ミユラー文庫であつた。此のマックス・ミユラーは特に吹々するまでも無く言語學、宗教學、神話學の泰斗として世界に隱れもなかつたので、翁の遺書は歿後各國大學から垂涎されて引張凧であつたのを翁の門下末松、高楠等諸博士の斡旋で岩崎男の捐貲で大學に收得したのは世の知る處である。其内容は頗る廣汎に渉つて佛耶以外の稀覯なる經典や未開民族の原始的宗教に關するものまでを能く網羅してゐた。就中亞細亞協會の學報（トランサクション）に掲載した梵文、シンガリーズ文等の古鈔本五十有餘種のマニユスクリプトは馬翁畢生の努力を以て蒐集した世界無比の至寶と稱されてゐた。

此中には又翁が各國著名の學者から寄贈された自署のあるものや先賢の手澤書入れ本があつた。殊に最も貴重なるはカント自筆の六七行の識語を題した『純理批判』の初版があつたさうだ。此の世界の大哲人の筆蹟を題したものは恐らくは東洋に於ては唯一無二の稀寶であつたらう。

然るに此の世界の珍籍稀本を集めた大文庫は内容が頗る多岐に渉りて言語の種類だけでも梵語、巴利語以外、波斯、亞剌比亞、中亞及び西亞の地方語、印度古代語等數十國語を算し、第一に語學上の困難から單なる目錄を作るだに容易でなかつた。收得以來二十年に垂んとしても猶ほ整理されないで公開の緒に就く事が出來なかつたのは之が爲めで、大學部内に物議さへ生じた。が、此の多年持扱つた目錄も四度擔任者を更へて漸く完

成し、今春以來印刷に着手して既に本文七百餘頁を刷了し、各國の大學或は學會へ寄贈する豫定で二十餘面のファクシミル版を挿入した大學出版物として曾て無い書美を盡した目錄作製の進行中に當の文庫が忽然一炬に焚かれて了つた。其目錄も亦、印刷所で原稿及びファクシミルの寫眞と共に盡く灰となつて了つた。切めては此目錄だけなりとも殘つてゐたら後學を稗益したらうに、遙々英國から將來されて二十年間書庫の奧深く閉藏され、管理者以外には日の目も見せないので一抹の煙として了つたは何等の痛恨事であらう。管理者に非ざる身も一讀書生として苔下の馬翁に對して相濟まぬ氣がする。

○

之に次いでデルンブルヒは苟くも法律を學んだもの〻誰も知らざるなき『パンデクテン』の著者、エンゲルは獨逸近代の統計學者、コーラーは亦伯林大學の碩儒。此の三文庫は法制經濟に關する天祿琳琅で、巨萬を積んでも再び獲る事の出來ない稀本に富んでゐた。法科の諸教授が殊に痛惜し深慨すると聽くは誠に同情に値する。(三文庫中、目錄の印刷されてるのはデルンブルヒだけで、エンゲルは未だ編纂されず、コーラーは恰も印刷中、原稿諸共印刷所で燒けて了つた。)

フルベツキ遺書はドンナものがあつたか知らない。が、翁は中頃歸米した時藏書の全部を他へ讓與した筈だから、帝大に殘されたものは再次の渡日後の短時の蒐集であつたらう。生前に翁の書齋を瞥見した記憶に由ると恐らく稀本といふやうなものは無からうと推想する。が、翁は我が文明の大恩人である。門下數千人、伊藤大隈公侯を初め維新の元老大官翁の指導を受けざるはなく、政治に財政に法律に教育に維新の百般庶政は大抵翁の參畫に成る。此の文明の大恩人の手澤の存する遺書は斷簡零冊と雖ども皆歷史の追憶の種子ならざるは無からう。オードリーの遺書は唯僅に三百卷であるが、此翁亦我が文化の開發に貢獻したる教門の大德である。殊に此の三百卷は選擇つた希臘拉甸の古文學であつて、歐洲古文獻に乏しい我が圖書界では極めて珍重すべきものがあつたさうである。

○

白山黑水文庫は明治四十二年以來白鳥博士が滿鐵會社から依囑されて滿鮮歷史地理の調査に從事する傍ら滿鮮各地で蒐集された資料である。其中には稀覯の朝鮮古銅活本もあつて朝鮮本の蒐集としては海內無双であつた。就中「麗史」「詩海」「叢書」三叢書は恐らく再び獲られまいと深く朝鮮史研究者に惜まれてゐる。且此文庫は書籍以外に高麗時代から李朝に到る名公鉅卿鴻儒碩德の筆蹟數百通及び從來餘り知られなかつた遼金の碑拓等が有つた。此文庫は金力よりは寧ろ白鳥博士等の文献的鑑識

又た古籍北馬の等に由て作られたのだから、臣属を斷くるも再び蒐集するは到底不可能であらう。

○

西村、星野、島田等の遺書に到つては啻に其の豐富の量のみならず、又啻に稀覯の珍のみならず、是等碩儒の手澤の存する處、書籍夫れ自身が明治の學術史の記念物であつた。故更に贅辯するまでも無く西村先生は明治の思想史の黎明期の明星、星野博士は我が史學の礎石を据ゑた耆宿、島田蕃根翁は弘教書院本藏經の校訂者にして古書校勘の第一人者として著聞する梵漢の宿儒である。是等諸先生の耽讀愛惜された遺書が尋常書厨の混糅に非ざるは推定するに難くない。(帝大儲藏の五山板の多くは蕃根翁の遺書であつたさうだ。)

瓜生神屋兩氏の遺書の內容は全く知らない。が。瓜生翁は好書家として一部に聞えてゐた。先儒の墨蹟類を[illegible]多く蓄へてゐたといふから蒐書の性質をも略ぼ想像される。此以外に小中村翁の遺書百四十五冊、內藤碧海翁の遺著及び遺書が二百餘冊あつた。其中碧海翁の遺稿が四冊殘存したのは偶然であつた。僅に四冊とは云へ震禍の記念である。

（五）東亞の最大文獻

帝大圖書館が世界一本として最も誇つてゐたのは左の五大圖書であつた。

滿文一切藏經……………………百五十册
蒙文一切藏經……………………百六册
西藏文一切藏經…………………三百五十册
『李朝實錄』…………………一六九七卷七九四册
『欽定古今圖書集成』　九九九五册

以上の中、滿蒙の二大藏經は本と奉天府の黄寺の什寶であつた。日露戰役中、內藤湖南博士が從軍して端なくも發見し、此儘に放置する時は奉天が砲火に浴する日必ず兵燹に罹ひさるべきを憂慮し、高楠博士に柬して購入するか或は武力を以て要求するかして日本へ將來したらドウカといふ相談をした。然るに高楠博士は恰も官命を啣みて渡英に上途する間際だつたので、途次船中から時の宮相田中青山伯に飛札して此の貴重な寶籍の厄を救ふて日本の有とする方法は無いものかと伯の助力を仰いだ。當時山縣總帥は法令嚴明秋毫も假借しなかつたので武力を以て要求するナドは思ひも由らず、左ればとて國費多端の折から國帑を割くは到底不可能であつたので伯は陛下に奏聞し、御內帑金一萬五千圓の下賜を乞ふて早速黄寺から購入し、永代貸附の名目を以て大學へ下附されたのである。然るに高楠博士時

朝後黄寺から將來されたのが蒙藏一部だけで、肝腎の滿藏が未着なのを知つて在滿中の湖南に照會し、湖南は亦恰も在滿中の市村器堂博士と共に謀つて黄寺へ折衝した。黄寺も亦戰禍の最中一萬五千圓の布施を享けたを深く徳として、無償で快く委讓を諾したので湖南器堂の兩氏から直ちに帝大へ送荷されたのである、

滿文藏經は康熙帝の時、漢譯から重譯したので初めから全部完成したのでは無かつた。元來滿文は滿洲に於てさへ一般に行はれるものでは無いので、藏經を譯するが如きは徒爲であつた。畢竟するに康熙帝が滿文の文學的効果を漢人に誇る爲めの道樂仕事で實用の爲めでは無かつた。隨つて唯僅に四部を作つたので黄寺のは實に其一部であつた。然るに此四部もイツとなく亡佚して、完本がペテログラード大學に襲藏される外は巴黎の國民圖書館(ビブリオテクナチオナール)のも伯林の圖書館のも二つを合はしても一部に足りないほどの不完本である。同じ不完本でも稍や纒まつてるのは奉天黄寺のが唯だ一部だけであつたから、眞に世界の稀寶で、湖南博士や高楠博士が垂涎萬丈して熱求したのは決して無理で無かつた。其後、先年奉天に姉妹卷らしいのが若干冊現れたともいふから、若し燒けなかつたなら漸次に零冊を補卷して纒める事が必ずしも出來ない限りで無かつたらうと、今に於て屢々燒失したのが惜まれる。(近頃滿文藏經の雕板が滿洲のドコかで發見されたといふ説がある。刊本でさへが完全したものが無いのに雕板が完全に殘つてゐるとは思はれない。發見されたにしても恐らくは斷缺であらう。)

蒙文藏經も亦不完本であつた。且甚だしく蠹蝕されて數張閉ぢられて一枚々々捲くれない個處もあれば或はボロ〳〵に痛んで手の着けやうもないのもあつた。蒙文は實は夫程珍らしいものでなく、殊に雕板が現存してゐて刷らうと思へばイクラでも刷れるである。が、書籍の尊貴は古い摺刷にあるので。同じ古梓でも新らしい紙へ新らしく刷つたのでは稀覯では無い。支那にはザラにある珍らしいもので無くとも、帝大で燒けた奉天黄寺の舊什寶の如き蒙文藏經は矢張稀覯であるので、ボロ〳〵になつてゐても貴重な價値を喪はないのである。

西藏文藏經は之より先き明治三十三年北清戰役の時、北京の黄寺の什寶であつたのを參謀本部が將來して皇室へ獻じ、皇室から帝大へ永代貸附になつたのである。紺紙金字の寫經と白紙紅字の刊經と混併したもので、完全ではないが滿蒙各藏に二倍して稍や完璧に近いものだつた。西藏經には漢譯されない秘密部の多くの秘經があるので在來から珍重されてをるが、殊に此の黄寺の經藏中の金泥寫經は明の正德二年欽定の勅藏であつ

で、人目を眩耀する精緻崇麗は東亞の典籍の最極の美を極めたものであつた。

西藏文藏經は此以外に河口慧海師が將來して帝大と眞宗大學とに分贈した古刊經もあり、慧海師の法縮に秘與される金銀寶石の古寫經もあり、此頃復た新たに入藏伴某が將來したものもあるさうで、東大で燒けたのが海內一本で無かつた。が、清廷歷代の歸依淺からぬ北京の大本山なる黃寺の所什の如き莊嚴絢爛を極めた寶冊は恐らく再び獲られないだらう。

且此の滿蒙藏の三大藏が揃つて具備してゐるのは世界の圖書館中我が帝大書庫だけであつて、此の世界の文獻の偉觀を誇る事の出來たのは一に先帝陛下の殊恩であつて、此の三大藏、就中滿文藏經を護持するは先帝陛下を記念し奉る所以であつた。然るに此の世界の稀寶たる滿文藏經はペトログラード大學では革命があつても文獻や古美術を尊重する勞農政府の下に今でも完全に保護されてゐるだらうが、我が帝大圖書館では據ろない天災とは云へ滿蒙藏の三大藏が一紙を剩さず劫火一片の煙となつて消えて了つた。誠に佛神にも見放されたる一大災厄であつて昊天に號泣しても足りない心地がする。

（因云、帝大圖書館には以上の三大藏の外に暹羅政府から寄贈された暹文の藏經があつた。尤も藏經といふ條、實は僅に三十冊の未完本である。且近年同國の王室にて前王の記念として刊行されたもので世界各地に廣まつてから稀本といふでは無い。漢譯藏經は弘教書院及び貝葉書院の近刊本のみで不思議に黃檗版さへも無かつたのである。）

○

『李朝實錄』は李王家太祖李成桂より故李太王の先朝哲宗に到るまでの李朝五百年間の記錄である。李朝の典例として國王他界後は直ちに實錄廳都監を設け宰相以下朝廷の臣僚をして先朝の內政外交を細大漏らせず記述せしめたものを逐次集成せしめたものが即ち此の『李朝實錄』である。李朝時代は國家的記錄として厚く尊重し、歷代の記錄成る每に四本を作つて遠く京師を離れた京畿の江華山摩尼島、全羅の茂朱赤裳山、慶北の奉化太白山、及び江原道の江陵五臺山四ケ處に史庫を設けて各々奉安し、嚴に監守を置いて衛護したのである。倂合後は四部の中の一部を李王職に、他の三部を總督府の保管に付したが、大學の經請に由て特に五臺山の史庫に藏した一部を移管したのである。此の四部は正副本の差違もあらうが、各々多少の異同があつて、東大移管の五臺山本にも亦特色があつた。殊に寫刊を交へた紙墨兩佳の善本と和田館長が追惜した精本であつたので、朝鮮に猶ほ三本あるといふ條、實は海內一本であつた。惜

むらくは朝鮮史研究者をして細さに他の三本を對校して異同を考勘せしめたかつたに、今に於て之を思ふも六菖十菊である。且朝鮮では深く秦火を慮かつて特に人寰を絶した名山石室に加護してゐたのを、故吏に日本へ將來して大學書庫とは云へ隣屋相接する地に置いて終に烏有に歸して了つたは文献を惜む心に於て朝鮮に對して恥かしき心地がする。（附言。東大前館長和田曼翁の自記には七百九十四冊とあるが、朝鮮史の權威稻葉君山翁の自述には千二百冊とある。何れが眞であるか知らぬから姑らく二說を併せ揭ぐ。）

○

『欽定古今圖書集成』は『朕姓源、義經之裔』といふ雍正帝の序文があるといふので昔しから著名であつた。此說の誤傳であるは桂川中良の『桂林漫錄』にも載つてるが、中良が眞僞を確むべく北兒市周の餘光で内見したといふ楓山文庫の『圖書集成』は即ち東大書庫で烏有に歸したものであつた。此書は八代將軍有德公が元文年中長崎の清商に命じて將來した雍正の初印本で、事は近藤正齋の『右文故事』に見える。幕府瓦解後御府に收められたが、御府には其後那桐が來朝の時進獻したものと上海居留日本人から獻上したものと併せて三部あつた。が、楓山文庫のは雍正初印本で、排印の精美と就中圖畫の勝れて細緻鮮麗なるとはビブリオフイルをして感嘆措く能はざらしめた無二の精本であつた。那桐の獻上したのは同じ雍正版でも前者とは比較にならぬ後摺の世行本であるさうだ。上海居留民の獻上したのは近時の上海縮刷本である。此中の最も精美なる楓山文庫本が特に大學へ永代貸附になつたのは全く先帝陛下の叡志であつて、滿蒙藏の三大藏と共に永く先帝陛下を記念し奉るものであつたが、天災とは云へ池魚に禍ひされて亡びたのは誠に恐れ多い極みであつた。御府に猶ほ二部あるといふ條、此の絶美なる雍正初印本は民國でも今は容易に獲られない稀寶である。（帝大には上海石印の『圖書集成』もあつたが。之も亦失はれたのである。）

以上の五大文献は稀覯の錚貴から云ふも卷帙の浩瀚から云ふも又内容の學術的權威から云ふも帝大圖書館八十萬冊に君臨する王者の位置であつた。又世界へ對して帝大圖書館の光輝を發揚する寶籍でもあつた。此の最大貴重書が一朝忽然として喪はれたのは啻に帝大のみならず日本の文献の大不幸であつて、我々民間の措大も亦書樓の窓から觀望する摩空の老樹が突然雷撃の爲め摧かれたのを見る如き感があつた

（以上の『李朝實錄』と『圖書集成』とは先年南葵文庫に展陳された事があるから、好書家の中には今猶ほ當時の印象を忘

れ得ない人があらう。)

（十八）永久に歸らざる浩瀚の記錄

帝大圖書館には諸官廳から移管された幕府の重要なる記錄及び文書があつた。其一部は舊幕府から明治政府へ引繼がれ、暫らく太政官に保管され、太政官廢廳後各省に分管されて後大學へ移管されたものである。其の重なるものは左の通りであつた。

(1)『評定所記錄』……九千一百册
(2)『寺社奉行記錄』……約一千册
(3) 舊幕諸藩調達金證書……一千二百通
(4) 社寺領文書（所謂御朱印）……二千七百通
(5) 釜山文書（日韓外交文書）……一千一百册

右の中、(1)と(2)とは内務省から、(3)と(4)とは大藏省から、(5)は外務省から移管されたもので何れも原本である。是等は皆官府の記錄であるから實は撮要（シノプシス）か索引が無ければ用を成さなかつたし、且怎ういふわけか餘り人に知られず、大學出身の専門史家の中にさへ羅災したのが發表されて初めて知つたものがあるほど夫程餘り知られてゐなかつた。が、平時は夫程用を成さないでも此の根本記錄の存在は歴史上の權威であつて、此滅亡は法制史家や外交史家には重大な打擊であつた。最後の釜山文書は三百年間の日韓關係の根本であつて、德川時代の日韓交渉は恐らく此文書の滅亡に由て全く暗黒に包まれるものがあらう。此以外に幕府が締結した條約書や其他の幕末の重要なる外交書が帝大圖書館で烏有に歸したさうだ。

以上は幕府の記錄であるが、明治十四年に内務省の地誌課が編纂した

『郡村誌』……六千四百册

といふ大記錄があつた。本書は内務省が全國各郡村に通牒して各々其地方の地勢的變遷、行政的沿革、生計、稼穡、宗教祭事舊慣風俗等を調査報告せしめたものを集成したので、各村毎に凡そ二千分一の明細なる地圖を挿入し、其の周密と正確とは官府の記錄に背かざるものであつた。隨つて地方行政上本書に由て施設し或は解決する處少からず、例へば各村の地界や山林の管轄等に關し訴訟の起る場合の如き大抵此の『郡村誌』の記載に由て決定したもんで、之を喪つた今後の地方行政上の何かにつけての不便は推察される。

『郡村誌』は内務省から大學へ引繼がれて書庫の奥深く秘められ、一般世間には餘り知られなかつたが、全國郡村の地理的及び行政的沿革や大字小字の地名の變遷や舊慣風俗の地方的異同

や傳說口碑の地理的分布や、是等政治的、文化的、土俗的、經濟的、歷史的等地方百般の鄉土研究の寶庫として一部讀書子間には帝大圖書館の看板物の一として認められてゐた。が、鄉土研究其物が元來少數者間に限られてるから此の鄉土大百科全書ともいふべき此記錄も實際には餘り顧みられなかつたので．最も頻繁に借覽した柳田國男氏は人の顧みるもの少きを笑つて曾て隨所に不審紙を貼附しつゝ後世必ず何人が不審紙を打つたかと不審がるものがあらんと竊に會心の微笑を洩したといふ逸話がある。が、後世を待つ世話の無い中に不審此の『郡村誌』は紙諸共火焔の中に葬むられて了つた。

人或は政府に若し餘財があれば此の『郡村誌』の如きは再び編纂する事が必ずしも困難で無いやうに思ふものもあらう。が單なる地理的現狀の調査なら何時でも再びする事は決して難事で無からうが、歷史的或は政治的或は文化的沿革の調査となると然う簡單に出來るもので無い。此の『郡村誌』に着手した明治十四年頃にはマダ舊時の面影を留め、封建時代の文書や古老も殘存し、舊慣や風俗も昔しの儘に維持され、傳說や口碑も忘れられてゐなかつたが、今は萬事が著るしく推移して、處に由りては地形からして全く一變し、文書は少くも一半は滅亡し、古老は大抵死んで了つて若い者となり、大字や小字の地名さへも半ば忘れられてをるから、此の『郡村誌』は政府の力を以てするも再び編纂するは不可能である。

(七) 貴重なる古圖の滅亡

『郡村誌』を愛惜すると同時に最も痛恨に堪へざるは無數の貴重なる古圖の滅亡である。第一に擧ぐべきは

伊能忠敬自筆『日本輿地全國』
- 大圖二百十四葉
- 中圖　八葉
- 小圖　四葉

である。此の伊能圖といふは忠敬が寛政十二年から文化十三年まで數回に亘りて全國を踏査し、其都度實測作製した地圖と間宮倫宗の測地材料とを併せて綜合して作つたもので大中小の三種があつた。此以外に特別小圖ともいふべきものを作つた。

其中の基本圖とも云ふべきは大圖にて縮尺三萬六千分一、二百十四葉より成る。中圖は縮尺二十一萬六千分一にて八葉、小圖は更に其の二分一にて四葉より成る。此以外に『江戸府內地圖』、『伊豆七島圖』、『沿海實測錄』等があつた。總て是等の正本は幕府に納められ、維新後は太政官地誌課に保管されたが、明治六年皇城炎上の際盡く烏有に歸して了つた。

忠敬は此の各正本から一々各地點を針で突いて謄寫した精確

たる副本を作つて之を家に藏し、更に副寫したものを作つて諸侯知己の間に頒つた。然るに其家藏の副本は大中小の輿地圖、江戸圖其他全部と明治五年政府に貸附し、七年改めて獻納し、其後東大圖書館に移して保管されてゐたのが今度の震火で燒失したので、此の地理學界の偉人の自筆實測圖は正副本とも全く滅亡したのである。

が、自筆實測圖は正副本とも燒失したが、基本大圖二百十四葉の寫本が二部あつて水路部と陸地測量部とに保管されてゐた。前者は同じく罹災したが、後者は幸ひに免かれて複寫本ではあるが今は唯一の伊能圖である。其以外にては『江戸府內地圖』の複寫本が市役所の市史編輯所に所藏されてをる。又中圖輿地圖の最も美くしいものが大河內子爵（正敏）家に秘藏されてゐるさうだが、原本の失はれた今日是等は皆貴い稀覯本である。

尤も中圖小圖の寫本は澤山あるものと見えて各所に存在するが、先年大圖の中の對島、壹岐、五島、平戸、種子屋久諸島、及び中圖の九州附近竝に諸島の圖が坊間に出でたのを長岡半太郎博士の意見で成るべくは各地に分藏するが保存の方策であるといふので、京都大學に慫慂して購入せしめたさうだ。博士の卓見の爲め幸ひ今度の災禍を免がれたが、若し東大に收得したら他の諸圖と共に滅亡したらう。

伊能の小圖は大圖に比べて省略されてゐるが、明治の初め開城所で此の小圖に增訂を加へ剞劂に附し、四帖箱入の『官板實測日本地圖』として發行したのがある。俗に之を伊能圖と稱してをるが、何部出版したか知らぬが今は之さへも容易に獲られない。然るに此の板木（化し墨板十三枚だけ）が文部省の倉庫に殘つてゐたのを先年木板師の宮川が偶然發見し、申受けて珍藏してゐたが其後大學に寄附した。幸ひに此の板木は地質學の教室に在つたので今度の災禍を免かれ、理學部金庫の中に無事に保管された忠敬手澤の測量機小方位儀と共に今度貴重なる記念物となつた。

○

伊能圖の外に最も惜むべき古圖は左の三種であつた。

(1) 元祿圖……………………………三張
(2) 寶曆十一年官撰關東八州圖…………十一張
(3) 文政九年江戸町方書上圖……………約二千二十七張

右の中、元祿圖といふは元祿十年幕府が各藩に令して所領の圖を作製上納せしめたもので、今では久保田領（今の秋田）、松前領（今の北海道）、村上領（今の越後村上）の三枚だけが殘つてゐた。松前領のは最も大きく、縱橫二十何尺もある大圖で、元祿十五年といふ年號があつた。極めて美しい着彩の分間圖

例へば松前侯から年々箭羽根に用ひる鷲の羽を公儀に獻上する例があつたが、其の鷹の捕れる地方に鷹の繪を描いてあるといふやうに頗る趣味ある圖であつた。久保田領のは三尺四方の小圖であつたが、佐竹の繪所狩野系の描いたもので極めて美くしい細圖であつた。殊に象潟邊の名所圖會的彩畫は最も細緻を極めてゐた。

幕府では正保と元祿と天保との三回各藩に令して作圖せしめたので、初めのを『正保度國繪圖』又は『古國繪圖』、次のを元祿度國繪圖』又は『新國繪圖』、最後のを『元保度國繪圖』又は單に『元保圖』とも云つた。正保圖は最も早く亡び、摹寫とは云ひながら可成古い極めて見事な摹本が大藏省に在つたのが今度の震火で燒け、僅か三枚しか殘つてゐなかつた元祿圖も東大で亡びて了つた。内閣文庫に所藏される元保圖が今や存せる唯一の幕府官撰の日本圖となつた。

寶暦の關東圖も文政の江戸町繪圖も亦幕府の官撰であつた。二つながら今日の地圖と比べて毫も遜色が無い精細を究めたものだが、就中江戸圖は文政九年『新編御府内風土記』編纂の際特に町方及び寺社方に命じて作圖せしめたもので、科學的精確に於て或は及ばないでも細緻の點に於ては今の參謀本部圖以上であつた。

上記の地圖は文化七年の頃大學頭林衡の建議で昌平坂學問所内に置かれた地誌編修取調所に在つたのである。『新編武藏風土記』や『相摸風土記』は此の地誌取調所で編纂されたので、當時編修用として蒐集された圖書の全部は擧げて維新後太政官に收められ、明治六年の炎上に大凡失して了つた。其の燒殘りとも云ふべきものが其後内閣修史局や内務省地誌課に分割され、明治二十八年頃史誌編纂事業と共に大學へ移管されて終に今度の震火で伊能圖と共に全滅して了つた。

（八）百五十年前の勞農共産哲學と幕末五十年間の江戸風俗日記

東大圖書館の燒失は震災中の最大禍であつたゆゑ罹災した書籍は多數の人に追懷され哀惜されたが、誰にも憶出されないで（といふよりは實は殆んど誰にも顧みられないで）恰も野の遺賢のやうに凡本俗書の間に埋もれたまゝ灰となつて了つた二大著述があつた。一は安藤昌益の『自然眞營道』、一は『藤岡屋日記』であつた。

二つ共に博士狩野亨吉氏の舊藏であつた。博士は人も知る博覽家、古書の博通に於て當今第一人と稱され、鄴架常に萬卷、能く蒐め能く散じて曾て執着しなかつた。獨り此の二書は深く

愛惜して萬金と雖ども換えずと揚言してゐた。其の終に大學へ割愛したのは此の如き稀代の大著を私人の書齋に獨占するは著者の志でも又學術の爲めでも無いと信じたからであつた。東大圖書館炎上と聞くや博士は浩嘆して曰く、大東大文庫八十萬冊も要するに枯骨の墳墓であつたが獨り『自然眞營道』に到つては眠れる獅子の生き乍らにして火葬されたやうなものであつたと。

『自然眞營道』は確然堂良仲著とあつて原漢文九十冊の著者自筆稿本であつた。狩野氏が之を獲るや所論の破天荒にしてシカモ文章の痛快激越なるを驚き、著者の何人たるかを知らんが爲めに持捜細究到らざる無かつたが、確然堂穜仲が著述名であつて本名が安藤昌益、秋田の人で八の戸に住して醫を以て業とし寶暦中に本書を著はしたといふ外には全く經歴が解らなかつた。

全九十冊の中初めの二十九冊は破邪篇であつて、遠くは釋迦孔子から我が近代の儒流に到るまでの教説を極めて痛快に殆んど完膚なきまでに骨災微塵に論破してをる。其論鋒の辛辣鋭利なるは骨を穿ち髓を剖つて釋迦も孔子も朱子も陽明も腑の如くに料理されてをる。

破邪篇に續いて『法世之卷』と題する一冊がある。法世とは法の世の中と云ふ意味で、著者の説に由れば世界は今の言葉で云へば相對で互持されてるのを既成の道德や宗教は之を忘れて絕對と假想して法を設けて一切を規矩し制縛しやうとする。此の誤まつた人間の世の中を傳統の因襲に毫も煩はされない鳥獸の眼を通して批評したのが即ち此の『法世之卷』である。此構想はスウヰフトやラベレエも試みてをるが、渠等のは人間が鳥獸に假裝して物を言つてるので根柢に横はつてる思想は矢張因襲の教説である。昌益のは人間世界の習慣や因襲と少しも交渉しない鳥獸になり切つて異樣の眼を以て人間を見てをる。形は同じであつても看方は根柢的に違ふのでヨリ鋭どくヨリ深酷にヨリ徹底的である。

最後の六十四冊が『眞道哲論』と題した本論で、即ち昌益獨見の五道の哲學である。所論は極めて深遠な經理であるが、政治的又は社會的に敷衍された主張は勞農を基本とする共産主義であつて恰もレエニン等の思想と稍や符節を合はしてをる。

著者の漢文は極めて晦澁である上に獨創の用語に富みて頗る難解であるが、同時に筆を驅使するや奔放自在にして往々醜を摘し背を決して時勢に慷慨激越する著者の風丰を彷彿さするものがあつた。例へば家康の僞善政治を熱罵するに初めは服公或は將軍家康と稱してゐたのが漸次に家康となり家康奴となり、

に奴隷と呼喝する如き數倍以上の革命家たるを想はしめる。が『自然眞營道』は夕ゞの靖獻遺言流の慷慨論で無くして自然を最善の歸趨とする思想に根基する經世の社會哲學である。寶暦と云へば十八世紀の中葉である。オーウエンやサンシモン以前恰もルツソオと時を同じうして山海萬里を隔てた此の極東の鎖國島に更に一歩を進めた學説を提起したものが有らうとは恐らく誰も知らなかつたらう。

鷗外氏に紹介された小楠の『天道革命説』といふは今横井家に在る乎ドコに在る乎、又僞書である乎否乎も俄に判定し難いが、『自然眞營道』は小楠の『天道革命説』以上である。が、室内過激派（パーラー・ボリシエヴヰキスト）や室内虚無黨（パーラー・ナイヒリスト）は千年も二千年も前からドコの國にも有つたので珍らしく無い。單に室内ばかりでなく錢湯革命家や床屋アナーキストにも我々は屡々遭逢する。其のたんびに神經を尖らしてゐては際限が無い。唯だ德川將軍の勢威赫々として時津風枝も鳴らさぬ太平の御代に奥州八の戸の片僻にレエニンに先んづる百五十年略ぼ同一勞農共産主義を組織立ちて著述したものがあつたのを異とする。

『自然眞營道』は久しく狩野博士の懷中の秘佛であつたので之を讀んだのは博士以外に幾何も無い。が、博士が京大總長在任中、偶々總長室の卓上に其の一冊を置いたのを故内田銀藏博士が偶然瞥見して、博士が青年時代に天下の奇書として父から聞いた聲があるのを憶出して懷かしさに堪へざるやうであつたさうだ。が、銀藏博士も其時借覽する機會も無い中に間もなく物故して了つた。東大の有に歸して後、之を聞いて借覽を申込むものは多かつたが、東大では副本を作るツモリで誰にも許可する暇の無い中に震火で亡びて了つたのだ。

此頃或人から狩野博士に、寶歴板の『書籍目錄』に安藤良仲著『孔子一世辨記』二冊『自然眞營道』三册と併記してあると通知して來たさうだ。『書籍目標』には屡未刊行書をも載せるから果して出版された乎否乎は確定されないが、未刊にしろ目錄に載つた處を見ると『自然眞營道』の名が當時既に讀書子間に知られてゐたものと見える。但し東大でやけた狩野氏舊藏本は九十册で此目錄のは唯僅に三册であるから抄略か斷章か或は書名を同じうして内容の全く異なつたもの（恁ういふ例も往々有る）かも計られない。が、既刊か未刊かは左も右くも既に目錄にも載つてるし、昌益には同じく八の戸で酒を業とした神山仙知名庵といふの高弟もあつたし、其他にも本草の學説を襲つた門下もあつたらうから、自筆稿本は燒けたしてもドコかに副本が無いとも限られない。

が、其地が餘り僻遠である爲めかして安藤昌益の名は中央に

は餘り傳はらないで何の書にも見えない。此稿を草するに際して我が醫學史の權威富士川博士の教をも乞ふたが、博士すらもマダ其名を知らぬと答へられた。昌益は江戸へ來た事があるらしいが、イツ來てドコに住つて何をしてゐたかゞ解らない、が前記した如く內田銀藏博士の嚴父が『自然眞營道』の書名を知つてゐたのは博士の生地千住の舊名主が讀書家で早くから本書を精讀してゐたのださうで、江戸にも本書の名が一部讀書子間に知られてゐたものと見える。

が、良中の本名が昌益である事をすら狩野博士が知るには容易で無かつたさうで、昌益の經歷は一切秘密に包まれてをる猶更此の貴重な『自然眞營道』の自筆稿本が失はれて了つては昌益の名は永久に我が思想史のスフヰンクスであるかも解らん。

○

『自然眞營道』と共に狩野博士に秘藏されてゐたのは『藤岡屋日記』であつた。藤岡屋といふは外神田の丁度燒跡の[illegible]世マーケードの敷地の角から二三軒目に在つた本屋で由藏と云つた、頗る筆豆であつたと見えて每日見聞した市井の異聞珍聲、風俗流行其他の雜事を細かに記したもので、文政三年から慶應三年まで四十六年間の日記である。總冊數百五十六冊であつた幕末の江戸の風俗資料としては之に及ぶものは無い。文化文政以前の江戸風俗に關したものは可成多いが、其以後が頗る乏しいので、『藤岡屋日記』は最も豐富なる材料を供して呉れる。幸ひ本書は市役所の市史編纂所に副本があるので、自筆の原本は燒けても全滅では無い。

(九) 江湖に喧傳されたる貴重記錄及び文書

東大圖書館の貴重書で最も世間に著聞するは左記の數點である。

(1) 『蔭涼軒日錄』自永享七年 至明應[illegible]年……六十二冊
(2) 『鹿苑日錄』自長享元年 至享和三年……百五十七冊
(3) 『町尻家日記』自寛永六年 至明治元年……七十六冊
(4) 『松尾社日並記』自寛永十六年 至寛延二年……百九十二冊
(5) 『廣橋文書』……約三千冊
(6) 『野宮文書』……約三千冊

右の內の初めの二記錄は東大圖書館の大名物として廣く知られてゐた。之に就ては當時の購入斡施者たる三浦周行博士の追憶が昨年十月發行の「表現」震災號に載つてをる。此の二記錄は鹿苑寺中蔭涼軒の代々の軒主の記錄であつて前者は六十年、後者は之に續いて德川時代まで三百年に亘つてをる。蔭涼軒代

々僧錄司を勤め禪宗寺院に關する宗政と司るのみならず代々足利將軍歸依の淺からず政治や外交にまでも參與してゐた。隨つて此日記は當時の政治及外交の機微から柳營の式例、此間の風俗までも細大洩らさず記して文獻の最も缺乏した足利末季の最も貴重なる資料であつた。其頃の日記は大抵兵燹に罹つて亡びて了つた中に此の三百六十餘年に亘る日記が完全に儼存してゐたといふは不思議な天佑であつたが、今回終に滅亡して了つた『蔭凉軒目錄』の方は內閣文庫は德川時代の寫本がある、近くは大日本佛教全書中に全部を收められた。縱令魯魚の誤りがあつても大要を伺ふ事が出來る『鹿苑日錄』は買入前に史料で謄寫したものが三冊と、不思議に殘存した二冊があるだけで殆んど全部が失はれて了つた。

　三浦博士の追憶談に由ると、此の二記錄は國相寺の塔頭慈照院に傳はつてゐたので之を買入れた價は千圓であつたさうだ。今なら西鶴でさへが一部千圓を値ひするので千圓の書籍は珍らしくないが、三浦博士は本書を買入れた明治三十八年頃の千圓は方外で無くとも可成な重價であつた。ツイ此頃、地震後に此の二記錄と匹敵する或は是れ以上であるかも知れない奈良の著名な『大乘院日記』が賣物に出たのを或る好書家が買取つた價は四千圓であつた『大乘院日記』は可成分厚の冊子が二千百何冊あつて之を輸送するに貨物自働車（トラツク）二輛を要したさうだ。之から比べると蔭凉鹿苑二百十九冊、外に六十四種の合綴を加へて一千圓といふは今日の相場に直しても餘り低廉では無い。が、之だけの高金を投ずるも惜からずとまで博士を熱中せしめたと云ふは取りも直さず此の二記錄の如何に貴重なるかを裏書きするものである。

　博士の追憶談にはエピソードとして慈照院の老僧が之と前後して什寶の雪舟の破墨山水を一萬五千圓（此價は博士の記憶である）で博物館に賣込み思はぬ金が續いて入手したので終に墮落したといふ消息を傳へてをる。が、高金で買入れたものを副本も作らない中に灰として了うよりは高金で賣つて遊蕩した方がマダ賢こかつた。

　最後の『廣幡文書』は重に有職、故實、公事、『野宮文書』は專ら裝束、和歌に關する資料に富むものとして歷史家に珍重されてゐた。が、今は『大日本史料』や其他の考證論文に引證されたものを名殘として全部が滅亡して了つた。

○

　前記の蔭凉鹿苑日錄と同時に買入れた相國寺舊什の桃源自筆天隱補筆の『史記抄』二十冊（自文明八年至十二年）內筆『百衲襖』二十三冊（自文明六年至九年）三玄道人跋の『天下白』十三冊（永正十四年）藍溪宗瑛

自筆の『江湖風月抄』四冊、大治の年記ある『禪仁和尚手寫の十八道梵本』一卷、承久の識語ある『諸師印信』一卷等は昔しから聞ゆる古書の銘物であつた。

以上の外、武家公家の日記類數十冊、寶龜及び弘仁の賣買券を初め織豐時代に到る古文書數十通、天平の 善見毘婆沙律』弘仁の『菩薩瓔珞本業經集衆品』を初め各時代を通ずる古寫經凡そ二百卷、東福寺の彭叔守仙の自筆本を中心とする『善慧軒本集』五十部二百餘冊、貞和二年の『感山雲臥紀談』康應二年談の『楞嚴經會解』、貞治七年の『五燈會元』、梵舜書入れの『杜工部詩文集』等を初め五山板七八十種二百餘冊、古活字板一百冊鷲峰、三藐院、逍遙院、貞淵、貞幹、梅齋、弘賢、正齋、與清馬琴、種彥等名家自筆本及び手抄本凡そ七八百冊を算した。一々之を載するは唯だ書名を擧ぐるだけでも容易で無い。(昨年十一月の『史學雜誌』に史學に關するもの丶概目を載せてをる參照せよ。)東大圖書館の如何に豐富であつたかは之を以ても知るべきである。

(十) 文明移入資料

東大圖書館の洋書は凡そ二十四萬五千冊あつたさうだ。其中には高價の貴重書が少くなかつたのは想像するに難くない。『インキユナビユラ』は一冊も無かつたが、『エルビギル』集や『アルダイン』版等の標本とすべき標本は數十冊あつたさうな。戸水博士や穗積博士や坪井博士の購入したものには頗る珍奇な稀本があつたやうに記憶する。

東大の洋籍中、特記すべきは天正以後慶長頃までの切支丹時代にパテレンが本國へ通信した報告、所謂『エズイツト・プレスの蒐集である。一體此の「エズイツト・プレス」なるものは何冊あるものか、ジエパーの目錄には凡そ百五十種を擧げてゐるが之に洩れたものもあつて總數に判然しない。東大は專ら坪井博士その盡力で凡六七十種を蒐めた。京大はサトオの蒐集凡そ百冊を買入れたので、一氣にアトの雁が先きになつて了つたが、三冊四冊と六七十冊を蒐めた丹精は決して容易で無かつた。

東大が初め此蒐集に着手した頃は外國でも之を顧みるものが少なく、隨つて市場にもく多出れば本價も又夫程貴くなかつたが近年各國が競爭的に日本を中心としての東洋研究を初めるやうになつてから東洋に關する古刊本が無暗と昂貴し、就中『エズイツト・プレス』は日歐交通の最好資料として最も興味を集中し、日に益々高價となつて、中には僅に四五頁にしか充たない斷章で數十金の重價と呼ぶものもある。殊に價は左に右に品が段々乏しくなつて、纏まつた蒐集を收得するに非ざる限りは六

七十種を蒐める容易で無くなつた。

東大の「エズイツト・プレス」には怎んなものがあつた乎。其の題名の西班牙文或は羅甸文で、シカモ其頃の風として極めて長たらしきが故、恐らく管理者と雖ども一冊さへも記憶しないだらう。二十年前丸善から東大へ納入した「エズイツト・プレス」數冊中の最も貴重なる一部を偶々手帳の端へ書留めて置いたゆゑ、失はれた六七十冊の耶蘇會版を記念する爲め茲に擧げて置かう。

Copia de unas cartas de algunos padresy hermanos dela compania de jesus.......... [Lisbon. 1575]

之ぞエズイツトの伴天連の書翰集で九通の手紙を集めてをる。其中の一通は日本へ鐵砲を初めて傳來したピントオに關する消息で、パージエの目錄にも集々圖書館にのみあると特記したエズイツト書翰中の最稀覯の一つである。タツタ四六判ぐらゐの二百頁ほどの者で大學で買入れた當時の價は七八十圓であつたやうに記憶する。今では大方二千圓以上を値ひするだらう。「エズイツト・プレス」は數片の斷章なら平均二三十圓程度である。稀には七八十圓のものもあるが、合綴したものでも惣てが上記のやうに貴いのでは無い。が、上記の最稀覯をも含んだ東大の「エズイツト・プレス」の蒐集は極めて貴重のものであつた。

○

が、「エズイツト・プレス」を除いて東大圖書館に所藏した日本關係の西籍は平たく云へば餘り豐富では無かつた。とは云ふものゝ幕府の蕃書取調所及び司天臺より引繼いだ英蘭書、河本幸氏、林洞海等蘭學者の手澤の蘭書が少くも百數十冊あつた。其中には有名なるヅーフの手書識語ある蘭文紀行や佐久間象山の印記ある蘭文化學書等が有つた。今は目錄が無くて辿る道が無いが、洞海の遺書中には筆彩色の精巧なる銅版挿畫のある大部の植物書が若干部あつたさうだが、是等の中には今日容易に獲られない稀覯書があつたかも計られない。世間の藏書家の架上に有るのでもドゥウネスの本辨書やケンペルの日本誌はまた惜しきものゝ一つである。シーボルトの著も全部揃つてゐるやうに記憶する。且幕府から引繼いだものや蘭學者の手澤本は書籍其物の稀覯的價値は左に右く我が文明移入の蹤跡を印する歴史的記念物であつた。獨蘭の古書肆を探訪すれば容易に獲べきものでも之に換ゆべきものでは無い。

其間に在つて貴重書室の全部が烏有に歸した中に Collado "Dictionarum Japonicum"(1632)が唯一冊偶然館長室に在つたが爲めに無事に助かつたと聞くは眞に奇蹟中の奇蹟であつて、此のコリヤードは今度の東大圖書館の震火の最も貴重なる

記念である。

（十一）徳川文學の資料

日本の知識階級者、就中學者間には今猶ほストイック的武家形氣や僞學思想が先入の累をなして純正文學の中樞たる小説に對する偏見を抱いてをる。私人の書齋でゝ小説戲曲は縱令愛讀しても戸棚の隅へ仕舞ひ込んで成るべく人目に觸れないやうにするが士人の面目であるかのやうに考へられる。況してや一國の最高學府たる大學の圖書館に誨淫の戲作が架藏される如きは以ての外と青筋出して力味返らないでも苦蟲潰するものは大學教授の中にさへ有つたらう。が、前館長和田萬吉翁は夙に文學に沈潜して一度は創作家として起たうとする抱負を持つてゐたので、此方面にも亦力を注いで百方蒐集に努めた。何と云つても日本の文學の最も燦爛たる精華は徳川時代の戲曲小説を中心とした大民衆藝術に在るので、若し之を除いたら日本の文化史は荒れ果てた無住の古寺のやうなものだ。東大圖書館は我が文化史に最も花やかな活き〳〵した生命を與へた徳川時代の戲曲小説歌俳隨筆等の數に於ても亦挺んでゐた。

和田翁は此部門に於て特に採訪に努めたので珍本稀籍が四方から集まつたが、其中心となつたのは名古屋の古い歴史を有する貸本屋大惣の書であつた。大惣は元祿頃からの連綿たる貸本屋であつて、自然其頃以後は本より西鶴ごろのものまで揃つてゐた。中には封切りもしない袋入りのものまであつたと、其方面に造詣の深い淡島寒月翁が曾て大惣の書庫を討尋して驚嘆して語つた。坪内逍遙翁も少年頃から大惣に出入して後年の素地を作つたさうで、大惣の憶出を『早稻田文學』に書いた事があつた。此の大惣の蒐書が二十年ほど前に賣物に出たのを東大と京大と上野の帝國圖書館とで三分した。和田翁の憶出に由ると公平に均分したとあるが、事實は東大が先づ優秀なるものと選擇して割取した。量に於て或は均分であつたかも知れぬが、質に於て優越したものは大抵東大に歸した。

此部門に於ける東大圖書館の藏書は大略左の通りであつた。

(1) 古淨瑠璃……………………二百冊
(2) 假名草子 西鶴八文字屋物等……………一千部
(3) 黑本及び黄表紙……………………九百部

右内の、古淨瑠璃は近松以前のもので重に江戸板の金平本の類であつた。金平本は殆んど代表作を網羅して百有餘種と算した。大抵は江人時代からの舊家で誰も知つてゐる山谷の名代の川魚料理店重箱の舊藏であつて、東大圖書館の銘物の一つであつた。黑本及び黄表紙は大部分が矢張大惣本である。此種の蒐集として一

は九百部は決して豐富で無いが、全部が汚損も徒ら書きも無い貼外題までが完全した初摺の美本であつたのは亦誇るに足るものであつた。マダ珍本の部には入らないが、中本、讀本、人情本草双紙類まで代表的のものは大抵揃つてゐた。

昨年五年、日本圖書館協會の創立三十年記念として南葵元年に開催された江戸時代小說輯展覽會の列品の大部分は東大圖書館の架藏であつた。數回の圖書館及び藏書家の援助があつたと云へ殆んど大部分が東大所藏であつたといふを以て其の豐富と窺うべきである。此展覽會は三日間開催されて知名の好書家及び文學史家は大抵來觀したが、博覽の藏書家が猶且曾て書名をだも聞いた事が無いものが餘り多いのを驚歎した。且又何れも極めて美本で、中には恰も最近の出版なるかのやうに少しの手摺れさへ無いものがあるには誰も驚かされた。參觀者の中には一日飽かずに繰返して見るものもあつたし、三日間毎日通ふて最後の閉會時間を惜んで戀々去るに忍びざるものもあつた。

此展覽會は東大圖書館の藏書の展觀された最後であつた。數月の後、之が一炬に焚かれて了はうとは誰も思はなかつたのでこの展覽會の目錄が後にも先きにも東大圖書館の唯一の記念物となつた。（此の展覽會には松廼舍文庫の海內一本ともいふべき稀本も數多陳列された、松廼舍文庫も亦劫火に禍ひされたが故に當時の列品の七割は全滅して了つたのである）（未完）

由井正雪

高須芳次郎

一 家光の死とその前後

慶安四年四月、江戸市民が花吹雪の下で歡樂の美酒に打興じて居た美しい長閑な夢は、急に三代將軍家光の死によつて醒まされた。歌舞伎、相撲、薩摩虎屋の操り人形などが賑はつて居た禰宜町やその隣の吉原遊廓は俄かにさびれた。諸方の名所をめぐる行樂の人々も、頓にその影を減じた。「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」と歌はれたその錦繪のやうな春も今年はすつかりめ入りこんだやうに見えた。そして何となく巷に不安、動搖の影がさして殺氣が天の一方に流れた。

家光の病が漸く重くなつたのは、初春の頃（慶安四年）からであつた。その時分、家光は自分の姿を鏡にうつして見て、最早死の運命を免れ難いと知つて、「鏡には知らぬ翁のかげとめて元の姿はいづちゆくらん」と生のはかなさを泌々思つた歌を咏んだ。それから病は益々重くなるばかりで、四月十九日の夜、危篤に陷つた。家光は觀念の眼をぢつと閉ぢて居たが、力ない聲で、酒井讃岐守（忠勝）を呼んで「自分は最早助からぬ。家綱のことは、お前たちによろしく頼んだぞ。何分家綱は小供のことだから、御三家の心入れを特に望みたい。」と辛らうじて傳命した。

「委細畏りまして御座います。どうぞ御心安くいらせられますやうに。」

酒井はかう云つて、家光の命を奉じて、御座所へ紀伊大納言賴宣、尾張宰相光友、水戸中納言賴房らを呼び出した。三家の人々がくると、諸老臣たちも亦その傍らに打しほれた樣子で列座した。暫く沈默が續いた。やがて酒井は一同に向つて「上樣は親しく諸卿に對面遊ばされて、遺托の旨を仰せ出さるべき思召で居らせられましたが、急に御惱みが增して、御大漸の期が近く迫つて御口が自由になりませぬ。それで御繼嗣は未だ幼くいらせられますので、宗室の方々に於て、その身に引受け

事御輔導あるやうにとの御意に御座います。」と打しめつた調子で述べた。それを聞いて、頼宣らは覺えず涙を流した。

「御仰せのことは、謹んで命を奉じ、及ばずながら、赤心を傾けて新君を輔佐いたします。」

彼等はかう固く盟つた。そして頼宣らが退出すると、次ぎに松平能登守定政、松平越後守光長、小松中納言利常らを呼び出し、次ぎに保科肥後守正之、松平隱岐守定行らを召して、家光の遺言を傳へた。特に家光は、保科を信じて懇命を傳へた。保科はひどく感激して、輔佐の任に就いた。

家光は、それで安心して、四月二十日、晩櫻がほろほろと西丸の芝生の上に散る春愁をよそに見て、眠るやうにこの世を去つた。その日、阿部對馬守重次、堀田加賀守正盛、内田信濃守正信の三人は、御城から退出すると間もなく、私邸で切腹して見事に殉死した。それから少し遅れて久しく大奥に勤めた堀田の母も自刄した。それは主君を失つた上わが子を亡くした二重の悲みに打たれたからであつた。その後も、家光の死に殉じたもの、薙髮したものなどが數人あつた。

家光の死は、江戸政府の閣臣らに大きい不安の念を與へた。當時世は靜平の姿を保つて、淨瑠璃、操り人形、歌舞伎踊り、三絃樂などが民衆の間に喜ばれ、湯女風呂、遊女町の繁昌が次第に人々の心を柔げたが、一方では、元龜、天正以來傳つた殺伐の氣象が尙ほ武士、浪人の間にはびこつて居た。中にも、武士から浪人となつた失業者の群は、平生、天下の變を思つて、機會さへあれば、相應の地位に有り附かうと覗つて居るので、家光の死は、彼等の血肉に強い衝動を與へた。それは家光の手嚴しかつた政治に大きい不滿を抱いて反抗しようと待ち構へて居たところへ、新將軍家綱が僅か十一歲で未だ政治がわからぬことを知つたからである。天下の形勢は危殆に瀕した。

當時、大奥の人々は天下の危機を忘れて悲みに浸つた。女中らは、前後を忘れて、泣きくづれた。家光の愛妾なども、喪心したやうに眼を泣きはらした。それらの聲が御座の間まで聞えた。松平信綱はたまりかねて、眉をひそめながら、大奥へ出かけた。

「大納言樣（家綱）が未だ御幼少で居らせられるところへ、かうした大變に逢ひ、各々が泣き悲まれるのは、道理至極であるが、今はどんな野心家があつて、德川家の隙を窺うて居るやら、誠に測り知り難い折です。各々が氣を取り落して、悲んでばかり居られると、愈々德川家を覗ふ時が來たものと思ひ、謀叛を企てる輩がないとも限りませぬ。これは實に一大事ですから御女性なればとて容赦出來ませぬ」

信綱が嚴しく諭したので、女たちは、俄かに聲をひそめた。それ以來大奥は沈默の暗の中にあるやうに靜かになつた。信綱が謀叛人のことを氣遣つたのは失意の浪人を殊に恐れたからであつた。浪人の多數は江戸政府の大敵であつた。

その政府の敵を防ぐために、吉原遊廓が生れたといふと、遊女と浪人の對照がいかにも不思議なやうであるが、遊廓設置の理由のうちには浪人の惡事を防ぐ箇條が明かにあつた。庄司甚右衛門が慶長十七年に江戸の娼家を代表して遊廓設置の請願書を出した時、「近年世上御靜謐に治り候と申しながら、濃州御平均の事も遠からず候へ共、自然隙間を伺ひ、惡事相企て申す諸浪人の類もこれあるべくと存じ奉り候。」と先づ江戸政府が最も嫌惡する浪人の事を述べ、次ぎに「左樣なる惡黨の類は人目を忍び、住所を定めず、流浪いたし此處へまゐり候とも、出所詮議いたし候もの御座なく候間、幾日も留め置き申候。右の如き族、所々方々の遊女屋にかゝはり罷在り候はゞ、御詮議嚴しくとも、輒くは御手に入り申すまじくと存じ奉り候。」と浪人についての憂慮を記した。最後に「此度願ひの通り、傾城屋一ヶ所に仰せ付け下し置かれ候はゞ、此儀はわけて念を入れ、何ものにても見屆けざるもの傾城町を徘徊いたし候はゞ、そのものゝ出所吟味仕り、もし怪しきもの共急度御訴へ申すべく候事。」と浪人の追窮、詮議につくす旨を述べ立てた。政府は庄司の言葉に深く動かされた。

世が靜平になるにつれて、大名、武士が享樂の美酒に溺れて遊女に親むのは、自然避け難い勢であつた。越前中納言秀康、大久保石見守、池田三左衛門尉、淺野長政、同幸長、加藤清正らはいづれも好色の病のために生命を縮めた。それは「當代記」のうちにはつきり記されてある。その多くは唐瘡（黴毒）または虚の病（腎虚）に祟られたのである。上の好むところは自然下のものにも波及し易かつた。大名も武士も浪人も悉く遊廓に心を惹かれた。町人とても好色に眼がなかつた。かうして遊廓のあるところは自然雜沓した。放浪、漂泊の生を送る浪人が混雜にまぎれて入り込んだり、徘徊したりすることが多かつた。江戸政府はそれを取締るため、庄司が願ひ出た遊廓設置を許したわけでなかつたが、許可した理由の一つは、そこにあつたと傳へられたのを見ても、政府が浪人取締の事にいかばかり配慮したかゞわかる。

江戸吉原は、慶長末年にもう大部分出來上つて居た。本町、江戸町、京町、境町、伏見町、大阪町、墨町、新町などが板葺の屋根を列べて、揚屋町といふ幾筋かの横町が作られ、大門が設けられた。そこには歌舞伎、能などの舞臺があつて、獅子

勸進舞、蜘蛛舞、淨瑠璃、相撲などが毎日催ほされた。それは當時の一大歡樂境であつた。それは駿府、京都、伏見などの遊廓を次第に凌がうとする勢を見せた。その發達の度合は頗る急速で、元祿の時分には、千九百人の遊女を抱へるやうになつた。そしてこの放埒と自由とに滿ちた別天地は、浪人が嘯嗷し鬱散するに適して居た、彼等は續々入り込んだ。政府の追窮の眼を逃れて、潜伏もした。かうして吉原は江戸に集つた多くの浪人が足を踏みのばす樂園であつた。彼等の或ものはそこで歡樂の酒に醉うて殺氣走つた眼を据えて江戸政府を非議した。

「將軍が何だ、江戸政府の役人が何だ。元はいづれも一介の武士から成りあがつたものぢやないか。俺たちは、今こそ浪人となつて、失意の日を送つて居るが、以前は相應の武士であつたのだ。天下は、德川の天下でなくて、天下の天下ぢや。實力あるものが、それを取るのに何の不都合があらう。假りに天下が取れずとも、俺たちが力相應の地位に有り附くのは不當ぢやない。その望みの前に天下の變亂が起るであらうことは、俺たちの最も望むところだ。」

浪人の群は不平に堪えきれないで胸のうちで考へて居たことを豪語したが、眼さきが早く利いて寸分の隙のない家光が老臣と共に政府を支配して居る間は、法規も制禁も殆ど物の數ともしなかつた浪人さへ、不平を抑へてぢつと時の推移を待たねばならなかつた。二代將軍秀忠は、溫和で手柔かであつたけれども、家光は、自分の信ずるところを遠慮なく斷行した。それは政府の實力が略ぼ備つたのを恃んでしたところではあるが、家光の剛毅な性質にもとづいたところが少くなかつた。

家光は江戸政府の土台を固めるため、諸侯を抑へ付けて、改めてその臣下とした。また洛中の浪人を嫌つて容赦なく追ひ拂つた。キリスト教徒に向つても、手ひどい迫害を加へた。それから朝廷に對しても、外樣大名に對しても、至極强硬であつた。殊に政府の吏員や江戸市民らに向つては、想像も付かぬほどの禁令を亂發して、彼等を苦めた。先づ政府の吏員には、飲食の奢りを禁じて、不行儀のものを容赦なく罰した。寬永二年には大番士小幡小五郎が殿中で足に灸をするため、裳を揚げたのを咎めて切腹を命じた。またその組頭の責任をも糾明して「部屋の監視を怠つたのは誠に不行屆である。」といふ理由で、改易の處分を加へた。

家光は老臣と協議して、衣服、容儀の上に窮屈な制限を設けた。平人の庄屋は縞木綿以上のものを着てはならぬ、徒侍は練二重以上のものを用ゐてはならぬ、江戸市民は紗綾の合羽や美しい脇差や太刀などを着けてはならぬ、農夫は木綿のほかのも

のを着けてはならぬ、文彩ある服は一切着用してはならぬと令した。次ぎに政府は市民が街上で蹴鞠したり、蒔繪の乗鞍を用ひたり、盃の臺に紋を描いたり、箱に金箔銀箔をすりこむことをも厳しく禁じた。士民はまるで手足をすつかり縛られたやうな不自由を忍ばねばならなかつた。

江戸政府が當時ひどく憎んだのは、武士出身の浪人とキリスト教であつた。その時分、自治制度を押ひろげるについて、「郷中御條目」を作つて、五人組の制を勵行したのは、キリスト教の傳波を妨ぐためばかりでなくて、また浪人らを厳しく取締るためであつた。この制度は桃山時代に行はれ始めたのであるが家光の時には、その意味が餘程重くなつた。ある一郷のうちで罪を犯したものがあると、五人組ばかりでなく、一郷のものが全部、責任を荷ふことになつた。それで各自は、五人組から拘束せられ、それから一郷からも拘束せられた。それはまるで民衆の咽喉元をぐつと締め付けて置いて、寸時も手をゆるめぬのと同様の厳しさであつた。

家光が朝廷や外様大名に對する遣り口も亦以上に似て居た。それは、江戸政府の傳統政策で、ひとり家光ばかりが、强硬なわけではなかつたけれども、家光のしたことが目立つた。家康の時は、表面だけでも、朝廷を尊んだが、秀忠の時になると、漸く壓迫の傾きを見せるやうになつた。當時、後水尾天皇が不満の思召を抱かれたことは、細川忠興から忠利へ與へた手紙のうちにはつきりと記されてあつた。それには、天皇が公卿たちの官位を思ふやうに進め得ぬこと、御料は増され、金銀、物品は幕府から獻じても、米、金銀共に所司代から直ぐ民衆に貸付けるので實際宮廷のために役立たぬことを憤られたのである。

殊に後水尾天皇が逆鱗せられたのは、江戸政府が法度を楯に取つて、勅許を得た紫衣を僧侶の手から褫奪したことであつた當時、大抵の僧侶は江戸政府の前に直ぐに頭を垂れたが、大徳寺の前住宗珀（玉室）宗彭（澤庵）妙心寺の前住單傳、桃源の四人は、政府の處置を手ひどく非難した。政府はそれを咎めて四人を遠隔の地へ流した。またその地の僧侶七十餘人の出世綸旨を返還させ、勅許の紫衣を剝ぎ取つて、平僧にしてしまつた。それは寛永六年六月のことであつた。翌月、その事が天皇の叡聞に達すると、非常に江戸政府の處置を憤られて、讓位の志を近侍のものに洩らされた。その際、關白近衛信尋は、責を負うて辭職した。

江戸政府は、天皇の逆鱗を緩和するため、家光の乳母春日局を上洛させた。宮中の恒例によると、春日局ぐらいの婦人は、たとひ、江戸大奥のうちに勢力があつても、宮中に入ることを

許されなかつた。が、局は三條西實條の猶子となつて參內したので、始めて天皇に拜謁することが出來た。久しい間の恒例が唯一人の春日局のために容赦なく破られたのを見て、公卿のうちには「希代の儀だ。」と嘲り笑つたものがあつた。それについても亦天皇は不快に思召されたので、その年十一月八日、俄かに退位して、女一宮に位を讓られた。かうして明正天皇の時代になつた。

その時分、秀忠は後水尾天皇を隱岐に流しまゐらせやうとしたが、それは家光が諫止した。が、傳奏中院大納言通村の硬直を斥けて、日野大納言資房をその後任としたことは、後水尾上皇の意に協はなかつた。上皇は、機を見て、江戶政府を打倒さうと計られた。その後、寛永十年冬、家光が平生から憎んで居た駿河大納言忠長に自殺を命じた時、世上の樣子が穩かでなかつた。上皇はこの隙に附け入つて兵を擧げようとせられた。ところが、家光はその事を洩れ聞いて機先を制した。寛永十一年六月、家光は三十萬七千の將士を從へて上洛した。その時、天皇、上皇に謁して、上皇の御料に七千石を加へて二萬石を進らすべき旨を上奏した。また上洛の祝として銀十二萬枚を京の市民に頒つた。それらのことで、上皇も次第に心を柔げられた。

家光は、諸大名を制するために、大名の妻子を江戶に置かせ參覲交代の期限を定めた。それから賓客饗應の制、諸陪藩士の制、轉封の制などをも定めた。家光が大名に對する有樣は峻嚴で少しも容赦しなかつた。平生、彼れの輔導に當つた靑山伯耆守忠俊が硬直で時々彼れを凌ぐ風があるのを怒つて、靑山の所領岩槻城を沒收し、上總大多喜二萬石を與へることにした。次ぎに豪族のうちに數へられて居た加藤忠廣（淸正の子）が、德川家と姻戚の關係があつたに關らず、また確かな罪跡もなかつたのに、突然所領熊本を沒收して出羽庄內へ忠廣を配流した。それらのことは、ひどく諸大名を脅かした。かうして家光は、江戶政府の基を定めたが、それがため人知れず、家光に向つて不滿を感じたものが少くなかつた。

それに大奧の樣子を見ると、家光の儉約令を裏切るやうな華美の風が次第に加はつて居た。もうこの頃の大奧は一つの大規模な美人國であつた。家光の沒後、大奧の女三千余人を解雇したといふ丈けでも、昔から宮女三千といつたそれを越えた。正保二年頃から家光は、兎角病氣勝ちであつた。眩暈の氣味が始終家光を苦めた。それで鬱散のため、家光はお萬の方の勸めによつて、奧の舞台で、能狂言を催ほしたり、勘三郎座のものを呼びよせて、猿若放下などを見たりした。その後、それらの諸藝を女中全體に見物させたのが、華奢、風流の先驅を爲したの

である。また慶安四年二月には家光の病中、勘三郎座のものを西丸の芝生に召寄せて、歌舞伎を演ぜしめた。もう春日局時代の質實な風は、大方跡方もなくなつた。家光自身が華美の風に馴れて、侍女お國、お玉（本庄氏）などの艶色に魅せられ、次第に政務を怠るやうになつた。晩年の家光はかうして花のやうな女人國に歡樂の日を送ることが多かつた。

その家光が歿すると、江戸政府は、一つの中心を失つたやうになつて、急に狼狽の氣味を見せた。この有様を看て取つて、頻りに手を拍つて喜んだのは、江戸の浪人であつた。彼等は、長雨の後に始めて晴れた空に出た、太陽を仰ぎ見たように元氣附いた。

「俺たちの腕を伸ばすべき時が來た。」

あるものはかう思つた。

「事を擧げるのは今だ。」

あるものは、天下を睥睨して手に唾して起ちあがらうとした。

二　饑えに惱む浪人の群

世に饑えに苦んで自棄しようとする人間ほど恐しいものはない。武士から出た浪人の多數は、始終饑えに惱まされ勝ちであつた。彼等は、食祿が得たい、地位が得たい、出世したいと頻りに望んだが、その志は、世が靜まり戰爭がなくなるにつれて、容易く達し難くなつた。平和の世界に彼等の多くは、その用がなかつた。

武士の浪人が一番殖へたのは關ヶ原戰後であつた。その時二分、石田三成に身方して、敗北者の地位に落ちた大名八十家ばかりが廢絕の憂き目を見た。それにつれて、扶持を離れて浪人となつたものが何十萬といふほどあつた。それらの浪人は、蜂が蜜を求めるやうに先を爭うて、諸大名を訪うて職を求めた。その時分、加藤清正の邸へ三人の浪士が一時に押寄せた。そのうちの一人、仙石角左衛門は「拙者の望むところは立身、出世の一途で御座います。」と云つた。ところが今一人のものは、半白の頭を撫でゝ「拙者は以前、他家に抱られて居た時分、根かぎり立働きましたが、もうこの年になりますと、唯少々の御扶持を戴いて氣安う晩年を送りたう御座います。」と云つた。あとの一人は一番若かつた。その男は唯元氣よく採用を望んだ。

三人三様の有様を篤と見た庄林隼人は、委細のことを清正に告げた。清正はそれを聞いて暫く考へた後、かう云つた。

「仙石の申すところは、いかにも武士の本意を現はして居るから召抱えて宜からう。それから老人の方は、自分もその

人物を知つて居るが、云ふことが聊か心細い。人はたとひ老境に入つても、何か一つの望を持つて居てほしいものだ。唯晩年を安易に送らうといふばかりで、當家を死場所のやうに相心得て居るのはいかにもたよりない。が、若い者の見せしめに抱へてやらう。今一人の若い者は役に立つらしいが、お前の口振によると、當家の若いものがすべて役に立たぬやうにも聞える。それでは若いものに恨まれるぢやらう。」

隼人は淸正の說に從うて、浪人を召抱えた。が、かういふ具合に老いた浪人などが、都合よく採用せらるゝことはむづかしかつた。相當に役立つ若いものも、人員過剰のために空しく志を得ぬ場合が多かつた。それに大名のうちには、他家の武士を抱へるについて、いくらか江戸政府に憚るところがあつたり、疑ひの心を持つたりしたのが往々あつた。浪人のうちには、また今まで敵と見た大名に仕へることを潔く思はぬものがあつた。さうした事情が、浪人の捌け口をふさいだ。

が、饑えの恐しさが、容赦なく彼等を脅かすと、仕方なしに關東方の大名に仕へるものも出來た。けれども多少意氣を恃むものは田園に隱れて、農耕の人となつたり、國境を越えて商人となつたりした。中には、毎日賃り喰ひをして生活を支え、それが行詰ると、一家離散して、更に宜い時節のくるのを待つものがあつた。關ヶ原の戰後、土佐の長曾我部の家臣は、主家廢絕の苦境に逢つて、皆農耕の人となつた。彼等は他家に仕へるのを恥ぢたからである。そこから郷士といふ一つの階級が生れた。その他、彼等のうちには、軍學者、祠官、寺小屋の師匠、軍談師になつたのもあつた。そして鬱勃とした銳氣を抱いたものは、日本を去つて南洋に、シャムに思ふ儘に新しい運命を切り開いた。

が、浪人の數は唯殖へてゆくばかりで、そこに緩和の道が見出されなかつた。江戸政府は、諸大名中、嗣子のないものゝ家を撥絕してしまふ規則を勵行したので、松平忠知、堀尾忠晴、小早川秀秋、武田信吉、田中忠政、松平忠吉、平岩親吉らの家は、その規則によつて廢絕となつた。それにつれて多くの浪人が出來た。寛永十三年には、羽州山形で二十四萬石を領した鳥居左京亮忠恒に嗣子がないので、その祖父元忠以來、德川家に大功があつたに關らず、殆ど廢絕同樣のものとした。その時、政府は忠恒の弟忠春に僅か三萬石を與へて、信州高遠の城主に取り立てた。そのため鳥居の家臣も多く浪々の身となつた。勿論、家光は養子制度の上に改革を加へて、いくらか大名らの便宜を計つたが、それでも、當主が夭折した爲めに、非常に減祿

されたり、改易されたりした大名が十數家に上つた。また妻子の手續を怠つて家名斷絕したのもあつた。

さうした間にあつて一番困つたのは、身に何一つ藝能のない浪人であつた。この群は、饑死するか、自殺するか、乞食に成りさがるよりほかに行くべき道が絕えて居た。それについて、生の悲痛をさながらに象徵する挿話が、少くなかつた。ある時、神田橋の番所へ一人の浪人が力ない步調で來て「拙者は空腹のため、もう一步も步けませぬので、甚だ申しかねますが御助け願ひたう御座います。若しそれが協ひませぬなら、勝手ながら御門內を汚させて戴きませう。」と弱り切つたやうな聲で云つた。ところが、番所に居合せた伊奈傳兵衛、大久保新藏の二人は、浪人の腑甲斐なさに不滿を抱いて大聲で「恰度宜いところだ。今新刀の切れ味を試みようとして居るのだ。」と云つた。それを聞くと、浪人は急に駈け出して、その姿を晦ませた。

或日、井伊掃部頭（直澄）の邸へ屈强な浪人がひとり來た。彼れは、深く思ひ迫つた樣子で「拙者は久しく浪々の生を續けて來ましたが、最早行詰つて、どうにもなりませぬ。勝手ながら玆で切腹いたしますから、武士の情に何卒介錯の士を御賴み申したう御座います。」と重苦しい調子で云つた。井伊の家臣がそれを主人に取次ぐと「近頃、浪人が種々の虛僞を働いたり、强請がましい振舞をしたりするものが少くない。大方、その浪人も當家に抱へられる積りか、合力を求めるために來たのであらう。それなら、思ひきつて望み通り、切腹させるが宜い。」と云つた。そして彼の浪士に飲食を與へた後、切腹させると、浪士は恬と覺悟の體で男らしく自刄した。介錯を命ぜられたものが、その樣子を主人に告げると、井伊は後悔して「嗚呼立派な武士を亡くしたか。惜しかつた。」と歎いた。

さうした折に浪人に取つて生活のたよりとなつたのは、大阪冬夏の兩陣であつた。大阪方は、關東の勢力に對抗するために四方から浪人を集めた。そのうちに、何十萬石の大名となる約束で、招きに應じたものが居た。長曾我部盛親、眞田幸村、後藤基次、明石掃部などは、特に器量の優れた人々であつた。その時分、關東方では、京都所司代板倉勝重の智謀によつて、甲州の浪人小畑勘兵衛（景憲）を召し出し、表面大阪方にならせて、密偵の役を勤めさせた。また大阪方が二條城を燒き拂ふつもりで放つた六十餘人の間諜は、事を擧げる前にいづれも山伏姿の儘、關東方に捕へられたが、それは皆生命知らずの浪人であつたらしい。

その後、寬永四年に勃發した天草の亂にも、矢張浪人が多く加はつて居た。それは小西行長、大野治房らの家臣から浪人に

落ちたものであつた。その總大將に推された益田四郎時貞は、元、小西に仕へて益田甚兵衛の子であつた。時貞を助けて、德川の軍勢を悩ました森宗意、大矢野松右衛門、大江源右衛門、千束善左衛門、町山善右衛門らも以前は小西の部下であつた。つまり、キリスト教徒の熱信と浪人の反抗力とが一つに結び付いて、天草の亂を醸し出したのである　それらの事から、江戸政府はキリスト教徒と浪人とを殊に憎惡した。

が、浪人の前には、どうしても、取り除かれぬ饑えの悲みがあつた。江戸政府は、浪人を憎み、抑へ付けるだけで、彼等を饑えから救はうとしなかつた。それに政府の人々は、浪人の心理がどういふ風に働いてゆくものか、彼等を抑へ付けると、どんな恐しい結果が生れてくるかを充分理解して居なかつた。浪人の群は、饑えに迫られると、前後を考へないで、社會の秩序を破つたり、平地に大きな波を起すことを何とも思つて居なかつた。それに當時の浪人は、未だ戰爭氣分を多分に持つて居た一體、その時分の江戸や京都には殺伐な血に饑えた空氣が平和な外裝の下に流れて居た。慶長年間には、京都に皮袴組、荊組などの放埒者が巷を橫行した。江戸では、天狗鄉右衛門、大風嵐之助、大鳥いつ兵衛、風吹けば散り衛門、大橋すり之助などの殺人團が三百余名の徒黨を作つて居た。慶長十七年の頃、大番組頭芝山權左衛門（正次）が殺人團の一人を捕へて成敗すると、芝山の家に居た下僕は「俺たちの同類を殺したからは、主人でも容赦出來ねえ。」と怒つて、芝山を斬殺した。政府はひどく驚いて、芝山の下僕を捕へ、種々嚴探すると、江戸の三百余名のほかに全國に二千七百人の仲間がちらばつて居たことが分明した。政府は非常活動を起して、天狗鄉右衛門以下の首領株を捕へて死刑に處した。そして九十余名の殺人團員をも捕へて牢獄に投げ込んだ。

それでも殺伐の氣は尙ほ消散しなかつた。寛永年間には　辻斬りが流行した。それは別に財物を盜み取るためではなくて、髀肉の嘆を外に洩らすためであつた。寛永六年の春には、夜の暗にまぎれて、多數の通行人を街上で斬殺したものがあつた。またその年六月、江戸城廓内の北丸の門前でも、旺んに辻斬りをする曲者が現はれて、市民を脅かした。政府は驚いて、諸所に辻番所を設け、特に嚴令を發したので、辻斬りの惡風は、次第にうすらいでいつた。

が、時勢と逆行して、始終不平の念を抱き、饑えのために苦められ、體面維持のために心をすりへらした浪人らは、矢張殺伐の氣を胸の底に湛えて居た。そして神經が鋭くなつて、物事に激し易かつた。ともすると、自棄の心持や破壞氣分に囚は

れた。江戸政府の存在は、彼等に苦痛、不自由の感を與へたに過ぎなかつた。殊に家光時代の峻嚴な法令や遣り口は、彼等に大きい不滿を抱かせた。彼等の過半は江戸政府を咀つた。咀ひながらも、政府の强壓力に抑へ付けられて、いらいらして居たが、その咀ひと不滿とは、いつか或形の上に爆發しないでやまぬ勢となつて居た。果して家光の死後、間もなく、由井正雪の亂が起つた。續いて別木庄左衞門らの老中暗殺事件が起つた。殊に由井の亂はその當時最も大きく、世の耳目を聳たしめた。

三戀の三角關係にからむ秘密

由井正雪とは、一體どんな人物か。『由井大全記』『慶安太平記』『由井評判記』などに現はれた正雪は實よりも虛が多く、誇張、潤色がひどく加はつて居る。善惡共にその眞相がわからぬ。正雪が一種の革命家で、大膽な野心を抱いたものであることは誰れにもわかる。また正雪の謀叛が、多數の不平浪人に同感しいて激發したことも略ぼ察知し得る。が、その出處、生活や紀伊賴宣との關係などは、多く疑問のうちに置かれて居る。それにいろいろの虛說が混入して、愈よ正雪の眞相をわからなくして居る。中には、正雪が幻術をよくしたとか、楠不傳の甥和田主水をだまし討ちにした陰險な人物だと傳へたものがある。かうなると、正雪は矢張大きな謎の人である。

先づ正雪の出處を見ると、駿州油井宿のものとも、駿州有度郡足洗村のものとも傳へて居る。また或ものは同國宮ヶ崎の生れだと云うて居る。が、駿州出身であることは誰れも一致して居るところである。私は直接、江戸政府の文書によつて、その出生地を宮ヶ崎と推定する。それは幕吏に捕へられた正雪の妻の自白によるのである。

次ぎに正雪が紺屋の子であると云ふことも首肯し難い。『老士語錄』などにも、紺屋の子だとして居るが、寧ろ農家の子と見た方が眞にちかい。正雪の父は孫右衞門と云つて、その妻との間に四人の男子を設けた。その長男は半左衞門、次ぎが正雪、その次ぎが三左衞門、末子を又四郞と云つた。そのうちで、正雪がひとり傑出して居たのである。

正雪が生れた時（慶長九年十月）から、十七歲で江戸へ出るまでの間は、江戸草創の時代で、關東方と大阪方との抗爭が續いて居た。そして結局、家康の天下が新たにその基礎を据えた頃に當つて居た。それらの形勢を見て、正雪は少年の血を沸き立たせたにちがひなかつた。元來、正雪は早くから農業を嫌つたので、その父は正雪を僧とするつもりで、駿府の臨濟寺に托した。そこで正雪は算筆、讀書などを覺え込んだ。

その時分、臨濟寺に高松半兵衛といふ浪人が寄宿して居た。半兵衛は以前、豐臣家の臣であつた。主家滅亡後、駿府へ來て淋しい日を送つて居た。正雪はこの半兵衛に師事して、その武勇談を聞いた。半兵衛は正雪の前途に望みを置いて、暇があるとその半生の閲歴を壯快な調子で話した。さうした影響は、正雪を刺戟して、今度は僧となることを斷念させた。正雪は、半兵衛のやうに戰場で花々しく立ち働く勇士の姿を胸に描いて、「自分もその方へゆきたい。」と深く思ひ込んだ。正雪は日毎に『太閤記』などを愛讀した。

ある日、半兵衛の武勇談がまた始つた。それが一段終ると、正雪は何か考へ込んで居る樣子であつた。

「お前は何を考へ居るのだ。」

と半兵衛が云つた。

「一寸叔父さんに問うて見たい事があるのです。」

「何だ？」

「太閤さんの先祖は誰れでせう。」

「太閤さんの父君か、あの方は筑阿彌といふ尾張のお百姓さんだつた。昔から王侯將相豈種あらんやといふが全くだ。太閤さんは百姓の子から出て、あれだけの高い地位に上られたのぢや。」

「さうすると、お叔父さん、太閤さんが匹夫の身で關白になつたとしますと、私らも勉強次第で、乾度將軍になれようと思ひます。」

正雪はかう云つて、その涼しい眼を輝かした。それは正雪の十五歳頃のとであつた。その後、關東に凶作が續いて、僧侶らが衣食に困つて四散すると、正雪も亦寺を出て、一旦その故鄕へ歸つた。が、正雪の大きな功名心はいつまでも、彼れを狹苦しい田舍に辛抱させて置かなかつた。正雪は、十七歳の時、決然として江戸へ出た。

正雪が江戸へ出てから、軍學者の名を馳せるまで、どんな生活をしたか、はつきりわからぬ。一說には、最初、春日局の用達をして居た鶴屋彌次右衛門といふ菓子屋に雇はれ、彌次右衛門の歿後、二十一歳で、その家の養子となつたと云つて居る。もう一つの說によると、正雪は江戸に出ると直ぐに神田多町に假寓を設けて手跡、謠曲などの指南をしたどある。『老士語錄』には、最初、芝區内に住んだと云ひ、これも亦一定しない。そして正雪が楠流の軍學に心を傾けたのは、芝に居た頃、火事があつて、その際不圖、一個の掛硯を拾つたが、その中から少々の金子と楠流の軍書が出たのが最初の原因だと傳へて居る。これはどうも信を置き難い。

私の考へでは、正雪が菓子屋の小倅や養子になつたと思へない。元來、正雪は士人となるつもりで江戸へ出たのであるから商家に身を寄せることは、正雪の好まぬところであつた。それに正雪の謀叛が露顯してから、その故郷の父母、兄弟が罰せられたことが出て居るが、鶴屋一家が捕へられたことも罰せられたことも、まるで見えて居らぬ。また正雪が、途中、養家から離縁した記事もない。假りに離縁したとしても、一應、正雪の連累者として取調べを受けねばならぬ筈だが、さうした事も記されて居らぬ。一世の耳目を身にあつめた謀叛人正雪が元、菓子屋の小倅であり、養子であつたといふことは、いかにも興味深いが、事實として信じ難い。

正雪は臨濟寺の倅や高松半兵衛などから相當の學習を受けたから、十七歳の頃には、もう軍書の大體に通じ、手蹟、文筆にも長けて居たらしい。天性鋭敏な正雪であるから、この位のことはあらう。正雪は、それらの藝能で生活することにして、神田多町に小さな家を借りたものと見える。最初、正雪は寺小屋の師匠同樣幼少のものに習字、讀書などを教へた。そのうち、正雪の能書であることが附近に知れわたつたので、大人も正雪の許にくるやうになり、いくらか生活が樂になつた。それらの暇に正雪は軍書研究に心を傾けた。やがて軍學者楠不傳の許に入門してその教へを請ふた。正雪の江戸生活は、先づさうした順序で續けられた。

正雪と楠不傳との關係も亦明白でないところがある。第一に不傳の人物さへはつきりしてない。唯不傳が楠正成の後裔と自稱して、兵學を講じ、一部の大名らに多少尊重せられたといふことが、おぼろ氣にわかつて居るだけである。正雪が不傳の門に入つた頃、不傳は相應の老人であつた。もう六十歳に近かつたやうである。そして正雪はその時分、三十歳になるかならぬかの血氣盛りであつた。

正雪と不傳との關係については、正雪に取つて極めて不利な傳說が殘されて居る。それは稗史者流のいたづらからであらうその說によると、不傳に妙齡の美しい娘が一人あつた。この娘を中心に戀の渦卷が起つた。不傳は、その甥和田主水を娘の婿に迎へやうと思つた。そのことは、主水も承知して居た。主水は不傳の娘に深い愛を感じて居たのである。

ところが玆に不傳の弟子に鵜野某といふ、性質のよくない男が居て、主水と娘との仲を割かうとした。鵜野は不傳の娘の美貌に魂を打ちこむばかり懸想した。そして或時、誰れも居ない折を見て、自分の切な思ひをそつと娘に打開け、「どうぞ拙者の愛を受け入れて、主水殿を思ひ切つて下さい。」と迫つた。が、

娘は鵜野を嫉つて程よくその誘ひをはね付けた。それでも鵜野は尚ほ執念深く娘に附き纏ふた。正雪はそれを知つて、自分もこの戀の渦卷の中へ飛び込んだ。

正雪は、かねてから不傳の後繼者になつて早くその名を世に知られたいと一心に思つて居た。が、不傳が生きて居るうちは後繼者の地位に座ることが出來ないので、正雪は不傳が早くこの世から去るようにそつと祈つて居た。ところが、不傳の娘のことで、主水と鵜野とが戀の競爭者となつたのを見て、その間に附け入つて、不傳を亡きものにしようと考へた。それで正雪は或日、鵜野に逢ふと

「貴殿は危險が目の前に迫つたことを一向御存知ないやうですね。」

と云つた。

「さあそれは一體どんなとですか。拙者はまるで知りまん。」

と答へた。

「先生は貴殿がお嬢さんにいろいろのことを云はれたのを知つて、非常に立腹して居られます。そして貴殿を手討ちにして主水殿が貴殿に對して持つて居る不快の思ひを一掃しようとして居られるのです。實に危機一髮です。」

と正雪が云つた。鵜野の顏は見るうちに靑くなつた。

「さあ困つた。」

と鵜野は嘆息した。その樣子を見て、

「茲に一擧兩得の策があるのだが、貴殿に實行する氣がありますか。主水といふ邪魔物を追ひのけて、貴殿が容易くお嬢さんを手に取る方法なのです。」

「それは有難い。どうぞ敎へて下さい。必ず實行します。」

と鵜野が乘り氣になつたので、正雪は鵜野の耳に口を付けてそつと何事かを囁いた。

「しつかり御やりなさい。」

と終りに正雪は鵜野を勵ました。

それから間もなく、鵜野が主水に逢ふと、

「貴殿は未だ御存知ないか知らぬが、恐しい戀の競爭者が貴殿の前に出て來たのです。その男がお嬢さんを貴殿の手から奪はうとして居ます。」

と云つた。主水は驚きの眼を睜つた。

「それは眞實のことですか。」

「どうして嘘が云へるものですか。」

主水は激して、「それは一體誰れです?」と問ふた。

「先生に御氣入りの正雪です。」

「正雪?」

「さうです。」

鵜野はいかにも眞實らしく、不傳が正雪を愛するところから主水を疎んじて、正雪を娘の婿としようとして居る事、主水がそれについて不傳を怨み、どんな報復をするかも知れぬのを慮つて、近く主水を討ちはたさうとして居る事などを誇張して話した。正直一圖な主水は、迂濶にそれを信じた。そして自分から進んで、不傳を殺さうと考へて、その折を待ちかねて居た。

ある夜、不傳が駕籠に乘つて、正雪を後に從へて歸つてくると、主水が急に暗中から飛び出して、駕籠の中の不傳を刺殺した。不傳があつと叫んで、血が颯と外に迸り出たのを見ると、主水は素早く逃げ去らうとした。正雪は、それと知つて、主水の後を追ひ、一刀の下に主水を斬殺した。それは寛永九年十月のことであつた。それから間もなく、正雪は師の仇を討ち取つたといふので、不傳の家を繼いだ。

右の傳説は、いかにも巧みに出來て居るが、正雪をそれほど險竦な人物だとは思へない。それは正雪が謀叛人であつたといふところから思ひ付いたのであらうが、却てそれがために正雪の人物を小さくしてしまつて居る。それに不傳には、富もなかつた、高祿もなかつた。唯その弟子と系譜などがあつた丈だ。それらに氣を引かれて、陰險な小策を用ふるのは、氣宇のひろい正雪のしさうな仕事と思へない。若し正雪がその自叙傳を書いたとしたら「稗史者流の虚説には困る。天下の大局に眼を付けて居る自分を一個の鼠賊のやうに見做すのは作者の眼界が餘りに小さいからだ。」といふであらう。そしてもう一つの說にあるやうに左の如く述べたにちがひない。

「私（正雪）が不傳先生に逢つて、始めてその教へを請ふた時、先生には、夫人もお孃さんもなかつた。唯ひとり、淋しい生活をして居られた。先生は名利に淡く、世の中をいくらか白眼で見て居られた。私は先生の兵學の講義を聽く傍ら、毎日薪炊の勞を執つて先生に仕へた。かうして月日が重るにつけて、先生は私を實子のやうに愛して下さつた私は先生を本當の父のやうに敬慕した。いつか私と先生とは父子の約を結んで、その事を附近の人たちにも披露した先生が病に罹られると、私は懸命に介抱したが、死の運命は到頭、先生を捕へた。私は重い悲みのうちに、葬送を濟ませ、佛事追薦の營みをもした。そして私は先生のあとを敬重し、先生の遺業を傳へるつもりで、楠正雪と改名した私と先生との關係は單にそれだけに留つて居た。」

四　正雪と熊澤蕃山

正雪が牛込榎町に住むやうになつたのは、不傳の歿後であらうと思はれる。その兵學者生活を始めた徑路は、どういふ具合か、はつきりわからぬが、正雪の講義の仕方に獨創味があつた上に、實戰の場合に活用し得るよう、縱横に辯舌を揮つた樣子が想像せられる。今それを正雪の自叙傳の形で書く。

「私（正雪）は少年時代から、高松半兵衞殿などから軍學の趣味を强く吹込まれた。自分も好きなところから、『太閤記』『太平記』などを幾度も繰返して讀んだ。私の少年の美しい功名に燃ゆる夢は、それらの書によつて、はぐくまれたと云つて宜い。それから私は『平家物語』その他の史書を讀んだ。學力が進むにつれて、孫吳の兵法をも讀んだ『兵道集』『軍要集』なども見た。『信玄全集』や小幡勘兵衞、北條安房守らの說にも心を傾けた。それから不傳先生の指導を受けもした。さうした私の修養は、自然、私獨得の兵學を發明させることになつた。私は兵學を唯机上の空論に留めて置きたくないと考へた。私は兵學の原理と實際の場合とをぴたりと一致させたいと考へた。それで私はその原理を『太閤記』や『太平記』に一々當てはめて、尚ほ地圖の類でそれを補ひ、地勢、兵員、攻守の上について眼に見えるやう、正確に說くことに力めた。私が世の人たちに認められ、推重せられたのは、茲のことだ。この世在來の兵學、軍學にくらべて、一歩を進めたのだと私は信じて居る。」

さういふことから、正雪は次第に世に乘り出した。正雪の名は江戸に響き、それが地方にも及んだ。その出入の際は、多くの徒士を從へて、その威風は大名にも劣らなかつた。諸侯のうちには、正雪を賓客として迎へたものが少くなかつた。殊に深く正雪に心を傾けたのは、池田新太郎少將（光政）紀伊大納言賴宣らであつた。それについて左の傳說がある。

その時分、諸侯のうちには、正雪を召抱へようと思つたものが往々あつた。中にも池田は眞先に正雪を聘しようと執心して、それを熊澤了介（蕃山）に相談した。了介もそれは宜いこと思つた。

「正雪を召抱へようとの仰せは、至極結構で御座います。が、一應どんな人物か試めした上、採用された方が宜からうと存じます。」

と了介が云つたので、池田もそれに從ふた。それから了介は正雪を牛込榎町の邸に訪ふた。取次のものが正雪に「池田殿の御使熊澤了介殿が見えました。」と知らせると、正雪はかねて了介の名を聞いて居るので、直ぐに一室に請じた。最初の挨拶か

濟むと、了介は軍學の話しを始めた。

「軍學の門外漢が斯道の大家の前で、彼是申すのは、潜上の沙汰で御座いますが、兵は活物である以上、軍學の原理も說き方も時の流れにつれて變つてゆくものと存じます、飽く迄自由な心持で、固定しないとが必要でありませう。」

「仰せ御最もに存じます。兵器の進歩は、陣形、隊伍の上にも大きな變化を促がしたので御座いますから、軍學の原理も、孫吳に甘んじて居るわけにはまゐりませぬ。新しい時代には、新しい軍學を要し、新しい軍學には、新しい說明が必要となります。私は適切に生きて動く理數の上に起つて、しつかり現實を摑んで見せたいと思ひます。」

正雪は、かう答へて、その平生の所信や研究などを熱心に了介に話した。了介も流石に正雪の卓識には心を動かした。軍學の話が途切れるのを待つて、了介は改めて來意を述べ、

「卒爾な話しですが、貴殿に於て御異存がなければ、私の主人に御仕へ下さるまいか。」と問ふた。正雪は池田が名君であることを豫ねて聞いて居るので、大分心を動かした樣子であつた。

「光政公の御賢名は夙に相承いたして居りますから、不肖な私でよろしければ、進んで御家臣のうちに加へて戴きたいと存ずるほどで御座います。ところで祿高はいか程賜るのでせうか。」

正雪は露骨に瀬踏みした。

「外ならぬ貴殿のことゆゑ、五千石との仰せで御座います。」

了介は、非常な優遇のつもりでかう答へた。正雪はそれを聞いて、意外だといふやうな顏付をした。「五千石ぐらいでは、私の生活を維持してゆけない。せめて一萬石以上でなくては。」と正雪は思つた。了介は、その樣子を見て、これも亦意外だといふ表情をした。「五千石の大祿を與へようと云ふのに、尙ほ不足らしい風を見せて居るやうでは、余程の野心家である。成程、打見たところ、小柄で肉づきも普通だが、どうもあの鋭い眼付が物騷だ。」と了介は直感した。そして靜かに正雪の許を辭した。

了介は池田家へ歸ると當日の樣子を詳しく述べた後、

「正雪召抱へのことは御斷念なされた方がよろしう御座います。事によると、彼れは御家の妨げをいたすかも知れませぬ」

と云つた。諸書には、了介が正雪の樣子や人相に「叛逆のきざしがある。」と斷じたとして居るが、それは後人の附會であらう。が、了介は正雪を確かに危險人物と見たのである。一說には、

正雪と了介とか、紀伊賴宣の邸で逢ふと、正雪が了介のことを惡口して去つた後、了介は賴宣に正雪を近付けてはならぬと云つたとある。當時、正雪の生活が可なりに裕福らしく見えたについて、いろいろの噂が立つた。或ものは正雪が投機をした、御用商人を勸めたと云ふ說は、いかにも眞實らしく作られて居る。

正雪は、その邸内に數多の長屋を建てゝ、鐵、銃鎗などを作る職人を雇ひ込み、その門弟に製造法を習はせた。それらの手に出來た武器を正雪の新しい軍學の原理を應用して發明したものゝやうに吹聽して、懇意な大名や旗本に賣付け、數年の間に大きな富を築きあげた。正雪が居た榎町を武者小路と云つたのはそれがためだと云ふのである。が、當時軍器を製造したり、賣買したりすることは、政府の法禁に觸れ易いばかりでなく、その嫌疑を挑發する恐れがあつた。それは誰も周知のことであつたから、大望を抱く正雪が、さうした危險に觸れるやうなことをする道理がなかつた。けれども諸侯の附け屆けや門下富裕のものゝ寄附や好意ある奉納金などによつて、正雪の生活を維持してゆくには差支えがなかつたらしい。正雪が富んで居たと思ふのは誤りである。

が、正雪は表面、豪奢な生活をして、多くの浪人を養つた。きた浪人の就職口を探がして、親切に彼等のため斡旋した。正雪がさうした人々を包容してゆく度量は可なりに大きかつた。それは正雪の野心が大きかつた所爲でもあらう。

靜平の世は、江戶政府によつて、保障せられて居た大名、旗本らにも不如意のことを多く生じた。殊に旗本の苦みは可なりに深かつた。物價の昂騰、歡樂の誘惑は、彼等を惱ました。そして三百石の祿を貰ふ家では、侍二人、鎗持一人、具足持一人、挾箱一人、馬取二人、草履取一人、小荷駄二人、法定軍役を出さねばならなかつた。そのほかに妻子、侍女數人をも養ふ必要があつた。かうした有樣で、武士は體面維持のためにも、ひどく困つた。が、それに伴ふ補充費は少しも供給されなかつた。生活の重荷に抑へ付けられた武士のうちには、自分の家を商人に貸して罰せられたものがあつた。武士の容名を捨てゝ金がほしいところから、養子の名義で、武士の株を百姓、町人に賣りわたすものが多くなつた。つまり、武士は貧乏に苦んだのである。

それで家光は旗本に向つて「聞くところによると旗下の士が漸く貧しくなつたさうぢや。それで祿を加へ、俸を增し、その上、賑貸の方法をも講じた。が、矢張淫侈に流れて困つて居るものがある。それは將長たるものが訓督の嚴を欠くためであらう。今後若し命令に從はぬものがあつたら宜しく速かに上啓す

べきである。」と訓諭した。

武士でさへこの通りであるから、浪人の生活は尙更むづかしかつた。饑えの脅威は、始終彼等の眼前にあつた。それに江戸政府の眼は特に浪人の上に鋭く光つて、江戸市中に親戚、緣者を持たぬ浪人は江戸から追ひ拂ふことにした。さうした便宜のないものは、日本橋の居所を追はれて本郷へくると、本郷から追ひ出される。更に小石川へくると亦そこからも追ひ立てられると云ふ具合で、身の置きどころにさへ困つたものが多かつた。正雪は出來るだけ、それらの人々を救ひあげて保護を加へた。正雪の弟子、或はその家のものと云ふと、役人の檢束の手から免れることも出來た。正雪が浪人の間に隆々たる聲望を持つたのは、そのためであつた。それに正雪が德川三家の一人、紀伊大納言賴宣の恩顧を受けて居るといふことが、正雪の上に重味を加へた。そして正雪がその義父から受けた菊水の旗や短刀、系譜の類もその身邊の裝飾となつたにちがひなかつた。

が、正雪の眞の强味は、その實力であつた。乾分のために一肌ぬぐことを惜まぬ親分氣質が正雪の眞價であつた。正雪の外貌には、沈毅な冷靜なところがあつたが、その皮下には義血、俠血が流れて居た。丸橋忠彌は、寶藏院流の鎗の名人で、長曾我部盛親の遺子とも幕士加藤市郞右衞門の弟とも云はれて居たが、その人物は粗暴で物事に締りがなかつた。忠彌が諸大名の間にその技倆を認められたのは、正雪の推擧によるからであつた。ひとり、忠彌ばかりでなく、正雪のために地位を得た浪人が少くなかつた。正雪は喜んで彼等と苦樂を共にした。場合によつては、彼等のために犧牲となることを避けまいとする風が正雪にあつた。

正雪には、また當時の政治に對する大きな不平、不滿が絕えずあつた。家光歿後、家綱を輔佐した人々には、阿部忠秋、松平信綱、井伊直孝、酒井忠勝らの老臣、名臣が居た。が、阿部ひとりを除くと、まるで浪人に對して何の理解もなかつた。いつも高壓政策を以て、浪人を苦めるばかりであつた。それに家光時代の窮屈な法令その他を改廢して、政治の面目を全く一新すべき必要があるのに、政府の老臣が保守、因循に流れて、舊生命にしがみ付いて居たことが正雪に不快な感じを與へた。すべてが窮屈だ、不自由だ、不活潑だ、停滯だらけだ。と正雪は見た。局面を打破して、諸政を一新すると共に、饑えに苦む多くの浪人を救ひあげねばならぬ。あらゆる不自然な束縛を取り除かねばならぬ。それには、革命が必要だ。それには鐵血の洗禮を經るよりほかがないと正雪は痛感した。正雪が一種の革命家を以て任じたのは、それがためであつた。

五　紀伊大納言頼宣

正雪の傳記中、その一つの異彩となつて居るのは、正雪と紀伊大納言頼宣との關係である。頼宣はずばぬけた英主で、その言行は悉く非凡であつた。どの點から見ても、頼宣は一個の英雄であつた。頼宣が、正雪の謀叛に關係しなかつたといふことは、明白になつて居るが、平生、正雪とどんな交渉を持つたかといふことになると、わかつて居るやうで、わからぬところがある。その一部は謎のうちに隱れて居る。

頼宣は平生、武勇、材幹ある浪人を召抱へることが好きであつた。江戸政府が嫌つた大阪浪人や加藤福島などの浪人を抱へて相當の高祿を與へた。ある時、頼宣が村上彦右衛門といふ屈強の浪人を採用して、いきなり旗奉行の重任を授けると、是非の評が此處彼處に高くなつた。江戸でも城内でいろいろの噂をした。その際、久野三郎右衛門が一座の人々を見渡して「紀伊殿が譜代古參の人々を差置いて、新參の村上に總旗の大任を授けられたのは遠大な深慮に出たものと拜察されます。それは生活に行詰つて居る天下の浪人を公の一手に引受けようとなさる手立でありませう。紀州では、新古の別なく、能士ならば、誰れにも大役を申付けられることになつて居ります。それは紀伊殿こそ眞に頼み甲斐ある主君だと浪人たちに思はせる計略でせう。流石に權現様（家康）の御愛子だけに油斷ならぬ英明の君で御座います。」と嘆賞した。

頼宣は、久しく家康の薫陶、感化を受けたので、第一に武藝に精を入れ、次ぎに和歌、茶道、音樂、能、亂舞などの諸藝を嗜んだ。平生、近習の人たちに向つて「武士は人の司であるから、物に偏してはならぬ。かたよるといふことは愚人の業ぢや。」と云つた。そして頼宣の心のあるところを示すために「武士の櫻狩りして歸るには、やさしく見ゆる花ゑびらかな」の歌を示し、「この心がけが肝要ぢや。」と敎へた。

頼宣には、人物鑑識の明があつた。ある時、[illegible]川十休が頼宣の前に出て「遠山某はどんな役を仰付けられても立派にやつてのける器量人で御座います。」と云つた。ところが頼宣は一向、取合はなかつた。廣川が倚ほ根氣よく、遠山のことを褒めると、頼宣は始めて口を開いて「わが前へ出て物いふほどのものは、何れも遠山を褒めぬものはない。が、十休、こゝが肝心ぢや。世人に普く褒められたり、また遍く憎まれる人は一僻ある大惡人ぢや。釋迦、老子さへ、世上で或は褒められ、或は憎まれて居るではないか。遠山は輕蔑な大徒者で、忠義な男ではないぞ。實際或は謗られ、或は憎まれ、或は褒められるやうな人

物中に能者がある。これは大將たるものが心を附けねばならぬ要點ぢや。」と云つた。

また或時、家臣原田權之助が頼宣の前に伺候して、何か一廉の發明でもしたやうに「私が今朝ひとり、つくづく思ひまするに、御大將の御一言は、實に大切と存じます。その仔細は、たとひ、千金を私共に下さいましても、その金のために二つとない生命を捨てようと思ひませぬ。けれども御大將の唯一言によつて、忽ち生命を捨てる氣に相成ります。右によると、御大將の御一言は誠に大切で御座います。」と云つた。が、頼宣はそれに對して兎角の答へをしなかつた。默つて時服を原田に與へた。頼宣は、原田の云ふことが余りに常套であると思つたが、その志を愛したのである。

頼宣は武勇一邊の人でなくて、思慮にも富んで居た。正保三年秋、明の鄭芝龍が江戸政府に向つて助勢を求めた時、政府では、將軍を始め、井伊掃部頭及び尾張、紀伊、水戸の三卿らが閣議を開いた。その席上、三卿共に鄭芝龍を助けて援兵を繰出さうと勇み立つたと或史書に出て居るが、『南龍公譜略』によると、その際、頼宣は出兵に反對したのである。その理由は「萬一、援兵を差出して功果を擧げることが出來ないと、日本の恥になるばかりでなく、長く外國と仇を結ぶことになつて永世の害を貽すであらう。假りにわが援兵が勝つて土地を手に入れようとも、石田にひとしいから、何の利益にもならぬ。却て後日に弊を殘すであらう。」といふのであつた。

頼宣はこのやうに早くから思慮があつた。ある時、頼宣がその次男左京太夫頼純に有名な大阪肩衝の茶入や寧一山の軸物など多くの重寶を讓ると、渡邊若狹守が、それに反對の意見を言上した。渡邊は「かねて權現樣から進められました天下の名物は、當然御嫡子へ御讓りなさるであらうと世上では専ら申して居りますが、尤もの批判と存じます。御庶子に重寶の武具をお讓りなさるのは格別、茶の湯の道具までも御讓りなさいますのは、その意を得ないやうに愚考いたします。」と直言した。それを聞いて、頼宣は大きく笑つた。

「お前の諫言は、自分の氣に入つた、が、それには少し理由があるのぢや。左京は小身ぢやから、以來中納言殿へ金銀の合力や無心などを申出ようも知れぬ。その節は素手で頼むわけにもゆかぬから、自分が讓つてやつた名器を質草にして金を借り入れることにしたら、道具は自然、惣領の手に戻り、左京も亦助かる。そこを考へて、自分は不相應の道具を左京に與へたのぢや。父上東照公も、庶子だつた自分にそれらの道具を賜つたではないか。」

賴宣が虚飾しないで、率直に淡泊に答へたので、渡部も、成程と感服して、話頭を他に移した。賴宣がどんな人であるかは、略ぼ以上でわかるが、正雪とどんな風にして逢つたかといふことは、明かでない。その會見を叙した或記事は、余程劇的色彩を帶びて居る。それによると、賴宣は、或日、正雪の名聲を慕うて、召見した。その時、正雪は、凜々しく馬に跨つて、縱横に駈け廻つて、騎射の技を賴宣に見せた。その矢はすつかり的に中つて、一度も外れなかつた。賴宣はひどく正雪の妙技を褒めたので、正雪は面目を施した。後で賴宣が高祿を以て正雪を召抱へようと思つて、三浦長門守に相談した。三浦は「成程、正雪は兵法に精通して居て、その智、その勇、中々拔群で御座います。然し私があるところで聞きますると、正雪は森宗意についで幻術を修めたさうで御座います。さうした人物を採用して、諸士に軍學、武藝を教へさせますると、他日必ず大害を爲すであらうと存じます。それよりは、表面、正雪を御褒めになつて、そつと遠ざけられた方が宜しう御座いませう。」と答へた。賴宣は「成程、それも一理あることぢや。」と云つて、三浦の説を容れたといふのである。

いかにも、この一挿話は興味深いが、沈毅な正雪が、軍學をその本領としながら、賴宣と最初の對面に騎射を見せたといふとは、どういふものであらう。それは余り芝居がかつて居る。その上、正雪の能書は知られて居るが、武藝については余り聞かぬ。それから三浦が、正雪を「幻術を修めた人」と見たのも皮相過ぎよう。それらを考へ合せると、この挿話は虚説であらう。

私の見るところによると、賴宣と正雪とはある點で意氣投合したところがあつたらしい。賴宣は武藝に熱心であつた、靜平の世にも、武備を怠らなかつた。また好んで武勇談を聞いた。そして賴宣は、平凡、無爲に甘んじて居ることが出來ない人で、自分の思ふところは、ぐんぐん實行した。傳説によると、ある時、賴宣は紀州家の軍器不足を補ふため、新たに一千挺の鐵砲を冶工に作るべきことを命じた。この時、附家老安藤直次は政府の嫌疑を挑撥せんことを憂ひて、諫止に力めたが、聽入れなかつた。それで安藤は一策を案じて、冶工が一千挺の鐵砲を作つて納入すると、一應點檢した後、故らに不滿の色を見せて、「こんな粗製のものでは役に立たぬ。實はそれを將軍家へ上納することになつて居るのだから、もつと立派なものを作つてくれ。」と云つた。そして新たに一千挺の鐵砲製作を命じた。その後、それが出來上ると安藤は直ぐに江戸政府へ献納して、前の分を廢品として殘して置いた。かうして賴宣の意が始めて達せ

られた。それは正確な事實かどうか、わからぬが、賴宣が武備を怠らなかつた樣子は略ぼ察せられる。

今一つの傳說によると、賴宣が不眠症に罹つて、夜分退屈した時、その枕邊へ多年戰場を踏んで來た荒武者どもをあつめて、終夜交代にその武勇談をさせ、やつと聞き疲かれた頃ろとろと眠り始めた。かうした夜を賴宣は幾度も重ねて、武勇談に飽くことがなかつた。また賴宣が正雪の謀叛事件で政府から疑ひを受け、江戸邸に隱居の身となつた時分、ある日、能を催すことになつて、早朝から老臣らをあつめた。その時、賴宣は一同に向つて「自分は家督を中納言殿（光貞）に讓つて、このやうに隱居の身となつたから、今後はお前たちと茶を呑みながら心安く世を送りたいものぢや。」と云つた。時に布施三悅が膝を進めて「仰せの如く、御心安く世を送り給ふことは結構に存じます。が、私共老輩は一度戰場で殿樣の御采配で御下知の樣子を拜見することが出來なかつた丈が殘念で御座います。」と正直に思ふことを述べた。賴宣はそれを聞くと笑顏を見せて「老人共が左樣に申すのは、いかにも最もぢや。然し大阪兩度の御勝利は權現樣が隱居せられた後のことではないか。」と云つて、暗に賴宣自身が未だ老ひないことをほのめかした。それは「賴宣は隱居しても、一旦事があると、若者共に負けないで、老臣を率ゐて、戰場を駈け廻り、權現樣に劣らない手並を見せるつもりぢや。」といふ意を言外に含ませたのである。布施らは、賴宣の雄心消磨せぬのを知つてひどく感悅した。

賴宣は、さうした人であつたから、正雪の新しい軍學に共鳴したにちがひなかつた。時に左右のものに向つて正雪の軍學を賞揚したこともあつたらう。また新しく正雪を呼んで、一度や二度は、その軍學の講義を聞いたことがあつたらう。そして自分は自由に正雪の說を聞くことが出來ぬ地位にあるのでその家臣が正雪の門に入ることを暗に奬勵したこともあつたらう。それから賴宣は浪人に對して同情を持ち、浪人中の人材を物色するとが好きであつたから、浪人の元締のやうになつて居た正雪にも自然、意氣の上に合致した點があつたらう。が、賴宣が最も共鳴したのは、正雪の新しい軍學の上にあつたと思はれる。

賴宣は武勇好きで、一見、放膽なやうに思はれるが、元來、思慮にも乏しくなかつたから、深く正雪との交涉を持たなかつた。唯軍學の方でいくらか交涉があつたに留つて居た。が、その家臣が正雪の門に割合に多く學んで居たので、正雪は「紀州殿の恩顧を受けて居る。」と大きく吹聽して、その背景を立派にしようとしたものと見える。そして正雪が謀叛を企てた時にも、賴宣の名を利用した。が、それらは、賴宣の全く知らぬこ

とであつた。

が、頼宣は、正雪に共鳴したばかりでなく、いくらか以前から、江戸政府に誤解され易い傾向を持つたことは否まれぬ。頼宣は後になつて次第に圓熟したが、總じて猛將の風が早くから現はれて居た。大阪冬の陣の時、頼宣は十四歳で出陣して、茶臼山で父家康に逢つた。時に家康はその遲參を責めて「どうして愚圖附いて居たのか。」と詰問した。すると頼宣は眼に一杯涙を浮べて「曩きに二條城で私が先手になりたいと申したのにお許し下されずに後陣に私を居らせて今更遲參したと云はれるのはいやで御座います。」と云つた。傍らに居た松平正綱は頼宣を諫めて「今日先手になられずとも、別に急がれるには及びませぬ。御幼少のことですから、行末長く御一代のうちに御手柄遊ばされたがよろしう御座います。」と云つた。が、頼宣は承知しなかつた。そして正綱を叱り付けて「私が十四歳の時が二度くると思つて居るのかい。」と云つた。家康はそれを聞いて感じ入り「常陸之助殿（頼宣の幼名）只今の詞は一番鎗ぢや。」と云つて、頼宣に賞詞を與へた。

その後、頼宣が成長して、紀伊に封ぜられた時、二代將軍秀忠は、安藤直次を附家老とした。そして窃かに直次を呼んで「萬一、頼宣が叛亂を企てるやうなことがあつたら、直ぐ内密に自分のところへ知らせてほしい。」と云つた。ところが、直次は誠實の士であつたので「私が既に紀州家の臣下となつて、その分が定つた以上は、臣として、君のことを他へ密告することは出來ませぬ。萬一、主人の謀叛の形跡が見えるやうなことが御座いましたら、私は屹度死を以て諫止いたしませう。」と答へた。秀忠は直次の正しい心事に感じ入つた。この逸事から推想しても、頼宣が秀忠の眼に危險性ある人として映つたことがわかる。

頼宣はまた罪ある近習を手討ちにしたり、備前長光の刀で囚人を試し斬りにしたりした。また田邊湯崎に四五百艘の鯨船を集めて海戰の稽古をした。頼宣には猛將の血が流れて居た。

六　謀叛

話は前に戻る。

家光の歿後、浪人の群は、その頭を擡げようと待ち構へたところが、江戸政府は、何處までも、彼等につらく當つた。家綱の周圍に居た老臣は、先づ浪人の爆發するであらうことに思ひ至つた。

「慶長以來、徳川家の政治に不平を抱く浪人の群は、將軍御他界を機として、外樣大名に結び付き、どんな謀叛をする

かも知れない。今は一刻も油斷し得ぬ重大な時である。少しも警戒の手をゆるめてはならぬ。」

老臣の眼は外樣大名や浪人の身邊に鋭く向けられた。政府は、江戸居住の浪人を拘束して、手も足も出ないやうにした。外樣大名は、政府の猜疑深い眼を避けるために、浪人の出入を斷つた。また新たに彼等を召抱へることをも固く見合はせた。すべて物は強く抑へ付けられるほど、強く反撥する。浪人の群は、政府の過度の壓迫に反感を抱いた、大きい不滿を感じた。

「こんなひどい目に逢つて、苦みもがきながら生きて居るよりも、思ひ切つて生命を投げ出して、男らしい反抗のうちに斃れた方がまだいくらか心持が宜い。」

浪人の考へは茲に傾いた。それらの浪人が一番多く居た江戸の空氣は、殺伐な色で包まれた。不安、恐怖の心持が、時勢に目ざめた人々の胸に起つた。それを最初に豫知した松平能登守定政は、三州刈屋二萬石の所領を抛つて、政府の覺醒を促がした。が、政府は松平定政の意見に聞かないで、却て定政を狂人扱ひにした。時代の暗潮は、政府が目ざめないために一層激しく高まつた。程なく、正雪が一群の浪人を率ゐてその不平を大きく爆發させた。

正雪の謀叛についてはいろいろの說がある。楠公を敬慕する心から皇室の衰微を嘆いて起つたのだと見るもの、キリスト教を信じて居たので、政府の迫害を怒つて報復しようとしたのだと見るもの、賴宣の知遇に感激して政府を目ざめさせるため、この擧に出たのだと見るもの、政治上の不平が主となつて爆發したのだと見るもの、虛名を博せんがために蹶起したのだと見るもの、浪人にかつぎあげられて止むなく、平地に波を起したのだと見るものなどがある。

正雪が楠不傳の教へと感化とを受けたところから想像すると、正雪に勤王思想があつたといふことは、何人にも思ひ浮べらるゝのである。が、その遺書には、一言も勤王のことに及んで居ない。さうすると、正雪は勤王思想に左程の關係を持たぬかも知れぬ。けれども不傳の影響で勤王主義を知り、それを受ついだかも知れぬ。さう想像し得べき余地は多少ある。次ぎに正雪が、キリスト教を信じたといふのは、虛妄の說で、森宗意から幻術を學んだと想像するのと同樣の誤りである。畢竟、天草の亂に浪人が加はつて居たことから思ひ付いて、キリスト教と正雪をと故らに結び合はせようとしたのであらう。賴宣の知遇云々のことは、既に述べた通りであるから、冷靜な正雪が、そんなことで蹶起するわけはない。唯賴宣の名を利用したに留まる。正雪が虛名を博するために起つたといふことも首肯しか

る。私の見るところでは、正雪自身に政治上の不平があつて、時々その口吻、主張などを門下に洩らした事、門下の浪人が正雪の軍學に心醉し、その政見に共鳴して、正雪をかつぎあげた事、この二つが、偶ま時代の殺伐な氣分、家光歿後の不安な空氣に刺戟せられて、謀叛の形となつて、現はれたのだらうと思ふ。つまり正雪は政弊の改革、浪人問題の解決を前提に時代の新氣流と周圍の者の推戴とに促がされて爆發しようとした一個の革命家であつた。若し正雪が、この謀叛についての徑路をその自叙傳に於て述べたとしろ、左の如く手記したであらう。

「私(正雪)は少年の時から大きい野心を抱いた。江戸へ出た時分は、何でも、えらいものにならうと思つた。けれども私は最初から徳川家に反抗しようとは、少しも思はなかつた。そのうち、私は軍學に熱中して、その一派を創造した。私の地位がそれと共に押進められ、周圍の形勢をはつきり見るやうになつてくると、私の考へが次第に變つて來た。私は度々、諸侯の邸へ出入した、紀伊大納言にも逢つた、各方面の名士にも接した。そして一方では、多くの浪人と語つた。さうなると、私が如何に鈍感でも、徳川家の政策や時代の傾向などについて考へないわけにゆかなかつた。徳川家の政策は、私に不可解であつた。東照公以來の傳統政策や自家保存や自家享樂などに忙はしくて、肝心の士民生活をどうしてゆくか、多くの餓えた浪人をどう救ふか、彼等をどう正しく幸福に導くかといふことにはまるで無關心であつた。家光公が自ら華奢に流れながら、旗下の士に向つて、その貧乏を忍べ、極度の儉約をしろ、うまい物は喰べるな、宜い着物は身に纏ふな、酒と女とから全く離れてしまへ、そして物見、遊山は一切やめろ。と人間を機械視した訓令ですべてを抑へ付けようとしたのは私に解しかねた。まあそれも一時、時代病の注射劑とならう。それに旗下の士のうちには、實際淫蕩に身を持ちくずしたものもあつたのだ。が、絶えず、生活を脅かす物價昂騰をどうするか。それについて、家光公や老臣らはまるで考へ及ばぬではないか。それに一番ひどいのは對浪人策だ。浪人も武士だ、失職した武士だ。それはたとひ貧しくとも、武士らしい體面を保たねばならぬ。が、經濟中心の平和時代には、生活難の前に體面を保つことは、無祿のものに余程むづかしい。彼等の多くは餓えて居る、疲れて居る。そして非常に時事を憤つて居る。せめて彼等を餓えさせずに、平和な日を送らせることが出來れば宜い。が、徳川家では、浪人を謀叛人の卵子のやうに思つて、その住所にさ

へ安んぜしめない、職業にあり附く便宜をも與へない。彼等を餓えさせ、生の不安に苦めた上、容赦なく高壓政策の鞭を加へるのは余りに爲政者として迂愚ではないか。無慈悲ではないか。それは罪なきものを徒らに激昂させて、社會動亂の種を蒔くものではないか。もつと眼界を廣くしてすべての士民の生活を保障し、非人情な武斷政治をすつかり改めなければ、善政の意義を體現するわけにゆかぬ。私は門下のものと時事を談ずる毎に、度々この事に說き及んだ。門下はいづれも私の意見に共鳴した。また私は軍學を講ずる時、實地にあてはめて說くので、紀州公の兵を假りに侵入軍に擬し、諸侯の兵を防禦軍に擬して、その策戰を詳しく述べたことがある。血氣のものが、それを聞くと、實際に用ゐたくなつたかも知れぬ。私自身さへ、頰熱し、肝あがるのを覺えぬ位であつた。私の政見、私の軍學、私の反抗心、私の忌憚するところなき横議、さうしたものが門下を昂奮させたことは私も認めないわけにゆかぬ。それに門下には、眼中、德川家もその老中も將軍もない浪人が多いのだから、私の周圍に改革や革命の氣分がひどく濃厚に漲るやうになつたことは否まれぬ。それらは私から源流を發したことだ。さあかうなると、私は反抗兒の代表者、改革の先驅者を以て目せられ、私の周圍に私をかつぎあげて、否でも、應でも、成功でも、失敗でも、ゆくところまでゆかねば承知せぬものが出來る筈である。殊に德川家でさうしたことを故らに挑撥する態度を執る上は、一大爆發を免れぬ。私ひとりそれを押留め、防がうとしても、それは空しい努力である。まして私が門下のために次第にその中心人物に押し進められて見ると、私は自分から進んで、その犧牲たることを辭せぬのだから。が、私は英雄でもなければ豪傑でもない。私は一個の凡人だ、不平家だ。小さい革命兒だ。それが眼に見えない時流の大きな力に押流されて、最後の運命へ漕ぎ付けたのだ。一口に計算出來ぬ無數の浪人の生きんとする力に引張られて、破滅の噴火山上に飛びあがつたのだ。だから、私を偉大な實行家とは云へない。新しい時代を夢みた子、若き時代の到來を最初に豫言した露拂ひの一人だとは云へよう。」

以下、矢張正雪の自叙傳に擬して、その成行とその末路とを述べよう。

七　正雪の自叙傳の一、策戰

私（正雪）は早くから將軍家光公の病が篤いと云ふことを聞

いて居た。當時私の倒幕運動は着々、進んで居た。同志のものは、度々往來して、策戰の事、兵站準備の事について凝議した。京阪の同志とも私は密書を往復して、氣脈を通ずることを怠らなかつた。大阪の與力吉田初右衛門は私の心事をよく諒解して、無二の身方となつてくれた。

私の同志のうちで、私が殊に信賴してゐたのは、丸橋忠彌、金井半兵衛の二人であつた。丸橋は、人品、骨柄共に優れて居た。豪放、大膽で、物事に屈托しない男であつた。が、その粗暴と智慮に乏しいのが欠點であつた。金井は毛利家の浪人で、可なりしつかりした性質を備へて居た。沈着で、ねばり氣の强いところがあつた。それから熊谷三郎兵衛、瓦原十郎兵衛、加藤市右衛門、柴田三郎兵衛らも、私の片腕と賴んだ人物だつた。熊谷は正直な一本筋の男であつたが、何となく、物事を早くあきらめてしまふやうな淡泊過ぎたところが見えて居た。瓦原は小石川煙硝藏奉行でこの人を身方に入れるには、私も相當心を碎いた。一擧に江戸全市を火災のうちへ包むには、煙硝藏奉行の手を借りるのが一番の近道であつたからだ。他に老人ではあるが、櫻井三太夫、櫻井彦兵衛の二人が賴母しかつた。

私が人知れず、肝膽を碎いたのは、いつ爆發するかといふ期日の問題よりも、軍資金の不足、兵器の手薄な事にあつた。世間では、私の豪奢な生活振を見て、私に相當の財力があるやうに思つて居るのだが、その實、私は金を作る術を知らなかつた。手許に僅かばかりの金しかなかつた。江戸を中心に、駿府、京阪で大仕掛に事を擧げるには、余りに金の欠乏がひどかつた。それに江戸政府の禁令で兵器を手に入れることが非常にむづかしかつた。うつかりしたことをすると、直ぐに疑はれて隱謀露顯の原因となる恐れがあるので、その不自由さには、流石の私も困つた。

が、平生江戸政府を罵つて改革を呼び、浪人の身方となつて居た私が、今更それらの困難のために倒幕運動を中止するわけにゆかなかつた。私が乘つてしまつた船である以上は、たとひ暴風雨の最中でも港を出て航海を始めなければならぬ。信念のため、主張のためには生命がけの行進を續けねばならぬ。私の心事は、同志のものも、大體は諒解してくれた。それでも、見渡したところ、多くの同志中、財政に長けたものがなかつた。それに皆金力に乏しかつた。大言壯語して、江戸政府を罵る元氣者は、山のやうにあつたが、緻密な頭で打算して、私の兵站準備を助けてくれるものが殆どなかつた。それは、今更、どうにも仕樣のないことであつた。唯最善を盡すの外はなかつた。

そのうち、家光公薨去の事が私らの耳に入つた。愈よ蹶起す

べき時が来たと一同は勇み立つた。丸橋などは、虹のやうな酒氣を吹いて、今にも一氣に江戸城を覆してしまうやうな氣焔を吐いた。間もなく、私らは一度、道灌山に會合して謀議したが、纏らなかつた。それで私はある夜、同志の幹部を宅にあつめて、再び策戰計畫の相談を始めた。その大體は、早くから、私の頭の中で定つて居たことであつた。が、尚ほ私は衆智をつくして、遺漏なきようにしたいと思つたのである。

當夜、集つたのは、丸橋、金井、柴田、瓦原、熊谷、加藤らであつた。燈下に見たそれらの人々の顔は、希望に輝いて居た。

「徳川家の天下は、やがて自分らのものになるかも知れぬ。これから石田三成以來の乾坤一擲にひとしい大賭博が始まるのだ。」といつたやうな氣分、心持ちが一同の胸にひろがつて居るやうに思はれた。それに晩春の夜の生暖い空氣に加へて床の間の大きい花瓶にいけた花の香が、蒸せるやうに室に漂うて、一同は妙に昇騰して居た。

軍略上の相談が始ると、その席へは、私の妻のほかは、唯れも出入させなかつた。私は力めて平靜な態度で、私の頭の中に描いた策戰計畫の大要を話し始めた。一同の視線は私の上にあつまつた。

「私らが事を擧げる時は愈よ來た。それについて、第一に策戰のことについて相談したい。諸君にも、いろいろの高見があらう。然し先づ私の考へを述べて見たいのだ。」

かう云つて、私はその大要を話した。私の策戰は、軍資欠乏と身方の不足とを補うてゆくことを一つの眼目に數へてあるので、江戸に全力を注ぐと云ふことよりも、駿府、京阪などの樞要地に兵力を配つて、諸侯が一致の運動を妨げること。萬一の場合、久能、日光、比叡に立籠つて、軍資、糧食を支辨すべき道を作り置くことにした。先づ江戸は、丸橋を總大將として柴田を副將とし、かねて牒し合せて置いて、風烈しい夜、倉へ火を放たさせる。その時、煙硝が百雷のやうに一時に爆發する。その音を相圖に市内十數箇に散在する同志が、一時に放火して、江戸をすさまじい火災のうちに包むこととする。この時、丸橋は屈強の人々を率ゐて、葵の紋を付けた高提燈を掲げ、紀伊殿が御城警衛のため登城せられたと僞つて、城内に亂入するのである。それから別働隊（決死隊）を組織して置いて、將軍の身を案じて登城する老中、旗本などを小銃で撰み討ちに銃殺する。この方は、櫻井三太夫、櫻井彦兵衛を隊長として活動させる。また諸侯及び旗本などの子女は成るべく捕へて人質とする。それから、今、一隊は紀州家の徽號を軍服に着けて東叡山法親王を擁しまゐらせ、日光に走つて、天下の動靜を

窺ふことゝする。それが策戰の第一段である。

次ぎに私は、若干の兵をつれて、駿府に留まり、江戶の變がわかると、直ぐに駿府城を燒討ちして、近國の浪人を嘯集し、久能山に立籠ることとする。京都方面は、熊谷、加藤の二人が部將となつて、二條城を燒討ちして、天皇を奉じて叡山に籠り四方の浪人をあつめて、將軍追討の宣旨を請ふこととする。また大阪方面では金井が主將として大阪城を燒討ちして、諸方の浪人を身方として、京都の後詰を勤めることとする。それらが實現されると、天下は混亂の巷となつて、德川家に不平を持つ諸大名は、いづれも叛旗を翻すにちがひない。倒幕の目的は一擧に達することが出來るといふ段取であつた。

私が策戰計畫の大要を述べると、金井は、聊か解し兼ぬるやうに私に向つて問ふた。

「先生の御計畫は、家康公の施設を根本から覆するやうに出來て居て、誠に痛快で御座います。が、先生が江戶を離れて、駿府へ赴かれるのは、輕重を誤つて居らるゝやうに存じます。人身に譬へると、江戶は頭首で御座います。駿府は胸腹に當り、京阪は手足に當ると考へます。頭首が第一大切で御座います。先生は矢張、頭首たる江戶に留つて萬事を指揮なさいました方が宜しう御座いませう。」

私は金井の言葉が要點を衝いて居るのを切に感じた。が、私は駿府に居て東西兩路の兵を中斷すると同時に、中央から、江戶、京阪の同志に號令して、萬全を期しようと思つた。その意味を金井に詳しく話すと、金井も始めて納得した。他に異議を挾んだものは一人もなかつた。

次ぎに私は軍資調達のことを話した。

「私は諸君に露骨に云ふが、私は大した貯蓄がない。然し有る丈は、私の入用の分を差引いて、諸君は配分しよう。が尙ほ諸君に於ても、無理をしない程度で、この事について配慮してほしい。」

私がかう云ふと、丸橋はいかにも申わけがないと云つたような顏をした。

「先生、拙者はいつも先生の御厄介になつてばかり居ります。今度の企には、微力ながら、拙者も軍資調達のことについて應分の奔走を致して居ります。然し相變らずの貧乏で、思ふにまかせぬのが殘念で御座います。」

丸橋は、かう云つて太い腕を拱いた。

「拙者らも、そのことについて、丸橋君同樣、心がけて居りますが、矢張無力で何事も先生ばかり煩はすのは心苦しう御座います。」

一同は、暫く考へ込んだ。

「まあ最善をつくさう。何とかならうではないか。」

私はかう云つて、一同を元氣付けた。その實、私にも見當が付きかねた。いろいろ話して居るうちに、夜が更けたので一同、散會することにした。

その後、軍資と兵器との問題には、依然として行き悩んだ。最初私らは、家光公の死後、時をうつさず、一氣に事を擧げるつもりで居た。けれども肝心の問題が容易く搬ばぬので、心ならずも、一日遲れた。やがて四月も過ぎ若葉が匂ふ頃になつた。それでも、未だ事を擧げるわけにゆかなかつた。私は一同の焦慮する樣子を知つて少し悩やましい心持になつたが、故らに落着いて居た。

が、實際私の心は烈しく波立つて居た。數百人の同志の運命は、私を中心に二三の幹部のものゝ手に握られて居る。そしてそれがうまく成功するかといへば、今のところ成功の見込はない。唯一人の無力者が素手で百萬の大敵に向はうとするやうなものだ。萬一、何とかならうと云ふだけのことである。私は私の生命を同志のものに投げた氣である。私はそれで宜い。けれども多數の同志及びその近親、緣者のことに想ひ及ぶと、私の前に悲しい犧牲者の姿が、歷々と浮んでくる。唯一つ、私の心賴みとするのは、江戸の燒討ちが思ひのほかに、うまくゆけば、形勢は余程變化するし、それにつれて局面展開の非常手段が執れることだ。何も知らぬ江戸市民には濟まぬが、大きい目的のために醸し出す悲劇には目を閉ぢて居るよりほかはない。それにしても、瓦原は宜いとして、丸橋のことが氣になる。あの男は、正直な粗忽者であるから、特に沈着な柴田を附けて補佐させることにしたが、それでも心懸りだ。それから私の氣になるのは、余りに爆發の時日を遷延すると、同志の氣を腐らせて、變心者や失望者なぞを出すかも知れぬことだ。成敗は運に任せて、急がねばならぬ。私はこんなことを思ひながら、手配を進めた。

私が先づ熊谷三郎兵衛らを京都に、金井半兵衛らを大阪に赴かせることを急いだ。また丸橋に金を與へて、爆發の用意をさせた。同志中の血氣旺んなものは、それらに元氣附いて「無能傲慢な老中らを葬るのだ。」と云つたり、「一瞬時に江戸を焦土にして見せるぞ。」と力味返つたりした。私は笑つて彼等の可憐な姿を眺めた。

八　正雪の自叙傳の二、陰謀發覺

七月も上旬過ぎた頃になつた。

その頃、松平定政が三州刈屋二萬石を投げ出して政府に諫書

書を送つたことは、私らをひどく刺戟した。政府の役人が定政の心事を知らないで彼れを狂人扱ひにしたのを私らは憤慨した私は、もう愈々事を擧げる日を定めねばならぬと興奮しながら考へた。その月十五日頃、私の氣分は何となく優れなかつた。時々、妙に沈鬱になるかと思ふと、また晴々しい心持になることがあつた。十六日の夜、私は氣分が優れないので早く寢た。妻は私の様子を案じて居た。私は蒸暑さに困つた。蚊帳の中へ風がまるで來ない。私は寢返りしながら、うとうと眠つた。

不圖、四邊を見ると、私はいつの間にか江戸城の前に起つて居た。「ひどい火事だ。」と人が云ふので、よく見ると、城の一角から火がすさまじく立ちあがつて居る。「先生」と私の傍らで誰れか呼んだやうに思ふので、振返ると、丸橋が笑つて起つて居る。そこへ葵の高張提灯を押立てた一隊が駈けてくる。西から東から、南北から、武裝した人々が疾風のやうに馳せちがふ。何ものか知れぬが、白刄を提げた一壯漢が、鋭く私を睨んで「謀叛人！」と叫んで、私に斬付けようとした。私はそれを避けて、一刀を拔く間もなく、その壯漢に斬り付けた。壯漢は倒れた。するとその口から恐しい火焰を吹いて、忽ち彼れの顏は鬼のやうな相貌になつた。そして彼れがはぢかれたやうに起ちあがつて手を振ると、四面悉く火となつて、私も火の海の中に陷つた。「あつ」と私が叫んで、駈け出す途端、何かに躓いたと思ふと、私は矢張、冷汗をかいて蚊帳の中に横はつて居た。それは不思議な夢だ。私は目ざめてからも不快であつた。

それから二日ばかり經つと、同志の一人が來て、熊谷三郎兵衛が何處へかその姿を晦ましてしまつたことを急報した。彼れが、どうして逃亡したのか、まるでわからなかつた。事によると、密謀が洩れた爲めではないかと思つた。一體、物事を早くあきらめてしまひ易い男であつたから、前途を悲觀して、發心したのかも知れないと考へ直して見た。が、同志の多くは、密謀が洩れたのではないかと心配した。中には、熊谷が變心して一切を江戸政府に密告したのではないかと疑つたものが多かつた。私はさう信じたくなかつた。けれども同志が頻りに憂惜の色を見せたので、私は「假りに諸君の想像する通り、熊谷が政府に私らの事を密告したとしたら、寧ろ却て落着いた方が宜いではないか。今更、逃亡しても、狼狽しても仕様がない。が、私は斷然、七月二十六日に事を擧げることに決した。私は不日丸橋君に江戸の方を委ねて、駿府へ急行する。」と云つた。それで一同は靜まつた。

間もなく、私は同志二十余人のものと前後して江戸を後に駿府に向ふことになつた。發する前日、私は丸橋、柴田の二人を

特に呼んで、丸橋には輕卒に陥らぬよう、柴田には丸橋の足らぬところを補ふよう、懇諭した。

「御安心下さい。私は必ず先生の御教訓を守ります。それは私の肝に銘じて忘れません。」

と丸橋は固く盟つた。私はそれでいくらか重荷を下したやうな氣がした。そして留守中のこと、萬一の場合に處すべき方法などについて、妻に注意した後、私は二十一日、江戸を出發した。その際、私は「事がうまくゆけばこの江戸はすつかり焦土になるのだなあ。」と思ひながら改つた氣で江戸の町をつくづく眺めた。暑中の箱根越は可なりにつらかつた。三島へ下りると私はほつと吐息した。途中、何の事なく、私の一行は二十三日駿府に着いた。そして同志十人ばかりと共に茶屋町の旅舍梅屋太郎右衛門の家に泊つた。私は二十六日のことが氣になるので密偵數十名を四方に放つて置いた。殊に江戸方面のことは、逸早く私に急報し得るよう、準備してあつた。

その二十六日は、私らの運命が決せられる日であつた。成功か失敗か、勝利か敗北か、生か死か。その何れかをはつきり分つ日であつた。軍資、兵糧、武器、兵數何一つ滿足でないので素より私は多く期待し得なかつた。私は豫め覺悟した。死を決して居た。

大きい不安のうちに二十六日が來た。その早朝、江戸から私が放つて置いた密偵が來た。非常な急速力で來た。その報によると、二十四日、丸橋忠彌、瓦原十郎兵衛、永山六郎右衛門らが捕へられたのである。萬事休す、すつかり駄目だと私は思つた。私は與々丸橋を戒めて置いたのだが、彼れは矢張放膽な行動を執つたものと見える。これで江戸城燒討の計畫も、すつかり外れてしまつた。それに江戸からの急使(駒井右京)が駿府へ來たことをも密偵が知らせた。私の運命も盡きた。さうでなくとも、一切が、私に取つて悉くよくないことが、駿府の狀況で、はつきりわかつて居た。

二十五日夜、突然梅屋の裏口へ多數の捕吏、役人が來て、何かひそかに話して居ることを私の從者が私に報じた。その時、私はもう私の運命を直覺したのだ。それから間もなく與力松井惣左衛門、野木市郎左衛門が來て、町奉行の意を私らに傳へた。それは「江戸表から負傷したものゝ詮議を依賴して來たので、道中宿々旅人たちの疵あるものを檢査したいから、直ぐ奉行所へ出頭して貰ひたい」と云ふのだ。勿論、目的は私一行を捕へようとするにあると見た。彼等が思ひ切つて、踏み込み得ぬのは、私が紀伊殿の家士と僞つて居たのと、私を成るべく生捕らうとするためであらうと察した。

その時、私は與力らに向つて「拙者は紀伊殿の家士、

正雪と申すもので御座います。道中旅人の疵あるものを御改めに相成るため、奉行處へ出頭しろとの仰せでありますが、殘念なことには、箱根を越す時分から酷暑に中てられて、病臥して居る始末で御座います。それで私は到底、奉行處へ出頭する事が出來ませぬから、當方へ御檢使一人を遣はされて、疵の有無を御檢査下さるよう、御願ひ申したい。」と云つてやつた。勿論從者を通じてである、

　ところが町奉行は、それを許さなかつた。そして故ら鄭重な態度で「旅宿に泊つて居られるとは申しながら、何分紀伊殿御家中の人たちへ檢使を差向けて取調べることは、失禮に當ります。それで御面倒ながら、是非奉行所へ御越し下さい。」と押返して云つた。中々巧みな要求であるが、私はそん淺い策略の罠には引かゝらなかつた。

　私は根氣よく、私の要求を繰返して「御配慮は一切御無用に願ひます。檢使派遣のことは當方から勝手に申出たので御座いますから、差向けの儀は、決して苦しう御座いませぬ。若し後日、それについて何か差支えがあると慮らるゝならば、念のため一札差上げても苦しう御座いませぬ。」と云つてやつた。が、彼方は中々、承知しない氣色を見せて「御最の仰せですが、證文などは戴かずとも宜しう御座います。御病氣のため、どうしても、御歩行がむづかしいなら、乘物でお越し下さつても、差支え御座いませぬ。兎に角、一應出頭下さつた方が、紀伊殿の御利益にもなりませう。」と云ふのだ。私の從者は、その事を私に傳へた。そのうち、夜は次第に更けた。が、前々日の靜かなのとちがつて、町がざわざわして居た。町々の赤い篝火、周圍に集つた捕吏の黑い影、見るからに物々しかつた。一行の神經は妙に興奮した。が私は委細かまはず、熟睡した。凉しい夜であつた。

　やがて夏の短夜が早く明け離れて、二十六日の拂曉になつた。私は矢張、與力らの云ふ通りにすることをどうしても好まなかつた。私は一行に申含めて、私のほかすべて九人のものが、すつかり大肌をぬいで、尻を高く揭げたまゝ、與力らの前へ出ることにした。そして疵が何處にもないことを明かに示した。程なく私は羽二重の袷を着用して藤卷柄の脇差をさして杖をつきながら、靜かに彼等の前へ出た。私の刀は廓然と云ふ增上寺の所化に持たせた。私は健康が未だ優れなかつた。私は與力に向つて「昨夜から度々申す通り旅の途中から散々病んだので、早速、皆さんに御目にかゝり得ぬのでありました。家來共の手疵は御改め下されたか、そのうちに怪しいものがありましたか。私は此處で肌をぬぐに及びますまい。御覽の通りの有樣です。さて一同は何のために夜中から、物々しく大勢玆へ御つめになつて居らるゝの

か。私は紀伊大納言の内のものです。私は兎も角さういふことを致さるゝのは、大納言殿に對して無禮でありませう。」と云つた。

ところが、與力の一人(野木市郎左衞門)は私の言葉を聞いて少し激昂した樣子で「兎も角、度々申上げた通り、早々、奉行所(落合小平次宅)へ御越し下さい。この上は、千萬の問答も無用で御座います。」と大聲で云ひ放つた。隨分思ひ切つた樣子であつた。が、私は「最早逃られぬ。」と觀念して、自裁の決心をしたが、表面にはさうした心持を少しも、彼等に見せなかつた。私は大きく笑つた。

「仰せの段近頃御最もであります。然しいかにも仰山らしいお言葉ぢや。では、乘物で、早速奉行所へまゐりませう。仕度する間、暫くお待ち願ひたい。」

私はかう云つて、私の室へ歸つた。そして萬一、私が自刃する前に、彼等に踏み込まれると、恥になるので、それを防ぐため、もう今にも乘物で外へ出るやうな樣子を裝はせた。私は急いで、私の遺書を認め始めた。萬感、胸を衝いて思ふやうに筆が動かぬ。兎も角私はかう書いた。

今度謀奸の人あり。某謀叛を企つるの由、台聽に達するの間、討手下さるの段至極し畢んぬ但し賤卑愚魯の身を以て、何の爲に四代の天下を亂破せしめんこと叶ふべけんや。蟷螂の龍車を遮るに足らざるの喩を圖り給ふべし。然りと雖も、天下の御政道無道にして上下を困窮せしむ。誰か之を悲しまざらんや。然るに適賢慮を以て、松平能登守諫めを爲し、遁世の所、却て狂人の沙汰あり。忠義の志空しくなる。是れ不思議と云ふべし。某不肖の身と雖も、天下を困窮せしむるところの奸人酒井讃岐守等を遠流せしめんため、僞謀を以て、人數を催ほし籠居せしめ、右の趣段々言上せしめ、その上は奉行所の詮議に任せ、身の安否を定めんと相謀るのところ、爰成就せずして發覺、滅亡し畢んぬ。又私にして人數を催ほさんと欲するも、敢て一人もその催促に應ぜず。之によつて、紀伊頼宣卿の御名を假りて、御扶持を蒙るの由披露す。全く誰人よりも、一人の扶持を受けざるは、天の照覽他なきもの歟。申達の旨、繁多と雖、時急なるの間、之を申殘す。恐惶謹言。

慶安四年辛卯七月二十六日

由井正雪

それを書き終ると、私は胸のうちが、すつきり澄みわたるやう感じた。懺悔の念、自責の感が次第にうすらいだ。この上は一刻も早く自殺しようと思つて、その旨、一同に申渡すと、一同は血氣に逸つて中々、私の云ふことを聞き入れようとしなかつた。

「先生のお言葉に背くのは、誠に失禮で御座いますが、未

事が緒に就かないうちに、この儘、自刄するのは、いかにも殘念で御座います。たとひ、多數が私等を取圍んで居りませうとも、懸命にこの場を切拔けて、一先づ他へ落ちのび、同志の安否をも確かめ、再擧を計りたう存じます。先生、どうか私らの望みをお許し下さいまして、自殺を思ひ留つて下さいませんか。」

彼等は熱心にかう云つた。が、私はどうしてもそれを許さなかつた。

「君たちの云ふことは一理あるが私がこの謀叛を企てたのは十餘年前のことだ。それが爆發すべき間際に發覺したのは天命だ。今更五人十人のものを切つて捨てたところが、多勢に無勢、到底この場を逃げのびるとは出來ぬ。萬一、捕吏の手に生捕られて見給へ、それこそひどい拷問に逢つて見苦しい死ざまをしなければならない。それよりは一同玆に踏留つて、一緒に快く冥途へ旅立たう。尋常に切腹しよう。」

私が切に彼等に諭したので何れも私の言葉に從つた。私は滿足に思つた。そして私の遺書を一同に讀み聞かせた。一同の顏には、感激の色が漲つた。私は笑つて、片膝立てながら、廓然に介錯を頼んで置いて、白刄を腹に突き立てた。そして私は靜かに瞑目した。

九　補　遺

以上、私は正雪の自敍傳に擬して、その成行と末路とを述べた。それで玆に正雪と交渉のあつた人々その他について一言するの必要を感ずる。正雪の陰謀が發覺した時、江戸政府から駿府城大久保玄蕃頭へ書を送つた正雪の人相書は、正雪の風貌を如實に描き出して居る。それには「由井正雪事、せい小いさく色白、髮黑く、眼くり〳〵として、額短く、唇廣く厚がつそふ（惣髮）にて候得共、髮を剃りたるかも知れざる由。」とある。これ以上正雪を巧みに描き出すとは出來ない。

それから當時、幕府の加番某が駿府で直接正雪の樣子を見たことを手記したうちに「拙者始終よく目をつけ見候。正雪は丈低く、肉づきも並の通りによく候て、頭はがつそふにて候。かさばき髮にて出で候。面さし眼鋭く、並々ならぬ樣子に見え候が、物言ひは鎭りたる音聲にて、如何にも緩々とした挨拶振にて候。」とある。大きな陰謀を企てる人物の面魂を外面から、よく表現して居ると思ふ。

當時、正雪最後の光景も加番某の手記にある。それを見ると、「程なく一人罷り出で、正雪は只今罷り出で候間、門前の御衆

を少し御開き候へと言捨て、内に入り候と、銘々に何かひしめき、今にも乗物舁出すべき體にて候間、各勇みて、今か今かと待居り候内に、何の音もなく、しづまり切つたる様子にて候間さては切つて出づるも計り難くと、いづれも身構へ居り候ところに、奥の方にて微かに矢聲、太刀音など仕り候につき、南無三寶と誰やら申して、内へかけ入り候を見て、與力同心衆續いて、むら〳〵と馳せ入り候間、拙者も中の入口より馳け入りて見候へば、椽の障子を踏み破り、松田、青木、野木その外、與力同心十四五人ほど入り候てこれあり。見候へば正雪を始め座敷二間にまばらに並居り候て自害致し居候。」とある。當時の様子が、はつきりわかる。また生き殘つた僧廓然については「坊主は一人介錯仕候て自害仕るべき様子に見へ候折柄、御踏込なされ候につき、召捕に相成候。」と記し、また「彼の坊主、縄にかゝり、同心衆兩人にて押へ候が、如何致し候や、頭に大疵をうけてこれあり候。」と記して居る。「大疵」の二字は、物凄い感じを與へる。それから正雪の父母、兄半左エ門夫妻、弟彌右エ門夫妻、四男又四郎らは捕へられて斬罪に處せられた。正雪の妻は、丸橋が捕へられた當時、拘禁せられた。

正雪の遺書は、『駿府留帳抄』のうちに收められてある。それには「蟷螂の龍車を遮るに足らざるの喩を圖り給ふべし。」などの文句はない。全體の文章が整つて居らぬ。正雪が自殺前、匆卒の間に走り書きしたのであるから、『駿府留帳抄』に收めてあるのが、本物である。が、その趣意は、前に引用したのと大體同一である。

正雪らの陰謀發覺については、丸橋忠彌の行動が最も關係があると一般に見られて居る。それについて、いろいろの説がある。それらのうちで、眞實に近いのは、松平信綱の臣奥村權之丞及び弓師藤四郎の密告が、陰謀發覺の上に與つて力があつたが、それに先立つて、丸橋が好意でした事が、稍輕卒に流れたので餘程惡い影響を正雪らに及ぼした。それが發覺の端緒だ。そして丸橋は軍資、兵器を調達するについて、可なり熱中した。そして軍資の不足を補ふことを一々、正雪に計るのは、自分の無能を示すやうなものだと考へて、自ら才覺することにした。が、方法に窮して、知人田代二郎右衛門に金子調達のことを賴んだ。田代は「五六日待つて貰ひたい。」と云つた。けれども時日が非常に切迫して居て、丸橋はそれまで待つことが出來なかつた。そして輕卒にも、正雪らの企てを話し「事が成就したら、金を倍加して必ず返濟する」と云つた。田代はその大仕掛の陰謀を聞いて内心驚いた。そして表面軍資調達のことを承諾して歸つ

た。

田代は、丸橋の話を直ぐに友人奥村權之丞に話した。奥村は、松平伊豆守（信綱）の臣であつたから、驚いてその事を主人に密告した。信綱は「別に仔細はあるまい。が、この事を他に洩らしてはならぬぞ。」と云つて登城した。そこへ町奉行石谷左近將監（貞清）が馳せ付けて、弓師藤四郎の密告を齎らした。それによると、丸橋が紀伊大納言頼宣の名を借りて多數の弓矢を藤四郎に注文して、固く他言を禁じた。が、藤四郎はそこに不審を抱いて調べると、正雪らの隱謀が凡そわかつたので、驚いて町奉行の許に駈け付けて密訴したのである。以上はいづれも七月二十三日のことであつた。その結果、信綱は神速に部下を急派して、丸橋らを捕へた。以上が破滅の序幕となつたのである『古今史譚』には、丸橋が奥村の弟八右衛門に金策を依頼し八右衛門が丸橋の話を兄に告げたので、奥村は不審を抱き、その眞相を弟に探らせた。それから正雪らの企てが分明した。その時、八右衛門は、從弟七郎右衛門、林理右衛門、田代二郎右衛門らと連署して、事件の顚末を兄に告げ、兄はそれを松平信綱に示したとある。いづれにしても、丸橋がその知人に金子調達を依頼したことが發覺の一主因となつて居る。

當時、それらの密告者は、何れも賞與を貰つた。奥村は金十枚、時服二を賜り、五百石の加增を得た。弓師藤四郎は、百五十俵の加增を得て、二百俵となつた。別に銀百枚を貰つた。また林理右衛門は五百石、奥村の弟八右衛門、從弟七郎右衛門、田代治郎右衛門らは三百石宛を賜つて、幕府家人の列に加へられた林以下の四人は何れも正雪の企てに加盟しながら、突然裏切つたのだと傳へられて居る。

丸橋のことは、正雪ほどにはつきりしないが、傳說のうちに一佳話がある。丸橋は最初その企てを妻に隱して居た。ところが、聰明な妻はいつの間にか正雪らの企てを知つてしまつた。そして或日、丸橋に向つて「一體あなたは、何を企てゝ居らつしやるのですか。どうぞ隱さないで私にお話し下さい。何だか心配でなりませぬ。」と云つた。

ところが、丸橋は言下に叱咤して「お前などの知るべきことぢやない。婦女子に話しても、何がわかるか。」と相手にしなかつた。妻は丸橋の冷めたい素振を見て泣いた。そして涙ながらに「私はあなたの御企てを夙に知つてしまつて居ります。最初それと知つた時は、どんなに驚き、悲んだか知れませぬ。私の小さい胸は、破り裂けさうで御座いました。けれども私とても夫の出世、富貴を望む心は他の御婦人方と少しも變りませぬ。それで私は思ひ返して、月夜神佛に祈り、あなたの御成功を望

んで居たので御座います。」と云つた。やがて妻は、筐の中から一つの袈裟を取り出して、それを丸橋に渡した。

「それは私が暇を見て、そつと縫うて置いたので御座いますあなたが不時の御用に立つよう、準備いたしました。」

妻がかう云ふと、丸橋はその眞情に打たれた。そして始めて正雪らの企てをすつかりその妻に打開けた。この傳説は、悉く虚構したものであらうが、謀叛事件に妻の愛をからませて彩りを加へたところに趣がある。

丸橋の最後の樣子が、どうであつたかは『落穗集』にその一端を洩らして居る。それには「我等なども、井伊掃部頭殿邸前に於て、見物仕るところに、丸橋は鼻馬にて、その跡に段々と相續き、妻子等迄引渡され候中に、至つて幼少なる小供の義は切繩を結びて首にかけさせ、手には、風車、人形などを持たせて、穢多共これを抱き、母親の乘りし馬の脇に附添ひてまゐり候。その節までは、櫻田御門外、只今馬たまりに成り候ところは、上杉殿向邸と申して有之候。その門前まで丸橋が馬の先のぼりまゐり屆き候へ共、跡の紙のぼりは、未だ麹町土橋邊に相見へ申すほどの義に有之候。」とある。罪のない妻子が、巻き添へのために囚はれてゆく樣子に人々の熱い涙を催ほさせる。

丸橋の次ぎにその最後の有樣を思ひ出させるのは金井半兵エのことである。金井は陰謀が發覺すると、大阪天王寺で自殺した。その父市左エ門は、長柄川へ投身して自滅した。金井は死ぬ前に一通の遺書を殘した。それには、金井が正雪から大事を語られた時、その弟子の情として、加盟を拒むことが出來なかつた事、またその企てが無道利欲のためにしたことでなくて、家光歿後、政治に邪まがあつて、武人の僧侶、農商の徒に至る迄、惡政を憂憤して居るので、彼等に代つて、政府に訴へようとしたのだといふ事を明かにした。そして金井は、何も知らぬ近親、縁者にまで嚴罰を加へることの不當を難じ、金井の從者六藏（十七歳）の助命を懇請した。正雪が金井に信頼するところがあつたのは、金井の最期がいかにも落着いて居てその師や同志の精神を明かにした男らしい態度に徴してわかる。

金井の態度にくらべて、暗い感じを與へるのは、熊谷三郎兵衞の末路である。一説に熊谷は櫻田泉岳寺境内の客舍で自刄したといふが、一般には、羽後湯澤に赴いて出家したものとせられて居る。現にその地を上人澤と云つて、無名の小石が熊谷の庵室のあとを記念して居るさうだ。熊谷の心事は、遺書も何もないので明かにわからぬが、事の成らぬのを豫知して失踪し、湯澤に隱れたのであらう。そして僧となつて、同志に背約の

をよそながら謝し、正雪らの菩提を弔つたのであらう。

正雪の謀叛事件で一番迷惑したのは、紀伊大納言頼宣であつた。正雪が頼宣の名を用ゐたについて、江戸政府の老中はひどく神経を光らせた。彼等は議を重ねた末、その眞僞を質すために、頼宣の登城を促がした。當時、尾張光友は「紀伊殿が大事を思ひ立たれるに當つて、浪人などを頼まれるわけがない。」と云つたが、老中はそれを信じかねた。頼宣は、素より正雪の隠謀に何の關係をも持たぬので、少しも惡びれた様子もなく、平生通り元氣よく登城した。

その日、殿中の光景は緊張し切つて居た。座には、尾張中納言（光友）水戸中納言（頼房）阿部忠秋、松平信綱、井伊直孝酒井忠勝らが居流れて居た。それらの人々は、正雪謀叛のことを述べて、當時、正雪に裏切つた浪人らから差出した頼宣の名ある文書を示し、その關係の有無を問ひ片唾を呑んで返答を待つた。ところが、頼宣は文書を見ると、隔意のない笑ひを洩らした。

「それは目出たいことです。これで徳川家の天下も萬々歳ぢや、最早御氣遣ひは御無用です。と申すのは、正雪らが外様大名の判を似せて、それを謀叛に用ひたなら、三代の御恩を忘れ、逆心を含み居るものにちがひあるまいとの御疑ひも起るでありませう。が、親藩の私の判に似せて、私を利用したものなら、格別の子細は御座いますまい。」

から云つて、頼宣は井伊酒井らの苦い顔をぢつと見て滿面に喜色を浮べた。その磊落な飾り氣のない様子には少しも蟠りがなかつた。一同は半ば疑ひを晴らした。殊に尾張光友、松平信綱らは頼宣に同感を寄せた。けれども酒井、井伊らは、尚ほ頼宣の心事を解しかねた様子であつた。爾後、江戸政府は、十年間、頼宣の在國を禁じて、それとなく、江戸邸に監禁した。そして十年の後になつて、始めてその監禁を解いた。それは松平信綱の盡力によつたのである。傳ふるところによると、信綱は頼宣が曾て「徳川家に對しては、未來永劫、不忠不義をしない。」と云ふ起請文に血判して黒塗の箱に入れ、日光廟へ收めたのを不圖見出した。信綱はそれを水戸、尾張の二卿や老中の前に披露して、頼宣の心事を辯明したので、人々もその起請文を日光から取りよせて見て始めて頼宣の忠義を知り、すつかり疑ひを晴らしたといふのである。が、恐らくそれは頼宣と親善な信綱の細工によつたものでなからうか。いづれにしても、正雪一件は、頼宣に取つて禍であつた。頼宣は一時、正雪の門に入つて居た家臣數十名を追放して、謹愼閉居の日を送る苦い經驗

を罷めさせられた。

頼宣のほかに今一人、松平定政の事について一言する必要を感ずる。正雪は定政の行動を見て強い感激に打たれた一人である。定政は家康の異父弟定勝の五男で、三州刈屋二萬石を領し、家光の生前には近侍して優遇された。また家光の臨終の座にも特に列することを許された。定政は、家光の恩遇に感じて、その歿後の幕政に殊に注意して居た。

ところが、老臣らのすることは、保守、因循でなければ、高壓政策の亂用であつたから、定政は重大な時局を誤るものだと見た。そこに諫告の必要を感じた。それがため一身を犧牲として二萬石の所領を抛つことを辭しない決心をした。それで慶安四年七月九日、定政はその邸へ石谷貞淸、林道春、増山正利、中根正成、牧野成常、宮城和甫らを招いて、鄭重な饗宴を開いた。宴終ると、定政は容を改めて「私は昨今時事非なることを痛感して、心中深く決するところがあるので、一書を増山、牧野、石谷三君にお托し致したいと思ひます。そして他の三君には、念のため御迷惑ながら後日の證人になつて戴きたいのです。」と決然たる色を見せた。

「私はかねて前將軍家(家光)の御報を肝に銘じて居りますので萬一、事があつたら、御馬前で討死して御恩を報じたいと思つて居ましたが、案外早く世を去られたので、多年の志も今は空しくなりました。それで當代の幼君に奉仕して、聊か報恩の道をつくさせて戴きたいと思つたのですが、近來、老臣たちの云爲を見ると、政道を誤つて、天下の騷亂を挑撥しさうな形勢が歷々として相見えます。何となく、大きい不安、動搖の兆が私の眼に見える心持ちがしてなりませぬ。恐らく、一兩年のうちに大變が必ず起りませう。私はこの事について老臣たちの反省を促がしたいので、今一通の書を急いでその人たちに捧げたいのです。」

定政はかう云つて、その書を友人に渡した。。友人らは何れも沈痛な様子で、定政の心事に同感した。定政は、その後、直ぐに東叡山に赴いて髮を剃り、その名を不白と改めた。そしてその所領を潔く江戸政府に返上した。またその妻は永井信濃守(尙政)の許に、その男子は松平隱岐守(定行)の許に預けた。傳說によると、定政は一布衣の身となつてから、僧衣を着け、二三の從者をつれて、江戸の巷を托鉢して廻つたので、江戸政府はそれを狂人の沙汰だと見て、定政を捕へ、兄の定行に預けることとした。が、定政の決心、その一身の處置を見ると狂人でないことは勿論である。深く時事を慨いた結果、思ひつめての行動であることがわかる。正雪が定政に同感して「過賢

を以て、松平能登守諫めを爲し、遁世の所、却て狂人の沙汰あり。忠義の志空しくなる」と云つたのは、味のある言葉だ。正雪は定政の知己である。

正雪の謀叛は、江戸政府が、間諜を正雪の門に入れて、これを挑撥したのだといふ說がある。それは政府が天草の亂に懲りたので正雪が多數の浪人をあつめて、軍學を講ずるの見て、「一將來宜いことをすまい。」と疑懼した結果で、故らに正雪らを煽動したといふのである。松平信綱の臣奥村權之丞が忠彌の門に入つて居て、忠彌の身邊を探偵したといふ說もあるから、或は信綱が、その邊に豫め意を用ゐたのかも知れぬ。確證がないので、今俄かにいづれとも判斷し難い。

然し信綱と丸橋忠彌との事について、劇的色彩に富んだ逸事が傳へられ、默阿彌翁の筆で脚本に仕組まれたことを見ると信綱の態度について、いろい考へさせられる。老中松平信綱登城の途次、一士濠上に立つて城中を望むを觀る。即ちその名を問はしむ。對へて曰く、丸橋忠彌と。信綱輿を留め、召して曰く、吾子の名を耳にすること久し。今始めて面するを得たり。他日閑あらば我門に來れと。翌日往いてこれを謁す。忠彌喜んで正雪に告ぐ。正雪眉を蹙めて曰く、彼は智者なり。巧みに人の胸中を洞察し、且つ操縦の術に富む。近くべからずと。他日、人あり。馳せて信綱に正雪の陰謀を告ぐ。信綱曰く、謀反人丸橋忠彌なる一浪人もあらんと。果して正雪の言の如し。」と記して居る。いづれにしても、信綱は、正雪、忠彌らの苦手であつた。

正雪の隱謀が發覺すると、江戸政府は隱謀に伴ふ正雪の計畫實力を誇大視して、稍狼狽えた樣子があつた。先づ新番頭駒井右京に追捕の役を命じ、續いて小田原城主稻葉美濃守に下知して嚴しく箱根の關を固めさせ、中根壹岐守に命じて碓氷の關を守らせた。駿府では、榊原越中守に久能山方面を固めさせ、定番戸田藤五郎に加勢を命じた。尙ほ次第によつて、援兵（物頭四人、鐵砲三十丁、弓十張、長柄五十本、侍十人、足輕百五十人）を派すべき準備をして、一命の下に出發させることにしてあつた。が、大山鳴動、鼠一匹しか出ぬ有樣だつたから、拍子拔けしたことであらう。

自然と人と藝術

成瀬無極

ジムメルがゲエテに就て云ふところを擧げる。生活と創作との一致に關する問題である。

「彼の創作は、生活の諸内容を受け容れる時に彼の生活過程が既に形(かたち)づくつて置いたものを單に直觀的(アンシャウリヒ)にしたものに過ぎない。——恐らくこれは、吾々が自ら投げ入れたものをたゞ認識しつゝ又考察しつゝ、啻(ただ)にそれのみならず、創作しつゝ單に取り出すといふ事に對する最大のそして最高の例であらう。彼の創作は彼にとつては體驗から不分離的(ふぶんりてき)のものに見えた。それは彼の體驗が既に創作であるからである。」

この體驗即創造(たいけんそくさうざう)の態度に藝術の根本義が潜んでゐると思ふ。普通人の體驗は固定した若干の範疇の中へ自然人生の諸現象を盛り入れるに過ぎない或者は之を機械化し、或者は之を宗教化し、而て多くの藝術家は之に依て自己の藝術を作り出す。恐く現實を歪め矯める者である。體驗即創造とは事象の生命へ滲入(しんにふ)し、之と融合し、自己の魂に依て活かし、物心一如の境致に達することである。これはゲエテにとつて自明の理であつた。元來「目的(アブジヒト)」を以て成される可き事ではない。

旅をして口惜(くちをし)いのは歴史的知識の貧しいことよりも無數の印象に對して常に受働的態度を取り、漫然と雲煙過眼視して少しも生命の糧とな得ないことである。或は、瞬間的の激動を受けても直ちに之を忘却することである。内的創造力の缺乏せる證據である。高々(たかだか)常套的定見に照らし合はせて若干の訂正を(

るか、或は幻を感じて他の極端に走り再び正鵠を逸することである。何時まで吾々は自己の魂を奴隷に　ておくのであるか憤激して自己の内部から自然を生み出さうとしたのが表現主義者である。彼等は或意味に於て自然の叛逆者になつた。そして表現の形の問題で行き詰つた。或は逆に、形新奇を求めるに跳躍して内容の枯渇を來した。本末を謬るものである。自然に復讐せられたものである。

「私はいつも世界を自分より偉大な天才者と考へた」とゲエテは云つた、「自然」すら背き去る文化は危い自然は儼存してゐる。外國に旅して私はそれを感じた。自然と人間との交渉といふ事を考へてみたい。

歸朝の途次吾々の船は新嘉坡に着いた。一歩を陸上に踏み入れて私は驚異の眼を瞠つた。私に取つて全然未知の世界が展開せられた。往航は灰色の大平洋の波浪を凌いで行つた。佗しい冬の旅であつた。今度は一個月餘りの間に殆ど四季を經過したそして玆は常夏の國である。强烈な太陽の光を浴びて凡てが眩ゆく輝いてゐる。土のいきれと草木の香りが烈しく鼻を撲つ。何處までも何處までも椰子の樹が生へ茂り、廣々な護謨林が續く。黒い皮膚をした土人の男女と、黄ばみ萎んだやうな支那人との間に鷄や犬や豚の仔などがうようよ歩いてゐる。飽きる程見慣れた西洋婦人の白衣の姿などが却て珍らしく思はれる。永雨の後でもあつたらう、處々出水して、熱帶の草木が濁つた水溜の中へ枝を垂れ葉を浸し、小さな流れに想ひがけぬ巨大な帆船が入つてゐたりした。

十二月だといふのにオフイスでは皆ワイシヤツ一枚になつて額に汗しながら事務を取てゐる。頭上を煽風機が忙しなく廻つてゐる。私達は湯上りの浴衣一枚で氷を添へた刺身を喰べた。一年中單衣で通すと云ふ。不思議な土地である。季候に變化が無いから却て「時」が早く經つやうに思ふと云ふ。十二月から正月にかけてが最好季節を凌ぎ易いと聞いた。然るに、一方には之を正反對に常冬の國もあるのである。不幸にして私はさういふ國に行つてみる機會がなかつたが、想像してみることは出來る。「紅い。顫へる圓板に似た太陽が顫へる水平線に觸れるやうな時が來た。海の浪は動いてゐる儘で氷結し、亂雜に積み重ね

た空色の布の様に見えた　吾々の背後の雪の野原は何億萬の氷の結晶に輝くスペクトラムとなつた。空中に高く珍らしい虹色の雲が燃えてゐた。海豹もペンギン鳥は姿を隠し、吾々は骨の髓まで凍えながら小舍の前に立つて太陽の最後の光の輪が消えるまで——同時に凡ての生活が終るまで待つてゐた。」これはワツサアマンの小品「極光(アウロラ)」の中に見える極地方の描寫である。

單に季候といふものを取つて考へてみても、「常夏の國」と「常冬の國」との間に於て其處の住民の氣質(テムペラメント)に著しい相違が無くてはならない。テムパア又はテムペラテユワアといふ言葉に依て又「氣象」といふ文字に依ても自然と人間との交渉の密接なことが分る。

歐洲、殊に南歐は概して春秋が短かく、冬から直ちに夏に變る。伯林の氣候は略々我が北海道のそれに該當すると云ふ。倫敦の最好季節も春といふより寧ろ初夏であらう。四季の微妙な推移を味はふ點に於て日本は最も惠まれた國の一つと云へよう。これ等の點が如何に國民性に影響して行くか。諸國に旅をして私は常にこの事を考へた。

或點で自然の形象が似てゐるらしい西班牙と北歐諸國との間に南と北とが形づくる對照(コントラスト)はどんなものであらう。伊太利のナポリ邊の氣分、カプリ島からソレントあたりの風光に親むと、およそこれら南國的頽唐の氣象がどういふ風に伊國人の氣質を爛醸して來たかと考へさせられる。「甘き無爲(ドルチエ・ファルニエンテ)」といふ心地は西班牙、南佛あたりにもあらう。少くとも私はナポリとブダペストに於てその住民の氣質の上に幾多の類似點を見出した。「彼等は熱情的である。また藝術的天分に豐かである。音樂に舞踏に秀でゝゐる。然し根の無い焔である。國民としては亡國の民である。」と自國人を評したブダペスト生れのG夫人の言葉を思ひ出す。フイレンツエの或寄席(ヴアリエテ)で幕間(まくあひ)に大學生が棧敷に立ち上つて政治演説らしいものを始めた。女學生も傍で應援してゐる。ダヌンチオのために説いてゐるらしかつた。此方(こちら)の棧敷では何か口論が始まつて、激昂した二人は直ぐに廊下へ飛び出した。伊太利人は短刀を呑んでゐる者が多いと云ふ。巡査が土間から棧敷の欄干に攀ぢ登つて、棧敷を飛び越えて廊下へ出て行つた。外の見物は別に怪しみもせず次の番組を見物してゐる。

かういふ圖は目下混亂狀態に在る獨逸でも付て見た事が無いこれは一例である。匈牙利の踊りを見たときと同樣の感じであつた。

二

氣候と密接の關係ある自然の「形態」といふものも亦氣質の上に著しく影響を及ぼすに違ひない。

昨夏瑞西國インタアラアケンに遊んで、「ハイムウエー・フルウ」といふ丘に登つてみた。「郷愁が岡」とでも譯すべきであらう。この「郷愁」といふ名が私の興味を牽いたのである。ケエブルカアを一人で占領して頂上へ着いた。曇り日なので餘り遊覽の客も無かつた。非常に美しい眺望で「處女峯」が雪を戴いた清楚な姿を現はし、一方にインタアラアケンの市街を俯瞰し靜かな湖水を圍んで綠の山が深い襞を疊んで悠然と立ち並んでゐる。「郷愁」といふ名の由來に就ては案内記にも誌して無く、茶店の婆さんや、繪葉書を賣る娘も知らない。「フルウ」とは土地の言葉で「岩壁」の義であるが、この景勝の處に來て郷愁を忘れるのか、又は思郷の念を起こすといふのか分らないと云ふ恐らく深碧の湖水を眺め銀白の雪峰に圍繞せられて自ら一種の暗愁に捉へられるのであらう。月影を仰いでそゞろに二千里外の心を生ずるのと同樣である。北歐山間の青年が廣い世間を戀ひ慕ふ心も了解せられる。海國の子は遙か浪の彼方に幸福の影を幻視するであらう。山國の人と海國の人との間には皮膚の色を始め眼、眉、口、全體の骨格其他にも著しい差異が認められるのであらう。獨逸を取てみても、南北に依て言葉のアクセントを別にし、發音に剛柔の差がある。既に相貌言語の上に特徴がありとすれば氣質の方面にもそれが存する筈である。

凡そこれ等の觀察は人文史の方面に於ては既に過去に屬する陳腐の見方であるかも知れない。然し、私は元來只管個人をのみ見てあらゆる環境を無視する態度を取てゐた。一口に「英人は」と云ひ、「獨人は」と云ひ、「佛人は」といふことの危險を知悉してゐる。殊に狹い日本に於てさへ其生地に依て直ちに人物の如何を臆測する早計と、所謂「愛郷心」なるものが意外の勢力を有して政治經濟にまで其影響を及ぼし、單に郷土を同じくするが爲めに黨閥を形づくり、互に他を排斥して自ら高しとする

偏狹固陋を憎み嘲つた。獨逸の如きは絶えずこの分裂的思想の弊に苦んでゐるのである。而してこの考へは今日と雖も少しも變ることはない。國民性、或は一般に人間の氣質を形づくる上には、單に自然國土等の先天的要素のみならず、歴史、經歴等の後天的要素をも併せて考へねばならない。又境遇の變化交錯といふ事をも斟酌する必要がある。卽、人物を品隲する場合には何よりも先づ「個人」として取扱ふべきである。然し、この事と境遇及血統方面の考慮とは兩立し得るものである。個性を觀察し、その個性を形成せる諸要素を併せて探究することは無用でないのみならず、屢々必要である。かういふ人文地理及歴史的方面を殆ど無視し、「傳統」なるものを論外に置いてゐた私は世界に旅して始めてその點に眼覺めたやうに思ふ。事新らし氣にかういふ問題を論ずるのはその爲めである。固より學術的考察を下すのではない。唯、旅行者としての見聞を基礎として多少の指唆を與へることが出來れば滿足である。旅行した順序に從て簡單に所感を述べよう。

先づ「米國」は廣大で乾燥（ドライ）の印象を得た。一つはそれが冬季であつたからでもあり、又主として東部に居たからでもあらう。米國全體を取て考へれば幾多の變化と對照があつて興味ある觀察が出來ることゝ思ふが、今米國の文化の中心たる市俄古、紐育、ボストン方面を以て云へば槪して乾燥してゐる。ナイヤガラの大瀑布附近でもこの感じがあつた。ロッキイ山中では六年間も降雨を見ない處があると聞いた。不毛の平野に唯栗鼠の遊ぶのを見る。誠に荒寥の感があつた。唯、華府は純然たる政治區として淸淨閑靜、雄大莊麗の別天地であり、其記念的建造物の偉大なることと眼を驚すに足るものがある。又ワシントンの舊跡のあるマウンド、バアノン邊の風光は琵琶湖畔を想はせ幽婉限りないものがある。米國の倫敦と呼ばれるボストンも亦落ち着いた靜かな都である。然し、一般に云つて米國は富と科學の力で造り上げたやうな觀がある。少くとも東部はさうである。自然の方面から見て決して惠まれた國とは云へない。しかも西南には豐饒で南國的氣分の漲る廣大な區域を控へてゐる。米國人の氣質を論ずる場合には獨逸に於けるよりも更に愼重な觀察を要するであらう。私一個としては「粗大」、「無頓着」、「樂天」と

云つたやうな印象を得たが、其科學的施設と政治的手腕とから推すと豪放で開放的の樣に見えて實は中々精緻なところを有し機略に富んでゐるらしく思はれる。そして一方に諧謔(ユーモア)を解する國民である。卽、西南的要素を加味した東北的型(タイプ)と云へないであらうか。

紐育から大西洋を渡つてサウサムプトンへ上陸すると嚴冬の候に係らず綠の草が一面に生へてゐて牧牛が悠々と遊んでゐる。キユーガアドウンには桃李の花が咲き綻びてゐた。英國は常綠(イムマアグリユーン)の國であるやうに感じた。然し名物の「霧(フオグ)」にでも出逢つたら倫敦は陰欝の都會だと云ふ印象を與へられたであらう。私の英京滯在は極めて短かゝつたから、その島國的自然と堅實であつて動々もすれば保守的に傾く英人の氣質との間にどういふ關係があるかを斷定する勇氣は無い。此處には自然の外に歷史と國力とが重大な影響を與へてゐるに相違無い。

佛蘭西は明かに自然に惠まれた國であることを思はせられる。巴里市中の公園でも「ボア」の如き深山幽谷の趣がある。その他並木(アレエ)の美さなど天下に冠たるものであらう。殊に南佛一帶の風光は明媚溫柔の極みである。之を獨逸に比べると非常に明るく朗かな感じがする。佛人に於ては何よりもその官能(センス)の銳敏といふ點が眼に着く。これが文化の諸方面に現はれてゐるやうに思はれる。所謂「エスプリー」(Esprit)と云ふ言葉は、「機智」といふやうな譯語では云ひ現はせない、もつと一般的な複雜な意味を持てゐること、なほ獨逸の「ゲミユート」(Gemüt)が「情意」といふ曖昧な譯語では片附けられないのと同樣であるが、この兩國民に特有の性質乃至作用は文化的傳統を外にして直ちに兩國の自然と關聯するところがあると私は思ふ。

自然と人との交渉は、異つた諸要素が集合し融和してゐるやうな土地に於て最も興味ある現象を生じる。瑞西、白耳義に遊んで私はこの感を深くした。

ブリユツセルは小巴里と稱せらるだけあつて、萬事佛蘭西風であり、瀟洒な居心地の好い都會である。言葉も無論佛蘭西語を常用してゐるが、その間に往々日耳曼系統のフレエミツシユが交つて來る。それがつい傍のアントワアプに行くと餘程廣く行はれてゐる。此處の婦人の風俗を見ると頭布めいた帽子を冠

り、肩の下つたショオルを纏つたのをよく見受ける。伊太利ヴネチヤの女も同様の物を着てゐるが、その色彩と氣分の上に非常な差違がある。アドリヤチュの海に臨む水都の女は髪の結び方、衣裳の着こなし、すべて何となく媚めき、眉黒く脣紅く、厚化粧をしてゐるが、この女は一體に地味で灰色の感じがする。それが繪畫の情調の上にも明かに現はれてゐる。同じ港町でもその情調に於て甚かしい隔たりがある。海そのものが生み出す變化ではあるまいか。

瑞西はその國名すら固有のものを持たぬ國である。英米人は「スヰツツアーランド」と云ひ、佛人は「スヰス」と呼び、獨人は「シユワイツ」と稱する。その國語はと問へば或は獨と答へ、或は佛と云ひ、又は伊とも云ふ。之に英語を加へて大概の者は多少とも數個國語を解する。全くインタアナショナルの國である。世界の公園であり、縦斷地帶である、遊覽地として一般の氣分は寧ろ明るく華かであり、殊に佛語も話すロザンヌ、ジエネエヴ邊は南方の情調が漂つてゐるが、仔細に觀察するとヰルヘルム・テルの昔を偲んで今日もなほ射撃の術を勵むこの國民は快活暢達の中にも幾分山嶽湖沼の育む一種沈鬱の氣象を持つてゐるやうに思はれる。少くとも遊覽地の住民としては堅實朴訥のところを持てゐる。この沈鬱な内面的の傾向と豐富ないユーモアの泉とを私は瑞西が生んだ最も偉大なる詩人ゴツトフリード・ケラア於て見出すもそれは日耳曼と拉丁、西南と東北との融合ではないか。云ふことを許されゝば、ブエツセルで聽いたイザエの胡弓にも暗い苦澁の色と明るい快活の調子との混和があつて、老齢のため衰境に向つたことを痛感しつゝも、クライスラアの藝術に比して更により抱容的のものを有つてゐるやうに思つた。イザエを聽く可く薄暗い道を音樂院（Salle du conservatoire Royal de Musique）に急ぐとき、向ふから白耳義の少女が四五名來かゝり、その中の一人が突然「貴君、其處！」と云つて身を屈して私の足許を指した。私は思はず、はだと歩みを止めた。少女達は高笑ひをして行き過ぎようとした。私は「擒がれたな」と思つて手に握つてゐた電車の切符を投げつけたが及ばなかつた。假初の惡戯ではあるが何となくこの國の人に親みを感じさせた。

さういふ氣分を私はまた佛獨の間に介在して常に問題となるアルサス・ロレエン州のシュトラアスブルグに於ても味はつた。ゲエテの足跡をたづねてミュンスタアに登り、詩人の戀人であつて野に咲く薔薇の一輪のやうに美しく可憐なフイデリケ・フリオンの住んだゼエゼンハイムを訪れた私は一夜をこの市に過ごしながら、此處にも、日耳曼、拉丁、兩要素の交錯を見た。活動へ入つてみると佛獨兩語の說明が並んで現はれる。曾てゲエテも出入りしたといふ古いレストランでは市が獨佛兩國の間に動搖した痕を表にして掲げてあつた。昔は日本の留學生が多く來て食事をしたとあつて今だに日章旗を壁間に懸けてある。その家にはいつか盛りを過ぎて淋しく老いて行くやうな娘が二人ゐて返へらぬ過去を懷しがり、親しかつた日本人の名を擧げて消息を知らうとした。無論獨逸系の女ではあるが南國的情味の豊かなものがあつた。二つの勢力の間に狹まつて右し、左し向背常なく、操守を全うすることを許されないこの市の運命が何となくこの二人の娘の境遇に於て暗示せられてゐるやうで物哀れに感じた。

三

ニュルンベルグの　アポロ座で
シベリヤの漂泊人の　歌を聞く
底の知れない憂欝と
物狂はしい陶醉と――
古い革嚢に盛つた新らしい酒、
いゝいゝどんよりと澱み　ぶすくくと泡立つ
不思議に老いた　不思議に若い
永久に憧がれる　ロシヤ人の歌を
この古い都で　聞いてゐると
知らず識らず　涙がこぼれる。

この憂欝と陶醉と憧憬とはかの果も無い露西亞の荒野が齎すのではあるまいか。歷史的原因を外にして確かに自然の影響が多いと思ふ。かういふ點から露西亞人の氣質とその藝術とを稽へてみたらどうであらう。然し、今私は比較的自分に親しい獨

題に就てこの事を論じようと思ふ。
ヘエンに依れば (Viktor Hehn: Gedanken über Goethe) 北獨逸は其詩人をクロプシュトックに於て、南獨逸は之をキーランドに於て見出した。ゲエテも後者に就て「南獨、殊に維納はその詩的及散文的教養を彼に負うてゐる」と云つた。實に低薩遜族(ニイダアザクセン)の情意(ゲミュウト)にはクロプシュトックの人格的及詩的特質を形づくる凡てのものが存してゐた。即、正直なこと、神學的ドグマを持つてゐること、形と内容の無い力の意識崇高說へ向ふ傾き、神秘的調和に就ての瞑想、穿鑿に過ぎて言葉に無理を加へること、何とも知れぬ沈鬱の涙、自然人生へ公然と身を任せ切るといふよりも寧ろ人格的嚴肅の態度を保持すること、これ等の特質がザクセン人をして「救世主(メシアス)」及「頌歌(オーデン)」の作家に隨喜渇仰せしめ、多くの感激せる門徒を生じた所以である。然るにキーランドは慳吝な、愛想の好い現世的人物であつて、何事も重く取り過ぎるやうな事はなく、押韻の遊戯を喜び、ルチアーン、ホラアツ、アリオスト、シヤフツベリィ等を好み、佛蘭西人に對しては憎惡の念を懷かずして、寧ろ其典雅洒脫の風を學び倣つた。作中道德を說く場合にはルタア的の嚴肅說を取らずして諷刺反語を用ゐて相互の寛容を敎へた。
レッシングも亦クロプシュトックと同じく北方の型(タイプ)である。但、高薩遜(オウバアザクセン)・普魯西(プロイセン)の色彩を帶びて居り、一方猶太的精神と内的類似を有する啓蒙思潮の代表者である。飽迄辨證的で、その傑作「エミリヤ・ガロッティ」の如きも只吾人の悟性に訴へて直接的靈動を缺き、劇中人物の實在を信ぜしめる力が無い。其批評に於ても往々自然も想像との始まる境目までは達するが、そこから引返してしまふ。ヘルデルはこの點に於て一步を進めたが、猶ほこの新らしき領土を發見することはこの北方の兒に與られてゐなかつた。鄕土的に云つて彼に最も近いカントも認識の限界を定め、物自體の不可知境を殘した。彼の後繼者フイヒテは自由の原理を大膽に徹底せしめて、客觀界を主觀の所産と見たが、二元調和の境に達せんとして未だ到らなかつた。蓋し自我を棄てずしては不可能のことなのである。而て南方から二人の思想家が現はれて理想と現實、思惟と實在との一致を說くに及んで始めて限り無く豐富な世界が開かれ、精神の鄕土が回

復せられたのである。即、シエリングとヘエゲルとである。

ヘエンは更に進んで「南西及北東」の別を明らかにし、特にゲエテに於てその南西的要素を擧げ、如何に彼がワイマアルに住んで常にライン地方の溫柔な氣候を慕つてゐたか、又伯林を訪れることをどんなに臆劫に思つてゐたかといふやうな事を述べてゐる。伯林から來る多くの若い詩人や、眼鏡を鼻の上へ載せた若い學者などに接すると一種の反感を抑へることが出來なかつた「彼等は乾枯(ひから)びて生ひ立つた人達であり、教育に依てその青春を奪はれ、官能に歡びを知らない者である。」とゲエテはエッケルマンに話したと云ふ。要するにヘエンの考察の要點は次の如きものである「獨逸そのものの瓦解を防ぐことは、エルベ河からワイクセル河の彼岸に至る地方に住んでゐた剛健な種族にのみ成功したのであるが、それは單に形式と存在とを與へ得たので、之に人道的な、理想的な内容を盛り入れ、獨逸の存在をして全人類にとつて貴重にして價値あるものに仕上げたのは、是れ南方及西方の使命であつた。」ゲエテも「マルク地方の蕪菁(かぶら)は栗(くり)と交ぜると一番味が好い。そして、この二つの結構な物は互に遠く離れたところに育つのだ。」と云つたさうである。

私はヘエンの說が何處まで妥當であるか遽かに論斷することは出來ない。文學史家ナアドラア（Nadler）の如きはその著「種族的及地方的獨逸文學史」（Literaturgeschichte der deutschen Stämme und Landschaften）に於て「西羅馬と東羅馬」の文化を對立せしめ、進んで「拉丁的日耳曼」、「希臘的スラヴ」の文藝復興(ルネッサンス)を擧げ、更に「獨逸的スラヴ」のルネッサンスを說いて、浪曼主義は東獨逸的のルネッサンスであると論じてゐる。これ等の點に就ては更に精細周到の研究を要する。今は只兩者とも自然と種族と文化との密接な關係を認識し主張する點に於て一致してゐることを擧げれば十分である。「吾々はシユレジエン生れの詩人を、五六十の六脚韻を作つたからと云つて古典流(クラッシチスト)と呼ぶことは決して出來ないし、又シユワアベン人を童話的小說を好んだとか、シユライエルマッヒエルとノヴァーリスに一寸握手したからと云つて浪曼派(ロマンティカア)と考へることは出來ない」とナアドラは斷言してゐる。私はそれ程まで種族的地方的影響の法則を信ずることは出來ない。先づ「個性」を切り離

して見ることをプリンシプルとすることは前述の如くであるが同時に又、イプセン・ヘッベル・クライストといふやうな線を引いて、詩作の類似の底に自然的境遇の一致を見出す可能とも信ずる者である。

そして「獨逸」といふものを全體として考へる場合、そこに南北東西の別があるに係らず、全體としては所謂北方的要素が勝つてゐるやうに思はれる。伯林からハイデルベルグへ轉學してみると言葉のアクセントが異り、自然は著しく和み、山秀で水清く、人も亦享樂的で酒と歌とに親み、勤勉努力の風に乏しく寧ろ悠々自適の境致を慕つてゐるやうに感じたが、しかも之を佛伊の人々に比すると大なる相違がある。寧ろ瑞西人と共通の要素を多く持てゐるやうに思はれる。即、「南國的憧憬」といふ心は古來獨逸人の胸に深く宿つてゐる。浪曼的憧憬と稱するものもこゝに根ざすのではあるまいか。ハウプトマンはその象徴劇「さてピッパは踊る」の「遍歴する青年」に於て獨逸人の浪曼的思想を具象し、南方ヴエネチヤから傳へられた玻瑠の精なる「ピッパ」に對する愛に依て獨逸精神と南國的美の理想との融合を暗示した。イプセンは最も明るい伊太利のソレントに於て彼の最も暗い「幽靈」を書いた。「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」及「吾ら死者覺醒の時」にも現はれてゐる「生の歡び」といふ思想は、畢竟この北歐詩人の南國的憧憬と、之を充さなかつた悔恨諦觀の聲ではないか。「太陽を、太陽を！」と呟いて痲痺昏迷の狀態に陷るオスワルドの悲慘な最後を獨逸座の舞臺でモイッシイの名演に依て眼のあたり見た私は殊に痛切にこの事を感じた。

四

「幽靈」に關聯して「遺傳」の問題を思ふ。自然的境遇、種族的血族といふ先天的要素に對して苦鬪する人々の事を考へる。思想上の傳說といふものよりも更に深刻に執拗に個性に纏はるものはこの肉體的遺傳である。「醜男の悲劇」とも稱すべきものを吾々は沙翁に於て、シラアに於て持てゐる。醜婦の悲しみは日常生活に於て始終目擊せられる。それは病菌の遺傳といふよりも更に一般的である。單に「皮膚の色」のみで既に國際的問題を惹起するのに十分ではないか。世界に旅してみて「人種」

の問題の意義が意外に重大なことを悟る。猶太人の迫害排斥の如きは全く想像の外である。私が伯林で識つた獨逸人は偶然にも大部分猶太系統であつた。それは第一の猶太系を識れば必ず第二、第三を識ることになる。それ程彼等相互の結托は堅いのである。無形の汎猶太國を形くるが故に排斥せられるのだと云ふ。日曜の代りに金曜を休み、自宗の祭日を嚴守し、斷食をさへ實行するものがある。著しく世界市民的(コスモポリタン)であり、空想的であると同時に鋭い理知を持てゐる。從て學術文藝の方面に偉材を生じ、社會的にも强大な實力を握り、大新聞を經營して輿論を左右せんとしてゐる。しかも一般的には依然として疎外せられてゐる。畏怖と嫌厭とを以て迎へられる。自ら猶太系たることを誇りとする者もあるが概して之を隱さうとする。私は可なり細そくこの血統の人の長所と短所とを見たやうに思ふ。始めは獨逸系と猶太系とを區別する事を不思議にも滑稽にも思つた。「人間」であればそれで宜い。何が故に「血」の如何を問ふのであるかと云つてゐた。然し時を經るに從ひ、例外はあつても、猶太系に特有な性質が若干あることに氣付き始めた。單に鼻の形、髮の色のみでなく、内的にも特徵のある事を認めるやうになつた。長短美醜共に眼について來た。これは長い抑壓迫害の歷史に由來するのであらうが其根本は種族血統の問題に歸着する。既に其姿勢、身のこなしの端にまで種族的特徵が現はれるとさへ云はれるのは恐ろしい氣持がする。——

歸つて來て日本を見る。四季の調和した美しい國である。山國と海國との美を併せ有してゐる。北國的氣分と南國的情調とを容れつゝ全體として中和した溫雅な國土である。しかも、山水の美は瑞西のそれに比して規模が小さく雄大の趣を缺いてゐる。北歐の奇峭深刻の心も無く、また南歐の熾烈な色と光とを持たない。米露の如き廣漠たる平野の姿に到底之を求め難い。この小さく調和し、淺く澄み、狹く整頓せられた郷土を思ひ、更に國民として世界文化史へ貢獻した痕を考へると少しく淋い氣持になる。然し、私は所謂運命論者にはなりたくない。寧ろヘエンの云ふ「反動の力」を信じる。ブラアエといふ大天文學者は霧の重く低れたやうな北歐に生れ、人々が形も輪廓も無いやうな厚い裘(けごろも)に包まれてゐるイスランド島から大彫刻家トルワ

ルドセノが出た。希臘藝術の理想を說き、獨逸の美學に新生面を開いたキンケルマンも北方の子であつた。否、獨逸それ自身を取て考へてみても、決して自然に惠まれた國とは云へない。山嶽も概して雄大の趣を缺き河水は濁つたのが多い。地も全體として肥沃とは云へまい。只深い美しい森林が人を瞑想と憧憬とに誘つて行くやうである。獨逸の誇りとする文化は主として國民の努力精進の結果と云つて差支ないと思ふ。獨逸的內面性堅忍、重厚の風は寧ろ反動的勢力に負ふところが多いのであらう。官能の銳さに於ては固より佛人などに遠く及ばない。表現主義的藝術を取てみても、造形美術の方面に於て佛人は極めて鮮かな淸新なものを生み出してゐる。到底獨逸の比ではないやうに見える。實際この運動は佛、伊、露の方面から獨逸に傳はつたのである。しかも種々の流れを綜合して一つの表現主義なるものに組織した功績は獨逸にある。それは單なる模倣でなくして同化である。今や一頓挫を來たして早くも新自然主義、新客觀主義或は汎象徵主義、綜合主義等の聲が聞こえるが、獨人の好む「イスムス」からは何物も生れないであらう。恐らく又前掲の諸國から何か新らしい光が映し出て獨逸に傳はり、獨人は更にこれを組織立てるであらう。獨逸人は官能の方面で及ばない點を內面性で補つてゐる。惠まれざる自然的環境に眼を閉ぢて內部の世界に沈潜した結果カントの哲學が生れ、內部のリズムに耳傾けた結果がベエトオヴエンの音樂となつたのではないか。而て自然よりも寧ろ人間を凝視する傾向が特に獨逸の戲曲を隆盛ならしめた所以だと思ふ。そしてゲエテに至ると最早種族的限界を超越し、その特性を有しつゝ、しかも高くその上に出で、廣くその外に亘つてゐる。天才は一切を抱擁する。「體驗即創造」の力はゲエテに於ては自明の事柄であるが、同時にこれは獨逸人の有する貴重な世襲財産（エルプシャフト）だと思ふ。その驚嘆すべき同化力と組織力とはこの創造力の發現ではないか。ゲエテの場合のやうに深く强くは働かなくてもこの力が獨逸人の素質の一部を成してゐるやうに思ふ。そしてこの力を養ふことが即先天的境遇に打ち克つて新らしい運命を切り拓く唯一の道だと考へる。そして又或程度迄は養ひえられる力だと思ふ。

小さく惠まれたことは、虐げられたことよりも屢々危い。歸つて來てこの事を思ふ。



海魂

竹越與三郎

文明を標識とする近世國家の特色の一つは教育を重んじ、之に出つて迷信を排斥すると云ふことである。併ながら教育を過信するの結果は、又一の迷信を生ずることとなつた。其迷信にも種々の形はあるが、先づ第一には教育萬能患者となつて、教育を施しさへすれば、之に依りて人間の性質本能をも變じ得べく、凡庸の人をも、天才とならし得べしと信ずることに至つた是が教育より生ずる迷信の最も大なるものである。併ながら教育は決して人性や、本能や、才能を變じ得べきものではない。教育の力は自然が人類に與へたる天分を、十分に發達せしむるといふことに止まるものである。アイザック・ジスレリーの言葉に『文明時代に教育は缺くべからざるものではあるが、天才は一も之に出つて生ずるものではない。教育の盡くる所は、即ち天才の生ずる所である』と言つて居る。又ビーチャーの言葉に「教育は尚ほ教養の如し、物の形を變ずるも種類を變ずることは出來ぬ」と言つて居る。是等の言葉は極めて平凡ではあるが消磨すべからざる眞理を含んで居る。然るに是等の警戒あるに拘らず、近世の國民滔々相率ゐて教育萬能患者となつて來て居るが、其教育萬能患者の中で最も甚しきものが獨逸であつた。

獨逸に於て教育の價値が認められ、教育が行屆き而して教育が獨逸の隆盛を來したことは何人も異論の無い所であるが、夫だけに獨逸は他國に比して一層教育を迷信するの傾がある。其獨逸の中で最も偉大なる患者は即ちカイゼルであつた。カイゼルは父祖の遺業を繼いで獨逸の覇權を樹立し、之に依つて歐洲に制令するのみならず、所謂世界政策を行つて天下に號令せん

とすることを考へた。其計畫の偉大なる、其抱負の崇高なる、歷史上の一大人物たるを失はぬものである。が彼は此覇權を陸軍に依つて樹立つるのみならず、理化學教育に依つて維持するのみならず、又之を海に及ぼさんと企てた。凡そ世界政策を樹てんとすれば海上に雄飛して海權を占有することが必要の手段であると云ふことは、何人も氣付く所であるが、亞米利加のマハンが所謂『海上の權力』を占むるにあらずんば、世界政策を樹つることは出來ぬといふことを論じ出して以來、海權を掌握するといふことは一層カイゼルの心を動かした。此マハン說の信者は獨りカイゼルのみならず、日本にも多くの信者があり、亞米利加には勿論多くの信者があつて之より獨逸、亞米利加及び日本は海權を掌握せんと欲して大艦隊を作らんことを計畫すること多年であつた。其中にカイゼルは最も熱心なる信者であつて、獨逸海軍擴張の目的は英吉利の海軍と相競爭して勝を制するにありと云ふのであつた。英吉利は又之に對抗せんが爲に所謂二國標準主義なるものを立てゝ、獨逸が一艦を造れば英吉利は二艦を造るといふが如き有樣で、數年の間競爭した。

併ながら英吉利は多くの艦隊を有ち、海上の權力を有つに拘らず、其國家は既に漸く老成の境に入つた。之に反して獨逸は興隆尖新の勢あるが爲に、海軍擴張は獨逸の方に於て最も優勢を占めて艦型、速力、砲の威力射程及び機關、是等のものに於て獨逸の新海軍は着々として英吉利の壘を摩するやうになつた。カイゼルが嘗て『獨逸の將來は海にあり』と言つたときは、獨逸が海權を占有せんとする理想は殆んど此處に達せられんとする勢を示し千九百十四年の開戰前には第一線に起たんとする第一艦隊の戰鬪艦八隻、第二艦隊の戰鬪艦八隻及び四隻の裝甲巡洋艦に於ては獨逸は英國と同一の艦數を有し其砲に於ては、寧ろ英國に勝る或る者を持つて居た。唯だ第三隊艦以下の豫備艦に於て、獨逸が甚しく劣勢であつたのみであつて、英國の旗艦アイロンヂユークと獨逸の旗艦フリードリッヒ大王と、孰れが海上の權力を占むべきかは疑問であつた。然るに何ぞ圖らんヂユツトランドの海上に英獨の兩艦隊相會ふや、獨逸は一敗して地に塗れて再び起つことが出來なくなつて獨逸の覇業は借て惜き獨逸の存亡すらも疑はるゝ樣になつて來た。是は何

故であるか。獨逸は『海權』を占有するの必要なることを知つて『海魂』を國民の間に注ぎ込むことを知らなかつた結果である。

海魂とは何であるか、海魂は卽ち（sea spirit）である。海上を家とするの心である。蛾の甘きにつくが如く、國民相率ゐて海に赴かんとするの心である。萬里の波濤を開拓せんとするの雄心である。波濤に現れた自然力と相抗爭することを以て男子の愉快として樂しむの心である。此海魂がなくては大艦隊ありと雖も何の效果もなく、恰も大砲の後に人無きが如きものである。然るに獨逸は此海魂を養ふことを怠つて、大陸軍を造るが如く大艦隊を造り、船員を造り、大砲を造り、機關を揃へさへすれば、海權を制することが出來ると思ふたことが敗亡の本であつた。獨逸は此點に於て二重の過失を犯して居る。第一は海魂無き國民の上に海權を制する政策を樹てんとしたことである。凡そ海魂なるものは敎ゆるのみでは出來るものではなく、國民の本能に其根據を据へねばならぬ。一人の力を以てしても馬を水邊に導くことは出來る。併ながら百人の力と雖も馬の好まざるに水を飮ましめることは出來ぬのである。總て動物より人類を通じて本能、天性を外にしては如何ともすることが出來ぬのである。恰も胡馬北風に嘶き越鳥南枝に巢ふと云ふが如く總ての生物は本能に依つて動くものである。獨逸は海權を制せんとするならば、先づ其根據を海魂に据へねばならぬ。其海魂を獨逸が有つて居るや否やといふことを察せず、唯大艦隊を造り、大砲、彈藥、合金、砲術機關といふやうなもので「ラボレトリー」の中に座して海を制せんと試みたのであるが、是が第一の過失である。次に獨逸の海に面したる部分は昔の所謂ハンザ同盟に加入した地方であつて、鯡漁の爲には海を凌ぐことを辭せざる人民であつたから、獨逸國民の間には海を家とするの本能はないとは言へないのであるが、其本能を刺戟し敎育し發達せしめるといふことを怠つて、唯理化學上の力及び陸軍を造りしが如く組織がありさへすれば海を制し得るものであるといふことを信じた是が第二の過失であつた。

然るに英吉利人民は此點に於ては何人が唱導するといふことではないが、自然に海魂を有つて居つた。卽ち彼等は十五世紀

以來西班牙、葡萄牙、和蘭邊の民と相爭ふて海上の權力を制すると共に、海を樂しむの心が誰が敎へるともなく、國民の間に磅礴として居つて、多くの船舶、造船術と共に强大なる海魂を有つて居つた。故に英國と獨逸が同一の艦隊を有つて居るとすれば、英吉利が此海魂の力に依つて獨逸に打勝ち得べきことは自明の理であつた。人は多く獨逸の敗亡を以て外交の失策に由因すと云ふ者があるが卑見によれば海魂なき國民の上に海權を取らんとすることが第一原因である。英吉利の人民に海魂があるといふことは、多くの事に於て證明が出來るが、最も明白なる證據はバアチャスの航海記二十卷である。此航海記は近世に至つて英吉利の船頭、學者、冒險家が氷山の屹立する氷海、ペンギン島の步行する南海、珊瑚の巢をくむ熱海、有ゆる海面に險を冒して海を制せんとした冒險談を蒐めたものである。今日世界何れの國の船舶も、海上を行くこと尙ほ陸を行くが如く自由に安全に航海が出來るのは全くとは言はぬが、十に八九は此バルチャスの航海記に現れた冒險者が、海上の潮流、暗礁、波濤の力、風の方向、海水の深度を報告して、海圖となつたお蔭である。是等のことは政府の命令で出來るものではない、敎育に依つて出來るものではない。英吉利人が殆ど其人種の本能とも謂ふべき海魂を有つて居つた結果である。昔支那に於てはマイソロジー時代に伏羲と云ふ天子があつて漁獵すること牧畜をすることを敎へた。神農と云ふ天子があつて田を耕すこと、草根木皮を以て病を治することを敎へたと云ふて祭られて居るが、英吉利人は此點に於ては殆ど近世史の海の伏羲であり、海の神農であると云つても差支はない。世界の何れの港に於ても英吉利人が今猶横行濶步して、傍若無人の狀あるのは無理もないことである、此海魂が英吉利にある。而して大艦隊があつた是がチュットランドに於て海魂無き獨逸の大艦隊を打破するも敢て理外の理ではなかつたのである。

獨逸は既に大艦隊が海底に沈むと共に海權を失つた。今や大艦隊を有ち、大船舶を有つて居るものは英吉利と亞米利加と日本のみである。獨逸に依つて最初唱へられた世界政策の「ミリタリズム」は獨逸の敗亡と共に影を潛めてしまつた。而して大戰の慘禍に鑒みて各國とも大艦隊の競爭の結果の恐るべきを

發り、華府會議となつて、各國互に其戰艦の數を制限して、所謂兵を銷すといふ理想の狀態に進まんとすることは賀すべきことである。併ながら大艦隊は減せられ、ミリタリズム影を潜むと雖も、平和の競爭は各國の間に熄むものではない。コムマアシヤリズムによつて海を占有し海權を張らんとするの志は各國とも今猶止まぬのである。然らば此三國中海權を制すべき前途を有つて居るものは誰であるか、英吉利が多くの船舶を有ち熟練したる船員を有し、而して其背後には雄大なる海魂を有つて居るといふことは何人も疑はざる所であるが、米國には果して此艦隊大船舶を維持して海權を制する海魂があるや否や、頗る疑問である。米國に於ける有ゆる制度、有ゆる文物は多くは歐洲の模倣である。歐洲の總てのものを米國に移して、而して之を改良したのが米國の文明ではあるが、其の米國が以て歐羅巴に教ゆべしとする所のものは鐵道のみで、其計畫の偉大なる其組織の完備したる、及び鐵道を中心として發達したる交通の方法の周到なることは、米國が歐羅巴に教ゆるに足るとせらるゝ所のものである。併ながら米國は海事に於ては何等誇るべきものを有つて居らぬ。米國が今日の發港ポートランド邊の所謂太平洋沿岸に出たのは、海に出んと計畫して出たのではない、亞米利加の毛皮商が印度人と毛皮の交易をしつゝ、其利を漁つて偶然にも太平洋に近づき、其結果海を發見したのであつて、海に出んとするの心あつて出たものではない。而して太平洋に出た後も、東洋に鯨を捕る、或はカムチヤツカから毛皮を輸入するが爲に、支那海日本海に商船を送つたことはあるが、當時に於ても今日に於ても未だ大海國と云ふことは出來ぬ。依然として大農業國である。亞米利加の制度の中最も發達したものは鐵道であるが如く、亞米利加に於て最も發達せざるものは海事である。亞米利加人の行樂は山にあり、平原にあり、而して其天才は平原を開墾することに於て發達して居る。亞米利加人は太平洋に出た後も尙ほ魚類を臺所に用ゆることは極めて少い。モントレーの地方に於て魚を漁ることは、伊太利の移民が之を教へて、亞米利加人之を習つたのであるが、今日は日本人が伊太利人に代つてモントレー一帶の漁業はやつて居るといふ形である。亞米利加人は今日に於ては魚類を食べる。併ながら其魚類

を漁る者は多くは亞米利加人でなくして外國人である。日本が德川氏三百年の間遂つた政治の爲に醉生夢死の狀態に在つたとき、ペリーが日本に來た。ペリーの乘つて太平洋を渡つた船、及び未だ人の知らざる國を開かんとするの志は頗る雄偉なものであつたが、併ながら海の國としての日本は、當時最早既に立派なる國となつて居つた。而して今日の亞米利加は大艦隊を有つて居るが、其水兵は外國の募兵が少なくない。英吉利の如きは此戰爭以前には船員の紐育に上陸することを嚴重に取締つた位である。何故ならば歐羅巴の訓練せられたる船員は、亞米利加の船に高い給金に依つて誘拐せられることを恐れたからである　成る程今日の亞米利加は大艦隊を有つて居り、而して其大艦隊が砲術に於ては世界有數であるといふことは否定は出來ぬ何故ならば其巨砲たるや、惜氣もなく實彈を以て射撃演習をするからである。之に反して日本の如きは費用を吝む爲に、實彈演習の數が少いから、命中率に於ては亞米利加の海軍は有數であるとは言へる、併ながら如何にせん亞米利加人は平原の民であり、山嶽を樂しむの民であり、其天才は鐵道に於ては現れて居るが、未だ海に於て現れたとは言へない。畢竟海魂につきては頗る疑はるゝ人民である。海魂無くしては大艦隊あり、大砲あり、大船舶ありと雖も、未來を海に托して發達するといふことは望むべからざることである。若し教育が人間の本能を變へることの出來ざる以上は、而して本能に基かずして國民の政策の樹つべからざる以上は、亞米利加の將來は海にありと云ふことは出來ぬ。余は亞米利加に就きては十分の知識を有すと僣する能はざるが爲め、米國は海權を取り得ずと斷言するの勇氣はないが、去りとて海權を取り得べしと保證する事も出來ぬ。

餘ます所は日本であるが、日本は果して海に於ての將來を有つて居るや否や、我艦隊は悉く歐米の艦隊の模倣と云ふことは蔽ふべからざる事である。軍艦薩摩の如きはドレットノートと時を同じうして案出せられたりと雖も、其生るゝやドレットノートに遲るること數年である。其大砲火藥悉く皆歐米の模倣といふことは蔽ふべからざることである。また其商船に於ても英米に及ばざるものあることは否定は出來ぬ。併ながら日本の艦隊商船は歐米に劣ると雖も、國民の海魂に至つては亞米利加に

終り、華府會議となつて、各國互に其戰艦の數を制限して、所謂兵を銷すといふ理想の狀態に進まんとすることは賀すべきことである。併ながら大艦隊は減せられ、ミリタリズム影を潜むと雖も、平和の競爭は各國の間に熄むものではない。コムマアシャリズムによつて海を占有し海權を張らんとするの志は今國とも今猶止まぬのである。然らば此三國中海權を制すべき前途を有つて居るものは誰であるか、英吉利が多くの船舶を有ち熟練したる船員を有し、而して其背後には雄大なる海魂を有つて居るといふことは何人も疑はざる所であるが、米國には果して此艦隊大船舶を維持して海權を制する海魂があるや否や、頗る疑問である。米國に於ける有ゆる制度、有ゆる文物は多くは歐洲の模倣である。歐洲の總てのものを米國に移して、而して之を改良したのが米國の文明ではあるが、其中米國が以て歐羅巴に教ゆべしとする所のものは鐵道のみで、其計畫の偉大なる其組織の完備したる、及び鐵道を中心として發達したる交通の方法の周到なることは、米國が歐羅巴に教ゆるに足るとせらるゝ所のものである。併ながら米國は海事に於ては何等誇るべきものを有つて居らぬ。米國が今日の發港ポートランド邊の所謂太平洋沿岸に出たのは、海に出んと計畫して出たのではない、亞米利加の毛皮商が印度人と毛皮の交易を[illegible]つゝ、其利を漁つて偶然にも太平洋に近づき、其結果海を發見したのであつて、海に出んとするの心あつて出たものではない。而して太平洋に出た後も、東洋に鯨を捕る、或はカムチャツカから毛皮を輸入するが爲に、支那海日本海に商船を送つたことはあるが、當時に於ても今日に於ても未だ大海國と云ふことは出來ぬ。依然として大農業國である。亞米利加の制度の中最も發達したものは鐵道であるが如く、亞米利加に於て最も發達せざるものは海事である。亞米利加人の行樂は山にあり、平原にあり、而して其天才は平原を開墾することに於て發達して居る。亞米利加人は太平洋に出た後も尙ほ魚類を食所に用ゆることは極めて少い。モントレーの地方に於て山を漁ることは、伊太利の移民が之を教へて、亞米利加人之を習つたのであるが、今日は日本人が伊太利人に代つてモントレー一帶の漁業はやつて居るといふ形である。亞米利加人は今日に於ては魚類を食べる。併ながら其魚類

を漁る者は多くは亞米利加人でなくして外國人である。日本が德川氏三百年の間違つた政治の爲に醉生夢死の狀態に在つたとき、ペリーが日本に來た。ペリーの乘つて太平洋を渡つた船、及び未だ人の知らざる國を開かんとするの志は頗る雄偉なものであつたが、併ながら海の國としての日本は、當時最早既に立派なる國となつて居つた。而して今日の亞米利加は大艦隊を有つて居るが、其水兵は外國の募兵が少なくない。英吉利の如きは此戰爭以前には船員の紐育に上陸することを嚴重に取締つた位である。何故ならば歐羅巴の訓練せられたる船員は、亞米利加の船に高い給金に依つて誘拐せられることを恐れたからである　成る程今日の亞米利加は大艦隊を有つて居り、而して其大艦隊が砲術に於ては世界有數であるといふことは否定は出來ぬ何故ならば其巨砲たるや、惜氣もなく實彈を以て射擊演習をするからである。之に反して日本の如きは費用を吝む爲に、實彈演習の數が少いから、命中率に於ては亞米利加の海軍は有數であるとは言へる、併ながら如何にせん亞米利加人は平原の民であり、山嶽を樂しむの民であり、其大才は鐵道に於ては現れて居るが、未だ海に於て現れたとは言へない。畢竟海魂に就きては頗る疑はるゝ人民である。海魂無くしては大艦隊あり、大砲あり、大船舶ありと雖も、未來を海に托して發達するといふことは望むべからざることである。若し教育が人間の本能を變へることの出來ざる以上は、而して本能に基かずして國民の政策の樹つべからざる以上は、亞米利加の將來は海にありと云ふことは出來ぬ。余は亞米利加に就きては十分の知識を有すと僭する能はざるが爲め、米國は海權を取り得ずと斷言するの勇氣はないが、去りとて海權を取り得べしと保證する事も出來ぬ。

餘ます所は日本であるが、日本は果して海に於ての將來を有つて居るや否や、我艦隊は悉く歐米の艦隊の模倣と云ふことは蔽ふべからざる事である。軍艦薩摩の如きはドレットノートと時を同じうして案出せられたりと雖も、其生ずるやドレットノートに遲るること數年である。其大砲火藥悉く皆歐米の模倣といふことは蔽ふべからざることである。また其商船に於ても英米に及ばざるものあることは否定は出來ぬ。併ながら日本の艦隊商船は歐米に劣ると雖も、國民の海魂に至つては亞米利加に

優ること數等であると云ふことが出來る。此海魂たるや或はまだ訓練がないとは言ふことが出來る、或は又教養者を缺くといふことは言へる。併ながら我國民の海魂に富むことは頼母しく思はるゝ所である。古事記の神話に豐玉彦命の持て居つた潮滿(シホミツル)珠(タマ)と潮乾珠(シヤヒルタマ)に就きて兄、火照(ホテリ)の命と弟、彦火火見(ヒコホホデミ)の命と相爭ふたといふ記事であるが、珠といふことは所謂アレゴリーであつて、月の引力に因つて海潮に干滿のある理窟を知つて居つて、當時の部落の民に制令したと云ふことに過ぎぬ。また日本上代の神の或る者は『マナシガタマ』の船に乘つたと云ふ記事があるが是は竹籠で作つた船で、現に安南地方に於ては之を用ゐて居る、また多くの神が鰐魚に乘つた記事がある。之を初として古事記一卷海神の記事に富む。余は唯だ奇を好んでかゝる閑話を挿まんとするものではない、我中國九州、山陽、四國の民は此神の子孫であつて爾來數千年海邊に生死し、海上を來往して國民的心性を作つたからである。足利時代に於て朝鮮滿州の沿岸を抄掠したるを初として漸次南方支那から安南、暹羅、ジャヷア、スマトラ、ピリツピンに其勢力を及ぼしたる和寇は決して新人種にあらず、干珠滿珠を有つた神、鰐魚に乘つた神『マナシガタマ』の船に乘つた神々の子孫に他ならぬのである。然るに此等の海神を祖先とする貴族等が奈良に入り京都に入りて隋唐の制度に模倣して、衣冠、禮樂、田制、刑法を作つて一種の文明を起すと共に、秀美なる山川に圍繞せられて漸く其の心性に變化を生じ、海神の子孫の四肢中より、鹽分を脫却して純然より優柔無爲の社會を生ずるに至つた。十二世紀に至つて平淸盛出で奈良京都を中心とした『山岳の日本』を一變して『海上の日本』とせんとして、都を福原に移した、福原は即ち今の兵庫である、世には淸盛の遷都を以て單に內政の都合から案出した發作的の思付の樣に云ふものあるが、小人焉んぞ英雄を解んやであつて、淸盛が音戶の瀨戶を開鑿して、商船の來往に便し、嚴嶋に別莊を營みて、此に多嶋海の風光を樂しみ、嫌がる高倉上皇を强ひて、宋式の船に乘らしめて嚴嶋に來往したることゝなどを思ひ合すれば、彼が山岳の日本を、海上の日本とせんとしたる圖望を知ることが出來るであらう。彼に幾多の過失あつたたに係らず、余は此一事によつて彼をして尙ほ二三十年政權を

維持せしめたらは、日本歴史は極めて興味ある記事を遺めたであろうと思ふ。

是より世は下つて北條氏の中頃となつて、所謂蒙古十萬の軍勢が攻めて來ることゝなつたが、此蒙古が日本を攻めるといふ以前に、日本からは既に朝鮮支那に對して和寇なるものが出掛けて居つたのである。而して元が敗れて本國へ退くとき、和寇は潮の如き勢を以て朝鮮及び支那の沿岸を荒した。此和寇は如何なるものであつたかと云へば、初は四國九州の土豪六七十人の村民を率へて侵寇したるものが、千六百年代の初には大艦隊を作り『連艦數百海を蔽ひ浙江の東西、楊子江の南北、濱海數千里、同時に警を告ぐ』との記事、明史に現はるゝに至る、此和寇等は如何なる船を用ひたるかと云ふに、小なるは四五十人より七八十人を容れ、中なるものは一二百人を容れ、大なるものは三百人を容るゝに過ぎす、大船は櫓三十六枚、中船は櫓二十枚小船は櫓七八のみ、支那の學者之を論じて『其形卑小にして巨艦に遇へば仰ぎ攻むること難し倭船は人ごとに水四百斤を帶び毎日一人六碗の水を用ゆるのみ愛惜を極むる此の如し』と云ふ是れ船の小なるがためである。然るに此時支那船は如何なるものであつたかと云ふに福建船、兩廣船の種類はあつたが其遠洋に出るものは、方一百二十歩あり二千人を容るべく、木を以て樓と城とを甲板の上に作り、船上馬を走らするに足るほどのものであつた。然るに倭寇は此の細小の船を以て支那の巨艦と戰つて之を追ひ、遂に永く支那海の海權を占有した、朝鮮王の如きは肥前肥後邊より出た八九十人より成る小船に對しても妥協講和して其『海賊大將軍』權を承認し幾多の賄買品を容れて其禍を免れて居たのである。勇武と海魂とは日本人の全財産にして、造船の技術に於ては尚ほ支那人にすら劣りたることが之によつて知ることが出來る、然るに此小弱の船舶で福建、廣東、上海、廣西、安南、暹羅、ボルネヲ、ジヤヴア地方に來往し大波巨濤の上を行くこと平地を行くが如くであつて、暹羅には常に四五千人の日本人が留つて居たのである、千六百五年に無名の日本海賊が有名なる英國船長ジヨンダヴイスをスマトヲ沖に襲ふて之を殺ろしたる一事は頗る英人を驚かしたダヴイスはパアチヤス航海記に其記錄を留め、またダヴイス海峽の發見

者として海上に經驗を積みたる名船長であつた、當時日本の海賊は七十噸内外の小船内に七十人ほど乘り込みたりと云ふ。七十噸内外の小船でマレー海峽まで來往せんとするの勇膽、殆んど嘆美に値すと云ふべきである。千六百五年は慶長十年であつて、家康已に將軍職を秀忠に讓りたる後であり、歷史家は德川氏の內政を讚美せんとして忙しき時であるにかゝはらず、海外では驚くべきシーローマンスが行れつゝあつたのである。

支那に對する倭寇は、其目的を達すれば則ち四國九州の本土に歸りて妻子を見るものにして、船中に婦人あること少かつた然るに南洋方面に出動する倭寇に至りては、短日月の間に來往すべからざるがため、自から海上に家を爲すの風を生じて來た千五百七十四年と云へば日本の天正二年で信長が一向宗徒を誅殺したる時であつた、然るに海外では支那人李馬鴻及び日本人シオコ等が聯合して作る艦隊が、フイリツピンのマニラを攻擊して西班牙人を追はんとしたことがあつた、此艦隊は六十二艘の船より成り水夫二千人、兵卒砲手二千人女子千五百人、卽ち五千五百人より成る大艦隊であつた、シオコなる日本人が支那人と連結したるものは、多分支那人の船艦を利用したものであらうと思ふ。余は決して海賊を讚美せんとするものではない。併しながら海に面して國を爲すものゝ祖先、何れか海賊にあらざる。余は千五六百年の倭寇の跡を見るたびに英國史のアングロ＝デーン、或はアングロ＝ノルウエーアンの侵畧或はノーマン征服時代の記事を讀むが如き心地することを禁ずることが出來ぬ。凡そ是等の倭寇の事業が單一なる原人的の腕力のみで出來たと思ふのは、歷史を讀むことを知らぬ人のことである。節義を磨き、努力を習ひ、名譽を競ひ、寛洪を學び、服從を知り、協力を解するにあらずんば此等の大衆を集めて强敵と戰ふことは出來ぬのである。事實に於て日本民族の勇氣、節制、等は最も此間に陶冶せられたのであつた。アングローデーンの侵寇は全然、希臘より羅馬帝國に傳はりたるヴイナス式の諂諛なる風尙を打破して努力、勇武、名譽の宗教を歐洲に移植したりとの說を知りて、我倭寇の歷史を讀まば思半ばに過ぐるものがあるであらう。倭寇が支那海に出るや必らず『八幡大菩薩』の旗幟を建つ、之より支那人、倭寇船を呼んで八幡船と稱した。八幡

大菩薩は卽ち神后皇后が三韓征伐中に臨みたる應仁天皇にして九州に祭られたる海神である、倭寇は海中に危變あるや、卽ち頭髪を斷ちて神に祈るの風があつたが、之のみではない、一艦の安全を祈るがため乘員各其持場を固め滿身の血肉によりて其責任を盡くし之より生ずる節制、努力、服從、同心等は殆んど宗教的であつた。英人が海魂を以て一の宗教であると云ふのは偶然ではない。海魂は以上の如く宗教的精神であるが敵に對して强よいのみが海魂ではない、ジュットランドの海戰に先だつ數ケ月、獨逸の潜航艇が數ば英國の商船を襲擊したるがため兩國の兵士、互に怨恨を重ねて、宿敵の如くなつたが、或時英國軍艦が獨逸の潜航艇を擊破したる際、獨艇の士官は其水兵を招きて小册にて逃走せしめ、之に諭して汝等は英國海兵のために救はるゝことと必定なりと云つた。英國の怨を買つた獨逸の水兵すらも抗爭の力なきに際しては、英國海兵は之を救ふこと必定であると信ぜられたものである。英人が此點に關して英國の海魂を誇るも無理ならぬことである。然ども戰ふ能はざる敵に對して寛大なるは、英人の發明ではない、マラバル地方の海賊船すらも長さ數里に亘る艦隊を作りて敵艦を包圍し其財貨を奪へる後に、之を放ちて『去れ、而して隨所に利を營めよ、我等もまた他日如何なる災厄に會ふや知るべからず』と云ふのが常であつた。畢竟、海魂は自然に一種のコードを生むものである樣である。德川氏天下を一統して後、海外に在る數萬の冒險者、內に在る數百萬の天主教徒を忌み、彼等が相連結せんことを恐れて寛永年間に海外の渡航、船舶の外航、大船の製作を禁じたるがため日本國民の海魂大に衰へた。此後海外に密航するものは海賊を以て取り扱はれたが海賊は隱約の間に國民の思慕を寄せられ、近松門左衛門が『博多小女郎波枕』と題して傳へたる海賊は、其實、九州切つての密貿易商伊藤小左衛門にして、博多の小女郎なるものは、長崎丸山の妓女貞歌であつて、此戲曲中の事一として架空の事はないと云はれて居る。斯く寛永年中の海外渡航禁止令のため日本人は全然、海外に出ることが出來なくなつたが猶は『風』と稱するものがあつて、此嚴令を破り日本人を海外に吹き流したが、今此等漂流民の事を記したる德川時代の著書を通覽するに概略左の如くである。

以筆代言 遠藤日人著並畫 三卷 寫本 寛政八年仙臺ヘ漂著ノ清人ト筆談セル記事

岡山漂流人記

漂流異譯 開國之滴 ジョセフ、ヒコ著 土方久徵譯 明治二十六年

幸太夫磯吉引替 (不忍叢書第二册ノ内)

奇觀錄 桂川國瑞著(漱芳閣叢書料第五册) 漂民幸太夫磯吉ノ兩者ニ西洋諸國ノ事情を尋問シタルモノ

南海紀聞 青水家遺著 寫本

姫路侯消息 (不忍叢書第八册ノ内) 領民漂著ノ記

校訂漂流奇談全集 石井民司校 明治三三 續帝國文庫第二二編

蠻人漂著 (改定史籍集覽第一六册 明治三五ノ内) 寛政九年蘭國ヨリ我漂流人ヲ送リ來ルコトヲ記ス

漂民御覽記 桂川國瑞(甫周) 漱芳閣叢書料第一一册

漂流人一件 (不忍叢書第七册ノ内)

探險實記 龍睡丸漂流記 大導寺謙吉著 明治三六

漂 見聞錄 寫本

漂客談奇 寫本

漂民聞書 (土佐國群書類從九十八ノ内)

漂民紀事 (土佐國群書類從九十九ノ内)

漂流人之記 (中古叢書八十六)

漂流叢書 寫本竹本光明著 享和二

筑人孫七漂海話 寫本

漂客紀事 兒玉琮(南珂)著文化年間 安永九年清國船房州ヘ漂著ノ記

暹媽人欵狀 新井君美編 明治卅九 國書刊行會白石全集卷ノ四ノ内

安南紀略藁 近藤正齋編 二卷 明治三八 國書刊行會本近藤正齋全集卷一ノ内

長崎志 寫本

韃靼漂流記 越前三國浦竹内藤左衞門等覺書寫

臺州漂客 事 明玉年晋撰 萬曆十七年 海防纂要所收

阿州船無人島漂流記 寛文年間阿波海部郡淺川浦安兵工並紀州藤代長左門書上

日州船漂落記事 曾槃著 無人島談話所所收

蕃人打破船 伊藤之鳳編 斎輯錄所收

馬丹島漂流記 尾張知多郡大野村 源左衞門書上 享保十年

遠州船無人島物語 元文 年遠州荒井宿 甚八郎申上 一卷

竹内徳兵衞魯國漂流記 最上常矩編 (蝦夷草紙所收)

志州船 灣漂著 船頭小平次等口供

天竺物語 寶暦十二年筑前 唐泊浦孫七漂話

南海紀聞 青木定遠撰 二卷

常州人安南國漂流物語　常陸多賀郡磯原村左源太等書上　享和元年

奥州人安南國漂流物語　明和四年小名濱善四郎書上

薩州人唐國漂流記　安永三年池山喜三右衛門中原仲右衛門等口上

神昌丸魯國漂流始末　天明年中幸大夫磯吉取糺ノ事　漂民御覽之記

鳥島物語　寛政元年志布志浦榮右衛門等書上

無人島談話　曾槃著　二巻同附錄一巻付

土州長平漂流日記　天明五年土州赤岡浦　松屋儀七ノ日誌

無人島漂流口書　寛政九年土州吉岡浦　長平の口上

松榮丸東國漂流記　天明八年　善吉濟藏書上

環海異聞　仙臺舟子漂流事件　一五巻　大槻茂質編

南漂記　枝芳軒著一ニ南瓢記　寛政十年

德永丸漂流始末口書　久保屋儀兵衛口供

赤人一件　桂川甫周著寫本　寛政四年送還セラレタル漂流人に付テ露ノ事情ヲ聞タルモノヲ記ス

蝦夷草紙　最上常矩著　寫本

蝦夷初發記　漂民御覽之記附　寫本

東夷隔々夜話　寫本

北遺紀聞　寫本

同

長崎港草　熊野正紹著　寫本

船長日記　池田寛親著　文化十年尾張船子重吉漂流一件　寫

ヲロシヤ船著之記　外郎異談客船一條　考付寫

土佐群書類從　漂流部

清水浦琉球船漂着聞書（寶永二年）　九十册ノ内
八丈島漂話一名雜風流船物語
八丈島漂渡記（延享二年）　九十一册
南京朱心如船漂着記　九十二册
土佐國船無人島漂流記　九十三册
岸本浦長平漂流記（天明五年）　九十五册
福島浦淺平漂流記　九十六册
下田日記
江南商話　九十七册
松平土佐守小人萬次郎相糺書付　九十八册
漂海異聞　九十九册

日本文庫　内藤耻叟校訂　十編ノ内
ヲ笠漂海物語（天竺德兵衛）

呂宋漂流記　弊函一掃ノ内第八册　寫

寛政年間仙臺漂客世界周航實記　（小原大衛）博文館　寸珍百種ノ内四十五編

漂民臺覽之記　神昌丸異國漂流話　寫本

魯西亞國漂流二實記

安南國漂流記
松前人韃靼漂流記 寛永七年孫太郎安次郎重兵衛等口上書
漂客加祭哈出奔記 継右衛門等口書
督乘丸露國漂流記 文化十年尾州音寺長右衛門等口上
永壽丸露國漂流記 文化九年松平豐後守家來喜三右衛門等口上
薩州漂客見聞錄 文化十三年税所長左衛門口上
ペラホ物語 西川直発著
漂客壽三郎手簡 肥前國長名郡坂下手水間壽三郎作
亞墨新話 天保年間阿波ノ水手初太郎等漂流一件 前川文藏編
漂客談奇 鐵藏萬次郎五左衛門ノ事績
紀州船米國漂流記 安政年間寅吉泉吉等ノ口供
海外異聞
山田仁左衛門渡唐錄
天竺徳兵衛物語
異國漂流記 韃靼物語付 寫
南漂記 枝芳軒著 寛政十年
漂流紀事 大日本府縣志第二十一冊ノ内 酒井庫太郎編
無人島談話 小笠原島 什樂者
薩摩國喜三左衛門船漂流記 尾張國長右衛門船漂流記付 寫
通航一覽 續編
通航一覽 續編 卷
南部商 ホロムシリ島漂流記 継右衛門口書
同 上 菊地總内記
難船一件 自弘化四年至嘉永二年 設樂八三郎記
中濱萬次郎漂流記 天保十二年
無人島漂著記 寛文四年遠州荒井宿甚八等申上一卷
廣東漂流記 正徳元年岡三左衛門書上
環海異聞 大槻茂質撰
源左衛門唐土漂流記 元祿五年五月
文化丁卯松前異事錄
文化丁卯唐船漂著記
文化唐船漂著記
文化年中漂流記
文化露人漂流記

蝦夷島漂著
奥民唐土漂流記
奥房兩州異國船漂著記
薩州税所長左衛門漂流一件
紀民漂流紀事　水栗徹秀記
志州鳥羽小平次船漂泊物語
神昌丸漂流記
暹羅國漂流奇談
順吉丸漂流記
閩省漂流南部人護送始末雑錄　山崎諒撰
異國船漂著記
魯西亞國漂流與民口實
漂流記　臺灣一卷　船頭小平次等口供
同　臺灣一卷　唐土一卷　呂宋一卷　無人島一卷
同　唐土一卷　寛政七年　久保屋儀兵衛口述
同　一卷彦藏記　元治元年刊
同　一卷　唐船漂流一卷
同　正徳三年　一卷
同　幸太夫
同　安南國一卷
漂流雑記　五卷　附錄一卷
漂流紀聞　三卷
漂流記抄錄　一卷
漂流年代記　海外二枚　學芥子撰
漂流人魯西亞話　二卷
漂流人歸朝一件留　一卷
漂流七天竺話　三卷
漂著始末　琉球船三卷
漂著唐船細故　寶曆酉年一卷
漂民御覽記卷　北槎聞略一卷　吉田漢官撰
漂民幸太夫磯吉歸國紀事　一卷　中里仲舒撰
漂民口狀　丙戌一卷
漂客傳　參考二卷　小栗恵十撰
琉球船漂著始末　三卷

呂宋國漂流記　大槻清崇記
大槻清崇雜記　自弘化月中至文久中四卷
唐船漂着記
高田屋嘉兵衛　履歴録七ノ卷　河野逸撰
通航一覽　幕府編修
無人島漂流記　池底叢書（屋代弘賢編）所收第九四冊
志州鳥羽漂流人聞書並吹流船話　椿亭叢書所收第八冊　越智直澄編
漂民吉次郎覺書　同上所收第九冊
漂民長兵衛書上　同上
魯西亞漂流人談話聞書　同上
漂民紀州藤代村長兵衛書上　同上所收第二六冊
傳造漂流記　南陽叢書卷一所收
無人島談話
亞墨新話　天保年間阿波國水手初太郎等漂流一件　前川文編
金藏ヲロシヤ行　文化十一年　金藏書上
薩人漂流記　文化十二年　寫
乘槎　播州高砂船頭町德兵衛　再渡天竺記（新井君美）
韃靼漂流記　越前三國湊竹内藤右衛門覺書
萬次郎漂話
北際漂譚　薩摩船子漂流事件　川上親信編五卷附錄一卷

海外へ出て、海魂を發揮することのできぬ國民が、せめては歸朝せる漂流民の談話なりとも讀みたし思ふたるが爲か、彼等の談話記事は非常の勢で廣く讀まれた樣である。明治に至つて石井研堂氏が以上の記聞の數種を刊行したことがあるが、余は何人か此等の冊子を蒐集、分類、校正、註釋、綸解して、大に海洋文學を鼓吹せんことを望むものである。支那は日本に比して其文明の開發の早きが爲め、舟船の構造の如き到底、日本の及ぶ所ではなかつた。其海岸線もまた甚だ長く、好し海岸にあらざるも、洞庭、鄱陽の如き大湖あつて、大體に於て海と相異ならざるものが多いにかゝはらず、海魂は甚だ盛んではなかつた。支那の國民性を見るには、其文學を見るに如くはないが、二十五朝を通じて、文學の上に海魂の現れたことは見とめられぬのである。文選に木玄虛の『海賦』があるのと秦始皇時代に方士徐福が海上の仙境を游說したことが、海に關する最も重大なる

文學上の寄與であつて、其他は漢唐でも、宋元でも、明でも詩文に海を主題としたるもの少なく、適まあれば空想的に海の恐怖を述ぶるのみで、嶺南文學の如き海邊に發達したる文學ですら、國民の海魂を發揮すべき、若しくは海魂を獎勵すべき文學が少ない。英國のバイロンが『海賊』の崇高を歌つた樣の文學は全くない。文學が若し國民精神の寫眞であるならば、海魂は支那人に於て甚だ貧弱であつたと云はねばならぬ、明治二十七年の日清戰爭で日本の最も恐れたものは、支那の裝甲艦定遠、鎭遠の二艦であつた、何となれば日本には艦型に於ても、艦彤に於ても、備砲に於ても、之と匹敵すべきものは一もなかつたからである、然ども支那の艦隊は迎擊せられ追擊せられ遂に殄滅せられたのは何の爲めであるか、是は砲の爲に滅びたのではない。大きな軍艦の爲に滅びたのではない。卽ち日本の軍艦商船に充滿する所の海魂に因つて日本が勝つたのである。當時日清戰爭日露戰爭に於ける陸海軍の戰術、戰略はジヨミニやクローゼウイツツをして見せしめれば非難すべき大きな缺點があつたに拘らず遂に勝利を占めたといふのは卽ち海魂の力である。

以上に言ふが如く大艦隊ありと雖も、大商船ありと雖も、海魂無き國民は海を支配するポツシビリチーは有つて居らぬ。而して海魂は一種のインスチンクトであり、本能である。其人種に固着して離るべからざる或ものである。而して如何に教育を施すと雖も、此本能を有せざる國民に海を制するの力を付與するといふことは出來ぬのである。支那は四百餘州であると云ふが如く、其海岸線も亦長い。併ながら要するに平野の國である農業の國である。其天才は平野の事業に於て發達して居る。其國民の本能は平野山岳を樂しむにある　此點に於ては亞米利加は支那と同じことである。太平洋に面し太西洋に面するものは海である、併ながら其大部分は平野である、而して日本は之に反して四面環海、海岸線甚だ長く、其海岸線は甚だしく屈曲出入して居る。而して歷史に現れた國民の本能は以上の如く海魂に富んで居る、若し能く此海魂を刺戟し海魂を訓練することが出來れば、海を制するの事は英吉利と日本のものであると云ふも決して迷信ではあるまいと思ふ。卽ち我國に於ては山岳谷なるものがあり、又た陸上の遊戲頗る盛んであるが是は決し

て悪いことではない。併ながら山岳の日本を海の日本とせんとしたと云ふことは、無學なる清盛と雖も嘗て企てたのである。今や海陸の他に『空』なるものが出て來たが『海の貴重さ加減』は少しも減じて居らぬ。今後の日本の爲すべき事は海上に伸びることである。予は是より我文學に於て海を主題とするものが盛んになることを望むものである。國民の行樂も亦海を主とせんことを望むものである。予は是より海魂の訓練と發揮とを理想とする教育者の出んことを望むものである。海魂を本として日本の前途を策する政治家の出んことを望むものである。余は依然として日本の前途は海上にあることを信じて疑はぬものである。

畫聖大雅堂

村松梢風

一

池大雅は、橋の欄干に凭り掛つて、ぼんやりと川面を眺めてゐた。傾き盡した永い陽脚が其の影を遠く水の上に曳いてゐた。

水は勢よく流れてゐた。早瀬の處では夕陽が鱗のやうに砕けて美しく耀いてゐる。橋の真下は淵になつてゐた。青く透きとほつた水の底に微かに小石が光つてゐる。其處では水が靜かに渦を卷いてゐる。

大雅はさうして無心に水の流れを見てゐた。が其の橋の上は可成り往來が劇しかつた。西から來る名古屋泊りの旅人は悠々として、馬の脊の上から川の景色を眺めたりして通つた。が反對の方角に橋を渡る旅人は、日暮れ前に次ぎの宿場へはいらなければならないといつた風に、みんな急いでゐるやうに見えた。から荷を擔いだ青物のぼてふりが、日に燒けた赤い顏をして、地方訛りの言葉で大聲に話し合つて通る。武家が通つたり、駕籠が通つたりする。馬の蹄の音がガタコトと絶えず橋板を鳴らしてゐる。けれども大雅の耳にはそれらの物音の一つさへ響いてゐないかのやうに見える。

大雅は漠然とした哀愁に包まれてゐた。何んでそんな氣持が

するのか深く考へて見やうともしなかつた。たゞ、から味氣ないやうな氣持になつた。何んだかそれが水の上からでも湧き出てくる心持のやうにも感じられた。

彼は繪を賣る目的で、遙々京都から此の名古屋迄旅をして來たのだつた。繪と云つてもたゞの紙や絹へ畫いた物ではとても買ひ手が無いと思ふから、出來の佳い扇を仕入れてそれへいろんな繪を畫いて持つて來た。京都の名所を寫した山水の圖や、女子供にも喜ばれさうな風俗畫などもある。さうしてそれを一と脊負ひ脊負ひ込んで、名古屋を目當てにやつて來たのだ、處が、今、までかゝつて何んにも賣れない。旅費をつかつて、宿錢を拂つて、それで品物は一向減らないのだ。彼は諦めて京都へ還ることにした。名古屋を發つたのが既に七ツ下りだつた。其の橋は衣掛川の枇杷島の橋だつた。

繪が賣れないでは困る――には違ひ無かつた。が、そんな事は大して彼の心を苦しめてはゐなかつた。「拙い繪だから賣れないのだ」と考へてもよし、また「賣り樣が下手だから賣れない、のだ」と諦めてしまつても構はない。どちらも事實だ。自分でも、自分の繪がうまく畫けてゐると思つたことは一度も無い。が併し彼よりももつと〳〵ずつと下手な繪描きの畫いた繪だつて、商ひの仕方が上手なら幾らでも賣れてゐる。うまい繪の畫けないことは悲しいけれど、自分はまだ若いのだから仕方が無い、と考へる。生涯繪が上手にならないとはきまつてゐたい………。

「そんなことは分り切つたはなしだ、それだのに何故俺は斯んな味氣無い氣持になるのだ……？」

大雅は、ぼんやりそんな考へに耽つてゐた。いつまで經つても考へは解けなかつた。段々重苦しく氣分が滅入つて來て、體まで水の中へ吸ひ寄せられるやうな氣持がした。さうしてゐる彼の後ろ姿や横顔をば、何んだか迂散臭さうな眼で見遁り作ら通り過ぎる者もあつた。

大雅は何氣なく、手に持つてゐた扇をひろげて見た。それにも自作の繪が載つてゐた。彼は一寸其の繪を眺めて見たが、直ぐ詰まらなくなつたので眼を離して、指先でそれをおもちやにしてゐた。涼しい風が橋の下から吹き上げて來た。

「あッ――」

彼は手が滑つて扇を放してしまつた。扇はヒラ〳〵と空中を舞つてゐた。白い蝶々が一羽舞つてゐるやうだつた。最後に扇はクル〳〵と二つ三つ大きく廻つて川の中に落ちていつた。渦巻きの上だ。扇は靜かに水面に浮かんで泡と一しよに漂つてゐた。が暫らく經つと、つゝ輪の外へ弾き出されて、今度は水流と一しよに威勢よく走り始めた。早瀬の上を、扇はフハリ〳〵とさも樂しさうに流れて行つた。

大雅はじつとそれを見送つてゐた。到頭扇は見えなくなつてしまつた。大雅は其の時莫迦に面白い事を發見したやうな氣持になつた。

「もう一本流して見やう」

彼は脊負つてゐた荷を卸して、風呂敷を解いて、箱の中から新らしい扇を一本取り出した。さうしてそれを展げて川の上へ投げた。扇はクル〳〵と舞ひ乍ら水の上に落ちて、渦に巻かれて、それから今度も同じく瀬い方へ流れて行つた。大雅は益々面白くなつた。沈んでゐた心が急に明るく引き立つて來て、子供のやうに樂しい氣分になつた。自分の畫いた繪が金で買はれずにしまつて、恁うして綺麗なる水の上を何處かへ流されて行くといふことが、それ自身に適はしい運命だと云つたやうな氣持もするのだつた。

「もう一本流して見やう」

大雅はさうして扇を流し流しゝた。最後に箱の中に一本も扇は殘らなくなつた。

大雅は京都の生れだつた。父は菱屋嘉右衛門といひ扇屋を商賣にしてゐた。大雅は享保八年に生れた、通稱を秋平と云ふのだつた。秋平は三歳の時にほゞ字をおぼえて、五歳になるともう立派に字を書いた。其の年のこと、黄檗某堂禪師の前で揮毫をして禪師を驚かしたりした。

「菱屋に神童が出來た」

と言つて世間では專ら評判をした。父の嘉右衛門は寧ろ貧しい暮しはしてゐたが、相應に風流心を蓄へてゐる人だつたので、我が子の將來に嘱目して益々學問を奨勵した。秋平は字を習つたり、書物を讀んだり、それから土佐光芳に師事して畫を習

つたりした。が、自分では繪が一番好きだつたので繪畫で身を立てることに決心した。最初は土佐繪ばかり畫いてゐたが、少し歳がいつてくる　それではあきたらなくなつて來て、漢畫の研究を始めた。丁度其の頃は、在來の日本畫に對抗して、南宗の文人畫が興り始めた時代で、和歌山の祇南海、江戸では服南郭、郡山の柳里恭等が各々名聲を馳せてゐたので、大雅はそれらの影響を受けたのであつた。十六歳の時初めて柳里恭の門を叩いて其の教へを受けた。それ以來大雅の畫風は一變して同時に著しい進歩を遂げた。處が、間も無く彼の身の上に大きな不幸が見舞つて來た。それは父嘉右衛門の死だつた。彼は自分の腕で老いたる母を養つて行かねばならなくなつた。が、繪では到底生計は立たないので、父の業を繼いで扇を商ふ傍ら器用で覺えた石印の彫刻などもやつて、どうやらかうやら其の日を送つてゐた。

　其の家は二條の樋口にあつた。大雅は商賣をしながら不相變畫を習つてゐた，賣り物の扇へ繪を畫いたりしはじめたが何しろ商賣が下手なので暮し向きの骨が折れることは一と通りでなかつた。おまけにどういふものだか彼は借りた物はキチ〳〵と拂ふけれども、貸しを催促するといふことを一向知らなかつたから、賣れた處で算盤は採れないのだつた。非常に親孝行だつたけれども、性分がそんな風なので獨りの老母をさへ養ふことができ兼る有様だつた。老母は大概親類へ行つてゐた。

　大雅は折り〳〵店を閉めた儘旅へ出た。繪をかいた扇などを持つて行商をするのだつた。併し、一旦出たとなると何時歸るか分らない男だつた。二月三月留守をするからと云つてくれ〴〵も賴んで行つたかと思ふと、直ぐ翌日は舞ひ戻つて來て其の小さな店に座つてゐるやうなことがあつたり、さうかと思ふと、二三日で歸ると云つて出た儘一と月も二た月も戻つて來ないやうなこともありがちだつた。

　或る年にも大雅は旅に出た儘歳末になつても還つて來なかつた。そこで老母や親類の者は彼の留守宅へ行つて帳面を調べて書出しをこしらへやうと思つた。そして帳面を出して見ると漢文で書いてあつて、おまけに其の字は篆書だつた。

「何んだい、是れは」

呆れてしまつて、誰れにも讀めないので困つた揚句に、近所に鍋屋太助といふ人で一寸物識りがあつたので其の人を頼んで讀んで貰つたが、太助先生でも漸う半分位しか解らなかつた。

大雅が旅から戻つて來ると、

「商ひの帳面だけは篆書で書かれては困る、お前の留守に是れ〳〵だ」と小言を云はれたので、

「さうでしたか、では是れから篆書は止めませう」と大雅は言つて謝まつた。

其の後は彼は帳面を楷書で認めた。が、文句が變つてゐて、例へば、

中等扇三柄。某先生携歸。估直既濟。或ひは未濟。

といつた風に書いてあるので、老母や親類の者には矢つ張り讀めはしなかつた。

其の後老母も死んで大雅は今は全く孤獨の境涯になつた。

二

或る人が大雅に勸めて言つた。

「一つ祇園の境内へ店を出して繪を賣つて見たらどうです、彼處へは京見物に來た諸國の人が參詣に行くから、土産に買ふ人もあるでせう」

大雅は、成る程それは名案だと思つたので、早速神社へ頼んで境内へ露店を出さして貰ふことになつた。格別準備も何も要らない。莚を二枚ばかり持つて行つて敷いて、前の方へ扇を十本ばかり並べた。自分は其の後ろへ座り込んで、白扇だの唐紙だのを側らへ引き寄せて、特別の注文があれば直ぐに畫くばかりの支度をした。さて、さうして座つてゐて見たが、最初の日は一枚も賣れなかつた。彼は其の場で辨當をつかつて、根氣よく座り續けて、夕方になると店を片付けて我が家へ歸つた。

それから大雅は毎日祇園の境内へ出張つた。雨さへ降らなければ缺かさず其處へ行つて座つてゐた。さうすると偶には繪が賣れた。併しそれは實に稀れだつた。彼の店の前で足を停めて扇面の繪を一寸見下して行くだけの人は無數にあつた、が人々は、次ぎに其處に座つてゐる若者で、眞つ黑く日に燒けた顏を

して、頭髪を亂して、垢染みたボロ〳〵の布子を着てゐる哀れな畫工の姿を見ると、輕蔑したやうな眼付きをして見せるか、或ひは詰まらないと云つたやうな顔付きをして、さつさと立ち去つてしまふのであつた。「乞食繪師」「大道畫工」さう云つたやうな言葉が地べたへ吐き捨てられた。

併し當の本人は一向平氣な顔をしてぽかんとして座つてゐた。賣れても賣れなくても、何時でも同じ様な顔をしてゐた、頭の上に青葉が茂つて、其處では蟬が喧ましく鳴いてゐた。

祇園神社の門前で茶店を營んでゐる百合といふ寡婦があつた。百合には一人の娘があつて町と云つた。其の茶店は町には祖母になる梶といふ女の代から引き續いてゐたのだつたが、梶も百合も、さういふ身柄には似ず風流心に富んでゐて、就中和歌をよくして、其の道で可成り世間に知られてゐた。梶は「梶の葉」百合は「早百合葉」といふ歌集を出した。百合は書も巧みだつたので、彼女の店へは短册などを持つて揮毫を乞ひに來る者も澤山あつた。さういふ風でさゝやかではあるけれど氣樂に世を送つてゐた。

寡婦の百合はまだ卅幾つといふぐらゐの年頃で、娘の町は漸う十二三だつた。百合も娘時代から相應に美人としては鳴らした方だつたが、町は母親に似てそれよりも美しくなりさうだつた。容貌ばかりではなく性質も祖母や母の血を享け、學問が好きで、歌や遊藝をも母親から敎へられて子供とは思へない程に上達してゐた。

近頃境内へ大道店を出した大雅の姿が百合の眼に付かずにはゐなかつた。百合は親切な女だつたので、大雅の繪が一向賣れないで困つてゐる様子を見て氣の毒に感じて、或る日其處へ行つて二三枚繪を買つて遣つた。そして初めて其の畫工の作を手に取つて見て百合は駭いた。山水でも人物でもそれは決して凡手ではなかつた。彼女の知つてゐる限りに於て殆んど老大家の壘を摩する程の筆であつた。

「是れ程の腕を持つてゐる畫工でありながらどうして恁んな事をしてゐなければならないのだらう——」

併しそれは直ぐに百合には解ける疑問だつた。藝道で身を立てる者には運不運が甚だしくある。又どれ程優れた手腕を有つ

てゐる者でも、其の人間の名前が世に識られぬ間は作品が行はれない。力量ばかりで出世が出來るものではないといふことが百合にはよく分つてゐた。それだけに彼女は此の不遇の青年畫工に對して衷心からの同情を呼び起こさせられた。

「先生のお宅はどちらでございますか」と百合は畫工に話しかけた。

「二條の樋口に住まつて居ります」

「毎日お通ひで御精が出ますこと。併し、お作は賣れますか」

「一向買ひ手がございません」

「ほゝゝゝ、では御商賣になりませんね、生意氣なやうでございますけれど、先生の繪は大道で商ふには上等過ぎるので、それで反つて賣れないんでございませうよ」

「否、拙過ぎるのです。立派な座敷へ掛けて見せる繪は、拙くても佳く見えますが、恁ういふ場所で莚の上へ並べて見せるには、よく〳〵うまい繪でないと人が見て與れません」

「成る程」と百合は感心した。畫工は全く謙遜して言つてはゐるが、併し立派な座敷へ掛つてゐる繪と比較して、大道で賣つてる自身の繪が決してそれに劣つてゐるとは思つてゐない、其の高い氣位が百合の心を動かした。

「是れを御緣に折り〳〵お話を伺ひ度うございます。わたくしは御門前に茶店を出してゐる百合と申す者でございます」

「お名前もお顏もたうから存じて居ります」

「おや左様でございましたか、それは失禮致しました、どうぞお歸りがけにでもお寄り下さいまし」

「有難うございます」

百合は繪を持つて歸つて行つた。

晝になつたので大雅はそろ〳〵辨當を食べやうと思つてゐる處へ、十二三歳の美しい娘が盆に茶を載せてそれへ持つて來た。

「母が先き程は失禮致しましたと申しました。粗茶でございますけれど何卒お上り下さいませ」

女歌人の娘はさう言つてしとやかに盆を莚の上に置いた。

「これは〳〵御親切に有難うございます、遠慮なく頂戴致します」

して、頭髪を亂して、垢染みたボロ〳〵の布子を着てゐる哀れな畫工の姿を見ると、輕蔑したやうな眼付きをして見せるか、或ひは詰まらないと云つたやうな顔付きをして、さつさと立ち去つてしまふのであつた。「乞食繪師」「大道畫工」さう云つたやうな言葉が地べたへ吐き捨てられた。

併し當の本人は一向平氣な顔をしてぽかんとして座つてゐた。賣れても賣れなくても、何時でも同じ様な顔をしてゐた。頭の上に青葉が茂つて、其處では蟬が喧ましく鳴いてゐた。

祇園神社の門前で茶店を營んでゐる百合といふ寡婦があつた。百合には一人の娘があつて町と云つた。其の茶店は町には祖母になる梶といふ女の代から引き續いてゐたのだつたが、梶も百合も、さういふ身柄には似ず風流心に富んでゐて、就中和歌をよくして、其の道で可成り世間に知られてゐた。梶は「梶の葉」百合は「早百合葉」といふ歌集を出した。百合は書も巧みだつたので、彼女の店へは短冊などを持つて揮毫を乞ひに來る者も澤山あつた。さういふ風でさゝやかではあるけれど氣樂に世を送つてゐた。

寡婦の百合はまだ卅幾つといふぐらゐの年頃で、娘の町は漸う十二三だつた。百合も娘時代から相應に美人としては鳴らした方だつたが、町は母親に似てそれよりも美しくなりさうだつた。容貌ばかりではなく性質も祖母や母の血を享け、學問が好きで、歌や遊藝をも母親から教へられて子供とは思へない程に上達してゐた。

近頃境内へ大道店を出した大雅の姿が百合の眼に付かずにはゐなかつた。百合は親切な女だつたので、大雅の繪が一向賣れないで困つてゐる様子を見て氣の毒に感じて、或る日其處へ行つて二三枚繪を買つて遣つた。そして初めて其の畫工の作を手に取つて見て百合は駭いた。山水でも人物でもそれは決して凡手ではなかつた。彼女の知つてゐる限りに於て殆んど老大家の壘を摩する程の筆であつた。

「是れ程の腕を持つてゐる畫工でありながらどうして恁んな事をしてゐなければならないのだらう――」

併しそれは直ぐに百合には解ける疑問だつた。藝道で身を立てる者には運不運が甚だしくある。又どれ程優れた手腕を有つ

てゐる者でも、其の人間の名前が世に識られぬ間は作品が行はれない。力量ばかりで出世が出來るものではないといふことが百合にはよく分つてゐた。それだけに彼女は此の不遇の青年畫工に對して裏心からの同情を呼び起こさせられた。

「先生のお宅はどちらでございますか」と百合は畫工に話しかけた。

「二條の樋口に住まつて居ります」

「毎日お通ひで御精が出ますこと。併し、お作は賣れますか」

「一向買ひ手がございません」

「ほゝゝゝ、では御商賣になりませんね、生意氣なやうでございますけれど、先生の繪は大道で商ふには上等過ぎるので、それで反つて賣れないんでございませうよ」

「否、拙過ぎるのです。立派な座敷へ掛けて見せる繪は、拙くても佳く見えますが、恁ういふ場所で莚の上へ並べて見せるには、よく〳〵うまい繪でないと人が見て與れません」

「成る程」と百合は感心した。畫工は全く謙遜して言つてはゐるが、併し立派な座敷へ掛つてゐる繪と比較して、大道で賣つてる自身の繪が決してそれに劣つてゐるとは思つてゐない、其の高い氣位が百合の心を動かした。

「是れを御緣に折り〳〵お話を伺ひ度うございます。わたくしは御門前に茶店を出してゐる百合と申す者でございます」

「お名前もお顏もたうから存じて居ります」

「おや左樣でございましたか、それは失禮致しました、どうぞお歸りがけにでもお寄り下さいまし」

「有難うございます」

百合は繪を持つて歸つて行つた。

晝になつたので大雅はそろ〳〵辨當を食べやうと思つてゐる處へ、十二三歳の美しい娘が盆に茶を載せてそれへ持つて來た。

「母が先き程は失禮致しましたと申しました。番茶でございますけれど何卒お上り下さいませ」

女歌人の娘はさう言つてしとやかに盆を莚の上に置いた。

「これは〳〵御親切に有難うございます、遠慮なく頂戴致します」

大雅は娘に向つて丁寧に頭を下げて禮を言つた。それから辨當を食べてしまふと、又娘がやつて來て茶道具を運び歸つた。

大雅は店を仕舞つてから道具を抱えて百合の店へ禮に行つた。

「おや、先生お仕舞ひでございますか、よく入らつしやいました、さあ／＼お掛け下さいませ」

と、女主人は飛んで出て下へも置かないやうに歡迎するのであつた。

それから後百合は毎日娘に茶だの菓子だの持たせて遣つて畫工を慰めてやることにした。折り／＼は繪も畫かせて其の生活を補助してやつた。さうしてゐるうちに、大雅の人物や畫の伎倆を彼女は十分に認めさせられた。

「將來必ず名を成す人だ」と百合は思つた。

或る時百合は大雅に向つて、娘の町子の聟になつて貰ひ度いと言つた。大雅は驚いた、が素より寄るべのない身の上である、百合の知遇にそむくこともならなかつた。彼は喜んで其の申し出でを承諾した。併し町子はまだ子供で結婚の式を擧げるには早過ぎた。それに百合もまだ老婦といふではなかつた。大雅は結婚前の期間を善用して遊歴の旅に出たいと云つて母に願つた。百合は快くそれを許して、道中の費用を與へて心置きなく旅をさせた。

大雅は遍く六十餘州を歴遊して、七年の後に京都へ還つて來た。そして町子と結婚の式を擧げた。大雅は其の時廿七八歳になつてゐた。

三

大雅の畫風が純粋の南宗の精神を體得して來たのは、彼が柳里恭の紹介に依つて、紀州に行つて祇南海を訪問した以後のことだつた。其の時大雅は卅歳だつた。彼は熊野に詣で、それから和歌山へ行つて南海に會つた。南海は大雅の才を認めて大いに其の前途に囑目した。大雅が南海に向つて南宗畫の眞髓を問ふた時、南海はかねて秘藏してゐた處の淸人蕭尺木の畫譜を取り出して大雅に與へて「足下は此の書を研究して文人學士の畫

を作るがよい」と言つた。大雅は非常に喜び、日夜畫譜を手に放さず、それから彼の畫は長足の進歩を遂げたのであつた。

柳里恭とは、十六歳の時初めて相まみえて以來引き續いて其の指道をうけてゐた。漢畫の設色法を大雅は里恭から學んだのであつた。

柳里恭は、郡山柳澤氏の同姓の一族で、通稱權太夫、淇園と號し藩の老臣に列してゐた。彼は性質濶達洒落で、客を好み、訪ねて來る者があればどんな人間をでも留めて養つて置いた。文武共に秀で、其の多藝多趣味なることに於ては古今に卓絶してゐた。彼は人の師たるに足るべき藝が十六あつたと云はれてゐる。文章に達し殊に畫をよくした。最も得意の圖は設色の密畫で好んで人物花卉を畫いた。

淇園の家には年中絶えま無しに食客がごろ／＼してゐた。其の爲めに家祿をつかひ盡して常に貧乏してゐた。食客の種類は千差萬別であつた。或る時は街道へ出張つてゐて、西國の順禮だの道者だのを見かけて屋敷へ連れて來て逗留させたり、三味線ひきの女乞食を呼び入れて自分で其の三味線を彈いて見たりしたが中には、淇園が槍を立て大勢の供をつれてゐる有樣を見て、是れはてつきり刀試しをされるんだらうと思つて逃げてしまふ者もあつた。博奕の罪で追放に行はれる者があると、役人に賄賂をして其の者を自分の屋敷へ伴れて來て頗る鄭重に取り扱つて留めて置いた。どうするのかといふと、めい／＼に金を與へて博奕の技術を鬪はせて、それを見物して樂むのだつた。

或る年のこと大雅は大和の方へ旅行したが、途中で旅費が盡きてしまつたので郡山へ行つて柳里恭から金を借りて京都へ歸らうと思つた。そして訪ねて行くと、淇園は大いに喜び勿論旅費は直ぐ貸して與れたが、

「まあ／＼久しぶりだからゆつくり遊んで行つて下さい」

と言つて引き留めるので、大雅は實は一日も早く京都へ歸り度いのだが、金を借りた手前もあり振り切つても立ち去れず、

「それでは一兩日御厄介になりませう」と言つて足を停めた。

淇園は終日大雅を相手にして書畫の談を鬪はしてゐるのである。二三日經つて大雅が暇を告げやうとすると

「まあ〳〵宜しいでせう、もう二三日お遊び下さい」

と言つてゐてどうしても歸して呉れない、仕方が無いから又二三日逗留して、今度こそ歸る決心で暇を告げると、

「實はまだお話し申し度い事がある、折角おいで下すつたことだからもう四五日お遊び下さい」

と主人が言ふ。無理矢理振り切つて歸らうと思つた處が、表の門をぴーんと閉めてしまつて出して呉れない。仕方が無いから又家の內へ戾つて云ひなりに逗留してゐた。

すると或る日のこと、用人の某といふ者が大雅の居る處へ來て

「實は手前共の主人の事について、大雅先生に折入つてお頼み申し度い儀がございますが、御承知下さいませうか」

と改つて言ひ出した。

「どういふお話でございますか、まづそれを承はつた上で」

「御尤もな事で。實は甚だお話し申しにくい事でございますが、當家の主人と申すのがまことに婦人を寵愛なされまするので——」

「はアはア、それは結構な事で」

「否、それが程よくなされば宜ろしいのでございますが、主人のは何分劇しうございまして、それからそれと交る〳〵毎晩婦人をお近付けになりまするが、御壯年の頃とはちがつて最早お歲がお歲でございますから、あれではお體に障らうと申して、家內一同心配致して居るのでございます。」

「ちとお愼みあるやうお諫め申したら宜しうございませう」

「吾れ〳〵がいかにお諫め申してもお聞き入れがありませんのでして。其處で此の頃も一同で相談致しましたが、大雅先生ならば主人とは別してお親しい間柄ではありよくお話しも合ふことでございますから一つ先生から折を見て主人に御異見下さるやうにお願ひ申したいのでございますが——」

と三太夫は額から汗を流して言つた。

「それは、ちと、どうも、迷惑なお頼みで——」

「御尤もで。併し、先生より他には此の事を頼む人は無いのでございますから、其處を是非共御承引に預り度いので」

用人が頻りに懇願するので、大雅も厭だとも云へなくなつて

しまつた。

「それでは一つお話し〻て見ませう」

と大雅は引き受けてしまつた。用人は大變喜んで退つて行つた。後で大雅はいろ〳〵諫めの言葉を考へて見たが、東西古今の學を究め、其の上世態人情の百般に通じてゐる此の家の主人に向つて言ふとしては、適當の言葉が思ひ付かなかつた。が、一旦引き受けたことだから其の儘には濟まされない。で、淇園に向つて其の事を話すと、淇園は「あはゝゝ」と笑つてゐて何んとも答へなかつた。

「此の後お愼み下さるでせうか、いかゞでせう」

と、大雅は問ひ詰めた。

「折角の御親切だが、そればかりは、承知致したと云ひ兼る」

と淇園は笑つて答へた。

「それではわたくしの立場がございません、わたくしは只今お暇を頂くことに致しませう」

「否、まだ今日はお歸し申すことはならん」

「ではわたくしの御異見をお聞き入れ下さいまし、お聞き入れが出來なければ歸らせて頂きませう。さあ、どちらかにお決めを願ひ度うございます」

「女も近付けぬとは申されんが、お身もお歸し申すことは相成らん」

大雅は呆れ返つて匙を投げてしまつた。是れでは到底歸しては貰へないと思つたので、彼は夜陰に乘じて裏の塀を乘り越えて逃げ出した。

町子は、淇園の別號玉桂の一字をもらつて玉瀾と號した。彼女は夫に學んで書は頗る上達した。

大雅は禪を好んで常に其の修養を怠らなかつた。寶暦九年たま〳〵白隱禪師が備中に赴いて其の歸途京都に駐錫した。大雅は其の時二十九歳であつたが直ちに往つて座下に參禪し、左の一偈を白隱に呈した。

耳登得聞隻手響、耳能沒了倘存心、
心能沒了倘難得、却識師恩不識深。

大雅の畫は禪の影響を受けて更に幽遠の氣を帶びて來た。

其の頃から、世人の嗜好が漢畫に移つて、南畫の流行は茲に

一變して來た。大雅堂の名聲は俄かに擧つた。

四

大雅は洛東眞葛ケ原に草堂を結んで、妻の玉瀾と共に住まつてゐた。玉瀾の母は、娘が結婚してから三年程經つてみまかつた。大雅は其の形見の茶店を殘して置いて、夫婦で交る〳〵出張して參詣の人に茶をすゝめてゐた。

畫名は擧つたけれども、大雅は性得金錢の慾が無い男だつたから大家になつたからと云つても貧乏は依然たるものだつた。

客が畫料を持つて來ると、家の入口に置いてある水甕を指差して

「どうかそれへお入れ下さい」と言つた。

それから薪屋だの米屋だのが勘定を取りに來ると、

「其の水甕の中に錢があるから出して持つてつて下さい」と言つた。

錢をつかふことも嫌ひだつたから、どうかするとそれでも小錢が溜まることがあつた。或る年祇園の社の修繕を行ふことになつて門前の者にはそれ〳〵寄附を割り當てたが、大雅が無慾で貧乏なことは世話人も知つてゐるので、彼の處へは僅か三百文しか割り當てて來なかつた。處が、大雅はかね〴〵茶店の上り錢や畫料の金のうち不用の分だけを押入れへ藏つて置いてあるのを思ひ出して、妻に向つて

「不用の錢をあゝして藏つて置くのも無益だから、此の際全部お社へ上げてしまふではないか」と言ふと、

「それはよい處へお氣が付かれました、それが宜ろしうございます」

と玉瀾も贊成したので、二人で押入れから出して勘定して見る　錢が三貫文餘りあつた。夫婦は喜んで、それを二人で分けて背負つて、神社へ納めに行つた。

其の家はごく狹くて、八疊ばかりの座敷に一寸した取次ぎの間が附いてゐるだけだつた。其處に紙だの絹だの書物だのが一面に充滿してゐて客があるとそれを押し分けて座らなければならなかつた。

或る人が大雅を訪問して、雜談に時を移し、夜が更けたので一

泊することになつたが、玉瀾がのべて吳れた夜具蒲團を見ると相應た都内縞で、其の襟に少し垢が附いて汚れてゐた。

「はゝあ、此の家でも時々泊り客があると見える」

其の人はさう思つて寢てしまつた。が、夜半に眼を醒まして厠へ行き度くなつたが勝手が知れないので、大雅に案内を賴まうと思つて、

「御主人、御主人」と呼ぶと、

「はい／＼、只今」

と言ふ聲がして、取次ぎの間の毛氈の下からコロコロと轉がり出た物があるから、見るとそれが大雅だつた。客は喫驚して

「御内室は」と尋ねると

今度は、諸方から賴まれて溜まつてゐる紙や絹を積み上げた中から、玉瀾がムク／＼と起きて來た。

曾我蕭白と大雅とは非常に仲善しだつた。絶えず往來を續けてゐた　蕭白は伊勢の人だが、畫を以て京攝の間に放浪してゐた。はじめ畫を高田敬輔について學んで後に曾我蛇足を慕ひ、みづから蛇足十世と稱し、また蛇足軒と號して、其の遺鉢を傳へてゐた。彼は性格甚だ剛直で狷介、やゝともすれば人に忤つた。で、世間では狂人扱ひにしてゐた。併し、蕭白の意志は狩野雲谷末派の衰頽墮落を憤つて、其の本に返つて、東山時代の骨髓を發揮しやうとするのにあつた。けれどもそれらの畫風は其の本末を問はずすでに世人から飽かれてゐて、當時の畫壇に何か別に清新な物を要求する氣運が鬱勃としてゐた時代であるから、蕭白の復古的な畫風は更に人々からよろこばれなかつた。そこで彼の多血多根の性質は益狂屈して、世を憤り、人を罵り、其の畫は殊更に怪醜を極めて、一見悽愴の氣が迫らずにはゐないやうになつて來た。蕭白が人物を畫くと容貌は怪物のやゝで、手足は岩石みたいだつた。山水草木を畫いても同じやうで、何處ともなく一道の鬼氣が立ち昇つてゐるかのやうに感じられた。或る夏、納凉の遊をした時、勝山琢舟が舟橋を畫いて欄干を附けたのを見て、蕭白は大いて罵つて、「京都の繪師の名折れだからすぐ畫き直せ」と言つた。處が琢舟は「是れは探幽の圖に倣たのだ」と言つて、負けてゐなかつた、勝山琢舟は山崎如流の門人で夙く一家を然し、法橋となつて、後に畫風を

變じて土佐を學び、春日繪所となつて一方に重きをなした畫家であつた。兩人は互ひに爭つて言ひ募つた揚句、蕭白は脇差を拔いて琢舟に切りかけた。が、傍らの人々が支えたので漸う無事に納まつた。

また或る時、本願寺の法主が使者を蕭白の許へ遣はしたことがあつた。其の時使者は傲然として戸を叩いて

「蕭白は在宅であるか」と言つた。

すると蕭白は家の内から

「たゞ蕭白といふ蕭白は居らぬ」と答へた。

さういつた傲岸不羈な男だが、不思議に大雅とだけは親善だつた。或る時も大雅は人から蕎麥粉を貰つたが、かねて蕭白が好物であることを知つてゐるので、「到來の蕎麥を馳走するから來て貰ひ度い」と使に手紙を持たせて遣つた。蕭白は喜んでやつて來たが、來ると例に依つて談論盡くる處を知らないので、何時の間にか主客とも蕎麥のことは忘れてしまひ、そのうちに日が暮れた。

「大分腹がへつて來た。これ〳〵町や、何もあるまいから茶粥でも拵へたらよからう」と主が言つた。

それから主客は玉瀾が拵へた茶粥をすゝつて、また再び話し出した。蕭白が暇を告げて起つた時分は夜半近かつた。表の戸を明けて見ると、星一つ見えない眞の闇夜だつた。

「これは暗い、どうか提灯を拜借したい」と蕭白が言つた。

大雅の家には提灯が無かつた。以前あつたこともあるが、誰れかゞ持つて行つたきり返してくれないので其の後は無かつた。

「あいにく提灯は無いが――」

大雅は灯のはいつた行燈を提げて來て

「是れではどうでせう」

「いや結構々々、では借用して參らう」

蕭白は行燈を提げながら歸つて行つた。

玉瀾は、誰れよりもよく自分の夫を理解してゐた。彼女は大雅の妻として最も適はしい女であつた。それは彼女の親ゆずりの性格でもあつたが、また同時に夫の人格に同化されて一層似合はしくもなつたのだつた。彼女は常によき妻であると共に、

時には一番よい友達でもあつた。夫婦の間に子はなかつた。彼らはいくつになつてもいつも新婚の夫婦のやうに睦まじかつた、大雅は三味線が好きだつたので、三味線をひいて寂びた聲で唄をうたふと、妻は箏を彈じてそれに合せて樂んだりした。身なりなどは少しも構はなかつた。彼女は夫と共に、冷泉爲村の館へ招かれて歌を學んだが、最初に參つた時、冷泉家の女房達は、玉瀾の名前が高いのでどんな婦人が來るだらうと思つて今か〳〵と待つてゐる處へ、これはまた思ひ切つて糊のこわい木綿の着物で、魚籠を提げてやつて來た其の樣子は、何んのことはない草鞋をはいてゐない大原女のやうだつたので、みんな驚いてしまつた。歌を學びに來たのも、大雅が高名の畫師だので冷泉家のはふから招いて呼んだのだつた。そのうへ貧乏な畫師のことだから、ほんの禮儀だけのことをしたらそれでも構はないのだが、季節々々の御獻物は世間の人よりもずつと立派にとゝのへて持つて來た。或る時爲村が戯れに玉瀾に紅の前垂れを賜はると、玉瀾は喜んで春になるとそれを掛けて母の形見の茶店へ出たりした。

或る時大雅は大阪へ行くことになつて我家を出たが、家を出る時筆を携へることを忘れて行つた。玉瀾が見付けて筆を持つて走つて行くと、建仁寺の前で漸う追ひ付いた。

「もしもし、あなた、筆をお忘れでございます」

大雅は驚いたやうに振り返つて、

「これは〳〵、どちらのお方か存じませんが、よう拾つて下さいました」

と言つて、筆を受け取ると押し戴いて、さつさと歩き出した。玉瀾も默つて歸つて來た。

性來寡慾恬淡の大雅は、理想の妻を得て、其の上子孫を望む必要の無い境涯だつたので、全く利慾の觀念から超脱してしまつた。彼は奇行百出を以て世を驚かした。しかし、彼自身では些かも人を驚かせるつもりで奇行を演じるわけではなく、それは悉く彼の正直な感情の發露で、所謂天眞爛漫であつた。彼の行ひは、外見は疎放であつたが、内は頗る篤實で、殊に禮讓を失はなかつた。嘗て或る富豪が揮毫を依賴したが、賴んで間も無く絹を取りに寄越した。「まだ出來ません」と言つて使の者を

歸したが、幾日も經たぬうちに又遣つて催促をした。今度も同じ様に言つて歸すと、それから衿蝿く使を寄越して催促をした。餘り衿蝿いので打つちやらかして置くと、或日も其の使がやつて來て「繪が出來ましたか」と言ふ。例に依つて「まだ出來て居りません」と答へると、使の者はふくれ面をして澁々と歸りかけたが、門口を出てから態と聞ゑよがしに

「チエッ、へぼ繪かきめが、人に幾度足を運ばせる積りなんだ。全體己惚れてるのか、懶け者なのか、知らないけれど餘り人を馬鹿にしてゐやあがる」とつぶやいた。

大雅は「はッ」と思つた。彼は決して自惚れたり人を侮つたりしてゐるつもりではなかつた。たゞ、富豪の權柄づくが氣に入らなかつたから繪を畫かなかつたのだ。併し、自分が繪を畫いて遣らないばかりに、此の無關係の使の者は、たとひ彼の足がすり切れてしまふ迄でも此處へ使に寄越されなければならないのだといふことには思ひ至らなかつた。

「もし〱お使の方、一寸お待ち下さい」

大雅は使の者を呼び返した。

「お前さんが今言ひなすつたことは道理です、わたしが惡るかつたから勘辨して下さい。さあ、直ぐに繪を畫いて上げませう」

大雅は其の場で筆をとつて畫き上げて持たせて遣つた。

冷泉爲村が病に罹つた時、大雅は毎日其の門前まで行つて病狀を伺つて歸つた。彼は人情に厚く、思ひ遣りもあつた。或書林の手代が放蕩をして主人の金を費ひ込んだ廉で放逐されて他國へ行くといふ際に、大雅の許へ暇乞ひに來た。で、懇々と話して見ると本人は非常に後悔してゐることが分つた。大雅は氣の毒に思つて救つて遣らうと考へたが、可成りの金額だつたので、自身の愛藏してゐた書畫や調度を賣り拂つて其の金を辨償して、主人に詫びを入れて歸參を叶へて遣つた。

清廉潔白な人間ほど不正を憎む心も强いものである。大雅がさうで、破廉恥の行爲をする者に對しては寸毫も假借しなかつた。彼の門人の一人が師匠の贋畫を作つて賣つたのが知れたことがあつた。大雅は非常に怒つて直ぐ樣破門してしまつた。其の門生ももと〱貧困から犯した罪だつた。で門生の爲めに代

つて詫びる者もあつたが、大雅は斷じて許さなかつた。
「貧は天命である、恥を知らぬ者は人間でない」と言つて彼は罵つた。

五

大雅は日本の文人畫を大成して、一代の師宗と仰がれた。眞葛原の草堂には畫の依賴者が門前に市をなした。大雅堂の名は遠近に轟いて其の畫風は一世を風靡した。

大雅が最も得意とするのは山水の圖であつた。人物も畫いたが、其の形狀が甚だ奇古であつた。山水でも人物でもすべて飄逸怪奇の筆であつた。變幻出沒捕捉すべからざるものがあつた。一見極めて醜陋の畫のやうで、よくよく見ると、其の筆意の妙と氣品の高さとが人の心を撲つのであつた。殊に晩年に至つては、筆を走らせ、墨を飛ばして、奔放縱橫の畫を好んで作つた。併し其の畫は、一氣に塗抹したやうに見えるけれど、其の實は一筆を下すごとに慘澹たる苦心が籠つてゐた。彼は好んで旅行をして、山川の狀態雲烟の變化をつぶさに硏究し、その骨髓を拔いて筆で現はしたのだつた。

大雅はかやうに有名になつたけれども、相變らず淸貧に晏如として暮してゐた。金に依つて畫を作るといふことはなかつた。また權門に威壓されるといふこともなかつた。心が向けば誰にでも直ぐに畫いて遣つた。平常澤山墨を摺つて置いて「さあ」と云へば何時でも畫けるやうにしてあつた。あきうどの掛行燈のやうな物でも賴みにくれば快く畫いてやつた。其の頃の洛中に大雅堂の掛行燈が澤山出來た。或る男が

「風藥を賣らうと思ふのですが、何かうまい看板を畫いて戴さ度い」

と言つて來た。大雅は一寸首をひねつて考へてゐたが、筆を取つて

「風藥のみて直らぬ風の藥」

と書いた。どういふ譯かと尋ねると

「いろ／＼の風藥を用ゐても直らぬ風を治す風の藥、といふことです」と大雅が答へた。

其の男は喜んで是れを掛けたところが、看板が奇拔なのを見

て買ふ人が多くて僅かの間に大變儲けた。

春のことだつた。大雅はブラッと市中へ出ると、人から嵐山の櫻が昨今花盛りだといふはなしを聞かされたので、急に行つて見度くなつて出掛けた。終日花を見て歸路についたが何分腹がへつてゐた。何か買つて食ひ度いと思つても錢を持つてゐなかつた。仕方がないので空き腹を抱えてやつて來ると路傍に飴屋が店を出してゐた。大雅は飴屋の店へ立ち寄つて、「私はかう〱いふ者ですが」と名乘つて、

「あいにく錢を持つてゐないけれど、何分空腹でならないから飴を少々食べさせて貰ひ度いものです」と言つた。

「さうですか、さういふわけならお上んなさい」

と言つて飴屋は快く飴を食はせてくれた。大雅は矢立を拔いて半紙に風景の畫を畫いて

「お蔭で助かりました、お禮に此の繪を上げませう」

と言つて置いて立ち去つた。飴屋は家に歸つて或る人に其の話しをすると「其の繪師の名前は何んといふ人だつた」と訊かれたので「確か大雅堂とか云ひましたよ」と答へると「大雅堂なら大した物だ、なか〱手に入る物ぢやないから安く放してはいけないよ」と教へられた。翌日になると飴屋の處へいろんな人がやつて來て其の繪を賣れと言つた。飴屋は其の中で一番値よく買ふ人に賣つて思はぬ金を儲けた。飴屋は考へた。

「怎んなうまい事はない、飴を賣りに出るより餘つぽど割りがいゝ、今日は一つこちらから行つて畫いて貰はふ」

飴屋は早速大雅堂へ出掛けて行つて「もう一つ繪を畫いておくんなさい」と言つた。大雅も是れには弱つた。

「飴屋さん、飴は毎日はしやぶれない」

或る年、高野山の清浄心院が火災で燒けて、其の後堂宇の新築が悉く落成した。すると或る日のこと一人の男が玄關へ來て

「わたくしは京都の畫工池野秋平と申す者ですが、此の度御普請について、お座敷向きやお廊下の繪を畫いて奉納致さうと思つて參りました」と述べた。

取次ぎの者が此の事を院主に傳へると、院主はもとより畫工を渇望してゐた處だつたから、早速呼び入れ對面して、襖の次

第を悉く頼んだ。畫工も大いに喜び「然らば明日より取り掛りませう」と言つて、さて翌日になると唐かみの繪から始めたが、人物畫はいゝが、其の人物の恰好が首ばかり大きく、足がばかに細くて、不恰好なこと此の上もない。院主は大いに案外で「これは飛んでもないへボ繪かきを頼んでしまつた」と後悔してゐた。すると今度は、一枚に、松樹一株に茅屋を寫し、其の屋の窓の中に人物があつて、山水に對する圖を作つたが、是れもまた人物の首が窓一杯に見えたので、院主はます〳〵呆れてしまつて斷りを言はふと思つてゐる處へ、知り合ひの上方の人が來合はせて其のはなしを聞いてこつそり覗いて見ると、まぎれもない大雅堂だつた。院主は

「どうですあきれたもんでせう」

「どうして、どうして、あの人は有名な大雅堂です、私は一二度會つてゐるから間違ひはありません。當節大雅堂の繪と云つては金を何程出しても容易に得難い物です、大した物です」

と其の人が言つたので、院主も半信半疑ながらやうやく得心して最後まで畫かせた。其の畫は後世に殘つて高野山の一大奇觀となつた。

それと似たやうな出來事があつた。

或る年のこと、大雅は江戸迄行く用事があつて東海道を下つた。駿河國を通つて終日富士の絶景を賞して、日が暮れて原宿の旅籠屋へ泊つた。が、晝間見た富士の姿が心の中を往來して眠ることが出來なかつた。彼は畫き度くて畫ゝ度くて溜まらなかつた。と見ると、枕許に白張りの二枚屏風が立てゝある、田舍の經師屋の仕立てた物で野暮な拵へだが、まだ出來てきたばかりと見えて素新らしかつた。

「是れはいゝ物がある」

と大雅は思つた。主人に頼んで畫かせて貰はふか、どうしやうと考へたが、頼んでも承知して與れるやうなことはない。

「構はない、畫いて仕舞へ」

大雅は、家人が寢靜まるのを待つて、墨を摺つて、屏風一面に富士山を描いた。それは我れ乍ら美事な富士だと思はれた。

「あゝいゝ氣持だ、是れで胸がせい〳〵した」

大雅は筆を投じて床に這入つたが、無斷で屏風をよごしたこ

とを家の者に發見されては事面倒と思つたので、翌朝未明に起きて朝飯も食はずに發つてしまつた。

「旦那様大變です、三番へ泊つたお客様が屛風へ墨を塗つて行きました」

朝、部屋の掃除に行つた下婢が慌てゝ二階から降りて來て、帳場に居た主人に向つてから言つた。

「何！ 屛風へ墨を塗つた」

主人も吃驚して直ぐに三番の部屋へ行つて見ると 成る程下婢が言つた通り、大事の屛風へベタ〳〵に塗つてある、がよく〳〵見るとそれはたゞ墨を塗つたわけではなく、富士山の繪が畫いてあるのだが、山の頂上を無闇に大きく畫いてしまつて、それへ雲だか何んだかベタ〳〵墨が塗り付けてあるばかりで、繪にも何んにもなつてゐない――。

主人は怒つたのなんのつて

「畜生、飛んでもない悪戯をしやがつて、道理であの老爺今朝莫迦に早く發つと思つた。今から後を追つ掛けて取つ捕まへて屛風の代を辨償させて遣らうか」

「でも、もう箱根へ掛つた時分ですから追ひ付けますまい。それに捕まへたところで乞食みたいな老爺でしたから、お金なんぞ持つてやしませんよ」と、内儀さんも其處へ來て言つた。

「それもさうだな、ほんとに忌々しい奴だ。折角誰れかいゝ畫工に畫いて貰はふと思つて拵らへて置いた屛風を代無しにしてしまつた。これといふのも手前達がぼんやりしてゐるから、恁んな悪戯をされるんだ、以來是れに懲りて客に氣を付けるがいゝ」

大雅は、或る大名から依頼されてゐる畫を揮毫する爲めに江戸へ出て來たのだつた。そこで江戸へ着いて其の大名に會つた時、座興に此の話しをした。

「それは必ず傑作であらう、予も是非見度いものである」

と大名は言つたが、間も無く參觀交代の期になつて歸國する際に原宿で休憩して、本陣の主を召し「なにがしといふ旅籠屋に斯く〳〵の屛風がある筈だから携へて參るやう」と言ひ付けた、本陣の主から彼の旅籠屋の亭主に其の趣を言つて訪ねて見ると正しくあつた。見つともなくて立てられないと云つて行燈

部屋に投り込んであつた。大名は取り寄せて見ると、書によく大雅の本領を發揮した稀代の名作だつたので、早速それを買ひ求め度いと言つた。

旅籠屋の亭主は驚いた。が、さうなると急に有難くなつて賣れなくなつた。大名が價を厭はず懇望したにも係はらず旅籠屋は手放すことを肯じなかつた。其の富士の圖も、原宿の名物の一つとなつて殘つた。

六

大雅は煙霞の癖があつた。壯年時代も、老後に及んでからも變りが無かつた。彼は閑があれば一介の笠、一本の杖に身を寠して、名山大澤を漫遊した。六十餘州に彼の足跡を印せざる土地は無かつた。殊に彼は山登りが好きだつた。富士山の如きは數回登攀して、其の都度道を變へて登つた。或る年大雅は、高芙蓉、韓大年と三人で、富士、白山、立山の三岳に登つた。そこで三人とも三岳道者の號があつた。韓大年は名は天壽字は大年、醉晉齋と號し、伊勢の人で、書畫と篆刻をよくした。高芙蓉は通稱大島逸記と云つて甲斐の人で、書をよくし、また鐵筆を巧みにした。我が國の篆刻の術は此の人によつて一變したと云はれてゐる。

此の時の道中、韓大年が腰に付けてゐた小使帳が或る人の手に傳はつて、其の一節がある書に載つてゐる、古への旅の趣きも知れるが、三老遊覽の有様を想像することが出來て面白いから其の儘轉載することにした。

七月二日

一　二百文　六日市藤左衛門願泊、尤辨當持此方より禮を遣

一　百廿六文　内の男長左衛門三人荷物案内牛首迄賴二匁五分の所白衣道者故如此よし

同　三日

一　百　文　牛首七郎左衛門　中食

一　一　匁　世話料

一　三十八文　米一升二合代

一　百　文　韓わづらひかご代

一　廿四文　池おどり見物入用

一　十二文　高あめ代

—(逸話　大雅堂)—

大雅が老年になつてから或る人に恁う言つて話した。

「私は若い時分に馬術を習つた。處が其の師匠が云ふことには、貴君は武士でもないのに騎馬の術を學んでも無益である、併し乍ら、旅をすれば足が疲れた時からしり馬に乘ることがあるだらう、そんな時、落ちる術を知らないと怪我をするだらうと。私は至極道理だと思つたので落馬の術を學んだ。所謂からしり乘りかけ二寶荒神三寶荒神などといふ、悉く其の落ち方を習つて置いた。そのお蔭で危難を免かれたことが度びくあつた」

大雅が奥州へ旅行した時、路で馬をとつて乘つたが、居酒屋の前を通ると、馬子が

「お客樣、濟まねえが、わしい一杯やつて來るだから、一寸爰に待つてゝお與んなせい」と言つた。

「あゝいゝとも、緩りやつて來るがいゝ」

と大雅は馬の上から答へた。

馬子は喜んで手綱を客に預けて、居酒屋へ這入つて二三杯飲んで、やがて表へ出て見れば客も馬も何處かへ行つてしまつて見えなかつた。

「さあ大變だ」

馬子は周章てゝ驅け出したが、何處にも居ない。尋ねあぐんだ末に仕方がないので我家へ歸つて來ると、庭で馬の嘶く聲が聞えた。

「はてな」

庭へ行つて見ると、馬はチヤンと歸つて來て庭の中へ這入つてゐる。おまけに馬の上には、先刻のお客が安閑とした顔をして跨がつてゐる。

「アレ、お客樣、どうしてお前樣は恁んな處へ御坐らつしやつた」

「どうしてと云つたつて、馬がひとりで歩くから、馬に委せてゐたら此處へ伴れて來て與れたのだよ。此處は馬子さんの家かね」

「へいさうでがす、だがお客様、お前様はよつぽど呑氣なお方でやすのう、ヤイ畜生、こつちへ出ろ」

馬子は馬の口を取つて引き出して客を卸した。がもう日が暮れたので何處へも行くことが出來ない。

「恁んな汚ない家でがすが、今夜一と晩わしの家へお泊んなさい」と馬子は言つた。

「それでは御厄介になりませう」

大雅はその晩馬子の家へ泊めて貰つた。馬子の女房なぞも野良から歸つて來て親切にいたはつて呉れた。大雅は喜んで

「大變お世話になつて忝けない、何かお禮したいが何も差し上げる物が無い。わたしは繪師だから、繪を一枚畫いて上げませう」

と云つたが馬方の家のことで紙が無い。すると、張り替へたばかりの障子があつたので、それへ山水の圖を畫いた。馬子は別に有難くも思はなかつたが、其の後で村の名主が來てそれを見て、大雅の畫であると云つて教へたので、紙をはなして、子孫の代まで傳へた。

馬に乘つたゝめに、えらいめに合つたこともあつた。玉瀾と二人で天の橋立を見物して、若狹國へ向ふ時、路で馬方が頻りに馬をすゝめた。そこで夫婦相乘りで舞鶴港迄行つて、馬を下りて賃錢を拂はふとしたところが、一文も錢が無かつた。馬方は非常に腹を立てゝどうしても許さない。夫婦ふたりが往來で罵倒されて殆んど當惑してゐると、丁度其の前が壺屋某といふ豪家で、其の家の主人が是れを見て氣の毒に思つて、賃錢を拂つて救つてやつたが、話しをして見ると大雅堂であることが分つたので、早速自分の家に案内して、歡待を盡して逗留させた。

一とせ大雅が江戸から奥州に遊んだ歸るさ、何處かの禪寺へ立ち寄つて午飯を乞ふたところが、丁度其の時は住僧が他行して不在だつたにもかゝはらず、留守居の者が快くもてなして一飯を饗應して呉れた。大雅は喜んで其の場に一偈を書き遺して去つた、すると後へ歸つて來た住僧が其の偈を見て激賞して其の和を作つて、大雅の跡を追つて京都の方へ向つたが、道中でもつひにそれらしい人に逢はず到頭京都迄來てしまつた。京都へ來て探したけれども分らなかつた。その偈には池無名と

めてあつたが、誰れに尋ねても其の名を知つてゐる人は無かつた、かの僧は尋ねあぐんで空しく歸國しやうと思つたが、「折角來たことだからせめて東山の神社佛閣だけも參拜して歸つたらい〻でせう」と人から云はれたので、最初に祇園の社に詣でたところが、繪馬殿に掲げてある蘭亭圖に池無名と記してあるのを發見して、やがて坊へ行つて尋ねて初めて、其の人の所が分つた、僧は直ぐ樣大雅を訪問して、對面した。

「もはや本意をとげました上は、京都に用はありません」

と僧は言つて、其の日のうちに奧州をさして旅立つた。奧州の地名も僧の名前も分つてゐない。

七

或る日、大雅は三條通を歩いてゐた。知り合ひの骨董屋の前を通り掛ると、其の店に素晴らしい茶入れが置いてあつた。値段をきくと百兩だと言つた。大雅は其の茶入れを欲しくて溜まらなかつたけれども、百兩ときいては手が出ない、百兩はおろかなこと、丁度其の時は明日の米代にさへ窮してゐた。どうにも仕樣はないので其の儘家へ歸つたが、茶入れの事が何處までも忘れられない。

それから幾日か經つてからのことだつた。東山に稻荷大明神を祭る社があつたが、靈驗があらたかで、信仰する者が多く、非常に繁昌してゐた。其の稻荷大明神に、此の度正一位の宣下があつて、大祭を行ふことになつた。そこで講中の者が相談して、大幟を調達して社前へ建てることになつたが、其の字を當時書道に於ても並ぶ者なき大雅堂に揮毫して貰はふといふことになつた、世話人が大雅の處へ依頼に來た大雅は承諾して、明神の社内へ行つた。

幟は、幅五反で長さ數丈の大幟であつた。大雅は幟に對し一默然として首を低れて、しばらくの間考へてゐたが、やがて筆に墨を染めて、まづ最初の一字を書き了つた。講中の人々は片唾を呑んで、第二番目にはどんな字を書くことであらうかと待ち構へてゐると、其の時大雅は突然筆を下に擱いて、

「染筆料は如何程頂戴が出來ませうか」と、一同に向つて言つた。

一同は駭いたが、既に一字書いて白幟をよごしてしまつた上は、先方の要求通り染筆料を與へるよりほか仕方がないので、

「いか程でも、染筆料はお望み通り差し上げませう」

と答へた。

「では、百兩申し受け度い、それでなければ揮毫はお斷り申す」

一同はます／＼駭いたが、今更仕方がない。百兩の染筆料を出さうと言つた。大雅は非常に喜んで、直ぐ様筆を下して、一對の幟の字を書き了つた。書き了るが否や、筆墨を束ねて持つたまゝ何處かへ行つてしまつた。

後で一同は大いに憤慨した。大雅堂といふ人は寡慾恬淡の人物だと聞いてゐたが、噂と實際とは雲泥の差がある、あんな卑陋な人物の書いた幟を建てゝは神前を穢す恐れがあるから、此の幟は引き裂き捨てゝしまふがよいと言ふ人もあつた。

大雅は稲荷の社から大急ぎで三條の骨董屋をさして行つた。そして「先月見た茶入れを賣つて貰ひ度い」と言ふと、骨董屋の主は、

「それは惜しいことを致しました、あの茶入れはたつた今、先生と一足違ひで、他のお客様が來て買つて行つてしまひました」

と言つた。

大雅はがつかりしてしまつた。彼は悄然として稲荷の社へ戻つて來た。そして人々に向つて言つた。

「實は、わたしは先き頃三條の骨董屋で茶入れを見て欲しいと思つたが、百兩だと云ふので買ふことが出來なかつた。併し、どうかして百兩を調達して、其の茶入れを手に入れたいものだと日夜考へてゐる處へ、今日あなた方から幟の揮毫を頼まれたので、其の染筆料をもつて買ふと思つて、百兩の金を所望致しました。處が今骨董屋へ行つて見ると、一と足違ひで他の客に買はれてしまつた後でした。よく／＼わたしに縁が無かつたのでせう。併し、茶入れを人に買はれてしまつては、もうわたしに百兩の金は要りません、先刻は卑陋をも顧みず御無心を申したが、左様なわけですからお斷りに參りました」

一同は重ね／＼意外に感じ、先きに大雅を罵つた人々は殊に恥ぢ入つてしまつた。併し、一旦約束した染筆料を、たとひ先

方が不用になつたと言ふにもせよ、取り消すといふのは、世間へ聞こえても講中として恥かしいはなしだから、非是共納めて戴き度いと言つて、百兩の禮金を無理矢理大雅に納めさせた。

幟を建てると、此の話が早くも世間の評判となつて、祭り前から幟を見やうとして來る者が遠近から集まつた。

大雅は、田舍者のやうな姿をして、其の見物人の中に交つて、私かに人々の批評を聞いてゐた。すると、何の字は少し大き過ぎるとか、何の字は曲つてゐる、何の字は筆勢が鈍いなどと、種々の批評があつた。其の中には當つてゐる批評もあつた。大雅は直ぐ樣同じ大いさの幟を調製して、それへ書き直し、前日の幟は引き裂いて捨てゝ、翌日は其の新らしい幟を建てた、處がまだ多少の非難があつた、そこで又もや新しい幟を製へて書き直した。都合五度びまでさうして。幟を新調しては書き改めた、最後には見物の一人殘らず感歎して一字も非難を加へる者は無かつた。此の幾度びもの幟の作り替へのために、百兩の金は一文も殘らずつかつてしまつた。

大雅は、幼時書を學んで三度まで師匠を替へたほどだが、其の頃の書はいづれも寺井養拙の流を汲んだものだつた。後に支那の古法を究め、晩年の書は其の畫と同じく規矩の外に超脱して、一見頗る稚拙、しかもよく〳〵見ると、運筆無礙、飄逸のうちにも格法現れ、おのづから技神に入つてゐた。此の外にも彼は詩文をよくした。廣く和漢の書を讀み、殊に詩論に通じ、文章を巧みに作つた。

大雅は我が國南宗獨歩の畫聖であつた。

知命の歳の元旦に彼は

「いくつじやと問はれて片手あけの春」

と言つた。

其の年門生が彼の壽宴を祇園町の相馬屋で開いた。當代の名士は皆競つて其の席に列した。

玉瀾も其の時は夫に從つて宴席に列した。

安永四年の春から　雅は病を得た。其の病氣にかゝつた始めから彼は藥を飲まなかつた。彼は死をさとつてゐた。

其の年の四月十三日に、眞葛原の草堂でみまかつた。歲五十

四であつた。

大雅其の沒後、玉瀾が獨り棲んで其の家を守つてゐた。其の後數年にして、玉瀾も沒した。玉瀾の後には門人俳月峯が其の跡を繼ぎ、月峯は同じく淸亮に讓つた。さうして眞葛原の草堂は洛東の名所の一つとなつて後世迄保存された。現在も尙、大雅堂は舊の地を其の儘に殘つてゐるが、建物は昔の物ではない。

大雅が沒した時、門人が集まつて師匠の手廻りの箱などを調べると澤山の遺墨が出て來た。するとそれを聞いて、其の遺墨を讓り受け度いと云つて來る者が、京大阪をはじめとして、遠國からも集まつて來た。全部賣拂すると七百兩の金が出來た。

そこで門人達は相談して

「此の金を以て恩師を不朽に傳へる方法を講じやう」

といふはなしになつて、柴野栗山の處へ碑文を賴みに來た。

すると栗山が、

「それは至極手易い事です、大雅堂を一大不朽にするに就いては私に一案がある、何んと私の意見に從つてはどうですか」と言つた。

「それではどういふ御工夫ですか」と門人達が尋ねた。

「傳記を書いて碑に載せるといふことは、私としては誠に名譽でむしろ望ましいことだが、併し、そんな事では面白くない、生前大雅先生の行狀にも適はしくない。そこで私の考へといふのは、其の七百兩の金で、非常に大きな一座の石を求めて、佛像でもない人の樣なものを拵らへ、其の胸の邊へたいがどうと假名で深く彫り込んで、此の外には、行狀も生れた年も、死んだ年も何も記さず、そ　て是れをば、大津栗田邊の往來から望む山の中に安置するのです。さうしたならば、道中の旅人が其處へ來ると、最早大雅堂佛まで來たなぞと云ふやうになつて、大雅堂の名前は末代迄不朽に傳はるであらう。是れならば老先生も冥土で呵々大笑して、面白いと云はれるだらうと思ふ、諸君いかゞです」

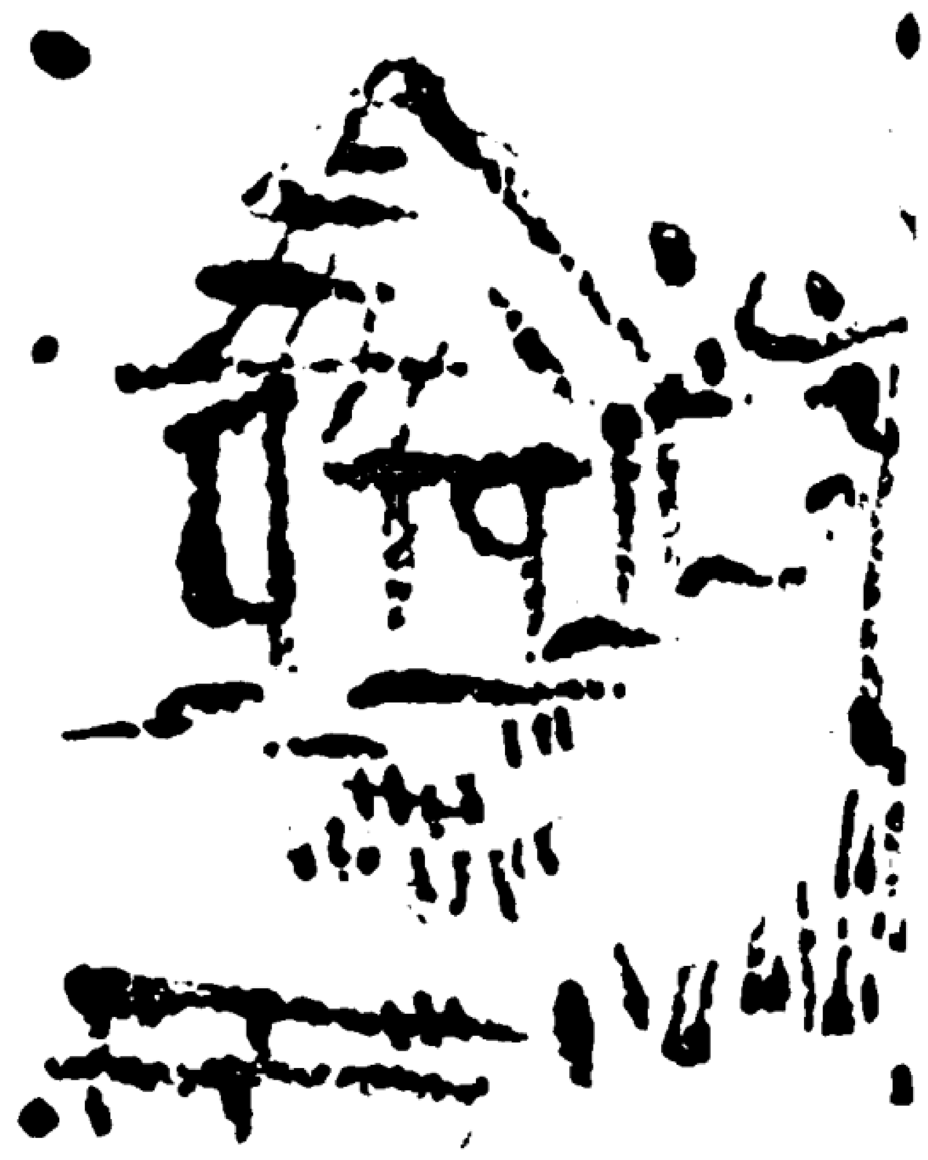
と栗山は言つた。併し門人達は、栗山の此の非凡の企てを解することが出來なかつた。で、是非共碑文を書いて貰ひ度いと言つた。

「では、碑文も書かないことはないが、有りふれた碑を建てる

位のことならば僅かの金で足りるでせう。さらば其の殘金を、京都中の貧民に分けて遣ることはどうです。これまた老師の意にもかなひ其の事を碑文に載せたならば一層立派にもなります」

と栗山は重ねて提案した。が、門人達は此の意見にも應じやうとしなかつた。そこで栗山はつひに碑文の筆をとらなかつた。門人等は別に蕉中禪師に乞ふて、墓誌を得て、舟岡の南淨光寺に墓を建てた。

大雅堂佛は建たなかつたけれど、大雅は矢張り不朽であつた。今後もなほ、彼の名前と功績とは、日本の繪畫が存在するかぎり不朽に傳はるであらう。碩學栗山先生の不凡の企ても、畢竟無用に屬してゐたといふことが、さらに彼の偉大を證明するものとして、傳記の作者は、此の餘事を書き添へた次第である。



淺春賦

吉田絃二郎

西行にしても、芭蕉にしてもなぜ生涯を旅で過したか。殊に西行には妻もあり子供もあつたやうであるが、その愛執の絆までも斷つて何故に漂白の旅に出なければならなかつたのか。

人間である以上は、殊に多感の詩人である以上は芭蕉にも、西行にも Love-affairs もあつたであらう。しかしそれが家出の動機であつたとは私は考へたくない。

『いつのころよりか片雲の志云々』恐らく芭蕉自身にも、いつのころから漂泊の旅に身を委ぬべくなつたのかはつきりとは記憶してゐないであらう。それほどはつきりした動機があつたとは思はれぬ。同時に何故に旅から旅へ經めぐり歩かなければならなかつたのか、かれ自身答へることはできないであらう、

『兎角拙者浮雲無住の境界大望故如此漂泊いたし候』

『殘生いまだ漂白やまず湖水のほとりに夏をいとひ候猶こち風に身をまかすべきやと秋立つ頃を待かけ候』

一所にぢつと家を定めて住んでゐることは芭蕉にはできなかつた。

諸法從來常示寂滅相。『しばらく足のとどまる所は蜘蛛のあみの風の間にと存候へば』

人生そのものを風の間の蜘蛛の巣の運命に過ぎないと見た佛教的な思想の背景が、かれの漂泊の志念を一層固くしたことは爭はれない。西行も、芭蕉も佛教思想の背景なしには生れ得なかつたといふことはできるであらう。が、もともと西行なり、芭蕉自身のうちに、いかに多くの漂泊者的な血が先天的に流れてゐたであらうといふことも想像せられる。かれ等は生れながらの漂泊者であつた。それがたまく〳〵老莊、或ひは佛教の思想と結びついたがために、あのやうな文學形式となつてあらあれ、あのやうな生活形式となつてあらはれて來たと見るのが當然であらう。

私は此頃柴田勝衛氏が譯されたパピニーの「きりすと傳」を讀んだ。その中にキリストは生れながらにして罪を知らぬ人間であつた、最初から最後まで完き人間であつた、子供其ものであつたと云ふ意味の言葉が語られてゐたのを讀んだ。福音派の人々に言はしむれば、この結論は當然の事實であつたにちがひない。しかしかのルナンの耶蘇傳を續んだ私たちにとつては、パピニーのこの言葉は、全然新しい意義と力とを持つて訴へて來るのであつた。ルナンが說いたやうにかつて荒野に於て惡魔の誘惑を感じないではなかつたキリストが、人間の達し得る最高の世界まで達し得たといふ風に、キリストを見るのも面白い見方である。しかしパピニーのやうにキリストは最初から最後まで完全な人間であつた、神の子であつたと見るのも面白い。そのやうな場合が實際に存在し得ないと斷言することはできない。

久しい間自然主義的な見方に馴らされてゐた私たちはやゝもすれば、あまりに人間をあさましいもの、卑しいものに決めてしまひやすい。しかしながら、私たちは實際の人生に於て、私たちが想像してゐたより以上に醜いものや、呪ふべきものゝ存在してゐることも知ると、同時に私たちが想像もし得なかつたほど美しいものや尊いもの、存在しつゝあることをも知る。

アシシのフランシスや、孔子や、釋迦といふやうな人々は恐らく、私たちの小さな、卑しい心では想像することもで

きないほど立派な人であつたにちがひない。かれ等は生れながらの神の子であつたにちがひない。

トルストイは非常に偉大な人であつたにちがひない。しかしかれは生まれながらの神の子ではなかつた。ロマン・ロラン流に言へば、あの最も人間らしい弱點を持つたトルストイがあの神の完きを得ようとした苦しい修業のうちに私たちを勵ますものがあるにちがひないが、アシシのフランシスや、キリストのやうに最初から神の子であつた人の生活の尊さといふものがしみ〴〵感じられる。

どのやうに深い信仰を持つてゐても「どのやうな懊惱を持つてゐても」ヨブはヨブであつてキリストではあり得ない。トルストイはヨブではあり得るであらうが、キリストではあり得ない。かれは最初からヨブとして生まれたのであつて、キリストとしては生まれなかつた。

バプテスマのヨハネはついにキリストになり得なかつた。かれはキリストとして生まれなかつたからである。

アシシのフランシスは誤つていつまでも遊蕩兒の群にはいつてゐたとしても、かれはその人々の間に聖フランシスの愛を生かし得たであらう。キリストはたとへ賭博者の群に墮ちて行つたとしても神の子の愛を周圍の人々の間に成長させ得たであらう。

かれ等は生まれながらの神の子であつたがゆゑに。

もし、トルストイが或ひはパウロが誤つて收税吏や賭博者の群に墮落しつゞけたとしたら、その結果はどうであつたらう！

西行或ひは芭蕉のやうな人たちは、いづれにしてもあのやうな漂泊の生涯に入ることが最も自然的な人間として生まれたのではなかつたか。即ち生まれながらの漂泊者ではなかつたのか。

「生まれながらの」といふ言葉の尊さがおぼろげながら、このころ分つて來たやうな感じがする。

人間のいろ〳〵な外的な努力といふものが、その「生まれながらの」本質に對してほとんど何の力をも持つてゐないといふことをも感ずるやうになつた。

したがつて、外的な努力を加へる前に、先づ眞實に「生まれながらの」自分自身の姿を見出すことが何より大切なことであるといふことを考へずにはをれない。

どんなにあがいてもトルストイになれない人もあるし、そのやうな「生まれながらの」人がトルストイの眞似をすればずゐぶん僞善者にもなりかねないし、西行や芭蕉に似通つた「生まれながら」を持つた人があるとしたら、その人はやつぱりかれ等の歩いた道を歩くより他に、ほんとうな生き方はないのではないかと思ふ。

萬人の人と倶に生きるのも、たゞ一人のうちにのみ生きるのも宿命であると思ふ。

かれはかれ以外には歩き得ない。宿命である。

×

或る時は死といふものが非常に恐ろしく思はれることがある。生きてゐることがたまらなくうれしく思はれることがある。たいていそれは美しいのびやかな自然のなかに自分を見出し得た刹那である。漂泊の旅に於いてゞある。

或る時は死をさまで恐ろしく思はないことがある。生きてゐることをさまでありがたく思はなくなることがある。たいていは人間生活の渦の中に呼吸しつゝある自分自身を見出し得た刹那に於いてゞある。

私は數日前戸山ケ原を通り拔けた。そして久し振りにあの櫟林の中に日向ぼつこをしてゐる青年たちを見た。まだ秩父あたりの山には白い雪が積つてゐた。まさに芽生えんとする武藏野の曠原をへだてゝ遠山の雪を見たゞけでも私の心

は無性に躍るのであつた。空は文字通りに瑠璃のやうに輝いてゐた。これはこの十數年來見たことのないほどの美しい空であつた。

私は去年見た薩摩の空を想ひ出した。かつて見た對馬の空を想ひ出した。

美しい空の下に生へることのいかに幸福であるかをつくづく感じさせられた。

人間は年をとるにつれて星を見ることがすけなくなる。あわたゞしい生活に追はれ、人間的な生活の屈托に囚へられた私たちの眼はいつも暗い地上を見つめがちになつてしまふ。生きてゆくために人は人といかに相憎み、相嫉み、相陥れなければならぬのか。人はパンを奪ひ合ふところの犬を笑ふ。けれども人と人と集まるところには、それ以上の醜いパンの爭奪がある。人間の爭ひはお體裁を作つてゐるだけに一層醜い、一層陰險である。

小ひさいにせよ、大きいにせよいやしくも一つの集團生活のなかに生きてゆかなければならぬ以上、私たちはそこに愛よりも、より多くの憎みを苦しまなければならぬ。

この大きな都會の朝と夕暮とに立つて見るがいゝ。

電車の前に群がつてゐる人々の顔のあまりに蒼白いのに驚くであらう。かれ等は今日の一日の仕事の苦痛を恐れてゐるのではない。今日の一日の人と人との憎惡におのゝいてゐるのである。

黄昏れに見るかれ等の顔はさらに蒼白である。かれ等は一日の人と人との憎惡と陥穽に疲れ、喘ぎつゝ歸つてゆく。學校の教師であれ、官吏であれ、會社員であれ、勞働者であれ、いやしくも人に使はれ、人と共に働かなければならぬ人であつたなら、そしてその人が正しい感受性を持つてゐる人であつたなら、正直であることを欲し、美しい心に生きることを欲する人であるならば、恐らく殆んど毎日夜のやうに、その集團的生活の醜さから逃れんことをのみ思ふであらう。

神は田園を作り、惡魔は都會を作つたといふ言葉は恐らく眞理であらう。神は孤獨を作り、惡魔は集團を作る。

黄昏の町を歩いて見るがいゝ。

そこには俯向きがちに歩いてゐる男を屹度見出すことができる。

黄昏の川端を歩いて見るがいゝ。

そこにも靜かな流れを見つめつゝ歩いてゐる男を發見する。

黄昏のバアに、黄昏の街路樹の下に。

かれ等は星を見ない。生活の屈托、生きるための人と人との憎みのためにかれ等の眼は重く涙に鎖されている。

もし親がなかつたら、もし妻がなかつたら、恐らくかれ等はその夜かぎり再び集團の生活へは歸らなかつたであらう。

親を思ふがゆえに、妻子を思ふがゆえにかれ等は憎みつゝも、呪ひつゝも醜い集團生活の中へ歸つてゆかなければならぬ。小さい、しかしながら尊い殉教者たちが黄昏の電車の前に群がつてゐる。

星はいつもかれ等の群の上にさゝやいてゐる。しかしかつてかれ等のうちの一人の男も星を仰ぎ見ることもしない。

かれ等の不幸なる視線は暗い地上に冷たい鏈に縛られてしまつた。

まつたく、人間は一日一日と空を見ることをしなくなる。空の美しさをすら忘れてしまう。

近代のあらゆる智識が生んだこの大きな都會の夜のすべてのアーク燈を持つことよりも、靜かな夜の一つの星をもつことがもつと幸福なことではないのか。

王宮の一室を持つことよりも、柔かな草の上に仰臥して天と地の凡てに抱かれることがもつと幸福なとではないのか。

私たちは青空のいかに尊きかをほんとうに考へたことがあるか。

私たちは太陽のいかに尊いかをほんとうに考へたことがあるか。

五月の朝の微風に涙ぐむほどの感謝をさゝげたことがあるか。

黒い土を破つて芽生へする一莖の草花に神秘なる大自然の愛のさゝやきを聴いたことがあるか。

『身を分けて見ぬ梢なく盡さばやよろづの山の花のさかりを』（西行）

私たちは春の花に對して、かほどまで、貪慾になり得たか。

太陽に對して、青空に對して、五月の微風に對して、一莖の草花に對して、私たちはあまりに無慾である。私たちは自然に對してもつと／＼貪る心を持たなければならぬ。

芭蕉は雲と鳥に對して貪慾であつたがために一生を旅に送つた。

『佛には櫻のはなを奉れわが後の世を人とぶらはば』（西行）

西行はその死後までも櫻の花と相別れんことを惜しんだ。かほどの自然に對する執着を持つたればこそ、かれは一生を旅に送り得たのであつた。

『花見ればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりけり』（西行）

ほんとうに花を愛する人にしてはじめてこの心を掬むことができるであらう。ほんとうに人生の無常を觀ずる人にしてはじめてこの寂しさを感ずることができるであらう。

×

芭蕉に秋の句の多く、また秋の句のすぐれたるもの多きに對して、西行に春の句多く、また春の句の人の心を惹くもの少からざるも面白い現象である。

このことについては私はかつて書いたことがあるが、芭蕉と西行と比べて芭蕉は秋の日の静寂を思はせ、西行は春宵のものうき涙を想はしめる。芭蕉の句は時として釋迦を、西行の歌はあまりに、多く解脱し得ざる蕩兒の俤を聯想せしむる。しかもその子供らしさに於て、匠まぎる句と歌に於て相似たる神品の薫りを放つてゐる。

西行の歌には玉石相混じたる俤がある。芭蕉にはほとんどそれがない。芭蕉は西行以上に藝術に對して一層神經質的であつたようだ。

西行は世を捨てたとは云ふものゝどこまでも死を恐れたようである。花を見るにつけても、月を見るにつけても。

『花にそむ心のいかで殘りけん捨果ててきとおもふ我身に
わきてみむ老木は花もあはれなり今いく度か春にあふべき
いとふよも月すむ秋になりぬればながらへずばと思ふなるかな
捨ていにし浮世に月のすまであれなさらば心の止らざらまし』

老木をいたむ心のうちには、すべての生けるものゝ死をいたむ心が動いてゐる。かれは死の恐れをのがれんとして、つひにのがれることができなかつた。

世を捨てたと思ひながらも、かれは自然を捨てることはできなかつた。かれにとつて自然はあまりに美しかつた。あまりに蠱惑的であつた。かれは自然の享樂者であつた。

芭蕉を見る時、私たちは芭蕉が無常を凝視し、いかに静かに無常の中に尊き日を、寂しき自然を樂しみ得たかを感ずることができる。かれは寂寞を主とし、悲しみを主とし、孤獨を主として、なほこの静かなる無常の中に悠久なるものを樂しみ得たやうに思はれる。

死はかれにとつて寂しいものではあつた。しかしかれは死を恐れなかつた。靜かに死を待つことができた。

『花にうき世我酒白く飯黑し
世にさかる花にも念佛申けり
奈良七重七堂伽藍八重ざくら
花の山袈裟落されな坊主達
初さくら折しもけふはよき日なり
さくら狩きとくや日々に五里六里』

そこには落花に對する悲しみよりは、さかりの花と偕に樂しみ、偕に醉はんとする世間なみの春の心が動いてゐる。あたゝかなユーモアさへ流れてゐる。あるがまゝの自然、無常そのものゝなかに自然を樂しむ心が動いてゐる。

『野ざらしを心に風のしむ身かな
秋かぜや藪もはたけも不破の關
猪もともに吹るのわけかな
死もせぬ旅寢の果よ秋の暮
馬かたはしらじ時雨の大井川』

最も寂しかるべき秋の自然の中にあつても、かれはその寂寞を主として靜かに寂寞を享樂してゐる。靜かに人生の無常を觀ずることによつて、さらに深く無常の悠久さを享樂してゐる。かれは死に勝ち、無常に勝ち、寂寞に勝つた。

死も、無常も、寂寞もかれの生活內容の一部分として無くてはならぬものとなつた
かれは死を、無常を、寂寞を、持つてその魂の糧とした。
悲しみを知る者にとつて、悲しみなき世界はいかに空虛であらう。
寂寞を知れる者、無常を知れる者にとつて寂寞なき日、無常なき日はいかにブランクなものであらう。
故鄕を思ふ日私の胸は傷む。

×

父がたゞ一人で夜具にくるまつて寢てゐるであらう。私が送つてやつた毛皮の帽子を眼深かに冠つて寢てゐるであらう。

子供らをみんな旅に出してしまつた父が、母の佛壇の前に夜も晝も眠つてゐるであらう。
眼がさむれば茶の間に來て酒を飲んでゐるであらう。
朝も晝も晩も、眞夜中も。父は起きて來ては酒を飲んでゐるであらう。
私は故鄕に歸るたんびに酒を攝することを父にすゝめた。そのたんびに父と喧嘩もした。
子供らを旅に出してしまつた父がどんなにか旅の娘らのことを案じてゐるであらう。
父よ、眠ることがあなたには救ひなのか。
醉ふことがあなたには救ひなのか。
父よ、子供らを育てゝしまつて、妻に別れて、たゞ一人で故鄕の家に酒を飲むあなたの老年の心が、私に今幾分わかつて來た。

今度故郷に歸る時、私は灘の酒を買つて行かう。
父よ、そしてあなたと醉ひつぶれるまで飲まう。

×

備後の兄よ。
山陽境の山にはまだ雪が消えがてに殘つてゐるであらう。
放牧の牛が枯草の上に眠つてゐるであらう。
あなたは小松山をあさつて雉を追ふてゐるであらう。
『青山を見い。白雲を見い！』
あなたには今も自分自身に向つてかう言つてゐるであらう。
今はその青山もまだ冬枯れの中に眠つてゐるであらう。
今はその白雲もまだあまりに冷たいであらう。
あなたが生涯の事業の第一着手として作つた大きな門だけが、冬枯れの草の中に青山白雲を背景として立つてゐるであらう。
蜜蜂の巣は雨にさらされ、葡萄畑は雑草の中に蕭條たる冬を眠つてゐるであらう。
双鬢すでに白きあなたはなほ美しい理想を描いて門の前に立つておゐでゞせう。
遠い山が瀬戸内海の夕照を紫色に反射する時、あなたはサフランの畑に立つて夕燒の空を見ておゐでになるでせう。
破れたる白壁の倉が

煤けたる破風が
あなたの眼にどんなに映るでせう。
あなたは今日も恐らく半日をあの荒涼たる西の桑畑にたゝずんで、人生についてお考になつたでせう。
あなたは恐らく今夜もあのお寺の庫裡のやうな廣い煤けた母屋の爐の傍で悠久について瞑想しておられるでせう。
姉が經濟上の問題で一人胸を痛めてゐる時も、あなたは自分ひとりの哲學を考へておいでになるのでせう。
恐らくあなたは今日の午後薄荷畑に山の兎が眠つてゐたことを姉にお話になるでせう。
姉が馬鈴薯を爐の中で煮ながらあなたの哲學を聽いてゐるでせう。
村の人たちが、繩を繰つたり、藥草を刻んだり、町に出す米をごまかしたりしてゐる時に、あなた方だけが美しい夢を、永遠を、語つておゐでになるでせう。
村の人たちは恐らくこの夜中にも、今度はあなたの東の山が賣物にされる日を想像してゐるでせう。
或ひは沼の下の田が誰かの手に渡さるゝ日を、
あなたの畑がだん〳〵狹くなつて行つても
あなたの山がだん〳〵小ひさくなつて行つても
あなたは悠久を思ひ、人生を觀じながら寂しい微笑を爐の火に映しておゐでになるでせう。
恐らくこの夜中に山陽線の汽車は旅人を載せて山一つ隔てた線路を走つてゐるでせう。
よし窓を開いて星の下にあの山を見た旅人があつたとしても、かれはどうして山一つ彼方へ草の中に美しい夢を追ふ老哲學者が住んでゐることを想像することができませう。

私は夜汽車の旅に、窓に映る山沿ひの孤燈を見ることに、よくあなたを思ひ出します。燈のあるところ必ずあなたのやうな美しい夢を追ひつゝある哲學者を見出すでありませう。

燈のあるところ必ず人間的の苦惱がありませう。同時に悠久を思ふ隱れたる哲學者が生きてゐるでありませう。

あなたを思ふ時、私の眼には冬枯れのすべての山も、町も尊く映つて來ます。

そこに隱れたる幾多の詩人や哲者學を思ふがゆえに。

×

眞理の尊きことよ。

しかも眞理の名によつていかに多くの人々が自己を最も正しとし、いかに多くの人々を鞭打ち、いかに多くの人々を批判し、いかに多く人々を殺しつゝあるよ。

眞理はさまで容易にすべての人々が所有し得るものであらうか。

キリストは眞理を見出し得たであらう。

釋迦は眞理を見出し得たであらう。

イプセンの『ブランド』は雪の山の中にたゞ一人の愛兒を亡ひ、妻を失ひ、なほ眞理を見出し得なかつた。かれはかれ自身をさらに深く雪の山の中へ抛げ棄てなければならなかつた。

眞理を見出すことのいかに困難であるべきかを想像することができる。

眞理を口にすることのいかに恐るべきかを知らなければならぬ。

さらに眞理の名によつて人を裁斷することのいかに恐るべきかを。

春日遲々。人間と人間のみが相憎み、相爭ふ。」

×

私は春の日の旅を愛する。

伊豆の山、久能山、奈良、法隆寺、近江の寺々を愛する

京都の春の夜街を歩くことを愛する。

春の日に大井川を下ることを愛する、

春の日に木曾川を下ることを。

私は春雨の京都の街を歩くことを愛する。京都の町を歩む人の靜かな下駄の音を。

春雨の大和路の巡禮を愛する。

菜の花と麥の畑のところどころに罌粟の花の白き法隆寺への道を愛する。

私は旅の宿の孤獨を愛する。殊に雨の夜の宿を愛する。

そこでは私はほとんど絕對の孤獨と沈默とを持つことができる。

あわたゞしい生活のために忘れられてゐた過去の自分のなつかしい姿が私の心にしみ〲とよみがへつて來るのも旅の宿である。

自分といふものをほんとうに考へさせられるのも旅の宿である。

春雨の夜の旅の宿は、嚴かな禮拜堂よりも、一層私の心を落ちつかせる。

電車もなく、自動車もない田舍の町を靜かに一人で歩く旅の夜は殊にうれしい。

低い軒の下に戸は鎖されて、奥のかすかな燭のまたゝきが雨に濡れた往來までさして來てゐることもある。

そのやうな時、私はかつて夢の中にそのやうな町を歩いたことを思ひ出すこともある。

たゞ一夜二夜のゆかりであつても、その宿の人々に對してその靜かな町の人々に對して、何かの宿命的なゆかりでもあるやうな懐しさをしみじみと感じさせられることがある。

たいていの町には靜かな川が流れてゐる。あてもなく夜の町を歩いて道を迷つてゐても、いつの間にか同じ川岸へ出て來る。輕い安堵の心が湧いて來る。

橋欄によつて水の音を聽きながら來し方行く末の旅を思ふのもなつかしい。

雨上りの空にはおぼろな星の影が雲の切れ目から覗いてゐる。田舍の町の星の光りは殊に美しい。

このころではたいていのステーションには乘合自働車があるが、旅にはまだ古風な乘合馬車の方が野趣があつていゝ。

雨上りの石ころ道を蹴つてゆく蹄の音も旅なれば興深く聽かれる。乘り合せた旅の人にもかりそめの親しみを抱く。

麥畑から吹いて來た四月の柔かな風が旅人の頬を撫でゝ椿の列樹をくゞつて麥畑へと吹く。

『いざともに穗麥くらはん草枕』

芭蕉の句の思ひ出さるゝもがた馬車で走る春の野である。

陽炎につゝまれ、春光に溶け、野火を望みつ、走る旅は思ひ出すだけでも胸をとゞろかせ。

雲雀啼く青草原に立ちて、遠山の霞を見る時、一番に胸を打つものは「生きてありき」といふよろこびである。

もし私たちの世界に、美しい人の心がなかつたなら、何で生きてゐることがうれしからう。

もし私たちの世界に春の微風がなかつたら、小鳥の唄がなかつたら、遠山に雪がなかつたら、春の山の野火がなかつたら、谿川のせゝらぎがなかつたら、何で生きてゐることがうれしからう。

春！生きる時は今だ！

私たちにめぐまれた命のよろこびに胸の血を波打たせる時は今だ。

義朝の墓も、小督の塚も、重衡の欄塔も春の光りに供養せられてゐるであらう。蓮華草も咲いたであらう。芹の葉も薫るであらう。

麥の畑の徑をめぐり、蠶豆の花をいとしみつゝあてもなく春の草原を歩いてゐる間に、私たちは、たま〳〵古きゆかりの塚を見出す。或る時は美女の塚を、梟雄の塚を、力士の塚を、旅に死せる人々の塚を。あはれな物語りを傳へられたる塚を。すこし氣をつけて見ると名もない木の上にも必ず小鳥が啼いてゐる。或ひは啼きつかれては美しい翅を休めてゐる。

なもない草の葉を春の柔風が吹いてゐる。

名もない花が古い塚や、朽ちかゝつた草屋根をかざつてゐる。

一塊の土の上にも陽炎がゆれてゐる。

私たちが長いこと忘れてしまつてゐた燈心草が小川に沿ふてすく〳〵と繁つてゐる。

川を流れてゆく小さな木片にも春の光りが踊つてゐる。

紅い椿には繍眼兒が

白膠木(るで)にはあま鷽(うそ)が

水松樹には四十雀が

小學時代からすつかり忘れてゐた自然が私の胸に、再び取りもどされて來る。

もし詩人ウオーヅオースがうたふやうに、少年期は人生の最もめぐまれた時代であるとするならば、かつて生まれざりし以前の世界の天福に充たされた日の俤を持つてゐるものとするならば、春の日の旅人はよし、しばしではあるとしても、人生至上の天福を再びすることができたのだ。

旅人は春の野を歩む。

かれ等の道の兩側には光りがためらふてゐる。かつて天上を照らした光りが。

かつて天福の世界にめぐまれた微風が、空の鳥が、空の色が、最も貧しき旅人の上にほゝゑんでゐる、

春あればこそ人生は生きてある價値を見出す。

春風に吹かるゝがた馬車の貧しき旅人！お前は人生で最もめぐまれた日を見出してゐるのだ。

×

私は二三日前とげぬき地藏の前を歩いてゐた。

竹で編まれた小ひさな花籠を山門の前で賣つてゐる男があつた。

私は三十年前の自分をそこに見出した。

竹で編まれた花籠。紫や青や赤の市松模様に染められた花籠。

私はあの花籠をどんなにか欲しがつたであらう。

削り立ての竹は銀のやうに春の光にかゞやいてゐた。

削り立ての竹は幼い子供の心に遠い世界を夢みさせる不可思議な香を、春の風に漂はせてゐた。

麥畑に働いてゐる母をせがんで私は幾度花籠を買つて貰つたゞらう。

人生のすべての幸福が、春のすべての光りがあの小ひさな花籠に盛られてあつた。

橋土堤の下で、いつも赤い股引をはいてゐた大きな男の栗毛の馬が死んだ時、土堤の下で火を焚いて人々は馬をとりかこんでゐた。

豌豆の花が咲いてゐた。

人々は豌豆畑の傍に馬を埋めた。

私は花籠を抱へたまゝ馬のお葬ひを見てゐた。

貧乏な家のものとして私は垢染みた襤褸を着てゐた。

幼な心にも母がいつも金の工面に涙ぐんでゐるのを感じたこともあつた。

しかしあの頃は一番幸福であつたやうに思ふ。

たゞ一つの花籠に人生のすべての幸福が盛られてあつた。

またあの頃は鉋屑で作つたチヤルメラを買つてもらつたことを覺えてゐる。

春の音といふ音が、あの赤く青く染めたチヤルメラの中から流れて來るやうに思はれた。

桑畑の間を、溝に沿ふてどんなにチヤルメラ賣りの男の後を追つかけて歩いたであらう。

父は怒る時は私の頭をなぐりつけたが、機嫌がいゝ時はよく肩馬に乗せてチヤルメラを買つてくれた。

私がチヤルメラを吹く時、母はよく默々として桑畑で働いてゐた。

春の風が吹いても滅多に母は笑はなかつた。

しかし世界中で私は母が一番好きだつた。

×

私の故郷ではどこの町に行つても土でこしらへた鳩が、葭簀張りの店で賣られてあつた。

赭い土で作られた素焼の鳩は白い胡粉や單調な紅色の繪の具で塗られてあつた。

春の日を浴びた土の鳩は雨戸を横にして作られた台の上に、きよとんとした可愛いゝ眼を瞠つてゐた。

お尻の方に唇をあてゝ吹けばほうほうと山鳩の聲をして鳴いた。

伊太利Ocarinaといふ陶土の笛の音を聽いたことがある。その形が鵞鳥(Oca)に似たところからこの名が出たと辭書には書いてあるが、幾つかの歌口もついてゐるし、私の故郷の土の鳩よりは幾分進んだ玩具であるが、私の故郷の土の鳩と、その野趣に於いて、單調さに於いてすこぶる似てゐる。

伊太利では森の中で牧童たちが吹くといふことである。牧歌的な感じを抱かせるものである。

故郷の土の鳩もその單調な聲、その單調な形に於いてすこぶる郷土的であり、牧歌的である。

セルロイドやいろ〳〵な進歩した玩具が田舍の町の店頭にもかざられて來るので、このころでは土の鳩はだん〳〵すけなくなつてしまつた。

私は春の田舍町で吹いた土の鳩の音を愛する。

あの胡粉で塗られた翅を愛する。

ほうほうと土の鳩を吹けば筑紫の春がよみがへつて來る。

筑紫の春の風が、春の光が、少年の日が。
伊太利の田舍の子供らは春が來れば今もあのOcarinaを吹いてゐるであらう。
筑紫の麥畑の中では今も子供らはあの土の鳩を吹いてゐるであらう。
春の風が吹けば私は筑紫を思ふ。
花籠を思ふ。チヤルメラを思ふ。土の鳩を思ふ。
私がほうほうと土の鳩を吹いてゐた時、默々として麥の畑に働いてゐた母を思ふ。
筑紫の春を今日こそ殺那に歩いて見たら
あの黃金の菜の花の平野に。(まつたく南國の菜の花はかゞやいてゐるが)
あの限りもない麥の平野に
春の微風が吹いてゐるであらう。
昔のまゝの私が、襤褸の着物を着て、げんげ畑の傍で土の鳩を吹いてゐるのを見出すであらう。
麥の畑で私の母が默々として働いてゐるのを見出すであらう。
三十年前の母と私は、今日もあの筑紫の野に寂しい眼を瞠つて春の光を浴びてゐるであらう。
春が來るごとに恐らく永遠に
私は故鄕のげんげ畑で土の鳩を吹くであらう。
亡くなつた母があの麥畑で默々として働きながら、私の鳩の聲を聽いゐるであらう。

——一九二四・三——

西洋藝術に於ける東洋趣味

石井柏亭

近頃西洋に於ける東洋趣味の流行は、著るしいものであつた。それは或は一時の現象かも知れない。それは又東洋と云つても日本よりは支那系統のものゝ方が多い。工藝品のあらゆる範圍に亘つて東洋風の圖案が用ひられて居た。それは婦人の手提袋(サツク)だとか、化粧具入だとか、室内の壁張用の裂地(きれぢ)、婦人服の裂地(きれぢ)、さう云ふ各種のものに應用されて居るのであつた。

カシノ・ド・パリと云ふ巴里一流の寄席の舞臺から棧敷へかけての裝飾は華麗な色どりに於ける支那式であつて、それがまた仲々旨く、華かな寄席の氣分とよく融合して居るのであつた。活動寫眞のことで丁度巴里に來て居た早川雪洲が其舞臺で一幕ものを演じたりした。主人公に扮した早川は洋裝の上に黑の紋附羽織を引かけて出た。日本人から見たら可笑しい此扮裝が西洋人に理解出來る程度の東洋趣味の一面を代表すると云へるかも知れない。銃丸を受けた胸を押えながら自若として煙草を一つ吸つてそれから倒れるのは、日本人のストイシズムを現はしたつもりであらうが、少し鑿が利き過ぎて巴里の觀客の眼には決して愉快に映じなかつたらう。而して嘸ビザールなものに思はれたであらう。又日本と云ふものが誤まつて傳へられることになりはしないかと思はれた。

筋などに重きを置かれない寄席演藝などではどうでもいゝ樣なものゝ、日本と支那とは往々混同される。支那をあらはすとき兎角首械足械などが持出されることも支那人側からは嘸かし迷惑なことであらう。

支那料理は紐育、倫敦、巴里等の大都會で仲々流行して居る。支那料理と云つてもそれは多く廣東菜の變態で、所謂中西(ちゆうせい)的のものであるが、其實質的な調味が西人の口に適するのであらう。それは仲々繁昌して居る。それに引かえて日本料理の方は單に在外邦人を顧客とするに過ぎず、時に日本人からの招待

によらない限り、其處に足踏みする西人の姿を見受けない。これは日本料理の淡泊で脂つ氣の少いことが西人に適さないばかりでなく、日本人の方から西洋の顧客を迎へることに決して骨を折らず、門戸を解放しない爲めでもある。

麻雀(マッヂャン)と云ふ支那の遊戯は今驚く可き勢を以て歐米に傳播しつゝある。現に今度歸る時私の乘つて來た箱崎丸にも上海へ麻雀を買ひ出しに行くと云ふ一米人が乘り合せて居た。其遊戯を說明する英文の書物は幾通りか出來て居るし、其骨牌面には風の方にN、W、等の略字が刻まれ、數字の方に1、2、等が刻まれたりして西人に分りよくしてある。頹廢的な支那趣味を容れるのはどうかと米國あたりで、議論があつたさうであるが、それにも拘はらず非常な勢で流行して居るさうである。

それに引かえて日本の花骨牌(はなふだ)は全く全國的である。あれなとも骨牌(ふだ)其ものは美術的であるし、遊戯法がそれ程複雜と云ふのでもあるまいし、若し英文の說明書でも出たら廣まらない限りはあるまい。

＊

西洋の工藝に日本趣味の取入れられるのは今日に始まつたことではないが、今佛蘭西の主なる陶藝家が日本陶器の特に澁い茶がゝつたものを學んで居ることは特筆するに足りる。なまこ釉(くすり)の模倣など仲々旨いものが出來て居る。例へばドラエルシ、ルノーブルなど云ふサロン審査員級の大家のなす處が皆さう云ふ物である。それは日本への土産などを買はうとする時、あまりに日本臭(くさ)過ぎて困る位である。

又ドコルシモンと云ふ人は玻璃パートの專門家であるが、此人は其特な玻璃パートを以て古支那の玉(ぎよく)の模倣をやつて、相當な成功を收めて居る。

金工家ではヂュナンと云ふ人が今其新意を以て頭角をあらはして居る。手に取つて見ると其品物は多少個性を缺くけれど、思ひ切つた新しい圖案を取入れたりして居る。此人は金工に漆工を交ゆるにあたつて、卵殼を貼りつけることなどに日本の方法を學んで居る。これはもと日本の安い輸出品に行はれた技法であつて、高雅なものではないのであるが、其應用に旨い處がないでもない。其漆工には支那人を雇つて居るとも聞く。畫家のワロキエーが彼れに圖案を供給して居る。ワロキエーの圖案から成つた漆畫の屛風なども彼れの工場から出されて居る。

木板に圖畫を彫つて其處へ色漆を塗り嵌めて行く方法、これも近代支那に端を發して居ると思ふが、そんなことも或裝飾美術家の用ふる處となつて居る。併しそれにはあまり感心するやうなものはなかつた。

＊

西洋繪畫に於ける東洋風の影響も可なり前からあることで、アッピユルクンの樹に止つた鷺や、マンザナ・ピサローのものする花鳥の一枚版の如きは疾く人の知る處であつた。

前に述べたワロキエーの如きは唐紙や日本紙の上に水畫を描く。日本風の署名迄眞似したりする。彼れの描く山の麓には北齋北壽等昔の版畫家の作風が影響して居る。

ラウール・チユフイも自身東洋好きだと云つて居る通り、其作品の上に東洋の感化が著るしい。彼れは一見空で描いたかと思はれる程の艸々たる俳畫的のものを矢張自然から即寫すると云つて居る。チユフイの畫く處を見ると、丁度日本畫家のする樣に、或顏料を氣發油で薄く溶いたものを一枚の皿に用意してそれを日本畫用の刷毛で塗つて居た。此人などは無論極端な例であるけれど、もう斯うなつて來ると日本畫、洋畫の差別はなくなる譯である。チユフイは一方圖案家としての聲價を有して居る。ピアンキーニと云ふ大きな店の爲めに壁張用の布、婦人服用の裂地などに試みた彼れの新しい圖案は可なりに流行しつゝある。

＊

西洋人は今斯くの如くに東洋趣味を容れつゝある。なかには一時の氣まぐれからして居るものもあらう。又なかには西洋の藝術に行づまりを感じてそれに新しい呼吸を與へやうとして居るのもあるであらう。而して全體とは云へないまでも彼等西人は決してそれを批難せずに、寧ろ贊意を表するかのやうに見える。

然るに彼等西人は丁度それと反對のこと、即ち日本人が西洋から學びつゝあること、少くとも藝術上に於て西洋から學びつゝあることを喜ばぬやうに見える。これは何によつてゞあるか。若し彼等が我々に向つて固有の傳統に忠なれと云ふならば、我々も亦彼等の東洋癖に對して西洋の傳統に忠なれと云ふであらう。

若し又自分等の既に行詰りを感じつゝある西洋藝術に今より足を入るゝの不明を云ふのであるならば、我々は異れる立場に居る以上、西洋藝術の如何にして行詰る可きかを先づ實驗するの必要ありと云ふであらう。

或は又黄色人に對する白人の優越を盲信して、白人の爲す如きものを黄人決して爲し得ず、從つて止むるに如かずと云ふのであるならば、我々は其決して然らざる旨を、一方歷史に徵し、又一方現に我々の爲しつゝある業蹟に據つて彼等に告げ、其反省を促さねばならぬ。

不二大觀

三保遊行集

北原白秋

小序

大正十三年正月五日、智學田中先生の懇招に應じて、伊豆修善寺を發して三保の最勝閣に赴く。この行父母を奉じ妻子と伴なり。淹留五日、或は晴れ、或は雨。而も不二の觀望第一なる有徳の間の朝夕は我をして感懷禁ぜざらしむ。羽衣の松、龍華寺の探勝ともにまた淸閑極りなし。乃ち成るところの長歌一章ならびに短歌百七十三首を獻げて、些か先生の懇情に酬いむとす。記して小序と爲す。

不二を仰ぐ

（沼津より江尻にいたる途上、汽車の窓より）（五日）

天つ邊にひとり凌げば不二が嶺のいただき白う見えにけるかも

天そそる不二の高嶺にふる雪は七面も八峰も白う照らせり

不二が嶺は八面白うてる雪の末しろじろと天に亂吹けり

天ゆけばいゆき映らふ雲のかげ駿河の不二の尾の上にし見ゆ

雪しろき不二のなだりのひとところげそりと崩えて黑るかげ深し

照り白く晴れて低くけれ張り胸の眞上の不二は立ち厚く見ゆ

鈴川の不二の眺めぞおもしろき寒き刈田ゆ繪凧あげたる

天そそり白く清けき不二が嶺はこのかの兒すら見も飽かぬらし

常しろき山は不二の嶺あれ見よと子には見せつつ涙垂りたり

よく見ればく白くさやけき不二の秀のみぎり缺けたり地震の崩えかも

最勝閣に着く

清水港より渡船にて渡る。（五日午後）

大船の心たのめて三保が崎君が御殿に參ゐ出來にけり

風吹きてさむきみ冬を御垣下濱防風の葉の眞赤さ

小松生ふここの御庭に來寄る藻の汐騷厲しにぎはひにけり

めづらかに夕日に映ゆる不二の嶺のおのづから保つ明日の凪かも

最勝閣にまうでて詠める長歌ならび反歌

風速の三保の浦廻、貝島のこの高殿は、天なるや不二をふりさけ、清見潟滿干の潮に、朝

日さし夕日てりそふ。この殿にまうでて見れば、あなかしこ小松叢生ひ、邊にい寄る玉藻いろくづ、たまたまは棹さす小舟、海苔粗朶の間にかくろふ。この殿や國の鎭めと、御佛の法の護りと、言よさし築かしし殿、星月夜夜空のくまも、御庇のいや高だかに、鐸の音のいやさやさやに、いなのめの光ちかしと、横雲のさわたる雲を、ほのぼのと聳えしづもる。しづけくも畏き相、畏くも安けき此の土、この殿の靑き甍のあやに淸しも

反歌一首

この殿はうべもかしこししろたへの不二の高嶺をゆたかにぞ見る

不二大観

最勝閣より

天そそる不二をまともに我が見るとこの高殿に參ゐのぼり見る

ここゆ見る不二のすがたは眞正しく雨尾ひき張り淸麗けかるかも

秀のしろく反り立つ不二の八面の大き裾廻の張りのよろしさ

駿河なる不二の裾廻のおのづから張りつつし及ぶ海の原かも

不二が嶺はいよよ淸麗けし群山の高山が遥に天そそり立つ

不二の曉色

朝ぼらけ不二の尾の上にゐる雲の紫明うなりまさるらし

ほのぼのと不二の裾廻にしらむ燈のつらつら帆船行けりともなし

不二が嶺はこごし裾廻の群山の柴山くらしいまだ明夜けず

ほのぼのと明けゆく不二のいたただきは紫わかし天つ邊に見ゆ

空いろの裾濃の不二の立てらくは夜のほのぼののものにぞありける

不二の尾はいまだねむれど天つ邊の秀の片面よ紅みさしつつ

愛鷹へ裾曳く不二の片空の樺いろの晴れはいよよ凪かも

明る妙燃え湧く雲の幾重にも不二の裾山曉ならんとす

豐かなる不二の茜の秀に燃えてまたく明けたり今日は晴ぞも

朝びらき明けゆく不二の大前に網曳き舟榜ぐ三保の崎はも

海苔とり舟

有德の間より眺む

笠雲の昨夕見し不二のいちどろく寒けかりしか今朝のましろさ

清見潟滿干の潮に搖り育つ海苔の香寒し春は來につつ

朝凪の海苔の粗朶垣つらつらに見れども飽かず小舟繋ぎ來も

朝凪の海苔とり舟はほの寒し棹さし連れぬ二人づつゐて

海苔とるとたづきありけり朝凪の小舟搖りゆく棹手かなしも

海苔とると濱片附きてゆく舟の目馴れし不二は見ずて榜ぎけり

凪ぎ潮の上潮寒き粗朶の間に逆さの不二が白う明り來

春はまだ潮干に秀づる海苔粗朶の列並續き寒う霧らへり

この眺め明りて寂びし凪ぎ潮の海苔の田遠く清見寺見ゆ

海苔の田は水照凹むか粗朶の間にかぎらふの居處わかなく

蜑が子は百の千鳥か頬のかぶりひかり移らひ粗朶の間にをる

こもりゐる誰が嘘ぞ粗朶の間も海苔の香立ちて寒むからしゐはれ

柑子照る宿

この濱宿はなにがしの漁人の家なり。わが友河野桐谷君夫妻とその令息の宿るところ。六日、散策の後、我らここに小憩、淺酌す。この砂庭の柑橘は大きさ文旦のごとし。數十株あり。

大き實の柑子照り滿つ濱宿は見てあたたかしよき酒もがも

旅に來て去年の今年の肩の凝りおのづゆるびぬくつろぎにけり
不二が嶺の眺めゆたけく煮る酒のあなねもごろや父とよろしき
皆と來しよしと思ひけりあたたかに遊べる子らを眺めやりつゝ
これの子とあの子と遊ぶ日のたむろ柑子も閲しここだ明りぬ
童らに照れる柑子ぞ撓をなるそのこの母はころも干しつつ
閑かなる柑子の熟れや母と子の睦ぶこゝのみ庭に滿ちつつ

午前の散策

藻すだれ掛け干す浦の日だむろは海苔とる蜑がやすらひどころ
干す海苔の簀の邊のなづな伸び過ぎて咲き早むらし浦の日和に
春は早や三保の砂地に這ふ蔓の白豌豆の花も見えけり
松の間にここだ樽積む洲の土手は行けどもさびし不二の見えずて
さざら波搖り搖り居らし洲のはなやまた朝凪の潮香親しも
この凪をゆくらゆくらに榜ぐ舟はのどかにぞあらむひとり榜ぎをる

不二の夕照

不二が嶺にいや重きつもる堅雪のゆふべはあかく天に燃えつつ

押し移り朱く騒立つ風雲の波だち雲は不二を目させり

片空に不二は晴れたれ風雲のゆふべはあかく吹き立ちにけり

不二が嶺は見れど見あかね卷雲の夕照早し紅う染みつつ

清見潟夕照ひろし滿汐の汐騒のかぎり舟の榜ぎつつ

芷の間を干潟に秀でし海苔粗朶のゆふべは繁に汐にひたり來

風前の夕凪潮のひとたひら渡船は急けり音を爆ぜつつ

夕明き横狹の入江あはれなり葦村つづき舟泥める見ゆ

舟べりに小笊うちたたき蜑が子の海苔洗ふ見れば冬も過ぎけり

不二が嶺はまた雪ならし笠雲の淺夜は白く下りゐ蟠めり

雨にこもる

天霧らひ不二はかくりぬ三保が崎いたも濡れゆく千本松見ゆ

天霧らしふる雨ながら三保が崎いやしろじろに邊波寄る見ゆ

天霧らしふりつぐ雨はひまなけど早や春めかし葦邊かすめり

潮ぐもり春の雨間に榜ぐ舟の櫓の音おこりて沖べさす見ゆ

○

砂畑の淺き井のべにふる雨のいろこそ無けれふるが親しさ

小閑

父母無聊なり

足乳根の御親おもへば濱松のさやけき騒ぎ空に起れり

松風のさやけき聽けば生れ來しをさなき我の緣おもほゆ

松風に白き飯食む春さきは濱防風も摘むべかりけり

この濱の梵音聲のさみしくて遙けきは空のあなたなりけり

○

日の眞晝つくづく見れば不二の嶺の後への空をこもる雲あり

吾が父母を心に思へば不二の嶺の後への空のはてなきがごと

○

ただただに對ひゐてすら母父は見て慰さむか對ひゐませり

父は父母は母とて在り對ひ足さすりをらす人のをらぬ時

○

酒よしと喜ぶ父のをさなさを下心には泣きて濡し酒選る

母父に妻がかしづくすがしさを下心にはほめて言に云はなく

○

日はぬくしほのりほのりとたまたまは出でても見ませ不二を見がてら

母父やたづきなからし手をひきて打ち出歩りかす不二を見がてら

○

見の飽かず不二を眺めてます母のうしろでゆゑに我は泣かゆも

ましろ髯祖父のみ愛しくも手ぐさとる子に垂らしゆらげり

母父や濱の小濱の行き還り何爲さすらむ白き髯見ゆ

小夜

閑かなる夜やと讀みゐぬ禰宜のみ鈴の連れか鳴りゆらぐらし

海苔粗朶に汐の煙立ちて寒き夜は地酒もがもと父の宜らすに

あかあかと篝火たく屋も小夜更けて汐霧り來らし沖つ千鳥よ

繁にうつ櫓の音凍りて闌くる夜は荒磯の蠣も附きがたからむ

早朝

霜の頃の未明にこもる渡し場に子と出て見居り潮の滿つるを

子には子の白の毛帽子かぶらせつなんといふ朝の清し霧ぞも

この磯の濱防風に置く霜の濃くも薄くも見てを通らむ

ここらにも蠣は附くやと澪杭の干潟のしめり母と透かしつ

寂しくも見つつ笑ましも蠣の子は荒磯の蠣の母の根に添ふ

御穗宮

八日、桐谷君（令息同伴）の案内にて一同御穗宮に詣づ。麗明、風無し。

三保びとやまだ春寒く簀を干して海苔たたき貼る唾つけつつ

○

風速の御穗の社はきだはしに砂吹きあげて松葉居めり

風速の御穗の社の日永さにかゝげし船の繪馬も見にけり

大船の波乘りごころゆたけくと繪馬やささげし三保の浦びと

參道の砂道の古るきまばら松照れる春日をほくりほくりゆく

濱宮の御宮の松に掛け干せる唐藷がらも長閑に枯れたり

松ぼくりひろふ童の片言のい。つ果つるらむ童とし居る

皆行きぬ吾子よいそがむ汝を待つとかの松蔭に母の立てるに

松ぼくりしじに蹴あてつゝこの道や老松おほし霞みそめつゝ

羽衣傳說

まことにも淸し松原天馳せて舞ひくだる翼のけはひこそすれ

ひさかたの天つをとめがゆり掛けし羽ごろもの松はこれのこの松

さゐさゐし珍の羽ごろも取りかくし天つをとめが眞素肌し見し

さにづらふ天つをとめが眞素肌の乳房の莟み人は見にけり

天人は消なば消ぬかに羽ごろもの袖乞ひ禱めり草合歡の花

夕されば天つをとめら羽ごろもの羽振りわすれしひた戀ひにけり

天向ふひとが羽ごろもうすごろも見えつつすべな夕さりにけり

ましら羽の天の羽ごろも夕羽振り消えにしひとのあやにかなしも

三保の松原

御穗宮より松原へ出づ。ここに世に謂ふ羽衣の松あり。

風向ふ根疎濱松磯馴松今朝さわさわし春日さしつつ

父母ようち出て見ませむら松の斜めみぎりに不二の秀が見ゆ

母父と妻と愛兒とうちいでてふりあふぐ空に不二はかかれり

西風吹きて春も淺みか立つ波の潮見さやけみ石廊崎見ゆ

風速のまことと三保はやまさやかに騷ぎ榜ぎたむ船の多かる

風速の三保の砂やま清しくて遊ぶにはよき玉敷きにけり

おのづから玉敷き明る三保の浦や邊波洗へりとよみ揺りつつ

朝羽振る沖つしら浪邊に寄ると揺りとよもせり清し浦廻を

不二が嶺を高みさやけみ三保が崎けふ父母と玉を拾へる

世に愛し母の御伴とさもらひに清ししら玉選りてゐにけり

しら玉のをさなごころの揺りごころあなたづたづし母に寄りつる

大海(おほうみ)の洒らすしら玉清(さや)けみと手には揺りつつ遊ぶ子ろはも

遊び足り樂しき時も陽炎の燃えて跡なし濱の長手に

○

うつつなく笑ふ子ゆゑに砂やまの砂すべりくだるも我もまろびつ

砂やまの砂はかぎろへ踏み踏みてのぼらむ吾子(あこ)かひたむき向ふ

砂まろび遊びほれつつこれの子や丹塗(にぬり)の汽車は忘れ來にけり

○歸途

砂畑の苺の萎(な)え葉もみぢして日のあたる邊(べ)を親しとを行く

幼きが二人睦びてしなえ葉の苺のもみぢ踏みて來るかも

龍華寺

三保の松原より清水港へ出で、俥に乗る、短日、風寒し。

冬の田の刈田の眺めわびしむと俥つらねぬ風の暇を

冬の日も有緣(うえん)のひとかまうづらしまれまれながら田をば行きけり

寒き田をあれや寺かと目にとめて俥急(せ)かしつ薄き日さしに

龍華寺や彼れと俥に乗られ來て行き過ぐる見ればこは鐵舟寺

さむざむと御堂の縁に端居して眼を放つ不二の明る妙はも

見のよろし不二の眺めはこの寺にまさるなしてふ今は眺めぬ

不二見ると君が住みたる有渡の山不二の眺めのまことよろしも（日近上人）

不二見ると君が臥れる有渡の山げにげに高う不二は冴えたり（樗牛）

吹きわかれ雲立ちわたる不二の尾の夕影寒うなりにけるかも

一いろに蘇鐵の氣のみこもらへば夕さり寒しこれの御庭は

五百重なす蘇鐵の葉叢冷え冷えて日の暮れたらし物の光るは

日の暮れは目見薄らむと宣る父に蘇鐵は寒し隈の層みぬ

短か日の御堂の障子かげり來て繪葉書選らむ時過ぎにけり

かの赤きは蘇鐵の實かと龍華寺を出でつつ訊かす父は後見て

風速の三保の日和のさだまらで波越しの不二の尾根も暮れたり

山裾の柿の老木のはかな陽のたのみずくなに冬は宿れり

さむざむと詣でて歸刈田る道かもかくも今日も暮れにけるかも

淺宵舟行

清水港より三保へ、龍華寺參詣の歸途なり（八日）

月わかく糠星滿てりかくばかり清しき夜空我は見なくに
眉引の宜の月のほのあかり見の幼なよと舟は榜がせつ
月ほそくまだ珍らなり有渡山の山の端あたり黄ばみそめつつ
ほのしろき淺夜不二なれ帆檣の高きは靑き燈をぞ點けたる
星あかり淩ぎ榜ぐ子か黑船の艫出はづれて廣き浦廻を
夜に見れば不二の裾廻に曳く雲の白木綿雲は海に及べり

星宿觀望

夜、迎晨寮にのぼる

高き屋にのぼりて仰ぐ星の座のいや遙るけくも眞近なるかも
目にとめて寒き夜空に澄む星の群多くして滿ちにけるかも
夜の空に充ち滿つ星の少くも目に見えぬ外もまたたきにけり
新月のまだ照りながらみづみづし南天の滿星のちの細かさ
星の座のこもごも降る夜の天は見の親しかも廻りつつあり
ひむがしの夜天の星の大きくてひとつは光る不二の尾の上に

まつぶさに繁みに見れば星雲の微塵の光千重に千別けり
夜の宿はあやに清けし微塵數の珍の新星生れて來らしも
寂しくも永久に消ゆなと離るなと仰ぎ乞ひのむ母父の星
我の星或は見ゆやと星空の五百重の狹霧千別きてぞをる
かの紅き妻が守星前の世に薄雲纏きぬ今もこもれり
幼な星吾子が守星幸かれと夜天の遙に眼を放ち守る
空のむた闇は青けど星の座のこの夜の光息づかし見ゆ
去年今年國の禍事しきりなり夜天の宿に幣奉る
おぎろなき夜天の宿は幽けけど人こそ知らね火の氣立ち見ゆ
天球の中極にして高しらす幽けき星もあれよとぞ思ふ
押し移る夜空の澄みやおのづから星座の極も傾きにけり

曉雲重疊

天雲の白木綿雲の五百重波波だちたぎつ夜は明けむとす
夜の雲の白木綿雲の寄り疊む五百重が奥に不二は隱れり
天雲の不二の高嶺の雪雲は五百重も千重も下り疊むらし
望月の月映なして照る雪の不二のいただき曉ならむとす

メンタルテストの根本原理

松本亦太郎

(I) 智能測定及び教育測定の發達、(1)特殊智能測定、(2)一般智能測定、(3)綜合的智能測定、(4)教育測定、

(II) 特殊智能測定、(1)特殊智的作用の測定、(2)諸智的作用の相關測定、

(III) 智能測定に用ふる數の意義、(1)絶對數、(2)序列數、

(IV) 一般智能の意義、(1)一般智能單一說、(2)諸智的機能の階段組織、(3)學習素質說、(4)根本智能多數說、

(V) 一般智能說と智能測定法、(1)一般智能測定法（年齡標準）(2)綜合的智能測定法（累點標準）

(VI) 教育測定、(1)傳統的評點の差異、(2)教育測定の特徵、(3)成就商の測定

(4)智能率と成績率との關係（終）

(I) 智能測定及び教育測定の發達

(1)特殊智能測定

智能の測定は個別智的機能の測定と一般智能測定との二に大別する事が出來る。測定法の發達の順序より云へば個別的測定が初に起り、一般智能測定は後に起つたのであるが、兩種測定法は現時まで並んで行はれてゐる。

應用の方面から見ると兩種測定は目的を異にする。個別測定では或る個人が或る特殊の智的機能を幾何の程度に於て行使するかを測知し、一方に於ては其智的機能に關しての個人差を明にし、個人の品等を定める。又一方に於ては年齡の向上、或は學年級の向上に應じ、其機能の行使の度が如何なる程度に於て變化するかを明にする。即ち其機能の發展の狀を見る。或は人種の相違により其機能行使法が相違するかと云ふ事も之を明にする事が出來る。然かし測定の對象となる特殊の智的機能は素質（先天）的であるとも、收得（後天）的であるともしない。實際に其機能の働く度を測定するのであるから、素質と收得とが相合して働いた所のものを測定すると解釋するのが適當である。

(2)一般智能測定

一般智能測定では諸智的機能の基礎になる一般智能なるものがあるとし、此一般智能が個々具體的の狀況内に發現したものが所謂特殊の智的機能であると見る。而して個々人に就て此一般的智能を量的に測定し一般智能に優劣品等の諸段階のある事を明にするを努める。一般智能の品等は稟質的のものであるか或は收得的のものであるかに就ては心理學者の意見は未だ決定的では無いが、一般智能を素質的のものと解釋し、一般檢査により主として素質的のものを檢査し、收得的のものを除去しやうとするのが、一般檢査法を考究する心理學者の重な傾向であると謂つて可いかと思ふ。一般智能檢査法（或は智能測定法）は佛國のビネー及びシモンが最初に之を組織し、後米國のスタンフオード大學で之を改訂完成したが、スタンフオード改訂者テルマンは一般智能を以て素質的であると強く主張してゐる、智能檢査法は發達期中にある兒童、少年、青年を其適用の範圍にする、發達完成後（丁年後）の成人には正當には適用されない。特殊智能測定法は其適用に年齡上の制限は無い、發育期中のものであつても、發達完成後のものであつても之を正當に適用する事が出來る。

(3) 綜合的智能測定

近年に至り丁年前後或は丁年以上の成人に適用する智能檢査法が種々に立てられ盛に用ひられつゝある。「是等は概括して票點式（ポイント・スケイル）測定法と稱するを得るものであるが、其測知せんとする智能は稟質的のものと收得的のものと相合して働く所の智能である、而して個別測定法と異る所は一二の特殊の智的機能に就て測定するのでは無く、智的機能の重要なるもの、多くに就て檢査をなし、其綜合的結果より個人或は集團の智能上の品等を定むる點に存する。此票點式測定法は多數の人を智的機能に從ひ整理し、或は之を有効に使用し、或は之を有効に選拔する爲めに用ふる。

票點式測定法が成人に適用せらるゝに從ひ、更に發育期の兒童、少年、青年に適用するを得る票點式測定法が北米合衆國に於て立てられ、國民智能檢査法と稱せられ、スタンフオード訂正智能測定法と相桔抗して盛に用ひらるゝに至つた。最近東京市で、市内高臺にある小學校の兒童約二萬人に就て施行したのは即ち此國民智能檢査法に依てしたのである。成人に適用する場合にも、未成年者に適用する場合にも票點式檢査法は諸智能の綜合的檢査法であるから總じて之を智能の綜合的測定法と稱し、一般智能測定法と區別する事にする。

(4) 教育測定

一般智能の測定と綜合智能の測定とが隆に施行せらるゝに相

應じ、個別智能測定の變形とも見るを得る教育測定或は教育檢査なるものが出現した。これは學校に於ける各學科の教育の効果を、從來行はれたる方法よりも一層正確なる客觀的方法により檢査し、教師が何れ丈けよく教授をしたか、又生徒が何れ丈けよく學習したかを量的に測定しやうとし、算術、語學、讀み方、書き方、綴方等に就いての檢査法を立て隆に檢査を施行しつゝある。先づ初等教育の範圍に於て之を實行したが、兩三年來は中等教育の範圍に進み、諸學科の教育檢定を試み始めた。而て最近に於ては智能測定と教育測定との關係如何を考察し始めた。

(II) 特殊智能測定

(1) 特殊智的作用の測定

特殊智能測定は實驗心理學の用ひる方法に從ひ測定をなすのであつて方法上に於ては最も精確なるものである、又測定さる智的作用も意義の明瞭なるものが多く、此種の疑問に對しては疑問は多くない、知覺の鋭鈍、記憶の確度、聯想を始め諸の精神作用に費やさる時間、運動の巧妙度及規則度、速度等に關し實驗的測定をなした、特殊智能の測定は後になりては如上の智的作用を日常生活中に起る如き稍複雜なる狀況　於て檢査した其代り檢査法は嚴正なる檢定法では無い事になつたが、特殊智能檢査と實際生活とを結合する事を試み始めたのは注意に値する、個人の心に於て、或は多　の群に於て或る精神作用が如何に趨異するか、作業の標準的進路は如何なるものであるか、疲勞或は練習により其進路は如何に變化するか、溫度、濕度、氣壓等の外的條件により精神作用は如何に影響せらるゝか等は特殊智能を測定する事により之を明にするを得る、人間の心身の作業に於ける能率增進の問題はかゝる測定法を基礎にして之を解決するのである、特殊作業に對する適性の選擇、其作業の改良の操縱法、其作業者の精神衞生等何れも特殊精神測定を基礎にして規準が立てられつゝある。

(2) 諸智的作用の相關測定

從來は特殊作業は各個獨立に研究されてゐたが、一の特殊作業に優れた者が他の特殊作業にも優れるや、將た劣れるやの問題は研究されなかつた、然るに漸くこれが研究の對象になるに至つた、夫れは生物測定學の方で發達せしめた相關法を其儘適用し、異れる特殊作業の間に如何なる相關があるかを測知するを試み始めた爲である

(III) 智能測定に用ふる數の意義

(1)絕　對　數

智能檢査に於ては何れの種類のものに於ても檢査の結果を數字にて示す事に努むる。然かし其數には二種の意義がある。第一に心の働を物理的單位にて表示する場合の數は、物理學にて用ふると同意義にて絕對數である。例へば重量の辨別、空間及時間の長さの辨別の鋭鈍、聯想或は選擇の遲速等を測定する如き場合は即ち夫れである。是等の場合に於ては幾回も實驗測定し其平均數(アベレーヂ)或は中間數(メヂイアン)或は最頻數(モード)を以て辨別價なり、聯想時なりを示すが、此代表價に屬する平均錯差(M. V.)は檢査さるる心の働が複雜になる程其價が增加するのが一般の傾向である。若しM. V. が代表價に比し餘り大きくなれば代表價の絕對數の意義が幽かになり、次に述ぶる序數の意義に移つて來るのでは無いかと思ふ。

(2)序　列　數

智能測定に用ふる數の第二の意義は序列數である。即ち或る便利の單位により心の働を數的に表示する際其數は序列を表す意義にて用ふる。

例へば每五分間に幾何の加算をなしたか、或は每二十秒に幾何の觀念を聯結せしむるを得たかにより、個々人の優劣を定めんとする如きは、數の多い丈け作業の能率が優つてゐる序列を示すが、一加算或は一聯想と云ふ事は物理學的單位と全然同視する事は出來ない。甲の場合に於ける一加算と乙の場合に於ける一加算とは略ぼ似た價値を有するが絕對に等價であるとは謂はない。甲の場合に於ける1は$1 \pm P.E._1$である。乙の場合に於ける$1 \pm P.E._2$である。此P.E.(蓋然錯差)の價が同時である事を必し難い。夫故一定時間内に甲の人は三百加算(一位數)をなし、乙の人は三百五十加算をし、丙の人は四百加算をした場合に、甲より乙は作業能率の多く、乙より丙は又作業能率は多いと云ふ序列を示すが、甲乙の能率上の差異と乙丙の夫れの差異とが五十宛で同等であると直に解する事は出來ない。乙－甲と丙－乙とは餘程似たものであると云ふに過ぎない。即ち人間の精神的作業を數で示したり、此數字を數學的に取扱つたりするが、最後の結果に人間の作業に還元して解釋する場合には之れに序數の意義を與へる。而して序列の向上、向下は一段、二段、三段と云ふ數にて示すが、各段の差異は事實的には同一である事を必しない。尤も心理學的測定の狙ふ所は各段の差異を同等ならしめ、數により表示する所と實際の精神的事實とを一致せしめんとするにある。即ち心理學測定に用ふる單位をして可成同等なる精神的事實を表示せしめんと斷えず努力してゐる趣がある。

(IV) 一般智能の意義

一般智能檢査に於ては一般智能を測知しやうとするのであるか、一般智能は何物であるかと云ふ事に關しては學徒の考が未だ十分に一致してゐない。一部の學者の考によれば一般智能は個人の收得的智能の基礎になる生來の材能を指すのであるが、智能其物は生來のものでは無くして　智的たらんとする能(Capacity)は生來である。斯る基礎的の能を檢査するとせば寧ろ心性檢査(Mental tests)或はMentality tests)と云ふ語を用ふる方が適當であるとする。是等の學者は個人をして智能的ならしむる生來の素質を心性(Mentality)なる語により示す。勿論此心性を眞の智能に發達せしむるには適當なる環境を與ふる事を要するとするのである。夫故若し或る兒童が一般智能に於て生來優秀であるなら、此稟質を基礎として、適當の條件が具備して働けば高等なる智能を發揮する事が可能である。然るに若し一般智能に於て生來低劣であるなら、其環境が如何に好都合であつても知識、材能に於て凡庸のものたるに過ぎないとする。一般智能論者は、一般智能は生活の種々なる場合に於て個人をして智を收得せしむる生來の能であると解釋する點に於ては略ぼ一致してゐる。

(1) 一般智能單一説

如上の一般素質は單一的のものであるか、集團的のものであるかに就ては、心理學者の考察が二つに大別される。第一は單一なる生來素質があつてこれが個人として總べての場合に智慧的ならしむる。第二は個々人は多數の特殊素質を有つて生れる。勿論是等の素質は相互に多少關係してゐる。個々人が個々異れる活動に於て智能的行動を營むを得るは是等多數の素質を有するが爲めであると説く。

一般智能は單一素質であると主張するのは英國のスピーヤマン、バルト、ボルト等であつて是等の人々は一般智能を一般共通因子とする。スピーヤマン一派の心理學者が一般智能説を立つるに至つたのは、個別智能檢査法により諸智的作業を測定すると夫等作業間に相關係數

$$r = \frac{\Sigma X.Y}{\sqrt{\Sigma X^2.\Sigma Y^2}} \quad 或は \quad \rho = 1 - \frac{6\Sigma D^2}{N(N^2-1)}$$

で示すを得る類似の存する事を發見したが爲めである類似するのは各作業中に共通因子が包含されてゐるからであるとし、夫れから此共通因子を檢索する事を試みた。

此公式中にあるXは多人數に就て測定した場合を例として云へば比較さる丶甲の特殊作業に於ける諸人の序列の中數と各人

の序列との差を示し、Yは乙の特殊作業に於ける諸人の序列の中數と各人の序列の差を示す、Σは通例數學に用ひらるゝ總和の意義を示す、又Dは同一人が甲の特殊作業に於ける成績序列と乙の特殊作業に於ける成績序列との差を示し、Nは測定された人數を示すと見るを得る、r或はρは孰れも相關係數を示すのである。

スピーヤマンは先づ初めに個々人の諸感覺に就て辨別作用の鋭鈍を檢査し斯くして得たる各辨別作用の優劣を相互對照し、其相關係數を求めて見ると諸辨別作用は相互に關係し類似してゐる。そこで諸辨別的作用には一般感覺辨別なるものが共通因子になつてゐると假定した。

夫から次に諸智的作用の根本になる一般智能は個人的に見れば優劣の差があるとし、此一般智能を指示するものが四つ許りあるとした。

第一は學校の學科成績を基礎として立てられたる生徒の順位は或る度まで個々人の一般智能優劣を示す參考材料であるとした。第二は如上の成績を年齢に對照し順位を立てる。例へば成績順が二十番で、年齢順が二十二番とすれば、年齢上の豫期より成績が二順位上にある。又成績が十五位で年齢順十六位なれば、年齢の豫期より一順位上にある。夫故生來の禀質よりすれば前者の方が後者の上にあるとせねばならない。斯の如く對照し定めたる順序が又一般智能の優劣を示す參考材料になる。第三は檢査さるゝ人に就て適當なる判斷者たる第三者の有する印象を以て優、中、劣の段階を立つれば、夫れが又一般智能の優劣を示す材料になる。第四は個々人の常識を目標にして立てたる品等は又一般智能の優劣を示す材料になる。

如上四種の評價により得たる優劣の品等をスピーヤマンは生活智能と名け、此生活智能の優劣と前に擧げたる一般感覺辨別との間の相關係數が一の近似數に達すると云ふ著しき關係ある事を見出した。これを以て觀ると諸智的作業の基礎になつてゐる共通要素は諸感覺辨別の基礎になつてゐる一般辨別と全然相一致するものであるとし、結論として我々の心には假に一般感覺辨別及び一般智能と呼ぶ所のものが實際に存在し兩者の函數的照應は殆ど完全（絶對）であると結論した。

(二)諸智的機能の階段組織説

更に進んでスピーヤマンは上の如き評價により得たる所謂一般智能と自己の檢査したる共徴的の諸作用との相關係數を求め左の如き數を得た。

心的活動	一般智能との相關	共通因子と特殊因子との比
古典語	0.99	99 : 1

古典	0.98	96 : 4
調子辨別	0.94	89 : 11
佛語	0.92	84 : 16
利發	0.90	81 : 19
英語	0.90	81 : 19
數學	0.86	74 : 26
調子辨別(無教育者)	0.72	52 : 48
音樂	0.70	49 : 51
光の辨別	0.57	32 : 68
重量辨別	0.44	19 : 81

相關せる因子の影響は相關係數の二乘により測定するを得るとし、何れの心的活動も中心的の共通因子と末梢的の特殊因子との結合より成立するとし表中の比率を計算した。

以上述べたる如くスピーヤマンは種々なる事實を集め夫等より歸納したる所に數學的推論を加へ、遂に一般智能なる根本智能の存在を肯定し、一般智能なる中心的機能に末梢的の特殊因子が結合して働く爲めに種々なる個別的智的作用が生ずるのであるとした。而して個別智的作用に一般智能が飽和する程度の多少により、諸智的作用は階段組織をなすとの說を立てた。例へば各智的作用の量を100とすれば其內に飽和浸潤する一般智能は古典語材能中には99. 調子の辨別には 89. 數學材能には74と云ふ如き割合になり100より是等の共通因子を減じたる殘餘が特殊因子の量を示すと見るのである。勿論是等の數量は研究訂正の餘地はあるが、スピーヤマンは斯くして諸智的作用を並的に統一せんと企圖し尙ほ其研究を續けてゐる。

(3) パイルの學習素質說

スピーヤマンは一般智能を一般辨別と全然相照應するとしたが、心理學者のパイルは之を學習の素質であると解した。パイルは個々人は或る一般的の學習能を有する。此能は學ばれる材料に拘はらず常恒であるとし、此學習素質が一般智能と同一であるか、或は極く親密に關係してゐるとした。

個々人は此一般學習素質を稟けて生れる。然るに此素質が或る種の精神的活動には一層よく發顯し、他の種の活動には爾かく著しく發顯しないと云ふ場合があつたとすれば、夫れは一般智能に異れる方面があり、或は異れる部分がある爲めに然かなるのでは無い。斯る事の起るは諸學習に對し個々人に與へらるゝ機會が均等で無かつたか、或は此一般素質以外の遺傳的材能があつて、之れが一般智能の或る活動に發顯する事を妨碍したかによるのである。例へば或る生徒が算術に於ては優等の成績を示すが、音樂に於ては劣等であると云ふ事があるなら、夫れは一は數に對し、一は音樂に對し二種類の生來智能があるが爲めに然かなるのでは無い。此二學科を學ぶ機會が相異し、之れ

に對し生ずる興味が相異した爲めか、或は其生徒の一般智能素質はよいのであるが、拍子(リズム)の感が生來貧弱であるか、音の調子を明かに區別する事が生來出來ない爲めであるかにより音樂に對しては一般智能が十分に發顯する事が出來なかつたと解釋するのである。

(4) 根本智能多數說

生來の智能が多數であると云ふ說では、多少密に關係する幾何かの智能稟質があつて是等の働により個人は種々なる活動に於て智慧的になるを得るとする。ソーンダイクは此說の代表者である。氏は生來の材能(アビリティー)は多數であり、夫等材能は正數(＋)的關係を有する事を假定した。而して言ふには若し或る個人が一の良い稟質を豐かに有するなら他の良い稟質に於ても夫等を平均程度以上豐かに有する蓋然性が增して來る。例へば或る生徒が算術に於て優等なる稟質を有すると云ふ事は、又地理の學科に於ても平凡以上の素質を有し、又他の精神的材能に於ても平凡以上の素質を有する事を蓋然的に指示する。然かし果して然かあろゝは必し難い。

又ソーンダイクに據ると一般智能は分類上の名稱であつて、人をして智慧的ならしむる生來の材能の數多くがあつて、其中の相一致してゐる素質を便宜上一括し一般智能と稱する。然かしさう云ふ意味に於ける一般智慧は幾つもある。其中殊に注意す可き生來智能の三標式を認める事が出來るとする。第一は抽象的智能即ち語及び抽象觀念の智能である。第二は運動智能即ち手指使用の巧妙であり、第三は社會的智能即ち人々とよく相對して行く材能である。是等三標式の智能は正數的に相關してゐるか、必しも高度に於て相關するを必しない。第一標式の智能は學校等に於ける學業に好成績を收めしめ、又學問應用の稍抽象的方面に成功せしむるに必要なる材能と特に關係してゐる。第二標式の運動的智能は巧妙なる運動的作業を遂行し、且機械的の構成及び作業の了解を容易ならしむる所のものである。第三標式の社會的智能は周圍の人々を了解し、且之を影響し、指導する所のものである。夫故に優秀なる數學者になり、或は優秀なる古典學者にならんとするには抽象的智能に於て稟質の勝るを要し、道具を巧妙に扱ひ、發見したり、考案したりするには運動的智能に秀でてゐなければならない。夫れから社會の指導者になつたり、巧なる商賣人になつたりするには社會的智能に勝れてゐなければならない。

ソーンダイクの擧げたる三種の主要なる標式の各はなほ之を小部分に別ける事が出來る。又此三種の標式は心理學者や教育者が必しも一致して承認するものとも謂へない。要するに多數

の智能素質があるとしても其各智能の内容は如何なるものなるかは未だ決定する事が出來ない。夫れと共に根本素質は單一であるか、多數であるかの問題も未だ研究中であつて決定的のものではない。今日の研究の程度に於ては個々の人間を單元として取扱ふ譯にいかない。各個人の有する種々なる傾向と材能とを發見しなければならない。各個人が眞に如何なるものであるかを知らんと欲せば心理誌を作つて見ねばならない。

(V) 一般智能說と智能測定法

(1) 一般智能測定法(年齡標準)

人の根本智能を單一と見るか、多數と見るかに依り智能檢査法は自然に相異する事になる。スピーヤマンの考察から云ふと諸智的作用中に特に一般智能に對し相關の程度の高いものがある。夫れ故一般智能の個人的優劣を測知せんとするならば、斯る相關程度の高い特殊の智的作用に就て個人的優劣を測知すれば却て誤りが無い。一般智能と相關程度の低い智的作用に就て測定したのでは、夫れは恐く一般智能の指數にはならないのみならず、寧ろ特殊的のものを以て一般的のものと混同する事になる。若しさうであるとすると雜多の智的作用の優劣を檢定したのでは一般智能の優劣の測定にはならない。却て一般智能と相關の大なる智的作用だけを幾らか選定して測定の標準を立てねばならない事になる。

然かし斯る檢査法を見出すは困難である。何となれば如何なる智的作用が一般智能と相關度が最も高いものであるかを見出し難いからである。加之スピーヤマンの一般智能假定說が果して信賴するに足るものなるやは大に疑がある。從て古典語や調子の辨別の檢査の結果を以て智能の生來素質を測る事には安心して同意する事は出來ない。スピーヤマンの大躰の態度は學究的であつて、實際的では無いのだから氏の考を直に實際に適用するのは危險である。

學究的には精細とは云へないが、實際的に於てやゝ安全なる檢査法はビネーの立てた檢査法である。ビネーのは大躰は智能單一說の方に傾いてゐるかと思はれる。ビネーは檢査の對象たる一般智能に就ては寧ろ明瞭なる考を有してゐた。

ビネーは智能の根本能力は判斷であるとした、これは或は常識と呼ばれ、或は實行力と呼ばれ、或は創始的と呼ばれてゐる。要するに人が種々の場合に遭逢し、其場合に自己を順應させる働であつて、善く判斷し、善く了解し、善く推理するのが智能の活動本領である。判斷に比すれば他の智的機能は重要の度が少いとビネーは考へた、而てビネーは判斷の特徵から考へ智能

には三の特徴があるとした。(1)智能は一定の方向を取り、之を維持せんとする傾向を有する。即ち目的を豫定し之を達成せんとする。(2)智能は心の欲する目的に達せん爲め順應をなす能がある。即ち目的觀念に指導され材料を種々に結合せんと努力し、好都合の方に之を整理して行く。(3)智能は自己批評の力を有する。即ち材料を結合した時此結合を目的の規範と比較し、其結合が正當であるや否やを定む。是等の三點に於て個々人が如何なる程度に於て其智能を行使するかを檢察して、精神年齢を定むるのがビネーの精神檢査の一般目的であるのみならず、個々の檢査課問の目的になつてゐる。ビネーの檢査課問を通過するには種々の心的作用を働かさねばならない。然かし何れの場合にも如上の三種の働を行使する事が必要になつてゐるから、ビネーの檢査法は其點に於て統一がある。而して又種々なる心的作用を働かせる事を要求する事になつてゐるから、實際上個々人の智能の優劣を檢査するに於て先づ危險は少い。檢査が偏狹に失する憂が尠い。

　スタンフオード大學改訂智能測定法はビネーのを完成したものであるから、なほ實際によく適合する。スタンフオードの測定ではビネーのと同樣に生來的の素質を測定するのが目的であり、又特殊の智的作用を測るのでは無く、智の基礎になる、恐く單一智能の優劣の度を測るのを目的とし、其結果を智能商I.Q.を以て示すのである、智能商は左の公式により之を定むる。

$$\text{I.Q.} = \frac{\text{精神年齢}}{\text{暦年齢}} \times 100.$$

(2)綜合的智能測定法

　根本智能多數說の方から見ると、スピーヤマンのは勿論、ビネー或はスタンフオード改訂檢査法はなほ偏面的であつて、斯る方法により果して個々人の智能を十分に測知し得るやに就て疑がある。學究的見地は姑く措き實際に個々人の智能を測知し其結果を利用して行かうと云ふ見地からすると、純乎たる生來的のもののみを檢査の對象とする丈けでは十分で無い。又智能を單一と見て檢査し、人を品評したのでは、人の實際の活動に對して妥當なる品評をしたと云ふ事は出來ない。そこで實際的見地に重を置く學者は生來と收得の問題を措き、個々人が學校に於て諸方面の修業をなす時、或は世の實際の業務に當る時、如何なる程度に於て智慧を行使するかを檢査する方が有效であると思惟し始めた。殊に個々人が社會に生存して行くには、種々雜多の方面に於て起つて來る問題を正當に解決する程好都合に生存する事が出來て、智的順應性が大きい事になる。此智的順應性の大小を豫測するには種々なる智的作用を行使せしむる

樣な検査法を用ふるに若くは無い。殊に成人の實際的活動を整理せんとする時に益々然る検査法が必要になつて來た。そこで綜合的智能検査法が自然に工夫され遂に廣く採用せらるゝに至つた。此検査法では十數種の智的作用に就て夫々検査をなし、其綜合的結果から智能行使の品等を定めんとするのである。綜合的検査法に於て如何なる智的作用を検査するかと云ふと、夫れは研究者により多少異つてゐるが、票點検査法を立てたるヤルキースの検査する智的作用の種類と、夫れに對する票點は左の如くである。

智的作用	票點
運動調節	4
視知覺	3
辨別(視)	1
辨別(運動調整)	4
[illegible]	[illegible]
暗示性	3
記憶	4
記憶(聽)	11
記憶(視)	4
想像	4
判斷(美的)	3
判斷(實行的)	8
判斷(條理的)	11
分解及び比較	6
推理	20
合計	100

ヤルキースは之を基礎として百課問を立てた。其課問中にはビネーの課問が割合多く採用せられてある。而して檢定課問の排列は易より始まり漸次難に進む事になつてゐる。ヤルキースの檢定した結果は大略

年齢	4	7	10	13	15	成人
平均票點	14	31	50	76	85	91

の如くである。成人の水準には十六歳位にて達する。斯くして各年齢に對する標準が定まるから、同年齢のものゝ優劣の程度を其標準に據り測知する事が出來る。最近に米國に於て使用された壯丁精神檢査は此票點式に從つたるものであるが、一層複雜になり檢査課問は二百十二個あつて約八種に別れ種々なる場合に對する智能の働を檢査し、其綜合結果から個々人の智の品等を約八段階に區別した。

智的段階	票點
A(最上智)	135–212
B(上智)	105–134
C+(平均智上)	75–104
C(平均智)	45–74

C— (平均以下)		25—44
D+ (下等)		15—24
D—, E (最下等)		0—14

C段階者は中學校(ハイスクール)を卒業する事が困難である。C—は小學校三年或は四年以上には進む事の出來ない者にて、スタンフォード檢査にては智能年齡十歲以下に當るものである。Aは大學でも優等の成績を擧げる。社會の指導者の地位に立つを得るものである。

茲に擧げたる品等は、單に先天的素質の優劣を示すのではない。實際生活に於て各個人がどれ丈け智的に振舞ふかの程度を示すのである。最近に立てられたる米國の國民智能檢査は此壯丁檢査法を更に精練して發育期の少年、青年に適用するを得る形に拵らへたものである。國民智能測定法では、計算、文の塡補、事物の必須特徵の捜索、同意義語及反對意義語の選擇、符號と數字の置換の五種の檢査項目を立て、各項目中に十六乃至四十課問が含まれてゐる。米國でワシントンの多數兒童に就て國民智能測定を適用し得たる平均結果を一例として擧ぐれば左の如くである。

點數	65	73	82	98	113	119	132	122	130
年齡	8	9	10	11	12	13	14	15	16

最近に東京市山手方面の十二校の生徒に就て國民智能測定の結果を米國の數市より得た平均結果に比すれば概して票點が稍多くなつてゐる。又山手方面は下町方面に比すると成績が良好である。或は兒童の素質も收得も兩ながら稍優良であるかと思はれる。同年齡例へば十歲の兒童の多數に就て測定した結果を見ると六十點乃至百點を得るものが全人員の半數に當り、百點以上百六十點のものが全數の四分の一に當り、六十點以下二十點のものが矢張全數の四分の一に當つてゐる。兒童の人種、住居區域、家庭の狀況等が略同じであれば、國民智能測定法の適用より得たる智能分配の狀態は餘程の度まで生來の智能素質を示すと解釋して大過は無いであらう。

(VI) 教育測定

(1) 傳統的評點の缺陷

最近に至るまで、教育に於て人間の仕事を測定する事は稀であつた。學業の成績に點を附し、等級を附することは何れの處でも行はれてゐたが、是等の點や等級は寧ろ教師の意見を表示したもので測定とは認め難い、例へば代數に對する評點は生來の數學的材能に對するものか、或は數學の學習に對するものか或は一時的の記憶に對するものか、或は教師の命に從順、忠實

である事に對するものであるか、或は教師の欲する所を賢く探り當てた事に對するものであるか、抑是等の何れを評價したものであるか、又其評價が實際と一致してゐるかも不明である。且例へば數人の教師が數學上評點を附する際に、同じものに就て評價をするとは認められない場合が多い。

米國で北部中央の諸中學校の幾何學の教員に、或る生徒の平面幾何の答案を分布し、之に一〇〇點を最高にして評點を附する事を乞ひ、百十六人の教員から回答を得た、其結果四十七人の教員は其答案を合格以上（七五）とし、六十九人は合格せしむる能はずとした、二人の教員は九〇以上を與へ一人の教員は三〇以下とし、八〇或は八〇以上の點を與へた教員が二十人ある六〇以下の點を與へたものが二十人あつた。卽ち中數點（メデイアン）は七〇で、之に屬する蓋然錯誤は七、五となり、點附の廣がりは二八から九二に跨つてゐる。

同じ研究者が英語、歴史等に就て調査した結果も之と相類し他の研究者の研究も略ぼ相一致してゐる。フインケルスタインの調べた所によると例へば同一學科に就き一の教員が第一學期を受持ち、他の教員が第二期を受持つた場合に一方の教員が生徒に八五點以上を與ふる度は他の教員の同樣點を與ふる度の三倍になつてゐるを見出だした、評點が斯く一致しないのは評點の標準が欠けてゐる爲めである事を明に示してゐる。

(2)教育測定の特徴

教育上の成績の單位を定め、可なり精確なる測定の尺度を設ける事に着手したのは今から十三四年前の事であつた。先づ簡單なる小學校の課目に就て測定の標準を立てんとし、讀方、書き方、綴り方、算術等に就て尺度を立て、更に又中學校の方に進む事を努めてゐる。斯く教育單位及教育尺度を立つる事に關しての實驗や、假說は甚だ複雜で且念の入つたものであるから玆に夫れを叙說する事は畧する。教育測定では評價を絕對に客觀的ならしめんとする、卽ち同じ檢査用紙の答案は何人が附點しても同じ結果を生ずるやうにする、又異れる學級の生徒を檢査し、或は年を異にして檢査するも、檢査の難度を每に同一ならしめやうとする。此教育測定は特殊智能測定の方に其發達の系統を有してゐるが、目下では智能測定とは別途のものになつてゐる。智能測定は心理學者が其方法を精練せんと努力してゐるが、教育檢査の方は智能檢査に影響され教育家が工夫をなしてゐる。夫れから五六年前より、スタンフオド式の智能測定法と教育測定法とを聯結せしめんとの企圖が出て來た。

(3)成就商の測定

コロンビヤ師範大學のピントナーは一八一八年及び一九一九

年に於て智能の名辭を以て教育的收得を許價するの必要を唱へた。一九二〇年にフランツエンが成就商 A. Q. (Accomplishment Quotient) なるものを提案し、成就商は教育商 E. Q. (Educational Quotient) を智能商 I. Q. で除したものとした、フランツエンの提案せる A. Q. と E. Q. は、年齡により標準化された智能測定及び教育測定が行はれて後始めて成立するべきものである。年齡を規準とする教育測定法の方は未だよく成立してゐないが、斯く教育測定と智能測定とを結合せんとする企圖は助成す可きものである。

(4)智能率と成績率との關係

I. Q. は兒童の生來の智的材能の量であつて、彼れの進歩の可能度を示す。E. Q. は兒童の教育的收得の量であつて、彼れの進歩の現實の度を示す。A. Q. は前兩者の出來る丈け善い量により兒童の現實進歩が彼れの可能の進歩に接近した度を示すものである、即ち成就商は兒童の成績を彼れ自身の材能の名辭により評價するものである。茲に優等智能の兒童があつて、同學級の標準では90%の位置を得てゐても、自己智能の標準では70%丈けの努力しかしてゐないとする。又他の劣等兒は同一學級の標準では70%の位置であるが、自己智能の標準によれば90%の努力をしてゐるとする。然かすれば前者勤めたりと云ふ可らず、後者怠りたりと云ふ可らずである。ソーンダイクは兩者に要求す可きは各共A. Q. を一に近からしむる事であると論じてゐる。

フランツエンは A. Q. は $\frac{E.Q.}{I.Q.}$ であるとしたが、ソーンダイクは個々の學科材能例へば算術を學ぶ材能、綴方を學ぶ材能、雜句語を學ぶ材能を測定する方法を案出し、兒童が或る學科に就て成し遂げたる所と、同學科に就て有する材能とを測り、成し遂げたる所を材能により除して得たる商は、成績に對する重要なる鍵になる、例へば七〇の材能のものが七〇の仕事をしたのと　四〇の材能のものが七〇の仕事をしたのとは其間に大なる差異があるとした。

斯く教育檢査（測定）と智能檢査（測定）とを結合し聯合檢査（測定）と稱するものが最近立てられ使用されてゐるが、未だ小學教育の三年より八年に至る程度に止まつてゐる。聯合測定法に就ては益研究されねばならない、我國では極めて少數の心理學專攻者が之を試みてゐるに過ぎない。今ピントナーが研究した所を擧げて見ると、彼れは四千二百十五人の小學生徒に就き檢査した其中で生徒自身の有する精神的材能から見て、出來る丈け學校の仕事をしてゐないと認めらるゝものが九百人あるが、此九百人の四割七分は智能は優等であつて僅か八分丈け

が智能が劣等である。又千六十四人の生徒は他の同等の智能を有する者に比し、學業に於て勝れた仕事をしてゐるが、此内僅か一割一歩が智能優等で、四割は智能は寧ろ劣等の方である、之を概括すれば左の如くである。

	學校の豫想に劣る者	豫想通りの者	豫想に勝る者
智能優等	47.4%	24.%	10.8%
智能中等	44.3	53.2	40.3
智能劣等	8.3	22.3	39.8

是を以て觀ると學校の教へ方の傾向が略明になる、即ち中等劣等の兒童を鞭韃して其智能に比し、比較的多く學業に努力せしむるが、智能優等の者は學業上の仕事を平的程度まで爲せば夫れで放任して、更に之を誘掖進歩せしむる事をしない。優等兒の學業能率を其生來の智的素質に比すると彼等の學業能率は却て低く、尋常兒や劣等兒は却て學業能率は高い事になつてゐる、要するに優等智能が十分に開發使用されてゐない。若し優良智能を有する者を早く發見し、之を十分に進展せしめ利用したなら、個人も社會も大なる利益を享くる事になるであらう。

夢の話

過去の夢、未來の夢、現在の夢

堺利彦

A　今日は一つ三人で夢の話をしようぢやないか。

B　では先づ。夢は五臟の疲れ。

C　古いなア。

B　では新らしい所で。夢は抑壓された情意の漏洩だ。

C　成程。君は新舊兼備だね。

A　思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせば覺めざらましを。といふ奴も、やつぱり其の抑壓された情意の漏洩を歌つたものだな。

B　いとせめて戀しきときは烏婆玉の夜のころもをかへしてぞぬる。といふ歌もあつたね。

C　何だい、それは。

B　ねまきを裏返しに着て寢れば夢を見るといふ迷信があるのさ。

C　あゝそうか。僕も一つ夢の歌を擧げやう。住の江の岸に寄る波、夜さへや、夢の通ひぢ人目よぐらん。

B　ハハア、君のは百人一首の智識だね。

C　百人一首では惡いか。

B　イヤ結構。ではいつその事、一富士、二鷹、三茄子と行くか。

C　何だい、それは。

B 『何だいそれは』は恐れ入つたね。

C 恐れ入つたか。

B オヤ。君は少し變だね。

C だつて君は、僕が『何だい、それは』と疑問を發してやらなけりや、折角の博識な所を發揮する機會が出て來ないんぢやないか。

B 成るほど、君もたまには馬鹿にならん事を云ふね。ぢや一富士二鷹の故事來歴は心得てゐるのか。

C イヤ、それは全く知らない。

B 驚いた。物を識らないにも程があるぜ。

C 程があらうと無からうと、そんなに驚いたりしてゐないで早く説明に及んだらいいぢやないか。

B 好し。夫れ一富士二鷹三茄子とは、新年の初夢の縁起さ。

C あゝあの『おたから〱』といふ奴だね。

B ウンそうだ。初夢と云へば、僕は今年の初夢にこういふのを見た。

C どういふのだ。

B こういふのだ。待てよ。何んでも僕が寢てゐると、黒猫が一疋、ソーッと忍び寄つて來た。氣味のわるい奴だと思つてゐると、行きなり僕の喉元に喰らひついた。僕はキヤット云つて目を覺した。

C 猫だからキヤット云つたんだね。

B ケチな駄洒落を云ふなよ。それから不思議な事には、幾度も幾度も同じ夢を見る。いよ〱氣味がわるくて仕樣がない。何んだか喉がムズ〱するような氣がする。そうこうする中に烈しい風邪に罹つて診察を受けると、喉に小さい腫物が出來てると云ふぢやないか。とう〱それを切開して貰つて、それからヤット黒猫がでなくなつた。

C ヘエ！そうすると、腫物が黒猫に化けたわけなんだね。

B ウン、まあそうだ。それからまだこういふ夢を見た。何んでも僕が日比谷公園を散歩してゐると、兼ねて懇意な齒醫者が向ふからやつて來て、行きなり僕の口をこぢあけて、……

C チョット待つた。先つきは黒猫が行なり君の喉元に喰らひついたのだつたね。

B　だつて事實だから仕様がない。齒醫者の奴、行きなり僕の口をこぢあけて左の奥齒にさはつたと思ふと、スポーツ！といふ（急に物を引つこぬいたやうな）大きな音がした。見ると君、齒醫者の奴、右の手の指先に、血のタラ〱流れてゐる、鬼の手のやうな大きな齒を一本つまんでゐた。

C　さうするとそれは、虫齒が齒醫者に化けたんだね。

B　ウン、まあさうだ。それから半月ばかり立つと、チク〱奥齒が痛みだした。

C　ヘエ！面白い話だね。然し黒猫の方が上出來だ。フロイドさんが宜しくと云つたよ。

B　何、フロイド！。君はそんな事を知つてるのか。

C　僕が百人一首の外にフロイドを知つて居ちや、何か君に取つて都合のわるい事があるのか。

B　ナニ別段……

A　B君ちよつと待ちたまへ。僕に少し話させてくれ。君達は膝栗毛を讀んだ事があるか知らんが、あの中にかういふ所があるね。彌次郎兵衛が馬に乘つて、馬子を相手に出鱈目を云つてる中、フト一首浮んだと云つて馬子に歌を詠じて聞かせた。奥山に紅葉もみぢ踏みわけ鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき、と云ふのだ。馬子は大變それを讚めた。それから次の宿に行きついて馬から降りた時、彌次さんは讚め賃のつもりで幾らかの酒手をやつた。すると馬子は、今一人の馬子に向つて斯う云つた。オイ兄弟、猿丸太夫が酒手をくれたよ！。

B　ワツハヽヽ。僕はフロイドの猿丸太夫か。C君、参つた！。

C　B君は存外正直者だなア。彌次さんは馬子の云ふ事なんぞ聞かない積りで濟ましてゐたよ。

A　アハヽ。所で、もすこし何か夢の話はないか。

C　あるよ。僕はよく高い處から落ちた夢を見るがねえ。

B　フオーリング・ドリームといふ奴だね、『落ちる夢』は世界的の現象だよ。

C　さうかい。どうして人間が皆な落ちる夢を見るのだらう。

B　それは斯うだ。人間の先祖は猿だ。其の猿は木の上で生活してゐた。猿も木から落ちる。其の恐ろしい經驗が種族的記憶

として我々後世子孫の頭の中に遺傳してゐる。

C　成程。やつぱり君はエライ物識りだ。然しねえB君、僕の落ちる夢は、いつもストーンと踏みはずすばかりで、一度だつて底まで落ちついた事はないんだが、どうしたのだらう。

B　そりや分り切つてるぢやないか。地面まで落ちた猿は皆んな死んでる筈だ。中途で木の枝か何かにつかまつて助かつた奴だけが我々の先祖なのだもの。

C　成アる程なア。然しB君、それなら木の枝につかまつた所の記憶も少しは殘つてゐそうなものぢやないか。

B　サアそれはどういふものかね。

C　さすがの博識もそこまでは答辯が出來ないか。

A　C君そんなに追究しなくてもいいだらう。僕は又、よく空中を飛ぶ夢を見るがね、あれはどういふのだらう。

B　それも樹上生活の記憶で説明が出來るぢやないか。赤んぼ猿が母親の猿の胸の毛をつかんでしがみついてゐる時、其の母親猿が枝から枝に渡つて行くなら、赤んぼ猿の心持としては、丁度空中を飛んでるようなものだらう。

A　成程。然し少々苦しいようだね。

B　苦しかつたら飛ぶのをやめて少し休むさ。

A　あゝそうかよし〳〵追究はしない。所で、そういふ過去の夢でなく、近來は大ぶん未來の夢がはやるようだね。社會主義だの、共産主義だのと云つて。

C　そうだ〳〵。あのくらい有害な夢は恐らく無いね。

B　夢想、妄想、謬想、空想、彼等は實に度すべからずだね。

A　××××××××××××××××××××××××××××××××××××。B君の説明に依れば、黑猫の夢が程なく腫物の切開として×××××ゐるのぢやないか。

B　寢て見る夢は實現されるが、目をあけて見る夢は何んの役にも立ちやしない。

A　あゝ成程。ではロシヤの社會主義者は×××××××××××。

B　そんな事は僕ア知らたい。

A　あゝそうか、よし〳〵。所が、僕の見る所に依ると　過去

の夢と未來の夢との外に現在の夢がある。これも目をあけて見る夢なのだが、隨分變な夢だぜ。

C　へエ！それは一體どんな夢だい。

A　例へば斯うだ。資本と勞働がノッピキならぬ生死の戰ひをしてゐる。所が、或人々は其の事實に對して、勞資の麗はしい調和といふ夢を見てゐる。一階級が他階級を壓伏し、一民族が他民族を征服し、富者が貧者を××し、强者が弱者を掠奪してゐる。所が、或人々は其の事實に對して、共同生活、相互扶助、自由平等博愛、最高道德の實現されたる國家、などいふ夢を見てゐる。

B　それはA君、こうぢやないか。君の言ふのは、夢想、空想ではなくて、理想なのだらう。

A　そうかも知れない。何事にも理想だらう。理想とは現實の上に冠せた面だ。現實の醜惡と冷酷と悲慘とを見まいとする（或は、見せまいとする）蔽ひ物だ。霞の衣だ。紅だ、白粉だ、それが即ち僕の謂ゆる現在の夢だ。未來の夢は實現される時があるが、現在の夢は只だ現實を隱すばかりだ。

C　何んだか大變な鼻息になつて來たね。

B　C君うるさいから放つとけ、放つとけ。

夢

石原　純

夢の話と云ひましてもこの頃では私はどうもめづらしい夢を見たと思つて眼覺めた後で特別にそれを記憶してゐやうと努めない限りいつも直きに忘れてしまつて、それこそ夢のやうに消えてしまふのです。夢で見た事實内容に對してそれ程の重き

置からとしないせいかも知れません。夢の內容と經驗や感覺刺戟などとを一々比較分析して見たなら、おもしろい關係が出るでせうけれども、かなり複雑な事情に左右されてゐるにちがひありません。私はいつも頭腦をひどくつかつて疲れてゐるときに熟睡すると、きつと死んだ人や自分の死などに關する夢を見るやうに思ひます。さう云ふときには眼覺めて見て左の後頭部に大きな脉搏を感じ、さうして疲勞解除の輕い快感をおぼえるのが常です。こんなことが誰にもあるものかどうか知りませんが、夢の緣起が逆さであるといふやうな説の出るのもこんな處にありはしないかと私には思はれるのです。

けさふと眼覺めてそのときの夢をけふこそ忘れずに書いて見やうと思ひながら之を繰返してはたどつて見ました。まだ眠かつたのでそれを考へ辿つてゐるうちにまた夢心地になつて次々にちがつた夢を見るのでした。しかも夢を見ながらも私には最初の夢を思ひ出さうとする意識がやはりはたらいてゐました。この間の夢と現實的意識との交錯はいかにも微妙なもののやうに思はれるのでした。その最初の夢の內容は私の經驗とは何かの關係をもつてゐるのかも知れませんが、他の人たちにお話するには餘りにたわいもないものでせう。けれどもせつかくそのつもりで記憶に殘さうとしたのですから、ともかく書いて見ることにしませう。

何でも私の幼ない頃の經驗が現在と一緒になつてゐるやうな氣がします。私は一生懸命に墨繪のやうに書いてある人間の顏を鋏で切り拔いてゐました。私のまへに一緒にゐた人たちは誰だかはつきりしません。繪の黑い頭髮の線を切り拔くのに骨が折れて鋏をつかふのが非常にぎごちない氣がしましたが、だんだんに切り拔いてゐるものが厚みをもつて、終ひには木片でつくつた頭のやうに思はれてゐました。そして何でもその頭で人形をつくらうと思ふらしく、首をしきつてある木板に竹をとほし、竹の周圍に藁をたばねてそれに衣服を着せればよいと思ひました。それには適當な竹の棒を探さなくてはなりません。すると棚の上かなにかに五六本の丸竹がありました。長さがどれ

も二尺ばかりもあるやうでしたが、これを人形の頭へ通すと、身體になる部分が短か過ぎるやうに思はれるのでした。人形はこのときはもう等身大のものになつてゐるのです。一つ長い竹がありましたが、それは割つた竹であつてしな〱で重みを支へる程の役に立ちません。何かいゝものはないかと戸外に出ました。そこは私が生れ育つた昔の家のまはりで、少しの空地と野菜畑と、その奥には栗や無花果や杏子の木立の重なつた處があります。東京の本郷の眞中にあつたのですが、その時分には今とまるでちがつたこんな仲氣なおもかげがあつたのでした。木立の下の方から左へ折れると小さな離れの横を通つて庭へ出るのでした。その離れの裏までゆくと、女學校の生徒がそのなかで歌をうたつてゐるやうな氣勢です。私はそのときはY子と一緒に連れ立つてゐるので、その先へゆくのを止めて引返しました。前に云つた空地に大きな赤い甕を埋めて肥料溜か何かにしてあり、それに蓋が十分にしてないので、雨水がたまつて溢れてゐるやうです。これは氣を注けてやらねばならぬと思ひながら、通り過ぎるうちに、私たちは何だか往來を歩いてゐるのです。すると左側の普請場のやうな材木屋のやうな處に五分角ぐらゐの木の棒があります。これをいゝ加減の長さに切れば人形の胴に丁度いゝので一本持つてゆかうかと思ひましたが、まだ家の近處にもこんな處が幾らもあつた筈だと思つて止めました。その普請場はどうも東京やこの邊の震災後の有様に似てゐるやうでした。そこを通り過ぎると或る空地に深い井戸のやうなものがあつて、黒服を着た軍人らしい人がそのなかからずつと高く出てゐる針金のやうなものに手をかけてゐます。その軍人も堀のやうななかに立つてゐるらしく背中から上だけが見えてゐるのです。無線電信を試驗してゐるのだと思つて私は見てゐました。

こんな意味のわからない妄想連續も夢の特徴らしい氣がします。自分にはいろ〱經驗した情景が偲ばれる處もありますが、それらが混淆していつの間にか移つて行くのです。どうも夢のなかには十分の意志の自由もなく論理の一貫もないやうです。論理のない點に於てはそれだけ藝術的かもしれません。夢

ほど樂しく、また悲しく怖ろしいものもありますまい。併し夢の世界が私たちに與へられてゐることは、私たちのこの上ない幸福とも見られます。すべてに束縛されてゐる現實とは異つて夢の世界ほど追想の上では自由な無批判的なものはないからです。

どう考へても現實に經驗したことのないやうな事實を私はまた夢に見ることがあります。往來、と云つても西洋のやうな煉瓦の建物に沿うた敷石の道路の傍に、馬のやうな動物が皮を剝がれて、それに夕日が燒けるやうに赤く照つてゐるのを私は夢に見たことがありました。實際に馬でもあれば慘酷な厭な感じがするわけですが、そのときはどう云ふわけか極輕い薄氣味わるさが伴つただけで、動物が何となく愛らしいもののやうでもあり、それが赤赤と照された色が强い油繪具に見るやうな如何にも華美な感じをもつてゐました。なぜそう思へたかは私には判りませんが、私はたゞ後でこれ程異常な色彩はとても夢でなくては經驗されないだらうと思ひました。

夢は本當に不可思議の世界です。それは現實とまるで切り離されたものであつて、現實の經驗に基くことは多いでありませうが、夢で現實を占ふなどと云ふことは私にはどうしても考へられません。私は現實を超越した一つの神秘な世界として夢の內容を味ひたいと思ふばかりです。

おばけの夢

岸田劉生

夢は五臟の勞れとかいふが、物心がついてから私は一晩でも夢をみない眠りといふものを知らない。人によりては、「私は

昨晩も夢を見た。など、夢を見た事を珍らしさうに云ふのを聞くが、私は羨ましい事に思ふ。何事も知らずにグーッと眠り切つてみたいといつも思ふが、寝ればきつと私は夢を見る。

まだ三つ位の時分には、はつきりと夢の事を知らなかつた。大人が、昨晩はこれ／＼の夢をみたなど、話すのを聞いて一種羨ましい様な不思議な様な心持のしたもので、自分も何か夢といふものを見てみたいものだなど、思つた事がある。その時分、ウト／＼とねかゝる時、心が深い／＼ところへしづかに落ち沈んで行く心持を、金の屏風が、スーッと靜かに倒れて來る様に感じては不圖氣がついたものだが、幼心に私はそれを夢といふものかと思つたりした。そして乳母などにそんな事を話した事を覺へてゐる。それからぢきに私は本當の夢を見る様になつた。

子供の時分から見た夢の中では何といつてもおばけの夢が一番强くこたへる。大人になつてからも私は時々おばけの夢を見る。それから、時にライ病人に追ひのけられる苦しい夢を見る。氣持のよい方では飛ぶ夢で、丁度海水浴ではじめて身體が浮んだ時の様な氣持で空中を飛んで人に見せる夢を時々見る。そして不思議にその夢をみた翌朝はどうも自分には空中を飛ぶ事から來る様に生理的に感じられる事だ。或る時は馬鹿らしいと一方で思ひつゝ人なき所で、一寸飛んでみた事さいある。

子供の時に、ウンコのお化けに山道を追ひかけられる夢をみた事がある。丁度此の時分畫草紙屋に百化けとか何とかいふ、化物づくしの畫草紙屋があつて、又それをよく買つて來ては鑑賞したものであつた。畫工もお化けを算段しなくてはならない故かなり苦しんだのであらう。その中の割に初めの方にウンコのお化といふのがあつた。一寸オムレツの様な形をした奴が荒い辨慶か何かのドテラを着て、なたまめ煙管をくわへて、あぐらをかいてゐるのだが、夢の中にそいつが出て來て、細い山道を追はれたのだ。しまいにはウンコの正體をあらはして、トグロをまいたまゝバッテン／＼（その音ははつきり覺へてゐる。夢に音や色がないといふ說は誤りである）といふ音をたてゝ追つて來た、兵隊さんに助けてもらつてまあ無事に濟んだ。

この夢などは子供の時、（多分八歳位の時分だらうが）みた夢

でコッケイなのと恐ろしかつたのとでよく覺へてゐる。が、割に近くみた、一寸西洋の怪談にでもありそうなきみの悪い夢をもう一つかいて御めんを蒙らう。

その夢は、かういふ夢である。

何でも、かなりいゝ西洋館の借家があるといふ、(當時私は貸室につかへる西洋間のある借家を探してゐた)Tと一緒にそれを見に行く事になつた。長ひ〳〵田畑のあぜ道を通つて行くとやがて場末らしいところへ出た。如何にも東京郊外の場末らしい感じのところで、少し行くと、石ころがあつたり、雑草がボヤボヤと生へたりした荒れた空地があつて、安ものの青ペンキで塗つた、ミルクホールなどがあり、活動小屋などもある様なところへ出た。そのミルクホールの前にその借家の西洋館がある。みると、ダークグリーンに塗つた木造の(色が夢にないといふは誤り也)中に凝つた建て方の洋館でよく築地の居留地あたりに古く西洋人が建てた様な、本式の洋風の住宅である。「ウムこれは中々いゝナ」とか何んとか云つて、前のミルクホールで、そこの家賃や何かを聞く。何でも三十圓位だといふ。大へん安いナと思ひ乍ら、Tと二人その家の扉をあけて、玄關に入つた。入ると何となく、「ヒヤリ」とした。一種冷氣を感じた。私が帽子をとつて、帽子かけに懸けやうとすると、Tは、それを止めて、「帽子はとらない方がいゝだらう」といふ。私もその氣になつて目の前の廣い階段を昇つた。不圖みるとその階段が全部、大理石である。これは大したものだ。三十圓とは安い事だなぞと思ひながらその階段を昇つた。階段を昇り切つたところに扉があつて、その中が部屋になつてゐるのだ。

二人は階段を上り切つて二階の扉をツとあけて中を見た。

右手が大きい出窓になつてゐて、其處にレースの美くしい窓かけが懸けてあり、朝の晴れた和らかな美くしい光線が、そのレースを透して部屋にさし込んでゐる。その出窓はやはり大理石でその上に鉢植の花などもある。

ところで、不圖氣がつくとその出窓の大理石を一人の男の影が默つて一心に拭いてゐる。および腰になつて、雑きんがけでもする様にセツセ〳〵と拭いてゐる。

それは正しく影である。人ではない。人の形をした影である黒い、しかも朦朧でない。一種の影が、まあ、一體幾年も〳〵の昔から只一人いつ迄でも〳〵默つてこの出窓の大理石の板をセツセ〳〵と拭いてゐる。さういふ感じである。

私もTもゾツトした。二人とも無言で、くるりと踵を返して、そのまゝ默つてさつきの階段をかけおり、入口からかけ出した。それから走つた〳〵、先きの田畑のあぜ道を只めくらめつ法に逃げだした。

あまりの恐しさに眼がさめた譯だが、その影の感じは今でも思ひ出すことが出來る。中々夢の怪談としては傑作の方だらうと思ふ。

その家を、いろ〳〵探つてみたら、床下に何とかの骨があつたとか云へば本物の怪談めくが、それよりもその影の方が、ずつと怪の感じがあつてそれで澤山だと思ふ。

まだ〳〵夢でいろ〳〵不思議な感じを味ふ。が、夢物語は夢物語であり實になるものではないからこの位にして置かう。

夢のしらせとか、夢うらないとかいふものは私はまだ經驗がないから信じないが、イヤな夢をみると一寸いやな不安な氣のするものだ。

近來では、古書を漁る故か、骨董に關した夢を毎度みる。

其内に夢でなく本式に大金でも入つてくれるといゝと思つてゐる呵々。(大正十三年二月廿六日戯草)

痴人の夢と賢者の夢

山川菊榮

未來を目標として働く人、未來のために闘り、未來のために眼前の小さな個人的利益、個人的欲望を犠牲にする人は、いつ

も夢想家の譏りをうける。それがどんなに楽しい希望であらうとも、どんなに合理的な計畫であらうとも、眼前の卑近な、個人的利害の打算よりほかを考へ得ぬ人々にとつては、すべて夢か幻影としかとれないのである。

けれども人間の社會は常に永遠に變化と進歩との歩みを留めない。隨つて、昨日の夢も今日は現實となり、今日の現實か、明日は過去の夢となつてしまふのが常である。ベーベルの『婦人論』の中にはこんなことがある。

『第十九世紀の初め頃でさへ、ナポレオンまでが蒸汽で船を動かす計畫を、氣狂ひじみた考へだといつて敢て嘲笑したのである。賢明だと思はれた人々さへ、鐵道線路敷設の計畫を馬鹿げ切つたことゝ考へ、そんなに高度の速力で走る乘物に乘れば、とても生きては居られぬと主張したのである。今日、多くの思想は、これと同じ取扱ひを受けて居る。昔し何人かゞ一世紀前の婦人に向つて、彼等は井戸から水を汲む代りに臺所の螺旋から水を得るやうになるだらうといつたならば、その人は、主婦や女中に横着を奬勵するものだといつて咎められたであらう。』

資本主義時代に入つてからの驚くべき産業の發達機械の進歩は、技術的方面に於ける人間生活の進歩と變化との可能性を信じさせるに十分であつた。僅か一世紀前に痴人の夢として斥けられた幾多の發明の芽生えが、今日では既に立派に完成されて、餘りにも當然至極な、平凡極まることゝしか思はれてゐない。汽車も電氣も電車も、今日の文明人にとつては、まるで人類地球上に生活し始めた當時から、當然存在してゐたものゝように感ぜられて居る。そこで、今日では、科學の力が、既に到達し得、完成し得た功業を驚き怪しむよりも、何故に科學の力が、今一層偉大な成績を擧げ得ないかゞ怪しまれてゐるほどである。例へば、曾てはその存在すら、夢想もし得なかつたような地震學に對して、今は地震を豫知する能力のないことを非難するほどまでになつてゐる。かような意味で、自然科學の方面では、未來の發達に對するいかに突飛な豫想でも、計畫でも、それが事實に即した理論的な根據をもつものである限り、痴人の夢として一笑に附し去られることは少なくなつた。

けれども社會科學の方面では、未來に對する豫想や計畫は、

それが理論的な根據をもてばもつだけ、隨つて社會の現實の×××××××××るだけ、愚かしい夢として、殊に××××××××××ることを許されぬ××××××して一概に葬り去られようとする運命に出あふのが常である。近頃では更にこの愚かしい不道徳な夢を取締まるために、過去の世紀が置き忘れて行つたやうな神、耶、佛の宗教家を集めて思想善導機關が設立されようといふ勢である。

○

昔から××階級は、時の社會を改革しようといふ希望や企ては、すべて實現の不可能な空想であり、痴人の夢だと稱して來た。ところで實際に實現の不可能な空想、痴人の夢だと信ずるならば、恐れる筈もなく、抑壓するにも及ばぬ筈である未來に對する民衆の希望を、恐怖し憎惡するの餘り、支配階級が執つた××××××××××××××××××××。彼等が、社會の未來を説く謂ゆる『夢想家』に對して××××××戻こそは、××××××××××××××××××××××××××××××。

思想は、現實の生活を超越し、遊離した獨立の要素ではない。それはいつも現實の生活の結果であり、反映であるにすぎぬ。隨つて物質的方向に於ける社會の變化と進歩とを是認し、獎勵しながら、それに伴なふ心理的變化と思想的進歩とを阻止することは出來ない。資本主義の經濟組織を採用しながら、神代の感情を涵養させようとしたり、封建時代の心理を復活させやうとす試みこそは、現代に於ける『賢者』の夢である。社會進化の力は、潮の滿干の如く自然であり、悠久である。神官や僧侶の祈禱、權力者の威嚇が、よくこの潮の滿干を制し得るものならば、人類は今なほ、奴隷制度によつて維持されてゐた文明時代の初期に低迷して居たに相異ない。

必然にして合理的な社會の變化、その未來への進展を恐れるものは、たゞ過去の夢の中に人類の魂を縛つておかうとする。彼等はその乏しい空想の力で、過去の社會發達の程度に相應した過去の道德、過去の思想を極力美しい、理想的なものに彩色して、これを現代人の上に强ゐようとする。けれどもそ

も夢想家の譏りをうける。それがどんなに樂しい希望であらうとも、どんなに合理的な計畫であらうとも、眼前の卑近な、個人的利害の打算よりほかを考へ得ぬ人々にとつては、すべて夢か幻影としかとれないのである。

けれども人間の社會は常に永遠に變化と進歩との歩みを留めない。隨つて、昨日の夢も今日は現實となり、今日の現實が、明日は過去の夢となつてしまふのが常である。ベーベルの『婦人論』の中にはこんなことがある。

『第十九世紀の初め頃でさへ、ナポレオンまでが蒸汽で船を動かす計畫を、氣狂ひじみた考へだといつて敢て嘲笑したのである。賢明だと思はれた人々さへ、鐵道線路敷設の計畫を馬鹿げ切つたことゝ考へ、そんなに高度の速力で走る乘物に乘れば、とても生きては居られぬと主張したのである。今日、多くの思想は、これと同じ取扱ひを受けて居る。昔し何人かゞ一世紀前の婦人に向つて、彼等は井戸から水を汲む代りに臺所の螺旋から水を得るやうになるだらうといつたならば、その人は、主婦や女中に横着を奬勵するものだといつて咎められたであらう。』

資本主義時代に入つてからの驚くべき産業の發達機械の進歩は、技術的方面に於ける人間生活の進歩と變化との可能性を信じさせるに十分であつた。僅か一世紀前に痴人の夢として斥けられた幾多の發明の芽生えが、今日では既に立派に完成されて、餘りにも當然至極な、平凡極まることゝしか思はれてゐない。汽車も電氣も電車も、今日の文明人にとつては、まるで人類地球上に生活し始めた當時から、當然存在してゐたものゝやうに感ぜられて居る。そこで、今日では、科學の力が、既に到達し得、完成し得た功業を驚き怪しむよりも、何故に科學の力が、今一層偉大な成績を擧げ得ないかゞ怪しまれてゐるほどである。例へば、曾てはその存在すら、夢想もし得なかつたような地震學に對して、今は地震を豫知する能力のないことを非難するほどまでになつてゐる。かような意味で、自然科學の方面では、未來の發達に對するいかに突飛な豫想でも、計畫でも、それが事實に即した理論的な根據をもつものである限り、痴人の夢として一笑に附し去られることは少なくなつた。

けれども社會科學の方面では、未來に對する豫想や計畫は、

それが理論的な根據をもてばもつだけ、随つて社會の現實の××××××××××るだけ、愚かしい夢として、殊に××××××××るこことを許されぬ×××××して一概に葬り去られようとする運命に出あふのが常である。近頃では更にこの愚かしい不道德な夢を取締まるために、過去の世紀が置き忘れて行つたような神、耶、佛の宗教家を集めて思想善導機關が設立されようといふ勢である。

○

昔から××階級は、時の社會を改革しようといふ希望や企ては、すべて實現の不可能な空想であり、痴人の夢だと稱して來た。ところで實際に實現の不可能な空想、痴人の夢だと信ずるならば、恐れる筈もなく、抑壓するにも及ばぬ筈である未來に對する民衆の希望を、恐怖し憎惡するの餘り、支配階級が執つた××××××××××××××××××××。彼等が、社會の未來を説く謂ゆる『夢想家』に對して×××××××戻こそは、×××××××××××××××××××××××××××××××。

思想は、現實の生活を超越し、遊離した獨立の要素ではない。それはいつも現實の生活の結果であり、反映であるにすぎぬ。随つて物質的方向に於ける社會の變化と進步とを是認し、奬勵しながら、それに伴なふ心理的變化と思想的進步とを阻止することは出來ない。資本主義の經濟組織を採用しながら、神代の感情を涵養させようとしたり、封建時代の心理を復活させやうとす試みこそは、現代に於ける『賢者』の夢である。社會進化の力は、潮の滿干の如く自然であり、悠久である。神官や僧侶の祈禱、權力者の威嚇が、よくこの潮の滿干を制し得るものならば、人類は今なほ、奴隷制度によつて維持されてゐた文明時代の初期に低迷して居たに相異ない。

必然にして合理的な社會の變化、その未來への進展を恐れるものは、たゞ過去の夢の中に人類の魂を縛つておかうとする。彼等はその乏しい空想の力で、過去の社會發達の程度に相應した過去の道德、過去の思想を極力美しい、理想的なものに彩色して、これを現代人の上に強ゐようとする。けれどもそ

の過去の時代に於てさへ、單に支配階級の要求し强制したものであつたにすぎない階級的な道徳や思想が、經濟的環境を異にし、對人關係を異にする、謂はゞ別世界の別人種にも等しい現代人の生活を支配し統制する何の力をもち得よう？　けれども今日賢者をもつて自任してゐる人々は、自分らの念力一つで、さういふ奇蹟を現じ得るものと信じてゐるらしい。社會進化の理法に卽して、その必然的な力を自然の方向に流れさせようとする謂ゆる『痴人の夢』と、色の褪せた過去の幻影――その實質たり基礎たる過去の經濟組織にとり殘された陰影にすぎぬ封建時代の道徳――を墓場から喚び返して、死んだ理想に活きた人間を支配させようとする『賢者』の夢と、どちらがより多く實現の可能性をもつてゐることだらう。

しかしいづれにせよ、これだけは確かである。卽ち未來のために働く者は、常に無理解と嘲笑と迫害とに曝されねばならぬに引かへ、過去の夢に耽る者は、何等の危險や不快にもさらされずにすむ、といふことである。未來のために鬪る者は、事每に迫害に遭ふ一方、過去を夢みる者は、それがいかに馬鹿げた、無益極まるものであつても、××××××うけることは絕對にない。のみならず其等の夢を語るものは、未來に對する民衆の熱望や努力に對して催眠術的な効果を加へるものとし×××にさへあづかる。思想善導會に列席した宗敎家達は、或は布敎の便宜を要求し、或は『待遇の改善』――勿論民衆のそれではなくて自分ら自身のである――を希望することによつて露骨にこの恩賞を求めたものである。

『思想の惡化』を憂ふる賢人達の眼には、それの根源であり、それ以上測り知られぬほどに深刻な民衆の生活惡化の現象は映らぬらしい。かの賢人達は、生活難といふ最も著明な、最も重大な事實を見のがしながら、それの影法師にすぎぬ『思想』を踏んだり蹴たりすることによつて惡鬼を退治したつもりになつてゐる。自分の影法師に怯えて夜一夜町を逃げ歩いたのは昔の臆病者の話であるが、今の世の支配階級は、自分自身の影法師に唾を吐きかけ、繩を打たうとして血眼になつて居る。民衆の生活を改善しようとせずに、その結果てすぎぬ思想を迫害し、社會運動取締法案を出さうとするほどに『惡化』した自分らの

『思想』を以て『思想の善導』を說く是等の賢者達は、過去の夢で未來を支配しようとすると共に、われとわが手で描き出した未來の惡夢と勝手に闘つてゐるのである。

人類の世界が常に改革と進步とを重ねて來たのは、社會進化の必然の力を意識し代表して來た先驅者の賜物であつた。其等の先驅者は常に痴人とよばれ、その理想や抱負は、いつも實現の不可能な夢であり、徒らに愚民を惑はす浮說であるとして排斥せられて來た。そして其等の新說を唱へ、新發見をした人々の中には絞刑や焚殺を以て酬ゐられたのも少なくない。けれども、權力者のいかなる壓制も迫害も、事實を動かすことは出來なかつた。ローマ法王の逆鱗は、コペル＝カスを沈默させることは出來ても、地球の自轉を止めることは出來なかつた。そして神父達は、ダーウインを呪咀し讒謗することは出來ても、生物進化の事實を取消すことは出來なかつたのである。

醫術の幼稚な昔は、加持祈禱が人間の肉體的病患を治癒する最善の方法と信ぜられてゐた。ところが今でも賢人を以て任ずる人々は、社會的疾病を治癒する唯一の方法を『思想善導』の加持祈禱に見出さうとして居る。彼等は病そのものよりも、その病氣に對する意識を恐れてゐる。彼等に在ては、社會的缺陷そのものは問題とならず、これに對する民衆の意識が罪惡であり『思想の惡化』なのである。そこでこの意識を失はすために宗教といふ阿片を用ゐようとする。が、阿片の力は、或愚かなる個人を醉はせることは出來よう。けれども潮の滿干にも似、地球の運動にも類する社會進化の必然の力を麻痺させることが出來ようか。それが出來得ると信ずる今日の賢者は、その不可能を說く『痴人の夢』を嘲笑し迫害する。しかし痴人の夢と賢者の夢と、どちらが××となるかについては、歷史が證人に立つ外はない。

夢の筋書

木村荘八

——〔夢の話〕——

古い落語に何でもねてゐると魂がからだを抜け出して諸方をさまよふ。その間にたしか醫者のぬけがらのからだを急に病家の使ひが起し、浮遊の魂はあはてゝ醫者は車夫のへ、車夫のが先生へ間違へてはいる――さう云ふのがあるが、それ位ひ、自分のぬけがらを戸惑ひするまで魂が何も彼も忘れてさば〳〵と「夢」を見る。その位ひの夢なら、毎日でも結構と思ふ。

然し稍もすると、このぬけがらをいつ迄も背負つてゐて辛氣くさい魂があります。切角の夢に魂となり切れず、ぬけがらを持ちあつかつてゐて、と云ふのは現識なり日々日常の生活を何となく持ちあつかつて、例へばそれを材料に極く拙く小説でも仕組んだ様な、そのくせ常人は大變無氣になつたり考へたり嘆いたりする、――五臓六腑の疲れを猶豫無しにして了ふいやな夢があります。

美し夢にもその見る當人の人品骨柄、風格、人となり、識、……と云ふ様なところが偲ばれるとしたなら、今云ふ様な夢を見るのは先づ愚だ。夢に胡蝶となるなどは、それでうまく羽さへ生へて飛べればどうせ大傑作です。余程の大賢か大愚でなしには成れつこないらしい。――友人岸田劉生は昔觀工場で大きなうんこの化物に追かけられる夢を見たと云ふ。のたうちまはるうんこがばたん〳〵音を立てゝ觀工場の向ふの方から追かけて來る。つかまつては一大事と云ふのであつちへ曲りこつちへ曲りして逃げるが、益々うんこは近づいて來て――そこ迄でしか岸田は話さないか、或ひはその先きで呑まれたか、十重二十重にでも卷かれたか、どつちみちこの夢なども傑作の方です。

うんことは面白い。それが一本道の厄介な製工場でばたんばたんとのの字にぐる／＼まはつて追かけるとは、見も見たものだ。さすがは見たもの丶人品骨柄……呵々、まあさう云ふわけだが、昔ボッティチエリーは或る夜のことといきなり書室を飛び出してフローレンスの町中を行たり來たりしたと云ふことです。とう／＼それで夜明しをして了つたが、友人トマソ・ソデリニが如何してそんな事をしたのかと聞くと、「――結婚した夢を見たのだ。その露骨なアイディアには隨分ひどい目に合つた。又自分は眠るにちがひない。すればまた今の夢を見るに違ひないと思つて」、それで夜通し街中を歩き廻つたのである。「まるで氣狂ひのやうに。」

之れはさうヴザリガ偉人傳に書いてゐるところですが、元よりあの人にはさもあり相なところだ。とは云へ無論この夢を見たから見た人をどうと云ふわけではないが、只夢は、どつちみちこの手の夢が下の下のやうです。――つい魂に成り切らぬ夢はあと／＼にたゝつて何しろうるさくて困る。

――と、實は近頃私はさう云ふ一つをありありと見て了つて、見るも見ないもなく頭から事後承諾に何所からか見て、この次第を日記へもかきました。世にも見たくない余計な夢をつい見て了つたものと、後悔してゐます。何を後悔するのかはよくわからないけれども。

○

さつとその事を書きつけて見ませう。

或る人の妻君の死んだ夢を見たのです。――何故死んだ夢など見たかと云ふとそこに理由がどうも付けられて、それがいやなわけだが、夫婦は大變困つてゐる。氣の毒だと思つてゐたわけだが殊に夢の少し前の事に、家で蓄音器をしてゐると、その盤の値段のことから何かひよんな話にほつれて來て、實は私は一寸妻君の感じを「イヤダ」と思つたことがありました。――何れはこれ等が意識無意識のところに何となくからまつてゐたと見え、つまり、ねても魂がうまくからだを抜け切れず、きつと私はその蓄音器の時「あゝイヤだ」と思ひ、然し「氣の毒だ」と思ひ、かぶせて「まあどうでもよからう」位ひ、感じを我れから[illegible]

かしたのだと思ひます。その感じのぼけたゞけの俳を、有らうことか、まあ夢でとられたかたちだ。

私がその人の家へ行つた。と、いつもゐる筈の妻君がゐない。どうしたのだらうと思ふと、死んだと云ふのです。——之からはざつと夢の筋がきになるが、前の晩には妻君は一晩中起きてゐた模様で、夜中に思案しぬいたと見えて長火鉢の灰が向ふ側からこつちへと丸で掘り起した様に、、火ばしでかき立てた跡がある。妻君はこれから階段を上つて物干しへも夜中に行つた模様で、その揚句に自殺をしたらしい。

私はびつくりしたのです。——何しろ主人の龜井(假名)に逢て見ると、妻君のことを聞くのに默つて病院のベツトの様なところに座つたまゝ何とも云はない。ところがこれが愈々妻君の死を私に强めて感じさすところとなる。——その室が又變な室で、いつもよく來て知つてゐる様な、又丸で初めての様な、兎に角そこへ行つたとなると大變暗い階段を通らずにはどつちへも出られない工合です。「うむ、此の階段か」妻君が夜前に上つたと云ふのは、と思つたが、私はいやだつた。しかしそこを上る他には道がないので一人で段を上へ上りました。

その道中の長く、暗く、無氣味なことは！何だか夜の空の下をぢかに行く様な工合でしたが、中途迄梯子様になり、上へ行くにつれて幅が廣くなつて、しまひには一面のネバ土の上を次ぎ〳〵に四分板を渡し、その板のコバを踏んで登るわけで、イヤにぐらつく。次第に勾配は大きくなり、場所は高くなる。どうも屋根の上へ出るらしい氣合です。——と、そこの所が少し判明しないが、何でも一つ曲がつて小さな坂道の様なわけになることゝなつて、計らずそこでバカに高い切つ立つ石崖の上へ突然出た。石崖のはるか下には箱根の川の様に泡立つ流れが早瀬に通つてゐて、向ふに橋が見える。——見るとそれが柳橋なのです。

之れはよくこの橋界隈を私は決まつて夢の場所に見る。生れてから十八になる迄ずつと兩國に住んでゐた、その記憶のせひでせうが、曾て大連でも大連の裏山の向ふがすぐと兩國横山町の夢を見て「何故ここがかう近いのに毎日來なかつたのだらう」と思ひ、醒めてからそれの非常に寂しかつたおぼへがあ

る。──兎に角そこへ出た。龜井の妻君はその崖から身を投じて死んだのです。

と、そこで偶々川岸で木村莊太と莊平と從妹の上林房子と、それ等の者に逢つた。之れはきまつて妙な「個有名詞」が夢にはお定まりに出て來るものだから、その感じに添へて殊更かう書いておく。私はそのみんなと一所になつて、何だか又道で兩國の生家此の方「芝濱のお母さん」と我々の間で云ふ人に逢ふ事などがあり、元の廣小路の所から鍵の手に曲がつて、──その邊で何所かしらから私の妻も私の道づれの中にゐる事となつたらしい。妻にふり向いて聞いた。「どうして×さんは死んだのだらう?」、すると妻が「矢張あれでせう」と云つたのです。その答への語の通り私はあゝ、矢張あれか、と思つて、納得出來ました。非常によくわかつた。

ところが夢では納得出來たが醒めてから思つては更に納得出來ず、そこで、或ひはこの根が現實の蓄音器の件などかと思ふ。すると非常にイヤな、心苦しい、つい現識へ觸つて來る憂欝のわけだが、何しろ私は「あゝあれか」と思ひ、それが何でも大變深い私にはその時よくわかるわけか何かで、一段と龜井の妻君が氣の毒に、殘念に、悲しくなつて來た。何故死ぬ程なら先きに何とか云つてくれなかつたのだらう、何とか相談も出來やうものを。もう逢へないのか、非常にうまいときは津の唄ひ手だつたが…そんな事をあれこれと思つて、私は本當に泣いた樣なのです。──その間に又龜井の家の玄關のところへ來た。

すると龜井の家の中に見馴れぬ小僧がゐて、それから若い女の人がゐて、小僧は私を「上州屋さんか」と云つた。「イヤ、森川町の木村だ」と云ひましたが、それも今思へば、昔の兩國にゐた頃家へ上州屋號木村常七と云ふ紙屋が出入してゐたのです。思へばそれが他人で木村と云ふ同姓の者に逢つた、その最初の場合です。當時の子供心の新奇がまだ何所かに殘つてゞもゐるのか。──然しそれよりは傍らの若い女の人の顏立ちが目に付きました。それは逢つたことはないが、目と云ひ。鼻と云ひ、たしかに死んだ龜井の妻君の妹に相違ない……

○

紙数がもう盡きましたから端折りますが何しろその邊で漸々と夢が醒め、上州屋の件をあゝ夢であつたかと思ひ、川岸の件をさう思ひ、おゝ！ 龜井の妻君も死ぬも何も、なんだ、殘らず夢だつたかと思ひ、すつかり安心しました。——さう云へば家の中から直かに空へ段がかゝつて崖上へ出るなど大川筋目だと途轍もなく思ひましたが、と、同時に俄然として氣が付き、且まざ〜とそのシーンなり心持を思つてぞつとすることには、妻君が死ぬ前に夜中に段を上つたと云つた。その同じ段を、私もつい今しがたあとから夢の内で上つた。

今目が醒めて見るにあたりは眞暗でまだ夜中です。その邊に何か死靈や何か、その影や、足音や、息吹や、手や、そんなものが一杯のやうに、ぞへ〜と悪感が走る。——あゝ、下の下の下の夢。こんなのはもう二度と見たくない！ 何かの罰に當つた氣がするのです。

現身の夢

岡本一平

朝ぼつかり眼を覺しのろ〜と湯に浸る。瓦斯風呂の湯加減を熱くして見たり冷して見たり、せめてこれだけがまゝならぬ浮世にわれのまゝになるものゝ一つだ。湯に香水を一二滴落す。贅澤のように見えて實は何でもない。一年程前作物に疲れて想像が萎へたのを恢復させる爲め花と一しよに買つ來て嗅いだ壜が見失なはれて居たのを移轉の騒ぎで又ひよつくり見付かつたのだ。いはゞ無價（ただ）みたようなものだ。無價みたようなものからこの馥郁たる世界が立騰る。そこにユモレスクが在る。で、洒脱に香水風呂へ入れる。若しわざと構へて買つて來た、吟味した香水を垂して入るのなら普通の贅澤でつまらなく

もあるし今のわれには増上の沙汰でもある。無價の香水風呂。！それがいかに長閑にわが五體を揶揄し撫で伸して呉れる事よ。

あたたかき身體を坐敷の瓦斯暖爐の前に運ぶ。暖爐はこの頃瓦斯の出が悪いので灼熱し切れずに間々覺束なき紫の焔をゆらめかす。風に小旗のはためく音を立てる。情熱に燃え切れぬ男が妨げの理智に向つてぶつくさ叱言を言つて居るようでもある。赤兒の鼻汁が提灯になりかけて破れて仕舞ふ音にも似てゐる。

レモンを切つて紅茶を入れて飲む。ソーダビスケツトにチースを塗つた二三枚を喰べるのは紅茶の味を出す爲か、或は朝飯の積りか、どつちでもいゝ。

それから蓄音器にカルメンの Habanera をかける。終ると同じものゝ Hadanera をかける。この曲が當世の流行だ。――流行も終りに近いが――歌ひ手はファア、ラー。

安來節流行の時にはやはり蓄音器に由つて流行の終始を陰ながら見屆けた。カルメンも流行り出してから終りを見屆ける積りで居る。別に安來のお糸やメリメに賴まれた譯でもないが流行曲はどれも贔屓だ。あれ程民衆を魅した妙味が廢ると惜ろしきまで惡感を感じさせる其處に不思議な謎がある。民衆を擒にした魅力が飽きられて惡感に變つて行く。その消長を如實に心に見詰めて行く。流行曲ほどあわれなのはない。昆侖が光澤を出して自轉してるような硬い圓盤の凸凹する面のうねりに乘つて一本の針が餘念なく走つて居る。悟れ悟れと象徴の線を忙しく引いてる。その線は神經よりも細く且黑盤に黑色をもつて描けるものから人の眼には認められぬ。そしてそれと無關係に硬い圓盤を苦も無く裏表に縫つて、恰も刺繡の糸のように色彩の線が懷ゑ、踊り廻る。それが歌曲だ。高調に達すると無形の圓が物質の圓盤を裂く程もびりびりと響き活かす。

歌曲によつてそこはかとなく心に描き出されるのは南歐の風物である。カルメンの基調を做すものは西班牙であるだらうが自分は西班牙を見ない。で自分の見た中で一番西班牙に近いナポリの港が先づ舞台面に展開される。

空も海も貼つたような碧玉。それは上より下より見詰める瞳のようである、市に住む人々の間にいかに嘆き悲しみ、悶へ、

そのような心緒をもたらす事件が起きようともこの二つの瞳は派手な情熱を閑に湛へじつと凝視して居る許りだ。人間の嘆き悲しみそれより海や空の凝視の方が强い。人々はいつか、うめき、泣く聲の尻尾を抑揚させ歌に唄ひ出すのである。

濱の石垣の蔭に赤いシャツを着た不良少年が小舩にレモンを提灯のように釣り甕に淸水を湛へレモン水を賣つてる。彼は行人の捨てゝ行つた煙草の吸殼をふかしつゝ身體はまだ戀する程に生熟して居ないのに心で戀といふものをして見たいものだとうつら〱想つて居る。彼には戀てふものゝ味は常日頃盜み食ひする菓子の食味を通じてより以上にそのうまさを想像出來ずに居る。

レモン賣りの背を向けてる沖にカプリの島が夢のように霞んで居る。無いと思へば確かりした形有ると思へば消えがてに。島は左端に近く、一つのしびれがある。牛の脊と頭との界のようだ。頭へ一つ持上つてそれから左端は斷崖になつてる。

斷崖の危ない上で胡麻のようなものが胡麻のようなものに打突かつて打突かられたものが海へ輕くこぼれる。打突かる方の胡麻は又一つ胡麻を島影から引出しては斷崖からこぼしてる。それをいつまでも操返へして居る。同じ操返しが見るものゝ心を妙に焦立たせる。見ゑる筈が無いものを無理に瞳を凝して梢も通れと眼光を射入る。瞳孔がシャターのように開閉した一瞬間、網膜に映じ出されたものは妙なものだ。

暴帝ネロが美姫達を裸にして兩乳を刀で削いでは絕崖から突落してる。

ネロは家來が抛り出す美姫を調子よく受取り機械的に兩乳を削ぎ取り、斷崖へ突く。その時もう後の用意に後を向いて仕舞つてる。

『おい來た』

ネロは全く職人氣質になつてこんな掛聲をさへしてる。

一方兩乳を削られた美姫達は先づ恐れる。次に怒る。その時もう斷崖の頂と水面との途中にもんどり打つて居る。女の裸身から唯一の壯嚴である、兩乳を削り取つて仕舞つたあとの形はまことに見すぼらしい。酉の市の熊手から飾りを除つたやうなものだ。たゞの飯匙のやうな形になつた自分に氣付き美姫はも

んどり中に冷笑する。

それからあの乳だけで今まで世間を窮付けて居てやつたのだ。そしてあれが無くなした今の自身は女でも何でも無い。今度は自他共に嘲る、冷笑を浮べて勢よく海の碧玉に吸込まれる。海の碧玉も機械的にずぼり／＼と美姫の裸身を呑んでしぶき一つ立て無い。たゞ一つだけ泡が浮く。泡は海の底の美姫の口からこの世へ最後の言傳てだ。泡が水面でばんとはぢけると、こう叫ぶ

『美は美それ自身にも欺きだ』

ネロに切られた乳房もまた海中に投げられる。美姫達の男に與へた右の乳房は浮氣こゝろやます、小さな半死半生の怪物となつてふらり／＼碧玉の浪に漂ふ。海の精氣は乳房の凝つた脂血を周圍より洗ひ晒して行く。中心まで晒しが徹した時、かの半死半生の怪物は俄に夢覺めて水月となる。浪のよるひる忍辱の戒めを守り地中海沿岸諸國修業の旅に出る。時々海水浴の人の體に觸れてちくりと刺すのはむかし男を擒つた癖がまだ殘つて居るのだ。

美姫達のまだ生まれぬ子の爲めに用意した乳房は眞珠貝となる。Petty! Petty といふものをまつはり育まうとする執着は狭まれた小石さへも美しい珠に愛をもつて包み上げて仕舞ふ。

ナポリの海は今や暮れかゝつて居る。南欧の日の暮れは盃の酒を他の酒に酌み更へる須臾を待つ間のさびしさである。哀愁に裏箔が打つてある。現實への悔恨は遠く望まして決して手元へは近寄せない。

レモン賣の不良少年は店を仕舞つて、少し慄へ乍ら又樂しみ乍ら泥棒の手先きになる爲何所へか連れられて行つた。薄暮の海岸には貝賣りの屋台のランプが點々し始めた。

神の投捨てた紙屑を半開いて並べたような種々様々の形の小貝。無理な窮屈な殼の中にわが身をそれにそぐはして貝の身が形通り入つてる。可憐だ。愛はともすれば嚙み食ふ獸慾をそゝり立てゝ。レモンの汁を絞つてかけると強い香氣の立つ底に見る見る貝の身の縮み死に行くのが讀める。果敢なき貝よ。小楊子で刺して唇で一つきつすを與へて舌を滑らす。柔軟な冷た

さ。拗ねた滑らかな反抗！

レモンの香と貝の礎の香が夜の闇に浸み去る後にぷんと血が匂ふ。もくり、もくり鐘がなる。今日は成程九月十九日。市のサンチヤナリユーシユの御寺で詢教のビショップの血が沸々玻璃盤に湧き上る日だ。御寺の大扉は最早閉したであらうに、血が匂ふ！血が匂ふ！殉教者の血が！

神秘の血の香は現身の自分のけがれた血の匂ひに縺れ込んだ。わが血は叛逆を起す。左の胸にある筈の心臓が俄に足のふくら脛に移つてる。其處から血が逆走する。

尾を切られた蜥蜴のように手足をばた／＼さしたが頭を地に突當てる許しだ。自分のこのみじめな姿を見賣りの婆アは少しも氣に留めず、賣上げの錢の中で一つ異國の錢の混つたのを珍らしがつたり罵つたりして見てる。

頭を地に突付け周章乍ら自分は悔恨する。何が詩だ。何が藝術だ。何が人間だ。一つの正直な信さへあればお前の怖がる死さへあのビショップのように樂々と打勝てる。人間性といふ美名の下にお前はお前の皮相のもの丶跋扈を許してはいないか。お前の眞の欲求を何故聽かぬのだ。

自分の高い魂は自分の最愛惜する肉體を最極端な方法を取つて鞭打ち、辱め粉砕すべく決心した。自分は畢死の力で地から跳ね上つた。自分は絲目の切れた凧のように宙と宇の間を横飛びに飛んだ。地に落ちかゝると片足で地のものを蹴る。一蹴りはアルプスの頂を蹴り、一蹴りはクレマンソーの頭を蹴り、次の一蹴りはドバー海峽の渡船を蹴り、次の一蹴りは大西洋の流氷を蹴り、米國は紐育のボードビルの舞台へ轉げ込んだ。

舞臺では丁度ヂヤズバンドの曲彈きをやつてる。大らつぱが自動車の鼻聲のような音を立てゝる。自分は兩手を揚げて奏樂を停めた。奏樂はぴたりと停まる。自分は徐に自分の肉體を刄もので縱に二つに割りそれを觀音びらきにして中の臓もつを見物に見せた。そして言つた。

『この人を見よ』

嘗て坐禪に熱中して居た時、師家から眠る時は眠りの三昧に入るのが佛だ。夢をみるのは眠りでないと教へられた。夢は頻りにみる性分だがその爲め輕蔑して覺めても思ひ出さうとしな

い。従つて夢で覺ゑて居るものは一つもない。但、ちやんと覺めて居て現實の中にしつかり坐つた意義を持ち、机の前に正身端坐して一生懸命になつて。夢を夢むのは大好きである。

取りとめなき夢の話

馬場孤蝶

（一）

夢に就ては、フロイドなどの詳しい研究があるよしであるが、さういふ科學的な書物は讀む機會がこれまで一向ないので、殘念ながらこゝではさういふ科學的なことに關しては何も書くことはできない。唯記憶をたどつて、漫語めいたものを書くだけのことである。

隨分途方もない夢を見るやうにも思ふのだが、よく考へれば、さういふ夢であつても、吾々の平常の考と何等かの關係があるのであらうから、さういふ夢をあら方は覺えてゐて、あとで一應は考へてみるのも面白からうとは思ひはするものゝ、近頃になつては、腦力が衰えたせえであらうと思ふのだが、夢を覺えてゐることなどは、とてもできなくなつた。

最近はそれほどでもないが、よくうなされたものであるのだが、人に呼び起されるか、自分の聲で目がさめるかしたその時だけは、夢を確に覺えてゐるのだが、それからまた眠つて朝になるといふと、ゆふべうなされたといふ記憶は確にあつても、その夢が何ういふのであつたかとなると、少しも記憶がない。若い時分はそんなことはなくつて、夢は皆覺えて居ることができたのであつたのだから、何うも、此頃のやうに夢を覺えてゐ

られないのは、甚だ口惜しいが、最早心が老境に入つてしまつたものと諦めるより外はない。

故に、こゝに書く僕自身の夢の話は少くとも、三四年前の話であることを承知してゐて貰らひたい。

夢は空想の意味、計畫の意味で、未來に對する企畫といふやうな意味にも用ゐられるのであるのに、吾々老朽の徒は、夢の話でさへ、過去の物語になるのは、まことにもつて、殘念の極みである。

（二）

もう二十八九年前のことであるが、鹿子木孟郎君と一緒に彥根中學の教師をしてゐた時分に、鹿子木君が或る時、

『わたしは時々空を飛ぶ夢を見ますが、あなたはさういふ夢を見ませんか。それは實に心持よく空を飛ぶんです』

と、話されたけれども、僕はその時分までそんな夢を見た覺えがなかつたので、さういふ夢を見たことはないと答へたのであつたが、四五年前からは、時々空を飛ぶ夢を見だした。鹿子木君のは、何れだけ高く飛ぶのであつたのか聞かなかつたが、僕のは、そんなに高く飛ぶのではない。地上二三尺、精々五六尺のところを平にスウツと眞直ぐに飛ぶのだ。上の方へ向つて鳥のやうに飛び上つて行く夢をみたことは、一度もない。

これは、鹿子木君と夢の話をした記憶が僕の心のうちに殘つてゐて、それで近頃になつて、俺も飛ぶ夢をみてみたいものだといふ心持が知らず〳〵のうち心の何處かに起つて、それでさういふ飛ぶ夢を見るやうになつたものか、何うか、自分ではいづれとも判定し兼ねる。

夢は、欲望と恐懼から來るといふのだが、僕の父は

『人にひどく負ける夢を見るうちは宜しいが、勝つ夢ばかり見るやうになつては、わざはおしまひだ』

とよく云つたが、實際に勝つことができなくなつて、勝ちたいと思ふ欲望が强くなつて、其所で夢のなかだけで勝つて、聊か心が慰められるといふわけなのであらう。これは金を拾ふ夢を見る心理と同じであらう。

僕自身にもさういふ夢の記憶は少しある。

欲望から來る夢の最も顯著な例は、死んだ人が死んだのではなくして何うかして生きてゐるのを見る夢である。僕はよく亡くなつた父を何處か思ひもかけぬやうなところで見て、

『おとつさんは死んだ筈なんだが、まアかうして生きてゐて、ほんとに結構だ』

と思つて、ひどく安心する夢を幾たびも見たことがある。母に就ても同じ夢を見た筈であるのだが、その記憶は明確でない。

三十歳位な時分に引いた弓が、まだ保存してあるのだが、もう二十七年程も弓を握つたことのない僕には、それ等の七分近くの弓の引ける氣遣ひはないのだが、さういふ弓を心持ちよく射ることができて、非常に愉快に思ふ夢を近頃になつて度々見た。

死んだ師匠の稽古場が場所は變つて居るがやはりチヤンと殘つてゐて、そこで昔のやうに強い弓をやす〱と射る夢なのだ。師匠の姿も、そのほかの人の姿も、さういふ夢のなかには出て來なかつたやうに思ふ。いや、一度位は師匠の稽古場ではない場所で弓を射た夢もあると思ふ。それから、その射場なのだが、池だの、藪だのゝあるところにもうけられてゐるものを見たことがある。思ふにこれは昔矢來倶樂部で弓の會のあつた時の記憶などが心の奥からよみがへつて來たものであらう。

(三)

吉夢の種類を擧げた言葉に

『一、葬禮に、二、かつたい云々』

といふのがあるさうなんだが、死人を夢に見れば、金が手に入るといふことを聞いてからのことであらうと思ふのだが、少年の時分うちの使ひなどで金を受け取りに行く前夜になどは、よく死人とか、人の殺されるところとかをよく夢に見たものであつた。これは、死人の夢が吉夢だと聞いたのと、金受取りの使ひに出されたことが推定し得られるのであつたのと一緒になつて、さういふ夢を見るのであつたことは明である。

自分で見た夢のことは大凡先づそんなものである。平凡な頭の僕などは夢まで平凡であつて、まことに恥ぢ入る次第

だ。

これも古いことなんだが、『ノオス・アメリカン・レヴィユウ』であつたかと思ふのだが、夢に關する論文を讀んだことがある。

よく、夢のなかで誰だか知らぬ人を見て、それから後で同じ實際の人に逢つたとか、或は見も知らぬ或る景色を夢に見て、それから何年か經つて某所へ行くと、それが夢で見た景色と同一であつたとかいふことをいふのだが、これは記憶の遺傳といふことで說明し得られる。

記憶も遺傳するものだ。その顯著な例は動物のふるまひである。牛馬などが自然と毒なものを食はぬとか、水を恐れるとかいふやうなことは、記憶の遺傳によるのである。即ち、その牛なり、馬なりの祖先に當るものゝ何れかが、その毒を食つて苦しんだことがあつたとか、水に落ちてひどく困まつたことがあつたとかで、その當の牛なり馬なりの記憶がその子孫へ遺傳して行つて、自然と毒になるものや、水を避けることになるのである。動物の本能なるものは記憶の遺傳に外ならぬのだ。

所で、人間にも同じやうな記憶の遺傳はある。前記の景色などの場合を取つて云へば、それを夢で見たその當人こそそれまではその景色を實地に見たことはなかつたのだらうけれども、その人の父母か、祖父母か、曾祖父母か、祖先のうちの誰かがその景色を見たことがあつて、その記憶が子孫に遺傳して居て、謂はば、さういふ潜在的記憶が子孫の睡眠中に意識界へ浮び出て來たといふわけであるのだ。

大體そんなやうな論旨であつたと思ふ。

（四）

夢を見て現實と思つてしまう滑稽な實例が、時々新聞に表はれる。

唯今強盜がはひりましたと云つて、交番へ駈け込む者がある。巡査が直ぐ飛んで行く。何うもそれらしい形跡がない。よく〳〵訴へ出た當人に聞き訊してゐるうちに、強盜のはひつたといふのはその者の夢であつたと云ふことが分つた。

此んなのは、極めて單純な思ひ違ひであつて、當人にも直ぐ

夢だといふことが飲み込めるのであるが、もう少しく複雑に夢と現實とが錯綜すると、當人は現實のこれ〳〵のことがあつたのだから、夢ではないといふ風に、夢の部分までも現實にしてしまうのである。

僕等の月々催す泊鷗會で、或る時長谷川如是閑君が

『道に沿うたところに窓があつて、それが何時も氣になつてゐたのだが、或る晩、その部屋に寢てゐると、窓から眞つ黑い手がニユツと入つて來た。それを力一杯ギユツと掴んだので、ハツと眼が覺めたが、見ると、自分で自分の手をギユツと掴んでゐた』

と云ふやうな話をしたので、

『成る程ねえ、さういふ場合頭の惡るい者だと、さういふ夢が現實のやうに思はれだして、化物の手とか鬼の手とかが、窓から出るなどと實際思ふやうになるんだね』

と、僕は云つて、僕の聞いた夢と現實とをこんがらかして、全體を現實だと思つてゐる者の話をした。

高知市の南は鏡川といふ可なり河幅のある川で劃られてゐて、今は假橋になつてゐるが、僕の話の時分即ち明治二十四五年頃には其所に天神橋といふ可なり立派な木橋がかゝつてゐた。その橋から下流へ向けて、河べりの二三軒目に吉岡といふ高知教會の牧師が住んでゐる。その東か西かの隣りに若い夫婦者が住んでゐたのが、妻が病死したので、その葬式を終つた晩、若い夫は淋しく獨り寢てゐると、時計がチン、チンと二つ打つた、それから一寸とすると、何時ものやうに、隣りの家の厠戸がばたりと開く音がする。若い男は『アヽ、何時ものやうに吉岡さんが淨手場へ行かれるんだナ』と思ひながら、少しうと〳〵してゐると、蒲團の裾をツン〳〵と引つ張る者がある。吃驚して眼をあけると、死んだ女房が白い葬衣のまゝで下を向いて坐つてゐる。入棺する時に、その葬衣の襟のところが縫ひ方が惡るくつて、ヘンによれ返つたやうになつてゐて氣になつたのであるが、その襟のさういふ風になつてゐるところが、その時もハツキリと眼にはいつた。勿論女房は何も云はない。ハツと思つたと共に、女房の姿は消えてしまつた。起き上がつて、戸をあけると雨がザア〳〵降つてゐる。あくる朝にな

つて隣りの牧師に、ゆふべ二時少し過ぎに便所へ行つたかときくと、確に行つたといふ答であつたので、その若い男は確にその晩女房の幽靈を見たと信じてゐる。

　その若い男には、夢と現實とのつながり目が判然と思ひ分け得られないので、死んだ妻の姿を見たのが夢であるとは何うしても思へなかつたのであらう。

（五）

　大分精神に異狀のあるらしく見える者の話なので、全部を普通の夢として取り扱うわけには行かぬであらうが、夢が餘程働いてゐるには相違ない話が、蜀山人の『一話一言』中にある。『四谷大番町平岡氏奴僕怪事』といふ記錄がそれである。事件は寛政十一年三月下旬から始まつたことだとある。

　小普請組平岡鉀太郎仲間吉平といふ者が、三月二十二日に主人の使ひに出て、途中で、雨のなかで十七八の美しい女に逢つて、夫婦約束をなし、毎夜八つを打つと、その女が吉平の長屋へ通つて來だした。吉平のいふのでは、かけがねをかけて締めて置いた戸がひとりでにすら／＼とあいて、女が入つて來るといふのであつた。

『手を出し候と、忽ち二三尺も飛び退き、手を引き候へば元の所へ參り候、行燈ともし置き候へば參り申さず消し置候へばもとの如く參り申し候。さりながら、衣服の縞柄、顏色等こと／＼く見え分り申し候』

と吉平は物語つたといふのだ。

　それで、平岡の親類の家來榎本久次といふものが、實否を見とどけることになつた。

『親類ども家來榎本久次と申す者、何卒見糺し度由申し聞け候に付、召連れ歸り、吉平傍へ臥らせ候ところ、案の如く丑滿頃吉平殊の外うなされ、大聲上げ候に付、何事やらんと存じ、吉平呼び起し候ところ、一向に心附き申さず候故、火を打ち點け、行燈をともし候ところ、吉平は惣身大汗にて居り候故、水を呑ませ、漸々正氣づき申し候故、いかが致し候故と尋ね候へば、惜き事をなされ候唯今例の女子戸を明け、上り口まで參り候ものを、餘り御騷ぎなされ候故、早々女子は

歸り申し候と溜息をついて咄し申し候故、何時も女子參り候節は左樣哉と承り候ところ、吉平申し候は、何時も女子戸を開け候と慄然と寒氣立ち、何か心ぐるしく存じ候へども、女子傍へ參り候と、こわき事も忘れ、それよりは常の通りの出咄し申し候。それより又々燈火を消し臥し候ところ、半時も過ぎ候と存じ候節、亦々吉平殊の外うなされ、大聲にて泣き申し候故、變ぞと存じ、隱し置候一腰にて切り拂らひ候ところ、何か猫程の黑き物、上り口より飛び下り、緣下へ逃げ行き申し候故、明りを點け見候へば、上り口に、唯今これ無き紺地に菖蒲皮染め候手拭落しこれあり候、吉平呼び起し、如何哉と承はり候ところ、其手拭は一昨夜私手拭を借し候やうに申し候故貸し遣はし候手拭に相違なき由申し聞け候、尤も今宵女子參り候節、肩に右之手拭をかけ居り候由。女子參り候節は戸を開け候由吉平は申し候へども、私は一向臥り申さず居候ところ、戸は明き候儀は決して御座無く候、兎角仕り候うち、七つの鐘打ち候故怪女も參り申さず候』

それで平岡からの届書の末尾は左の如くなつてゐる。

『吉平事……中々本心には相成るまじく存じ候間、四月二十日に暇差遣はし申し候……朝請人方へ下げ遣はし候其晝頃より、請人方を罷り出で、一向行衞相知れ申さゞる由、請人申し聞け候』

○

明治三十一年中のことだと思ふのだが、Kといふ藥劑師が齋藤緑雨に、

『わたしのあの女が「あたしのおとつさんが落ちぶれて車挽きになつて、あなたを乘せて此の店先きへ挽いて來た夢を見ました」と、わたしに云ひましたよ』といふと、緑雨はニヤ〳〵笑ひながら、

『夢は女郎（ぢよろう）の疲れといふんだね』

此れは緑雨自身隨筆のなかへ書いてゐる。

○

夢に關する故事、小說、劇などゝいふやうなものを擧げることになれば、優に一冊の書をなすに足るであらう。

此所では、唯ちよつと思ひついただけを書くにとゞめた。

（をはり）

時評

「國辱公債」の成立

山川均

議會に於ける政府の答辯には、よく意見の相異といふ言葉がある。それは意見の相異である。之でおしまいである。盲人が象を撫でゝ見て、象は壁のようなものだといふ。意見の相異である。吾々は之を如何ともすることは出來ぬ。

この意見の相異のでうちで、近頃桁を外した大きなものは、例の五億五千萬圓の外債である。倫敦では即日正午に賣り切れた。紐育でも三時間で賣り切れた。大入り札止めの早いことは、慥かに興行の成功した一つの兆候に相違ない。そこで今度の外債は、この意味に於て、慥かに成功したものである。殊に勝田藏相の話を聞くと、外債の募集が大々的の成功であることは、一點の疑ひがないように思はれる。

けれどもこゝが意見の相異である。天下の盲人が、擧つて象は壁の如しと主張するのを如何ともなし難いように、天下の識者が擧つて外債の失敗を呼ぶのを、勝田藏相は如何ともすることが出來ぬ。それは意見の相異だからである。

今度の外債を失敗と認める人々の第一の理由は、利率の高いといふことである。そして利率の高いといふことは、何と云つても爭はれぬ事實である。尤も最近一年間に倫敦及び紐育市場で成功したキユバ、蘭領東印度、瑞西、ノルウエー、芬蘭、アルゼンチン其他の公債のうちで最も利率の高かつた墺國公債よりも、今度の外債は利率がやゝ安い（實際の利廻りは墺國債同樣、八分にあるといふ説もある）のは、勝田藏相によると募債

の大成功であつて、反對者によると、日本の財政的信用が忽ちにして三等國以下に落ちた『國辱公債』である。そして之も亦た、要するに意見の相異である。

政府の募債政策が大成功であつたか、大失敗だつたかに就てこそ、斯ように意見の相異がある。そして恐らくは國民の大多數は、その何れを信用してよいかを知らぬ。けれども、こゝに何人の間にも意見の相異を許さぬ事實が一つある。即ち清浦內閣といふ後見人のお伯父さんが、何にも知らぬ未成年者たる國民の名によつて、國民の實印をぺつたりと捺して、五億五千萬圓といふ高利の金を借りたといふことである。そして此の負債の義務を負ふものは、後見人のお伯父さんでもなければ、その番頭でもなくて、何にも知らぬ國民である。

この親切なお伯父さんと番頭とは、被後見者の爲に、此金をどんなに使ふだらう。政府の云ふところによると、其內三億五千萬圓は、來年で期限の來る英貨公債の借換に充て、其の餘りは復興費の財源に充てると云ふことである。そして勝田藏相の話では、その復興の費用も內地で必要なものは、一時國庫剩餘金その他で振替へるから、急いで借金を內地に取寄せる必要はないと云ふことである。然してそれほど急がぬ外債の成立を、何故にそれほど急いだか。そこで早くも、それは總選擧の費用を彈ち出すためだつたと云ふものがある。

若し外債の殘額一億二三千萬圓が在外正貨として、貿易の決濟にのみ充當せられるとしたならば、日本の經濟界には──勝田藏相の聲明のように──大した影響を與へぬに相違ない。けれどもそれでは勝田藏相の積極政策は、一體どうして實現されるだらう。

兎にも角にも、政府は今、自由に使へる五億に近い現金（英債償還基金は別に準備があるのだから）を握つてゐる。そして勝田藏相の積極政策の約束が、清浦內閣の空手形濫發の一つでない限りは、どの道この借金は、一部の資本家の要求に應じて（建築及び商工資金の融通三億圓は別として）不健全な好景氣を煽るために使はるゝに相違ない。そしてこの空景氣の夢が醒めた時、高利の借金と其の利子だけが、確かな現實として殘るだらう。

農務省の獨立

人材が欠乏で困るといふこともあるが、相變らず日本の政治界は多士濟々で、大抵の內閣は、人材が有り餘つて難産する。現に清浦內閣の如きも、大臣候補者が一人餘つた爲めに、組閣

が一日おくれたといふことである。農務を獨立の一省とすることは、この方面にも多少の効用がある。

況んや純粹に政務の上から見て、農務省の獨立には、原則の上から必ずしも反對すべき理由はない。獨り農務省ばかりでなく、必要に應じて、勞働省も獨立せしむべしである。社會省も獨立せしむべしである。

然しながら農務省の獨立には、國民經濟乃至は人物經濟の上からばかりでなく、別に重要な意識がある。

最近の世界に著しい現象は『國民思想の善導』と共に、『農村振興』が當面の問題となつたことである。先づ政友本黨では、農村振興促進會なるものを設け、農務省の獨立以下四つの實行案を決議した。憲政會では農村振興協議會を開き、之も同じく農務省の獨立以下、五項の決議をした。政友會でも負けては居らず、總選擧の政綱のうちに特に農村振興の一項を設け、之は聊か出し後くれた埋め合せとあつてか中味もたつぷりと、地租委讓の一枚看板は別として農務省の獨立以下、十一ケ條の政策を決定した。

斯ように農務省の獨立は、農村振興の色々の名案のうちの一つに過ぎないが、しかも農村問題そのものゝ根底には、少しも觸れてゐないと云ふ點でも、代表的の農村振興策であり、豫算さへあれば直ぐ有形の實績を擧げることが出來、しかも商工資本家階級の利害と直接扞格せぬといふ點でも、代表的農村振興策である。

上半身は財閥大資本家黨に變形しつゝ、下半身はまだ地主黨たる水陸兩棲的な既成政黨によつて、この徳用向きの農村振興策が、爭ふて選擧の題目のうちに加へられたのは、固より不思議はない。そこでいよ〳〵政府は、農務省の獨立を決行すると云ひ、中には責任支出で遣つけようと云ふ者すらもある。よくよく切迫した問題と見える。

之は慥かに、近來に於ける地主階級の勝利であつて、既成政黨が揃ひも揃ふて、地主階級の御機嫌取りに肝膽を碎いてゐるのは、地主の政治勢力がまだなか〳〵侮り難きことを示したものである。少くとも既成政黨のうちには、地主階級の支持なくしては、議院に現在の頭數を揃へ得るものでないことを示してゐる。

既成政黨のうちには、純粹な商工資本家黨として、地主の利害と正面から鬪ひ得るものが無いと云ふことは、之を反面から云へば、地主階級の利害は、今日は尚ほ既成政黨によつて、財閥や、大資本や、一般商工資本と一緒に代表せられて居るものであつて、言葉を換へて云へば、地主階級は獨立の一階級とし

て、政治的に組織せられて居らぬと云ふことを意味してゐる。
日本の資本主義的發達に於ける最近の著しい事實は、有産階級内部の利害が漸次に分化して、商工資本と地主階級との利害が、明白に對立して來たことである。この事實は一方には、實業同志會の如き運動を誘導した形勢となつて現はれ、他方には、農民（精密に地主階級）の獨立した政治運動を要求する叫びとなつて現はれてゐる。

地主階級の利害は、最早やこれまでのやうに、既成政黨によつて、財閥や商工資本と一緒に代表せられたのでは充分でないそして一方には、自己の脚下から頭を擡げて來る小作人階級の鋭鋒を外に轉ぜしめるため彼等は農村對都會の利害の對立を强調し、農村を結束して商工資本に當る必要がある。

斯くて地主は、既成政黨に背反しようとする。けれども既成政黨は、地主階級の支持なくしては立ち行かぬ。そこで農村は振興しなければならぬ!。農務省は獨立しなければならぬ!。

護憲三派の運動

『護憲倒閣』の叫び、『特權階級政治打破』のおさけびは、今や**全日本の津々浦々にまで響き渡つてゐる**――少くとも響き渡つてゐる筈になつてゐる。私は決して、護憲三派の運動が、謂ゆる政黨屋の一幕芝居であるといふ理由を以つて、嘲笑し去らうとする者ではない、寧ろ私は全日本の津々浦々まで、國民がこの響に應じて起たないことを不思議とする者である。

清浦内閣は如何に辯解したところで、貴族階級の政治的野心のうちから生れた特權階級の内閣であることは爭はれぬ。そして日本の政治的形勢を展開せしめるためには、清浦内閣の倒潰は差當りの必要である。そして之には恐らく何人といへども――清浦内閣が圓滿乃至は不圓滿に辭職をすれば、一等行儀をよくして待つてゐたものにお鉢が廻つて來ると考へてゐる人々を除く何人といへども――異論がない。この意味に於ては、吾々も亦た『護憲倒閣』論者である。

然しながら護憲三派の運動は、吾々に何物を約束するだらう總選擧の結果、政府黨が絶對多數を占めることは先づ望みがない。そして清浦内閣に、兩度の解散をやる勇氣があらうとも思はれぬ。清浦内閣は倒潰する。そして其跡には、三派聯立の新内閣が芽出度く成立したとする。一寸軌道を踏み外づした日本の氣紛れな憲政は、難なく『常道』に引き歸された。芽出度し／＼である。之でおしまひである。之が護憲運動の大團圓である。

けれども清浦內閣の倒潰した跡に出來上つたものは、特權階級の內閣に代つた他の特權階級の內閣である。たゞ違ふたところは、中世紀的の特權階級が、近代的の特權階級──資本主義の下に於ける代表的の特權階級──に變つたゞけである。

現在の旣成政黨はいづれも皆、國稅十圓の選擧資格を基礎とした政治勢力の分布を土臺として、その上に築かれてゐる政黨である。納稅資格は三圓に低下せられたが、この變化は、政黨の分野の上には、まだ充分に作用を現はしてゐなかつた。よしこの變化が充分の作用を現はしても、それは勿論、政黨の分野上のに、深刻な影響を與へるが如き種類のものではない。要するに一切の旣成政黨は、有產階級の政黨であつて、その政黨の內閣は、有產階級の內閣である。有爵階級の內閣が特權階級の內閣であるやうに、有產階級の內閣もまた特權階級の內閣である。唯だ異るところは、有爵階級は中世紀的の特權階級であつて、有產階級は近代的の物權階級である。

然らば新式の有產特權階級が、舊式の有爵の特權階級に代はつて政權の主人となることは、無意義であらうか。必ずしもそうでない。日本の無產階級の政治的成熟を妨げてゐるものは階級と階級との間の政治努力の分布が、まだはつきりとして居らぬことである。そして政治的勢力の分布が明かでない理由の一つは新興有產階級の政治勢力が、中世紀的な政治勢力と苟合したゝめである。

そこで有產特權階級の政權が、事實上に於てばかりでなく、政治の形式の上でも確立され、日本の政治がいよ〳〵『憲政の常道』といふ、資本主義的軌道を走るやうになることは、日本の政治の分野が、著しく單純となり明白となることを意味してゐる。言葉を換へて云へば、それは有產階級の政治勢力と無產階級の政治勢力とが、一直線の陣形を造つて相對峙する形勢に向つて、少くとも歩を轉ずるものである。

清浦內閣の倒潰政黨內閣の出現とは、旣成政黨に取つては、護憲運動の終局であつて、民衆に取つては、唯だその第一歩である。

英國勞働黨內閣の小手調べ

戰爭で荒れ果てたヨーロッパの政治的荒原野の間に、色彩の鮮やかな三つの異形の花が、期せずして一時に咲き揃ふた。言ふまでもなく、其の一つはロシアの勞農政治であり、今一つは、イタリーの反動主義の獨裁政治であり、そしてもう一つは英國に於ける勞働黨內閣の出現である。この三つの代表的な政

治の類型、この三つの異つた政治上の經驗が時を同うして吾々の眼前に開展せられてゐることは、確かに政治史上の壯觀と云つてよい。

勞働黨内閣が成立して、尙ほ一と月餘りにしかならぬ。從つて其の政治は、まだ批判にのぼさるべき時期には達して居らぬ之に反して、勞働黨の政綱と政策とを批評しようとする者に取つては、それは必ずしも、勞働黨内閣の出現を待つまでもない何故ならば勞働黨は『國體を擁護し國憲を恪守し』たり、『國際の信義を重んじ』たり、『教育を振作し』たり、乃至は『產業を奬め』『農村を興し』『貿易を盛にする』ことを目的として、『憲政の濟美に努め』るか、實際の政綱と政策とに至つては、いよ〳〵内閣が出來上つて、問題にぶつかつて見ねば自分でも分らぬ政黨とは事違ひ、善いにもせよ惡いにもせよ、一定の政綱と政策を持ち、一定の政綱と政策とのためにある政黨だからである。

そこで勞働黨の政治が吾々の興味を惹くのは、その政綱と政策の如何ではなくて、これ等の政綱と政策とが、如何にして實行に移されるかと云ふことである。

尤も勞働内閣の政治的手腕は、成立後一と月餘りの小手調べにも、確かに水際立つた冴えを見せてゐることは敵も味方も均しく認めるところである。保守黨内閣の命數の定まつた總選擧後になつてからでも、勞働黨に果して、單獨で内閣を組織する準備があるかを疑ふてゐるものすらもある。ところがその勞働黨は、二時間内に内閣の組織を終つて世界的の新記錄を作つた。そして一週間の後に、は飯のあとで紅茶をのむほど無雜作に、當り前の事として、平氣な顏をして勞農ロシアを正式に承認した。露國承認の止むべからざることゝ、そして望ましいことゝは、ロイド・ヂョーヂといへど充分に知つてゐた。彼は幾度びか瀬踏みをし、幾度びか機會を捉へようとした。勞働黨は唯だ、この止むべからざる事をやつたゞけである。たゞ異るところは、ロイド・ヂョーヂと自由黨とは、この止むべからざることを、止むを得ず遣り得なかつたが、勞働黨は止むべからざる事を、止むべからざる事として卒直に遣つて除けたところにある。

勞働黨内閣の露國承認の斷行は、ヨーロッパの政局に新しい基調をおいたものである。そして英國の明白な態度は、遠からずして佛國に反映し、佛國の對露及び對獨政策の轉換を促進するに相違ない。勞働黨の『素人外交』は、ヨーロッパの國際政局に對する指導的の力を持つと云つてよい。

勞働黨内閣の遣り口は、對外的にも對内的にも、從來の内閣の遣り口に較べて、際立つて卒直簡明な氣持ちのよいところが

ある。この點では、勞働黨の政治はその程度こそ違へ、ロシア無産階級政治と共通の特徴を持つてゐる。そして之はやがて、その立脚するところの基礎が純一であり、その代表するところの利害が純一なといふ事實に歸着するものである。勞働黨には小ブルジョア的の要素が侵潤してゐることは事實であつて、勞働黨自身さへも、この弊害に氣附いた程である。けれども其れにも拘らず、保守黨や自由黨のような純ブルジョアの政黨に較べると、勞働黨は遙かに、純一な階級を代表して居ることは爭はれぬ事實であつて、之がやがて其の政治を卒直、大膽、簡明にするものである。

　勞働黨内閣の出處進退も、恐らくは其の如く卒直簡明である勞働黨内閣は、何と云つても少數黨の内閣であるから、その政策の遂行のためには、多かれ少かれ妥協を免かれぬ。けれども勞働黨は單に内閣を維持するために、重大な妥協をせぬことだけは確かである。二時間内に現はれた勞働黨内閣は、ブルジョア政黨との間に重大な利害の衝突を見た瞬間に――マクドナルドが聲明したように――二時間を待たずして消失するだらう。けれども英國勞働黨が、議會の絶對多數を擁して、第二次の内閣を組織する日のあることは疑ひがない。勞働黨の政治がほんとに批判されるのは、今日ではなくて今日以後である。

イタリーの政治は、反動主義の獨裁政治が、どの程度まで、崩潰せんとする資本主義を支え得るかを試驗してゐるものである。ロシアの政治は、資本主義的發達の幼稚な國に於ける無産階級の獨裁政治が、どの程度まで、資本主義的發達を支配し得るかを試驗してゐるのである。そして英國に於ける勞働黨の政治の將來は、資本主義が爛熟期に達した國に於て、無産階級は政治上のデモクラシーの範圍内に於て、どの程度まで資本主義から社會主義への推移を實現し得るかを試驗しようとするものである。

ある。この點では、勞働黨の政治はその程度こそ違へ、ロシア無産階級政治と共通の特徴を持つてゐる。そして之はやがて、その立脚するところの基礎が純一であり、その代表するところの利害が純一なといふ事實に歸着するものである。勞働黨には小ブルジョア的の要素が侵潤してゐることは事實であつて、勞働黨自身さへも、この弊害に氣附いた程である。けれども其れにも拘らず、保守黨や自由黨のような純ブルジョアの政黨に較べると、勞働黨は遙かに、純一な階級を代表して居ることは爭はれぬ事實であつて、之がやがて其の政治を卒直、大膽、簡明にするものである。

勞働黨内閣の出處進退も、恐らくは其の如く卒直簡明である勞働黨内閣は、何と云つても少數黨の内閣であるから、その政策の遂行のためには、多かれ少かれ妥協を免かれぬ。けれども勞働黨は單に内閣を維持するために、重大な妥協をせぬことだけは確かである。二時間内に現はれた勞働黨内閣は、ブルジョア政黨との間に重大な利害の衝突を見た瞬間に――マクドナルドが聲明したように――二時間を待たずして消失するだらう。けれども英國勞働黨が、議會の絶對多數を擁して、第二次の内閣を組織する日のあることは疑ひがない。勞働黨の政治がほんとに批判されるのは、今日ではなくて今日以後である。

イタリーの政治は、反動主義の獨裁政治が、どの程度まで、崩潰せんとする資本主義を支え得るかを試験してゐるものである。ロシアの政治は、資本主義的發達の幼稚な國に於ける無産階級の獨裁政治が、どの程度まで、資本主義的發達を支配し得るかを試験してゐるのである。そして英國に於ける勞働黨の政治の將來は、資本主義が爛熟期に達した國に於て、無産階級は政治上のデモクラシーの範圍内に於て、どの程度まで資本主義から社會主義への推移を實現し得るかを試験しようとするものである。

法學博士　末弘嚴太郎著

噓の効用

定價貳圓六拾錢

送料十九錢

四六判上製

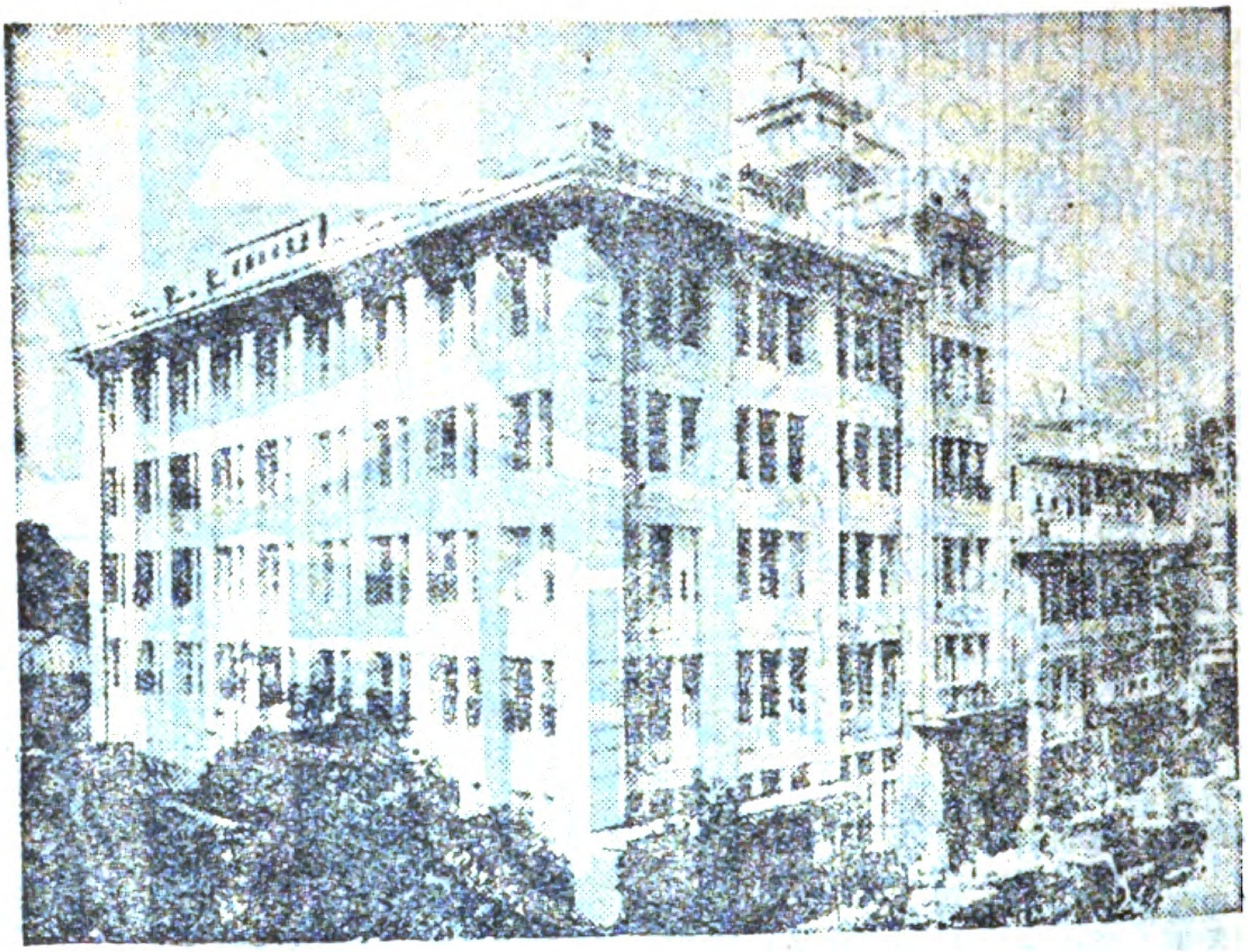
第三十版

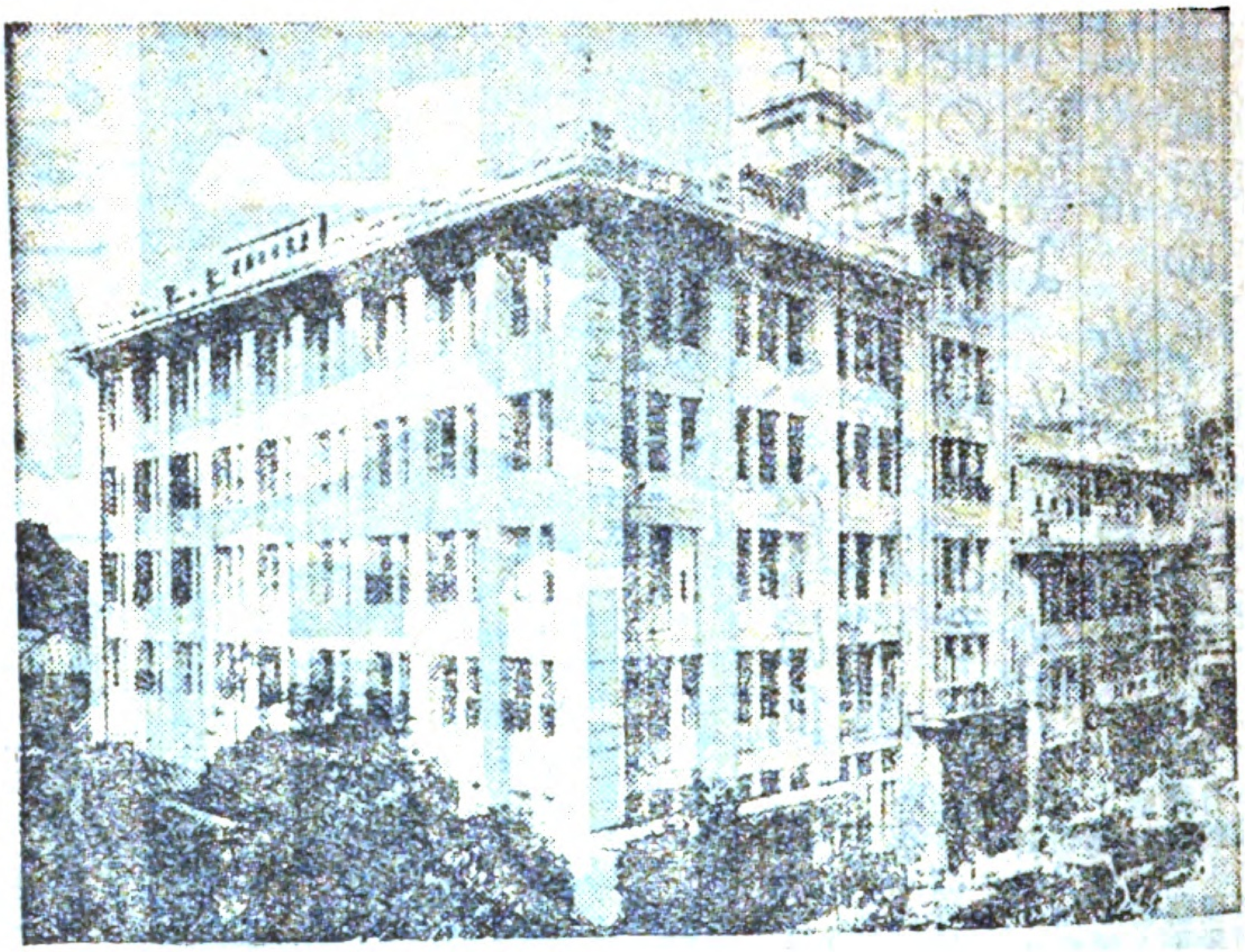
燎原の火の如く讀書界を風靡しつゝある本書を見よ。本書は實に新社會の要求もだし難くして誕生した一書です。若き人々は皆本書を稱して「國民讀本」と賞讚しておる。本書は現代社會相を批判する基本知識であり、尚一歩進んだ立場に於て社會へ乘り出す人々の羅針盤である。紛糾せる政局に當面せる國民の必讀の書です。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二





改造四月特別號創作欄



三人

島崎藤村

松本から先には山邊行きの乘合自働車があつたが、旅に來た實子が松本で汽車から降りた時は、連れの都合やら何やらで、ちやうどその停車場前から出る一臺の乘合自働車には間に合はなかつた。しばらく彼女は停車場附近で時を送らねばならなかつた。

急ぐ旅でもなかつた。その日のうちにゆつくり山邊まで行けばよかつた。この山邊行きには、松本の友達といふ好い案内者があつて、實子が東京を發つて來る日取りもかねて手紙で打合せがしてあつたし、山邊へ着いてからの部屋のことまでその友達に頼んであつた。實子は汽車で鹽尻まで乘つて來ると、松本の友達がわざ／＼そこまで出迎へて呉れて、鹽尻からはその友達と一緒に乘つて來た。友達は桃子と言つて、もう三年ばかりもこの土地の女學校の教師をして居る。こんな好い案内者があつた上に、松本の停車場にはその友達の友達が實子の着くのを待つて居て呉れた。

停車場まで來て呉れた友達の友達といふのは得子と言つて、矢張この土地の女學校に教へて居た。停車場の構内は一時混雜する時で、その中を桃子と實子とが連立つて改札口の方へ動いて行くと、得子の方ではまだ是方を見つけないで居た。汽車から降りた客で改札口のところは込んで居たし、得子は柵の外に立つて居たし、是方から聲を掛けようにも思ふやうにはよく通じさうもなかつた。その時、桃子は、是方を探して居るらしい得子の方を見ながら自分の口元へ右の手を宛てがふやうにして、

『瓜生さん。』

と呼んだ。

この『瓜生さん』が實子をほゝゑませた。實子が舊時(むかし)ながらの明るい感じのする友達を自分の側に見つけるのも、斯ういふ時であつた。

得子は瓜生、桃子は中川、實子は姓を松居と言つて、この三人は互ひに年齢の違ふやうに、學生時代の組もちがつて居たが、ずつと以前には東京の方で同じ學校へ通つて居た時代もあつた。その同窓のよしみから言つても、今度實子が旅に出掛けて來たのを機會に、三人の姉妹のやうな人達がしばらくぶりで一緒になつたのである。

得子は何か一ぱい入れてあるやうな手提げ袋と、質素な洋傘とを手にしたまゝ、桃子に言つた。

『わたし行つて見て來ませう。自働車の出るのがまだあるかも知れません。』

得子は三人の中でも一番年長で、さすがに姉らしいところがあつた。この人のことは、かねて實子も東京の方でよく噂さに聞いて居て、學校時代の記憶を通し、その後の桃子からの消息などを通して、いろ〳〵にこの人のことを想像して來たのであつた。

土地の變化、氣候の變化による救ひを心あてに、實子が病後の保養を思立つて來たのは、桃子の切な勸めもあつたからで。さういふ彼女は、實に弱く生れついた婦人の一人であつた。山邊の溫泉が彼女のやうな人にもきつと好からうといふことは、桃子の松本から一度上京した時にその話があつて、その頃にもう桃子は山邊の方に好い宿を見つけて居るといふことであつたし、山邊から松本の學校までゞ毎日教へに通つて居るといふ話もあつた。桃子は自分でもリヨマチの惡い身體をあの溫泉地に養つて居るところから、弱い實子のためにも手紙で再三勸めてよこした。でも、この山邊行きは實子に取つて、さう無造作に思立つて來られる旅でもなかつた。彼女は東京の家の方に居る母からも兄からも轉地の保養を勸められて來た。いよ／＼東京を發つて來る前の日には、父の居る病院まで車で出掛けて、日頃彼女が醫師として信賴する父の診察をも受けた上で、その安心から靜かに東京の家を離れて來た。飯田町の停車場までは、姉にも見送つて貰つた。この實子に取つて、得子や桃子のやうな人達と一緒に成ることが出來たのは、何と言つても心强かつた。

得子は一臺の自働車を見つけて來た。休茶屋の前まで動いて來た車の上には、他にも山邊行きの合客があつて、そこへ得子が乘り、實子が乘り、最後に桃子が大きな肥つたからだを割り込ませた時は、その自働車も一ぱいになつた。桃子は三人の中で一番年少にあたつて居たが、どちらかと言へば小造りな得子や瘠せぎすな實子に比べたら、一番立派な體格をして居た。六月の中旬のことで、山の上の空氣はひや／＼とするくらゐであつたから、實子が持つて來た旅行用の毛布を車のなかでひろげて、それをみんなの膝の上に掛けた。そして出掛けた。

この旅に來て見て、實子にはいろ／＼なことが分つた。得子と桃子との教へに通ふといふのは同じ土地でも別な女學校であることが分り、山邊の方に宿を取つて居るのは桃子ばかりでなく、得子も矢張り同じ宿にあることが分つた。松本から山邊までの間は平坦な地勢で、四方を山でとりかこんだ東〃摩の平野が車の上からひろ／＼と見渡されたが、か

ねて賓子が想像して來た地方とは全く別な眺望が行く先にひらけて居た。いかに言つても道幅は狹く、鄙びた馬車でゞもあつたら一層この道は樂しからうと思はれるやうなところを自働車で飛ばして行くのであつたから、途中で荷物を運ぶ車なぞに追ひつくと、その度に先方で車を停めては道を讓つた。行き逢ふ男や女の多くも、畠側の方へ歩みよるやうにして賓子たちの車を避けた。どうかすると車體が激しく動搖する度に、そのはづみを喰つて、賓子のからだは得子の方へ傾いたり、桃子の方へ傾いたりした。

ある石の路傍に立つところまで乘つて行つた。道はそこで二筋に分れて居た。

得子は案内顔に、

『その道を左の方へ行つて下さい。』

と不慣な運轉手に指して見せた。右、入山邊に、左、里山邊へ、とその路傍の石にしてあつた。その邊から道幅は一層狹くなつて、車はところ／＼に茂つた木立の間を進んで行つた。

『中川さんたちは、毎日この道をお通ひなさるの。』

と賓子は車の上で桃子にきいて見た。さういふ賓子は、友達が山邊から毎日松本の學校までづゝ歩いて通ふといふ話を想像して來たからで。聞いて見ると、桃子や得子の毎日通ふといふのはもつと別な近道で、その田圃中の細い近道への曲り角が今に車の上からも見えるであらうとのことであつた。

『慣れゝばそんなでもありませんよ。』と得子は言つた。『歸りはすこし草臥れます、そのかはり往きの道はなか／＼好いんですよ。』

『ほんとに、朝は好いわねえ。』

と桃子も女學生時代の言葉を出して、朝通ひの道の樂しさを實子に言つて見せた。この友達の口からは、もうすつかり松本あたりの教員生活に慣れたらしい調子と女學生時代の言葉とが混つて出て來た。

やがて三人を載せた車は村の郵便局の横手へ行つて停まつた。温泉地らしい薄濁りのした水が往來の片側をつたつて、石垣の下あたりへ流れて來て居た。それが山邊であつた。

『松尾さん、あなたはわたしと一緒の部屋でもいゝでせう。瓜生さんとも相談してゐたんですが、もし部屋が氣に入らないやうでしたら、遠慮なしにさう言つてね。どこか別のところを借りてあげてもいゝんですよ。』

こんな風に桃子は言つて、實子のために部屋のことまでいろ〳〵心配するらしい樣子を見せた。その桃子の話の中には『瓜生さん』がよく出て、いかにもあの姉らしい人に信頼して居るといふ調子にそれを實子に話し聞かせた。桃子はまた、こんなことを言つた。

『松尾さんに見せたいと思つて、花を採つて來てありますよ、えゝ、昨日は一日、瓜生さんたちと山遊びに出掛けて。』

實子がこの友達に案内されたのは、ある古い温泉宿の母屋にあたるところで、その田舍家の裏二階に桃子の借りて居る部屋があつた。この山邊の旅には、實子も多くの望みをかけて來た。友達を見ることもその一つであつたし、胸一ぱいに好い空氣を呼吸することとの出來る靜かな田舍に身を置いて養生したいといふこともその一つであつたし、東京の方にある一切の煩はしさから假令しばらくでも離れて見たいといふこともその一つであつた。偶然にも、實子は以前の同窓の學友が二人までも東京からこの山邊へ保養に來合せて居るところへ着いた。そればかりでなく、以前の學校の語學の教師で、亞米利加生れの婦人までこの温泉地の客となつて居る時で、何となく桃子たちも落つけないやうに見えた。實子はまだ旅の鞄をそこへ置いたばかりで、桃子と一緒にゆつくり語り合ふ暇もなくて居るところへ、階下からはしきりに迎へが來

た。そこは農家としても割合に廣い住居で、桃子の部屋から狹い梯子を降りて行つたところに臺所があり爐邊があり、蠶を飼ふ時の蔟が土壁によせて高く積上げてあるやうな縁側を通りぬけると、その奥の下座敷が得子の部屋になつて居た。

實子は友達に誘はれて、深い廂の下へ出て見た。前の日に桃子たちが山から採つて來たといふいろ〳〵な花は縁側から庭石の上まで一ぱいに置いてあつた。その中には高い香氣を放つ鈴蘭もあつた。桃子は花も葉もまだみづ〳〵しく萎れずにあるその鈴蘭を花束にしてもいゝほど取りあげて、自分でも眼を細くしながら嗅いで見た後、それを實子の鼻の先へも持つて行つて嗅がせた。

『松尾さんに見せたいと思つて、斯うして取つて置いたんですよ。』

それを桃子は言つて見せる――この山邊の宿では花も馳走の一つと言つた調子に。

『さう言へば、あなたの手はどうなの。』

と實子の話が友達のリョウマチのことに觸れて行くと、桃子は首を振つて、はか〴〵しい湯治の利きめも見えないで居るといふ意味を通はせた。

『山遊びがよくなかつたんでせう。どうも昨日からまたこの手がよくない。そのくせ、わたしは山遊びが好きだもんですから――』

桃子の話はこんな風に、まだ切れ〴〵にしか出て來なかつた。

同窓のよしみのあるものが五人も一緒に得子の部屋に集まつた。その中の二人は一晩泊りぐらゐで東京から來て居る話好きな人達であつた。ずつと以前には、いづれも女學生らしく笑ひ騷いだやうな朋輩が、今ではもう一ぱしな學校の先生だ。巧みに英語をあやつるやうな人も居た。斯うして集まつて見ると、白い顏は座に二人しかなかつた。實子はま

だ半分東京の方にでも居るやうに、みんなの顔を見くらべたが、近く居る人達の髪の香ひや、軽い樂しげな笑聲は六月の旅の感じに混つて、彼女の小さな胸に入り亂れた。彼女は得子に對しても、まだそれほどの親しみも持てなかつた。唯遠慮勝ちに得子の前に座つて、この友達の友達が日に燒けた顔つきを眺めたり、皿に盛つた苺に白い砂糖を添へて時節柄の馳走にとそこへ取出す手つきを眺めたりして、學校時代から頭腦の好いので評判であつた瓜生さんに、眼の前の人を思ひ比べた。寶子の眼の前には、かれこれもう三十の上を一つか二つも越した年頃の婦人が居た。東京の方に住む舊い卒業生仲間でも殊に瓜生さん贔屓なある夫人などから、寶子がよく噂を聞かされたのも、この人のことだ。その日、得子の勸めて呉れたのは松本附近の耕地で出來たといふ新しい紅い苺であつたが、それすら寶子は二つ三つ口に入れて見たばかりで、ほんとうに落ちついた氣持では味へなかつた。

翌日の午前には、二人の學友はもう山邊の宿に居なかつた。あの人達は山から採つて來た花なぞを標集用の胴に入れ、それを肩にかけて、東京の方へ向けて發つて行つた。年とつた亞米利加人の女教師も、その日のうちには山邊を引揚げて行くといふことで、その見送りのためにも桃子たちはいそがしかつた。寶子は獨り桃子の部屋に殘つて居て、友達の書棚なぞを見に行つた。書棚とは言つても、古い床の間に並んだ袋戸棚の上を清潔に取片付けて、日頃の心の糧とするやうな書物がそこに並べてある。あの友達は教育に關したものを多く集めて置いたが、その中にまじつて、ケエベル博士の小品集、それから阿部さん、和辻さんなどの著述も見える。寶子はその書棚の前から、あちこちと部屋の内を歩いて見た。よく見れば、そこは古い養蠶の道具なぞの置いてある物置部屋の隣りになつて居た。おそらく友達はこの二階に射し入る明るい靜かな光線と、裏山の松林から遠い山々なぞの眺望に滿足して、こゝを朝晩の臥起きの場處として來たのかとも思はれた。

『とても吾家のお母さんなんか、一緒に連れては來られない。』

と實子は獨りで言つて見た。都會育ちの母がこの部屋に辛抱の出來ようとも思はれなかつたからで。

實子は松尾の家に生れた二人ある未婚の姉妹のうちの妹の方にあたつて居た。二十八といふ歳を迎へるまで、弱いからだと弱い足どりとでこの世を歩きつゞけて來たといふだけでも、實子に取つては何程の眼に見えない骨折りであつたか知れなかつた。朝に、夕に、渴けば涸れ、霧に逢へば甦る草のやうなのが、彼女の小さな生命であつたのだ。暗い月日ばかりが過去には續きに續き勝ちであつた。ずつと以前に、桃子と同じ東京の學校に通つた頃――あれはもう何年前になるかと思はれるほど遠いことであるがいろ〳〵な事情から二年の終りの試驗も受けそこねて不結果に畢つた時、心から彼女の味方になつて呉れたのが、東京の方に居るある友達であつた。その友達に轉校を勸められたのが緣になつて、彼の女はある女子大學の夏子といふ人を知つた。上級の入學は許されなかつたが、それ以來、夏子とは友達になつた。實子には多勢の身内のものがあつても、沈みそうになつた時の彼女を救ひ〳〵して呉れたものは、みな友情であつた。

今は大阪の方に行つて居る夏子――あの夏子は桃子の知らない人ではあるが、あの大阪の友達との交りが特別のものと實子に思へるのは、二人して一年ばかりもある雜誌の編輯にたづさはつたといふ仕事の上の結びつきがあるからで。よく〳〵自分の未熟と拙なさとを思ふ彼女は、まだ〳〵獨りで起ち上れない子供のやうに、幾度か躊躇した後で、全く無經驗な事に當つた。彼女は大阪の友達と心を合はせて出發しようとした當時の激しい不安をまだ忘れずに居る。そんな舞臺を築いたところで思ふやうに人が集まるだらうかといふ心配があり、自分等に物が書けるだらうかといふ心配があり、それから又、假りに人も集まり物も書けたとしたところで讀者があるだらうかといふ心配もあつた。彼女と夏子とは原稿の整理や校正を引受けた上に、發送の手傳ひまでもする。骨が折れた。用事が殘つた日なぞは自分の家の方ま

で來て貰つて夏子と一緒に遲くまで働いたこともあつた。その不安を分け、心配を分け、まして遠く故鄕を離れて一人で東京に出て來て居たのがあの夏子の身體(からだ)にさはつたのだらう。ある月の雜誌の校正を彼女は病んで居る夏子の側に、その病院の一室に見るやうな日が到頭やつて來た。今まで張り切つて居た力を急に失つたやうな心細さなぞを考へる暇もなく、彼女は日々夏子の全快を念じて、自分に間に合ふだけは仕事に當らうと思ひ立つたのであつた。六月の末のこと、夏子は靜養のために歸國することゝなつて、東京には彼女だけが殘つた。その年の暑さが來る頃には雜誌の調子も整ひ、彼女もいくらか仕事に慣れて來たが、その時にはまた家に重い病人をひかへたので、秋風の立つまでは落ちつく暇といふものもなかつた。そして秋の暮れる頃には、折角の舞臺も閉ぢ、その雜誌を中心に集まつたものは各自の道に歩み出さうといふ決心に到つたのであつた。

これは實子が山邊の旅に來る前の年の暮のことだ。こんな話もしばらくぶりでの友達に聞かせたいと思ひながら待つて居ると、桃子はなか〳〵歸つて來なかつた。實子はちよつと入浴して來るつもりでその二階を降りた。石垣に添ふて樹木の間の小徑(こみち)を折れ曲つて行つたところに、古風な看板の掛つた溫泉宿がある。五軒共同の內湯は、どの溫泉宿からも廊下づたひに通へるやうになつて居て、浴槽に人の集まる時は見知らぬ婦人同志の肩と肩とが觸れ合ふほど混雜する。ちやうど實子はあまり浴客の込まない時に行つた。ぬるくはあるが心持のよい溫泉の中に長湯を樂み顏な婦人もある。リヨマチでも煩ふと見えて、人の肩にかゝりながら通つて來る年とつた婦人もある。遠く草臥れて來て山邊の宿に着いた感じは、前の日のごた〳〵した時よりも、反つて實子の心に深かつた。樂しい湯の香に身を浸して、筧のやうな細い落ち口から絕えず流れて來る溫泉の音に耳を澄した時は、漸く實子も旅の疲れを忘れた。

夕飯にはまだすこし間のある頃に、桃子は歸つて來た。實子が母屋の裏二階で一緒になつて見ると、友達は松本の停

車場まで亞米利加人の女教師を見送りに行つて來たといふ顏付だ。

『何かうれしいことでもあると見えるわねえ。』

桃子はそんな機嫌の好い調子だつた。實子はちよつと返事の仕樣に困つて、靜かに友達の顏を眺めて居ると、桃子は更に言葉を繼いで、

『だつて、大變好い顏をしてゐるぢやないの。』

と戯れた。

桃子の机上には、實子の東京土産なぞがまだそのまゝにして置いてあつた。實子は東京を出る時に母から貰つて來た菓子の袋なぞをもそこへ取出した。その中には彼女が子供の時分から好きな白い薄荷の菓子が入つて居た。めつたに甘いものもやらない方の彼女も、それだけは好きで、その口中の涼しくなるやうなやつを友達と一緒につまみながら話して居るうちに、いつの間にか桃子の方でも未知の夏子の噂なぞに耳を傾けるやうになつて行つた。

桃子は言つた。

『折角あんな好い舞臺を築きあげて置いて――惜しいツて、みんなさういつてよ。瓜生さんの學校なぞでも、あの雜誌を取つて居る人が大分ありましたつけ。』

『さう言へば、あなたからも手紙を下すつて――大變勵ましてよこして下すつたのね。』

『えゝえゝ、わたしは愛讀者の一人でしたもの。しかも月極めで、社の方から直接に送つて頂くほど熱心な讀者でしたもの。どうしてあんなに急に、あの仕事をやめておしまひなすつたの。』

『わたしたちが役に立たないからでせう。』

と答へて、實子は嘆息した。

はじめて經驗したやうな激しい不安、思ひ設けなかつた種々な困難——過ぐる日のそれらの心の記憶が今更のやうに實子の小さな胸を往來した。初めから堅い團結に乏しかつたといふことも、あるひは彼女等の弱點の一であつたらう。けれども、一つの思ひ立ちのためには、唯驀地に馳り出さうとするやうな物を企つる心から、彼女は何物かを學んで來た。その單純さから、婦人同志の親しみも生れ、團結も生れることを知つて來た。何に一つ眼に見えて成就したものもなかつたことを思ふと、彼女は桃子のやうな友達に對しても面白かつたが、兎も角も『何か爲た』といふ心持だけは殘つた。それは桃子も認めて呉れたやうである。この友達が以前にも勝る親しみをもつて彼女を迎へて呉れるといふのも、あの得子までが一緒にこの山邊の宿で毎日食事をしようといふほどの親切を見せて呉れるといふのも、そのためかと思はれた。

夕飯は溫泉宿の方から屆いて居た。宿の人が得子の部屋までづゝそれを運んで呉れるのであつた。實子が桃子と連立つて、食事のために階下へ降りて行つた時は、八十にもなる宿のお婆さんが腰を曲めながら廊下を通ふところへ行き合せた。

お婆さんは得子の部屋の前に座つて、手に持つた器物を差出しながら言つた。

『東京からお客さまがお出下すつても、何も上げるやうなものがございません。これは山邊の梅干に、それから瓜のお漬物でございますが、これでもあなた、この婆が丹精して手造りにしましたもので。瓜生先生——どうか、これを松尾さんにもお上げ下すつて。』

腰こそ曲つて居るが、この母屋の實際の監督者であるは、このお婆さんだ。實子が古い井戸端へ水でも汲みに行く

時『お危うございます』と言つて、釣瓶縄を引揚げて見せるのも、この強いお婆さんだ。

明るい桃子の部屋を見た眼で、得子の部屋を見ると、そこの扉は暗いほど深い。古い床の間の片隅によせて、得子が朝夕の友とするやうな佛教に關した書物や經典なぞが飾つてある。草庵にでも置くにふさはしい朱色な木魚、それから香爐のやうなものまで置いてある。すべてが、まだ謎のやうに實子の眼に映つた。そこは實子の勉强部屋でもあり、寢部屋でもあり、桃子や實子と集まる時の茶の間でもあつた。勝手元までが一つの部屋でもあつた。しかし實子は二階から降りて來て得子と一緒に食事に就く度に、何かしら一つづゝこの人らしい特色を見つけた。この部屋はほんとうに心持が沈ちついて好いといふ得子の話が出るのも、さういふ時だつた。『さうねえ』と沈着な調子で物を言ふのが得子の癖で、三人食事する時の飯櫃は得子と桃子の間に置いたものか、それとも得子と實子の間に置いたものかといふやうな場合に、得子はきまりで『さうねえ』と言つて、手のわるい桃子のためには得子と實子とか、替る〴〵給仕することにした。桃子はまた、どつちへ自分の茶碗を出したものかといふ顔付をして、時には得子の方へ出したり、時には實子の方へ出したりして、二人に給仕して貰ひながら食つた。

『たまに東京の方へ訪ねて行つて見ますと、ほんとに皆の顔色の惡いこと。』と得子は實子に言つた。『わたし、さう思ひますよ。お人形さんのやうに白く塗つた人の顔なぞを見ますと、深みも何もないやうな氣がしますよ。』

實子はまだうちとけて得子に話しかけることも爲し得ないで居たが、こんな言葉を聞いた後では、驚くばかり日に燒けて見える額つきまでが矢張得子らしく思はれて來た。

山邊らしい蛙の鳴聲が遠い田圃の方から部屋まで聞えて來て居た。

『蛙が鳴くわねえ。』

と桃子はその聲に誘はれたらしく言つて、食後にすこしそこいらを歩いて來ようと言出した。日はまだ暮れてしまはなかつたが、山の空氣は鋭いほどひや／＼として居た。得子は自分のからだをいたはるやうに深い肩掛に半身を包むやうにして、實子や桃子と一緒に村の裏道を歩きに出た。古い苔蒸した道祖神の石碑や、路傍の木の枝に村の人の造りつけた疱瘡神様の棚なぞのあるあたりから、田圃の間の細道を畦づたいに踏んで行くと、松本の町々の見渡されるところへ出た。あそこにも、こゝにもと、實子は遠い灯を數へて、山邊の旅に來た思ひを深くした。その時、桃子は毎日通ふ松本の學校の方角を實子に指して見せたり、得子はまた得子で、自分の生れた村のある方角を遠い山の向ふに指して見せたりした。

翌朝から實子は桃子の二階で、裏山の小鳥の聲を聞いては眼をさますやうになつた。そして學校通ひの支度する友達を自分の側に見つけるやうになつた。桃子は相變らず手がいたむと言つて、帶も自分では締めかねて居る。

『わたしの學校の校長さんが、「中川さんには木竹馬の一匹も買つて宛てがひたいやうだ」なんて――よくそんなことを言つて下さる。』

さういふ桃子の顏には、輕い苦痛の色のあらはれることもある。實子は見かねて、友達の側へ寄つた。大きな肥つたからだつきではあるが、しかも柔輭（しなやか）さを失はないやうな友達のうしろに廻つて、帶を堅く締めてやつたり、濃いお納戸色の袴の紐を結んでやつたりすると、そんな些細なことからも今迄にない親しみが湧いて來た。

『立派な體格ねえ。』

それを實子が言ふと、桃子は萎れた中にも元氣づいた樣子をして

『これで手さへわるくないと、どこも何ともないんだけれど――ほんとに、この手を切つて捨てゝしまひたいやうだ。』

と半分獨り言のやうに答へた。さういふ桃子は手を大切にして居て、實子の見て居る前で白い海手の手套を丁寧にはめて、それから松本の學校をさして出掛けた。

『あんな優しい、細いところまでよく氣のつく人だとは思はなかつた。』

こんな風に、桃子の行つてしまつた後で、實子はあの友達のことを獨りで言つて見た。

その朝から、實子は入湯後のさつぱりした氣持の時なぞに、そこいらを歩いて見る場所には事を欠かなかつた。楽しい桃の葉や、柿の葉のかげなぞが、彼女の行く先にあつた。畠の麥も熟し、田植も初まつて居る頃で、燕子花の季節も既に過ぎ去り、處女の眸を見開いたやうな野薔薇と白い清げな衣を着た卯の花とがかすかな香氣を放つ頃となつて居た。例の温泉宿から母屋への通ひ路には小高い石垣があつて、そこにも眼につく青梅が葉も實も共に六月の生氣を呼吸して居た。

ある日のことであつた。實子が友達の歸りを待つて居ると、桃子は松本の學校の方から戻つて來て、突然こんなことを言つた。

「松尾さん、あなたは齋藤さんへ嫁いた人を覺えて居て?あの人が面白い手紙を呉れてよ——「わたしはもう何の躊躇もなしに、結婚をお勸めする、」ツて。』

この『何の躊躇もなしに』に桃子が力を入れて話したので、思はず實子もほゝゑまずにはゐられなかつた。

『でも、いろ〳〵な家庭をつくつた人はあつても、ほんとうに羨ましいと思ふ人はないのね。唯、子供だけは羨ましい。』

と實子は答へた。

桃子は部屋を出たり入つたりして居た。そろ〳〵梅雨の季節も近いことを思はせるやうな空模樣の日で、何となく母

屋の二階もさみしかつた。やがてまた桃子は實子の側へ來て、『何の躊躇もなしに』の續きでゞもあるかのやうに、

『さういへば松尾さんも、よくさうして孤獨を通して來られたわね。』

『わたしが弱かつたものですから、母も強ひてとは勸めなかつたんでせう。兄の子供まで、ちやんと心得て居て、「大きい叔母ちやんは」と家のものが聞けば「學校」と答へるし、「小ちやい叔母ちやんは」と聞けば、「寢んね」ですツて ― あんな小さな子供までさう言ふのよ。そんなにわたしも弱かつたものですからね。』

桃子はしばらく默つて、多分に處女らしさの殘つて居るやうな實子の顏を見まもつて居た。白は實子の好きな色で、彼女の掛ける半襟といへば殆んど白に限られて居たが、そんなところにまで彼女はまだ女學生時代と同じやうな簡素を見せて居た。

『でも、』と實子は言葉をつゞけて、『わたしの境遇や年齢から考へて見たら、もつと大人らしい心を持つて居て、現實にもはつきりとした考へを持つて居てい〻筈なんでせう。ほんとに、こんな子供ぢや仕方がない。』

『しかし、そこがあなたらしいところぢやないの。』

と桃子の方では言つたが、それぎり二人はこんな話をしなかつた。

『何の躊躇もなしに』といふ言葉から、いろ〳〵な家庭をつくつた人のことが實子の胸に引出されて行つた。あれからもう四年あまりになる、と實子はある一人の學校友達のことを胸に浮べた。東京の植物園の門の邊には人氣もないやうな早い朝のことだつた。こんもりした野薔薇の叢みを遠くに見ながら、彼女はその友達と二人で、古いあづまやの側に草を敷いて腰をおろしたことがあつた。そこから野薔薇の叢みのところまで芝生が續いて居て、足元のあたりには草が濡れて居た。彼女はこれから嫁いで行くといふ友達の話を聞きながら柔い草を摘んだこともあつた。

『あのお友達も、お母さんになると間もなく亡くなつた。』
と實子は沈んで考へた。
數へて來ると、妹の緣談に急き立てられて一切を犧牲にした姉、亡くなつた姉の後へ直つた妹、過ぎ行く青春に辭かされて思はぬところへ嫁いて行つた人――さういふ人達が、彼女の狹い周圍にだけでも最早何程あるか知れなかつた。
『何の躊躇もなしに』と云ふ言葉はまた、親しい大阪の友達の方へ實子の心を誘つた。あの夏子が東京の寮舍の方で突然な高い熱と劇しい腹痛とに襲はれた時の事を、まだ實子の眼にある。病室の窓がある。掛蒲團から敷蒲團まで一切白づくめの病院風な床がある。どつと床に就いた夏子がゐる。看護婦は屛風のかげを出たり入つたりして居る。疲れた病人の眼には刺激が强すぎると言つて、瓶に挿した紅いダリアの花まで室の外に遠ざけて置いてる。そこは實子の父の病院の一室で、發熱した友達のからだを毛布に包みながら、彼女が一緒に行つたところだ。彼の病んで居る友達の枕もとで、雜誌の校正を見るやうな日を迎へたのも、その室だ。極く僅かな重湯に珈琲か、濃茶の一杯ぐらいが一日の食事であつたやうなあの友達にも、やがて看護の甲斐のある日が來て、午前中は輕い氣分の時が續くやうになつて行つた。あの病院へ行つて二週間ばかりの後には、窓から通ふ心持の好い朝風を樂しみながら、漸く本なぞを取出すやうになつた。そして、藥の瓶の置いてある枕もとで、あの友達の好きな一節でも讀み聞かせてやると看護するものの心までが一緒に明くなつて行つた。全快の日を待つて甘い御馳走の名が數へられる頃には、あの友達も『床の上に居て病人だなんていふのも、をかしなくらゐだ』と言ふ程の快さで、附添の看護婦まで廊下の長倚子の方へ疲れを休めに行くやうになり、互ひに無聊を味ふほどの安らかな日も來た。窓の下へ二人して椅子を近く寄せて、町の空を眺めながら語り合つた時、この恩は一生忘れないと言つたあの友達の眼からは淚が流れないばかりであつた。さういふ夏子は遠く國の方の母

からも妹からも離れて來て居たからで。全く友達の退院する日まで順調子にのみ行つた。不思議にさへ思はれたくらゐであつた。そこから實子は何物にも代へ難い酬ゐを得たと、しみ〲さう思つたこともあつた。あれからの夏子は靜養のために歸國を思ひ立つやうな人であつたが、二度と夏子を東京に迎へて一緒に仕事をするやうな機會ももうあるまい、その豫感が實子の方にもあれば、あの友達の方にもあつた。夏子が歸國と決した頃は、やがて結婚の問題が國の方であの友達を待つて居たから。そこまで思ひ續けて行くと、家庭の人となるまでの大阪の友達のことが、新婚前も、新婚後も、殆んど一緒になつて實子の胸に浮んで來た。他からは最も華やかに見える人が、最も深い悲みに逢つて居るのではなからうか。そんな風に實子は想像しながらも、いよ〱夏子の成婚の日を聞いた晩は、さすがによく眠られなかつた。東京の方にある夏子の親友で、しかも未婚者ばかりが、何か祝ひの品を見立てるために集まつた時は、あの友達の噂さで持ち切つた。その品が桐の箱に納められてある吳服屋から屆いた時、新しい紅白の水引や熨斗なぞを見たばかりでも、みんな大騷ぎした。でも、あの友達が多くの新婚間際の人のやうに、それほど結婚といふことに醉はされてばかりも居ない證據には、その後の大阪からの便りを見ても分つた。

『こんな日本髮なぞに結つて居ると、東京の方の友達に後れるやうな氣がして仕方がない。やつぱり東髮にして、きりゝとした方が、自分の心が締まつていゝ。』

こんな意味のことが大阪からの便りの中に書いてあつた。あの友達は、さういふ人だ。

『やつぱり三木さんは三木さんだ。』

と實子は考へて、まだ夏子が今の姓を名乘らない前の親しみのある三木の名を口にして見た。夏子の結婚の當時のことをも想像して見た。

『何の躊躇もなしに?』

どうして、母親思ひのあの友達は考へに考へた揚句、一旦思ひ立つた仕事をあきらめて家庭の方へ入つて行つた……

山邊へ來てから一週間ばかり經つうちに、實子は一層桃子と親しくなつたばかりでなく、同宿する得子にも馴染んで、この宿へ着いて蕎の馳走になつた頃から見ればずつと寛いだ話が出來るやうになつた。實子の眼にうつる得子は、最初のうちこそあまりの嚴格さに近づきがたくも見えたが、一日は一日より好い感じのする人に變つて行つた。慣れて見れば、婦人ながらにこの世を睨んで居るかのやうな得子の光つた眼も、それほど恐くなかつた。反つてそこには、信濃生れの婦人に特有なやうな情の濃かさが讀まれた。

にはかな暑氣がこの山地へも來るやうになつた。實子のところへは、東京の家の方から小包にした單衣が屆いた。夕方から、實子は單衣に着更へて、すこし後れた食事のために得子の部屋へ行つた。涼しさうな新しい縞を着てそこへ一緒になつた桃子を見ると、その桃子の肥つた膝は高く盛り上るほどあつた。

『好いのを着たわねえ。』

と得子は桃子の縞の柄をほめて、それから三人で食卓に就いた。

山邊へ來てからの實子はめづらしく氣分の好い日が續いて居た。日に三回づゝ溫泉に身を浸すことも樂しかつた。それを聞くと、桃子はすこし呆れたやうに、

『わたしはもう九十日にもなるのに、來た時とさつぱり變らない――好くも、悪くもならない。』

こんな話が出るのも食卓の上だつた。實子はめづらしい食慾をも覺えて、宿の茶椀に三つもかへるやうになつた。小さな、小さな茶椀でせい／＼二つぐらゐしか進まなかつたほど、日頃の彼女の食はそんなに細かつた。桃子たちは、山

塗から松本までゞの毎日の往復に、二人とも好い食慾を見せたが、そんなことも食卓の上を樂しくした。殊に得子は、賓子が早く食事をすました後でもそこに居殘つて、ゆつくり、ゆつくりと食つた。

その晩のこと、三人は同じ部屋に集つて居ていろ〳〵な雜談に耽つた。暗くはあるが樂しい電燈の下で、桃子は何かの本を開けて居た。その近くにはすこし疲れの出た賓子が居た。得子は賓子のうしろへ立つて來て、旅の人でももてなすやうに、上手な手付で肩などを揉んで呉れた。それほど得子も機嫌が好かつた。

賓子は自分のうしろに居て肩から手、手から首筋と揉んで呉れる得子に言つた。

「なんですか、わたしは山邊へ來てから、ろく〳〵東京のお友達のところへ手紙を書く氣にもなりません。けふもあるお友達から葉書を貰ひました。「めつたに東京から外へ出たこともないやうな松尾さんが、信州へ行くなんて――ほんとにめづらしい。葉書ぐらゐ呉れても好ささうなものだ。」なんて。」

その時、得子は立つて行つて手拭をも探して來た。その上から賓子の髮にまで觸つて。それから。こんなことを言つた。

『もし上手な人でもあつたら、わたしは按摩さんを習つて置きたいと思ひますよ。』

賓子はこの得子を笑へなかつた。ふとしたことから、彼女はその部屋に置いてある謎のやうな木魚や、抹香臭い香爐の意味を讀んだので。彼女がその部屋に見つけたものを、一時の好奇心や興味からのお經いぢりではなかつた。それはもつと一筋に思ひつめた同じ時代の女の心であつた。詩――それでも物足らなく滿たされ難いやうなものを宗教に求めて、日常の刻々の刺激にも燃えて行かうとするやうな、苦しい修道者の心であつた。その得子の心が、賓子の胸に傳はつて來た。英語の島から出た得子のやうな人が、その日〳〵の心の糧を古代の禪僧の語錄などに求めて居るといふこと

も、すくなからず實子の心をいひた。

その時になつて見ると、いろ〳〵なことが實子に分つて來た。動かないように見えてゐた友達が、動いて居た。桃子は、國の方の親達の勸めを拒みかねて、その夏かぎり松本を去らうとして居る。せめて、今一度、信州の秋を見たいといふやうな、名殘惜しげな口吻をも洩して居る。得子は、もし適當な後任者さへ得られたら、この人も長くは今の學校に留まるまいと言つて居る。

ある日、實子は桃子に尋ねて見た。

『瓜生さんは、結局お寺の方へでも行つておしまひなさる人なの？』

『その話はなんにもなさらない。』

と言つて、桃子は首を振つて見せた。

實子は思ひ當ることがないでもなかつた。あれほど親しい間柄の桃子と實子とでも、前途のことは何も語り合つて居ない。同じやうな經驗は幾度か實子にもある。あの大阪の友達のことを思出してみても、互ひの友情はいつも底に觸れてゐなかつた。病院での夏子を介抱した時分にも、彼女はよくそう思つた。もしこの友達の病氣を機會に、互ひの生ひ立ちや趣味を超えて、もつと誠實を取りかはすことが出來たら、どんなに滿足に、酬ゐられることだらうかと。それが無理であつたらうか。彼女はそれほど自分でも意識してはゐなかつたが、その誠實を得ようとし、與へようとした。彼女の要求はかなり强いものであつたと見えて、唯日常の親しみを增したばかりだと氣がついた時に失望した。あの時は、彼女のからだも弱つてゐたが、その失望と共に、折角互ひに思ひ立つた雜誌の方の仕事をもやめたくなつた。どうかして姉妹のやうな日を暮さう、互ひの心の扉を開かう、その彼女の骨折りも結局は徒勞であつた。あれは何時のことであつ

たか、夏子の病氣も餘程快方に向つた頃に、自分はそのうち長い旅にでも出てしまひたいと本氣で言つて、あの友達を驚かしたこともある。では雜誌の方はどうするかと夏子が言つたので、勿論今々困るものを棄てゝしまひはしないが、自分一人が居らなくても後からいくらも人は出てくるだらうと答へたこともある。すくなくも二年は繼續するつもりで掛つたのが十月ばかりで廢刊するやうになつたあの雜誌の運命は、既にもうその頃に萠して居たのであつた。

「友達同志が愛すれば愛するほど、さびしさを味つて行くのだらう。」

と實子は考へて、にはかに周圍が暗くなるやうに思つた。

靜かな山邊の宿には何事も起つて居なかつた。例のお婆さんは強い腰を曲げながらも、相變らず裏の畠の見廻りから甘孫の世話まで燒いて居た。お婆さんから言へば孫娘の養子に當る人は、朝も早くからカルサン穿きで、乳呑兒を背負ながらよく働いた上に、時刻がくると村の旦那衆らしい着物に着更へて、何かの勤めに通つて居た。おかみさんはおかみさんで、この人は温泉宿の方の臺所を引受けて居て、朝母屋を出れば日が暮れてからでなければ歸つて來なかつた。どうかするとこの宿の人達はみんな屋外へ出てしまつて、農家風な爐邊には半日火の氣のないこともある。靜かだ。

實子はあたりを見廻した。彼女がこの宿へ來てから變つた事と言へば、唯、得子の懇意な女教師が二晩ばから泊りがけで諏訪の方から見えたのと、それから東京の五味先生を得子の學校へ迎へた時、講演後の先生をこの山邊の宿にも迎へて、その日は實子も得子や桃子と一緒に『おんばこ』の湯の方までお供をしたぐらゐのものだつた。それほど事も無く暮して居た中で、實子は思ひがけない得子の涙を聞きつけた。

「まあ、瓜生さんはどうなすつたんだらう。あれほど毅然として壁に面して居たあの瓜生さんが――」、

と桃子までが不審をうつやうになつた。

得子の無言な涙は、長いこと苦しめた形骸から留め度もなく流れて來たやうであつた。あだかも、溜りに溜つて居た熱い泉が堅い地を破つて、一時にそこへ迸つて來たやうに。その意味は誰も知らなかつた。桃子ですら知らなかつた。

桃子は實子の側へ來て、

『何か瓜生さんは氣にしていらつしやることでも有るのかしら。』

と言つて、圓い大きな眼で實子の顏をつくづくと見た。

實子には何も答へられなかつた。午後の四時頃と言へば得子も松本の學校の方から歸つて居る頃で、實子は洗濯物を取りこむために母屋の裏二階から井戸端の方へ降りて行つた。農家らしい土藏の土壁の横手には井戸の流しがあつて、柿の花の香ひも通つて來て居た。そこに得子が腰をこゞめて、襷がけで何か洗ひ物をして居た。その時も實子は、泣けて泣けて仕方のないやうな人をその流し許に見た。山邊ではもう蚊屋なぞを取出して乾す季節を迎へて居た。夕方から、實子はそこいらへの散歩に誘ふつもりで、得子の部屋の降り口まで行つて見た。古びた暗い唐紙によせて、得子の羽織が隣室に掛けてあつた。白粉氣のないと言つてもないほど飾りを捨てゝ居る得子の身のまはりのもので、ほんとにその羽織の裏の絹だけが僅かな紅味を見せて居た。その時も實子は、しきりに鼻をかむ音を聞きつけて、得子の部屋まで行かずに引かへして了しまつた。

しかし、實子は得子の涙に濡れた眼から、物を言ふ口元よりも鋭い感じを受けた。彼女は松本通ひの桃子を送り出した後で、裏山の松林の見える裏二階の障子の側で、自分の寢まきにする白い浴衣地などを縫ひはじめて見たが、その度に考へてしまつて、針も進まなかつた。東京の賑かな町の方で美しい人を見かけたと思つた時のことなどまで、一緒になつてそこへ浮んで來た。誰かと思へばその人は女學校を一緒に出た友達で、形のないものへの骨折もあのやうに眼に

見えて嘲ゐられたら、と思つたこともあつた。さうした途上での些細な印象までが、彼女の境遇を日蔭者にでも見せるやうで、思出したばかりでも煩はしかつた。

『こんな日和に大きな翼をひろげて、あの空を走つて行つて見たら――そんな自由が得られたら――』

制へがたい飛翔の思ひが、いつでも彼女の小さな胸をいら／＼させた。そこへ桃子が一日の勤めを終つて松本からでも戻つて來ると、友達は實子の縫ひかけた浴衣地に眼をつけて、

『まだそれつぽつち？松尾さんは一日何をして居たの。』

と言つて笑つた。

過去は實に暗かつた。あんな不安が續いてはやりきれないと思ふやうな心持が、この山邊の宿の靜かさの中で、また實子の胸に歸つて來た。東京の家の方で、どうかすると彼女はまる一週間を病床に暮すこともめづらしくなかつた。過ぐる年の寒さにも、風邪から高い熱を引出して、三十八度ぐらゐの熱がそれから毎日のやうに續いた。朝から晩まで、晩から明け方まで、雪の降りつゞいた日があつた。あの晩に電燈が急に消えてしまつたので、家のものに戸をすこし開けて貰つて、しばらく雪明りで過した。ときどき廣い武藏野の原を渡つて來るかと思はれるやうな風が障子を打つた。さら／＼と雪の降りしきる音までが靜かな部屋に聞えて居た。ぢつと床の中に横になつて、風の行方を追つて居ると、雪の降るのも風の吹きまくるのも障子の內か外か、そんな氣がした。唯一人で曠野の深い深い雪に埋れて居るやうな心持の起つて來るのも、あゝいふ時であつた。物憂い病床にもまた快い日を迎へて、樂しい讀書などに共鳴する愉快さを覺えても、一度自分に歸へると荒漠な思ひに閉され勝ちであつた。人はこの世に生れて來たことさへ否定したくなることもあるだらうか。そこまで實子は自分を持つて行つて、牢獄にでも暮す思ひに捉へたこともある。けれども、斯く在

ることはどうしても動かせなかつた。

得子の涙を聞きつけたのも、この實子の耳だ。默つて居る得子は何も口に出して說き明しはしなかつたけれども――唯、『わたしは實に涙もろくて困る』といふ僅かな言葉だけを洩したのみではあつたけれども――しかし實子は病後の感じ易い柔かな耳でそれを聞いた。

六月も下旬に入つた頃のある暑い日の午後に、實子は母屋の裏二階に居て、湯上りの後の疲れたからだを籐椅子の上に休めた。その椅子は得子の部屋の方から借りて來たので、裏庭の松の香が迫つて來るやうな障子のすぐ側に置いてあつたのだ。しばらく實子はそこに椅りかゝつて、涼しい風を樂みながら、旅らしい思に耽つて居た。手も足も、だるかつた。ふと氣がつくと、桃子がそこに見えなかつたので、實子は椅子から身を起した。その足で階下の方へ降りて行つて見た。

桃子は得子の部屋に話し込んで居た。實子の姿が見えると、得子は『隱れんぼ』でもして遊ぶ時の子供のやうに、ついと緣先の柱の影に身を隱した。桃子もすこし妙な顏をして、何か咳拂ひに紛らして居た。部屋には薄い煙も籠つて居た。そのうちに桃子が笑ひ出すと、得子は柱の影から半身をあらはして、それまで隱して居た卷煙草をちよつと實子に燻して見せた。

『まあ。』

と實子は言つたが、そこに徒然を慰めて居る得子や桃子の戯れと直ぐに分つた。その卷煙草は宿に忘れて置いて行つた五味先生の殘り物と分つた。

桃子もおもしろい手付をして、指の間にはさんだ卷煙草を實子の前で燻して見せ、

『新しい女。』

と戯れた。勿論、嘲りの意味で。それを聞いた時は、思はず實子も吹き出した。

こんな子供らしい氣分を涙の多い得子の部屋に見つける日もあるのか、その考へは實子に樂しかつた。その日は、得子は實子に見せたいと言つて、松本の學校の庭の方から二種ばかりの高山植物を持つて歸つて來て居た。それが食卓の上の小さな花瓶に挿してあつた。黄を帶びた白と、小豆色とあつて、やゝ灰色ではあるが、よく見れば深くて飽きない、得子の好きそうな花であつた。

やがて實子も十二日ばかりを山邊での保養に暮した。二週間の滯在の豫定がもう後に二日しか殘つて居なかつた。東京の方へ歸り支度をしようと思ふ前の日には、實子は一度桃子の學校を訪ねたいと思ひ、友達の授業振りをも見たいと思つて、朝のうちから松本の方へ出掛ける支度をした。彼女は何となく引きしまつた心持で自分の帶を締めた。桃子も支度が出來た。そこで揃つて出掛けた。

野外は麥の收穫を終りかける頃であつた。既に刈り乾した畠もあり、まだそのまゝになつて居るところもあつた。實子が山邊へ來たばかりの時分には、そこにもこゝにも田植の始まる頃であつたが、その季節も既に過ぎて居た。案内顔な桃子と連立つて、毎日この友達が通ふといふ平坦な細道を踏んで行くと、青田を渡る風が實子の顔へ來た。都會育ちの彼女はこの旅に來るまで、畠に生えて居る野菜の見分もつかなかつた。桑もよく知らなかつた。彼女の眼に觸れるものは、そんなにめづらしくて、新しかつた。桃子は、あれが鈴だ、あれが乘鞍だ、と山々の頂きを實子に指して見せながら歩いた。松本へ來て三年になるといふ友達はそれほどこの土地のことに明るくなつて居た。

歩いて見ると、山邊から松本までかなりあつた。これが友達の學校か、さう思つて幾つかの教室のある學校風な建築

物を見ることも、實子にはめづらしかつた。時間が來ると、彼女は教室の方へ導かれて行つて、多勢の女生徒の側に腰掛けた。ちやうどその日の英語の讀本の中には牛肉といふ言葉が出て來て居る時で、教師としての友達は生徒の耳に慣れて居るやうな西洋料理の炙肉のことを引合に出して教へた。そんなところにも、桃子は日頃の熟練と、注意深さとを見せて居た。

放課後に、教室々々を出て來る年若な生徒達が廊下を通つた。何年か前に學窓を出た實子の眼の前には何時の間にかより若い時代が來て居て、古葉にかはらうとするやうな新しい生命のかゞやきはどの生徒の面ざしにも讀まれる。その中には、まだ娘らしい黄色い歯を出して笑ふやうな、ごく無邪氣な年頃の生徒もある。場處を換へ、風俗を換へさへして見たら、一緒に女學校を出た友達なぞの若い娘の時分を思出させるやうな愛らしい額つきの生徒もある。思はず實子はその廊下のところに立ちつくした。

その翌日には、實子は坂井山邊の宿の方で歸り支度に心せはしい人であつた。二度と集まる機會があらうとは思はれないやうな得子の部屋で、舊い同窓のよしみのある三人はそれまで合せたことのないやうな顏を合せた。得子は夕飯の濟んだ後の食卓を前に置いて言つた。

『この次、松尾さんにお目に懸れる時分には、わたしも奈何して居ませう。』

その時になつて見ると、實子一人が得子や桃子に別れを告げて、東京の方へ歸つて行かうとして居るばかりではなかつた。ある別れ道は桃子と得子の間にも見えて居た。それは二人の氣質の相違とも言へなかつた。二人とも奈何することも出來なかつたやうなものだ。

でも、桃子は得子と實子を前に置いて、深い感慨の籠つた調子で言つた。

「わたしも、東京から此木へ來る時には、どんなに瓜生さんを頼りにして來ましたらう――」

桃子は口ごもつてしまつて、それぎり後は言ひ得なかつた。

山邊の旅に來てからのことは、何となく實子の胸に纏まつて來た。しばらく忘れて居た東京の家の方のことも、ひどく氣に掛つて來た。不思議にも、實子は家から離れて來て見て、その年齢になるまでは左程にも思はなかつた亡い祖母のことをしきりに戀しく思つた。物に徹しないでは止まない、そのかはりある人々とは相容れない、そのためにまた近者で居た時分には家のものとの爭ひの絶えなかつた人――それが彼女の祖母であつた。彼女はこの旅に來て、この祖母の方へよく自分を持つて行つた。母を泣かせたり、家の内を暗くしたりする人とのみ思つたあの祖母が、亡くなつた後になつて見ると不思議に戀しかつた。彼女の眼に見えて來た祖母は、今の言葉で言つて見るなら Ideal を追つて、しかも何處までもこの世に根ざして行つた人かと思はれた。

どうしてこんなことが實子の胸を離れずにあるかといふに、彼女が前途の案内者はたゞたゞ情に脆いやうな母ではなくて、この祖母だと思はれて來たからで。この祖母の前へ、彼女はよく自分を持つて行つた。理想を追ふに似て、ごく眼の前のことに惱まされ勝ちな彼女の弱さは、祖母と比べものにもならなかつた。彼女はさう思つた。現實を輕しめるなら、何故そこから明かに離れて行かないのだらう。それに觸れようとするなら、何故自由な手を開いて行かないのだらう。實はもつと拙く低いものに心をひかれて、煩はされ勝ちな日を暮して來たのではなからうか、と。

かよはく、病氣勝ちな實子のやうな女の胸にも、こんな風に自分を考へるだけの小さな芽は宿つて居た。自分の内にあるのは貧しさばかりだ。しかしこの弱い自分の力に行けるところまで行かう。假令どんな小さなものにも無限の力の惠まれて居ることを信じて行かう。その考へに勵まされて、實子はもう一度東京の方へ歸つて行かうとして居た。

その晩は薄い月あかりが母屋の裏二階の障子に映つて居た。實子は桃子と二人で部屋に居て、歸京の前の晩らしい時を送つた。東京への土産にと言つて得子の呉れた山葵漬、宿から呉れた蕗の砂糖漬なぞで、狭い鞄のなかも一ぱいになつた。そこへ宿のお婆さんが油紙に包んだものを提げて、階下から這(は)ふやうに梯子を昇つて來た。お婆さんはお婆さんで、これは自分のこゝろざしだと言つて、手造りの梅干を呉れた。

『あの婆さんが自分の若い時分にはと言ふから、幾つの歳のことかと思つたら――それが六十の歳のことなのよ。八十のお婆さんから見たら、六十はまだ若い時分だわねえ。』

と言つて桃子は笑つた。實子が今の年齢(とし)の倍も生きても、それでもあの強いお婆さんの若い時分にしか當らなかつた。夜もふけてから、實子は友達と蚊屋の内に枕を並べて眠りに就かうとしたが、東京の家の方に待つて居る母や、兄達や、姉のことなぞがしきりに思出されて、その晩はよく眠られなかつた。

翌朝實子は山邊を立つた。『御機嫌好う』といふお婆さんの聲に送られて宿を出た。桃子や得子は別れを惜んで、せめて鹽尻まで一緒に行かうと言つて呉れた。ちやうど學校の休みの日に當つて居たので、實子は桃子達に送られながら、一緒に山邊から松本まで乘つて、それから更に鹽尻まで乘つて行つた。

得子の生れた家のあるといふ村、そこに得子の母の住むといふ村は、汽車の窓から向ふの山の傾斜の方に望まれた。往きに見て來た松本平の耕地、そこにある苺畠、そこにある葡萄畠、それからまだ何程の豐かな産物が生れて來るかも知れないやうな新開の桔梗が原の跡がまた實子の眼にあつた。

『鹽尻。』

と聞くと、得子と桃子は汽車を離れて、窓側の外のところに二人並んだ笑顔を見せた。桃子は白い手套をはめたまゝ。

（三）

實子が顏を出して居る窓の下へ來て言つた。

『この手套では、わたしも五味先生に笑はれてしまつた。「中川さんはそんなに手ばかり可愛がつて、足の方はどうしたんですか、」なんて。でも、わたしは國に居る時分から、足袋をはくのが嫌ひで……嫌ひで……』

この桃子の顏も、得子の顏も、やがて動き出した。實子を乘せた汽車は機械的な廻轉の響と共に鹽尻の停車場から離れて行つた。

獨の旅となつてからの實子は、窓側に腰掛けて、二週間ばかり一緒に暮して見た友達のことや、飯田町の停車場の方に自分を待受けて呉れるやうにと手紙で頼んでやつた姉のことなぞを思ひつゞけた。最早梅雨の季節の近い山の上の空氣も重かつた。富士見まで乘つて行くと、そこはもう信州の國境だつた。遠い前途、まだ夢のやうな新しい生活〳〵それを待受ける寂しい熱い思ひが、眼に映る灰色な高原地の空の感じと一緒になつて、實子の胸を耐えがたくした。やがては思ひ〳〵に手を分つ日のある桃子や得子のことを思ふと、實子は窓側のところで深い溜息をついた。

『互ひの涙なしに生きられやうか。』

鹽尻で別れて來た桃子の白い手套は、まだ實子の眼について居た。

（をはり）

その晩は薄い月あかりが母屋の裏二階の障子に映つて居た。實子は桃子と二人で部屋に居て、歸京の前の晩らしい時を送つた。東京への土産にと言つて得子の呉れた山葵漬、宿から呉れた蕗の砂糖漬なぞで、狹い鞄のなかも一ぱいになつた。そこへ宿のお婆さんが油紙に包んだものを提げて、階下から匍(は)ふやうに梯子を昇つて來た。お婆さんはお婆さんで、これは自分のこゝろざしだと言つて、手造りの梅干を呉れた。

『あの婆さんが自分の若い時分にはと言ふから、幾つの歳のことかと思つたら——それが六十の歳のことなのよ。八十のお婆さんから見たら、六十はまだ若い時分だわねえ。』

と言つて桃子は笑つた。實子が今の年齡(とし)の倍も生きても、それでもあの強いお婆さんの若い時分にしか當らなかつた。夜もふけてから、實子は友達と數屋の内に枕を並べて眠りに就かうとしたが、東京の家の方に待つて居る母や、兄達や、姉のことなぞがしきりに思出されて、その晩はよく眠られなかつた。

翌朝實子は山邊を立つた。『御機嫌好う』といふお婆さんの聲に送られて宿を出た。桃子や得子は別れを惜んで、せめて鹽尻まで一緒に行かうと言つて呉れた。ちやうど學校の休みの日に當つて居たので、實子は桃子達に送られながら、一緒に山邊から松本まで乘つて、それから更に鹽尻まで乘つて行つた。

得子の生れた家のあるといふ村、そこに得子の母の住むといふ村は、汽車の窓から向ふの山の傾斜の方に望まれた。往きに見て來た松本平の耕地、そこにある桑畠、そこにある葡萄畠、それからまだ何程の豐かな産物が生れて來るかも知れないやうな新開の桔梗が原の跡がまた實子の眼にあつた。

『鹽尻。』

と聞くと、得子と桃子は汽車を離れて、窓側の外のところに二人並んだ笑顔を見せた。桃子は白い手套をはめたまゝ。

實子が顏を出して居る窓の下へ來て言つた。

『この手套では、わたしも五味先生に笑はれてしまつた。「中川さんはそんなに手ばかり可愛がつて、足の方はどうしたんですか、」なんて。でも、わたしは國に居る時分から、足袋をはくのが嫌ひで……嫌ひで……』

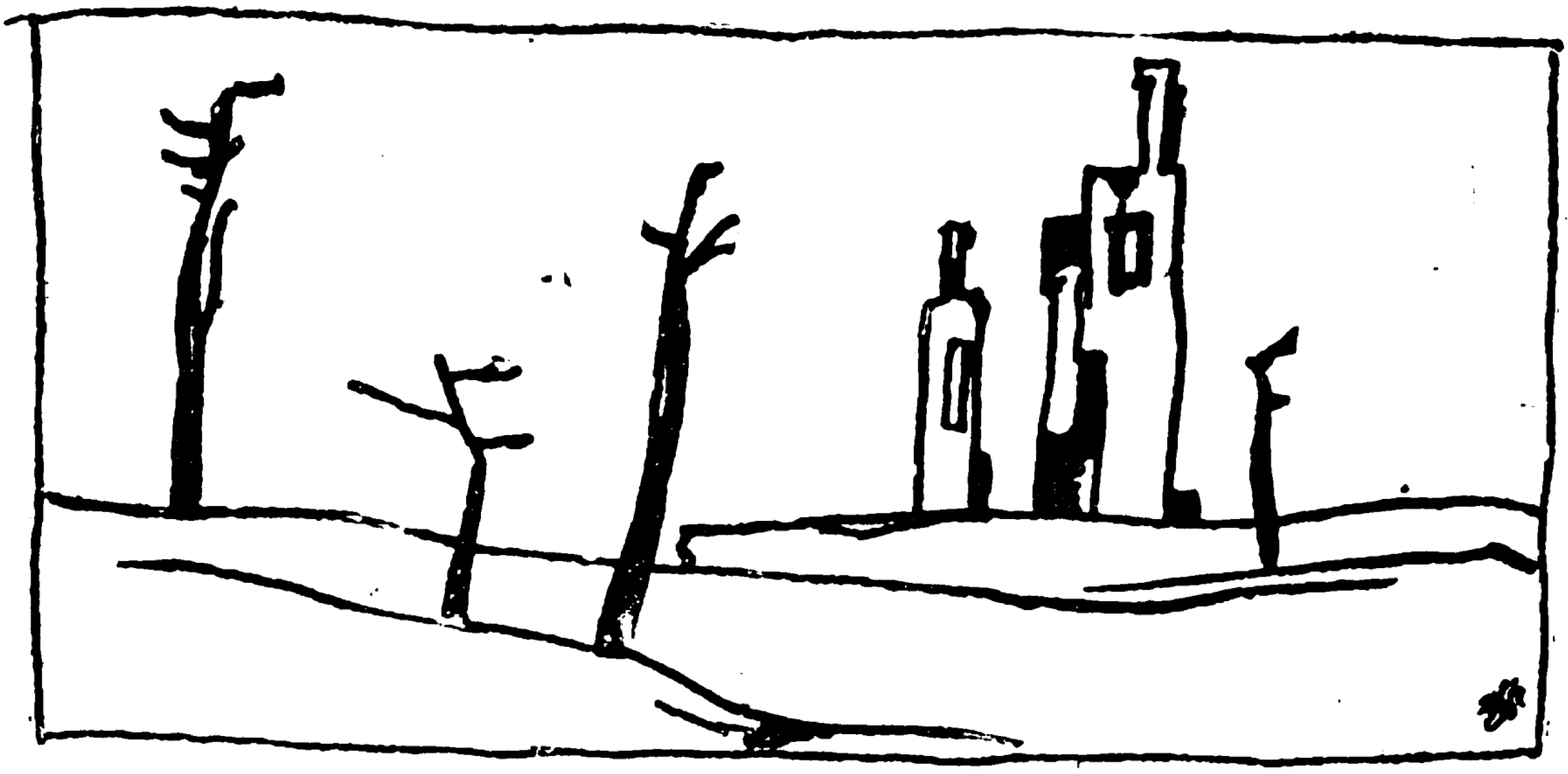
この桃子の顏も、得子の顏も、やがて動き出した。實子を乘せた汽車は機械的な廻轉の響と共に鹽尻の停車場から離れて行つた。

獨の旅となつてからの實子は、窓側に腰掛けて、二週間ばかり一緒に暮して見た友達のことや、飯田町の停車場の方に自分を待受けて呉れるやうにと手紙で賴んでやつた姉のことなぞを思ひつゞけた。最早梅雨の季節の近い山の上の空氣も重かつた。富士見まで乘つて行くと、そこはもう信州の國境だつた。遠い前途、まだ夢のやうな新しい生活〳〵それを待受ける寂しい熱い思ひが、眼に映る灰色な高原地の空の感じと一緒になつて、實子の胸を耐えがたくした。やがては思ひ〳〵に手を分つ日のある桃子や得子のことを思ふと、實子は窓側のところで深い溜息をついた。

『互ひの涙なしに生きられやうか。』

鹽尻で別れて來た桃子の白い手套は、まだ實子の眼について居た。

（をはり）



子供四題

志賀直哉

一、次郎君

K氏の親類の兒で、名は知らぬ。次男だと云ふから假に次郎君とする。

次郎君の兄さんは音無しい兒であるが、次郎君は却々のきかん坊ださうだ。

次郎君の家に大きな角火鉢があつて、先生何ぞといふと、それに乘つて困るといふ。K氏のお母さんは第一あぶないし、それをいやがつてよく叱言を云つた。その度次郎君は不精々々下りてゐた。

或る時、下りたと思つて、部屋を出ようとすると、何時の間にか又乘つてゐた。K氏のお母さんは腹を立て、默つてにらみつけた。次郎君も默つて再び下りたが、直ぐ聞こえよがしにこんな獨言を云つた。

「エヽ！ あの婆ア早く死ねばいゝなあ」

或る日、お父さんと湯に入り、先へあがつて、よく拭かずに、行きかけるので、お

父さんは風呂の中から、

「風邪をひくぞ。もつとよく拭きなさい」と聲をかけた。次郎君は一寸手を擧げ、二の腕を二三度フウ〳〵と吹いて、其儘いつて了つた。

もう一つ。

これも或る日の事だ。次郎君は飴を頬張りながら、例の角火鉢の側で何か獨りで饒舌つて居た。そして思はずその飴を灰の中へ落として了つた。勿論飴は灰まぶれである。先生、それを火箸で摘まみ上げ、殘念さうに眺めて居たが、側の妹にそれを食へと云ひ出した。妹がいやだと云ふと、どうしても食へと強いた。

離れた所で、見てゐたお父さんが

「そんな事を云ふなら、貴様食つて見ろ」と幾らか怒氣を含んで云つた。流石の次郎君もこれには一寸弱つた。が、直ぐ自分の懐から紙を出すと、それでくる〳〵と飴を卷き自分の口へほうり込んだ。そして頬張つたまゝ悠々と部屋を出て行つた。

却々面白い坊主である。

二、かくれん坊

「もういゝかあ。もういゝかあ」遠くでかういふ聲がする。かくれん坊の鬼がいつてるらしいが、「もういゝかあ」は少し間が拔けて居ると思つた。私は二階で手紙を書いて居る。

間もなく下の往來を一人は草履、一人は靴で駈ける足音がして來た。二人は駈けながら、何か忙しく話し合つて居た

た。それが止むと、今度は景氣のいい調子で、

「もういゝよう」私の妹の淑子の聲である。

私は手紙を書續けて居た。暫くして、封をしながら、氣がつくと、下では子供等が何か切りに云ひ合ひをして居た。私は机越しに手を延べ、障子を五寸ばかり開けて見た。前の家の少し凹んだ門の所に淑子とオデットと云ふ淑子よりも一つか二つ下の佛蘭人の小娘とが竝んで立つて居る。それと向合つてジョールといふ娘の兄さんが短かい半ズボンの下から白いすらりと脛を出して立つて居た。「もういゝかあ」は此先生だつた。

何でもジョールさんの鬼が彼方から駈けて來ると二人は埶もなく竝んで其所に立つて居たらしい。探すまでもなく二人は直ぐ見つかつたが、扨て何方が今度鬼になるか、それが分からず、今その悶着の最中らしかつた。

「ジョールさんが其所で首をかうなさつたでせう？（と淑子は自分の首をめぐらして見せ）そしたら、私とオデットさんと、どつちが先に見えて？」

淑子はそれさへはつきりすれば此難問題は解決されるのだと云ふやうに、口を堅く結んで熱心にジョールさんの顏を見詰めて居る。

ジョールさんは弱つた。二人の何方が先づ自分の眼に映つたらう？ジョールさんは赤皮の半靴の足を揃へ眞直ぐに立つて、上眼使に淑子と妹の顏を見くらべながら考へて居る。

金具のついた皮のバンドをゆるくしめた腹を突き出し、兩の掌を後で握り合はせ、默つて考へてゐるジョールさんの様子は如何にも仔細らしく可笑しかつた。

淑子もオデットさんも耳を澄まし、ジョールさんの口から出る言葉を待つて居る。

暫くして、
「オデットだ」とジョールさんはきつぱり云ひ切つた。緊張はゆるむ。
「ジョールはウソ。いやだわ、私」オデットさんは眉根を寄せ、肩につく程首を傾け、後手に門の戸を掴つて横歩きをしながら泣き出しさうな顔をした。
淑子は氣の毒さうに默つて暫くそれを見て居たが、
「そんならいゝわ。私、鬼になるわ」と云つた。
「オデットづるい」兄さんは妹を睨んだ。
「いゝ事よ、私が鬼になるから。早くお逃げなさい。ね、早くお逃げなさい。私此所にかうして居るから」淑子は兩の掌を顔に當てゝ後ろを向いた。
「オデット、おいで」ジョールさんは不興氣に云つた。
オデットさんは不平らしい顔をしながら、それでも門の戸を離れて出て來た。そして顔を隱してゐる淑子の方をもう度振返つてから、急に勢よく、兄さんのあとを追つて驅けて行つて了つた。私は障子を閉めた。
少時して、「もういゝかい」といふ淑子の甲ン高い聲がした。

三、誕生

學校でスェン・ヘイデン博士の講演を聞いて歸つて來ると、母が床に就いてゐた。いつもならもう寢てゐる乳母が其邊の世話を燒いて居た。妹や弟も起きてゐて、今晩は誰れと誰れとが寢、誰れは誰れの部屋に寢るといふやうな事を話し

た。それが止むと、今度は景氣のいい調子で、
「もういゝよう」私の妹の淑子の聲である。
私は手紙を書續けて居た。暫くして、封をしながら、氣がつくと、下では子供等が何か切りに云ひ合ひをして居た。
私は机越しに手を延べ、障子を五寸ばかり開けて見た。前の家の少し凹んだ門の所に淑子とオデットと云ふ淑子よりも一つか二つ下の佛蘭人の小娘とが竝んで立つて居る。それと向合つてジョールといふ娘の兄さんが短かい半ズボンの下から白いすらりと脛を出して立つて居た。「もういゝかあ」は此先生だつた。
何でもジョールさんの鬼が彼方から馳けて來ると二人は勢もなく竝んで其所に立つて居たらしい。探すまでもなく二人は直ぐ見つかつたが、扨て何方が今度鬼になるか、それが分からず、今その悶着の最中らしかつた。
「ジョールさんが其所で首をかうなさつたでせう?(と淑子は自分の首をめぐらして見せ)そしたら、私とオデットさんと、どつちが先に見えて?」
淑子はそれさへはつきりすれば此難問題は解決されるのだと云ふやうに、口を堅く結んで熱心にジョールさんの顏を見詰めて居る。
ジョールさんは弱つた。二人の何方が先づ自分の眼に映つたらう?ジョールさんは赤皮の半靴の足を揃へ眞直ぐに立つて、上眼使に淑子と妹の顏を見くらべながら考へて居る。
金具のついた皮のバンドをゆるくしめた腹を突き出し、兩の掌を後で握り合はせ、默つて考へてゐるジョールさんの様子は如何にも仔細らしく可笑しかつた。
淑子もオデットさんも耳を澄まし、ジョールさんの口から出る言葉を待つて居る。

暫くして、

「オデットだ」とジョールさんはきつぱり云ひ切つた。緊張はゆるんだ。

「ジョールはウソ。いやだわ、私」オデットさんは眉根を寄せ、肩につく程首を傾け、後手に門の戸を摺つて横歩きをしながら泣き出しさうな顔をした。

淑子は氣の毒さうに默つて暫くそれを見て居たが、

「そんならいゝわ。私、鬼になるわ」と云つた。

「オデットづるい」兄さんは妹を睨んだ。

「いゝ事よ、私が鬼になるから。早くお逃げなさい。ね、早くお逃げなさい。私此所にかうして居るから」淑子は兩の掌を顏に當てゝ後ろを向いた。

「オデット、おいで」ジョールさんは不興氣に云つた。

オデットさんは不平らしい顏をしながら、それでも門の戸を離れて出て來た。そして顏を隱してゐる淑子の方をもう一度振返つてから、急に勢よく、兄さんのあとを追つて駈けて行つて了つた。私は障子を閉めた。

少時して、「もういゝかい」といふ淑子の甲ン高い聲がした。

三、誕生

學校でスエン・ヘイデン博士の講演を聞いて歸つて來ると、母が床に就いてゐた。いつもならもう寢てゐる祖母が其邊の世話を燒いて居た。妹や弟も起きてゐて、今晩は誰れと誰れとが寢、誰れは誰れの部屋に寢るといふやうな事を話し

た。それが止むと、今度は景氣のいい調子で、

「もういゝよう」私の妹の淑子の聲である。

私は手紙を書續けて居た。暫くして、封をしながら、氣がつくと、下では子供等が何か切りに云ひ合ひをして居た。私は机越しに手を延べ、障子を五寸ばかり開けて見た。前の家の少し凹んだ門の所に淑子とオデットと云ふ淑子よりも一つか二つ下の佛蘭人の小娘とが竝んで立つて居る。それと向合つてジョールといふ娘の兄さんが短かい半ズボンの下から白いすらりと脛を出して立つて居た。「もういゝかあ」は此先生だつた。

何でもジョールさんの鬼が彼方から駈けて來ると二人は勢もなく竝んで其所に立つて居たらしい。探すまでもなく二人は直ぐ見つかつたが、扨て何方が今度鬼になるか、それが分からず、今その悶着の最中らしかつた。

「ジョールさんが其所で首をかうなさつたでせう？（と淑子は自分の首をめぐらして見せ）そしたら、私とオデットさんと、どつちが先に見えて？」

淑子はそれさへはつきりすれば此難問題は解決されるのだと云ふやうに、口を堅く結んで熱心にジョールさんの顏を見詰めて居る。

ジョールさんは弱つた。二人の何方が先づ自分の眼に映つたらう？ジョールさんは赤皮の半靴の足を揃へ眞直ぐに立つて、上眼使に淑子と妹の顏を見くらべながら考へて居る。

金具のついた皮のバンドをゆるくしめた腹を突き出し、兩の掌を後で握り合はせ、默つて考へてゐるジョールさんの樣子は如何にも仔細らしく可笑しかつた。

淑子もオデットさんも耳を澄まし、ジョールさんの口から出る言葉を待つて居る。

暫くして、

「オデットだ」とジョールさんはきつぱり云ひ切つた。緊張はゆるむ。

「ジョールはウソ。いやだわ、私」オデットさんは眉根を寄せ、肩につく程首を傾け、後手に門の戸を摺つて横歩きをしながら泣き出しさうな顏をした。

淑子は氣の毒さうに默つて暫くそれを見て居たが、

「そんならいゝわ。私、鬼になるわ」と云つた。

「オデットづるい」兄さんは妹を睨んだ。

「いゝ事よ、私が鬼になるから。早くお逃げなさい。ね、早くお逃げなさい。私此所にかうして居るから」淑子は兩の掌を顏に當てゝ後ろを向いた。

「オデット、おいで」ジョールさんは不興氣に云つた。

オデットさんは不平らしい顏をしながら、それでも門の戸を離れて出て來た。そして顏を隱してゐる淑子の方をもう度振返つてから、急に勢よく、兄さんのあとを追つて駈けて行つて了つた。私は障子を閉めた。

少時して「もういゝかい」といふ淑子の甲ン高い聲がした。

三、誕生

學校でスエン・ヘイデン博士の講演を聞いて歸つて來ると、母が床に就いてゐた。いつもならもう寢てゐる祖母が其邊の世話を燒いて居た。妹や弟も起きてゐて、今晩は誰れと誰れとが寢、誰れは誰れの部屋に寢るといふやうな事を話し

がら興奮して居た。

「お祖母さんのお部屋だと、いゝ事といやな事が一つづゝあるから困る。寝てゐて白玉飴が頂けるのはいゝけど、ランプがつかないからいやだ」そして、直三は飴だけ貰つて父の部屋に行つた。英子は一番下の隆子を抱いて祖母の部屋に寝る事にした。

こんな騒ぎは母の産が今夜だらうと産婆が云つたからである。

私は十時頃、若し今晩だつたら、起こして呉れと女中にいひつけ、離れの自分の部屋へ歸つた。風邪のひきかけで、直ぐ床に入つた。

翌朝、雨戸を開けに來た書生が、

「昨晩お生れになつたさうです」と云つた。

「男か女か」

「さあ」と書生は笑つた。

「訊いて來て呉れ」

私は起きて着物を着た。

「お嬢さんださうです」書生は還つて來て云つた。

私が茶の間へ出て行つた時、英子が寄つて來て、「何だか、嬉しいわ」と云つた。

赤兒は薄暗い産室にガーゼを被り小さい夜着の襟に埋つて寝てゐた。明るみから來た眼には碌に見えない。顔を寄せると、何が不愉快なのか、くしゆ〳〵と泣いてゐた。

「軽かつたさうですね」

「えゝ」母は疲れたやうな聲で答へた。

茶の間では皆食事をしながら、今度の赤兒の眼の大きい事を評判してゐた。

「鼻と口とは淑子だ」こんな事を祖母がいつてゐた。

私は近かい親類三四軒へ安産の知らせの端書を書いた。子供達は皆何となくそわ〳〵してゐた。

「お兄樣。お兄樣」と隆子がいふ。

顏を擧げると、

「赤ちやんは何處から生れたの？」

「そりやあ、おなかからよ」と淑子が云つた。

「本統？」隆子は丸い眼をして私を見た。

「左うだ」

「誰れのおなかから？」

「隆ちやん。隆ちやんは誰れのおなかから生れたの？」左う又淑子がいつた。

「母あさんの」

「赤ちやんも母あさんのおなかからよ」淑子は得意らしく左う云つた。

「皆、さう？」

「あゝ」淑子が答へた。

淑子の上の直三が、その時
「お兄様は誰れから生れたの？」と云つた。
淑子は簡單に
「お祖母さんから」と答へた。
「左う？」直三は今度は私を見て云つた。
私は返事をしなかつた。祖母も父も默つてゐる。
「うそよ。若しさうならお兄様ぢやなくて、叔父さんになるぢやないの」一番上の英子が答へた。
直三は不思議さうに、
「ぢやあ、矢つ張り母さんからかい？」と英子の顏を見た。
英子は答へなかつた。
「さあ〳〵早くおしなさい。もう七時過ぎましたよ」祖母は子供達がいつまでもそれを云つてゐる事に少し苛立つてゐた。附屬で學校の一番遠い直三は誰よりも先に家を出なければならなかつた。
直三は湯を呑んで、箸を仕舞ふと、直ぐ起つて「お藏前」へ服を着にいつた。
私の母は私の十三の時に死に、今の母が來た。一番上の英子だけにそれは分つてゐたがあとの三人は知らなかつた。
「今日から、夜でも、もう母さんのお乳は飮めないのよ」と淑子がいつた。
隆子は怒つたやうな眼付きをして暫く小さい姉の顏を見詰めてゐたが、
「飮めるよ」と云つた。

「あら、隆ちやんが飲んだら赤ちやんのが無くなるわね。姉さん？」

「さうよ」と英子がいつた。

隆子は默つて、不愉快さうな顏をした。

隆子と今度の赤兒との間に死んで生れた赤兒があつて、隆子はその乳まで飲んでゐたのである。

「隆ちやん」かう呼ぶと、隆子はこわい顏をしながら上眼で此方を見た。

「お前は赤ちやんの何だい？」

「姉さん」

「姉さん？」私は大袈裟に驚いて、「偉いなあ」と云つてやつたら、隆子は漸く愁眉を開き、少し笑つた。「姉さんぢやもうお乳は飲めないね。姉さんが飲んぢやあ、可笑しい」

面白半分無闇とおだてたら、すつかり機嫌を直した。

隆子は自分が幼稚園から歸るまでは決して赤兒に行水をさせないといふ事を祖母に約束させ、女中と一緒に出掛けて行つた。

私は評判の大眼玉を見る爲め、時々産室へ行つて見たが、赤兒は每時眠つてゐた。産婆が、おむつを代へる時足を見たが、丁度私の手の母指程しかなかつた。

十時頃醫者が來た。眼藥をさし、身體を調べた。普通より餘程小さいが、早産ではない、心臟も却々しつかり打つてゐると云つた。

「先づ一ト安心」と祖母が息をついて云ふ。「これで鎌倉の方が輕く行けば今度は本統にいゝお正月が出來る」鎌倉

といふのは叔父の家の事である。其所でも近かく産があるのだ。

明治四十一年十一月十七日の事だ。

四、輕便鐵道

小田原で湯本行きの電車を降り、前の茶屋に休む。熱海行の發車までには尙一時餘りある。眼の上に焦茶色のぽちのある小さい黑犬が顏を見上げて頻りに尾を振る。左うして菓子を貰ひつけてゐる犬らしい。媚びるやうな眼付きが感心しない。菓子はやらなかつた。

私の側には淺草の者だといふ肥つた男が腰かけてゐる。新橋からづつと一緒で、互に無言で來たが、橫濱の停車場を出る時、其男は私を顧み、初めて口をきいた。

「幾らかお溫かになりやしたな」

「えゝ」

それだけで、その次は平塚を出る時又其男が話しかけた。

「失禮ですが、何方（どちら）へ？」

「湯ケ原へ行かうと思ひます」

「へえ、私も湯ケ原で。湯ケ原はどちらかお宿は決つて居りますか」

「決めてゐます」

「宿屋にも〇〇〇（何か妙な事をいつたが私には分からなかつた）がありませうな」

「えゝ」

「その、いゝのと惡いのがムいませうな」

「あるでせう」

「御病氣ですか」

「いゝえ」

「へゝ、私はその、轉び損してな。一週間和倉へ通ひましたが、薩張り驗がムいません」かういつて裾をまくり、不快な色に腫れ上つた腿を出して見せ、「これからこれへかけて、まだこれで……」と私の顏を見上げる。

「あゝ」私は眉を顰めた。如何にもきたない感じがした。

國府津で電車に乘る時でも、小田原でそれを降りる時でも、其男は何時、私の顏色を覗つて、「此所ですか？」と云ふやうな顏をする。私が一寸默頭いて見せると、お辭儀をしてそこ〳〵に荷物を取下ろす。今ゐる茶屋にも私について入つて來たのである。

最初、何となくいやな奴に思へてゐたが、かう萬事逆はずに出られると自然と多少の好意が湧く。私は茶を飲みながら、此男と少し話した。

却々時が經たぬ。私は町を少し歩いて見る。足が惡いので其男はついて來なかつた。

少さな堀があつて、堀の水はきたないなりによく澄んでゐた。口の欠けた德利が底の溝泥に半分埋まつてゐるのがよく見えた。

見附を入つた所に小學校がある。休み時間で子供が大勢遊んでゐた。廣い運動場で、砂地の爲めに霜柱が立たず、子

供等は地面に轉がり廻はつて遊んでゐた。

私は低い垣根の側に立つてそれらを見た。鼻たらしのきたない子供達で、中には性の惡さうな奴もゐるが、長閑な氣持でかうして見てゐると、どれもこれも同樣に親しい氣持で見られ、面白かつた。

垣に近く、テニス・マッチをやつてゐる連中があつた。三尺幅程の網が地面に描いてある、これがネットで、ラケットは手の掌である。それで立派に試合をやつて居る。打ち込みの名人がゐて、それに大分倒されてゐた。應援隊が盛に彌次つてゐる。

私は時間の許すかぎりそれを見て、又ぶら／＼ともと來た道を引返して來た。途々、一體自分は子供好きなのか、それとも子供のやうな遊び事が未だ好きなのかなど考へて來た。

歸ると、茶屋の婆さんが「直ぐお乘り込みになつてよろしうムいます」と云つた。

乘合は淺草の男の外に水兵五人、頬骨の高い五十ばかりの女と、その娘と男の兒、それと私だつた。

間もなく、へつついのやうな小さい機關車は型の如く汽笛を吹いて發車した。ガタ／＼といやに氣忙しく走る。早川橋を渡り、河岸づたひにやがて石橋山の麓へかゝつた。

「これから段々あぶない路になりますよ」眞鶴の者だと云ふ水兵が隣りの海軍工機學校と書いた帽子を被つた水兵に話しかけた。

「あゝ、左うかね」と此男は大やうに莞爾しながら、眼はそのまゝ海の方を眺めてゐた。

二人は知り合ではないらしかつたが、場所々々で眞鶴の水兵は叮嚀に說明してゐた。

「根府川の石山は陸軍の所轄ですから無暗に切り出せないんです」

「左うかね」

「觀音崎の要塞の石なんか皆此所から出すんですよ」

「お丶、左うかね」とにこ〳〵してゐる。

　根府川の停車場は幾らか坂になつてゐるので、發車にブレーキをゆるめると一寸逆行した。それと同時に車輪が廻り出したから、車體が甚く搖れた。

「ゴースタンとゴーヘーを一緒にやり居るは」大やうな水兵は皆を顧みて笑つた。私達は別に可笑しくもなかつたが、水兵達は皆笑つた。

「成程段々あぶなくなつて來たね」工機學校は窓から首を出して其邊を見廻はした。

「一つ脫線しようもんなら、これだけで海の中へどほーんですぜ」眞鶴は皆の顏を見る。

「なんまいだあ〳〵」こんな事をいふ水兵があつた。

「これからが段々あぶないんですよ」眞鶴は何んとなく得意である。

　實際、路は段々河面を遠ざかる。

「どうです」眞鶴は如何にも嬉しさうだ。

「こりやあ、大分あぶないね」言葉だけはあぶなさうだが顏に相不變にこ〳〵して居る。

　あぶない所へ來る度、眞鶴は

「どうです」と云ふ。

「あぶないね」と工機學校も同じ事を繰返してゐた。小田原國府津の海岸が遠く見えて居る。

先刻から青い顔をしてゐた娘が、母親の胸へ額をつけ、何かいつてゐる。

「頭を冷やす方がいゝよ」母親は抱くやうにして立たさうとするが、娘は力を張つて動かなかつた。

「もどしさうだ」

「だから、立つて窓から首をおだしなさいよ」

「苦しい」娘は泣き出した。

「弱蟲だよ。しつかり立つて顔をお冷やしなさい」と母親は叱つた。

娘は窓へつかまつて顔を出し、そして何かもどした。

「余つ程いゝだらう?」

娘は首肯いた。

母親は袂からハンケチを出し、娘の涙を拭いてやつた。娘は十三四の反齒で眼のギヨロリとした醜い兒だつた。母親も余り感じのいい女ではなかつた。然し如何にも母らしい感情に浸りつゝ拭いてやる、それを此方も既にそれ程の年でもないのに默つて眺めてゐる、かういふ樣子は一種いゝ氣持で眺められた。此年紀に母を失つた私だからであるかも知れないが、感傷的な氣持ではなかつた。

眞鶴へ來て、眞鶴の水兵は下りた。機關車へ水を入れ、熱海からの列車を待つた。間もなく貨車を二輛曳いたのが來て、それと入れ代りに私達の列車は動き出した。

その邊に遊んでゐた學校歸りの男の兒が五六人吾々の列車を追ひかけて來た。一人胸をかけ、片手にビールの空壜を持つた奴が客車の直ぐ側まで追迫つて來た。向ふで貨車に米俵を積込んでゐた小揚人が大聲に、

「乘るぢやあ、ねえぞ」と怒鳴つてゐた。
「乘れ〳〵。かまあもんか」と工機學校の水兵は窓から呑氣らしい顔を突き出し、子供達をおだてた。
汽車が早くなるに從ひ、一人々々落伍して行つたが、七つばかりの如何にもきかん坊らしい涎垂らしだけが一人執念深く追つて來た。どう云ふ心算か草履を片々は穿き、片々は手にはめて、それをきり〳〵振り廻はしながら、むきになつて追ひかけて來る。丁度路が上りになつて汽車は少し遲くなつた。きかん坊は茲ぞと鈍栗眼を出來るだけ剝出して段段に近よつて來た。
「しつかりやれ。しつかりやれ」工機學校は今は起上つて小さな窓から上半身を乘り出すようにして應援した。
もう二三間で追ひつく所まで迫つた時、その子供は不意に立止り、俯向いて了つた。
鈍栗眼に石炭殼が飛込んだのだ。
子供は、眼をこすり〳〵何時までもまぶし相に此方を見送つてゐた。
「はゝゝゝ。殘念で却々歸りよらん」水兵は笑ひながら、それでも氣の毒がり、ハンケチを出して頻りに振つた。
暫くして子供は眼をこすり〳〵歸つて行つた。



わが父と母

宇野浩二

保瀬萬里子、後に團萬里子――これが私の母の名である。

保瀬安之助といつて、日本に初めて國會が開かれた頃に、それの議員として朝野に多少その名を知られた男がある。彼の不斷の職業は辯護士であつた、萬里子は彼の庶子として生れたものである。

が、彼女とその母親との關係はいくらか複雜したものであつた。といふのは、彼女が人となり、小學校や女學校へ、女中に附添されたり、俥で送り迎へされたりして、大事に養育されたところの、四谷仲町の母――即ち安之助の妾であつた人が、實は彼女の眞の母親ではなくて、彼女の生みの腹は、その頃父の家の小間使であつた雛といふものなのであつた。そして、相當の手當を受けて宿に下げられてゐた雛の家で、彼女は生れると間もなく、仲町の家に子として貰はれて來たのである。仲町の母は彼女を眞の母も及ばないやうな愛をもつて育てた。だから。彼女にも母らしい母の記憶は、先づこの母の外にはないといつてもよかつた。が、彼女が十三歳

の時、この母は肺病のために墓の下へ旅立つてしまつた。その翌年、同じ仲町の家に、誰でもなく、本宅の母の方でもなく、又新しい母が母として來るやうになつた。が、その翌年、萬里子が十四歳の秋、父の安之助が突然腦溢血で亡くなつてしまつた。そして仲町の家は間もなく解散になつた。

萬里子の容貌は殆その父にも母にも似てゐるところはなかつたといはれてゐる。それは例へば天才が屢々その父からも母からも、その性質や、才能や、容貌の點で獨立してゐるといふ說に相應するものであらうか。顏からいつても、躰からしても、姿から見ても、彼女は全く美人に相違なかつた。

保瀬家の本宅——それは麴町中六番町にあつた、そこには萬里子の別の母親であるところの、即ち父親の安之助の正妻の鳥子がゐた。安之助の死後、間もなく萬里子はその本宅の方に引取られることになつたのであるが、元來、安之助には萬里子の外に彼自身の子がなかつたので、彼は妻の鳥子の甥に當る厚夫といふものを養子にもらつてあつた。死んだ彼の考として、行く行くは厚夫と萬里子とを一緒にさせるつもりであつた。無論、鳥子もそれに同意してゐた。

だが、萬里子には小學校時代からの戀人——といふと少し大袈裟であるが、さう呼ぶことの出來るものがあつた。もつとも、それは誰の經驗にもあることで、小さい子供同志がいたづらに、比較的仲がよささうだつたり、或は家が近くであつたりする仲間の少年少女を一對に見立てゝ、口先でからかつたり、白墨で壁に二人の名を並べて書いたりする癖があるが、彼等の場合でもそれが始まりであつたに違ひない。小さい萬里子の相手といふのは、それは未だ仲町にゐた頃で、傳馬町の大きな煙草問屋の次男の、吉本小次郎といふ少年であつた。ところで、この二人の浮名はさういふ子供たちの無邪氣なものゝ中では、幾分か根據もあり、永續して行くやうにも見えた。彼等は別に住居が近所である譯ではなかつたが、彼等は學校中での一番目に立つ綺麗な少年少女であつた、そして子供心に互に一方が一方に心を引かれて

行つた。彼等は尋常科から高等科までずつと一緒に進んだ。その間には言葉を交すやうにもなつたし、顔を見合ふことが顔を赤らめ合ふやうな時代もあつたし、さては人目を忍んでそつと會つて何かしら各々の持つてゐるものを交換し合ふやうな時から、默り勝に二十分ぐらゐも堀端を散歩し合ふやうな時も過ごした。が、さういふ風にいふと、この二人の少年少女が實際より少しませて聞える嫌ひがある程で、その時分はまだ何といつても無邪氣な交際に過ぎなかつた。

　そのうちに、小次郎は中學校へ通ひ、萬里子は女學校へ行くやうになつた。それに前後して、萬里子の母と父とが亡くなつたことが起り、彼女が麹町の家に引越すことになつたのである。が、こんな風に二人の間がいろいろな事情で疎隔されるやうになつたことが、却つて彼等を結びつける因縁になつた。或日、中學生であつた小次郎と、女學生であつた萬里子とが、一二年振りで四谷見附の往來で出遭つた。中學生は十六歳で、女學生は十五歳だつた。彼女は顏立が整つてゐるのと、背が人並より高いためだつたか、十五歳よりは幾分上に見られ勝であつた。小次郎も老せてはゐたが、背は高い方であつた。彼等は並ぶと大變似合つた男女に見えた。丁度四谷見附の邊の堀端は、彼等がまだ小學生時代の無邪氣だつた時分に、一二度散歩した記憶のある場所であつた。彼等はその時三十分ばかりその邊を歩いた。無論もう小學生時代のやうに全然無邪氣にといふ譯には行かなかつた。その證據に、彼等はその時互に家の者に悟られないやうにして手紙を交換することゝか、日を選んで又斯ういふ風に散歩をしようとかいふ約束を交した。

　彼等のうちのどちらが先に所謂不良らしい傾向を見せ出したかは知らない。が、どちらにもさういふ傾向があつたことだけは確であらう。彼等は前後して中學校も女學校も中途で止めてしまつた。多分、その時分萬里子は亡夫の養子であり、義母の甥に當る厚夫と自分とが許嫁に定められてゐたことを知つたらしい。彼女がとうとう麹町の家を脱け出して、小石川の方の郊外で小次郎と世帶を持つたのは、十六の秋であつた。彼女は小次郎と同棲してゐた四年の間に、一

度女の子を生んだが、子は生れて一ヶ月としないうちに死んでしまつた。元より彼等の家庭生活は順調なものではなかつた。彼等が各々家を出る時は、小次郎はまつたく勘當同様の身分だつたし、萬里子は今もいつたやうに無斷で義理ある母の家を出奔した次第であつた。もつとも、その時彼女は六百圓餘の金を持出して來た。

初めのうちこそ彼女はそんな不首尾をして一旦家を出たことであるから、二度と麹町の家の敷居を跨ぐことがあらうとは思はれなかつたが、それは最初の一年半ばかりの間の辛抱であつた。それに小次郎の家の方では、何といつても男の子のことでもあつたから、たとへ彼が恥を忍んで我家の敷居を越えたところが、それも父の目に見付かると忽ち犬のやうに追出されねばならなかつたし、それでやつと母に泣きついたところが、結果は僅な彼女の小遣錢を涙と一緒にもらつて歸るに過ぎなかつた。そんな譯で、子が生れて死んだ後の頃、もうどうにもやり切れなくなつたので、彼女は或日思ひきつて中六番町の家へ行つた。そしてそれが皮切りとなつて、それから半年程して又行つたこともあり、一年程經つて、矢張り家の方がどうにもやり切れなくなつて、出かけて行つたりした。

中六番町の母の鳥子は、どちらかといふと厳格な氣質の人であつたにも拘らず、彼女はいつも萬里子と義理ある仲であるといふ理由からだらうか、彼女の並外れた我儘を出來るだけ大目に見てゐるといふ風であつた。それには保瀬家の養子である彼女の甥の厚夫も、餘り身持のいゝ青年でなかつたといふ理由もあつたらう。もつとも彼の不身持については許嫁である萬里子の不身持が原因であるといふ噂があつた。鳥子は又亡夫の遺産――といつて、それは世間で評價されてゐる三分の一もなかつたのであるが、それを保管する責任を負うてゐた。それは當然彼の養子である、彼女の甥が相續することに定められたものではあつたが、それは亡夫の意志として、萬里子が彼の配偶になるといふことに、重要な力點が置かれてあることは疑ひなかつた。それを破つたのは外の誰でもない、萬里子自身であつたとはいひながら、

しかし母の島子の立場として、だからといつて全然彼女を突放す譯には行かなかつた。そして萬里子の方でも、いつとなくそこに附け込むやうになつたのであつた。

　島子はそのうちにどうかして萬里子を小次郎から引離して、自分の方に引取りたいと思ひ出したので、なるべく彼女が來ても金の無心に應じないで、彼女を家に引止めておくようにと心掛けた。彼女もだん〳〵長い、辛い家庭生活に飽きてゐた時分なので、どうかすると半月も、一ケ月近くも止まつてゐたことがあつた。すると、結局古木から手紙が來るか、使の者が來るかして、彼女は又島子から若干の小遣錢をもらつて、男の家へ歸つて行くのが例であつた。男の古木の生活はといふと、彼は元來政治とか、それに關係した文學が好きであつたところから、いつとなく文學青年や若い社會主義者たちと往來し出して、自然若夫婦の彼の家が雜談と喫煙との會所になつた。それにはその家の細君である、若い、美しい女性の萬里子が、何といふ譯なしにではあるが、彼等の引力となつたには違ひなかつた。彼女にしてもどんなに貧乏な生活に愛想が盡きて、がつかりしてゐる時にでも、彼等に集まつて來られると忽ち心に輕い張合ひを感じた。由來女性の本性である通り、彼女も亦どんな生活にも、少しすると、生れた時からのそれのやうに直に馴れてしまつた。どんなに每日夫と睨み合つて暮しても、いふ事でもする事でも、夫が變つて行くのに連れて、彼女も亦變つて行つた。不平いひながらも、彼や彼の友達の通りに彼女もなつて行つた。「中原さん、いくらそんな事をいつたつて、あなたはデカダンだから駄目よ」、と彼女はいつた。「これは手嚴しい、萬里子さんもだん〳〵隅におけなくなつて來たな。」「だつてさうでせう、ね、山根さん。不合理だと思つたら、自分でどん〳〵合理的にやつたらいゝぢやないの、ね？」「贊成々々。」「ところで、古木君はどうしたんでせう、遲いぢやありませんか？」「もしかしたら家の方へ廻るつていつてましたから、廻つたのかも知れませんわ。」「また臑をかじりに行つたんですか。」「それが中々うまくかじれないの

よ。……いつ歸るか分らないものを、待つてたつてしようがないから、散歩に行きませうか。」「それや賛成だが、かまはないんですか、古木君に？」「あら、いやだ、中原さんたら！　私のからだで私が散歩に行くんですもの。」——

　そんな風だつたから、初からもさうではあつたが、彼女は少しも家庭生活といふやうなものには興味を感じなくなつた。小遣錢がなくなると人一倍にしよげる癖に、それが幾らかでも手にある間は、彼女はそれを書生より大膽に撒きちらした。そのうちに家を引越したり、二階借りをしたり、果は夫婦で下宿住居をしたりした末、とうとうどうにもやり切れなくなつて、二人は話合ひで別れることになつた。彼女は古木と別れて、一旦は麴町の家に歸るつもりでゐたのであるが、又氣が變つて、今度は一人で二月餘りも下宿生活をしたり、半年近く素人屋の二階住居をしたりして日を送つた。そして相變らず麴町の家からその費用をもらつてゐたが、結局古木と別れてから彼れ此れ一年ほど後、とうとう麴町の家に歸つた。それは彼女の二十歳の秋であつた。

　それから二年間萬里子は兎に角麴町の家で起き伏しした。その二年間の、彼女の義理ある母の息子の心配と絶望と落膽とは、彼女が家の外で暮してゐた日の何倍であるか知れなかつた。萬里子にして見ると、最初のうちこそ多分に後目たい氣持で小さくなつてゐたが、馴れて來ると反對に「家にゐてやるぞ」といふ氣持になつて、自由に小遣錢などが貰へることから、始終外出して暮した。すると、古木と住んでゐた時分の、彼女の男友達である青年たちに取卷かれて、彼女は女團長のやうに愉快に日を消した。然し、さすがに外泊することと、それ等の友達を家に訪問させることだけはしなかつた。が、それ等のことは却つて彼等を彼女に引きつけることに役立つた。自然、友達が友達を呼んで、彼等の名前は兩手の指で數へ切れないほどであつた。彼女は性質として、持つてゐさへすれば金を貸すことや振舞ふことやが好きであつた。だから、彼女はいつも家を外に出ると、數人の青年たちに取卷かれて、カフエーに行つたり、活動寫眞

を見に行つたりした。

無論、さういふ風であつたから、厚夫との結婚問題などは、同じ屋根の下に住んでゐながら、彼にとつても、彼女にとつても、或は母の鳥子にとつても、昔の夢の話に過ぎないやうなものになつてゐた。厚夫は高等商業を出て、どこかの會社に勤めてゐた。が、會社は四時に引けるのに、彼が歸つて來るのはいつも十一時を過ぎてゐた。厚夫と萬里子との他所から歸つて來る車が、夜更の門のところで落合ふことも珍しくなかつた。そのうちに、それは多分彼女を取卷いてゐる青年たちにすゝめられたものであらう、彼女は女優になる考を起した。

鳥子はそれには珍しく可成り頑固に反對した。が、萬里子も一旦いひ出したことなので、決して志をかへなかつた。終には厚夫までが萬里子に贊成して、鳥子を說きにかゝつた。結局、萬里子は又家を出ることになつた。彼女は鳥子から千圓の金をもらつて、女優の生活を始めた。それから後の彼女のはつきりした生活の順序は彼女自身の外、否、彼女自身でさへも後になつては思ひ出せない程、混亂を極めたものであつた。彼女の女優生活といつても、唯一回の興行に出た切りであつた、そしてその僅な間に、家を出る時もらつた金はすつかり失くしてしまつた。或時は古木を久しぶりで尋ねて行つて金を借りようとしたり、雜誌記者にならうとしたり、女學校時代に敎はつた敎師の家に居候をしたり、そして隨分放縱な生活を送つたらしかつた。さすがにもう麴町の家の敷居をまたぐことも出來なかつた。それればかりではなかつた。丁度彼女が二十五歲の時であつた、彼女は男の子を生んだ。その子は育つた。が、彼女は別の病氣に罹つて、子を生んでから未だ半年以上病院を出られなかつた。そして、退院する時には、赤ン坊と一緖に麴町の家に引取られたのである。その子の名が安夫であつた。──そして安夫が私の名である。

團順三郎――これが私の父の名である。だが私の眞實の、つまり彼の血が私の血であるところの父は誰であるか、それは神の外に知るものはない。けれども、團順三郎――彼を、私は殆ためらふことなしに、父と呼ぶことが出來るのである。

順三郎は順道といふ、京都府下の或貧しい寺の住職の三男であつた。母は幹子といつた。若い頃、順道は美男で、始終村の娘たちの取沙汰の的になつた。大膽な娘たちからは附文をされたり、言ひ寄られたりしたことさへ珍しくなかつた。幹子は當時傾きかゝつてはゐたが村で指折りの舊家の娘で、その頃としては珍しい女子の學生であつた。彼女は不斷は京都にある親類の家に寢泊りして、女學校に通つてゐたのである。或夏の休暇に彼女は村の自分の家に歸つて來た時、順道を見て、とうとう病氣になつた程、戀を感じた。彼女はそれを包み切れなくなつて、母親に打明けた。そこで、彼女の家の方から結婚を申込んで、そして二人は夫婦になつたのである。幹子は美人ではなかつた。

彼等の生涯のうちでの最も著しい出來事は、初め妙な機會から幹子が基督信者になつて、一年後にはとうとう順道も說きすゝめられて、基督信者になつたことであつた。順道は女のやうに氣の優しい、弱い、至つて溫厚な性格であつた。彼は基督信者になる前に、妻の斡旋で、彼女の母校である京都の女學校に、國漢文の教員を勤めることになつた、そして彼は死ぬまで同じ學校の教員であつた。彼等の間に生れた三男の順三郎は、父に似て小柄で、母に似て甚だ風采が上らなかつた。彼の長兄は中學校の教員になつてゐたし、次の兄も、彼が中學校時代には既に高等工業學校を出て、或織物會社の技師になつてゐた。母の幹子の希望では、彼を基督教の牧師にしたかつた。彼も中學校を出る時分まで、そのつもりでゐた。彼等の宗旨は加特力宗であつた。彼は佛蘭西語と、伊太利語とを勉强して、牧師になつた上は、行く行く教會の援助でも得て、佛蘭西にも、伊太利にも遍歷したいといふ、夢のやうな空想を樂んだ時もあつ

た。それを吹き込んだのは彼の母であつた。幹子は年取つてから思ひがけなく腹を痛めて生んだところの三男の頭を撫でながら、「お前は大きくなつたら英語を澤山覺えて、母さんを連れて、基督樣のお生れになつたところや、伊太利や、佛蘭西の大きなお寺に參るんだよ、ね、お母さんと一緒に、」などといひながら、遠い地方の聖地や寺院の寫眞を見せ又見せた。だが、彼は中學校を出る頃から、いづれ牧師になるとしても、今からすぐに牧師の學校に這入つて、つまらぬ、名もない牧師になることよりも、もう少し何か……何かを獲得したい氣持になつた。何か……それは彼自身にも分らなかつたが、何かもう少し學問をしたいと思つた。中學校を出る少し前に、彼はその考を母に漏らした。それは彼の兩親にまで不意だつた。が、とうとう彼は父を說いて、その上東北の方の中學校に勤めてゐる兄からも多少學資の補助をしてもらふ約束をして、外國語學校に入學することになつたのであつた。

彼は上京した最初の半年程の間は、大抵の學生がさうである通り、勤勉な學生であつた。學資の關係から、下宿屋を選ばないで、素人屋の汚い四疊半の二階を借りて、自炊して學校に通つた。が、後になつて考へて見ると、これ迄兩親の家にゐて、而も基督敎徒的な窮屈な家庭に閉ぢこめられて來た樂何のことなので、上京と共に、豐富にはない迄もさういふ自由な生活に這入つた瞬間から、彼の氣持に弛みが出來たといふことがいへよう。それに、彼が這入つた外國學校の當時の學生の氣持がひどく文學かぶれをしてゐたといふことも見逃す譯に行かない。そして彼等の間には當時の文壇の影響を受けて、放縱な、享樂的なもの丶考へ方が流行してゐた。それは順三郎が長い間養はれて來たところの、基督敎徒的の氣分とは反對のものであつた。それだけ、彼はそれに心を引かれ出した。自然、さういふ氣質の學生たちと主に交際するやうになつた。彼はいつとなく學校を怠け出して、文學の本に親しむやうになつた。それからなけなしの財布をはたいて、淸元を習ひに通つたりした。無論、友達に誘はれて酒色を漁りに行くことも辭さなくなつた。そん

な風で、一年級は無事に通つたが、三年に上る時は到頭落第さへした。が、彼は落第のことは家に知らさずにおいた。彼が保瀬萬里子を知つたのは、その時分のことであらうか。

　順三郎が萬里子に初めて會つたのは、やうやく彼の氣持が落着きかゝつてゐた時であつた。何故といつて、その半年ほど前に彼は或女に失戀して、もう少しで死にかゝるところであつた。が、彼は死ぬことを思ひ止まつて、溜息ばかりついて日を送つてゐた。そして最早や溜息つくことも殆止みかゝつてゐた時であつた。實際、その前の一年餘りの間といふもの、彼は絶えず惡感を覺える熱病にかゝつて、頭から蒲團をかぶりそしてかぶりして暮したやうなものであつた。相手は文學を研究してゐる女學生であつた。その女は彼の友人の從姉妹に當るもので、當時或女學校の研究科の學生であつた。それは不思議な性格の女であつた、そして美人でもあつた。

　彼のやうに、曾て一度も女性の友達らしい友達も、或は戀人も持つた經驗のない者にとつて、その女のやうな複雜な性格の女は、餘りむつかしい試驗であり過ぎた。彼女は見たところ甚だ自由な氣持を持つてゐる人のやうに見えた。彼女は彼女の接してゐる男たちには、誰にでも好意あるやうな目附をしてものを言つた。そればかりでなく、彼女は彼等の誰にでも「私はあなたが好きだ」といふ言葉を振出した。彼女は彼女自身の氣まぐれな氣持から、時に依ると誰をでも訪問したり、誰にでも、どんな女でも共通して持つてゐるところの、所謂打明け話をしたり、要するに彼女は誰彼なしに親友扱ひにした。まつたく、彼女は妙な魅力を持つた女であつた。だから、數多の男たちが彼女の門に集まつた。

　そして順三郎もその中の一人であつた。

　が、性質が内氣で、殊に始終自分の風采などに引け目を感じてゐた彼は、さういふ大勢の男たちと竝んで、表面から彼女に迫るやうなことは決してなかつた。それどころか、彼は自分の戀をどんな微かな方法をもつてでも、彼女に打明

けようとしたことさへなかつた。が、いふ迄もなく、心の中では焼けるやうな思で戀してゐた。彼はなるべく訪問客の來てゐなさうな雨の日とか、朝早くとか、何々の本を貸してくれとか、此間の本を返しに來たとか、さういふ用事をこしらへては、そつと彼女を訪問することが彼の力一ぱいの仕草であつた。そしてその時のたつた三十分か一時間の訪問に依つて、彼は後三日も晴々と暮したり、或は陰欝に送つたりした。いつの日に、自分は彼女と愛人同志のやうにして交際することが出來るだらう、或は一緒の家に住むやうなことが、いつの日かあるだらうか、などとは彼は夢の外には決して考へたことはなかつた。しかし、彼女が自分とさういふ日を迎へることは想像の外として、同じやうに彼女が自分以外のどんな男とも決して特別の關係をつくることも、彼は絶對にあり得ないことと信じてゐた。現に、その社會的の位置からいつても、或は風采からいつても、確に優れてゐると思へる某にしても、別の某にしても、彼女ははつきりと「あゝいふ頭のない人たちは、いくら男振がよくても役者と同じことで、私は嫌ひです、」といひ又いひしてゐた。順三郎は彼女の言葉を信じてゐた。時々疑問に思はれることがあつても、彼はしかし、彼女の言葉の方をつとめて信じようとした。

ところが、とうとう彼女は身持になつたのである。どんなに彼女の言葉を信じやうとしても、目に見えるものを打消すことが出來なかつた。順三郎は或晩下宿屋の部屋の欄間から帶をつるして、死なうと思つた。彼は聲を上げて泣きながら部屋の中を歩き廻つた。それから半年ほど經つたのである。

彼は久しぶりで聖書をひらいて見た。中學時代に基督教徒の家庭の子として讀んだ時とは全然違つた意味をもつて、それは彼を、靴の上から掻くやうな感じではあつたが、慰めてくれた。それから彼は以前少しばかり親んだ三味線音樂にも近づいて見た。それは僅二三ケ月ほどしか通つたのではないが、師匠から質がいゝと惜まれただけあつて、彼に新

しい樂みとなつた。そして初二三ケ月の間は、彼は殆人と往來しないで孤獨で暮してゐたのであるが、そのうちにいつとなく一人附き合ひ、二人友達が出來して來た。そしてその友達の一人に保瀨萬里子に紹介されたのである。

「保瀨安之助といふ古い、ちよつと有名な政治家があつたよ、君なんか名前を知らないかね。その娘だよ。面白い、變つた女だよ、」と友人から聞かされた時は、彼は殆無關心に聞いてゐた。が、その友人に連れられて、本郷臺町の路次の格子の嵌まつた家の二階を訪問して、當の萬里子を見た瞬間、彼は忽ち熱病に取りつかれたのを感じた。何といふ不思議だらう。それは彼が失戀した女學生に、目もとから鼻つきから殆相似といつてよかつた。そしてこれはかれより總ての點で優れてゐた。順三郎はこんな美しい女がこの世にゐたらうかと思つた。前の時には彼自身意識しないうちに少しづゝ戀して行つたのに比べて、此度は最初の瞬間から全心をもつて戀をした。彼女が少し汚れ目の見える褞袍を着てゐるのも、借り物らしい古びた机にもたれてゐるのも、部屋の中が亂雜で、どことなしに主人の落魄を語つてゐるのも、悉く彼には魅力であつた。そして、何といふこともなく、今度こそ彼はどうかして、彼女が得られさうな氣がした。

その日から彼は聖書と三味線とに別れて、初は彼女を知つてゐる男友達を尋ねて、一緒に彼女を訪問するとか、そして彼は彼女と會つてゐる時も、會つてゐない時も、明けても暮れても彼女を思ふ思で一ぱいになつた。が、彼女も前の女の場合と似て、彼はだん／＼馴れて一人で訪問するやうになつたが、そこに誰か彼か男友達が尋ねて來てゐないことがなかつた。だから、彼はまた彼女を取卷く數多の人々の中の、どうかすると目に立たない一人になりさうだつた。しかし、この前の失戀の經驗の後で、彼は幾分大膽になつてゐたのと、この前の場合には、女を取卷いてゐた人たちが大抵彼より大人であるか、金持であるか、社會的の位置があるか、何か彼か優れたものたちであつたのに比べて、今度はその點でみな彼並の青年ばかりであつたのとで、彼は稍勇敢に振舞ふことが出來た。彼は先づこの前の時のやう

に、戀を心の中に包んでおくことは止めて、極めて音無しい仕方ではあつたが、なるべく人に知られるやうに心がけた。さうすることに依つて、彼は彼の思を彼女に通じることも出來た譯であつた。

が、萬里子は直にそれに應じるやうな初心な心の持主ではなかつた。そして又彼女は彼の戀を通じられても、それに報いる心持を感じなかつたのも主なる理由であらう。彼女は彼の戀を知つても、別に彼を排斥しようとはしなかつたが、それ以前と少しも變らない態度をとつてゐた。そんな風にして、半年も、又一年も經つて行つた。その頃の萬里子の毎日はまつたく不良少女の毎日であつた。吉原の近くのカフエーで夜半の二時過まで數人の男友達と飲んで、彼等に送られて家に歸つて來た時には夜が明けてゐた、それからみんなで夕方近くまで雜魚寢をしたとか、一二週間前まではA――と確に怪しかつたが、此頃はB――が氣に入りで、現に二日ばかり彼女の姿が見えなかつたと思ふと、同じ時間だけB――も姿を見せなかつたとか、かと思ふと、女優時代に花束を贈つて來た男と近頃又往來し出して、その男から小遣錢を得てゐるらしいとか、無數に、いろ／＼な惡い噂が立つた。が、それ等のどんな噂の中にも順三郎の名前が這入つてゐることはなかつた。順三郎はいつの時でも彼女には影のやうに附き纒つてゐる哀れな男としてのみ知られてゐた。そして、順三郎の外には、彼よりも若い、彼よりも快活な、哀れでない、數人の青年たちがあつて、彼等も矢張り始終彼女を取卷いてゐた。そして彼女は取卷かれることを樂んでゐた。

それ等の男友達から比べると彼女は流石にどういふ風にして得て來るのか、矢張り一番金廻りがよかつたので、すると、彼女は出來るだけ大勢の彼等を連れて、カフエーを廻り歩いた。無論、その中にはいつの時でも順三郎はまじつてゐた。或時二三軒のカフエーを廻り歩いた後で、彼女を始め彼等は悉く酩酊してゐた。これから淺草まで歩いて行かう、といふので、本郷から大學の構内を通り拔ける爲に、彼等は口々に何かのマーチを口吟みながら、三々五々と進行

してゐた。「あゝゝ疲れた。これから未だ淺草まで隨分あるな。」と順三郎が獨言のやうにいつた。すると、萬里子はそれを聞き咎めて、しかし冗談に、「あゝいふ弱音を吐く人は毆つておやりなさい。」といつた。すると、酩酊してゐた青年たちは口々にマーチの譜をつゞけながら、忽ち順三郎を取卷いて、本當に袋叩きにした。「おゝ痛い、痛い。わが萬里子の爲に……」と毆られながら、順三郎はせい一ぱいの辛抱と、智惠とを絞つて叫んだ。すると、友達の青年たちは「感心、感心……」といつて、毆る手を止めて、四五人して彼を前後左右から抱き上げながら、元の通りに歩調を進めた。順三郎はそんな風にまで變つてゐた。

そのうちに萬里子が身持になつた事件が起つた。自分の戀する女が、自分に一度の接吻さへ許さないうちに、身持になつた經驗は彼に二度目であつた。二度といふのは彼の生涯での戀らしい戀の數でもあつた。が、彼はこの前の時のやうな絶望の狀態には陷らなかつた。「私、子供が出來たらしいのよ、岡さん。」と彼女は妻が夫にいふよりももつと平氣な調子で報告した。「ほお……」と彼は叫んだ。「誰です……お父さんは？」「わからないわ。」——けれども、さすがにそれから三日程の間といふもの、彼は自分の下宿の部屋の机にもたれたきりで、便所の外には立つことさへしなかつたが、四日目からは今までと同じやうに彼は彼女を訪問する度數を緩めなかつた。彼は心の中で、この事が聞えると、外の男友達の中には多少彼女を離れるものがあるだらうと豫期した。が、殆それも變りはなかつたので、輕い失望を感じた位であつた。彼女は生み月の少し前まで相變らず男たちを連れての散歩を止めなかつた。が、愈々病院に這入つて、子を生み落すと共に、先にいつたやうに彼女は可成重い病氣に罹つたのであつた。彼は毎日その病院に見舞に行つた。

彼はもう學校のことなどはまるで念頭になかつた。一度落第して、而もその事を家の方には内所にしてある以上、眞面目に勉强したところが、卒業の一年前までの學資しか送つてもらへない譯であつた。最早や彼には基督教會の牧師に

なることなど夢にも考へられなかつた。いふ迄もなく、彼は一切のものを投げ打つて、一人の女を得たいと思つてみたのだつた。そして、本當に一切のものを投げ打つたが、一人の女は中々得られなかつた。彼は乞食になることとさへそんなに苦痛とは思はなかつた。唯、時々彼を惱しましたのは、母の幹子からの消息であつた。どの母もがさうであるやうに、彼女は上の二人の子に對する愛を二倍したよりももつと、三男の順三郎を愛してゐた。初、彼女はその愛する息子が基督の爲に仕へる仕事をすることを無上の喜としてゐた。彼女は彼を神の爲に與へられた子として喜んでゐた。が、東京に出てから一年經つた夏の初に、學校の休暇と共に、順三郎が疲れて蒼白めた顏をして、突然歸つて來た。その晩、彼は母に病氣であることを打明けて、然し、お父さんにいつたら心配するだらうから、内緒で病院の代を都合してくれと頼んで、一週間餘り入院した。その病氣がどんなに恥づべき種類のものだつたかを、入院中の子を見舞に行つて、幹子は知つた時、彼女は目の前が眞暗になつて、卒倒しかゝつた程であつた。それから、夏の終の日であつた、彼女は順三郎から牧師になることを思ひ止まつて、文學者になりたいといふ志望を打明けられたのは。……だが、どんな苦みも惱みも月日は一切を風のやうに消してしまつて、母の心には昔ながらの、二人の兄の子に對する愛を二倍した愛が、彼の上に殘されただけであつた。

母は彼に今は何になつてくれと注文しはしなかつた。彼女は唯彼が首尾よく學校を卒業して、彼の二人の兄のやうに中學校の教員にでも、或は會社の技師にでも、何にでもいゝ一人前のものになつてくれさへしたらよかつた。彼女は兄たちのところへも、或は姉の子の嫁いでゐる先へも、何處へも行かないで、彼のところへ身を寄せられる日まで、年取つた夫と二人で待つてゐるといふのであつた。年取つた夫——即ち順三郎の父も亦彼がさうなる迄は、學校の方から辭職させられない限り、三十何年勤めてゐる女學校の教員をして待つてゐるといふのであつた。が、不幸なことに、彼は

順三郎が萬里子を知つた半年程後に、一週間のわづらひで、突然あの世に行つてしまつた。それ以來母の幹子は娘の嫁いた先の家に行つて、順三郎の出世を待つてゐるのである。

だが、順三郎は益々出世と反對の道を歩いてゐた。彼は東京で、母のことも、學問のことも忘れて、萬里子と彼女の赤ン坊の寢てゐる病院へ日參してゐた。赤ン坊は間もなく麴町の母の家の方へ引取られて行つた。萬里子の病氣が峠を越して、次第に快方に向ふと、又誰が喇叭を吹いたともなく、昔の通り大勢の男友達が彼女の病室に集まつて來た。が順三郎の微かな希望としては、彼だけが彼女が蟲の息のやうな呼吸をして苦んで居る時から、少しも休まない見舞者であつたといふことだけでも、今度彼女の病氣が癒つて、元のやうな身體になつたら、唯よりも彼が最も親友として待遇されるだらうといふ事であつた。現にさうと思へるやうな口吻が彼女の口から洩れた事も一度や二度でなかつた。ところが、彼の不意にまで、彼女は病氣が回復すると共に、品物のやうに呆氣なく麴町の家へ引取られて歸つてしまつた。

それから半年程といふもの、幾ら手紙を出しても、萬里子からどんな消息もなかつた。それは彼のところへばかりでなく、會ふ友達がみな「君の方へ萬里子さんから便がないか、」と問いたことからも察しられた。いくら此方から手紙を出しても、彼女の目に這入らないうちに、彼女の義母がそれ等を沒收してしまふのかも知れなかつた。たゞ一度、萬里子とそんなに親しくなかつた或男の話として、彼女を京都で、彼女が男と並んで歩いてゐるのを見かけたといふ噂が傳はつたことがあつた。すると、割合に彼女の家の消息に通じてゐる男の話に、此頃彼女の許婚者であつた厚夫が、勤先の會社の都合で京都の方へ行つてゐる。彼女はその方へ行つてゐるらしい、が、赤ン坊は麴町にゐるらしい、現にそれが乳母らしいものに抱かれて、六番町の家から出たのを見た、などといふ噂も傳はつた。附加へていふには、彼女は許婚者としての厚夫は拒んだものゝ、元より浮氣者のことではあり、厚夫は中々の美男であるから、彼女は平常から嫌つ

てはゐなかつた、もしかすると、ずつと以前から關係があつたかも知れない、厚夫には今は細君はあるが、萬里子の事だから、それが彼女と彼とが潔白である證據にはならない、――「どうだい、團君、君も一つ京都まで出かけては？」

それは彼を叩きのめされたやうな氣持に陷れたゞけで、彼は愈々救ふことの出來ない憂鬱に沈んだ。彼は毎日自殺の誘惑と戰ひながら暮した。その次には彼はいつそ國に歸つて、片田舍で小學校の教員にでもなつて、年取つた母親と一緒に暮さうかとも考へた。ところが、或日萬里子が不意に男友達の一人と連れ立つて彼の下宿に尋ねて來て、いふには「私、これから又ちよく／＼遊びに來てよ、よくつて。」「京都へ行つてたの？」と尋ねると、「えゝ、行つてたわ。みんな耳が早いのね、」と彼女はいつた。「赤ちやんは？」「ゐるわ、」と彼女は答へた。

が、彼女はいつた通り、そんなに屢々は現れなかつた。來ると、彼女は本心からさういつてゐるのかどうか分らなかつたが、もうすつかり志を改めたとか、少し色んな事を習つて眞面目に結婚するのだとか、「私、この頃毎日お茶の水のお裁縫の學校へ通つてるのよ。そして家では女中と一緒にお料理の稽古もしてるの。」などといつた。「結婚の相手は定つてるの？」と順三郎は相手の目を見ないで聞いた。「定つてるもんですか。探してるの。お母さんなんかも一所懸命に探してるわ。」「赤ちやんは？」「赤ちやんなんかどつちだつていゝわ。」しばらくして、「僕ぢや駄目ですか？」と順三郎は聞いて見た。言下に、「あんたなんか駄目。以前のお友達はみな駄目　私、ちよつとでも好きな人とは結婚しないつもりよ。結婚は見ず知らずの人に限ると思ふの。そして、以前のお友達はみんなお友達にしておくの、」と彼女はいつた。かと思ふと、「いや、私、結婚したら本當に背無しくして、もう男のお友達なんか一切こしらへないの。以前のお友達ともすつかり別れてしまふの、そしてみんな思出にしてしまふの。……あ、さうさう、團さん、あんた、私に佛蘭西語を教へてくれない？」「あゝ、いつでも教へたげるよ。本當に習ふ氣なの？」「えゝ、本當よ。ぢやあ、毎日來るわよ。」』

戀する者にとつては、女のどんな氣まぐれな言葉でもが、一つ一つ胸にしみとなつて殘らねばならなかつた。それから彼女は二週間ばかりの間、殆毎日順三郎のところへ佛蘭西語を習ひに來た。無論、無駄話の方が多くて、佛蘭西語を少しもやらないで歸る日も珍しくなかつた。彼は彼女に別れると、女が殘して行つた幾つもの言葉の斷片を思出しては、それ等を繰返し繰返し、表返したり裏返したりして、いつ迄たつても初戀の青年のやうな惱みをくり返してゐた。

そして又一年半程經つた。彼女は現れると、月のうちに四五度も姿を見せたり、消息がなくなると、二月も三月もばつたり顏も出さなかつた。順三郎はもう學校にゐる時期を過ぎたので、家の方から學費を仰ぐ譯にも行かなかつた。それどころか、一日も早く彼の身の固まるのを待つてゐる、彼が呼びに來るのを待つてゐるといつた風の、母からの手紙に、屢々暗い心に陷れられた。彼は母を呼ぶどころか、彼自身の月々の生活費さへ容易に得られないで苦しんでゐた。彼が唯一の藝であるところの、飜譯の仕事も、稀にしかありつくことが出來なかつた。そして戀、而も摑むところのない戀。今となつては、彼がたとへ勇氣を出したとしたところが、彼女に戀を打明けることも、それを打明けた手紙を書くことも、最早や何と手を出しやうもない狀態にあつた。何故といつて、彼は過ぎた何年間かの間に、何度打明け、何度書いたか知れなかつた。が、それは一度もはつきりと退けられたことがなかつた代りに、一度もはつきりと受入れられたこともなかつた。そして、彼女は相變らずけろりとして友達のやうに彼を尋ねて來た。そのうちに、彼女は又ばつたりと一年餘り姿を見せなくなつた。

その一年の間に、順三郎は幾度住所を轉々したか知れなかつた。それは物好きのためではなく、貧乏からであつた。**だから、引越したといふよりは、下宿屋から下宿屋を逃げて廻つたといふ方が適當であつた。從つて、彼の友達の中でも今現在彼がどこの何といふ家にゐるかを知つてゐる者は殆ないといつてよかつた。唯、彼はその度毎に萬里子と母親**

のところへだけ知らせてやつた。後者からはその度毎に彼の身の上を案じて、どうして前のところが氣に入らなくなつたのかとか、なるべく辛抱が出來る限りは餘り居を變へない方がいゝとか、そんなに慌しい日を送つてゐたのでは勉強が出來ないだらうとか、いろ〳〵と書いて來た。だから、彼が引越すと、三四月位に、必ず彼のところへ初めて配達される郵便は母からのものであつた。そしてその外の何處からも、幾日經つても何にも來なかつた、無論、彼女からも。

　そして、彼が彼女に就いて、空想の中では別として、現實のものとしては殆忘れかゝつてゐた頃であつた。彼が氣のすゝまない安飜譯の原稿を書いてゐるところへ、下宿の女中に案内されて、一年振りで萬里子が現れた。「私、今日は相談があつて來たの、」と彼女が前置していふには、近頃はさすがに寛大な民子も、彼女に一文の無駄な小遣錢をくれないばかりか、殆絶對といつてもいゝ程に外出も許してくれない、そして二言目には結婚せよといふ、相手は電車の車掌でも、夜店の商人でもいゝから、正式に籍からもらつてくれる人なら、萬里子の思ふところへ結婚せよ、それには今はもう仕度も何も出來ないから、現金で三千圓だけ持たして上げよう、——斯ういふのださうである。「で、私、とうとう決心したの。結婚したら兎に角家を出られる譯でせう。それに、三千圓といへば、まあ少しは纏つてるわね。だから、私、結婚しようと思ふの。それでね、團さん、あんた結婚してくれない？　私に團萬里子といふ名をくれない？　その代り半分、千五百圓だけお禮に上るわ。ね、いゝでせう？」

　順三郎の身體は熱を病んだやうに震へはじめた。が、彼はなるべく自分と自分を落着けて、「あなたさへよかつたら、いつでも……」と答へた。「内容は又別のことよ。兎に角、形式の結婚をね、」と萬里子がいつた。「えゝ。どうでも……。だが、子供は？」と順三郎が聞いた。「子供はどつちでもいゝの。一緒ぢやあ面倒だとも思ふし、玩具の代りに連れて來てもいゝと思ふし、」と彼女は何でもなささうにいつた。「お母さんはどういつて居られるの？」「お母さんもどつ

ちだつて、お前の好きなようにおし、といつてるの、」と彼女は答へた。「ぢやあね、」と彼女は最後に、「さう定めてよ。だから、ね、園さん、どんな小さい家でもいゝから家を一軒借りておいてくれない。まさか下宿屋へお嫁に來る譯には行かないからさ。私、こゝに五十圓あるから、これ上げるわ。あんた、何とか工夫して、ね、一兩日中にどこでもいゝから見つけといてくれない。郊外でもいゝわ。」――順三郎はしばらく考へてゐた後で、「あの……僕、そしたら園から母を呼んでもいゝか知ら?」と聞くと、「お母さんなんか當分呼ばない方がいゝわ、」と彼女は答へた。

萬里子は愈々順三郎と結婚した。彼と一緒に下澁谷に住むことになつた。彼女は安夫を生んでからも、殆母親らしい世話をしたことがなかつたにも拘らず、子は矢張り彼女を一番に慕つた。彼は毎日乳をくれた乳母よりも、眞實の祖母より可愛がつてくれた鳥子よりも、他人のやうに素氣なく見える母の萬里子を一番慕つた。で、彼は萬里子と一緒に彼女の夫のところへ連れられて行つた。そこでも、萬里子は相變らず素氣ない母親であつた。そして、その代りに順三郎が親身のものゝように安夫を可愛がつた。安夫も順三郎によく懐いた。

だが、夫婦の籍を入れて、保瀬萬里子が園萬里子となり、二人が一つの屋根の下に起伏するようになつても、彼等の交際は昔からの關係と少しも變らなかつた。約束の通り、順三郎は彼女と結婚すると、彼女から千五百圓もらつた。即ちそれで彼は彼女に園といふ姓を賣つたといふに過ぎなかつた。彼女は彼のところに來た日から早速外に出てしまつて、おまけにその晩は歸つて來ないで、翌日になると、昔ながらの彼女及彼に共通した大勢の友達を連れて來た。そして彼等も彼女を決して園萬里子としてゞはなく、昔のまゝの萬里子と遊ぶやうに遊んでゐた。夕方になると、順三郎は

又彼等と共に屋敷となつて、彼女を取卷いて町の燈火の方へ出て行つた。そして、その翌日も、その翌々日も。そして、彼女も彼等も二年前三年前の彼女と彼等と少しも變らない振舞をしてゐた。「園君もしかし本望だらう、萬里子さんと結婚して。隨分長い間のことだつたからな、」などと時にはいふ者があつた。が、順三郎は次第に二十歳の東京に來て間もなくの頃の彼の面影に後戻りして行つたやうに見えた。彼は次第に憂鬱になつて行つた。彼だけが相變らず快活な仲間から、段々離れて行くやうに見えた。

たとへば家にゐる時でも、座敷で大勢の男たちが萬里子を中心に賑かな話をしてゐる中から、順三郎の姿は消え勝であつた。彼は彼の勉強間に定めてある三疊の部屋に引込んで、小さい安夫を相手に玩具の汽車を動かしたり、繪雜誌の頁の上に二つの頭を並べたりして遊んでゐた。安夫は、多分幹子に教はつたのであらう、いつの頃からか、彼を「父さん」と呼ぶやうになつてゐた。が、一方、彼と萬里子とが、わざ〳〵戸籍の上でまで結婚してゐながら、結局何の夫婦の關係も結んでゐないといふことが、誰いふとなく友達仲間に知れ渡つたと見えて、その爲に特に彼等が彼を輕蔑するやうな振は見せなかつたが、しかし彼等の彼女に對する交際が一層放縱になつたことは爭れなかつた。そして彼女も出來るだけ放縱になつてゐるやうに見えた。實際、考へて見ると、隨分我儘者ではあつたが、彼が知つてからの彼女の長い月日のうちでも、今ほど我儘に暮してゐるのを見たことがないやうに思へた。考へて見ると、結婚といふ名目で、彼女は彼といふ看板を出しておいて、安心して勝手な振舞をしてゐるやうにも見えた。まつたく、斯ういふことなら、結婚といふ美名は外の者に讓つて、彼も昔の通り彼等の仲間に這入つてゐた方が、もしかすると……。が、さうして、彼が浮かぬ顏をして、五分間と机の前に坐つてゐる間がなかつた。「お父さん、遊ばう、」といつて、安夫が彼の背中につかまつて來るのであつた。

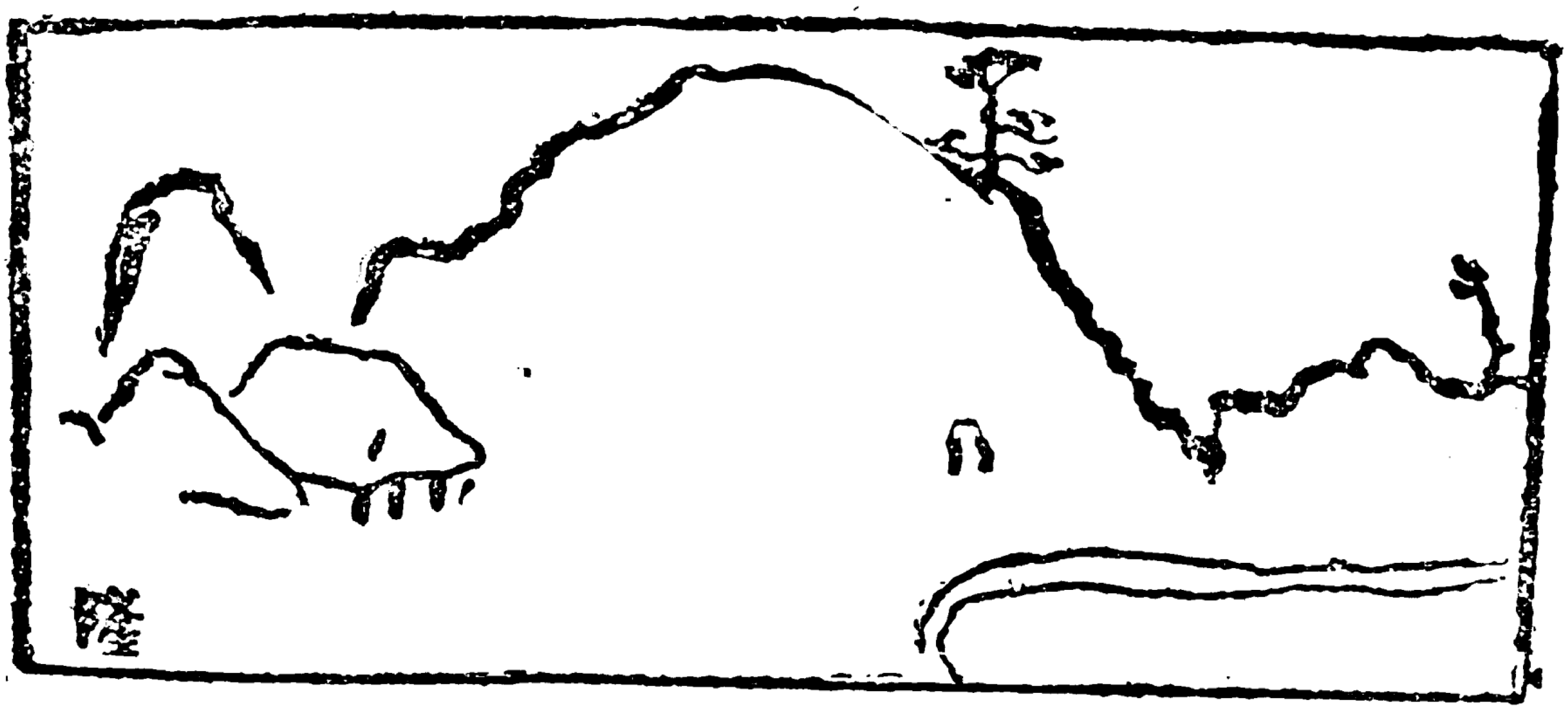
そのうちに彼女は又女優になつた。それは彼等が結婚してから未だ二ケ月足らずのことであつたが、彼女が家から貰つて來た三千圓は、彼の手に二百圓程殘つてゐた切りで、悉くなくなつてゐた。「もしかすると、私、旅に出るかも知れなくつてよ、」と或晩彼女がいつた。「どうして？」と彼は顏を讀みかけの雜誌の方に向けたまゝで聞いた。「芝居の方か

ら?」「それやどうだか分らないわ。」と彼女はいつた。妙なことをいふな、と彼はふと心に咎めて感じたが、いつもの通り何にも追求しなかつた。ところが、果してそれから二三日後の晩から、彼女は歸つて來なくなつた。翌日になつたら歸つて來るだらうと思つたが、歸つて來なかつた。その晩、歸らなかつたら、劇場の方へ聞きに行つて見ようと思つてゐたところが、その夜半から彼は急に發熱して、翌日はどうしても起きられなかつた。彼は安夫に車屋を呼びにやつて、劇場に問合せの手紙を持たせてやつた。が、驚いたことには、五日程前に彼女はその劇場とは關係が切れたといふ返事であつた。何も知らない安夫が「母さんは、母さんは?」といひつゞけた。「今歸つて來るよ、もうたつた今、」と彼は床の中から安夫を、そして彼自身を激ますやうにいつた。

一方、車屋を走らして醫者を迎へたり、看護婦を呼んだりした。そんなに重い病氣でもないやうに見えたが、家の中に大人の手がなかつたので、さうするより仕方がなかつた。が、最初の日の醫者の診斷では多分風引だらう、少し熱が高過ぎるが、といふ程のことであつたが、それがチブスであることが翌日になつて分つた。そこで、看護婦を二人に増やした。安夫が彼の枕元につき切りで、「父さん、母さんは、母さんは?」といひつゞけた「あゝ、母さんは今に歸つて來るよ、」と彼は熱に苦しめられながらも、始終斯ういつた。それは安夫に氣安めにいふつもりだけではなく、彼自身にも矢張り「今に歸つて來るだらう、今に、」と思つてゐたのに違ひなかつた。

が、すべてのこの病氣の徴候である通り、熱は一日一日と上つて行つた。囈言の中でも彼は「母さん、母さん、今に歸つて來るよ、今に、」と始終いひつゞけた。三日目かに、彼の友達が來て、五日目に國の彼の母に宛てゝ電報を打つた。が、彼の母も、そして安夫の母も着かないうちに、彼はとうとう息を引取つてしまつた。安夫は彼の死ぬ三日前に、麴町の家に引取られて行つた。

――これが私の父と母の歷史である。



人生の幸福

正宗白鳥

人物

安城豐次郎

水島喜多雄（弟）

かよ子（異母妹）

寺沼栞（學者）

別莊番　藤七

一

初夏の頃の夜明け前。芝生の庭園。その一端にある日本建ての別莊の雨戸はまだ鎖されてゐる。庭園の一方は山の方へ接してゐる。豐次郎（四十近い風采のよろしき男。寢卷の上に羽織を着てゐる）山を下りて、何か考へてゐる態で、ブラ〳〵庭へ入つて來る。やがて、ステッキの先で雨戸を叩きながら聲を掛ける、返事がない。

彼れは部屋の方へ耳を留めて、再び山の方へ行かうとしてゐるところへ、喜多雄（三十餘歳で、兄よりも健康らしい。同じやうに寝卷の上に羽織を着てゐる）が入つて來る。

豐次郎は弟を見て、驚いた表情をして見詰める。

喜多雄（努めて懷つこさうに）兄さんは朝が早いと聞いてゐたが、こんなに早いとは思はなかつた。

豐次郎　お前はいつ此方へ來たのだ？（詰問するやうに云ふ）

喜多雄　昨夕遲く來たのさ。あんまり遲かつたから此方へ知らせなかつたのだ。來ると直ぐに、一人でビールを二本ばかり飲んで寝たら、熟睡したものだから、今朝は馬鹿に目が早く醒めてね。寝床でもぐ／＼してゐても詰らないから久振りに大磯の朝景色を見ようと思つて、出て來たのだが、田舍はいゝねえ。

豐次郎　朝景色を見るにやまだ早過ぎらあ。あの通り月が照つてゐて、まだ夜のうちぢやないか。……お前は朝景色を見るよりやおれの様子を見に來たのだらう。おれが狂人にでもなつてゐるかと思つて。

喜多雄　いやさういふ譯ぢやないよ。（努めて何氣ない顏をして）今朝兄さんがこんなに早く起きてゐようとは思ひも染めなかつたんだからね（雨戸の方を見て）かよ子はまだよく眠つてるんだらうな。

豐次郎　あゝ。朝早く目を醒ますのはおればかりだ。今朝はあいつに夜明け前の田舍の靜寂な景色を見させようと思つて、さつき聲を掛けたのだが、なか／＼目を開けない。しかし、眠れるうちは眠らせといた方がいゝのだらうよ。

喜多雄　かよ子も此方へ來てから丈夫になつたんだらう。此間僕に寄越した手紙には、大變元氣のいゝ快活なことを書いてゐたよ。兄さんだつてこの前よりも血色がよくなつてゐるぢやないか。

豐次郎　血色なんぞどうだつていゝさ。……おれはお前にだけ話したいと思つたことがあるんだから丁度よかつた。家

の者が起きるまで、此處で、夜明けの景色を見ながら話をすることにしようか。

豐次郎が芝生の上に無雜作に腰をおろすと、喜多雄も同じやうに腰をおろす。

喜多雄　僕は煙草を持つて來ればよかつたのに、忘れたよ。兄さん持つてゐないのかい。

豐次郎　おれは一週間ばかり酒も煙草も止めてるんだ。コーヒーや茶も成べく飲まないことにしてゐる。飲食物や外界の刺戟なんかでおれの心を濁らされないやうに用心してるんだ。さうして、本當のおれの心を磨ぎ澄まして考へてることをお前に話すのだから、お前も煙草なぞを吸はないで聽いて呉れろよ。……おれが何を云はうと、眞面目に聽かなきやいけないぜ。

喜多雄　それは眞面目に聽くがね。（強いて笑ひを洩らして）しかし、膝の上に兩手を突いて畏つて聽くには及ぶまい。芝生の上に寢ころんでゐても、心が眞面目ならいゝだらう。（芝生の上へ足を伸して）さつき家を出た時にや頭がボンヤリしてたが、冷つこいスガ〳〵した空氣を吸つたゝめに、頭のドン底までハツキリして來たよ。かういふ時には何だかいゝ話が聞かされさうだね。

豐次郎（暫く瞑想的な表情をしたあと）お前はかよ子のことをどう思ふ?。

喜多雄　かよ子のこと?。

豐次郎　僕は花がまだ咲いてゐた時分に此處へ來て、一ケ月あまりもかよ子と一しよに暮してゐるんだが、かよ子は今のうちに死んだ方が、當人のためにも幸福だし、社會のためにもいゝと、僕には思はれるんだがね。お前はさうは思はないか。

喜多雄（吃驚して）出拔けにそんなことを云はれちや、僕も面喰つちまふ。かよがどうかしたのかい。脅かさいないで、

詳しく譯を聞かせてお呉れよ。

豐次郎　あいつは丙午の生れだからね。俗に丙午の女は男を喰ふといふぢやないか。

喜多雄　何だい。眞面目な話つてそんなことなのか（安心したやうに）お母さんがかよにケチをつけるために、時々そんなことを云つてたが、そんな舊弊なケチのつけ方ぢや、われ〳〵に反感を起させるばかりだからね。

豐次郎　そりや、母親はかよ子に難癖をつけるためのいゝ口實にさう云つたのだらうが、おれの云ふ丙午の意味はさうぢやないよ。……おれやお前は、かよ子がたとへ死んだ父親の罪悪の記念だつたにしても、たつた一人の妹として可愛がつて來たので、かよ子もおれだちを手頼りにしてゐるんだが、あの子はこの先生きてゐても幸福ぢやあるまいよ。

喜多雄　そんなことはないさ。容貌は悪かあないし、人間も馬鹿ぢやないし、相當な家へ緣づかせれば、幸福に世が渡れるだらう。寺濱さんも、此間いゝ緣談の口があるやうなことを云つてゐたよ。僕だちは、一人の妹のために、理想的の男子を搜して花々しく結婚させるんだね。しかし、僕等が傍からおせつかいをするまでない、かよ子は、ちやんとした當てがあるんぢやないかな。まだ子供だと思つてるうちに、案外なことがあるものだからね。……兄さんは此方へ來てから、何か勘付いたことがあつて、さつきのやうなことを云つたのぢやないか知らん。

豐次郎　お前はいつものやうに世間的のことを云つてる。百人のうち九十九人までが云ひさうなことを云つてる。女が年頃になりや結婚させる。結婚させれば幸福になる。それに、十九にもなつたら、自分の好きな男のことを考へてるかも知れないなんて。さういふ風に手輕く事を極めてしまうていくなら、おれも頭を痛めて物を考へたりなんかしないよ。……かよ子の胸の中には、まだ戀の芽は少しも萠してゐないね。それはおれが斷言するよ。

喜多雄　いくら兄さんが烱眼でも、その點はどうだかな。僕には信じられないね。しかし、かよの胸中が白紙のやうに

純白で、まだ男子の影で汚れてゐないといふのなら結構ぢやないか。

豐次郎　今日の日までは、あれの胸の中が純白でも、明日の日何處で誰れを見つけて、俄かに戀の芽が萠えださんとも限らないのをおれは恐れてるが、おれの恐れてるのはそればかりぢやないんだ。かよ子は一人前の女になるとゝもに、おれやお前にも復讐しようとするに違ひないよ。生みの母親の靈魂があれの腹の中には完全に宿つてるんだが、それが今はまだ眠つてゐても、いつ目を醒ますかも知れない。いや、今目を醒ましかけてゐるやうにおれには思はれるんだ。

喜多雄　何のための復讐?。死んだ親爺に對する怨みを僕等にむくいるだらうと云ふのかい。女つて執念深いから、かよの母親は死ぬる間際に、どんな恐ろしい遺言をしたかも知れないが、あの子は、怨みや憎みはどんな者だか、悉目分らないやうな女に生れついてるんだからね。時々お母さんに邪慳な仕打をされても、いつも無邪氣に受けてるぢやないか。(ふと氣ついたやうに調子を變へて)こんな下らない話はもう止そうよ。僕は久振りで此方へ來たのだから今日は三人で愉快に遊ぶことにしようぢやないか。僕はここで朝飯を御馳走になるから、飯を喰つたら三人で千疊敷へでも登つて見ようぢやないか。僕は土産に毎のいゝのを持つて來てるから、あとで屆けよう。

豐次郎　お前は悠長な顏をしておれに氣休めを云つてる。かよ子が手紙で何か云つてやつたゝめに、お前はおれの身體を氣遣つて來たのに違ひない。隱さなくつてもいゝよ。……おれの頭は狂つてやしないから安心しろ。不斷よりも頭の中がハツキリしてる位だよ。たゞ、かよ子は早く死んだ方が、當人のためにも、傍の者のためにも幸福だと、おれが思つてるのを、あの子が多少勘付いて、お前にそんな手紙を送つたのだらう。

喜多雄　なに、かよが此間寄越した手紙には、無邪氣な事が書いてあつたゞけだよ。あんまり退屈だから、兄さんに五

目並べを教はつたとか、朝早く起きて、曳網を見に行つて、鯵を買つて來て、自分で料理をして食べたが、まだピク／＼動いてる魚に庖丁を當てるのは氣味が悪いから、一度で懲り／＼したとか、その時に兄さんが鰺を一尾漁夫に買つて來たけれど、食べずじまひで打遣つたとか、さういふやうなことが書いてあつたゞけだ。

豐次郎　それだよ。かよ子もいくらか勘付いてるんだな（獨言のやうに云ふ）

喜多雄はふと、兄に對して不安な感じを起して、思はず後退りをする。藤七（水島家の別莊番、五十歳ぐらゐ）が裏木戸の側へ現はれ、此方を覗く。夜は明けかゝる。

豐次郎　何のためにおれがかよ子を連れて曳網を見に行つたと思ふ?。何のために鰺を買つて來たと思ふ?。

喜多雄　何のためだか、僕はそんなことまで研究すりやしないがねっ（立上つて）さあ、もう家の中へ入らうぢやないか

東の方が薄明るくなつた。何處かで雨戸の開く音がしてる。

豐次郎　まあ、もつと其處にゐて、おれの話すことを聞け。まだ誰れも起きやしないよ。おれの眞面目な考へを打明けられるのはお前一人なんだから。………かよ子を生かして置けば、あれのためにもおれ達のためにもよくはないんだよ。おれは長い間考へ拔いた揚句にさう思つてる。（重々しく云ふ）

喜多雄（笑ひ／＼）だつて殺す譯にや行かないでせう。

二人は足音を聞きつけて、そちらへ目を向けると、藤七が入つて來る。豐次郎は吃驚する。

喜多雄（怪訝な顔して）おれに御用でも出來たのかい。

藤七　いえ、別段用事があつて參つたのぢや御座いません。少し氣にかゝることが出來まして、旦那樣はどちらへいらつしやつたのかと思ひまして。

喜多雄　氣にかゝることつて何だい。おれが家を出た時にや、お前はまだよく眠つてたやうだつたが、急に何か異つたことがあつたのかい。

藤七　戸倉さんの御別莊の裏で、若い女が殺されてゐるんで御座いますよ。隣りの婆さんが、御嶽さんへ朝詣りに出掛ける途中で見つけて、近所で大騷ぎになつてゐるんです。喉を締められたらしいんですが、女は土地の人ぢや御座いません。東京か濱の可成りに身分のいゝ人らしいんですよ。

喜多雄　それは大變だな。しかし、その人殺しがおれと關係がある譯ぢやあるまい。（口輕く云つたが不愉快を顏に現はす）

藤七　それは旦那樣の御存知のことぢや御座いませんが、……その婦人の方が男の人と一しよに、昨夕夜汽車で東京の方から來たのを見たといふ者が御座いますから、若しも旦那樣もその人だちと同じ汽車にお乘りになつて、顏を知つてゐらつしやるのぢやないかと思ひまして。

喜多雄　知らないね。お前はいゝ加減なことを人に話しちやいけないよ。（叱るやうに云ふ）

藤七　はい。……私も久振りに死人の顏を見ましたが、死人なぞ見るものぢや御座いません。怨めしさうな目をして、洟を垂らして。………旦那樣はあんな者を御覽にならない方がよろしう御座いますよ。

喜多雄　誰れが死人なぞ見に行くものか。……あゝさうだ。お前は、昨夕おれが持つて來た簿の箱を直ぐに此處へ屆けて呉れ。

藤七　承知いたしました。（會釋して出て行く）

喜多雄　あいつは、慾に掛けちやすばしこいくせに、人間が少し拔けてるから、馬鹿なことを云つていけないよ。

豊次郎　藤七はおれたちの話を立聞きしてゐたのだよ。油斷が出來ないよ。

喜多雄　聞かれて惡いことを云つてやしなかつたから、それは關はないがね。

豊次郎　いや、さうでない。おれ達はここで　大切な秘密な話をしてゐたのだから。

喜多雄（はじめの快活さを失つた人間らしく）兄さんは獨りでいやなことばかり考へて、それを僕に押付るからいけないよ。僕には誰れに對しても秘密なんかありやしない。

豊次郎　おれはこの頃、頭のなかが澄んでるから、いろんなことが分るんだ。かよ子の身に附纏つてる運命も、おれには分つてる。お前が藤七の云つた死人の話を氣に掛けてることも、おれにはちやんと分つてる。

喜多雄　僕は氣に掛けてやしないよ。僕が夜汽車で大磯へ來たことや、今朝早く山の方を散歩したといふことが、ちつとも死人と關係があるんぢやないからね。

豊次郎　それはさうさ。おれはお前よりももつと早くから山の方を散歩してゐたんだよ。御嶽さんの側の暗い森の中も確かに歩いた筈だ。……しかも、喜多雄、お前は、ある女を殺さうと思つたことはなかつたか。（弟を見詰める）

喜多雄　ないねえ。男だつて女だつて、人間を殺さうなんてことは、僕は一度も思つたことはないよ。そんな質問をされるのは今がはじめてだよ。兄さんは、なぜ、眞面目らしくそんな不愉快な事に拘はるんだね……（空を見上げて）僕は久振りに夜明けの景色を見るんだが、兄さんも詰らない考へに凝らないで、このよく澄んだ空でも見るとい〻。

豊次郎　お前に教へられなくなつたつて、澄んだ空なら、おれは毎日よく見てるよ。日の出も日の入りも、此方へ來てからよく見てるよ。……だけど空を見たつて、朝日を見たつて、おれの考へが變る譯ぢやない。……お前は本當に、女でも男でも殺さうと思つたことはなかつたか。怖いから殺したくなるばかりぢやない、その人間の幸福のためにも

したいと思つたことはなかつたのか。

喜多雄　ないよ。僕は罷けらだつて殺すのは嫌ひだ。

豐次郎　臆病だねえ。……おれは藤七が知らせに來た女殺しが、お前の所爲だと極つても、そんなに驚きやしないよ。

喜多雄　（顏を蹙めて）馬鹿云つちやいけない。（兄の側を離れて）兎に角家の中へ入ることにしよう。

喜多雄は雨戸の側へ寄つて、かよ子に聲を掛ける。その間に、豐次郎は庭から外へ出て行く。

喜多雄　ぢや、此方へ出ておいでよ。散歩したきやーしよに散歩してもいゝから。

喜多雄は兄のゐないのに氣づいて、あたりを見廻す。そして、却つてそれをいゝことゝしたやうな態度で、空を見上げたり口笛を吹いたりする。そこへ、かよ子（十九歳の可愛らしい女、不斷着のまゝ）が、横手から入つてくる

かよ子　豐兄さんはゐないの？（不思議さうに見廻す）

喜多雄　あゝ。

かよ子　さつき、何だか、二人で面白さうなお話をしてゐたわね。わたし、話聲を聞いて喜い兄さんにちがひないと思ふと、直ぐに出て來て、お話の仲間に入れて貰ひたかつたのだけど、髮が壞れてゐたから、大急ぎで直してゐたのよ。わたし、寢相が悪いから、毎晩頭をぐちやぐちやにしてしまふの。

喜多雄　ぢや、お前はさつきから起きてゝ、おれだちの話を聞いてたのか。

かよ子　えゝよく聞取れなかつたけれど、今日は三人で箱根へ遊びに行かうつて、そんな相談をしてゐたでせう。わたし昨夕の夢見がよかつたと喜んでゐたのよ。

喜多雄　（笑つて）うまいことを云つてらあ。眞顏でそんなことを云つて。かよもずるくなつたなあ。

かよ子　では、わたしの聞きちがひだつたかしら。若し聞きちがひだつたと分つたら、わたし大變に失望してよ。

喜多雄　そりや、事によつたら、箱根へでも修善寺へでも連れてつてやらないこともないがね。……お前は身體の加減はいゝのかい。

かよ子　えゝ。わたし東京にゐた時よりも太(ふと)つたでせう。千疊敷くらゐなら一息で登れるわ。

喜多雄　えらいなあ。……此方へ來てからは、氣を使ふやうなことはないんだらうね。兄さんと仲よく暮してるんだらうね。

かよ子　えゝ、それは。……豐兒さんと喧嘩を一度したこともないわ。わたしの養生にもよく氣をつけて呉れるのよ。

喜多雄　さうか……（腑に落ちぬやうな態度をする。そしてあたりを顧みて）此間のお前の手紙に、兄さんは暗いうちに家を出て外を歩廻つたり、六ケ敷顏して獨りで考込んだりしてゐると書いてあつたが、それだけのことで、兄さんの不斷の樣子に、別段變つたところはないんだらうね。

かよ子　えゝ（曖昧な調子で答へて）死んだ義姉(ねえ)さんのことでも思出してるんぢやないかと、わたしには思はれるんだけど、訊いて見たことないのよ。それで、兄さんが鬱(ふさ)いでる時には、わたし側へ寄付かないでソッとして置くのよ。……義姉(ねえ)さんがいくらいゝ人だつたにしても、死んだ人のことを考へるのは詰らないぢやないの（はじめの無邪氣に似合はない皮肉な調子で云ふ）わたしも、豐兒さんの氣持が傳染したのか、此方へ來てからは、どうかすると、死んだ人のことが考へられたりするんですけど、それはいけないことだと思つて、成るべく忘れるやうにしてゐるのよ。

喜多雄　かよちやんも死人のことを思出すのかい。いやだねえ。お前のやうな、これから世の中の幸福ばかり味つて行ける女が、死人のことなぞ思出して、大切な純潔な心を濁らすつてことがあるものか。

かよ子　嘘にでもさう云つて、力をつけて貰へると、わたしうれしいわ。豐兄さんと喜い兄さんとは云ふことが反對なのね。

喜多雄　なあに、兄弟だから性分はよく似てるんだよ。上の方は違つてゐるやうに見えても、腹の底は同じことなんだよ（感慨を籠めて云ふ）おれはね、他所の家の人間になつてゐて、偶にしか會はないから、お前にもよく分らないのだらうが、おれは兄貴と同じやうに鬱ぎ込んでることもあるんだよ。

かよ子　いやなことねえ。……ぢや、喜い兄さんも死んだ人のことを考へてるの？。でも、水島の義姉さんは丈夫で生きてゐるんだし、兄さんのお友だちで死んだ方もないやうだし、誰れのことを考出すのか知ら。

喜多雄　おれが物を考へて鬱ぎ込むと云つたつて、死人のことゝ極めなくつてもいゝよ。お前も今朝は少し變だ（ふと厳かな顔付して、稍々聲を潜めて）それよりも、兄貴の精神狀態はどうも調子が外れてるやうだから、お前は氣をつけなきやいけないぜ。兄貴の云ふことや擧動に變なところがあつたら、一々おれに知らせるやうにして與れ。

かよ子　豐兄さんの精神狀態がどうかしてゐるの？　今朝此處で會つた時の樣子が變だつたの？。（物に驚いたやうに）それで、豐兄さんは今何處へ行つたんでせう。

喜多雄　御獄さんの近くで、女が絞殺されてるさうだから、それでも見に行つたのだらうよ。

かよ子　女が殺されてる？。……嘘でせう。兄さんはわたしを脅かさうと思つて。

喜多雄　本當だよ。疑ふのなら見て來るといゝ。

かよ子　本當なら、わたし恐ろしい（恐怖に震へながら空間を見て）……それは誰れが殺したんでせうか。殺した男は誰れだか分つたんでせうか。

喜多雄　加害者は誰れだかまだよく分らないだらうが、お前はなぜそんなに怖がるんだ。お前やおれに關係がある譯ぢやあるまいし。

かよ子　でも、わたし、急に恐ろしい氣がしてならないの。……殺された女の人の顏が見えるやうだわ。首を絞められるのはつらいでせうね。同じ殺されるにしても、首を絞められるのと、刄物で喉を突かれるのと、どちらが苦しいんでせう。

喜多雄　おれはまだ殺された經驗がないから分らないよ。……そんな役にも立たないいやなことを考へる必要はないね。……あの車の音は牛乳屋だらう。おれの持つて來た苺に牛乳をかけて直ぐに食べることにしようぢやないか。……穩かないゝ朝だ。

喜多雄は努めて快活を裝つてさう云ひながらも、不安な思ひが、隱しきれないやうに微見えてゐる。藤七、風呂敷で包んだ苺の箱を提げて入つて來る。

喜多雄　御苦勞だつたな。そこへ置いて行けばいゝよ。

藤七（苺の箱を下へ置く。そして、かよ子に目をつけて挨拶して）お孃樣は今度は一ぺんも爺やの所へお遊びにいらつしやいませんね。此方の旦那樣も寄つて下さらないし、何かお氣に障つたことがあるのぢやないかと、爺やは心配してゐたので御座いますよ。

かよ子（返事するのが懶いやうに）わたし、この頃は滅多に外へ出掛なかつたのよ。

藤七　爺やは此間、太田の御隱居樣が東京へお引上げになる時、緋鯉や金魚を頂いてお池へ放しときましたから、今日でも御一しよに見にゐらつしやいまし。お氣に召した方があつたら貰つて頂きたいと思つてるので御座いますよ。

喜多雄　金魚は食べられないから、賣つて金にして一杯やらうと思つてるのかい。かよちやんは用心してゐないと、詰らない金魚を爺やから高く賣付けれらるかも知れないよ。

藤七　へゝゝ。旦那様は直ぐにわたくしの申上げることをケナしておしまひなさると思ひましたから、旦那様にはお願ひしないで、お嬢様に高く買つて頂かうと思つてるんで御座います。あの金魚は、御覧になつたら、屹度お嬢様のお氣に召すだらうと思はれます。

喜多雄　爺やも商賣の時機が悪かつたよ。もつと早かつたら買つて貰へたゞらうが、かよちやんは、今は金魚なんぞ見たかあないんだ。

藤七　どうかなすつたので御座いますか。（かよ子を見詰めて）さう云へば、お顔の色もお悪いやうだ。

かよ子（煩ささうに、顔を外して）わたし、どうもないのよ。そのうち爺やの金魚でも緋鯉でも見せて貰ふわ。

藤七　どうぞ御覧なすつて下さいまし。（歸りかけてまた後戻りして、喜多雄に向つて）さつきの女殺しの話で御座いますがね。伊豆屋の平吉が怪しい男を見たと云つて居ります。顔はよく見えなかつたけれど、變な男が御嶽さんの方から下りて來るのを見たさうで御座います。どうも譯がありさうに思はれたから、突立つてあとを見てると、も一人の男が同じ道を駈けて來たさうです。それで、殺し手は一人ぢやあるまい、二人でやつた仕事だらうと、平吉は申して居ります。物取りぢやあるまいし、意恨があつてやつたことで御座いませうが、若い女一人を、男が二人がかりで絞殺すなんて、あんまりむご過ぎるやうに、わたくしは思はれます。

喜多雄　さうだね（空々しく云ふ）・・お前は早く歸つて庭をよく掃除しといて呉れ。今日はみんなを誘つて行くから。

藤七　出て行く。

かよ子　爺やは何だつてあんないやなことをわたしだちに話して行くんでせう。

喜多雄　人殺しの話なんか、誰れでも話したがるものなんだよ。

かよ子　本當に一人の女を二人の男が殺したんでせうか。

喜多雄　なあに、いゝ加減な想像なんだよ。平吉といふ男が見たつて云ふのも當てになりやしないさ。

かよ子　わたし、此間與見さんに誘はれて、御獄さんの裏山へ登つたのだから、あの邊のことよく知つてるわ。山の上からは松原越しに海が見えて、そりや眺めがいゝのよ。・・・殺された人は、御獄さんへ行くまでは、自分がどんな目に會はされるか、ちつとも知らなかつたでせうのに。わたし、殺された人が殺した人に随いて何も知らないで、あの阪を上つてた様子が、今目の前に見えるやうなの。那樣に慘殺されるくらゐなら、自分で海へ身を投げるとか、汽車の線路へ飛込むかして、早く死んでやつた方がよかつたでせうのに、その女の人はなんにも氣がつかなかつたのね。

喜多雄　それは極つてるさ。殺されると知つて誰れが随いて行くものか。（また不安な思ひに襲はれたやうに）折角暇をこしらへて保養に來たのに、朝から縁起が悪いよ。兄貴ばかりぢやない、かよまでもどうかしてゐる。（雨戸の方を見て）おきよはまだ寝てるのか。もう起したらいゝぢやないか。早く雨戸でも開けたらいゝだらうに。いつまで庭に立つてても仕様がないから、家の中へ入つて、氣分を變へて、その後でも食べることにしようぢやないか。

かよ子　（兄に促されても家の中へ行かうとはしないで）此方にはお母さんがゐらしやらないから、下女も寝たいだけ寝かせるんです。

喜多雄　此方にはお母さんがゐないから、お前の氣が樂なんだらうね。（ふと寂しく云ふ）

かよ子　えゝ（邪氣なく云つて）それは、時々は退屈して東京の戀しくなることもあるし、何かしら詰らない氣持がする時もあつたのだけど、大抵はスーツとしたやうな氣持で毎日日を暮してゐたのだわ。・・・でも、それは今朝までのことなの。兄さんに呼ばれて此處へ出て來てから、わたしはじめ氣がついたの。今まではわたし無智だつたのね。豐兄さんは死んだ義姉さんの事を考へて鬱いでゐるのだとばかり思つてゐたんですもの。

喜多雄　それは、兄貴の樣子はちよつと變なやうに、おれには思はれるんだが、おれがそう云つたからつて、お前は兄貴を怖がらなくつてもいゝよ。おれが餘計なことを云つたゝめに、お前に心配をさせて濟まなかつたね。

かよ子　いゝえ。餘計なことぢやないの。（あたりを見廻して）わたし默つてゐられないから思つたこと云つちまふわ。豐兄さんの知つてる女の人がこの土地にゐるらしいのよ。暗いうちに外へ出て行くのは、その人に會ふためなんでせう。それで、しよつちゆうわたしに何か隱してるやうに氣兼ねをしてゐたのは、そのためだつたの。わたしに悟られやしないかと、豐兄さんがビク／＼してゐた譯が今やうやく分つたんです。……だから、わたし怖くなつたの。爺やの話を聞いて、恐ろしいことが考へられてならないの。わたしの思違ひならいゝんだけれど。……喜い兄さんも、豐兄さんの精神狀態が今朝は變だつて、さつきさう云つたわね。

喜多雄　兄貴にそんな秘密があるつてことは、おれは今まで知らなかつた。（信じかねる風）

二人は陰鬱な顏して、めい／＼の思ひに沈む、やがて、

喜多雄　しかし、平吉が見たつていふ男は、兄貴ぢやあるまいよ。……おれも詰らない心配をしてゐた。……いくら兄貴の頭が變になつても、そんな馬鹿なことがあるものぢやない。

かよ子　男が二人通つたのを見たといつたわね。

喜多雄　偶然其處を通つたゝめに嫌疑を受けちやたまらないね。

豐次郎が入つて來る。二人に對して疑惑の目を放つ。

喜多雄　何處へ行つてゐたの？

豐次郎　戸倉の別莊の側まで行つて來た。死骸には蓆が掛つてたから顏がよく見えなかつた。

喜多雄　何だつてそんな者を見に行つたのだい。かよは非常に心配してゐたよ。

豐次郎　お前が何か餘計なことを喋舌つたんぢやないか、（詰問するやうに）

喜多雄　僕は餘計なことなんぞ云やあしないよ（ドギマギしながら）

豐次郎　だつて、かよ子はあの通り震へてるぢやないか。あんなに熟睡してゐたものが、三日も眠らなかつた人間のやうな元氣のない顏をしてゐるのに、おれが氣がつかないと思つてゐるのか（怒りを含んだ聲で云ふ）

喜多雄　それは僕の所爲ぢやないよ。

豐次郎　ぢや、おれがちよつと出て行つてた間に、お前の外の誰れかゞやつて來て、かよ子に何か云つたのか。

かよ子　わたしどうもしてやしないの。兄さんこそ氣を鎭めて睡りしてゐて下さい。

豐次郎　おれこそどうもしてゐやしないよ。喜多雄が何か云つたか知らないが、誤解しちやいけない。

かよ子　（外の方を氣にして）こんな所にいつまでも立つていちやいけないから、家の中に入りませう。わたし、今雨戸を開けるわ。

かよ子は顧み勝ちに豐次郎の方を氣にかけながら出て行く。

豐次郎　（弟に向ひ顏を和らげて）お前は本當にかよ子に何も云はなかつたのか。おれはあの子の生きてゐるうちに、[illegible]

な心配はさせまいと思つて、此方へ來てからも、おれの思つてゐることは微塵も外へ現さないやうにしてゐたのだ。それに、無邪氣な相が消えてしまつた。一日でも一刻でも時を延してゐるうちに、人間の心は不意に邪念が芽を吹いて來るものだが、一度芽を吹いたが最後、この頃の草や木のやうに、どし〳〵茂つて繁つて行くのだ。昨日までは、苦しみの種から生れてゐながら、苦しみを感じなかつたかよ子も、今はそれを感じだしたのだ。あれの母親はおれだちの母親に虐殺されたやうなものだからな。

喜多雄　虐殺だなんて考へるのは、兄さんの頭がどうかしてゐるんだよ。親爺のしたくらゐなことは世間に有りがちのことなのだからね。……かよは兄さんが、死んだ義姉さんの事か何か考へて毎日鬱いでると云つて心配してゐたのだ。

豐次郎　おれはかよ子だけには、おきさのやうな苦労をして死なせたくないよ。おれやお前の敵にしときたくはないよ……おれは今、氣にかゝつたから死人を見に行つたのだが、加害者は昨夕のおそい汽車で大磯へ來たのだと、みんなが噂をしてゐる。

喜多雄　それが僕にでも關係があるのかね。（反抗するように云ふ）

豐次郎　御獄さんの邊は、人殺しをやるのにいゝ所だ。おれはそう思つて、毎朝散歩してゐたのだ。

喜多雄　兄さんはどう思うとも、僕はあすこが眺望がいゝから、行つて見たゞけだ。かよもさつきあそこは眺めがいゝと云つてゐたよ。……しかし、朝からこんないやな話しをしてゐても爲方がないから、僕は一先づ家に歸つて出直して來ることにしよう。

喜多雄が行きかけると、豐次郎はふと手をのばして引留める。喜多雄はその手を振放して行かうとする。そのはずみに、二人は芝生の上にころぶ。

（幕）

二

二三十分後。前の幕の別莊の一室。食卓を圍んで、兄妹三人が苺を食べてゐる。かよ子の居室らしく、鏡臺や簞笥などあり。西洋畫の額が掛つてゐるが、それは、觀客の目には見えない。

かよ子　この苺は隨分おいしい苺ね（匙を待つたまゝ、喜多雄の方を見る）

喜多雄（夢から醒めたやうに）むん。うまいだらう。和泉屋へ賴んで特別にいゝのを撰擇させたんだ。

豐次郎　この土地にはろくな果物がないんでね（平靜な態度で云つて、皿の苺を見てゐる）

かよ子　水島の義姉さんでもおたまちやんでも、誰れか東京から遊びに來てくれゝばいゝと、わたし此間うち獨言のやうに云つてゐたのよ。だから、今朝喜い兄さんの聲を聞くと、飛上るやうに悅しかつたのだけれど、だし拔けに脅かされちやつたので、スツカリ悄げたの。藤七がいけないのね。いけ好かない爺やだわ。死人があらうと人殺しがあらうと、係合ひもないわたし達の所へ、朝つぱらから知らせに來なくつてもいゝぢやないかね。

喜多雄　さうだとも。あいつ他所へ行つても餘計なおしやべりをしてゐるに違ひない。（それを氣遣つてゐるらしく忌々しさうに云ふ）

豐次郎　藤七のおしやべりくらいは構はないが、お前は後暗いことはないのか。（聲を稍々低めて）おれ達の前ではもう秘密にするには及ばないよ。さつき草原に轉んでた時に、おれはお前の心臟に觸つて、激しく鼓動してゐるのを知つたのだ。お前の胸の底には、何か異常な事を實行したあとのやうな震へが殘つてゐるのを、おれはちやんと感じてるのだ。お前はおれだけは隱せないよ。二人は幼い時から一しよに育つて來た人間だもの、おれにお前の心の中が讀め

いでどうする？……………昨日までのかよ子になら、世間の者の恐ろしがるやうなことは決して聞かせたかないのだけれど、今はかよ子も、恐ろしいことが自分の廻りに起つてることを勘付いてるのだから、今更おれ達がかよ子の目に譃をしてゐようとしたつてもう遅いんだ。だから、お前も、遠慮しないで正直に打明けて見ろ。おれは決してお前を非難しようとは思つてゐない。輕蔑もしない。都合によつたら、おれが責任を脊負つてお前の身代りになつてやつてもいゝと思つてるのだ。

喜多雄　僕の身代りになると云つて、何のために身代りになるんだね（自分の胸をおさへながら）僕はさつき芝生に轉んでた時、柔かい草が身體に觸つていゝ氣持だつたよ。あの上をいつまでもコロ／＼と轉んでゐたかつたくらゐだ。動氣も打つてやしないし、手も震へてやしないよ。

豐次郎　お前はまだおれのこの目を眩ましてゐようと思つてるんだな（詰責する語調）ぢや、かよ子に訊いて見ろ。

喜多雄（強いて笑ひを浮べて）おれの顔付が不斷に比べてそんなに違つて見えるか。かよの目でよく見て、公平に判斷して呉れないか。

かよ子（よく見て）さう云へば、喜い兄さんも今朝は變ね。目付が凄いぢやないの。

かよ子は、喜多雄を見た目を轉じて豐次郎の方をぬすみ見して、それから、額を見上げて、ひそかにおびえる。

豐次郎　かよもいよ／＼氣がついたのだな。お前があの親爺の肖像がよく出來てると云つて此處へ掛けた時から、おれは氣遣ひでならなかつたのだ。親爺は一生のうちに二人も三人もの人間を殺してゐるのだよ。そのうちの一人は、西南戰爭で殺したので、親爺自身も自慢をして人に話してゐたのだが、生物を殺したのは何のためだつて同じことだ。殺す生すは戰爭の時に限つたことはない（厳然として）喜多雄、お前は、戰爭でもない時に親爺と同じことをやつたな。

他所の人間はどうか知らないが、親爺の一族は、一生に一度は親爺と同じことをやらなければ生きてゐられないと、おれは此間から考へてゐたよ。

喜多雄　親爺と同じことをやつたのならやつたでいゝから、兄さんは氣を鎭めて下さい。

豐次郎　馬鹿。おれを狂人とでも思つてるのか。おれはこの通り落着いてるぢやないか。おれが狂人なら、親爺も狂人だつたのだ。お前も狂人だ。……かよ子でも喜多雄でも、おれに何事でも訊ねて見ろ。それで、おれの返答が間違つてゐるかゐないかをして見ろか試驗。この頃のやうに澄んでゐるおれの頭には、分り過ぎるぐらゐ何でも分つてるつもりだ。

かよ子　お父さんはいゝ方だつたのよ。だから、わたしもお父さんの肖像を此處に掛けてゐるんだわ。夜もお父さんに守つて貰つてるから、安心してよく眠られるやうにと思つて。

豐次郎　親爺の肖像が魔除けになると思つてゐたのか。人間にいろ／＼な苦しみを與へた根本の神樣を、人間が崇拜してゐるやうに、かよ子は自分に苦しみの種を授けてくれた親爺を、有難い神樣にして奉つてゐるのか。……馬鹿だなあ。

豐次郎、ふと立つて、肖像畫を取おろす。そこへ、姿は見えないで、藤七の聲だけが、庭の方から聞へて來る。

藤七　旦那樣、至急の御用がある方がいらつしやいましたが、此方へ御案内いたしましたが、此處へお通し申しませうか。旦那樣が直ぐにお家へお歸りになりますでせうか。

三人はふと目を見合はす。喜多雄は慌てゝ立上つて、「ぢや、ちよつと行つて來よう」と獨言のやうに云つて出て行く。

豐次郎（行像譜を下に置いて）彼奴はおれよりも先きに實行したものだ（歎息する）

かよ子　喜い兄さんは何を實行したのよ。

豐次郎　何を實行したか、お前も分つてゐるだらう。この蕹はおれのところへ手土産に持つて來て吳れたのか、外の者と一しよに食べた滓だか分らないのだ。

かよ子　ぢや、爺やの話してゐたことが喜い兄さんに關係があるつて云ふの。

豐次郎　あいつ今は、その事で調べられるのだが、言拔けるすべはあるまいよ。……あいつ、おれよりも先きに實行したのだ。（次弟にかよ子を見詰める）

かよ子　（おど〳〵しながら）だつて、喜い兄さんのやうな快活な面白い人が、そんな恐ろしいことをする譯はないと、わたしには思はれてよ。水島の家に入つてからは、今まで幸福な日を送つてゐるのぢやないの。

豐次郎　世間の出來事の譯が一々お前なぞに分つてたまるものか。筋の通つた道を踏んで人間は日を送つてゐるんぢやないぜ。……お前は喜多雄のしたことを手はじめにこれから怖い世の中を見なければならないね。

かよ子　わたし、兄さんが怖い。（座を立つて庭へ下りようとする）

豐次郎　いよ〳〵おれが怖くなつたのか。おれはお前を幸福にしてやらうと、いつも思つてゐたのだ。

庭へ下りようとするかよ子を、豐次郎は手を伸して引留める。

かよ子　兄さんは、わたしをどうするの？……勘忍して頂戴。

豐次郎　お前はまだ誰れに對しても惡事をしたことのない女だ。あやまるには及ばないよ。

かよ子　だから、兄さんは私を虐めないで下さい。

豐次郎　おれが虐めるものか。まあ、此處へ坐れよ。

かよ子は手を執られてゐるので、逃げようとしても逃げられないで、おど／＼しながら、肖像畫の側に坐る。

かよ子　わたしお父さんの側に坐つてゐてよ。

豐次郎　おれだち三人は、その親爺に生みつけられたのだからな。よくその肖像を見るといゝ。人間が神に似てるやうに、三人が親爺にどれだけよく似てゐるかを見るといゝ。

かよ子　わたし、今から海へ行つて見たいのだけれど、兄さんは行きたくない？。（隙間を見てゐるやうに、目を左右に向ける）

豐次郎　まあ、も少し此處に坐つてゐろ。おれを恐れなくてもいゝよ。おれはたつた一人の妹の眞實の幸福を考へてるのだ。

豐次郎はやさしくさう云ひながら、出拔けにかよ子を後から抱へて、咽喉を締めようとする。かよ子は微かに聲をたてゝ藻掻きながら抵抗する。豐次郎は女の苦しさうな顏面を見ると、知らず／＼手をゆるめる。すると、かよ子は猛烈な抵抗をはじめて、兄の手から脫出するや否や、鬼女の如く兄の咽佛を壓え付ける。豐次郎は脆くも氣絕する
かよ子はよろ／＼と食卓に凭れて打伏しになる。そこへ、喜多雄が入つて來る。二人の樣子を怪んで、かよ子の肩を叩いて、

喜多雄　おい、どうしたのだ？。

かよ子（目を見上げて）わたし、兄さんに殺されかけたの。何の罪もないのに兄さんに咽喉を締められかけたのです。わたしどうもしたのぢやないの。兄さんがどうなつてゐてもわたしの所爲ぢやないの。兄さんは氣が狂つてるんです

（昂奮した調子で、しかしあたりを憚つてゐるやうに云ふ）

喜多雄　お前はよくそれで無事だつたな。兄貴は頭が變だと、今朝から思つてゐたのだ。

かよ子　兄さんの氣の狂つてゐることを、あなたはよく知つてゐるんでせう。

喜多雄は氣絶してゐる豐次郎の樣子を側へ寄つて薄氣味惡さうに見る。

喜多雄　兄さんは狂人だかどうだか、おれには分らない……。兎に角、早く醫者を呼んで來なきやならないよ。

かよ子　若しも豐兄さんが息を吹返したら、わたしまたどんな目に會はされるか知れないから此處にはゐられないわ。

喜多雄　だつておれ達が打遣つといて逃出す譯には行かないよ。

かよ子　ぢや、お醫者と一しよに藤七をも呼んで、豐兄さんがあばれだしたら、取鎭めて貰はなきや恐いわよ。それに、喜い兄さんは、豐兄さんの狂人だつてことを、よく說明して下さいね。

喜多雄　おれにはよく分らん。とに角直ぐに醫者を呼んで來させよう。

喜多雄が出て行くと、かよ子は、怖々豐次郎の側へ寄つて、警戒しながら、兄が氣絶してゐるか否かを檢査する。そして、あたりを見廻しながら、兄の喉をおさへつける。脆くも息の根の絶えてゐるのを認めたあとで、鏡の前に寄つて、亂れた髮を直しにかゝる。喜多雄が入つて來る。

喜多雄　兄貴は寢てるんぢやないか。氣が變になつたからつて氣絶する譯はあるまいよ。

かよ子　さうかも知れないわ。兄さん、側へ寄つてよく見て御覽なさい。わたしは怖くつて寄りつけないわ。

喜多雄（兄の側へ寄つて、その死相を注意して）變だなあ。昂奮して心臟痲痺でも起したのか知ら。

かよ子　さうかも知れないわね（落着いた顏して振向いて）豐兄さんはもういやなことを考へてゐないで幸福ね。あん

なことばかり考へて日を暮してゐるよりは、氣絶でもしてゐる方が幸福だつてことが、わたし今やうやく分つてよ。

喜多雄　お前はどうしてそんな呑氣なことが云つて居れるの？。

かよ子　さつき、急用があつて兄さんに會ひに來た人は誰だつたの？。

喜多雄　おれはスツカリ忘れてゐた。お前も知つてゐる琴平の寺濱さんが、偶然、此方へ來てゐておれを訪ねて來たのだ。兄貴の樣子があたりまへなら、此處へ通さうと思つて、外に待たしてゐるんだが、こんな風ぢや駄目だな。

かよ子　お通しゝたらいゝぢやないの。わたし、異つた人に會ひたくつてならないのよ。

喜多雄　かういふ時だ。寺濱さんの意見でも訊いて見るんだな。

喜多雄が奥へ入つて行くと、かよ子は鏡面を見入つてクリームなどで顔の磨きに取掛る。庭の方から、藤七が入つて來て、「旦那樣」と聲を掛ける。かよ子、聞耳を立てて、不安の態度で座を立つ。外を覗いて、

かよ子　爺やだつたの?。まあいゝ所へ來て呉れたわね。此方の旦那樣はさつき不意に目を廻してお倒れになつたのよ。上へ上つて御樣子を見ておくれな。

藤七　それは大變だ。お顔へ水でもぶつかけたら、息をぶつ返しなさるかも知れない（上へ上つて、豐次郎の側へ寄つて）こりや、あたりまへの氣絶ぢやねえな。

かよ子　たゞの氣絶ぢやないつて、（驚いたやうに云ふ）

藤七　お醫者樣に見て貰ふまでもない。わたくしが一目見てさへ分りまさあ。全體旦那樣はいつの間にこんなにおなんすつたんでせう。お嬢樣は御存知ないんで御座いますか。

かよ子　わたしはちつとも知らないわ。朝御飯の仕度に臺所の方へ行つてる間に、兄さんはそんなになつてたのよ。…

……早くお醫者さんが來て下さればいゝのに。

藤七　世間に外から人が入つて來て、御主人を絞殺(しめころ)して行くつてことはない譯だ。まさか、昨夕(ゆうべ)の女殺しぢやあるまいし（獨言のやうに云つて）お孃樣、こりや、お醫者樣を呼ぶさきに、警察へ屆けなけきやなりますまいよ。

かよ子　爺やは自分で警察へ屆けに行かうつて云ふの？（咎めるやうに云ふ）

藤七　わたくしの家の旦那樣のお差圖次第でどうにでもいたします。

かよ子　それで、御獄さんの人殺しの殺し手は誰れだか分つたのかい。

藤七　いゝえ、まだハツキリ分らないやうですよ。殺された女を連れて停車場を下りた男があつたらしいので、警察では昨夕のおそい汽車で來たお客を調べてゐると云つてゐます。殺した男が、いつまでも、その土地に愚圖々々してやしまいと云つてゐますが、御獄さんの死人も絞殺(しめころ)されてゐるし、此方の旦那樣もこんなになつてゐらしやるし、……

かよ子　わたし、此處にゐるのが怖いわ。

藤七　爺やも氣味が惡う御座いますよ。こりや、たゞ事ぢやない。

かよ子　喜い兄さんも氣が變になつてるやうだから、わたし怖いわ。

藤七　わたくしも今朝此方へお伺ひした時からさう思つてゐました。（耳を澄まして）旦那樣の聲がする。不斷のお聲とはまるで違つてる。お孃樣も御用心なさいませ。

藤七は事があつたら庭の方へ飛出せるやうに身構へをする。

（幕）

三

ある田舍町の街上。夜。電柱につけられた街燈が、暗い道をかすかに照らしてゐる。今様の耳かくしに髮を結つて、派手な浴衣を着たかよ子が、一方から入つて來る。向うから、寺濱某（四十餘歲、體格逞しき男）が入つて來る。行きすがひざま、

寺濱　かよ子さんぢやないか。

かよ子　あら。……先生が此方へ來てゐらつしやるとは、ちよつとも存じませんでした。

二人は留つて、顏を向合つて立つ。しかし、かよ子の顏のみ、ハツキリ電燈の光を受けて、寺濱の顏は光の外にあつて、絕えずボンヤリしてよく分らない。

寺濱　避暑をかねてあなたに會いたいと思つて、夕方此方へ來たんです。明日の朝お訪ねしようと思つてゐたのだが、此處で會つてよかつた。どうです、身體の工合は？

かよ子　おかげで大變よくなりまして、この頃はお藥も頂かないので御座いますわ。

寺濱　それは何よりだ。

かよ子　先生は最近に兄にお會ひ下さいまして？

寺濱　それについてあなたをお訪ねしたいと思つてゐたのだ。兄さんはこの頃は精神狀態がよつぽどよくなつてゐますよ。もう大丈夫でせう。此間會ひに行つた時には、あの時のことを夢のやうに思出して話してゐましたよ。それから、あなたのことも云つてゐました。安城家の血統はかよ子一人に殘つてるんだから、結婚をさせるように骨を折つてくれと、わたしに賴んでゐました。わたしは以前、自分から緣談を持出したことがあつたくらゐだから、お受合ひはして置きましたがね。

かよ子　わたしの結婚のことなぞ仰有らないやうにして下さいましな。二人の兄が一度期にあんな恐ろしいことになつたのですもの。

寺濱　しかし、あの時の記憶を消すためにも、あなたは結婚なすつた方がいゝでせう。わたしのためにもいゝんですよ。わたしもあの時には關り合ひがあつたので、あの時の氣持が今でも頭の中に殘つてゝいけない。

かよ子　それで、若しも兄の精神狀態が完全に回復しても、罪人になるやうなことはないので御座いませうか。

寺濱　そのことは心配なさらなくつてもいゝでせうがね。……わたしはあの後、心の落着いた時分に時々思出しては、不思議でならないんでね。あなたによくお訊ねしたいと思ふこともあるんですよ。かういふことをお訊ねしちや、あなたがいやに思ひなさるか知れないが…わたしが門の外で會つた時には、不斷とそれほど變つてもゐなかつた喜多雄君が、その前から發狂してゐてあゝいふ恐ろしい犯罪をしたといふのも解らないことだし、ことに、御獄さんの前の殺人が喜多雄君の所爲だと極つたのも、僕にはよく呑込めないんです。警官や檢事の訊問に對しては、わたしは批評がましいことを口へ出すのは遠慮して、藤七の云つた通りに同意したのだつたが、警官や檢事の解決した問題が、わたしにはどうも得心の行くまでに解決されてゐないのです。

かよ子　ぢや、先生は、兄の罪は冤罪だと思つてゐらつしやるんでせうか。

寺濱　わたしは疑つてゐる。…………人間以外に、魔物とか何とかいふやうな物があつて、豐次郎君に仇をして生命を取つて、御獄さんの側でも女の生命を取つたのだと信じられれば、至極都合がいゝのだが、我々はさういふことを信じられなくなつたので、都合が惡い。喜多雄君は、御獄さんの側の殺人も自分のしたことだと思つてるやうだが、わたしには、どうしてもさう思はれませんな。

かよ子　でも、上の兄なぞは、上べは何ともないやうでも、精神に異狀があつたのですから。

寺濱　喜多雄君の精神が何かの刺戟で突然狂つたにしても、理由のないのに、兄さんの喉を締めにかゝつたのは、わたしには不思議でならない。二人は不斷仲のいゝ兄弟だつたのだから。それに、豐次郎君が抵抗もしないで、たやすく息を引取つたのも、わたしには理解の出來ない問題なのです。………喜多雄君自身は、精神が鎭まつて來ると、自分が續けて二度も殺人をしたつてことを認つてゐるやうな口を利くので、當人さへそう認めてゐることを、わたし一人が疑ふのは變な譯だが、かよ子さんはどう思ひます?。あなたはあの時側にゐたことだし、ことにあなたのような無邪氣な女の方の觀察は參考に訊いて置きたいと、わたしは思つてゐるんです。これはわたしとあなただけの間の話にして、決して外へ洩らすやうなことはしないから、腹藏なく聞かせて貰ひたいんですがね。

かよ子　それでは、兄は自分を罪人として認めてるので御座いませうか。（氣色ばんで云ふ）

寺濱　さうです。喜多雄君のやうな不斷快活だつた青年が、自分が犯したかどうだか分らないやうな罪を自分で認めてゐるのが、わたしには、一層不憫に思はれるんです。むしろ狂人になりきつてる方が、兄さんのためには幸福なんでせう。なまなかに、ボンヤリした自意識があるのがみじめです。

かよ子　先生のやうな方がさう仰有れば、わたくしもさういふ氣がいたしますわ。死んだ兄は、兄弟に殺されたにしても、魔物とか何かの手で殺されたにしても、結局幸福なのぢや御座いますまいか。ですから兄は自分を手に掛けた者に逆らひはしなかつたので、恨んでもゐないのだらうと思はれますわ。

寺濱　ホウ、かよ子さんはあの事件をそんな風に考へてゐるんですか、（不愉快さうに云ふ）

かよ子　さう思つてゐちやいけないんで御座いませうか。

寺濱　いけないこともないだらうが、あなたは二人の兄さんのたつた一人の妹さんだ。兄さんがあんな死に方をしたのを幸福だといふのはあんまり無邪氣過ぎますね。

かよ子　わたし、先生にだけ、打明けてお話いたしますわ。……………精神に異狀のあつた兄さんが、わたしを幸福にしてやるつて、わたしの喉を絞めようとしましたから、わたし、怖くなつて逃出さうとして、思はず知らず、兄さんの喉を壓えつけてやつたのです。御獄さんの女殺しは誰れの所爲だか知りませぬけれど、兄さんの死んだのは、喜多雄兄さんの所爲ぢやないんですわ。わたしのしたことです。

寺濱　かよ子さんはなぜそんなことを云ふんです?。あなたがあんなことをする筈もないし、第一あなたのか細い手で、何で大の男の生命を取ることが出來るものですか。わたしが、心安立てど、出拔けに變な事を訊いたのがいけなかつたか知れないが、さう昂奮しないで心を落着けてゐて下さい。

かよ子　檢事も巡査も、誰もわたしに疑ひをかけないから、何も知らなかたと云つて、藤七の云ふ通りに、喜多雄兄さんの所爲にしてすましたのですけれど、本當はわたしのこの手が兄の喉を壓えつけたのです。それを喜多雄兄さんは御自分の所爲のやうに、今思つてゐるのなら、わたし怖う御座いますわ。喜多雄兄さんが、無實の罪だつたことも知らないで青い顏して、狂人らしい目をして、御自分の手を兄殺しの手としてボンヤリ見てゐることを思ふと、わたしぢつとしてゐられなくなりました（自分の手を出して電燈の光で見ながら物狂はしい態度をする）

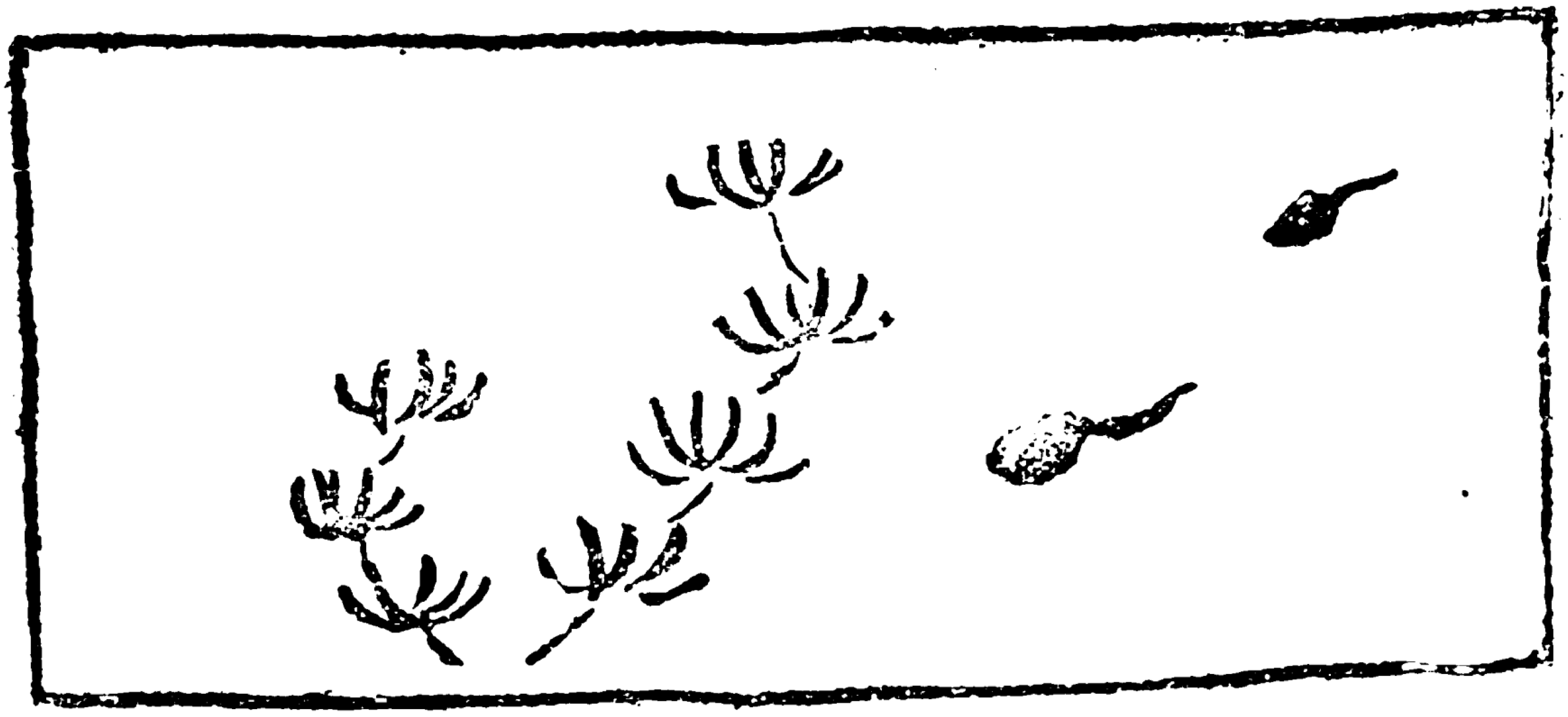
寺濱　そんな華奢な手で人間の生命が取れるものですか（かよ子の手を執つて）あなたは安城家のたつた一人の相續者なんだから自重しなければいけませんよ。…………わたしがこれからあなたの宿までお送りしませう。

二三の人間が薄暗いところを、影の如く通り過ぎる。一人の男片隅に立留つて此方を見てゐる。その男の顏は分らない。寺濱はかよ子の手を執つて歸りを促しても、かよ子は動かない。

かよ子　わたしはあの時豐次郎兄さんにおとなしく絞殺されてゐたら、却つて幸福だつたかも知れませんわ。逃げようと思つたばつかりにあんな恐しいことをして……先生、わたしはこれからどうしたらよろしいのでせう。

寺濱　……あなたも兄さんのやうになつたんだな（歎息する）

立つて見てゐた男、野卑な嘲笑を洩らして行く。寺濱驚いてその後姿を顧る（幕）



彈力のある氣持

瀧井孝作

通りへゆく原つぱで自分は恒雄君に逢つた。兩方で頬笑んだ。

「姉さんの工合は」

「うむ、駄目」

恒雄君は、途途は今見た事、それでくすりを持つて來たかと自信で、田舍からきた猪のキモの事を述べるのだつたが、それも間に合はぬ。

道傍でさう云つて、恒雄君を自分の家へ遣り、自分は高垣醫師の宅へ出向いた。今朝二度目の迎へである。

「一應しらべて貰ひたいと思ひます」

其自分に向いて、高垣氏は褞袍のなり玄關の間で

「亡くなられましたか」と額は皺寄り「昨夜往診して分つてゐる故、死體は見なくてよいでせう」と續けた。死體と云はれた。

自分は默つて居た。漸く頭の向きはかへ、電話を借る事を云つた。高垣氏は奥へ

入つた。主治醫の上原ひんの宅の電話番號を云うと奥さんが出た。

「あ、竹内さんですか、御病人は」

自分は

「もし〳〵」と云つて、あと續かぬのであつた。幾分間か電話口で顔を寄せて默つてゐた。向ふの聽く人や茲の自分のまはりが氣兼だつたが、幾分か左うして居た。と、こみあげて稍々涙聲で云つた。

「今朝八時頃、亡くなりました」

「まあ、左うを」

妻の死んだ事を、電話で云つて自分は泣顔になつて居た。それから死亡診斷書の用事を曇り聲で述べると、待つて奥れと云つて入り奥さんは又出た。

「後程、お出でをねがふ樣、申して居り升が」

自分は承知して、直ぐ受話器を掛けた。涙の顔故、そこ〳〵に玄關を降りるのだつた。

自家で、年寄は茶の間の方に居た。自分は高垣醫師の來ない由を傳へた。例の朝の食卓があつた故坐つた。

「恒雄君は」

「千代子の方と千駄ヶ谷の鷲見さんへ、報せに往つて貰つたよ」年寄はそんな指圖をしたのだつた。

「うむ」

自分は焦げくさい飯は僅かで止めた。――今朝年寄は臺所にお釜を掛けて、六疊の方へ來た時、娘の有樣が變つたのである。――

「あれはいつにするかねエ」

と年寄は食事の後、葬式の事を相談した。あさつては友引故あすか四日目にする他はないと云ふのだつた。

自分は此疲勞(つか)れた上、尚三日棺のある事は堪えられぬと思つた。

「あすにしよう」と云つた。

「さうかい」

年寄は反對云はぬが餘り性急で不服の樣だつた。が自分は左う定めて氣持で押通すのだつた。

奥の六疊の病床を取去る事となつた。年寄は、娘の位置を北枕にさせ、布で枕の上の面を覆うて

「冷ます方がよいのだよ」と、掛蒲團は剝ぎかはりに着物を一枚寢卷の上へ被せた。半紙で卷いた剃刀(かみそり)をのせた。お線香立は頭元に据えられた。

自分は見乍ら其取扱ひは殘酷な氣がした。もはや肉親(にくしん)でない「死者」と見せられた。

從妹の千代子は、にじり寄り、お線香を立てゝ拜んだ。面を覆うた布を僅もち上げて彼女は顏を曇らした。

友の鷲見や恒雄君が來、何かの事をするのであつた。役場の手續は本郷の方の寄留を此處の瀧の川へ直さねばならなかつた。自分は鷲見に向いて笑うて

「鷲見を葬儀委員長にするよ、何かもやつてお呉れ」と云つた

千代子に近所の知合への報せを賴んで、自分は診斷書の方も葬儀屋の掛合に、鷲見は先づ本郷區役所へ出て往くのだつた。

電話を掛けておいた上原さんでは、茶の間へ通された。上原老人は炬燵にゐた。自分はお時儀した。

「永い事いろ〳〵お世話になりました」

「いや相憎この四五日、お見舞出來なかつたが。俺もこの腫物で一時は入院かと思つたがなあ」

老人は炬燵蒲團から、繃帶の足首を出した。此方へは彼女の病狀を云つた。春には未だ一年はと思へたが、一月になつて割合に丈夫な左の肺まで浸潤が多く、防ぎやうのないばら〳〵つと粟粒のやうなのが見えた。其事を述べて老人は向直り

「それにしても、早く時がやつて來たなあ。永引けばみんな苦しむのだから、まあ諦めなさい」

自分は頷いた。「此上ゐてくれたら私共では、實際破滅でした」と自分の體力や物質の上を思うて忌憚なく答へた。事項を記入した活版刷りの診斷書を貰つて、自分は膝をもちあげかけた。

「自身で出掛けなきや濟まない用ばかりでせう。大變ですなあ」と上原さんは慰めた。動坂下の葬儀屋へ廻つた。日頃注意した事もない其店の硝子戸を入つた。內儀さんが出て來た。自分は氣劣れせずに掛合つた。値段を問き、下から二番目の式を申込んだ。

「棺の內へ入れるものは」と云はれ「自分も何も知らんのだ」と答へると、內儀さんは笑ひ乍ら、寒冷沙や樣々の物を出して渡した。自分は仕來りに反對する事もなかつた。其風呂敷包と一本花の〇を提げて戻るのだつた。

近所で往來して居るFさんが來、手傳つて通知狀を書いて貰つた。荊妻松永々病氣の處藥石効無……と二三行の候分を自分は草し平凡だなと思つたが改める餘裕はなかつた。

「どの範圍まで知らせますか、君の社會的の意味で問題だが」とFさんは云ひ、自分は「家內の病氣を尋ねてくれた人だけ」と答へた。

だけ」と答へた。

寺は、三の輪の方の曹洞宗の寺で、友人關係の住職がある故、そこに極めて戒名をつけて貰はふと思つた。自分の名代にFさんは寺へ出向いてくれるのだつた。

四時の約束で葬儀屋は棺を造つて來た。自分共は丁度食事してゐた故、待たせて置いた。

自分とお袋と葬儀屋の老爺とが、間の襖を締めて六疊に入り、「まだ温かいねエ」とお袋は云ひながら湯で娘の上の方を拭き、其手足は老爺にアルコールで拭かせた。葬儀屋の老爺の指圖で彼は寢卷の儘の肩を抱き自分は揃へて兩脚をもち、箱の中で膝を抱へとる工合に入れるのだつた。斜に一隅に有る彼女の浮腫の顏、自分は厭な印象をうけた。其が見納めだつた。箱の隙間へ物をつめ込むので、年寄は「どうせ灰になるのぢやからネ」と、枕や敷布や用はない品を入れた。

稍々古びた練帛の物を掛け棺は飾られた。自分は其に向ひ合つて、手廻しが早や過ぎはしないか知ら、未だ蘇る筈の病人をこんなに、と云ふ懸念と未練の感情があつた。

錢湯へ往つて戻ると、Aさんが來て居つた。Aさんは自分の面持に向ひ合うて居て、軈て膝を上げて、玄關の間で私かに云つた。

「少し包んで持つて來といだが、若し又、入用が起つたら何時でも」

自分はお金の事と分り、たゞ默默いた。

而してAさんの置いて戻つた、香典の包みは表面に、多い金額が書いてあつた。自分は見てお袋に告げて、友の厚意を有難くうけ入れるのだつた。

寺の方からFさんが戻つて來た。住職は留守で、奥さんに會つたら、葬式の用事が重り合うて今晩も明日午前午後も

時間がない故四日目にしてほと、云はれたとの事だつた。戒名は明朝出來る由。

Ｆさんは車を傭へて引取つた。自分は寺の方駄目では弱ると思つた。

お通夜の晩になつた。近所のＭさんが見えた。本郷の米屋の主人と新屋の主人と共に出て見えた。自分は本郷の人々に何か云はれてお辭儀をする折、こみあげて來て口籠つた。本郷で新屋の隣り米屋のお向ふに居た憶ひ出が、更に涙を誘ふのであつた。

お通夜の僧のない事で、米屋の大將は、普段自宅でやる般若心經を上げたいといひ、夜に丼の水へふせたお碗を木魚の代りとしてお經を稱へた。

尙、米屋の知つて居る坊さんが駒込の方にある、俗にお齋坊主と云ふ、其でも招いたらと云つて呉れた。自分は其方も斷らなかつた。米屋は歸り道坊さんの處へ寄ると云ひ、恆雄君が共に往つて、其僧を案内してくる事とした。

其お齋坊主と云ふ人の來たのは十二時過であつた。眞宗のお經を讀むのだつた。其跡で明日の事を云はれ、自分は斷つた。

自分は、五反田の方に眞宗の說敎所を開いて居る筈の僧、俳句をやる芙蓉（雅號）の事を憶ひ出し、夜が明けたら往つて尋ねてみようと思つた。

夜半雨が降り出て、音は段々雨戶へしぶく大降りになつた。お袋は茶の間にやすませ、自分と鷲見と恆雄君、三人が奧の六疊に居た。自分は戰爭と平和の飜譯本の讀み續きを開いて居り、鷲見は本箱を漁つて叢書の脚本全集を取出してゐた。恆雄君は火鉢の根にごろりと横になつた。

六時に雨戶を開けたら眞暗であつた。七時に濃い靄が下りて居り、この横丁のずつくり濡れた家々があつた。自分は

山の手線で五反田へ出掛けた。共說教所は未だ締てゐた。自分は軒に佇んでゐた。若い子持の細君が表を開け、それから自分は芙蓉に會へた。學生時分の友達で、芙蓉は凡て無關心に「お氣の毒です」と云つて、彼は法要の覺帳を繰り時間の差支のないのを云うて、出向く事を受合つた。自分は顏を合せて、隔なかつた往時の心持が湧き、三時出棺故と押付けて約束した。

家へ戻ると、三の輪の方の戒名は來て居た。

芙蓉は午後の一時にやつて來た。風呂敷包を擴げて、眞白い袈裟衣をつけた。

自分は彼の讀經を聽いて、頭には子供の折の甘い追憶が來た。母の死でその頃阿彌陀經や三部經を聞覺えて、兄と共に何時も稱へた。自分はいまお經の本があつたなら、無心によむと氣持がらくになるゾ、と左う思へた。

お經が了り、離れ彼れが來た。根津の石本の細君は報せでがつくりしたと云ひ、自分はお時儀しながら又涙ぐんだ。石本の細君は逢ひたがる故逢はせた。棺へ釘打つけるには石でする物とかで、自分は庭の石を取上げたが厭な氣持で、石は芙蓉へ渡した。

表でゞ人がガヤ／＼云つて居た。自分は棺を手近かの寺さきへと云つたが、Aさんは留めて、玄關へ廻させた。葬儀屋が門口で槪を打倒り、草鞋でふみつけた。そんな風習を見乍ら自分は、下から二番目の式の事が何故か思はれた。

棺はギイ／＼音たて元氣よく運ばれてゆき繼く自分と鷺見とは雨後のぬかり道を遁れがち故、途中で人力を二臺傭うた。日暮里のさきの廣い畑道へ出、堀割に沿うて棺と人力とは別々に堀割を挾んで並行してゆくのであつた。

町屋の火葬場で、裸の棺を車附の平板の上に載せた。其裸の棺が幾個も見えた。自分は宰領の葬儀屋の老爺の手へ心付

を渡した。

窗の扉へ封印をして、異臭の泌込んで居る建物の外へ出て來た。

根津の女達は休憩所の前で「一服しませう」と誘つた。

が自分は頷かなかつた。

「休んだ方がよかない。お禮を云つたり」

「厭だ」

自分は鶯見の注意をも斷つた。女達を置いて戻るのだつた。

自分は三の輪の寺へ廻つた。

「今戻つた處です」と奥さんは云うて又、昨日からの事を挨拶された。「組合の寺も相にくつかへて居りましたものですから」

「芙蓉君が來てくれました」と自分は和尚さんの方へ向いた。

「ほう」住職は俳句の方から芙蓉は知合であつた。

自分は改めて佛事を賴み、あす骨上げから玆へ廻ると云つた。尙遺骨は預けたいと云つた。和尙は默頭いた。

「初七日過ぎて預りますか、また明日すぐ預りますか」と尋ねた。

「左う、内の年寄と相談して」と自分はきめなかつた。

「此頃は簡略に直ぐ寺へ預ける向もあります」

左樣な話をして、暗くなつて戻つた。

茶の間にお袋と姪の千代子、恒雄君とが寄合つて居た。自分はお袋に向ひ寺の意向を告げた。

「明日は早や骨を預けようよ」

「左うかい」

恒雄君は頬笑んで、長火鉢の根の竹の皮包を持上げ猪のキモと云ふものを見せた。取込(とりこみ)で昨日から出さなかつたのだ

恒雄君は泊り、みんな早寢の事とした。

朝、表戸に鍵掛けて置き、骨上げに出向くのだつた。

火葬場の爺の掛りの手へ心付を渡した。彼等は番號の鍵で、昨日の扉の封印を破り、引ばり出して鐵板の儘車附の臺へのせ、手早く團扇で灰を煽り捨てるのであつた。而して爺の掛りは廊下の端へ其車を押して來た。

自分は平氣で骨を上げた。

「肺の病は燒くと分ると云はれるが」とお袋は云ひ、別の器(うつは)へ歯を拾ひとる折「金(きん)はどうしたかネ、ないかねエ」などと云つた。爺の掛りは

「まさつて居るで、分りませぬよ」と云つた。

自分達は骨壺を白金巾二枚で二重に結はへ又風呂敷包にした。提げて、電車の中へ入つた。暖い天氣であつた。

自分達はやがて、本堂へ並んで坐つた。新婦元□□□□の戒名の附く骨甕を眺め乍ら讀經のあとで、お袋は姪と恒雄君と各々に紙に包んだ物を佛前に上げさせた。自分は座敷の方へ戻り、住職や奥さんと暫時話をしてから、用意の紙に包んだ物を出し、友達づくで斷られるのをしひて納めて貰ふのだつた。自分は寺へ繋(つか)りがつき、物を上げたい心持が自然に湧いて來るのだつた。

「埋葬證はありますか。埋葬證は骨に添ふものだから」

住職に云はれ、自分は燒場から持戾つた其書附(かきつけ)を手渡した。

お袋は、骨上げの戻りは家の物をたべない慣はしだと云ふ故、上野廣小路へ出てみんなでお鮨をたべた。

「寺の方、納つて安心した。之ばつかりが心配ぢやつたが」とお袋は濟んだ故云つた。

自分は、粗末な野邊送りであつたと思ひ、併し其は些も恥とは思はなかつた。

彼女が死んだ事は自分の頭に深く泌こんだ。が、かなしみは時日が段々に薄らがしていつた。Aさんが來た時その心持を話すと、

「悲哀を忘却してゆくことは又、人としては悲劇だネ」とAさんは云つた。

自分は只頬笑んだ。かなしみを得うもちこたへないかも知れないが——

近隣や、通りの物資店など他(よそ)の目に、自分が妻を亡くなした男として映る事は、考へると自分は何故か恥かしかつた。こちらに慰藉を云ひかける、深切な目ではあつたが、自分はもつとつきあつて貰ひたいと思ふた。

此感情は次第に自分の頭に湧き上つた。慰藉を云はれ左うされると、何故か恥かしく、或恥辱の感を覺えて來た。慰藉を向ける相手に腹が立つわけではないが、自分が恥しく、其で強い屈辱を覺えるのであつた。(此恥辱の感があつて、左う云ふ彈力のある氣持から自分は復再び起上るやうになつたと思ふが)

畫家の桝原君が自分達の舊師のHさんを案内して來た。H師は此程外國から歸つて來たのであつた。H師は昇(あが)つて、六疊の床の前に飾つてある、戒名を見て、其線香立に新しく線香をつぎ、

「僕はついに逢はなかつたのかネ」と、彼女の上を云つた。

自分はこみあげて、云へず唯默頭いた。師に甘へた涙であつた。お袋が出て挨拶をした。桝原君は

「先生に此横丁は分りにくいから」と云うて笑つた。外國土産チシアンの模寫の油繪や大きい複製の寫眞などを、桝原君は借りて來て居て、擴げて見せるのだつた。自分は涙の味の殘る頭で、よい繪を見、興奮をおぼえた。

ある暖い東風(こち)の吹く日は、緣側で東風に吹かれ、自分は胸がこみあげて、涙を流すのだつた。

(十三年二月)



夢

野上彌生子

お嫁入の時はせめて更紗の花模様の綿のふく〳〵した蒲團を一組拵へて行き度い。――これが貧乏な、十九の娘のお濱の唯一の夢であつた。

『一枚三十錢の赤綿にしたところで、敷蒲團に十枚入れて三圓。掻捲だけは幾らか薄綿で我慢するにしても、掛蒲團にはどうしても十五六枚は入れなければならない。兩方で三十枚と見て九圓。それに敷蒲團の三圓で、綿だけも十二圓からかかるのだもの。』

お濱は場末の裏町の暗い長屋の窓の下で、明けても暮れても內職のシャツの穴かがりに勵みながら、何十遍斯んな胸算用を繰返したか知れなかつた。幾ら稼いでも稼ぎ過ぎはしない、と云ふ思ひが彼女を鞭つて、一層仕事に精を出さしてゐた。けれどもその手間賃のほんの一部分さへ、後日の綿代のために殘すことは今はむづかしかつた。父親には早く別れ、働き人の兄は兵隊に取られ、母親は長い心臟病で、たまに氣分のよい時には娘の仕事に手を出したり、安い木綿物の賃縫をして見た

もするが、長くは續かないで、切なさうな息使ひをして寐込むのが常であつた。でもお濱は失望しなかつた。
『兄さんが兵隊から歸つて來さへすれば。』彼女は斯う思つてゐたのであつた。『私の取つたものを丸々うちへ出すことは要らないのだし、三四ヶ月もみつちり稼いだら蒲團の一組位なんでもありはしない。』
その代り着物も要らない、芝居も見たくはないと思つてゐた。
お濱のこの風變りな夢には據りどころがなくはなかつた。それは兄が兵隊に取られるまで、半年程、仲働として勤めてゐた或る富裕な銀行家の娘の嫁入支度の夜具であつた。派手を盡した結婚であつただけに、夜具も友禪や羽二重づくめの目の醒めるやうなものばかりで、一組積み重ねると子供の脊丈ほども嵩張るのが、眞綿ばかりで、持つと雲のやうに輕かつた。若い女中たちは決して平氣にそれを見ることは出來なかつた。それでなくてさへ、一般に誰かが結婚すると云ふことは、噂だけでもその周圍の未婚の娘たちを幾らかづゝヒステリックにしないではすまないもので、その現象は既に、主従の區別なしに彼等の間に現はれてゐた。若い十人近くの女中たちは一體におしやれになり、髮の毛一筋、指の爪一枚にもこれまでにないほどの細心な注意を拂ひ、半襟を新くし、帶を變へ、妙にそは〳〵してはしやぎ廻るかと思ふと、急に沈んだり怒りつぽくなつたりした。一人の美しい小間使は女中部屋の隅でよく泣いてゐた。これ等の共通の發作は、贅澤な結婚衣裳や調度類が、注文した店から新たに屆けられて來る度に、その著しさを增すやうに見えた。取りわけ、或る切り離されない聯想を伴ふ點に於て、その華美な三組の夜具ほど彼等の若い胸を打つたものはなかつたであらう。
『一と晩でもよいから斯んなお蒲團にくるまつて寢て見度いわねえ。』
或る日、一人の女中は憚らず羨みの聲をあげて溜息をついた。

『お安い御用だわ。さあさ、寢て御覽なさいよ。』

いつでも長持に納められるやうに、一組づつを萌黄の大風呂敷に包んでゐたお秀と云ふ年かさの女中は、斯う答へてそゝのかすやうに、紅白を二枚重ねた羽二重の敷蒲團を、十五疊の座敷のまんなかに長々と伸べた。

『婆やさんが來てよ。』

『大丈夫。あの人なら植木屋さんと金光樣の有難いお話で夢中になつてゐるところですもの。それに奧樣もお孃樣も丁度お留守だしさ。斯んな時がまたとあるものぢやないわ。一つお初を御免蒙つて、お孃樣のお仕合せにあやかりなさいよ。』

けれども云ひ出した當人を初めとして、他の女中たちにせよ、それほどの冒險を敢えてしようとするものはなかつた。

『皆んな弱虫ね。なら私が寐てやるわ。』

斯う云ひ樣お秀は輕くころ〃と蒲團の上に身を落すとすぐ、腕枕をして滿足らしく、また朋輩たちの臆病を嘲るやうに、薄笑ひをしながら足を踏み伸ばして寢そべつて見せた。

當時どの女中よりも年が下で、半分子供に過ぎなかつたお濱の頭の中にも、その瞬間の光景だけは忘られぬ印象を留めてゐた。而して自分の嫁入支度の蒲團の夢とお孃さんの美しい蒲團とが相連なつてゐると同じ關係で、その光景もそれ等から切り離されないものとなつてゐた。時によると、すべてが混亂して、お孃さんの蒲團が本統に自分の蒲團になつたやうな氣がしたり、又その上で笑つて寢ころんでゐる人が、お秀ではなくて知らぬ男の人であつたりした。驚いて我に返ると、屹度仕事の上に何か知ら飛んでもない間違ひをしてゐるのを見出した。

『何んて馬鹿だらう、まあ、私は。』

彼女は舌打をして、仕方なくなひの穴かがり一つに二錢損をしたのを悔いながら、又新たに針を動かし始めるのであつた。

待遠しい二年の後、兄がやつと家に歸つた。彼は左官であつた。而してまだ親方持ではあつたけれども、腕が利いて可なりな金を取つてゐたから、母親と妹二人を養ふに困る筈はなかつたのだが、それが理屈通りに行かなかつた，彼は酒が好きで、仲間うちで飲めば、誰よりも先にどんぶりに手を突つ込んで自分の金を摑み出さなければ承知しないと云ふ風であつたから、幾ら取つても殘る金はなかつた。兵隊から歸つて來ると、その二つの特長が前よりも一層著しくなつてゐた。同じ隊にゐたとか、部屋が一緒だつたとかで、ちよい／＼訪ねて來たりする友達は、同時に彼の新しい飲み仲間でもあつた，彼はよく財布を空にした。

『お濟、すまねえが、晦日まで五兩ばかし貸してくれ。』

『厭だねえ、先月のもあれつきりだよ。』

『まあ、さう云ふなつてことよ。今に百倍にして歸してやらあ。』

『呆れもしない。』

が、兄妹は仲が惡くはなかつた。自分の稼いだ金が期待以上に兄の手に奪はれる不平にしても、けち／＼した人づき合ひの惡い兄を持つ悲しみに比べれば何んでもなかつた。その上開けつ放した曇りのない態度で、云ひ度いままのことをづか／＼と云つてのける兄の調子には、妹の拒めない強い親しみが溢れてゐたので、お濟は口でこそ大げさにこぼしても、内心は割に平氣で自分の收入を毎月兄に割いた。

兄の友達の一人なる田宮との間に結婚の話が湧いたのは、丁度斯んな狀態が三年ばかり續いた後であつた。

『まだお嫁入どころの騒ぎぢゃないわ。』

お濱はさう云つた。本統にさう思つてもゐた。理由は單純であつた。――彼女の貯金は豫定の半分にも達してゐなかつたから。それだけではとても滿閣だつて拵へられさうもなかつたから。

けれども他にその結婚を拒絶する口實は見出せなかつた。田宮は兄が兵營の中で得た友達の中でも一番實着な働き手で、珍しく酒を澤山飲まなかつた。而して職業は大工で、舅姑や小姑の係累を持たない獨り者であつた。

『それで當人がお前でなけりやかみさんは持たねえと云ふんだから、豪氣な話さ。これで何んとか不足を云つた日にや、それこそ罰が當るぜ、おい。』

斯んな調子で說く兄は、最も熱心な說き手でもあつた。母親には元より異存はなかつた。お濱の心はだん／＼と動き始めた。しかしその變化の重な原因は田宮が手堅い職人であることや、酒を多く飲まないことや、舅姑や小姑がないことではなかつた。彼から思はれてゐる――その一と事がお濱の女らしい心の眞ん中を衝いたのであつた。彼女にも戀がはじまつた。お濱に彼と自分との今日までの繋がりを順々に思ひ出さうとした。さま／＼なことが思ひ出された。彼が初めて兄を訪ねて來た日のこと。それから少くとも月に一遍はきつと顏を見せたこと。母親が昆布の佃煮があれば何んにも要らない、と云ふ話を一度した後で、來る度に佃島へ廻つて――彼は築地小田原町の親方の二階に寢泊りしてゐた――佃茂の佃煮を屹度買つて來たこと。また今年のお盆には、しよつちう來ては世話になるからと云つて、お濱に縮の中形を一反持つて來たこと。いつ來ても今床屋から出たばかりのやりた済ずんだ綺麗な顏をしてゐたこと。――さうして男振も惡くはなかつた。

『初めからそんな積りで來たのだわ。――いやな人。』

お濱は一人で顔を赤くした。それと共にこちらは飽くまで平氣で笑つたり、しやべつたり、氣に食はなければ劍突をくはしたり、忙しければ、

『今日は駄目ですよ。晩までにこれだけみんな仕上げなけりやならないのですもの。遊んでゐる暇はないわ。』

と遠慮もなく云つてのけて、母親を相手に火鉢の傍で世間話をしたり、活動の筋を話して聞かしたりして、氣長に坐つてゐる彼の方には目もくれなかつたこと、――髮一つかき上げもしなかつたことなどが、恥かしく思ひ廻はされた。心惜しい氣もした。

お濱は終に結婚を承諾した。それで田宮は親方の家を離れて、新しく家を持つことになつた。外神田の裏通りに二間の菓子の空き箱程な古い家が見つかつた。世帶道具だけは親方の方で祝つてくれたけれども、敷金や造作の金は自分で都合しなければならなかつた。且つ、その道に生きてゐる者の肝癖から、我慢のならない箇所に少しばかり手を入れかけると、大概は親方の納屋に轉がつてゐた板きれで間に逢はしたにも拘はらず、矢張り四分板の四五枚、丸太の二三本は買はねばならなかつた。それで彼が漸く家らしくなつたと思つた時には、もう財布は大方盡きてゐた。お濱の方ではまた郵便貯金をみんな引き出した。すべてで三十六圓と二三十錢あつた。彼女の長い希望から云へば、その金は何よりも先に新しい蒲團の爲に費されなければならなかつた。けれども母親は、蒲團だの、簞笥だの、長持だのと云ふのは、立派な紋付で、大神宮樣へでも行つて盃事をしようと云ふお孃さんの仕度で、自分たちが眞似すべき事ではない、と云ふ考を持つてゐた。

『それよりか柄のよい銘仙を一疋買つて、羽織と着物を拵へた方が幾ら德だか知れやしない。親方の家へ顏を出しに行くにしたつて、それなら直ぐにも間に合ふのだから。』

この言葉を押しきつて、それでも蒲團を拵へ度いとは、お濱には云へなかつた。他の物でなかつただけ、場合が場合であつただけ、彼女は氣後れがした。

彼女は一人で下町へ買物に出た。自分の貯金では母親の意見通り銘仙を一疋買つた。それから着物の裾廻しと羽織の裏を一緒に買つたら、五錢も殘らなかつた。その次には、兄がひどい工面で祝つてくれた三十圓で、帶と 銘聚と、針箱と、下駄を一足買つた。彼女の嫁入支度はこれで皆んなすんだのである。それでも歸り道に伴傳の店の方へ歩いて行くことは忘れなかつた。其處の飾窓の中に陳列された美しい夜具類は、また新しく彼女の胸をときめかした。お濱は板硝子で鼻を打つのも忘れて、目を燃やしながらいつまでも立つて眺めてゐた。

『あんなものを夢にも欲しいと思ふのではない。』

お濱は何遍も自分で自分に云ひ譯をした。ほんの更紗で結構なのだ。花模樣がついて、綿さへふつくらしてゐれば。――併し電車に乘つて、片道の切符を取り出すために開けた金入の中には、買物の間、苦心してやつと殘した五圓札が一枚と、くしや〳〵の十錢札が二三枚あるきりであつた。彼女は重い吐息をついてぱちんと金具を閉ぢた。

半月の後、終に來るべき一 夜が來た。而して彼女は、自分の長い夢とは非常に遠い物――親方の二階で何年か着古したのをその儘貰つて來た、青梅縞の翔の堅い、綿のこつ〴〵した夫の蒲團の中古で寢た。けれども彼女は失望はしなかつた。と云ふよりは、若い妻の幸福は蒲團の堅い軟かいに關係のないことがわかつた。けれども、それきり彼女の古い希望が全然忘られた譯ではなかつた。殊に晴れた日、物干棹に擴げてある蒲團が、夜の光で見るよりも一層見 ぼらしく目にうつる場合などは 夢は容易に甦つた。馴れて何んでも話すやうになつた時、お濱は夫に打ち明けた。

『それだけは是非拵へて來度いと思つたのだけれども。……矢張し思ふやうにならないものね。』

『ぢや拵へればいいぢやねえか。蒲團の一枚や二枚なあんだ。』

『あんな大きなことを云つて。』

二人は顏を見合せて笑つた。が、その下からお濱は誓つた。

『でもこれだけは屹度作りませうね。私の心願ですから。その代り他の物は何んでも辛抱をするわ。』

まる一年たつた時、彼女の夢想はやつと逐しられたかのやうに見えた。それも更紗どころではない、柄のよい花模樣のメリンスに綿のふく〳〵入つた美しい蒲團が一組出來上つた。けれどもこれは夫婦のものではなかつた。小さすぎた。その内に息子が生れて、新らしい蒲團はその小さい者に占有された。子供はそれがどれだけ母親の魂の籠もつたものであるかは知ることゝなしに、無頓着に、平氣にすや〳〵とその上で眠つた。お濱にしても、自分の夢の案外な結果に失望はしなかつた。快樂を子供に讓つて悔いない母親の心が、既に彼女の心になつてゐた。蒲團は實際美しく、華やかで、暗い煤けた長屋の四疊半では、別世界の物のやうに立派に見えた。お濱は此の上もなく滿足な顏付でこれ等の光景を眺めた。――自分は去年ながらの、ごつ〳〵した青梅縞の古蒲團に橫はりながら。

十年近くの月がたつた。けれども彼等の暮らしは余り樂にはならなかつた。子供は順々に殖え、物價は高くなつた。手間賃もそれにつれて上つたには上つたけれども、小僧をおいたり、それに食べさせたり、着せたりする費用で、獨り者の職人のやうな金は使へなかつた。お濱も丁度忙しい盛りの世話女房で、蒲團の夢なぞを見てゐる暇はなかつた。ただ必要上から何枚かの蒲團が作られてはゐたが、それは昔の娘らしい夢とは關係のない、實用向の、間に合せの物ばかりであつた。而してまたそれは次々に抱いて寢る子供たちのおしつこに濡れて、いつも臭かつた。赤ん坊でさへ、今で

は初めての息子の時のやうな美しい蒲團は貰ひ出せなかつた。最初の小蒲團が何遍も流用された。而して段々にしみがついて、破れて、燒け焦げが出來て、全然昔の面影を失つた末に、その小蒲團も何人目かの赤ん坊を横たへたのを最後に、ぼろ屑の中に押し込まれた。

斯うして彼等は終に八人の子供を持つた。母親の乳房にはいつも屹度一人の赤ん坊が吸ひついてゐた。膝には膝で小さい姉か兄かが甘へてをり、その他右にも左にも絶えず二三人の子供ががや〳〵してゐて、喧嘩をしたり、泣いたり、ねだつたり、ぐづつたりしてゐた。

『あゝあ、お前たちのやうに云つちや母ちやんは氣狂ひになつちまふよ。ちつとは表で遊んでお出でな。』

斯うどなりつけて、それでも二三錢づつお小使を握らして、皆んなを家の外へ追ひ出した後の十分か二十分間が、せめて人間らしい息をつく時であつた。彼女は結婚當時からよく坐り馴れた臺所と茶の間の中間の壁に凭りかかつて、足を投げ出して、赤ん坊を抱へたまゝよく居睡りをした。時によると彼女はまた妙な氣持になることもあつた。

『世の中つて斯んなものか知ら。』

勿論それは斯んなはつきりした言葉や考へ方で彼女の心に現はれたのではなかつた、けれども人生に對する漠然たる疑惑には相違なかつた。――何事も思ふやうにならないで、貧乏をして、年取つて、汚くなつて、それで子供ばかり順序正しく生れて來る。――

『本統にもこれつきりでお仕舞になつてくれなけりや、命が續かない。』

けれども夜、ほんの一合たらずの酒に一日の苦勞を忘れてゐる父親を取り捲いた時の團欒は樂しくなくはなかつた。子供達ががや〳〵すればするほど、一家は陽氣な悦びと晴れやかな叫び聲に包まれた。小さい二三人は交る〳〵父親の

肩に飛びついたり、頸にかぢりついたりした。母親が叱れば彼等は一層勢ひづいてはしやいだ。

『そら、留公、來い。』

終には父親が膳を離れて、子供等を相手に角力の眞似をした。

『狹いとこで、お父つあんまで何んだねえ、子供と一緒になつて。』

斯うは云つても彼女の心にはもう暗い陰はなかつた。お濱は赤ん坊を抱きながら笑ひ〳〵見物の一人になつた。一生懸命にむしやぶりつく子供も可愛かつた。同時にまた晩酌の後のいい色をした夫の顏や、まだ男の盛りを失ひきらぬ、逞ましい手足に目を据えた。

けれども此の時期にも彼等は長く留まることは出來なかつた。子供たちは爭つて成長した。男の子は男の子で、また女の子は女の子で、それ〴〵背丈と强さと若さで彼等の後に迫まり、追ひかけられた父母は、我ともなしに一足一足老の方へ歩いて行つた。長男と次男は父の職をついで同じく大工で、三男は日本橋の唐物屋に奉公に出てゐた。四人目がはじめての女の子で、今ではその娘が母親に代つて立派に家の世話をした。

長男が政府筋の仕事で二年ばかり南洋の方へ行つて、可なり纒まつた金を持つて歸つた年の秋、一家は根岸に引つ越した。今までに比べれば土地は落ちたけれども、淺草方面に得意を持つてゐる此の一家には却つて便利でもあつた。それに表通りの二階家で、裏には、ほんの三坪足らずではあつたが空地があつた。

『おや、庭まであるんだねえ。』

初めてその家を見に行つた時、たつた一本ちびた八つ手の木が隅の方に生えてゐたのを見つけて、母親はそれを庭にしてしまつた。而して悦んだ。結婚以來ずつとあの狹い神田の露路の中で暮らして來たお濱に取つては、實際、庭のあ

る家に住むと云ふ思ひだけでも素破らしいことに相違なかつた。併し、引越すと其處は材木の置場に使はれたのだが、母親はそればかりにはして置かなかつた。彼女は近所の縁日から黄色い豆菊を二三株買つて來て、八つ手と並べて、丁度部屋から眺められる位置に植えた。——彼女の世界にも漸くこれだけの餘裕が出來た。

この菊が毎朝深い霜をかぶるやうになつた頃であつた。母親は風邪がもとで珍しく長く床についた。醫者は、幾らか肺尖を侵されてゐるらしいから氣永く養生しなければいけないと注意した。父親と子供たちはその言葉に驚かされた。もう藥代や慈養物の價に心配する境遇ではなかつたので、家ぢうが總がかりで出來得る限りの手當を盡さうとした。

『お母さんの蒲團を一組新らしく拵へるといいわねえ。綿も堅くなつてゐるし、——お醫者樣だつてあゝやつてゐらしやれば、これぢや幾ら何んでもひどくつて。』

娘が斯う云ひ出した。皆んなが贊成した。

『よし、皮だけは明日にもおれが仕事の歸りに買つて來てやる。』

兄は乘氣になつて云つた。

『兄さんに分るか知ら。』

『べらぼうめ、蒲團の皮ぐらゐ買へねえでどうするんだい。』

『さうね、着物とは違ふし、ぢや買つて來て下さいよ。ここいらには碌な物はないのだから。——敷蒲團と小夜具と掛けと三枚ぶりですよ　間違はないでね。更紗でもなんでもいいわ。——裏はうちで間に合せて置くから要りません。』

明けの日、淺草へ仕事に行つた兄息子は、更紗の綺麗な花模樣を一と包抱へて戻つて來た。

『おや、赤が入つてゐるのねえ。』

『年寄は子供と同じだ。赤いのが賑やかでいいや。』

一日たつて、懇意な近所の蒲團屋からそれが出來上つて來ると、お濱は夫に頭を抱へられ、子供たちに腰や手足を抱へられて、新しい蒲團の上に移された。

『立派なもんだ。』

父親は悦んだ。

『柄も蒲團になつてからまた引き立ちましたね。おつ母さん、いい氣持でせう。』

『もつと早く拵へばよかつたんだあね。』

兄息子は殘念さうにさう云つた。けれどもそれがどの程度に遲過ぎたかと云ふことは、彼等は決して知らなかつた。

お濱は白くなつた小さい頭を新しい蒲團から僅かに覗かせて晝も夜もうと〳〵してゐた。その枕許に、これもすつかり年取つた夫が、弱り果てた人生の長い道連れを淋しさうに見守つて座つてゐた。



寒さ

芥川龍之介

或る雪上りの午前だつた。保吉は物理の教官室の椅子にストオヴの火を眺めてゐた。ストオヴの火は息をするやうに、とろとろと黄色に燃え上つたり、どす黒い灰燼に沈んだりした。それは室内に漂ふ寒さと戦ひつづけてゐる證據だつた。保吉はふと地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤あかと熱した石炭に何か同情に近いものを感じた。

「堀川君。」

保吉はストオヴの前に立つた宮本と云ふ理學士の顔を見上げた。近眼鏡をかけた宮本はズボンのポケットへ手を入れたまま、口髭の薄い唇に人の好い微笑を浮べてゐた。

「堀川君。君は女も物體だと云ふことを知つてゐるかい？」

「動物だと云ふことは知つてゐるが。」

「動物ぢやない。物體だよ。――こいつは僕も苦心の結果、最近發見した眞理な

んだがね。」

「堀川さん、宮本さんの云ふことなどを眞面目に聞いてはいけませんよ。」

これはもう一人の物理の教官、――長谷川と云ふ理學士の言葉だつた。保吉は彼をふり返つた。長谷川は保吉の後ろの机に試験の答案を調べかけたなり、額の禿げ上つた顔中に當惑さうな薄笑ひを漲らせてゐた。

「こりや怪しからん。僕の發見は長谷川君を大いに幸福してゐる筈ぢやないか?――堀川君、君は傳熱作用の法則を知つてゐるかい?」

「デンネツ? 電氣の熱か何かかい?」

「困るなあ、文學者は。」

宮本はさう云ふ間にも、火つ氣の映つたストオヴの口へ一杯の石炭を浚ひこんだ。

「温度の異なる二つの物體を互に接觸せしめるとだね、熱は高温度の物體から低温度の物體へ、兩者の温度の等しくなる迄、ずつと移動をつづけるんだ。」

「當り前ぢやないか、そんなことは?」

「それを傳熱作用の法則と云ふんだよ。扨女を物體とするね。好いかい? もし女を物體とすれば、男も勿論物體だらう。すると戀愛は熱に當る譯だね。今この男女を接觸せしめると、戀愛の傳はるのも傳熱のやうに、より逆上した男からより逆上してゐない女へ、兩者の戀愛の等しくなる迄、ずつと移動をつづける筈だらう。長谷川君の場合などは正にさうだね。……」

「そおら、はじまつた。」

長谷川は寧ろ猾しさうに、操られる時に似た笑ひ聲を出した。

「今Sなる面積を通し、T時間内に移る熱量をFとするね。すると—好いかい？ Hは濕度、Xは熱傳導の方面に計つた距離、Kは物質により一定されたる熱傳導率だよ。すると長谷川君の場合はだね。…」

宮本は小さい黒板へ公式らしいものを書きはじめた。が、突然ふり返ると、さもがつかりしたやうに白墨の缺を拋り出した。

「どうも素人の堀川君を相手ぢや、折角の發見の自慢も出來ない。—兎に角長谷川君の許嫁なる人は公式通りにのぼせ出したやうだ。」

「實際さう云ふ公式がありや、世の中は餘つ程樂になるんだが。」

保吉は長ながと足をのばし、ぼんやり窓の外の雪景色を眺めた。この物理の教官室は二階の隅に當つてゐる爲、體操器械のあるグラウンドや、グラウンドの向うの並み松や、その又向うの赤煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易だつた。海も——海は建物と建物との間に薄暗い波を煙らせてゐた。

「その代りに文學者は上つたりだぜ。——どうだい、この間出した本の賣れ口は？」

「相不變ちつとも賣れないね。作者と讀者との間には傳熱作用も起らないやうだ。——時に長谷川君の結婚はまだなんですか？」

「ええ、もう一月ばかりになつてゐるんですが、——その間もいろいろあるものですから、勉强の出來ないのに弱つてゐます。」

「勉强も出來ないほど待ち遠しいかね。」

「宮本さんぢやあるまいし、第一家を持つとしても、借家のないのに弱つてゐるんです。現にこの前の日曜などにはあらかた市中を歩いて見ました。けれどもたまに明いてゐたと思ふと、ちやんともう約定濟みになつてゐるんですからね。」

「僕の方ぢやいけないですか？　毎日學校へ通ふのに汽車へ乘るのさへかまはなければ。」

「あなたの方ぢや少し遠すぎるんです。あの邊は借家もあるさうですね、家内はあの邊を希望してゐるんですが――おや、堀川さん。靴が焦げやしませんか？」

保吉の靴はいつの間にかストオヴの胴に觸れてゐたと見え、革の焦げる臭氣と共にもや〱水蒸氣を昇らせてゐた。

「それも君、やつぱり傳熱作用だよ。」

宮本は眼鏡を拭ひながら、覺束ない近眼の額ごしににやりと保吉へ笑ひかけた。

×　×　×　×　×　×　×　×　×

それから四五日たつた後、――或る霜曇りの朝だつた。保吉は汽車を捉へる爲、或避暑地の町はづれを一生懸命に急いでゐた。路の右は麥畑、左は汽車の線路のある二間ばかりの堤だつた。人つ子一人ゐない麥畑はかすかなもの音に充ち滿ちてゐた。それは誰か麥の間を歩いてゐる音としか思はれなかつた。しかし事實は打ち返された土の下にある霜柱のおのづから崩れる音らしかつた。

その内に八時の上り列車は長い汽笛を鳴らしながら、餘り速力を早めずに堤の上を通り越した。保吉の捉へる下り列車はこれよりも半時間遲い筈だつた。彼は時計を出して見た。しかし時計はどうしたのか、八時十五分になりかかつてゐた。彼はこの時刻の相違を時計の罪だと解釋した。「けふは乘り遲れる心配はない。」――そんなことも勿論思つたりし

た。路に隣つた麥畑はだんだん生け垣に變り出した。保吉は「朝日」を一本つけ、前よりも氣樂に歩いて行つた。

石炭殼などを敷いた路は爪先上りに踏切りへ出る、――其處へ何氣なしに來た時だつた。保吉は踏切りの兩側に人だかりのしてゐるのを發見した。轢死だなと忽ち考へもした。幸ひ踏切りの柵の側に、荷をつけた自働車を止めてゐるのるのは知り合ひの肉屋の小僧だつた。保吉は卷煙草を持つた手に、後ろから小僧の肩を叩いた。

「おい、どうしたんだい？」

「轢かれたんです。今の上りに轢かれたんです。」

小僧は早口にかう云つた。兎の皮の耳袋をした顏も妙に生き々々と赫（かゞや）いてゐた。

「誰が轢かれたんだい？」

「踏切り番です。學校の生徒の轢かれさうになつたのを助けようと思つて轢かれたんです。ほら、八幡前に永井つて本屋があるでせう？　あすこの女の子が轢かれる所だつたんです。」

「その子供は助かつたんだね？」

「ええ、あすこに泣いてゐるのがさうです。」

「あすこ」といふのは踏切りの向う側にゐる人だかりだつた。成程其處には女の子が一人、巡査に何か尋ねられてゐた。その側には助役らしい男も時々巡査と話したりしてゐた。踏切り番は――保吉は踏切り番の小屋の前に菰をかけた屍骸を發見した。それは嫌惡を感じさせると同時に好奇心を感じさせるのも事實だつた。菰の下からは遠目にも兩足の靴だけ見えるらしかつた。

「屍骸はあの人たちが持つて行つたんです。」

こちら側のシグナルの柱の下には鐵道工夫が二三人、小さい焚火を圍んでゐた。黄いろい炎をあげた焚火は光も煙も放たなかつた。それだけに如何にも寒さうだつた。工夫の一人はその焚火に半ズボンの尻を炙つてゐた。

保吉は踏切りを通り越しにかかつた。線路は停車場に近い爲、何本も踏切りを橫ぎつてゐた。彼はその線路を越える度に、踏切り番の轢かれたのはどの線路だつたらうと思ひ思ひした。が、どの線路だつたかは直に彼の目にも明らかになつた。血はまだ一條の線路の上に二三分前の悲劇を語つてゐた。彼は殆ど反射的に踏切の向う側へ目を移した。しかしそれは無効だつた。冷やかに光つた鐵の面にどろりと赤いもののたまつてゐる景色ははつと思ふ瞬間に、鮮かに心へ燒きついてしまつた。のみならずその血は線路の上から薄うすと水蒸氣さへ昇らせてゐた。……

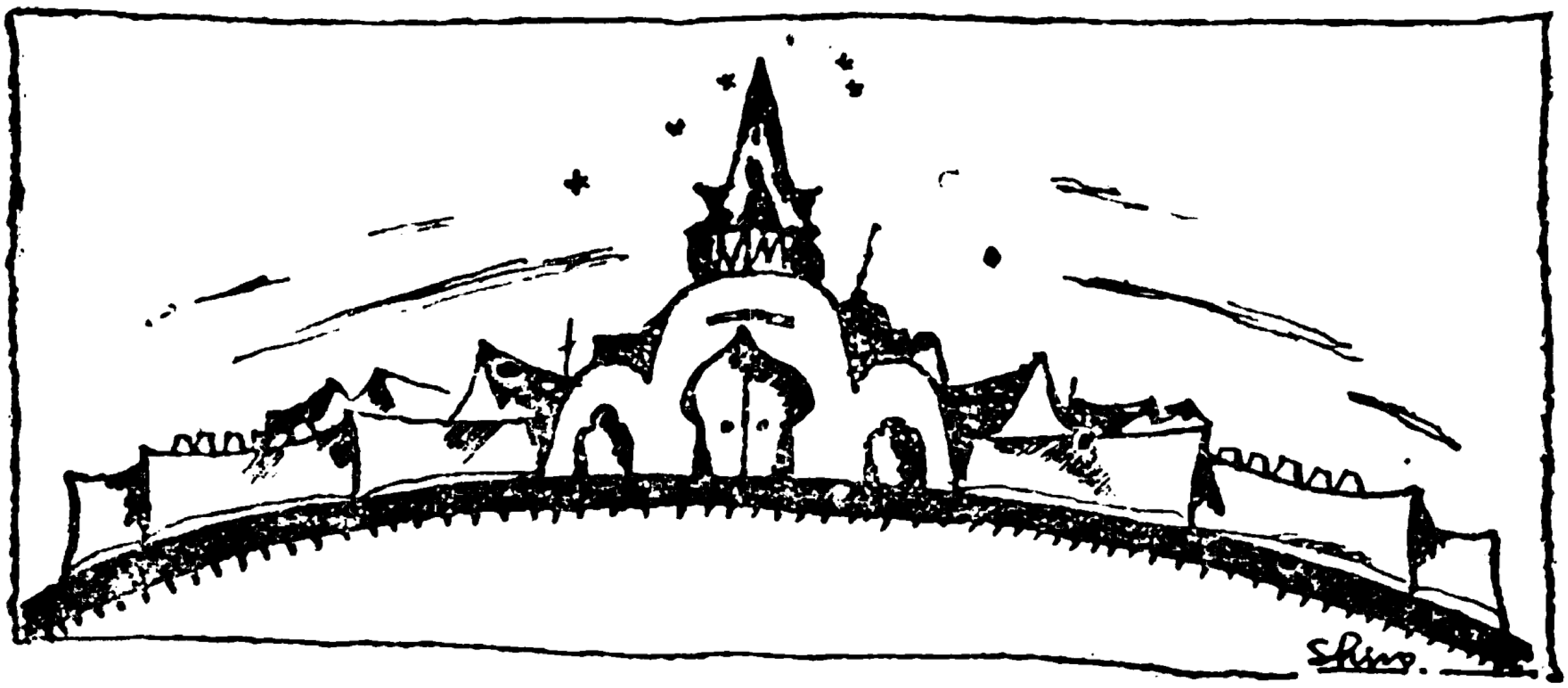
十分の後、保吉は停車場のプラットフオオムに落ち着かない歩みをつづけてゐた。彼の頭は今しがた見た、氣味の惡い景色に一ぱいだつた。殊に血から立ち昇つてゐる水蒸氣ははつきり目についてゐた。彼はこの間話し合つた傳熱作用のことを思ひ出した。血の中に宿つてゐる生命の熱は宮本の敎へた法則通り、一分一厘の狂ひもなしに刻薄に線路へ傳はつてゐる、その又生命は誰のでも好い、職に殉じた踏切り番でも重罪犯人でも同じやうにやはり刻薄に傳はつてゐる、——さういふ考への意味のないことは彼にも勿論わかつてゐた。孝子でも水には溺れなければならぬ、節婦でも火には燒かれる筈である、——彼はかう心の中に何度も彼自身を說得しようとした。しかし目のあたりに見た事實は容易にその論理を許さぬほど、重苦しい感銘を殘してゐた。

けれどもプラットフオウムの人々は彼の氣もちとは沒交涉に、いづれも幸福らしい顏をしてゐた。保吉はそれにも苛立たしさを感じた。就中海軍の將校たちの大聲に何か話してゐるのは肉體的に不快だつた。彼は二本目の「朝日」に火をつけ、プラットフオオムの先へ歩いて行つた。其處は線路の二三町先にあの踏切りの見える場所だつた。踏切りの兩

側の人だかりもあらかた今は散じたらしかつた。唯シグナルの柱の下には鐵道工夫の焚火が一點、黄いろい炎を動かしてゐた。

保吉はその遠い焚火に何か同情に似たものを感じた。が、踏切りの見えることはやはり不安には違ひなかつた。彼はそちらに背中を向けると、もう一度人ごみの中へ歸り出した。しかしまだ十歩と歩かないうちに、ふと赤革の手袋を一つ落してゐることを發見した。手袋は卷煙草に火をつける時、右の手ばかり脫いだのを持つて步いてゐたのだつた。彼は後ろをふり返つた。すると手袋はプラットフオオムの先に、手のひらを上に轉がつてゐた。それは丁度無言のまま、彼を呼びとめてゐるやうだつた。

保吉は霜曇りの空の下に、たつた一つとり殘された赤革の手袋の心を感じた。同時に薄ら寒い世界の中にも、いつか溫い日の光のほそぼそとさして來ることを感じた。



南國

犬養健

一

×驛で元野の一家は人車といふものに乘り換へた。歲末から正月にかけての大學の休暇を利用して、父親が家族三人を湯治に連れて行く道中だつた。母親が變つた乘り物には醉ひ易いので、人車は疊敷にしてある舊式の方を一臺借切る事にして、驛夫がガタンと扉をしめてからも發車までにまだなか〳〵半端な時間があつた。

いかにも歲末の旅の、ゴタ〳〵した不便な途上であつた。次男の禮吉は少年ながらにその考が頭に一ぱいだつた。朝早く母親に起されて、東京の茶の間で口から白い息をたてながら制服に着かへたのに、此處ではもう身體が倦るい快感にひたるやうな日盛りである。そしてまだ四時間かゝるといふ事だ。

「向ふへ着くと日が暮れるね」

太くて西洋の學者のやうな髭を生やし、强い近眼鏡をかけた父親が、懷中時計を

見ながら、風の吹いてゐる窓の外に向つて云つた。

「御退屈様でございます」見送にプラットフォームに立つてゐた驛前の茶屋の番頭が、恐縮した様子を見せた。「しかし坊ちゃん、お正月お歸りの節はいよ〳〵輕便鐵道でお越しになれますよ」

父親に似て丸顔の禮吉が羞むで默つてゐると、番頭は構はず父親に向つて、輕便鐵道が年内にたうとう開通しなかつた理由をしきりと述べたてゝゐた。だが車窓の向ふで日中の風にさらはれながら響く聲なので、禮吉は何となしに遠々しい會話を聽く思ひでゐた。

初めての長旅で、禮吉は四つ違ひの兄――向ふ側の窓から半身乘り出して、周圍の景色には煩らはされず、自分中心に快活にしてゐる兄の英太郎とは、何となくチグハグな心持になつてゐた。英太郎はあまり禮吉に口を利いてくれなかつた。そして禮吉は顋から上を窓硝子にぴつたり向けながら、自身のきれぎれな子供らしい空想のなかに閉ぢ籠りがちであつた。

……人夫が前後から聲をかけた。それから車臺がゴツツと一揺れすると、その儘緩く軌道をすべり出した。

そして風物總てが目新らしく變つて行つた。日が眞正面からあたつてゐる丘のすべてが蜜柑畑なのだ。車の走り方が早くなるにつれ、その蜜柑畑の傾斜面に非常な勢で近づく事があつた。強い緑の葉むらから浮き出てゐる、これもぐつと強い色調で赤い鈴生りの蜜柑が、妙に立體的にかゞやきながら禮吉の鼻の先まで突進して來る。その刹那に人夫の掛聲があつて、軌道が崖に沿つて徐順に曲るのだつた。この快活な變化が禮吉には面白くて、彼はだん〳〵夢中になつて行つた。

いかにも半島全體が南國であつた。やがて丘の斜面がなだらかになり、人車はその中腹を走つて、左手の眼の下に深

い海の眠つたやうな靜かさが廣々とひろがつた。

先へ先へと行手に伸びてゐる岬の緑い色、一里ぐらゐの沖で豐かにふくらむでゐる海面の色、そして處々の丘に塊つてゐる蜜柑畑の色、すべてが强くて烈しくて濃かつた。何か思ひ切つて粗く、力强く、「これでもか」と表現されてゐるやうな感じであつた。見てゐると頭の中までいつの間にか色彩で一ぱいになるのだ。

車臺のなかは東京では想像の出來ない暖氣でムッとして、長閑な懶るい時間が續いた。乘物に弱い母親はうつらうつらと頰を赤くしてゐた。

人車は時々畑のなかで止つたりして、禮吉が倦きて不機嫌になつた頃やつと目的の溫泉場に着いた。

父親の云つた通り灯ともし頃になつてしまつた大通りを、爽々として俥を列ねて行つた。白い湯の烟が、海に向いて傾斜してゐる町の諸所の屋根の陰から立ちのぼつてゐた。その柔かな、暮れ方の雜音にまぢつた噴出の音を聞くと、禮吉は何となしに蒸氣暖房の匂の濃い大規模の公會堂か病院――つまり日常の家庭生活とは異なつた、少年の空想を華やかに刺戟する場所を聯想するのであつた。

俥は町の中ほどでうねうねした坂道の横町に曲つて、加賀屋といふ宿屋に着いた。それは芝生の庭に向つて鍵の手に曲つた、總二階の大きな旅館だつた。

庭ではまだ殘つてゐる空の明るみを賴りにして、追羽根をつく音がはげしかつた。その賑やかさが禮吉の心を突いた。丁度玄關の傍にゐた、姉妹らしい揃の被風を着た娘が三人、羽子板を抱へた儘新らしい客の着くのを見物してゐたが、年下の方の二人が殊にぢろぢろと俥を降りる禮吉を檢査した。

「恭子さん」

眼の大きい、柔和な顏の姉娘が、控へ目な聲で注意してゐた。……それでも禮吉は、脫ぐのに暇のとれる編上靴の紐を不器用にほどいてゐる間、まだ自分には似合はない中學服の長ヅボンを拘泥しながら、敷台で赤くなつてゐた。

元野の一家は、本館の裏手にある妙に寂つそりした感じの離れの中二階に落着いた。――華やかな場所に來たといふ心持に壓倒されて、禮吉はその晩何となく寢つきがわるかつた。

二

……禮吉が母親より一足遲れて風呂場のある棟の方へ降りて行き、六つばかりずらりと並んでゐる浴室の前の板の間で戸惑ひしてゐると、宿屋の女中が見つけて、「元野さん、こちらですよ」と端の戸を敎へてくれた。

其處へすぐ前の引戸が開いて、四十ぐらゐの奥さんが、前日の夕方玄關前に立つてゐた三人姉妹と、禮吉よりも年上らしい男の子とを連れて出て來た。

「この方は元野さんの坊ちやんでゐらしやるの」

束髮に結つた氣さくなその奥さんが女中に聞き直した。そして奥さんは後ろに附いてゐる男の子を連れ出して、

「ほら、お前は大きい方とばかり遊びたがつてゐるけれども、こんなにいゝお友達が出來たぢやないの」

そんな風に遠慮なく云つた。だが男の子は、禮吉を種に叱言を云はれたやうな顏付で、むつつりと不愛想にしてゐた。下の二人の娘達は、禮吉が肩にかけたタオルに記してある名前を無遠慮に讀んで、奥さんの陰で姉娘と小聲に話してゐた。だがその樣子が、水蒸氣の斑點の出來た横手の大きな姿見にはつきり映つて見えてゐるのだつた。

男の子も禮吉もすぐに話の出來る齡ではないので、奥さんは「どうぞお母樣によろしく。まだ御挨拶にも出ませ

で」さう云つて通り過ぎて行つた。そして同じやうな模樣の浴夜を着た娘達の化粧の匂が、浴室から漏れる湯氣と結ばつて何となく冷淡に――――さう禮吉は多勢に無勢で感じた――――其場に殘つた。

浴室に入ると、母親は晝に近い光線の差し込んでゐる湯槽につかつて、浴夜を疊んでゐる宿屋の女中と話し込んでゐた。そして禮吉が今の奥さんの話をする前に、母親はもう女中から聞いて知つてゐて、その一家の噂をして居るところだつた。禮吉はそれが富井といふ控訴院の判事の家族である事を知つた。

「まだ奥樣とお子樣方だけで、御主人はおいでになりません。何でもずつと押し詰つてからお越しになるさうでございますよ」と女中が云つた

「自家の主人は御懇意にしてゐるのですけれど、わたしは御主人も奥さんもまだ存じてゐないのですよ」

母親は內氣な口振りで女中に答へてゐた。病身な母親はあまり交際のひろがる事はすゝまないらしかつた。

「何故そんな風なのだらう」

禮吉は母親の態度を不平に思つた。こんな明るい、暖い、色の美しい土地で、さういふ風に靜かに、控へ目にしてゐる事はいかにも不釣合に感ぜられた。

旅館の芝生の庭は東向に幅廣くだら〳〵と傾斜して、その中腹に西洋人の客のための洋館が孤立して建つてゐた。それは椎の大木で半分隱された古風な建て方の洋館で、朝晩は日本建と同じやうに赤銅を張つた雨戶を廊下に開け閉てする構造であつた。客は溫泉地帶を調べに來てゐる地質學者とか、身體の弱い人とかゞ六七人居るきりで、西洋人が集まると必らず釀される、健康な快活な空氣は少しも見られなかつた。普通の西洋人の旅行客は、皆此處からさう遠くない

山の温泉地にある、設備の整つたホテルに奪はれてしまつてゐた。――この洋館の寂びれた感じが、同じ宿屋の經營でありながら日本館のゴタ〳〵と込み合つた有様と、奇妙な對照をつくつてゐた。

禮吉はブロンドの髮を小さく束ね、瘠せて黄色い顔をした十七八の西洋人の娘が、長い駱駝の襟卷を頸にくる〳〵と卷いて、杖をかゝえながら上の庭に出て來るのを見かけた。西洋娘は追羽根を面白さうに見物してゐた。だが禮吉はその様子から何か繊弱い陰氣な印象を受けて、その娘が肺病の療養に來てゐるものと一人ぎめに考へてゐた。

瘠せた西洋娘は、毎日きまつた時間に必らず五十ぐらゐの母親と、柔和しい容貌の青年とを伴れにして、規則正しく散歩をしてゐた。青年が中に入つて双方の腕を支へてゐた。そして三人は短艇のオールが揃つて動くやうに、ゆつくり歩調を調節しながら洋館を出て、一時間ほどすると又同じ靜かな組み合せで木戸から戻つて來た。

……その傾斜面の隅の方に、蜜柑の處々に植つてゐる日當りのいゝ茶畑があつた。大學生が一人、專門學校の生徒が一人、大きい中學生が三四人といふやうな、加賀屋に泊つてゐる學生仲間が其處を寄り合ひ場所にしてゐた。

友達を作る事の早い英太郎は、早速その仲間に近づいた。着いて三日目の朝、禮吉が上の庭の端まで出てゆくと、蜜柑の樹の陰からガヤ〳〵と雜談が聞えて來て、英太郎の聲がそのなかに交つてゐた。

「君の中學に居つた××を知つてるでせう？……あれが丁度僕らの方で……亂暴な奴でな」

――禮吉が下りて行つて見ると、日溜りに寢轉んだ大學生が、そんな風の書生言葉で英太郎に話かけて、もう交際が始まつてゐるところだつた。そして、富井の男の子も仲間に交つて足を投げ出してゐるのを見ると、禮吉も少し離れた所に腰を下した。

「元野君の弟ですか？」と髮をブラッシで勢よく分けた、陽氣な感じの大學生が英太郎に訊ねた。

「えゝ」

英太郎は不機嫌に禮吉を見た。禮吉は英太郎がいつの間にか他の中學生の眞似をして、帽子の徽章を故意と細長くつぶし、そして卷煙草をくわえてゐるのに驚いた。

「もつと此方にいらつしやい」

大學生が禮吉に愛想よく云つた。そして又ガヤ／＼と賑やかな雜談が續いた。

――町家の屋根を越して入江になつてゐる海が青くゆら／＼と搖れてゐる。その眩しい照り返しが、日光を充分に吸つたこの崖の枯草まで來て、鈍く動いてゐる。

禮吉は町の後ろを圍んだ山の方で、時々午砲のやうな音響の起るのに氣が付いた。

「あれは何ですか」と英太郎が訊ねた。

「又やり始めたな。山の方で縣道を、ダイナマイトを使つて擴げてゐるんですよ」

「行かう！」と中學生の一人が勢よく大學生に云つた。「ねえ、下山さん、行かうよ。晝までに歸つて來られるよ」

「腹がへつた」大學生の下山が答へた。「それに今からぢやあ、そこの小さい連中が飯に遲れるとわるいぜ」

「僕の弟なら、おいて行つた方がいゝんです」と英太郎が云つた。

「いや、君の弟さんはいゝとして、うつかり危い場所なんぞに連れてゆくと、雪雄君の姉さんに恨まれてしまふからなあ」ほや／＼の大學生の下山は、草の上で肘枕をした儘、富井の男の子の方を向いて笑つた。「なあ雪雄君。君の姉さんは上品でこわいねえ」

雪雄は眞赤になつた。

「あの姉さんはお茶の水の何年なんだね」
「三年です」氣の弱い雪雄は困惑して答へた。
「すると四月で四年か。やつぱりこわくなる頃かなあ」下山が欠伸まぢりにそんな事を云つた。
姉娘の事だな、すぐに禮吉はさう思つた。彼は一眼見た時から、自分よりも年上のその姉娘を好いてゐた。着いた夕方の玄關先と翌る朝の浴場の前との柔和な印象が、禮吉の頭に謎のやうに殘つてゐた。姉娘は他の二人のやうに場所馴れない彼をぢろ〳〵と見る事は避けてくれた。二度とも禮吉の顏を眞面に見ないので、顏立が一番漠然としか捕へられなかつた。だが今、その姉娘がもう學生仲間でこんなに噂されてゐる事を知ると、禮吉は妙に悩ましくなつた。不安になつた。そして雪雄が只氣弱く羞むでゐて、察しの鋭くなささうな顏付をしてゐるのを見ると、禮吉は齒痒くなつて來た。
……暫くすると、薔の生垣の陰で西洋人の響きのいゝ聲が聞え、帽子がちら〳〵見えた。專門學校の生徒が下山の腰をそつと突いて敎へた。木戸が開いた。例の瘠せた西洋人の娘が母親と青年とを伴れて、悠つくり入つて來た。そして後から、木戸口のぬかるみでぐづ〳〵してゐた富井の姉娘が現はれた。
「マーデンさん！」下山は西洋風に氣取つて青年に聲をかけた。「今日は長かつたですね。何處まで？」
「やあ」マーデンといふ青年は日本語で答へて、傾斜面を斜にぐん〳〵と登つて來た。彼は脊の高い、青い眼をした、そして子供らしい顏に少し雀班のある青年だつた。「今日は新らしいお伴れが出來たので、峠の途中まで登つて見ましたよ。」
さう云つて彼は帽子を脫ぎ、手巾で汗ばんだ顏を拭いた。灰色の髮が赤ん坊の生毛のやうに柔かつた。

「あなた方、ダイナマイトの音を聞いたか？」とマーデンが云つた。「お孃さん達があまり恐がるので、わたし達は途中でひき返しました」

「ミス、富井が止めたのでせう」下山が意味ありげな笑ひ方をしながら訊ねた。

「いゝえ、わたしの從妹の方がずつと恐がりました。いきなり飛び上つてわたしに縋りつきました」マーデンは單純に釣り込まれながら、大袈裟に身振をして見せた。學生仲間はドッと笑つた。

禮吉は橙々の枝と枝との間から娘達を見た。娘達は運動の後で息をはづませ、悠つくりと歩調を合せながら坂の途中まで來てゐた。マーデンの從妹も富井の姉娘も、早咲の梅の二尺ほどの枝を抱きかゝえてゐた。その點々とした白い花との對照で、血行のよくなつてゐる頬の色が美しくぽつと目立つてゐた。……富井の姉娘は眼の疲れたやうに大きい、頬の豐かな、體格のわりに頸の細つそりした――さういふ感じの娘であつた。彼女はまだ子供つぽい前髮を小さくふくらませ、顏を稍々傾けながら眞直な姿勢で歩いてゐた。少女から一人前の娘になり立ての滑稽な美しさが、何となく彼女に附き纏つてゐた。マーデンの從妹の靴が輕快で美しいやうに、彼女の白い足袋の動き方もはき〳〵と美しかつた。

そして二人とも肩掛を邪魔さうにずらせてゐた。

「わたし、今日また本字を覺えて來ましたよ」マーデンは無邪氣にさう云つて、懷から手帳を出して見せた。「この發音はこれでよろしいか」

皆が首を伸ばして手帳を見た。手帳には「土耳其風呂有り」と下手に書いて、振假名が附いてゐた。

「ルッディー」

と西洋娘がよく響く聲で呼んだ。マーデンはそれを聞くと「では又」さう云つて傾斜面を急いで引返して行つた。そし

て四人はうねうねした登り道を洋館の方に去つた。
「下山さん、日向ぼつこをしてゐた甲斐がありましたね」大きい中學生が媚びた調子で揶揄つた。
「さあ、雪雄さんもそろそろ行かないでいゝのかい？」下山が聞えない振りをして、雪雄に注意した。「……ねえ、僕は親切だらう？君」
「云はれたのだから起つてしまへばいゝのに」さう思つて禮吉は、橙々の樹の下に小さく踞りながら、雪雄と下山とを不安さうに觀察した。
洋館で食事時の鐘が鳴り、學生仲間はやつと立ち上つて散つて行つた。禮吉は英太郎から「お前、あんな大人のなかに入つて來るんぢやないよ」と叱言を言はれた。だが學生仲間が富井の姉娘から敬遠されてゐる樣子を察した今、彼はさう失望しなかつた。

禮吉は日に何度となく、離から本館の表二階に出て見た。——離の中二階から橋のやうになつてゐる渡廊下をわたつて本館に行き、もう一つ短い廊下を突きぬけると、海から來る明るい光線がいきなり顏に逼つて、表二階の欄干のついた椽先に出られた。禮吉はその欄干に靠れかゝりながら、長いこと眼の下の芝生と方々の部屋との氣配を見物するのだつた。さういふ事には其處は屈强であつた。
英太郎はもう始終出歩いてゐて、食事時にしか顏を見せなかつた。
……何處で寢起してゐるのだらう。……禮吉は富井の母親に紹介されて以來、姉弟達に二度出逢つたが、二度とも叮嚀な挨拶をした儘素通りされてしまつた。だが彼はやはり富井の一家の事を、兎角頭のなかで追つてゐた。

入江になつてゐる青く濃い流は、庭の出先で見るよりもずつと大きく擴がつてゐる。鍵の手に曲りながら一直線に並んでゐる障子の下半部に、日が充分あたつて静まつてゐる。——それを見てゐると禮吉は、自分の退屈、自分の離の非社交的な退屈に對する嫌はしさが、心につのつて行くのであつた。何かこの壞土地の環に適はしい、華やかな事に對する要求が、強く揺り起されるのだつた。

「友達がなくつてつまらない」

彼は母親にそんな謎をかけた。それは母親に對してはいかにも正當で、何の不思議もなかつた。だが母親よりももう一歩禮吉の心持に對して吟味の厳しい人——例へば學校の主管教員が、彼のつくねんとした態度を視て「どうしたんだ」さう聲をかける場合を想像すると、彼は反應のやうに何か恢しさを感じないわけに行かなかつた。

「君はどうも熱せてゐる。今に氣をつけないといかんぞ」

その教員が禮吉を教員室に呼んで、さう注意した事のあるのを、彼は思ひ出してゐた。

十三の歳の暮で、事實彼の身體も心も、自分では氣づかない大きな變化をともなつて、烈しく成熟しつゝあつた。それが半島の明るい光線と暖氣に包まれた、この温泉場の雰圍氣のために、一層のびのびと助成されてゐた。

三

年が押しつまつて富井の父親が東京から來た。それは半白の髭を細長くのばし、禮吉を見るといつも微笑してゐる、いかにも裁判官らしい落着きを持つた態度の人であつた。この富井の父親が毎日のやうに離の中二階に來て、禮吉の父親と碁を打ちはじめると、子供同志も自然口を利くようになつた。

姉の仲子が十六、雪雄が十四、恭子が禮吉と同い年、末の芳江が十だつた。仲子は美しさのさう目立つ方ではなかつたが、いかにも總領らしい鷹揚さを持つた、誰にも好かれる怜悧な娘だつた。恭子の美貌は禮吉の母も女中たちも褒めた。だが禮吉はその美しさがあまり整ひ過ぎてゐて、何處か險のあるところが親しめなかつた。芳江は兩親に甘やかされてしまつてゐて、まだ全くの子供だつた。雪雄は仲子に似た顏立の氣の弱い少年だつたが、禮吉と二人きりで遊ぶ事を何となくつまらながつて、大きい學生仲間の後を絶えず追つてゐた。だが禮吉の雪雄に對する感情も、仲子の弟だといふ以上にはどうも入れなかつた。

「禮吉さん。丁度いゝ位のお友達が少なくつてお氣の毒ね」察しの早い仲子が遠廻しに云つた。「でもあなたや雪雄は、あのお仲間ぢやあ似合はないわ」

そして仲子は美しい赤い顏をした。――學生仲間が雪雄や宿屋の女中を通じて、仲子にいろ／＼と話しかけるのを、仲子が露骨にならない遣り方で避けてゐる、さういふ經緯を禮吉は感づいてゐた。そして禮吉は同じ仲間の英太郎の事を考へ、弟の感情で羞むのだつた。

「それはお兄さんはいゝ方ですけれど……でもお兄さんもどうしてあんなに、始終一緒にゐらつしやるのでせうね」

仲子はそんな風に云ひ直してくれた。だが實際は、英太郎に對しても彼女は拘泥を持つてゐた。

……こんな事があつた。仲子が晝に近い時間に父親を搜しながら、離座敷の入口まで來た。

「お父さん、此處ぢやないの？」禮吉を呼び出して、彼女は笑ひながら訊ねた。

「今朝帽子なんぞ被つて出て行つたのに」

「仲子さんですか。どうぞお入り遊ばせ」部屋で一日針仕事のやうな事ばかりしてゐる、禮吉の母が聞きつけて聲をかけた。「今まで離にはちつとも來て下さらなかつたのね」

「今日は！」英太郎がゐないと知ると、仲子は禮吉の母に挨拶して入つて來た。そして

「お父さんもうぢき御飯ですよ。お止めなさい」さう云つて、碁石の音の朝から續いてゐる次の間の襖を、開けて覗くのだつた。「まあゝこの部屋は表（おもて）から來ると變ね」

碁盤に日の當るのを避けて障子をしめきつてあるのに驚いて、彼女は近眼の人のやうな眼付をした。

「お前も少し遊んで行け」富井の父親が落着いて答へた。

「こつちで飯にするさ」禮吉の父がさう誘つた。「仲子さんもどうです」。

だが仲子も、別に云ひつかつて來たほどの催促もせずに、その儘ぶら〳〵と遊んで行つた。それが禮吉の部屋に來た最初であつた。

…「仲子さん、崖の梅が咲きましたよ」

次に來た時に禮吉の母が、裏の崖地面に澤山植つてゐる梅が揃つて咲きはじめたのを敎へた。仲子は禮吉と一緒に後ろの窓を開けて見た。…禮吉は自分よりも高い仲子の身體で背を柔かく覆はれた。

「禮吉さん、此處まで匂ひがしてよ。分る？」

さう云つて彼女は、音をたてゝ大きく息を吸つた。禮吉は一生懸命に嗅いでゐる彼女の眼が、あまり疲れたやうに大きくなるので不安な感じをうけた。そして何か年よりも老けた病的な美しさを、仲子の表狀のなかに見たやうに思つた。

「ねえ、仲子さん」と禮吉の母親が針仕事をした儘、氣嫌よく云つた。「此處いらは昔は名高い梅屋敷だつたんださうで

「本當にずつと上まで植つてゐるのね」

すよ。それを加賀屋と、この上の別莊とで、地面を半分々々にしたんだつて云ひますよ」

仲子は、身體を乘り出して窓扉の上を覗いた。

「隨分大きな別莊ねえ。何ていふ方の？」

そんな事を云ひながら、崖地面の高みの網代垣を見上げてゐるうちに、仲子のマーガレットといふ、束髮とお下げとの間のやうな髮が強く禮吉の頰に觸つてしまつた。

禮吉はその感覺で夢中になつた。もつと、もつと、さういふ自分本位の醉ふやう欲望から、彼は醉ふやうに凝つとしてゐた。仲子が急に離れた。子供つぽい前髮をまき上げて大きく出てゐる彼女の額が、おど〳〵と赤くなつてゐた。禮吉は自分の心を見拔かれたやうに思つた。背中をこちらに向けて仕立物をしてゐる母親に、秘し事を持つてしまつたやうな心持だつた。二人して母親の前に戻つても、彼はまだ心持がくるつてゐた。仲子が怒つてゐはしないかと思つた。だが仲子は上づつた聲で燥いでゐた。彼女は雪雄や芳江を世話してゐる時の總領らしい樣子はすつかり捨てゝ、禮吉の母に子供らしく快活に振舞つてゐた。……母親と仲子と禮吉と三人でゐると、離座敷の寂つそりした時間がぢきに經つてしまふのであつた。仲子は元野の家庭を好いてゐる、禮吉はさう思つた。

だが英太郎だけは例外だつた。英太郎が外からひよつこり歸つて來るところに打つかると、仲子は禮吉の母と向ひ合にきちんと座つて、固い橫顏をしてゐた。英太郎の方でも知らん顏をして、次の間の窓際で外を見ながら新聞などを讀んでゐた。——部屋の空氣がすつかり變つてしまふのだつた。

「本當にいゝお孃さんだね」

仲子が歸つた後で、母親は褒めるのだ。だが英太郎が傷つけられた顏をしてゐる。――禮吉はさう思つて、返事をしない兄を氣遣はしく見るのであつた。

……又こんな事があつた。

午後の半端な時間に、禮吉が母親と入れ違つて浴室に入つて行くと、坂塀で境のしてある隣から、急に湯が禮吉の頭にかぶさつて來た。そして富井の姉弟たちの笑ひ聲が起つた。

禮吉も負けずに應酬してゐるうちに坂塀は水だらけになつた。終ひに雪雄に勢は乘つて、境の潜戸をこち上げようとした。

「雪雄さん」

仲子が嚴しく云つた。雪雄がそれでも構はずに潜戸をガタ〳〵云はせてゐると、「雪雄さん！いけません！いけません！」さう仲子は哀願するやうに烈しい聲をたてた。雪雄は興醒めして暴れ廻るのを止めてしまつた。

やがて隣の連中がドヤ〳〵と浴室を出て行つて、後がしんと靜まつた。

「禮吉さん？」不意に仲子の聲が低い湯槽から響いた。彼女はまだ入つてゐたのだ。「あなたもまだそこに居るの？」

そして手拭を使ふ湯の音が聞えて來た。

「禮吉さん、一寸天井を見て御覽なさい」

仲子が快活に聲をかけた。禮吉が上を見ると、湯氣の籠つてゐる共通の天井板に、窓からの光線をうけた湯の面の反射が、明るく映つてゐた。そして仲子が手拭を使ふたびに、それがゆら〳〵と搖れるのだつた。

「ようし、今度は僕がやつて見るよ」

禮吉はさう云つて、兩手で烈しく湯をかき泥ぜて見た。天井の動揺はすつかり崩れ、湯氣が新らしく濛々と立ちのぼつた。

「まあ、亂暴ね！」仲子は高い聲で笑つた。そして湯氣がしづまると、「禮吉さん、今度は何が見えて？」さう訊ねた。

何かはつきりしない影が天井て動ゐてゐた。

「何だらう」

「分らない事？わたし今からやつて立つて、窓のところに手を延ばしてゐるのよ」仲子はその證據に窓硝子を輕くたゝいて見せた。「ほら、天井で動いたでせう？今右手を眞直に擧げたのよ」

何か淸らかなものに對する、强い美しい想像が禮吉を打つた。

引戸が音をたゝて、英太郎がのつそり入つて來た。仲子は急に默つてしまつた。

暫くすると仲子はなるべく音をたてないやうにして、浴室を出て行つた。そして空いた湯桶にそゝぐ筧の湯の音だけが、チョロ〳〵チョ〳〵ロと長閑に續いてゐた。

「今出て行つたのは仲子さんだね」

英太郎が頸先まで湯につけながら、天井を見た儘不意に云つた。

「えゝ」

と禮吉は答へた。……天井では先刻の湯氣がまだ隨勢で緩るく渦を卷いてゐた。禮吉はその湯氣のなかに、今しがたの仲子の饒舌がまだ生き生きと殘つてゐるやうに感じた。だがそれは皆、目の前で首の附根まで湯にひたしてゐる英太

郎とは無關係な事なのだつた。

「もうそろ〳〵出ろよ。上氣(のぼ)せるぞ」

英太郎が兄らしく優しく云つた。禮吉は素直(すなほ)に湯槽からあがつて、浴室を出た。

「仲子さんの事を怒つてはゐまいか」

禮吉は廊下を行きながら、ふつとそんな氣がした。そして彼は風呂場に殘した英太郎を恐れた。湯桶のなかにぢつと獨りきりでゐる、もう若者になつた英太郎の纖(さいと)な想像を恐れた。

四

正月になつた。二日に富井の一家と荒野の一家、それに英太郎の相手の中學生が二人加はつて、溫泉場から南に一里餘り離れてゐる次の宿場の漁村まで遠足した。

丁度大晦日に家に歸つて來た、奎二といふ加賀屋の次男が案內役になつた。彼は帝大の三年生で、禮吉の父の講義も聽いた事がある、その縁故だつた。無口で、讀書家で、氣持よく落着いたその次男が一緒だと知ると、大きい學生達は煙たがつて仲間に加はらなかつた。——禮吉は歲暮に母から貰つた植物採集の胴亂を、肩からかけて出掛けた。

長い暖かい午後だつた。一行は右側に雜木と枯草の生えた急な山がいつまでも續き、左側は絶えず岩石の崖になつてゐる海邊の道を、出入りの多い海岸線に沿つてうね〳〵と歩いて行つた。一つの岬を突きぬける切通しを過ぎると、また眼の前に同じやうな靜かな入江が現はれ、その對岸に赭い岩土(はにつち)の斷層を見せた岬が、新らたに出て來るのであつた。これが先へ先へと繰返された。

龍吉は、始めて人車に乘つて溫泉場に向つた道中を思ひ出した。その同じむつとする日盛り、同じ色彩の濃さ、同じ長い午後の倦るさを思ひ出した。だがその折の印象が眼の前の景色に從つてきれ〴〵に移つてゐたのに引き替へ、今では自分の注意力が絶えず半丁ほど後ろを歩いてゐる伸子の方に傾いてゐる事を、何となしに感じるのであつた。そして頭の一部分が明るかつた。

「田舍の一里はなか〴〵あるね」

父親達はそんな事を云ひながら、時々立ち止つて遲れがちな女たちを振り返つた。女たちは道のところ〴〵に光つてゐるぬかるみを一々避けながら、悠つくりと話し込んで歩いてゐた。――伸子が遠くに見えた。彼女は實際よりも小さく遠く見えた。

――やつと目的の漁村に着いた。一行は途切れ〴〵の長い石段を上つて、古戰場といふ事になつてゐる山の頂上に出た。そして小さな神社の前にある茶屋の椽臺で休息しながら、持つて來た食べ物の箱を開けた。

眠つた靜かさを持つた海面が際限なく擴がり、沖の方で紫がかつて豐かにふくらむでゐた。そして非常に遠くの方に澤山の漁船が小さく細かく塊つて見えた。

「夜、加賀屋の二階から光つて見えるのはあれかね」

富井の父親がそれを見つけて云つた。そして皆は一つの望遠鏡を交る〴〵覗いた。

子供達は食べるだけのものを食べてしまふと、頂上の平地を手持不沙汰にぶら〴〵歩き廻つた。英太郎は相手の中學生と何かひそ〴〵相談してゐた。そして彼は父親の方を向いて

「少し僕達でその邊を歩いて來てよござんすか」と訊ねた。

「三十分ぐらゐはいゝよ」と父親が答へた。「あまり危ない所には行くなよ」

英太郎が先に立つて、冬枯の笹が兩側から延びてゐる裏手の小徑を降りて行つた。だが禮吉は、椽臺で食べ物の後始末をしてゐる仲子の事が何となしに氣になつた。彼は仲子を連れて行つてやりたかつた。

「仲子さん！」と彼は徑の下り口でぐづ〳〵しながら、たうとう思ひ切つて呼んだ。

「なあに？」仲子は少し疲れた顔で答へた。「妾、もう少し此處で、かうやつて休んでゐますわ」

「しつ」英太郎が坂の中途から急いで制した。「禮吉。餘計な事を云ふなら上に殘つてゐろ！」

彼は何故かそんな烈しい事を云つた。

禮吉が皆の後から附いて坂を下りてゆくと、胴亂がはづんでガタ〳〵と音を起てた。

「おい、禮吉さん。胴亂なんかそこいらに置いて行けよ。誰も盗りあしないよ」中學生が振り返へつて、どういふ譯かそは〳〵と早口に教へた。「そんな音を立てゝ只れると、今に困る事が起きるんだよ」

子供仲間は枯草を分け、落葉をガサ〳〵云はせて、椚林(くぬぎばやし)になつてゐる山の中腹の日溜りに下りた。

「大丈夫見えないだらうな」

英太郎は二間四方ぐらゐの窪みを見つけて其處に入り、上の方を注意深く見透かした。…熊笹が周圍にこんもり高く繁つてゐて、頂上はまるで見えなかつた。

「こりあ持つて來いだ。さあ、早く始めちまはう！」

英太郎は相手の中學生を急(せ)きたてた。中學生は制服の懐(かくし)から、煙草の紙袋と燐寸とを素早く出した。

「いゝかい、皆吸うんだよ。さうすると誰も告(いつ)ける譯にゆかなくなるからな」英太郎はそんな風に云つて快活に笑つた。

恭子は煙草を見ると羞むで眞赤になつた。だが容色よしのその顔に、苛々した强い好奇心が現はれた。

「芳ちやんは許してやらうよ」雪雄が取りなした。「目をまはすと困るもの」

「妾も吸ふわ」芳江が强請つて、不健全な大きい眼をした。禮吉は或る瞬間の伸子の眼付を思ひ出した。

英太郎、中學生、それから雪雄とひと塊になつて、一つ擦すで煙草に火を點けた。煙がすぐ頭の上の小枝にまつはり、それから空ろなほど長閑な椚の高い梢の方にぬけて行つた。

禮吉は恭子と對ひ合せになつて火を點けあつた。双方とも臆病な中腰になつて最初の一口を思ひ切り吸つた。二三寸しか顔の離れてゐない二人の吐く煙が、めい〳〵の着物に打つかつて匂を附けた。芳江は二人の腕につかまつて、出來るだけ脊伸びしながら、立つてゆく煙をもう一度吸はうと焦つた。

禮吉はすぐ眼の前に、頬を窄めて口先きの煙を避けてゐる恭子を視た。彼は悩ましくなつた。恭子の顔はいつものやうにきちんと整ひすぎた冷やかなものではなく、思ひがけない一種取り亂した生氣が、力强く現れてゐた。それは決して晴れ晴れした種類のものではなく、何か暗い不健康な影を帶びたものではあつたが、兎に角生氣にちがひない魅力が、自身で氣づかないほどに彼女を動かしてゐた。彼女は苛々として美しかつた。禮吉は醉ふやうに彼女を視てゐた。——恭子も彼も柔かい一張羅を着せられてゐる。さういふ何かしら惰らけた心持が、その感覺をなほ甘やかしてゐた。

「芳つ子ちやん。さあ、これを貸してあげるからね。上の標まで出て張り番してゐてくれ給へな」愉快さうに煙を吐いてゐた英太郎が、芳江に火の點いてゐない煙草を一本貸して煽て上げた。「そして伸子姉さんの足音でもしたら、それを必らず隱して、すぐと合圖するんだよ」

禮吉は伸子の名を聞くと、急に我に歸る心持になつた。今のわずかな時間の恭子に對する暗い陶醉が、少年ながらに

彼には空恐ろしかつた。彼は何か居たゝまれない心持で、上の徑に出てゆく芳江の後を追つた。そして梢に覆はれた山の斜面を、昂奮してあちこち往き來した。—耳を傾けずにはゐられないやうな林の靜けさと、そのなかを歩く禮吉の調子外れな、子供らしい昂奮とが奇妙な對照をなした。

突然、頭の上でガタ、ガタと禮吉の胴亂のはづむ音がした。そして日のあたつた熊笹の上に、仲子の上半身がいきなり現はれた。彼女は脊高く見えた。禮吉はハッと思つた。

「何をそんな所でしてゐるの?」仲子はけゞんな顏で、足許を氣をつけながら近づいた。「この胴亂があすこの徑に放つてあつた事よ」

禮吉は返答が出來なかつた。先刻の妄想で汚れてゐた。彼は自分の美化した仲子に對して疚しかつた。

「おや!」敏感な仲子は禮吉を捕へて着物の匂を嗅いだ。そして「禮吉さん。…分りましたよ」と云つた。

三四間下で火の點いてゐない煙草を銜へた儘、禮吉に張番を委せたつもりで無邪氣に空を眺めてゐた芳江が、仲子を見ると動けなくなつた。彼女は合圖どころではなかつた。

ガタ、ガタ、ガタ、と胴亂をはづませて、恐い顏をした仲子が眞直ぐに徑を下りた。彼女は芳江の手から煙草をもぎ取ると、それを枯草に敲きつけた。

「おい、禮吉。胴亂は音がするから止せつて、云つたぢやないか」

英太郎が下の窪みから叱りつけた。

だが仲子の姿が熊笹の陰に入ると同時に、呑氣に響いてゐた話聲がぱつたり止んだ。そして恭子に何か云つてゐる仲子の聲が聞えた。

──皆がぞろ〳〵と工合わるさうに出て來た。禮吉は小さくなつてゐた。恭子の顏からは先刻あれほども禮吉を醉はせた暗い魅力がもうすつかり消えてゐた。彼女は赤くなつて強情に默つた儘、仲子に押されて徑を登つて來た。英太郎は禮吉を見ると「卑怯者！」さう鋭く云つて、思ひ切り睨みつけた。

「みんな、下の石切場に行つたんぢやなかつたの。それなら好かつた」上の平地で待つてゐた泰二が云つた。「あすこは人足が多くつて人氣が荒いから……」

仕度をして歸り途にかゝつても、英太郎の仲間はまだ揃つて禮吉に當つてゐた。芳江までが恭子の眞似をして執拗く惡意を示してゐた　そして禮吉が傍に近づくと、皆云ひ合せたやうに歩調を早めてすつと避け、彼等だけで愉快さうに巫山戲けあつて居るのだつた。仲子はその様子に氣づいたやうだつたが、彼女は故意とそれには觸れずに、芳江の手をひいてさつさと身輕に先頭に立つた。……大人達は禮吉の母が疲れたので往きよりも猶ほ遲れ、丁度二町ほどの後に悠つくり小さく見えてゐた。

禮吉はだん〳〵氣が滅入つて行つた、こんな狀態は腕力沙汰より辛かつた。彼は海から來る夕方近い反射のために眉を顰めながら、もう十五町、もう十町と兄の仲間の後をついて行つた。そして彼の重たい足は段々と遲れた。彼はたうとう母親と一緒になつてしまつた。母親の足が緩いので、後の組が海べりの道の盡きる最後の隧道に近づく頃には、もう英太郎の仲間とは全く隔つてしまつた。そして日が薄らぎはじめた。

最後の隧道をぬけると、其處の岩陰に仲子が休んで待ち合せてゐた。思ひがけなかつた。彼女は立ち上つた。「むゝ救はれた……」禮吉は我知らずさう思つた。そして彼は泣きさうになつた。

町外れの別莊地に入つた。兩側に網代垣や生垣が靜かに續いてゐた。夕昃つた風呂場の窓から、湯氣が柔かく漏れてゐるのが見立つてゐた。今しがたまで禮吉の眼を絕えず射つてゐたぬかるみの執つこい反射も、もう微かな赤い色になつて消えかゝつてゐた。そして禮吉の胴亂の音が、その暮れ方の空氣のなかでコト〳〵と續いた。

「禮吉さん、まだ匂がついてゐますよ」仲子が並んで歩きながら、彼の方に身體を屈めて優しく云つた。「お母さんがあとでお嗅みになつたら分つてしまふわ」

——彼女も今では生き返つたやうに、眼を爽々と見開いてゐた。

「仲子さん、あなたお正月で、日本髮にお結ひになりませんの」彼女を眺めてゐた禮吉の母が、不意にそんな事を云ひ出した。「きつとお似合になつてよ。お結ひ遊ばせよ。……階下のお孃さんのお髮は、あれはこの町の髮結ださうですよ。なか〳〵上手ぢやあ、ございませんか」

「えゝ。えゝ。」と富井の母親が仲子を橫眼で見ながら、笑つてゐた。

「云つちや厭。云つちや厭」仲子は母親の前に立ち塞つた。

「おや、何かもうちやんと計劃がおありになるのね。ひどい方」禮吉の母がそんな風に云つた。

日本髮？さう思つて仲子を見上げると、何故か意味のない嫉妬が禮吉をかすめた。

夕方の町は輕便鐵道の開通と初荷とで賑はつてゐた。町の中程を旗をつけた列車が橫切ると、最後の貨車に乘つた工夫たちが「萬——歲」と語尾を長くひいて怒鳴りながら遠ざかつて行つた。そして安石炭の匂だけが薄暗闇にまぎれて後まで殘つた。

「さつき、お兄樣隨分怒つていらしつたんでせう？」

別れ別れになる時に、伸子は始めてそれを口に出した。そして伸子と母親とは禮吉の母に奬められて、髪結の都合を訊くために、その家のある横町に曲つて行つた。

「今日は救はれたのだ‥‥」伸子の待つてゐてくれた隧道までの辛い日盛りの道と、隧道からの夕只つたさば〳〵した道との、あまりに違ふ二つの心持を思ひ出して、彼は心からさう思つた。

五

一兩日した夜、加賀屋の家族の居間を空けて、娘達を主客として歌留多會をすることになつた。加賀屋の主婦がさういふ事が好きだつた。

伸子はその日午後から髪結が來てゐて、禮吉が部屋の入口まで行つても、「入つちや厭よ」さう斷つて逢はなかつた。彼女を見たのはやつと日暮れ頃であつた。彼女はタオルを持つて、浴場から取つつきの廣い階段を上つて來た。

彼女は唐人髷に結ひ上げたばかりだつた。油の匂の發してゐる前髪や髱がそれを語つてゐた。彼女は急に大人になつた。艶かになつた。花が開いてしまつた。筒袖姿の禮吉との年の隔りが急にはつきりしてしまつた。

「おや」伸子は禮吉を見ると恥しがつて、兩手で頰を包むだ。「隨分可笑しいでせう？どうせ、二三日でこわしてしまふからいゝわ」

「丸で變つてしまつたのね」禮吉はさう云つて、彼女をつくづく見上げた。

「そんなに見ちやあ、いやよ。妾だつて厭で仕樣がないのですもの」‥そんな事を云ひながらも、彼女はやはり晴れ晴れと自足してゐた。彼女の本能が自身の髪のふくらみや髷の振動を樂しんでゐた。禮吉は漠然と苦しかつた。彼は嫉

妬に似た感情から、むつつりと仲子を視てゐた。

「何を默つてゐるの？いやな禮吉さん」仲子は禮吉の顏を覗き込んだ。「晝間の事を怒つてゐるのね。だつて仕樣がないぢやないの。あの時は髮の毛をもぢやくにしてお化けのやうになつてゐたんですもの」

彼女は兩手で誇張しながら、禮吉の心を引き立たせようとした。

「もう御飯ですわ。又後でね」彼女は忙わしさうに云つた。「今夜始まるのはどうしたつて八時近くでせうけれども、出來るだけ早く行つてゝね。あなたを待つてゐてよ」

仲子は愛想よく饒舌つて別れたが、禮吉にはそれが何となく空々しく響いた。彼は沈んだ心持で離に歸つた。

だが部屋で晩食を終へる頃に、富井の座敷を受持つてゐる女中が入口まで來て、「御飯が濟んだら手傳つて戴きたい事があるから、來て下さるように」――さういふ仲子からの言傳を禮吉に傳へた。禮吉は急いで出て行つた。

仲子はもう青みがかつて來てゐる先刻の階段の上まで出て、開け放つた窓から海の方を見ながら禮吉を待つてゐた。彼女は紫の紋付羽織に着換へてゐた。いゝ帶を行儀よく締めてゐるので、兩方の胸のふくらみが豐かに目立つてゐた。

「禮吉さん、これから妾の用足しのお伴をして下さるでせう？」仲子が振り返つた。「まあ、あなた御飯を中途でやめて來たんぢやないの？」

さう云つて彼女は笑ひながら、禮吉の襟元に着いてゐる食事のよごれを除つて呉れた。

「一體何處へ行くの」と禮吉が訊ねた。

…汽笛が鳴つて、半島の周回汽船が入つて來た。舳の赤い燈が少しづつ動いて見えるのだ。

「洋館よ」と仲子が爽々として、聲を空氣に響かせて答へた。「マーデンさんのお孃さんのところに行つて、歌留多會の

ある事を知らせてあげようと思つて！……きつと珍らしがつてお喜びになるわ」

二人は下駄を履いて外に出た。

「妾ね、洋館のお部屋には一人で行つちやあ、いけないつてお母様に云はれたのよ」仲子は足許の昏くなつた芝生の上を、すつすと横切りながら云つた。「だから、禮吉さんと一緒に行くつて云つて來たの」

洋館に入つて人氣(ひとけ)のない廊下づたひにマーデンのお孃さんの部屋を探してゐると、傍の扉が開いて泰二が顔を出した。彼は讀書用の光線除けを額につけてゐた。

「マーデンさんは今食事ですよ。……西洋人はいゝかげん長飯(ながめし)だから、少し廣間(ホール)にでも行つてゐらつしやい」泰二がさう敎へた。「どうも聲があなた方だと思つた」

「泰二さんはこちらなの」と仲子が訊ねた。

「えゝ。向ふには僕の部屋なんぞないし、それにあなた方がよく騷ぐから」彼は笑ひながら說明した。「こつちの空間を使つてゐるんです。ハイカラでせう？」

そして三人は庭に面した、物靜な感じの廣間(ホール)に入つた。

「妾、お言傳を賴んで歸らうかしら」仲子は落着かずに云つた。

「えゝ、どちらでもよござんすよ。何て云ふんですか」

「今夜の妾たちの歌留多を一寸見に行らつしやいつて、それだけよ」

「あゝ、あるんですつてね。僕も取りますよ」泰二が落着いた笑顔で云つた。「さう云へば先刻(さつき)、階下の大學生の人が僕のところに來て、他所(よそ)の宿屋に泊つてゐる歌留多好きの友達を連れて來ていゝかつて訊ねてゐましたよ。僕は貴女方に

兎に角斷つて置かうつて云つてやりましたよ」
「わたし構はないわ」と仲子が窮屈に答へた。
「みんなぞろ〳〵と海岸の玉場の方に降りて行きましたよ。英太郎さんも交つてゐたやうだつたな。……彼處はよくない家なんだがな」そして泰二は禮吉の方を振向いた。「禮吉さんはまだあの人の子分にはなつてゐないの」
「僕はちつとも一緒に居やしないよ」禮吉が口籠つた。
「それはいゝや」泰二は、學生仲間を批評してもいゝのだと知ると遠慮なく云つた。「僕もあの仲間、何んだか感心しないなあ。氣持よく亂暴といふのなら、また好きになれるけれども……英太郎さんもあんまりくつ附いてゐない方がいゝのに」
「英太郎さんは大丈夫よ」仲子が何故か横合から庇つた。「ほかにお友達がゐないから唯あゝやつてゐるんでせう」
「それあ始めはさうなんだらうけれど」と泰二は控へ目に云つた。
「ちつとも心配ないわ。」仲子は快活に意地を張つた。「どうせ此處だけのお友達ですもの。東京に歸つてしまへば何でもないわ。ねえ禮吉さん？」
泰二は語調の強い仲子を、笑つた儘凝視めてゐた。…禮吉は「どうせ旅行先なんかの友達ですもの」さういふ意味に解つて淋しかつた。
——マーデンのお孃さんがなか〳〵食堂から出て來ないので、仲子は泰二に言傳をして戻る事にした。二人は庭に面した硝子扉の方に出て行つた。…扉のすぐ内側の卓の上に、卓燈を前にして二冊の本が、同じやうに栞を挿んだ儘ぴつたりと引つ附いて置かれてあつた。その一冊の方は綸入の特志看護婦の教科書の本だつた。

「あれはお孃さんとルッディーさんの本よ」外に降りながら仲子が云つた。「何て仲のいゝお從同胞さんなんでせう？」

外は生温かつた。禮吉は東京の春の匂を思ひ出した。間歇泉の噴出する時間になつたと見えて本館の後ろでその音がし、湯氣が空氣に含まれて來た。

「禮吉さん、知つてゐて？」仲子が動かされて感傷的に云つた。「マーデンさん達は從同胞さんですけれども、もう許嫁同志になつてゐるのよ。あの方のお母さんがさう仰つたわ。そしてマーデンさんは時々商會を無理に休んでは、社長さんに嫌はれるのも構はずに、お孃さんを養生に連れて歩いてゐるんですつて」

だが禮吉は、仲子が急に大人に見えてしまつてゐる今、さういふ事は話題にして貰ひたくなかつた。……ルドルフの犧牲的な態度に妙に感動してゐる仲子と、英太郎を意地になつて辯護した仲子とが、彼の心のなかでぴつたり結ばつた。禮吉は悩ましくなつた。自分に不滿な人を反つて強く愛さうとする妙な氣質が、仲子の身體のなかに潜んでゐるのではないか、そんな邪推が彼にふつと起つた。彼はそれを嫉妬した。仲子に今云ひ譯して貰ひたかつた。――先刻のはあなたの弟らしい感情を庇ふためにあゝ云つたのだ、さうはつきり云ひ證して貰ひたかつた。

……二人は上の庭に出る斜面を、蜜柑の間を縫つて登つて行つた。暗い處を足の感覺に委せて歩くので、水蒸氣を含んだ土が下駄に執つこく纏はるのだつた。二人は滑りさうになるのを互ひに支へ合つた。

「少し冷えて來やしない事？」

肩掛をして來なかつた仲子がさう云ひながら禮吉の肩に手を廻し、身體を彼の方に縮ませて歩いて行つた。仲子の寒さうにする息が禮吉にかゝつた。

「禮吉さん！妾が馬鹿に見えはしなくつて？」彼女は禮吉を覗み込みながら、不意に昂奮して云つた。「あなたのお母様

も何だかさう思つてゐらつしやりはしないかしら」

「知つてるぢやありませんか！」禮吉はそんな物の言ひ方を嫌厭して答へた。

「さう？」と彼女が何か考へて云つた。「…ねえ、今夜はなるべく妾の隣にゐて下さいね。大勢知らない男の方がゐらつしやると、妾はまるで駄目になるのよ。……そして傲慢に見えるんですつて」

二人が寄り合つた儘玄關先に戻ると、其處には下山の連れて來た學生達と、その姉妹らしい娘とが塊つて立つてゐた。二人は離れた。

「一寸失禮ですが」下山が仲子を認めて中から出て來た。「この連中を今夜のお仲間に入れて下さいませんか。大變歌留多が好きなんですが」

「どうぞ」と仲子は赤くなりながら答へた。

「……お茶の水でいらつしやるさうですね」他所の宿屋から來たといふ學生の一人が話しかけた。「僕のこの妹も今度お茶の水を受けますから――どうぞ何分よろしく」

さう云つて學生は、お下げに結つた可愛らしい娘を紹介せた。

「ひとつ、入學試驗の事でお氣づきの點があつたら教へてやつて下さいませんか。お茶の水は大變六つかしいさうですな」下山が陽氣に取りなした。「お暇の時にお部屋に伺はせませう」

仲子は困惑して、どうしたらいゝのだらうと云ふやうな素振で四邊を振り返つてゐた。禮吉は心配で固くなつてゐた。

英太郎が帳場を横切つた。英太郎はその様子を見ると急に鋭い眼差をした。

「禮吉。お母さんが呼んでゐたよ」彼は何故か辛々して云つた。「行かう！着物を着替へるんだつてさ」

英太郎と禮吉とが遲れ走せに歌留多をとる座敷に入つて行くと、もう大勢の人が部屋の隅に沿つてずらりと並んでゐた。ルドルフは子供らしい吃驚した顏付で、居並んだ人を落着かないやうに見廻してゐた。マーデンのお孃さんは濃紫の簡素な夜の服をつけ、積み重ねた座布團の上に腰かけながら、娘達の日本髮に感歎してゐた。彼女は仲子の簪を手に取つて見ながら、東京に歸つたら是非同じものを送つてくれるやうに頼んでゐた。お孃さんだけは三月まで殘つてゐるといふ事だつた。

遲れた者がぽつ〳〵入つて來ると、今まで時間を經てやつと落着いた娘達の着物の種々な色の配合が、また一しきりざわ〳〵と動搖して、席を順繰りに送るのであつた。――そして勝負が始まつた。加賀屋の主婦が讀み手になつた。

だが仲子は始めから何となく大儀さうに口を噤むでゐた。洋館から歸る時の快活さとは別人のやうだつた。彼女は顏色がわるかつた。眼が二重瞼になつてゐた。それは彼女が疲れて不健康になつた時の徴候だつた。勝負が何回も繰返され、大勢の者が昂奮して無遠慮に札を飛ばしはじめても、仲子はぽかんとして、對ひ合せになつてゐる階下のお孃さんが敏捷に札を拔くのに委せてゐるといふ風だつた。――階下のお孃さんは丸々した顏の、立居の身輕な、愛嬌のいゝ娘さんだつた。彼女は對手と同時に札に手をつけた場合には、すぐに「失禮しました。戴きます」とはき〳〵と云つて自分の負にしながら、直きにかせいで挽回するのだつた。それは見てゐていかにも氣持よかつた。

この氣さくなお孃さんと、仲子の疲れたやうな放心とが目立つて對照をなした。――何か先刻玄關で事があつたな！

禮吉はさう直感した。下山は時々ちろ〳〵と惡意のある眼を彼女に向けてゐた。仲子はそれを知つてゐながら、凝つと俯いた儘對ひ合ひのお孃さんの相手をして、たゞ時間の經つのを待つてゐるといふ風だつた。禮吉にはそれが分つた。

「いゝ加減に起つてしまへばいゝのに！」彼は焦々してさう思つた。だが禮吉が心配して口を利いても、仲子はそれまでも言葉少く撥ねつけてしまふのだつた。

ひと休みといふ事になつて、双方の組の者がほてつた顏で菓子鉢に手を出した。娘達は咽喉が乾いてゐて蜜柑の汁をちゆう〳〵と啜つた。

「マーデンさん！此處に百枚あるなかで、大概のは戀歌なんですよ」

……マーデンのお孃さんと仲子とが寄り合つてゐる傍に來て、下山が陽氣にルドルフに話しかけた。そして彼は札を選びながら一々口語譯になほした。

下山は崇徳院の御製を取り上げた。そして――瀨をはやみ岩にせかるゝたき川のわれても末にあはんとぞおもふ――その歌を悠つくりと分るやうに、戲言をまぜて說明した。

「ね、分つたでせう？――この時代の人はみんな猛烈だつたんだなあ」

すぐ傍の仲子が赤くなつてゐた。……禮吉は、今まで機械的に暗誦してゐたその歌の意味をはじめて知つた。なるほどと思つた。だが彼は下山の、何となく仲子に對抗してゐるやうな態度に子供らしい憎惡を感じて、その方に氣をとられてゐた。

いゝ加減に夜の更けた勝負の折に、最後の二枚が仲子と階下のお孃さんとの持札に殘つた場合が出來た。双方の組の者が力瘤を入れて二人のまはりに集まつた。禮吉の胸は動悸打つた。何か手と手が烈しく打つかり合ふとか、櫛が髮か

ら落ちるとか、さういふ動作の起るのを恐れてゐたのだ。快活で愛嬌よくて、その晩もせつせとかせいでゐる階下のお孃さんがそんな事をしても、それは周圍の昂奮した空氣によく釣合つて、なほ活々と映えて見えさうだつたが、始めからぼかんとして元氣のない仲子がさういふ動作をしたならば、それは遊び事に對してあまり本氣になり過ぎた、何か座を白けさせる重苦しさが、現はれてしまふやうに思はれてならなかつた。彼は息を凝らして膝を見つめた。

札が讀み上げられた。階下のお孃さんは油の乘つた素早さで、自分の膝元の札をぐつと一本指で押へ、顏を擧げて快活に笑つた。――禮吉は返つてほつとした。

「へまだな」自身の愉快のために仲子の樣子に氣づかずにゐた泰二が、札を集めながらさう云つた。

「皆さん、御免遊ばせね」仲子は泰二の冗談を反らせ、倦るい眞顏をして味方の娘達を振返つた。

「いゝぢやありませんか！遊び事だもの」下山が取りなした意味にも解れる言葉を、落着いて鋭く云つた。

仲子の顏が歪んだ。彼女は耐らへてゐた。――だが禮吉は、英太郎が異樣な顏付になつてゐるのに驚いた。

……一二番勝負をした後、皆は挨拶し合つて散つて行つた。仲子は待ち切れないやうに立ち上つて、廊下で見えなくなつてしまつた。禮吉はその後を追つた。富井の部屋にもゐなかつた。彼は夢中になつて方々を搜した。

彼女は、庭に面した表二階の椽先から一歩曲つた陰に、茫んやり立つてゐた。此處にも東京の春先に似た惱ましい空氣が漂つてゐた。彼女は泣いてゐたらしかつた。いつも行儀よく結んでゐる唇が形わるく痙攣してゐた。

「どうしたの？どうしたの？」と禮吉は一生懸命で訊ねた。

「何でもないのよ。放つて置いて頂戴」

彼女は眼を腫れぼつたくさせて、弱々しい聲で答へた。こんな無力な仲子を見た事がなかつた。禮吉は何か優越を感

じた。

「下山の奴が何かしたんでせう？さうでせう？」

禮吉は執つこくさう訊ねながら、仲子の羽織にぐん〳〵と顔を押しつけ、その泣き脹らした眼を下から覗き込んだ。姉妹のない彼はかういふ羽織の柔かさに驚いた。禮吉は感動した。二度の經驗のあとで、仲子に強く接觸する事に對する臆病はもう除れてゐた。……だが少しも特別な場所ではない、晝間誰れも氣輕に往き來してゐる廊下でさういふ事をしてゐるのが、いかにも異様に感ぜられた。

「構はないで向ふに行つて頂戴！誰か來るといけないわ。向ふに行つてゝ頂戴！」

仲子は子供つぽい聲でそんな事を口走つてゐたが、それでも禮吉を避けようとはしてゐなかつた。禮吉は妙に冷靜になつた。――これで又仲子と一歩親しくなつてしまつた。もう大丈夫だ。そんな風に喜ばしく考へてゐた。それは泣いてゐる仲子を案じる心持とは、まるで別々なものだつた。

仲子がすつかり平靜になつてから、二人は階段の上まで出て別れた。もう更けてゐた。禮吉は部屋に歸つて床に就いてもなか〳〵眠られなかつた。彼の全身が明るく、利己的に、落着いて、喜んでゐた。彼は暗いなかで仰向きながら、眼を大きく見開いてゐた。

ふと、下山が宵に說明した歌のきれ〴〵が、不思議な韻を帶びて彼の頭に浮んで來た。…瀨をはやみ岩にせかるゝ云々といふ、その歌の說明を思ひ返してゐるうちに、彼は居たゝまれず昂奮して來た。思ひ餘つた堪えがたい心持を、絶えず末へ末へと流れようとする川の意志に托した讀み人の主意が、今彼には美しい韻律を帶びてはつきりと諒解された。彼は闇のなかで何度も寢返りを打つた。……彼は東京に歸るまでには仲子の愛情の證を握みたい、どうしても握みたい！

さう粗々しい衝動で思ふのであつた。

六

富井の家族が東京に歸る事になつた。雲解のひどい、晴れた美しい朝だつた。元野の一家が艀の出る船着場まで送りに行つた。——輕便鐵道は開通してから二度も脫線して、汽罐車が崖につる下つたので、富井の母親が神經を起して汽船に變へたのだ。

兩方の家族は、町外れから船着場に行く別莊地の靜かな石疊みの道を、乾燥した下駄の音をたてながらぞろ〳〵と下りて行つた。仲子と禮吉とは先頭を步いてゐた。二人はあれから又親しくなつてゐた。快活で別れるやうではなかつた。仲子は大人らしく指輪をはめてゐた。まだ身に適はなかつた。禮吉の長ヅボンのやうなものだつた。

朝の海が前に三角に開けた。停つてゐる汽船の艫から金具の反射が銳く眼に來て、何間步いてもそれから外れる事が出來なかつた。

「わたし歸つたらすぐに端書を出すわ」仲子がまぶしく睫毛を光らせながら云つた。「さうしたらその返事に、きつと手紙を下さいね」

「きつと」と禮吉が承知した。

「妾の家のそばで、あなたの學校の服を着た坊ちやんによくお逢ひするわ」仲子はそは〳〵とそんな事を云ふかと思ふと、不意にまた話を變へた。「あなたにも遊びに來て戴くわ」

禮吉は落着いてゐた。彼は本鄕の西片町の富井の家を、分りにくい番地を搜しながら訪問する時の事を考へてゐた。

二年前に手を挫いて大學の醫者の私宅に通つた事がある。彼はその折の五月の芽を一面に美しく萠いた、西片町の靜かな、入り組んだ屋敷町をありくと思ひ出してゐた。

船着場に出た。汽船が石炭を焚いてゐた。入江の波が日光に飛びついてゐた。艀が離れた。見送つた者は引返した。禮吉が加賀屋の庭に入つた時に、石炭の匂が際いて來た。彼はそれを胸一杯强く嗅ぎたかつた。だがそれは加賀屋の上にはあまり來ずに、町家の上を悠つくり通つて峠の方に去つてしまつた。

翌々日、仲子から約束通り禮狀の端書が來た。

「仲子さんからのお便りかい？」母親が何故かはつきりしない笑顔で訊ねた。「御禮を出してお置きなさいよ。……だけれど端書で出すのですよ。」

だが禮吉はやはり手紙で出したかつた。怜悧な仲子が「返事にして……」さう考へてくれたのが、はつきり分つた。禮吉は母親が風呂に行つてゐる間に手紙を書いて、自分で帳場に出しに行つた。

――禮吉が部屋に戻つて來ると、英太郎が禮吉の持物の置いてある違棚をこそくと弄つてゐた。彼を見ると英太郎は赤くなつて、失くなり物でも出來たやうな落着かない樣子をして見せた。だが禮吉はその後で、仲子の端書を本の間に分らないやうに隱してしまつた。彼女の手蹟を人眼に晒したくなかつた。

一兩日した午後だつた。禮吉が何氣なく表から歸つて來ると、部屋のなかで母親の嚴しい聲が聞えてゐた。英太郎に言つて聽かせてゐるのだ。彼は立ち止つた。

「……妾がお風呂から上つて來ると、女中たちが噂してゐたんだからね。禮吉にさへ、手紙では差し上げるなつて、云つ

てある位なんだもの。本當に妾達が恥をかくぢやあないの」苦勞性の母親がくど〳〵と云つてゐた。「何も爲てしまつた事を隱さないでもいゝぢやないの。お前でせう？」

日つかつたのだ。さう思つて禮吉は慄つとした。彼は硝子のはまつてゐる渡廊下で茫んやり立ち盡した。英太郎に押しつけてしまはうか。――英太郎は兩親に叱られはじめると、自分よりもずつと氣が弱くなる。禮吉はそんな事を考へて震いた。…「草がチリ〳〵動いてゐる」彼は硝子を透して崖の赤く枯れた芝草が、風に細かく顫いてゐるのを、そんなに風に思つた。だが風は彼の顔には直接來ずに、たゞ視覺だけを遠々しくかすめてゐた。

「禮吉かい？」彼が凝つと立つてはゐられずにミシ〳〵音をたてると、母親が聞きつけて聲をかけた。「あなたも此處に來てお座りなさい」

禮吉は仕方なしに部屋に入つた。英太郎はすつかり萎れてゐて、トラホームの癒りきつてゐない眼を習慣的にしばたきながら、時々眼尻にたまる脂を手で除つてゐた。英太郎はかうなると、自分の利不利に拘はらず、はつきりした返事が出來なくなつてしまふのだつた。禮吉はそれを見ると胸が痛かつた。この英太郎に押しつけようとしたのだ、と思つた。彼はこんな見すぼらしい、自分を卑しめてゐる兄を見るに堪えなかつた。

「……お母さん。僕が手紙を出したんです」

禮吉はたうとう思ひ切つて云つた。母親の愛情を信じてゐた。…そして彼は靜かに泣き出した。

英太郎の顔色が變つた。英太郎は俄にきちんと座つた儘、何とも云へない弱々しい表狀をした。自分が叱られてゐた時よりもずつと空虚な、苦笑したやうな顔になつた。それに比べれば、先刻はまだ意地の殘つた强情さを持つてゐた。

「一體、仲子さんの端書といふのを見せて御覽」――英太郎が默つてお辭儀をして出て行つた後で、母親が禮吉に云つ

た。「これなら、まあ大した事は書いてないけれど……でも本當に氣をつけて下さいよ。ほかの宿屋と違つて此處の主人とは知合なのだからね。……仲子さんもあまりかういふ事をして下すつちやあ、困るね」

母親はそれからくど〳〵と叱言を言つた。

……だが翌日の朝、受持の女中が廊下を通る時に、「坊ちやん」さう云つて懐から仲子の手紙を出して渡してくれた。女中は禮吉が英太郎の代りに叱られたものと察して、彼を庇つてゐてくれるのであつた。

禮吉は庭に出てその封を切つた。手紙の文句はいかにも氣まぐれに昂奮してゐた。

「……お手紙拜見しましたよ……あなたのお母様か私を好いてゐて下さるのを知つてゐます……西片町であなたの學校の坊ちやんに早速お會ひしました。今度何處のお家の方か氣をつけて置きませう……何か怒つてゐらつしやるのではないの……お兄様から私達に宛てゝ、みんなに一つ一つお禮狀を下さいました。あなたからどうぞ宜しく仰つて下さいませ。雪雄がいづれ御返事を書きます……私は家に歸つても恭子とは氣が合はないで芳江と合ひます……あなたのお母様がお弱いから、私は時々お相手してあげたいと思つて居ります」

禮吉は人のゐない蜜柑畑で、肩先に日を一ぱい浴びながらそれを讀んだ。英太郎が手紙を出したことを隠してゐた事も、返つて彼の心を輕くしてゐた。彼はどうしても仲子との往き來をこの儘押し通したかつた。彼は學校の勉強もきちん〳〵とする。……母親の愛情が、用心しながらもそれを許してくれさうに思つた。彼は仲子との交渉を頭に持ちながら、胸を張るやうな心持で學校に通ふ事を想像した。それに比べれば今まではどんなに中心のない、倦るい暮し方をして來た事だらう……

一兩日經つた。夕方近く禮吉が上の庭を歩いてゐると、泰二が洋館の方から登つて來た。
「禮吉さん、何か惡戯でも過ぎたんですか」泰二が笑ひながら訊ねた。「お母さんが相談があるつて、僕を呼んでゐるんですよ」
禮吉はどきりとした。——彼は母親と泰二と二人きりで、話をさせたくなかつた。だが部屋に入つて行く事は猶出來なかつた。彼は落着かずに本館と洋館の間を彷徨した。
彼は思ひ切つて、離の裏の崖地面の中途についてゐる徑を上つて行つた。そして窓障子のすぐ外の梅の陰に、そつと蹲まつた。其處は嘗て彼が仲子と一緒に見物した、あの梅の樹の多い崖であつた。
「主人はたゞ頭から怒鳴りつける方ですし……どうしたものでせうね、泰二さん。」心配性の母親が、大變な事が出來てしまつたといふやうな口調で云つてゐた。「もう自分でもちやんと呑み込んでゐるのですよ。二つとも本の間に用心して隱してゐるのですからね。それがまるで戀文なのですよ。わたしは本當にどうしようかと思ひました。……あちらの奥さんにお知らせしたものでせうか」
「大丈夫ですよ、奥さん」と泰二が笑ひながら宥めてゐた。「なか／＼可愛いぢやありませんか。……年をとればなんでもなくなりますよ」
「あなたも男の方ね」母親は泰二の呑氣に釣り込まれて、そんな云ひ方をした。「これで年でも一つとつたら、それこそ心配だと思つてゐる際中ぢやあ、ありませんか」
「いや、返つてさうぢやないでせう？」泰二は落着いて答へてゐた。「仲子さんは非常に感情のたつぷりしたお嬢さんなんですよ。だからその吐け口が知らず／＼要るんですよ。かういふ溫泉地なんぞに來てゐれば猶更の事ですからね それ

は僕にも分りますね」彼は一つ一つ母親に吞み込めるやうに、真面目に云つてゐた。「……さうかつて、あゝいふ上品なお嬢さんだから、誰とでもずん／＼話をするといふ譯には行かないでせう。其處へ禮吉さんがなに懷いて……」

……樹の下の禮吉は息を凝らした。

「年下でもあるし、仲子さんは一番仲好くしよかつのですよ。今でも本人は知らずに、さうなのですよ。僕はさう思ひますけれど。……だから仲子さんがもつと年頃になれば、それでいゝのですよ。」

「さういふ事もあるでせうけれど、妾はどうしても嚴重にする心意ですよ」と母親が不安さうに云つた。

「それあいゝでせう。目立たないやうにならば」泰二は母親の神經にさわるまいとして、切り上げてゐた。「しかしそんなに御心配なさる事はありませんよ。結局は何處か不自然なんですから

……禮吉は梅の根に座つてしまひたかつた。彼は自分の持つてゐるあらゆる美しい力を奪はれたやうに思つた。彼は泰二を憎むだ。だが思ひあたる事がないではなかつた。彼自身も仲子に一番烈しく接した時には、自分本位の生き生きした、制御出來ない感覺に醉つてゐた。そして仲子がやはりさうだ、と云ふのだ。彼は堪え難かつた。

いや、自分が大人なりさへすれば、烈しく成育さへすれば、仲子を頼らせる事も出來る。彼はさう自身に反抗しようとした。しかしそれは不可能のやうだつた。その時の仲子は彼の二倍の自然力で、美しく熟した立派な娘になつてしまふであらう。

……屋根の樋で雀が囀いてゐた。西日で赤くなつた裏の物干台で、女中が干したものを取り込んでゐた。禮吉は立ち上つて、滑りやすい徑を爪先下りに芝生の方に引返した。梅の優婉な匂が彼を追つた。

仲子の疲れたやうな大きな眼が彼の前に殘つてゐた。彼は追憶の美しいのに驚いた。だが彼には、まだ追憶として消

化するにはあまりに生ま生ましいものを有つてゐた。いや、現在でも西片町をたづね得る事は、彼に殘されてゐるのだ。だが愼重な母親は、いつ何時でも先方の家庭に注意する用意を忘れずにゐるだらう。

何か遺してくれ！彼はさう云ひたかつた。

入江のなかは平穩だが、岬からはづれた沖合は此頃夕方になると風波が立つた。海の色が變つてゐた。

美しい追憶が始まつた。

東京の學校生活に早く歸りたいと思つた。

（三月十二日）



閑人

廣津和郞

往來で、向うから大きな體の男が來ると、神田君は、

『君、あの男と僕とどつちが大きい？』屹度から笑ひながら訊く。

『さあ、あの男もなかなか大きいな。だけれど、君の方がもつと肥つてゐるよ』

『さうかい、あれよりも僕の方が大きいかね、さうかねえ！』神田君は擦れ違つてその男が遠くへ消えて行くまで、振返り振返りその男の方を見てゐる。――それから私の顏を見て、くつくつと無邪氣に笑ひ出す。彼の笑ひは腹から出ずに、その短い頸のあたりから出る。頸の邊に肉のたるみを作つて近眼鏡の底の一體細い眼を尙細くしながら、くつくつと體を振つて笑ふ。――それが何とも云はれない愛嬌だつた。誰でも彼の笑つてゐる樣子を見ると、自分も笑ひ出さずにゐられなかつた。

一體文學をやらうと云ふ人間には、どつちかと云ふと、痩せた神經質な人間が多いが、神田君は例外で、非常に肥滿した男だつた。それも固肥りではなく、肉が柔か

で、肥つた女のやうに、唯ぶくぶくしてゐた。顔から肩から腕から、何處から何處まで、體全體がぶくぶくと膨れてゐて、顎は二重顎になり、頸は太く短く、まるで顎から直ぐに丸つこい肩になつてゐるやうな恰好に見える。頬がむつくりしてゐて、鼻が低くて、薄い口髭を生やしてゐて、髪はもじやもじやと唯無精にのばしてゐて、ひどい近視眼で、そして氣の毒な事には、それでゐて色が拔けるやうに白い。若し色が淺黑かつたなら、彼のそれ等の容貌恰幅は、又とない男性的な威嚴をそなへたかも知れないが、惜しい事に色が白いために、何かふわふわしたマシマロのやうな不得要領な薄弱さに、體全體が包まれてしまつてゐる。

『僕は前には、こんなに肥つてはゐなかつたんだよ。それはもつともつと痩せてゐたんだよ。それが急に肥つてしまつたんだよ。ああ、うんと御馳走を食べさせられたんだよ。それで急にむくむくと肥つてしまつたんだよ』

或日、彼は自分の體を見まはしながら、例の細い眼を細くして、こんな事を云つて、くつくつと笑ひ出した。――彼がさう云つて笑ひ出しただけで、もう何だかとてつもない可笑しさが、その內容を聞きもしない中から、此方の腹の中に感じられて來る。

『ほう、それで？』私は既に彼の笑ひに誘はれて笑ひ出しながら彼の次の言葉を促した。

その時、彼と私とは、彼の部屋で對座してゐたのだつた。彼は隣室を一寸覗いて見て、そこに彼の細君がゐないことを確かめると、机の抽斗を開けて、古い一冊のノートブックを取り出して、

『これが僕の戀愛の卷なんだよ』と云つたが、別段それを私に見せようとするでもなく、再びそのまま机の抽斗に納つてしまつて、そして又くつくつと笑つた。

『…………』私は彼のする事を默つて見てゐた。

『これを初めから讀んだつて仕方がないけれどもね、今のノートをつけ出した時分には、僕はそれは痩せてゐたんだよ痩せて色が青くつて、非常にセンチメンタリストだつたんだよ。ところが、このノートがすつかり書きつぶされる時分には、ぶくぶく肥つて來てしまつたんだよ。――それじや、その話をしようか。聞くかい？』

『ああ、聞くとも』

『それぢや、話すがね、僕は今の女房とその時分戀愛をしたんだよ。もう八年も昔のことだ。僕が學校を卒業間際の時分だから。それは熱烈だつたんだよ。女房も丁度〻〻女學校を卒業したばかりの時でね。隨分と熱烈だつたんだよ。……くつくつ、聞くかい？』

『聞くとも』

細君との昔の戀物語をする男の話――大體から云へば、そんなものは餘り聞いてゐて愉快なものではない。だが、さう云ふ話によつて人を不愉快にするには、神田君は餘りに肥り過ぎてゐるし、又ユウモアがあり過ぎる。私は神田君の肥大に較べて、これは又非常に痩せてゐる、一本氣な、正直な細君の顏を思ひ出しながら、此二人の間にそんな熱烈な戀があつたのかと、妙に可愛らしいやうな氣がして、頰笑まれて來た。

『ところが、君、女房には婚約者(いひなづけ)があつたんだよ。子供の時分からのね』と神田君は言葉を繼いだ。『それだから僕との結婚が絶望なんだよ。僕との事が知れると、彼女の親父が故鄕(くに)から出て來て、無理やりに彼女をつれ歸つてしまつたんだよ。そこで僕は大いに失望したね。失望して放浪の旅に出かけたんだ。學校の制服を着て、何も持たずに、少しばかりの金をふところにして、何處と云ふアテもなく出かけたんだが、一層山寺に引つ込んでやらうかなどと思つたよ。坊主になつてやらうか、と。――その中に金がなくなつてしまふし、まるで無錢旅行のやうな形になつて、辿りついた

のが精進湖なんだよ。そこで妙な機會で、その精進湖畔の宿屋の娘に、英語を敎へるために、暫くその宿屋に滯在することになつたんだよ。——此旅は今から考へると、なかなか面白い旅で、隨分いろいろな話がある。その時は失戀の悲觀ですつかり悄氣てゐたが、今から思ふと、いろいろな事がみな懷しい。だがそんな事を一々喋つてゐたらキリがないから、好い加減にするが、その宿屋といふのが隨分いさこさのある宿屋なんだよ。その時は死んだ獨逸人の妾の日本の女が經營してゐたのだが、その死んだ獨逸人といふのがなかなかの奴で、二十四五年前に、橫濱で知り合つた一人の英國人と共同でその宿屋をやり始めたんだ。何でも土地の者の話によると、その英國人が金主らしかつたんだね。ところが、或る冬の日、その英國人の死體が宿屋の裏手に投げ出されてあつたといふんだよ。——無論ずつと前の話さ。今はその剽悍な獨逸人も死んでしまつて、その妾の日本婦人が經營してゐるのだが、その日本婦人と死んだ獨逸人との間に生れた娘が、つまり僕の英語の敎へ子となつたわけなんだ。

『僕は無理やりにつれて行かれた女房の事が思はれて、へんにイライラしてやりきれない日を送つたが、併し一方、そこの生活もなかなか愉快でないこともない。四月頃だつたが、湖もなかなか美しかつた。それにその親子の女がそれは深切で、日本人放れがした程ハイカラなところがあつて、何しろ居心地が頗る好い。一ケ月ぐらゐがうかうかと經つてしまつた。此ノートを見せると澤山書いてあるんだが、僕は毎日詩ばかりを書いてゐたよ。センチメンタルな詩ばかりを。（さう云つた時神田君はノートの入つてゐる机の抽斗を指さして見せた。）——その中に、或日のことだが、その娘が「お父さんが殘していらつしやつた圖書室を整理したいから、手傳つて下さいませんか」かう云ふのだ。

『そこで、僕は娘と一緒に圖書室に行つたが、その圖書室といふのは、隨分素敵たものだつたよ。その剽悍な獨逸人に似合はず、隨分いろいろな書物が集めてあつたよ。一寸日本の圖書館あたりでは夢にも見られない珍本があるんだ。

僕は興味を起して、手當り次第にいろいろな書物を引つぱり出して、それのページをはぐつてゐると、娘がいきなり眞赤な顔をして、もじもじして、何か云ひにくさうにしてゐたが、

『「ねえ、あたし、あなたにお願ひがあるのよ。聞いて下さつて？」さう云つたかと思ふと、立つて行つて、扉（ドア）にピンと鍵をかけてしまつた。僕はぎよつとしたよ。年頃――十九だつたよ、その娘は――の娘が扉（ドア）に内から鍵をかけてしまつたんだからね。僕は何だか胸騒ぎがしたよ。――ところが、次にその娘の云つた言葉で、直ぐ救はれはしたがね『「ねえ、ほんたうに濟まないんですけれども、あたしに英文の手紙の代筆をして頂戴ね、お願ひですから。――あたしどうしても自分ぢや書けないんですの」

『娘が含羞みながら云ふところによると、娘には人知れず云ひ交はしてゐる男があるんだよ。英國人で、その前の年の夏、此湖畔にやつて來た時、さういふ仲になつたらしいんだが、それが今は英國に歸つてゐるんだ。そして先方から始終手紙が來るが、出したいにも、英文の手紙がその娘には書けないと云ふんだよ。尤も獨逸語は少し出來るんだがね。――何の事はない、つまり圖書整理を口實に、僕は艶書の代筆を頼まれたわけなんだ。併しその時分は、何しろ僕自身が戀愛の眞最中だからね。すつかり娘に同情してしまつてね、一生懸命になつて、その娘の手紙の代筆をやつたよ。學校の英作文の手法で。……くつくつくつ、なかなか面白い、好い話だらう？』

『ああ、なかなか好い話だ』

『併し、それがたうとう變な事になつてしまつたんだよ。錠を下ろして、二人つきりで圖書室に閉籠つてゐたといふ事が、母親の疑ひを引起したらしく、間もなく僕はお拂ひ箱さ。――けれども、感じは惡くなかつたよ。母親はにこにこ笑ひながら、「これから方々旅をなさいましたら、その行く先々から繪はがきでも送つて下さい」さう云つて、僕に五

十回呉れたよ。—僕はその疑ひを解いてやりたいと思つたけれども、母親が露骨な言葉を少しも云はないので、此方から辯解するのも變だものだから、たうとう默つて立去つてしまつたよ。もつとも、辯解するとなると、英國人の事が出なければならないし、さうなると、娘に氣の毒なことになるからね』

神田君は若い時代を憧れるやうな色をその眼に浮べながら、一寸言葉を切つたが、急に思ひ出したやうに、

『さうさう、僕は自分の肥つた事を説明するつもりで話し始めたんだつけな』と云つた。——尤もこんな風に、最初話さうとした事から、トンチンカンな方へ話の筋道が外れて行くのは、神田君には始終のことだつた。『つまり一口に云ふと、その精進湖の旅屋で、うんと御馳走を食はされたからだよ。とても東京の洋食屋などでは食べられないやうな御馳走を毎日毎日食はされたからだよ。——その母親と云ふのが、料理自慢の女で、自分で造るんだが、實際うまいものばかり食はせてくれたよ。——それで毎日々々めきめき肥つて行つたんだよ、毎日々々めきめき……』

『あつははは』と私は笑ひ出した。『そんな奴があるものか。まるで落し話見たいぢやないか』

すると、神田君は眞顔になつて、

『いや、ほんたうだよ。實際ほんたうだよ。その時からめきめき肥り出したんだよ。——それから僕が東京に歸ると、間もなく女房が故鄕から僕のところに逃げて來て、それでたうとう我々二人の強情が通る事になつてしまつたが、その故鄕から逃げて來た時、女房は呆れたやうに僕を見つめながら、「まあ、どうしてそんなに肥つたんです。」と云つてゐたよ。——そしてその後は肥るばかりで一寸も瘦せないんだよ』

神田君はくりくり肥つた腕をまくつて、その肉をつまんで見せた。それから暫く神田君と私とは顔を見合はせて笑つてゐた。どうも神田君の肥つた身體を眼の前に見てゐると、彼が嘗て瘦せてゐたといふ事が、どうしても實感としては

私に來なかつた。だが、今そんな事はどうでもよかつた。——何か大陸的なユウモア、取留めなくはあるが、日本人ばなれのしたユウモアが、此男の話やそぶりにはいつも附纏つてゐる、そんな事を考へながら、私は彼の肥つた頰を見て笑つてゐると、彼は短い頸を一層短くして、咽喉で例のくつくつと云ふ笑ひ聲を立ててゐた。

二

神田君と私とは以前はそれ程懇意にしてゐたわけではなく、時々氣紛れに訪ね合ふ程度の友達だつたが、それが、近頃彼が急に私の近所に移轉して來たので、毎日往來するやうになつた。彼は私よりも五つぐらゐ年長の先輩だつた。私は獨身者の氣樂さに下宿住ひをしてゐるが、彼は世の中と云ふものの苦勞を、大分私より積んでゐた。前に彼が話した戀女房と、もう八つになる男の子とを引きつれて、彼は三年程前から關西の方へ行つて新聞記者をしてゐた。文學などといふものは、それで身を立てるのに、隨分運不運があるものだ。神田君と同期に學校を出た中にも、もう小說界の人氣者になつてゐる男などがあるが、それが私などから見ると、別段神田君よりも特に才能があるやうにも思はれない。唯運よく乘氣になつて、筆の執れるやうな事になつて行つたに過ぎないやうに思はれる。神田君はそんなやうな不遇に堪へ兼ねて、生活のこともあるので、あれやこれやで關西落をやつたのであるが、どうも東京が戀しくて堪らない。東京が戀しいと云ふよりも、結局文學が戀しくて堪らない。新聞記者をやるにしても、東京でやれば、何處かに文壇と云ふものとの流れの通ひがある。——そんな事を考へて、再び細君と子供とを引きつれて、東京に舞ひ戻つて來たのである。

彼が私の近所に移轉して來たと云ふのは、その彼の東京への舞ひ戻りから間もなくの事だつた。或家の二階を借りてそこに彼は住むことになつたのだつた。

そこで地理の關係で、彼と私とは頻繁に往來するやうになつたが、そればかりでなく、下宿屋などにくすぶつてゐる獨身者には、友人の家庭と云ふものは、それ自身が何となくなつかしくもあるものだ。細君があり、子供がある家庭に這入つて行くと、妙に溫かな、人間らしい氣分にひたることが出來る。それだから、外出の行き歸りなどに、丁度彼の借りてゐる二階の下を通るので。

『おい』から聲をかけると、神田君の大きな身體が、窓から顯はれる。

『やあ。丁度退屈で堪らなかつたんだ。上り給へよ』

そこで私はその二階に上つて行く。

六疊と四疊半との二間で、四疊半の方には茶ぶ臺だの勝手道具だのが置いてあり、そこに細君が坐つて、縫物や解き物などをしてゐると、六疊の方に神田君が机を置いて、自分の書齋にしてゐる。つまり往來に向つてゐる窓は此六疊の窓なのである。八つになる男の子は、此程から近邊の小學校に通つてゐるが、午後になると歸つて來て、六疊の部を遊び場と心得て、肥つてゐる神田君の首つ玉に獅嚙みついたり、もじやもじやと生やしてゐる神田君の髮の毛を引つぱつたりする。

『これ、煩い、これ、煩いと云つたら!』さう云ひながらも、神田君はその大きな身體を緩慢に動かして、子供の相手になつてゐる。神田君の繼女房である細君は、昔そんな熱情があつたとは思はれない位に、今はおちつき切つて、もう二十七八になつてゐるが、併し正直な、感じの好い人で、前にも云つた通り、神田君のぶくぶく肥つてゐるのに引換へて、瘦せて、引きしまつた、輪廓の正しい顏をしてゐた。

『敷金の外に權利金も取るつていふんでせう。ほんたうにうつかり貸家も借りられやしませんわ。こんな風に間借りし

てゐる方が、どんなに氣樂だか解りはしませんわ』と縫物の手を一寸休めて、丸い眼をぱつちり見張つて、こんなことを云つてゐた。

『だが、こんなに狹くつちや、此坊主にやり切れないよ』と髮の毛を引つぱる子供を押しのけるやうな恰好をして、神田君が云つた。『もう一つ子供の遊び部屋が欲しいな。坊主、お前のお蔭で、お父さんは何も出來やしないよ』

それでも、うんうんと力を入れながら、子供は父親の髮の毛に掴まつてゐる……

こんな風な家庭だつた。明るくて、明けつぱなしで、少々暢氣で出鱈目な點もあるが、併し平和な、單純な家庭だつた。――獨身者の私にはこんなに氣の置けない家庭はなかつた。

併し生活は隨分迫つて來てゐるらしかつた。關西から引揚げる時に持つて來た金は、もう疾うになくなつてしまつてゐたらしいし、神田君が東京で搜してゐる職業の口はなかなか見つからないし、と云つて、雜原稿生活でやつて行けるやうな文壇の地位も得られないし、隨分困つてゐるらしい樣子が見えた。だが、さういふ私自身もやつぱりそれと同じことで、文學で身を立てたいと思つても、さういふやうな幸運がまはつて來ないし、といつて、何處かに勤めるのは厭だし、あれやこれやで、つまり貧乏に暮してゐたわけなのである。

貧乏といふものは氣安いものだ。殊に東京では貧乏が恥辱でないから、まことに氣が置けずに貧乏をさらけ出してゐられる。だが、私のやうな獨身者は兎も角、神田君が彼自身ばかりではなく、彼の家庭全體を、その貧乏の最中に於いてのんびりと明るい感じにさせてゐる事は、無論神田君の善良さにもよるのだらうが、併しやつぱり何よりも彼の人德によるものと云はなければならないだらう。

彼の家庭にはいつも笑聲が絕えなかつた。そして彼は日常生活で、その家族を明るくするやうな逸話を、絕えず作つ

て行く男だつた。

ある日には、

『小島さん、小島さん、ほんたうに良人位だらしのない人があるでせうか。――ゆうべは羽織を落して歸つて來るんですからね、ほんたうに呆れてしまひましたわ』と私の顔を見ると、いきなり細君がこんなことを云つた。

『羽織を？　一體どうしたんです？』私は笑ひながら、細君の顔と神田君の顔を見較べると、神田君はにやにや笑つてゐた。

細君の語るところに依ると――

神田君はその前の晩翻譯をしてゐた。△△雜誌に賣込まうとする冒險小說の翻譯なのだ。（と神田君が註を入れた。）さうして夜中に空腹を感じたので、△△坂通におでんを食べに行つた。そして歸つて來ると、出かけに着て行つた羽織を着てゐない。細君が『羽織をどうなさつたのです？』と云ふと、きよとんとした顏をしてゐる。そしていきなり神田君は外に飛び出して行つた。つまり羽織を探しに出かけて行つたわけなのだ。△△通りのおでん屋まで三丁ほどしかない。もう夜が更けてゐたから人通りも尠い。落したとしても誰にも拾はれずに未だ殘つてゐるだらう。――けれども、落ちてゐない。たうとうおでん屋の前まで來てしまつた。するとおでん屋の中で、おでん屋と客とがこんな話をしてゐる。

『ほんとにトンチキな奴がゐたもんぢやねいか、羽織を落して行くなんて…』から客が云ふと、

『ほんとうですな、ぼんやりしてゐる人があるもんですな。へへへ。……だが、今に氣がついて取りに來るでせうよ』からおでん屋が云つてゐる。

そこに神田君は、『その羽織は俺んだよ』から云つて、にゆつと這入つて行つたと云ふのである。客もおでん屋も吃驚してしまつた。でも、おでん屋はお世辭笑ひをして、

『へえ、旦那のでしたかい。へえ、いや、どうも』さう云ひながら、神田君に羽織を渡した……

細君が私にその話をしてゐる中、神田君はくつくつと例の調子で笑つてゐた。私もすつかり可笑しくなつて、笑ひ出してしまつた。丸つこい大きな肩から、羽織が滑つて行く形が想像出來た。

『おでん屋があきれるのが當り前ですわ、ねえ、小島さん』語り終つた細君は、これも腹を抱へて笑ひ出しながら、『著てゐる羽織を落して知らないでゐる人があるもんですか。それで後になつての言葉がいいんですよ。「どうも、俺には絹の裏は不向らしい」だつて……』

三

神田君と私とは、夜になると、よく一緒に散歩に出かけた。肥つた神田君と痩せてゐる私とは好一對に違ひなかつた。彼も私も飜譯をしたり、外國の文學書の紹介を青年向きの雜誌に載せて貰つたりして、時々小遣錢の入る事がある。それでもつて、二人は珈琲などを飲みに出かけて行つた。前に云つたおでん屋のある邊は賑かな町がある。山の手で有名な△△坂の盛り場である。そこを散歩して、珈琲店に一時間ぐらゐ腰をかけたり、又ぶらついたり、古本を冷かしたり、文學の話なんかしたりしてゐる。それから女の話、戀の話、家庭の話……

『だが、家庭と云ふ奴は大體に於いて退屈だよ』と神田君は云ひ出した。『とてもやり切れない程退屈だよ』

『さういふもんかね。僕には解らないが。でも、君の細君は戀女房ぢやないか』

『ああ、昔は戀女房さ。だが今は退屈だよ。――何て云つたらいゝのかなあ、退屈と云つても、不愉快だとか、とても

一緒にゐられないとか云ふのとは別なんだ。つまり餘りに當り前になり過ぎてしまつたんだね。――僕はかう見えて、なかなか空想家なんだらう。その空想と云ふ奴が、家庭にゐるとなくなるんだ』

『そんなものかね』

『ああ、そんなものだよ。かうして君と二人で散歩してゐると、自由さ。どんな事だつて頭に浮んで來る。とてつもない面白い事が浮んで來る。例へば、藝術と云ふ事を考へるとするだらう。藝術と云ふと範圍が廣いが、その中で音樂について云つて見るね。何しろ素敵な天才の音樂家が生れたとするんだ。その音樂家がヴイオリンを奏くとするね。誰でも彼でもみんな魅せられてしまふ。音樂會や何かでやつてゐるんではつまらないが、此往來を若しその音樂家が演奏しながら歩くとする。誰でも彼でも魅せられてしまふ。そしてみんなはその音樂家の後から、ひとりでに、夢中になつてついて行く。散歩してゐる奴は散歩を忘れ、戀をしてゐる奴は戀を忘れ、この邊に出てゐる夜店商人達は夜店を忘れ、藝者はしやうばいを忘れ、教育家は生徒を忘れて、唯夢見心地に、音樂家の後からついて行く。行くに從つて、ついて行く集團は益々大きくなる。何千、何萬、何百萬、東京市の人口全體ぐらゐの人間が、みんな揃つてついて行く。音樂家が音樂を中止しない間はついて行く。だから、音樂家がその音樂を止めずに、信州の山の中に行けば、東京市の全人口が信州の山の中までついて行くわけさ。……まあ、こんな音樂があつたら、どんなに好いだらう、とかう空想するね。そんな空想をしてゐると、愉快になつて、廣々とした氣持になつて、とても嬉しくなる。が、家庭ぢや駄目だよ。家庭ぢや駄目だよ。家庭で女房と子供と、朝の味噌汁と、晝のお茶と、晩のお茶とがあるだけだ。――ああ、ああ』

淵川君はそんな風に大きく態とらしい嘆息をして、それから首を縮めてくつくつと笑つた。

或晩、私はやはり彼と一緒に、その山の手の盛り場を散歩してゐた。

『益々退屈！』と彼は云つた。『そこで今日は僕は素敵な思付をしたんだよ。それは面白いんだから、君は默つて見てゐ給へ。さあ此方に、僕の後からついて來給へ』

『何處へ行くんだい？』

『まあ、いいからついて來給へ』

私はそこで彼の後からついて行つた。町は相變らずの人通りである。もう五月も末になつて、何處か初夏らしい氣分が漲つてゐた。或町角のところに、大勢人が群つてゐる。その眞ん中で、帽子をまぶかに被つた書生體の男がヴイオリンを奏いて、へんなギイギイ云ふ聲で、俗謠を歌つてゐる。よくある呼賣だ。神田君はそこまで來ると、立止つて、俗謠を聞いてゐる人々を見渡してゐたが、私の方を向いて、一寸と笑つて、その人込みの中に這入つて行つた。私は默つて彼の樣子を見てゐた。彼は一人の二十五六の女の側に行つて、それと並んで俗謠を聞いてゐるやうな恰好をしてゐたが、やがてのこのことその中から出て來た。そしてくつくつと首を縮めて笑つてゐる。

『何をしたんだい？』と私は訊ねた。

『いや、面白い事をしたんだよ。あの淋しさうな女の袂に、今艶書を投り込んで來たのだ』

『艶書を？』

『ああ、艶書をだよ。吃驚しなくつてもいいよ』彼は相變らずくつくと笑ひながら、『ああして艶書を投り込んでから、それから僕の空想が始まるんだ。――文句は非常に熱情的で、非常に美しいんだ。そして名宛もなければ、此方の名も書いてないんだ。そして淋しいやうな顏をしてゐる女、娘はいけないが、出戻りとか、若い後家とか、それでなければ緣に遠い老嬢とか、さう云つた連中を選んで投り込むんだ。――そしてその結果について空想するんだよ。家に歸つ

て、袂を見て「あつ」と云つて驚くね。それからだ。それから何しろ大抵は愉快な心持になると思ふね。「いやらしい」などと口では云つても。此處に一人の女があつて、戀愛と云ふものを生涯しないで過ぎてしまふとするだらう。さういふ女には、哀れなるかな、思ひ出がない。女と云ふものは戀愛の思ひ出のない程淋しい事はないからね。——そこで年老いてから考へる。すつかりつや消しのやうな淋しい生涯の中にも、たつた一人自分の袂に手紙を投り込んだ人があつた、と。あの手紙はほんとに美しかつた、ほんとに情熱的だつた、ほんとに優しかつた、名前も顏も知らない人だけれど、どんな人だつたらう、とその女は時々思ひ出す。思ひ出す度に、自分も生甲斐の幾分かがあつたやうな氣がする。……どうだい、つまりかう云つたやうな空想をするんだ』

『併しそんなのばりとは云へないね。うつかりすると、さう云ふものが袂に入つてゐたがために、家庭の悲劇が起らないとも限らないよ。さう云ふのもないとは限らないよ』と私は云つた。私は彼のさういふ氣紛れに贊成出來なかつたが、併し不良少年のやり方などとは全然違つたあるユウモアがある。それで半分笑ひながら、半分責めるやうな氣持でさう云つた。

『莫迦を云ひ給へ。そんな事で家庭の悲劇なんか起るもんかい。——若し亭主持の細君だつたら、アラ、あたしも未だこれで人眼につくところがあるのか知ら、なんて思つて、一寸得意になるし、その亭主は表面嚴肅な顏をして、憤慨してゐても、內心では、俺の女房はやつぱり人眼につく女なのかな、と思つて一寸うれしい氣がするよ』

『あははは……』と私も仕方なしに苦笑してしまつた。併し此肥つた閑人の罪のなさには、別段不愉快も感じなかつた。

四

それから暫く經つての夕方だつた。六月に入つてゐた。今年は雨が尠いので、梅雨が未だ來なかつた。晴天が續い

た。——私は夕方になると、いつもの例で、散歩に出ずにゐられなかつた。それで、神田君の二階の下まで行つて、彼を誘ふために聲をかけた。

『おうい！』

神田君の肥つた首が、ぴよこりと窓から飛び出した。

「ああ、小島君か。好いところに來てくれたね。助けてくれ給へ。今困つてゐるところなんだよ」さう云つて、へんにくつくつと笑つてゐる。

『何だい？』さう云ひながら、私は二階に駈け上つて行つた。薄暗い梯子を上つたところに開きがある。その開きを開くと、そこが四疊半、即ち細君の部屋だ。その部屋に細君が、妙に身體を固くして、ツンとした顔付をしながら坐つてゐる。今までついぞ見たことのない顔付である。何だか涙ぐんでさへゐる。一寸私は吃驚した。

『一體どうしたんです？』さう云つても、彼女は默つてゐる。

『どうしたんだい？』と今度は私は神田君の方へ向いた。神田君は机の前に坐つて、くつくつと首を縮めて笑つてゐる。一體嬉しい笑ひなのか、苦笑ひなのか、一寸見ただけでは區別のつかない笑ひ方をする人があるが、神田君の笑ひもさういふ種類の笑ひなので、最初は神田君が喜んでゐるのか、困つてゐるのか、見當がつかなかつた。だが、

『今君のところに救ひを求めに行かうと思つてゐたんだよ』と云つた言葉の調子には、いかにも當惑してゐるといふ感じが出てゐた。『とても莫迦らしい事が起つてしまつたんだよ。——これこれ、これなんだよ、これなんだよ』神田君はさう云ひながら机の上を指さした。そこには書きかけの手紙のやうなものが載つてゐた。『解つたらう、君、解つたらう、例のあれさ、これを女房に見つかつてしまつたんだよ……』

そこまで聞くと、總ての事が一遍に私に解つて來た。神田君は例の艶書氣紛れな彼の空想を生かすところの艶書を、細君に見つかつてしまつたのだ。

『それで、僕が幾ら說明しても解らないんだ。餘り退屈なんで、退屈まぎれにそんなものを書いて見たと云つても承知してくれないんだ。――ねえ、君、君も一つ說明してやつてくれ給へよ』

『……』私は何も云はずに、笑ひ出してしまつた。すると、細君は私のその笑ひ聲が一層氣に障つたのか、くるりと向うを向いた。

『奥さん、神田君のいたづらなんですよ』と私は云ひかけたが、此とぼけた事件を、眞顏で細かく說明する我慢は私にもなかつた。私は云ひかけては又笑ひ崩れた。

そこで神田君が又私の言葉を繼いで說明した。いかに退屈だかと云ふ事、退屈のために一寸したいたづらだつた事、それは此處にゐる小島君がよく知つてゐる事……

神田君と私とで、いくら說明しても、細君はたうとうもう此方を向かなかつた。

『莫迦々々しいにも程がありますわ！』向うを向いたまま、一言、金切聲のやうな聲でかう云つた。

神田君はその聲を聞くと、私の顏を見て、首を縮めて、くつくつと笑つた。それが如何にも細君思ひの善良な良人の顏付だつた。

『もうお奥さんは解つていらつしやるんだよ。解つていらつしやつても、一寸意地を張つてゐられるんだよ』かう私は小聲で呼いた。『どうだい、一まはり散歩でもして來ないか？』

『うん、その方が好ささうだ』と神田君も呟いた。それから普通の聲になつて、『おうい、つまらない事をいつまでも思

圖々々云つてゐるなよ。――俺は小島君と一緒に散歩に行つて來るよ』

細君は相變らず向うを向いたまゝつんとしてゐた。

往來に出ると、一遍に二人は笑ひ出してしまつた。部屋の中でも、笑つてはゐたのだが、細君の手前少し遠慮があつた。外に出ると遠慮がなくなつたので、思ひきり聲を出して笑つた。――神田君はくつくつと、私はあつははと。

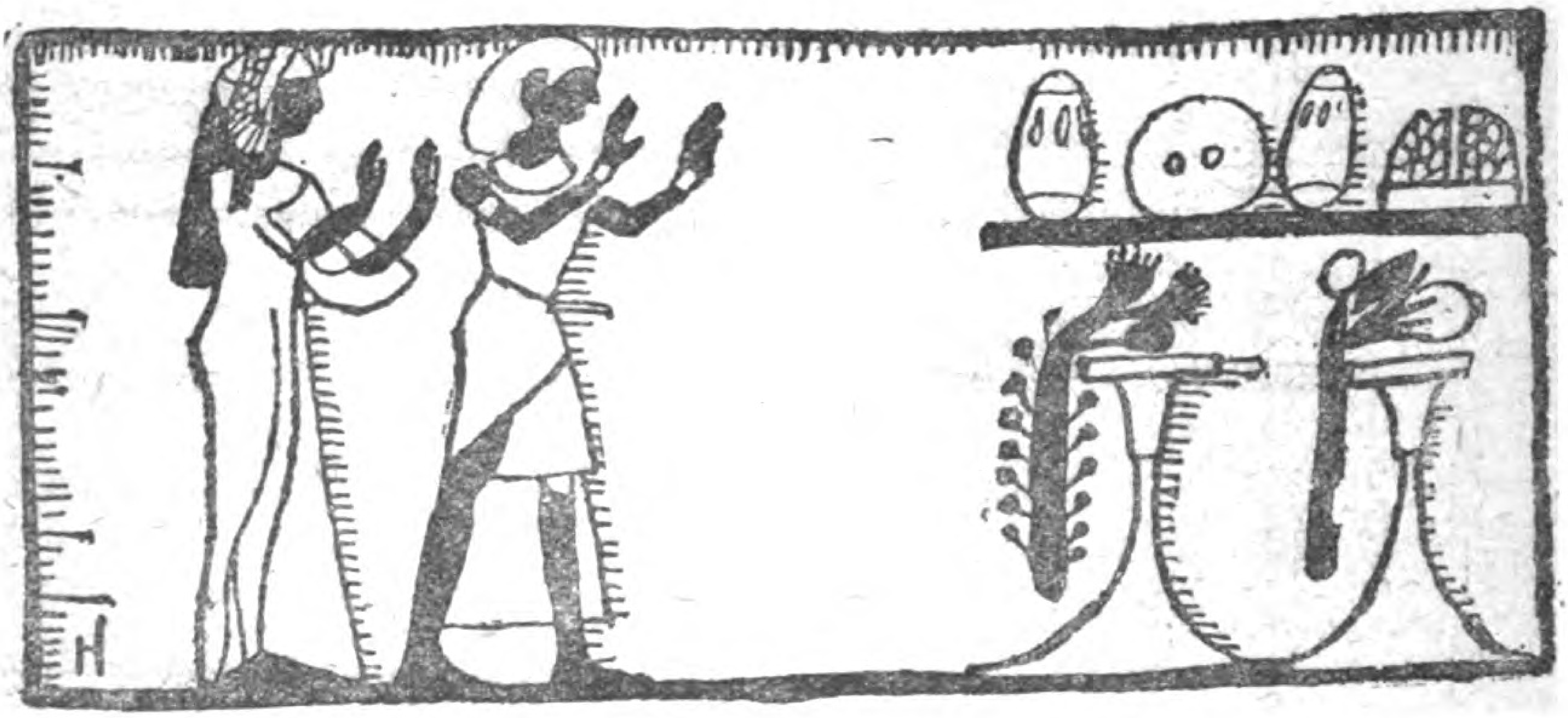
暫く笑つてゐるだけで、二人とも何も云はずに歩いてゐた。併しその最初の笑ひがしづまると、

『實に何とも、滑稽で』と神田君が云ひ出した。『併し全く弱つたよ、先刻は。相變らずする事がないんだらう。又冒險談でも譯さうかと思つて机に向つてゐる中、これも厭になつたので、又例の奴――アテのない艶書を書き始めたんだよ。書き始めてゐるところに、子供が外から歸つて來たので、書きかけのものを忘れて、子供と一緒になつて遊んでゐたんだよ。そして子供がどうしても玩具――飛行器の玩具を買つてくれと云ひ出して聞かないので、それを買つてやる氣になつて、子供と一緒に△△坂まで行つたんだ。△△坂まで行つた時、急に机の上の書きかけを思ひ出したんだよ。これや、女房に見つかつたら、大變だと思つて、子供を肩車に乘せて、一散に駈けて歸つたんだがね、もう遲かつたんだよ。――女房が机の前に坐つて、ぢつと身動きもしないでゐるんだ……』

さう云つて、再び神田君はくつくつと笑ひ出した。私も誘はれて、再びあつははと笑ひ出した。――併し笑つてゐる中に、私はへんに淋しくなつて來た。肥つた神田君と、無爲と、退屈と、それからアテのない艶書と、一生懸命になつてあの肥つたからだで、子供を肩車に乘せて、息急き切つてゐる彼の恰好と、そして彼が一家の主人であつて、彼についてゐる彼の細君と子供とのある事……

くつくつと笑てゐる神田君の樣子を見ながら、私は急に笑へない氣持がして來た。

『浮世の浪風が、此善良な男には少し荒すぎる』さう云つた氣がして來た。



暮春挿話

傀儡的戯曲一幕

佐藤春夫

彼――三十の青年紳士。

彼女――十八九の、令孃のやうなあどけない夫人。――彼の新妻。

老紳士――異樣な人物、五十五ぐらゐ？白髮。

ホテルのボーイ

自動車運轉手

同じく助手

海岸の小都會、有名な避寒地、第一流のホテル。

扉を兩方に開け放した大きなケースメント。その奧のバルコン――がつしりした唐草模樣の鐵細工で圍まれてゐる。手すりの色は黑である。

海の遠い水平線が手すりの上三寸ばかりのところまで現れてゐる。手すりの模樣の隙間からも、無論、海の色がのぞき出てゐる。四月末のどかな、淡いす

みれ色の空。

ケースメントの外は明るい午後二時ごろの日ざしで、灰色の床にものの影は映じ出される。バルコンの正面、手すりにすれ／＼のところに、小さな卓が一臺。その卓の三方から椅子が三脚。一脚は海に面し。他の向ひ合つてゐる二脚のその一脚には、まだ極く若い――十八九の、令孃のやうにあどけない夫人。

彼女

が、日光をうしろからうけてひとりで白い毛絲の編みものをしてゐる。その毛絲の玉を着物の袂に入れてあるので、袂がぶら／＼してゐる――そんなことが彼女をあどけなくしてゐる。二本の長い編み棒で彼女は丹念に編んでゐる。

そこへ

彼

が、ケースメントの内側に僅にある廊下――ケースメントの手前がそれに沿つて左右に通ず――の右から出てくる。黑の上衣縞ズボン申分ない服装。すつきりした三十の紳士。片手にフランスとぢの本をもつて。ケースメントを拔けてバルコンへ出る。彼女に對つて腰かけながら、

彼。もうさつそく始めてゐるね。(笑顔)そんなものを丹念にこしらへて見たつて、日本のハイカラにはなれるのだらうけれど、よそへ行つて何にもなれやしないのに……

彼女。(笑顔)さうでせうねえ。

彼。ほい！　また負けたか――いつもその手でやられるのだが、柳に風だね。あなたには全く學ぶべきだよ。外交の秘法をのみ込んでゐらつしやる――輕く受けながして置いて　その間にどんどん漸行して行くのだから(笑)

彼女。だつて私、もうせんからこんなことをしなれてゐるのでせう。何もせずにゐると手もちぶさたなのですよ。だから出來上つたらまたほぐしてしまつて、また編み直してもいいのよ（少しほどく）

彼。ぢや、それでもう解きほぐしてしまふの？

彼女。（笑）え！

彼。これはまたひどく反抗的だな（笑顔）

彼女。……ちごよ。間違つてゐたのですもの。

彼。僕が邪魔をしたものだから。

彼女。さう！

彼。どうれ、僕もあなたの邪魔なぞをして嫌はれるより、……（一たん卓上に置いてあつた書物をとり上げる、海の方をちらと見て）ほんとうに靜かだなあ。

彼女。（海の方を見る）

彼は書物をひろげ、それを片手にもつて讀み初める。

彼女はやはり先刻からのつづきを編んでゐる。

間。

この間に、

ボーイ

が、金ボタンの澤山ついた制服をつけて、廊下を右から現れて、殷懃に歩調正しくしかし足音なく左に通り去る。また間もなく再び左から出て來て、同じ歩調で、ただ胴のところで兩側の時計を開けてそれを見ながら右へ通り去る。機械的、バルコンとは全く關係ない動作

彼女。（編みながら）あなた。

彼。（讀みながら）何？

彼女。少しお話をなさらない？　それとも御本がおもしろい？

彼。いいや。御本はあまり面白くない──ただね（笑）もうせんからかういふ癖でね、何も讀まずにゐると手もちぶさたなのですよ。

彼女。あら！（上目で見て）直ぐと私をおからかひになる。……私ね、あなた、一度お嫁に貰はれたことがあつたのですよ。

彼。いつ？（本を卓上に置いて稍眞面目に）今までそんなことはなかつたと、あなたは言つたのにな？

彼女。いいえ。──本當にではないの。冗談……

彼。冗談にお嫁に貰はれた？

彼女。──でもね。皆さんがさう言つて私をからかふのでせう。

彼。いつのことなの。それは？

彼女。もうずつと先──さうね（數へるやうに心持ち頭を動して）七年も前ですわ──女學校の二年の時だから……

彼。へえ？

彼女。それがね、あなた。どんな人だとお思ひ遊ばす？

彼。知らない──解らない。

彼女。お爺さんよ！ それも妙なお爺さん。あら、(編むのをやめて)もう毛絲が無くなつたか知ら……

彼。――部屋へ行つて取つて來て上げようか。

彼女。いいのですわ――ありがたう。持つて來てありましたの、(編物を卓上に置いて)もう無くなるかと思つて。そら……(別の袂から束のを出す)ぢや、おそれ入りますがこれをかういふ風に(仕方)持つてゐて下さらない？

彼。卷いて上げようよ――あなた、そのままで持つておいで。

彼女。(絲口をさがし出して、彼に渡しかける、直ぐ思ひかへしてひつ込める)あなた持つて下さいましよ(笑顏。押しつけるやうに束を差し出す)――あなたが、お卷きになれば、きつと固すぎるか柔すぎますわ。

彼。(束を受取る)そんなむつかしいものかい。

彼女。え、かげんがありますわ。

彼。(束を兩手にかけて) これでいい？

彼女。え。すみません(卷き始める)

彼。(兩手を無器用に動かす) それで、今の話はどうした、そのお爺さんは？

以下、彼女は卷きながら、
彼は兩手を動かしながら、

彼女。その方がね、それは妙なの。様子も不思議な方だけれど、學校のひける時刻に二日もつゞいて門のところに立つてゐたの。三日目にはたうとう學校へいらつしやつたわ。私のゐる教室へ。それからそのお爺さんが先生に何か小さな聲でお話をなすつたと思つたら、先生が私の名をお呼びになつたの。――何でもないのよ。私に讀本をお讀ませに

なつただけなのですが、――國語の時間でした。あそこのところ――「田舍と都會」といふ章のおしまひ。今でもよく覺えてゐますわ――（自然と讀む口調で）「心きよき田園の人々、よし寫し得ず詠じ得ずともその身こそは月花とともにやかで綺なれ、歌なれ」と言ふの。ね、よく覺えてゐるでせう。二學期の半ごろだわ。――そのお爺さんは暫く參觀をして出て行つておしまひになつたわ。それが、一ばんおしまひの時間だつたでせう。わたし、歸らうと思つて何げなく門を出ると、そのお爺さんが、やつぱり、その日も、門のところに立つてゐるのよ。わたしほんとうにびつくりしたわ。だつてその方が妙に私に口をお利きになるのぢやないか、つてそんな氣がしたのでせう。だものだから、私お友のだちの陰になつて急いで歩いたの。もう大分來たと思つて振り向いてみると、どうでせう、やつぱりその方は立つてゐらつしやるの――私たちの方を見ながらよ。その明る日、

彼。また來たの？

彼女。いいえ。もうそれつきり――でもね、皆さんがおからかひになるのでせう――でも上の級になると時々、そんな風にお嫁さんを見に來る方があるのでせう。それをきつと寄宿舍の方が上の級の方から聞いて來たのでせう。わたしきまりが惡かつたわ。それだのに皆さんが、それや面白がつておからかひになるの。あんまり同じことをおつしやるものだから私、氣がふさいでしまつたわ。何だかもう學校へ行くのがいやになつたくらゐ。――をかしいわね。ほんとうに赤ちやんよ。おうちへ歸つてもね、私の樣子が變つてゐたのでせう、お母さまが「どうかしたの」とおたづねになつたことよ――大變心配のやうに。私、困つたわ。

彼。その話はおうちではしなかつたの？

彼女。えゝ。だつてその日すぐ言つてしまはなかつたでせう。へんに言はないでしまつたの。だものだから、言ひそび

れてしまつて、——それに、皆さんがそんなことを言つておからかひになるなんて、お母さまに言ふのはきまりが悪いでせう。

彼。うん。——一たい、どんなお爺さんだらうな。

彼女。さうね、それや變つてゐる方。ちよつと見ると西洋人のやうな……

彼。西洋人——西洋人にはそんな變つた人もゐさうだな。

彼女。ところがね、西洋人ではないのですよ。

彼。ふむ。お爺さんつて一たい幾つぐらゐ？

彼女。それがね、さあ幾つぐらゐでせう。子供だつたからよつぽどのお爺さんのやうに思つたけれど四十位だつたか知ら。もつと年とつてゐたか知ら。五十位？　さうね、やつぱりわからないわ。——さうさう、きつと五十ぐらゐだわ。あ、さうだ、教室へ這つてゐらしつた時、髮が眞白でしたもの。瘦せて、いくらか怖いやうで、——でも、今考へると上品なかた……

ピアノの音がする。この建物のどこかやや遠いところから——滯在客の手すさびらしいまづい彈き方。ありふれた曲。

突然、バルコンへ、——廊下からでなく、ケースメントを通らず——ぢかにバルコンの上へ、白髮の老紳士が來る——左から。彼女が今話してゐたと全く同じ形の人。茶の格子縞の旅行服を着てゐる。慚羞と驕慢とが相半したとでも言ふ異様な物腰。身邊には何か特別の空氣を持つてゐる人。彼女のうし

ろから卓の方へ進む。

彼。（老紳士を訝しげに見る。毛絲の束を手から卓上に置く。目を下げて彼女に）……

彼女。（彼の無言の話を解せずに。——卷く手をやめて）あなた、どうなすつたの。もうおくたびれになつて。もうほんの少しのところですのに……

老紳士（進みよりながら、呟く）あまり不意だらう……

彼女。（ふりかへる）？（輕い驚き。手の毛絲のたまを卓上へ無意識に置く。毛絲のたまは、投げるやうに置かれたので、卓上をころがつて、卓の端から手すりを越えて落ちる、下へ。——見えない地面へ。

老紳士。（呟きつづける）驚いたらう……

彼女。（彼に）あなた！（夢にうなされた人の低い聲に似てゐる）

老紳士（呟き）もつと驚くことだらう……

（彼と彼女とに會釋する）さぞびつくりなさるでせう。——突然で。（海に面した椅子を指しながら）私をここへ暫らく坐らしてくださるでせう？（彼等に關はずに腰を下す）

彼。あなたはどなたです！

老紳士。（彼を輕く手で制しただけで、それには答へずに）私はいつかあなたたちをおどろかさなけやならなかつたのです。

（彼女に）これ、私だらう。——私を覺えてゐるでせう……

彼。（起立）

老紳士。（一切相手には關はずに。この人の聲は明晰で、しかし低く重く——抑揚のあまりない調子。いつも獨語に近い口調、時々目の

前の相手をはっきり意識する。彼女に――）七年前にお前のところへ現れた時、私はほんのさん・まんたりすむだつた。

今日は一つの眞實ですよ。

――私は眞實を言はなけやならない。あなたは眞實を聞かなけやならない。それだけにお前が怖れるのも無理ではない。よね子、――よね子さんといふ名だね。――あの時學校で聞いて覺えたが……

彼。さうです。あなたは何か御用ですか。あれは私の妻です。

老紳士。さうですとも。さうですとも。それを私が知らないでなるものですか。――あなたは、あれに似つかはしい夫だ、と私は見てゐる。信じてゐる。まああなたもそこへおかけ。何でもないのだから。あなたがたをびつくりさせて本當に濟まない。だが、いつかは一度びつくりさせなけやならなかつた。その時が今だつたまでだ。――よね子さん、――私がつけたかつたやうな名ぢやないが、そんなことはどうでもいい。

彼女。あなた！（夢にうなされた人のやや高い聲に似てゐる）

彼。……

老紳士。――いいのだよ。ねえ！　よね子――私はお前のお父さんだよ。――信じられまい。――あたりまへだ。――お前は生れたその日から嘘に慣らされて來た。お前ひとりではない。たくさんの人が、いや、人間は今までのところでは、皆々みんなではないまでも大方、嘘の方に慣れてゐる。突然、かうして本當が目の前へ來て坐つても容易には誰も信じまい。解るまい。だが、今に追々とわかる。後になるほどもつとわかる。――私は疑はないのだよ。沁みとほる。どこまでも沁みとほる。――それが眞實といふものの力なのだから。――ね、よね子、私はお前のお父さんだよ。本當のお父さんだよ。――この一言が言ひたかつただけだ。私はお前たちのあとをつけてゐた――たつた一言

いひたい爲めさ。だから、それをどうしようといふのぢやないのだ。もう用事は濟んだのだ。

彼。（腰を下す）

老紳士。（彼女に）私はお前がいい夫を持つたことは新聞で知つたよ。あなたたちはイギリス大使の夜會で知り合つたのだね。私はそれを新聞で知つてから……、新聞は賑やかに書いてあつたね。（彼に）あなたはいつ任地へ――たしか羅馬だといひましたね――いつ羅馬にお立ちになるのです。――もうすぐ近いうちだといふが。

彼。ええ。――何ならば、（彼女に）よね子、部屋へ行かうではないか。（老紳士に）あなたもそこでお話下さいませんか。

老紳士。いや。私はもう直ぐ失禮する。ここでいいではありませんか。――この建物の二階には、あなたたちと私とより誰もゐない。それに本當の話は誰が聞いてもいいものです。

……私は新聞でみた。あなたたちは羅馬へ行く。私はあなたたちの行かない前に自分の娘に、一言、本當を言ひたかつた。でも、私はもういつ死ぬかも知れない。――私はさう年寄りではないが、でももう疲れてゐる。――あなた方はさつき私の年のことを言つてゐたやうだつたが、私は、――この娘は、私が三十四の時に生れた。あの女――この子の母はあの時二十七だつた。私の今の年は、だから、あの子の年に三十三を加へたものだ。――私も、時々、自分の年を思ひ出さうする時にはいつもさうして數へるのだ。私はもう大ぶん長いこと自分の年を數へもしないが。でもあの子の年ならば、いつだつても知つてゐる。（目の前の彼女を見て）今年は二十だね。

彼女。（目を可憐に見ひらく。無心のうちに大きくあどけなくうなづく）

老紳士。（うれしげに）お前は私には似ないでお母さんに似てゐるよ。今のやうにうなづくところなどはそつくりだよ。――私などには似ないでもいい。お母さんに似ておくれ。……あれは珍らしい人だつた。……あの男はあの女のこと

を、時々、馬鹿だと言つてゐたつけが。——さう、單純ではあつた。だが、あれこそ、眞實をすぐに見てとる人だつた。眞實に對して答へることを知つてゐた。——ただ弱かつたのだ。いやあれだけではない、私の方がもつと弱かつたかも知れない。——私が死なうとさへ言へば、あの一時に、あの女も死んだのだ。——さうすれば、よね子、お前はこの世には無かつたのだ。無かつた方が幸福だなどとお前思はないだらう。思つてはいけない。これからさきでも、いつでも。——私でさへも糸のやうな生をでも生きたかつたではないか。——生きて來たではないか。——生きてよかつたではないか。

（彼に向ひ）この子がお父さんと呼んでゐるのは、ただこの子のお母さんの夫ですよ。——それから私の友達だつた——いや、今でも時々は友達だ。あの男にだけ言ひたい樂しい話題がいつも澤山あるのだもの。ただね、その男は夫としては、或る時、あまり妻を愛しなかつたものですよ……。——あなたにもわかるでせうが、同情は愛になるし、信頼も愛になるものです。——あの女は本當に、私の妻になるべきであつた。その前に、間違つて、あの男と結婚してしまつてゐたのですねえ。あの男はよね子が私の娘だといふことは知つてゐるのです。あの女と私とがあの男の前ではつきりと言つたのだから。しかし、その事を知ると直ぐに、あの男は急に自分の妻がよくなつたのですね。私に信頼しきつてゐるあの女を、ほんとうにいぢらしいと思つたのでせう。そのいぢらしさをあの男自身に盡させたくなつたのです。さうだ、その氣持も本當だ。あの時のあの女を見て誰だつて心を動かさずにはゐないだらう。——あの男は強い男ですよ　女を捨てるなら捨てるでせうが、奪はれるのはいやだつたのですよ。——ああいふ性格を私はその後いつも愛してゐる。——私が彼によね子をのこして置いたよりも、彼が私によね子をのこされた方が、きつと、もつと傷ましかつたに違ひない——それを彼は堪えてゐる。ただあれほどの人間が、どうしてさう世の中を、世の中の

嘘の約束を重く見たがるだらう。いや、世の中へは默つてゐてもいい。それを知らす必要はないかも知れない。だが（彼に）あなたには何か話しましたか。その事を、よね子の事を、あなたの妻たるべき娘の誕生のことを。

彼。……

老紳士。（言はんとする彼を待たずに）さうだらうと思つた。それがあの男のやり方だ。むかしから變つてはゐないのだ。あなたが外交官だといふことをあの男は喜んだだらう——いつも外國にゐる人なら、何も知れまいと思つて。彼のさういふ態度が——それだけが、私の敵(かたき)だ。なぜ、あの男は眞實をあなたに言はないのだ。事の初めに嘘があつてはならないのを、——あの男は知りすぎるほど知つた筈ではないか。——なぜまた、あの女が言はないのだ。あの男が言はせなかつたのだ。——私をどこまで埋もれたものにするつもりだらう。——私はあなたにも知つていただきたい、今あなたがそのやうに愛してゐられるよね子の父は私だといふことを。この好い子の父は私だよ。その名譽をあなたから私に受けさせてもらひ度い。世に時めいてゐる人がよね子の父ではない。私こそ——この妙な男がよね子の父ですよ。——さう聞いて、萬々一、あなたの氣持が變るやうなら、よね子を私にかへして下さい。

よね子がそのやうに生れて來て私の娘であることが何の恥でせう。誰の罪でせう。罪も恥も、あの女にない。あの男にもない。私にもない。況んや、よね子にあらう道理はない。ただ間違ひは、眞實が今まで匿されてゐたといふだけの事だ——だからこそ、私はそれを告げに來た。この外には、誰に罪もない。誰に恥もない。ただみんなの不運ではあつたかも知れない——もう、私はさうも思ひはしないが、だが、今になつて一番悲しいのはきつと（彼女に）お前だらう。しかし（彼に）あなたが本當にあの子を愛してくれるなら、今日からはきつと、あの子をもつと可愛く思ふでせう。悲しみを持つてゐる女をこそ一しほいとしい氣になるものだから。——少くとも私はさうだつた。——よね子の

悲しみをあなたは支へてやるでせう。よね子！

彼女。（顔を上げて老紳士を見る――凝結した表情――放心した大きな瞳）……

老紳士。悲しみが今にお前の心へ沁み入るだらう。何も知らないお前の心を亂すのを宥しておくれ。もう年をとつた私が、またいつ逢ふか判らないお前に、私の生涯の遺産をおくるのだ――お前の父の一つの眞實をね。悲しくとも、お前はそれをいつかは知らなければならなかつたのだ。生きるといふことは自分に就ての何ごとをでも知ることさ。すべての眞實を知らなければいけない。與へられただけで、それを知らないでしまつては生は一つの夢だ。解かなければ無意味な謎だ。それぞれの人にはみんな一つづつの謎がある。知つただけで解かなければ悲しみだ。――私のいふことが判るか知ら。しどろもどろでとりとめもない――いつもひとりでゐる癖のある人間はひとりぎめの事より外には言へない――ともかくも、私は知らせてお前を悲しませる。それを悲しく思はなくなるのがお前のつとめだ。お前の悲しみをきつとお前の夫が分けて背負ふてくれる。私も亦、同じやうにしよう。私はお前の心持をよく了解するよ――二十年の間お前が私の心のなかで育つて來たやうに、今度は私がお前の心のなかで老いて行くだらう。これが私にはどんなに樂しいか――お前、私を、お前の心に住ましてくれるだらう？　私は嫉はない、私とあの女との娘であるお前は喜んで、それだけのことをさせてくれるに違ひない。私はそれでもう充分なのだ。だから、お前は私を何も氣の毒に思ひ出すことはないよ。私は幸福だよ――尠くとも今、この一時の私は。――誰がこの一時の私のやうに生きてゐるものか。この一時を味ふために私の二十年は必要だつた。しかもそのさびしい二十年の間、お前こそ私の希望であつた。その希望は今、遂げられた。今日まで、そばにゐなかつたお前が私をあれほどに慰めたやうに、今日から後もお前は私を慰めるだらう。――まあ考へてごらん。二十年の間、お前のお母さんのそばに私がゐて、お前が私

の膝の上で大きくなつたとしたら――それが世間の幸福といふものだらうが、さういふ幸福のなかには、私が今感じてゐるこの天地に相通ふやうなこんな一時は果してあるだらうか。たかが、この一時を水にうすめて二十年にまくばつただけの事だらうよ。――幸福は世間の人々には世間の人々らしく、私には私らしく與へられた。誰も幸福も不幸もない。お前に與へるこの悲しみは私にどうすることも出來ないが、――それを痊やすのがお前の務めだが、ただお前は私を哀れな父と思ひ出さずともいい――ごらん私は、晴々とした顔をしてゐるだらう。

彼女。（再び顔を上げて老紳士を見る――凝結した表情――放心した大きな瞳）

無言。間。

老紳士。（更に彼女に）この晴々とした私を覺えてゐておくれ。

世間の人を信じてはいけないよ――世間の人はね、お前のお父さんのことを――私をさ、氣がふれたやうに思つてゐるらしいのだが、それは嘘だよ。私はただ、いつも私の世界に住んでゐるだけさ。だが、誰だつてさうではないか――ただ、大ていの人の世界はみんな似通ふてゐる。私に開けた世界だけが、外の人のとは共通ではなかつた――自づと私は、外の人とは違つて考へ、違つて振舞ふだらうよ。――それだけの事さ。

彼。（呟き）――それにしてもあなたは、あまり不意に私どものところへお出でになつた……

老紳士。不意に？　さう不意に。　あなたたちにはあまり不意だつたでせうね。だが、私にはほんとうに自然だつたのですよ。不意どころか、あなたたちが私を呼びよせたとしか思へないくらゐ自然だつた。

彼。――あなたは私たちの話を聞いてゐらしつたかとさへ思へるのです。

老紳士。（彼に）さうなのですよ。（彼女に）全くだよ。今日だけではない、毎日。お前がたがここへ出る度ごとに――お

前がたは私につけられていたやうなものだな。――お前がたがこの土地にゐるといふことを知つて、私は一週間おくれてここへ來た。お前がたがあそこに（右の手で右のうしろを指す）ゐるのを知つて、私はあそこ（左の手で左うしろを指す）へ來た。不氣味に思つてはいけない――お前がたはいつも私に見守られてゐたのだ、私の親ごころに。――私はそれほどお前がたを見たかつたのだよ――樂しんでゐるお前がたはそれほど私の喜びであつた。――そのお前がたと一緒に、ここへ、一度かうして腰をかけてみたいといふのが、ふとした私の願ひだつた。――いつか、七年前にお前を學校へ見に行つた氣持のつづきだ。そのうちにその願ひは嵩じて來た――私はどうかしてお前に私のことを、お前の父のことを、眞實の父のことを言ひたいといふ切願が出た――夢に望んでゐたことを成し遂げたくなつた。――その時は今より外にはないと思つた。お前がたが外國へ行つてしまへば、私はその後で死ぬかも知れない。お前は私を知らないでしまふ。私はお前に知られないでしまふ。――さう思ふことが私には堪へられなかつた。さうかと言つて、私はお前をおどろかせ悲しませるのをためらはずはゐられなかつた。私はお前たちの末永い幸福を見究めただけで、それだけでもう滿足して、私はもう今日は、默つてここを立去るつもりだつた。その最後の時、今日が別れだと考へると、私の願ひは一番切なかつた――ここへ一度お前がたと座りたい、私がお前にとつて何者であるか知らせたい。――その燃え上つた私の切願が通じたのだ。お前は、七年前の私の噂で、ここへ私を呼んだではないか――さうとしか、私には思へない。――お前と私とを引き合せたいといふ何者かがあつたのだらう。（彼に）あなたはいづれベニスへ行くでせうね？

彼。（あまりに唐突な話題に）え？……

老紳士。この子をそこへつれて行つてやつて下さい。――あの美しい町で私は十年住んだ。――あなたが外國へ行く人

だといふ事があの男にだけの仕合せではない。（ポケットから手帳を出し、それを卓上に開いて書く）ここがあの町の停車場だ、――ここがグランド・キャナル。それがかう曲つてゐるあたり――さう橋のある手前を、左へ曲る堀割に沿うて、曲るとすぐ右手に、――かういふ名のホテルがある。町の名も番地も書いて置く。舟がすぐ玄関へつくよ。私を十年住ませたのはここだ。私のゐたのは表の三階で、水の上から見上げると左から五つ目の窓のある部屋さ――もう壁の色ぐらゐは變つてゐるかも知れないが、ベニスへ行つたら、あの部屋へ、すくなくともあの家へ留まつてくれ。三流ぐらゐの家ではあるが、古風でなつかしい。ベデカにも出てゐる。贅澤ではないが、宿屋になければならないもの――親切だけは誰も彼もたつぷりある。おやぢは――私より少し若いが、あの頃、いつも地酒に醉ひすぎては（回想的に）帳場で神さんにきめつけられてゐたつけな。喧嘩の時でさへ仲のよさの溢れてゐる夫婦だつた。ふたりとも生粋のベニス人だつた。――さうさう、あのおやぢは、まだこれぐらゐ（床上三尺ぐらゐの高さを手で示して）のころに、ロシヤの文豪アントン、チエホフに頭を撫でられたことがあると言つてそれをよく自慢にしたものだが、一八九一年三月、アントン、チエホフといふ署名を大事にしまつてあつた。――そこに娘がゐてね。スザンナといふ名だ――もう大きくなつたらう。……よね子！

彼女。（老紳士を見つめる――光つてゐる大きな瞳）

老紳士。スザンナはお前と同い年だよ。よね子。私がどんなにお前を愛したか、それを知つてゐる世の中でたつた一人の人はスザンナだ。あの子はいつも私の膝に抱かれた――お前の身代りにね。あの子は私に一ばんなついた。一日中私の部屋にゐたものだ。よね子。私を生きさせてくれたのはスザンナだつた――お前の影だつた。……私はスザンナにいつも何を話したと思ふ？　お前のことばかりだつた。私はスザンナに言つたものだ――可愛いいスザンナや、私

にもお前と同じとしごろの娘がひとりあるのだよつて。——私はね、よね子、スザンナより外の人には今まで誰にもお前のことは言はなかつた——それがあの女、お前のお母さんとその夫とへの私の心づくしだつた。——せめてスザンナひとりぐらゐには話さずにはゐられないぢやないか。——スザンナは私に尋ねたよ。——小父さんの子は何といふ名だつて？——私は答へようがなかつた。でも、よね子、私はお前の名さへ知らなかつたぢやないか——お前が生れたことは人づてに知れた。お前がよく育つてゐることもわかつた。それよりほかの事は何もわからなかつた——でも。私はもうお前もお前のお母さんも私に無いくらいなら、よその國で死なうと思ひ定めて日本を出てしまつたのは、お前が二つの時だつた。——スザンナはまた聞くのだ——小父さんは、なぜ、そんなに愛してゐる自分の子をここへ連れては來ないのだ？つて。私は抱いてゐるスザンナに言つた——スザンナや、お前はいい子だから今度からはもうその事は聞くのぢやないよ……

彼女。（顔を上げて老紳士を見る。——凝視——一脈の表情——幼兒的恍惚）

老紳士。お前は！　お前はほんとうにお母さんそつくりぢやないか。——存分に泣いたあとであれが私を見上げた顔は、今のお前のその顔だ……（間）——私は何を話しかけてゐたつけね？

彼女。（同じ顔つきで、子供のごとく）スザンナ。

老紳士。さう——スザンナは私がそこを立つ時には、小父さんは私を置いて、自分の娘の方へ行くのかと言つて泣いた。あの子はあの時十三だつたが——スザンナは悧巧な子だつたよ。小父さんは自分の娘に會へるからうれしいでせうとも言つた。私は首をふつて、その子に會ひたくとも果して會へるやら——と答へる、スザンナは、どうして!?　と不思議がつた。私はその時返事をした——スザンナや、おとなにはおとなでなければ判らないことがある。お前がおと

になつた頃、小父さんはまた來て、そのわけを話して上げようよ……

これらの話の半より、廊下に

ボーイ
自動車運轉手
同じく助手

いづれもそれぞれに金ボタン附の制服を着て、右より相つゞいて出て來る。左に出る。
機械的な動作。
再びすぐ左より、運轉手と助手と、あまり大きくない一つの古トランクを二人して前後より持ちて運び來る。そのうしろよりボーイ從ふ。
トランクを運ぶ二人は右に去る。
明るいバルコンに對してこの薄暗い廊下の動作はすべて影畫的である。

ボーイ。（ケースメントの入口の片脇に、直立して）そちらにおゐでで御座いましたか。
老紳士。（ふりかへる――一種かがやかな顏）何か。
ボーイ。お仰せつけのお供がまゐりました。
老紳士。（時計を見るらしく）汽車は何時だ？
ボーイ。三時二十二分で御座います。
老紳士。よし。（立ち上る）

ボーイ再び左に行き、直ぐ手に洋傘とハンチイングとを持つて出て來る、右に去る。

老紳士。お前がたを私に會はせた何者かが、今はもう私にお前がたと別れるやうに言ひつけるらしい。——さよなら。——今別れなかつたら、いつ別れてよいやらわかるまい。——さよなら。（卓上に殘つたあつひ手帳をとり、一枚を裂いて、その殘片）さあ、これを渡して置かう。

彼女。（受け取る）

老紳士。よね子、——私には、スザンナはお前の分身のやうにさへ思はれるのだから……。（彼に）自分のせいでない悲しみをもつたあなたの妻をあなたはもつと愛してやるでせうね。（彼女に）よね子、さようなら。

老紳士は彼等に背をむけてケースメントの方へ輕快に、大股に、歩き出す。

彼女。｝（同時に立つ）
彼。

彼女。もうし……（幻に呼びかける人の聲、形。——七八歩ほど歩いた老紳士を呼びとめる）

老紳士。（ケースメントに近く立ちとまり、彼等をふりかへつて）私かい

彼女。え！（凝視）……あの、（うなだれて）……何でも御座いません。（再び相手を凝視して）さよなら。

老紳士。（快活に）さよなら。——きつとベニスへおいで。お前がどんなに愛せられたかスザンナにお聞きよ。スザンナには何もかも話しておやり——私の約束だから。——さよなら。

老紳士廊下より右へ立ち去る。——無雑作に。

間。——ピアノやむ。

彼と彼女と立つてゐる。——遠い物音を無心に聞くが如き表情。

彼。(呆然と立つてゐる自分と彼女とに氣づいて)今、あなたはあの方をよびとめたね。

彼女。(呆然と)えー

彼。何をいふつもりだつたの?——私も何か言ふつもりだつたが。

彼女。わたし……わたし、ともかくも、もう一目見て置きたかつたの。

彼。あなたに何かおもひ當ることがある?

彼女。(大きくうなづく。彼の顔を見入つて、我に返る瞬間。明確な聲)——わたし、妹たちとまるで氣質が違ふのです。

彼。…………(間)

彼女。(彼に近づきながら)あなた。いつかベニスへつれて行つて下さるわねえ。

彼。(やさしく)ああ、行かうよ! つれて行くとも! (彼女を輕く抱いて劬る。)

彼女。(愕然と)それにしても、あの方は、どちらへ立つておしまひになつたでせう!?

彼。あなたに紙(かみ)ぎれをくれたではないか。ちよつとお見せ。

彼女。(渡す)

彼。お? これやベニスの宿屋のことか。私はあの方の所書きだと思つてゐた。——所書ぐらゐは、何にしても、知つて置かなけれやならない。

急いで、老紳士を追ふ彼に、——

彼女。あなた! 行つてもう一度、お引きとめして下さい……

彼は彼女の言葉を聞かずに去つてしまふ。

彼女は彼を追はんとしてケースメントの上まで來る。思ひ返したごとくまたもとの手すりのところに歸る。

彼女はその指に、さつき捲きかけてゐた毛絲を、そのまま未だしつかりと持つてる。

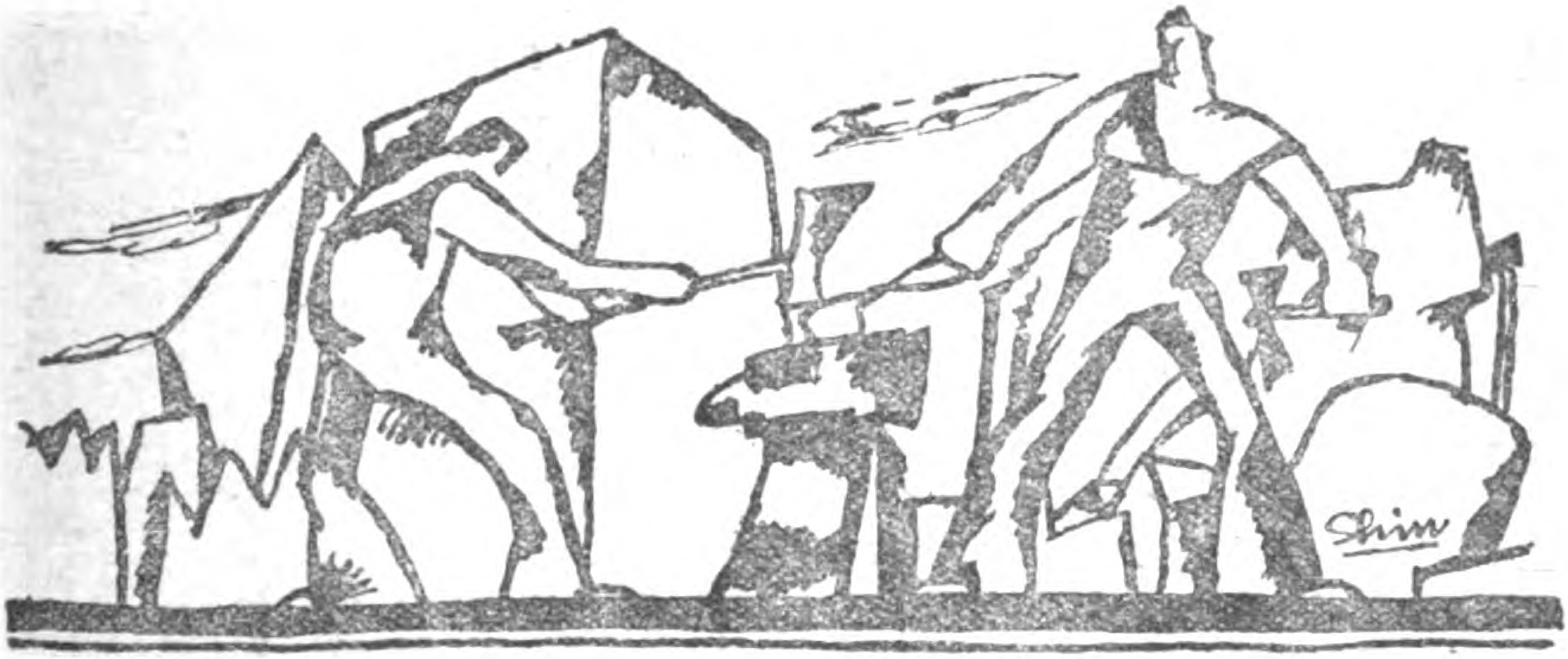
地面に落ちた毛絲のたまと、卓上の毛絲の束とからほどけた絲が、彼女の指から彼女の歩いたあとに線になつて曳かれる。

彼女はバルコンの手すりに倚る。うなだれる。――考へてゐるやうでもある。さしぐんで來るやうでもある。

彼女は、ふと、地面に落ちた毛絲のたまに目をとめたらしく始めてそれに氣づき、しかし半意識的動作で、しづかにそれを片手で手繰り始めた…………

――（幕）

作者附記。　老紳士の言葉だけは、もつと短く、たくさんに行を區切つて。所謂詩に近い形に組むべきであつた。組み上つてゐるからもう仕方がない。



正體（喜劇）

里見弴

時。現代。

所。僻村。

人。お市　三十七八歳

太吉　十一二歳

お花　八九歳

宇川　三十四五歳、小學校教師。

第一場

景。單調な村道。九月の曇つた日暮方。舞臺空虛。

お市、邪慳な相、小金のある百姓の女房の扮裝ながら、どこかに酌婦あがりらしい、いやらしさを見せる。小ざつぱりとした身なりをさせた娘お花の手を引いて、下手より登場。五六歩おくれて、太吉、妹お花とは比べも

のにならぬみすぼらしき身なりにて、しよぼ〳〵とついて出る。顔色蒼白。痩せ衰へてはいるが、怜悧の相、兩手に持ち切れぬほどの風呂敷包を捧へ込んでゐる。

お花。（甘へて、）阿母ア、おらもうくたぶれちやつた。

お市。なんだね、もうついそこにうちが見えてるぢやないか。辛抱おしなね。

お花。いやだア。おんぶ……。（手を繋いだまゝ無理にしやがんで了ふ。）

お市。さアもう一足だアね。花ちやんは利口もんぢアないかよ。

お花。（鼻聲になる。）いや〳〵、いやだア。

お市。（子に甘く、）よし〳〵ちア、しようがない。阿母アがおんぶしてつてやらう。太吉、お前これを持つてきな。

ト、兄への言葉は忽に嚴しく、振り向いて、左に提げた貧乏徳利を渡さうとすると。太吉。兩腕の荷、ぎごちなく手先だけを出し、受けとらうとする。その間にも、「よう、阿母ア、おんぶつたら」などゝ、繫いだ手を振り動かしたりするお花の方へ氣を取られながら、後手に渡した德利が地上に取り落される。

お市。あれ！。

ト、お花の手を振り放し、慌て、拾ひあげ、指をすべらして、もう一度取り落す。前に栓のぬけた德利は、それで完全にからになつて了ふ。

同右。間拔め！

いきなり太吉の頰へ平手でピシヤリといく。太吉ちよつと恨めらしげに見上げる。

同右。見ろ。この馬鹿野郎が！折角のうまいお酒を、みんな泥に飲ませちまつたぢアねえか。

胸ぐらを把つて小突く。

太吉。(心弱くすぐ泪聲になつて、)堪忍してください、阿母さん、ついうつかりしてたもんで……。御免なさい……。

お市。ど、御免ですむと思ふのかよ。今日びの高いお酒を、それも、手前のやうなうつかりもんに持たせたら、どんなまた粗相をしやがるか知れねえと思へばこそ、阿母アが、重い思ひをして、えツちらおツちらこゝまで提げて來て、ついもうちと目の鼻の近くまで來てから……。この穀畜生めー

(力に任せて突き飛ばす。太吉、思はず擁へてゐた荷を放り出して、後にぶツ倒れる。が、すぐ起き返り、大地に手をつき、一生懸命涙をこらへて、)

太吉。阿母さん、惡ござんした。堪忍してください。御免なさい、御免なさい。

お市。なんだ、御免とさへ云アすむかと思つて、二言目にはピイ〳〵云つてあやまりアがつたつて、さう〳〵は堪辨ならないぞ。ほかになに一つ樂みのない阿母アの、大事な大事な寢酒を、はツと思ふまにふいにしちまやアがつて、それが何が孝行息子だ。うはべばかりいやに神妙らしくこしらへさつて、子供の肚さへ見透せねえやうな村の衆や、學校のヘツぽこ教師なんぞをいゝやうに丸めこみやアがつてからに、孝行息子だなんぞと、とんでもねえ評判を立てられりやアいゝかと思つて……。世間はそんなことで誤魔化されようが、阿母アにやアちやんと解つてるぞ。手前は親を恨んでるだらう。子供のくせに、肚では恨めしく思ひながらも、繼母だから仕様がねえなんぞと、惡く締めをつけたりしてゐやアがるんだらう。

太吉。阿母さん、そ、そんな……。

お市。いゝや、駄目だ。いくら手前が、うはべだけを神妙らしくしてみせやアがつたつて、親の眼まで瞞着されやアし

ねえんだ。ちやアんと解つてゐるんだ。もう〳〵今日と云ふ今日は、堪忍ならねえからさう思へ。

（土足にかけ、なほその上にも打擲する。太吉泣きながら詫び入る。捨臺詞よろしく、存分に折檻してから、）

同右。手前のやうなやくざものは、どこへでも行つちまへ！　おらうもう子とは思はねえから……。さア、花ちやん、歸らう。

（ト、あたりに落ち散つた風呂敷包を拾ひ集め、呆氣にとられて佇んでゐたお花の手を引いて花道へ行きかゝる。）

同右。ほんとにあんなふて〴〵しい野郎つてあるもんぢアねえ。花ちやんも、あんなやつ、決して兄さんだなんぞと思ふんぢアないよ。

お花。（迎合的に頷いて、）兄ちやん馬鹿野郎だね。

お市。あゝさうとも。お前そんな、兄いちやんなんて呼ぶことがあるもんかね。太吉の野郎で澤山だよ。

お花。（振り返つて、）太吉の馬鹿野郎やアい。ざまアみろ。

お市。さうだ〳〵。もつと惡態をついておやりよ。

お花。馬鹿、大馬鹿野郎、馬鹿やアい。

（ト、振り向き〳〵罵りながら向揚幕へはいる。）

（太吉、地に轉び伏したまゝ泣いてゐる。だん〳〵薄暗くなつて來る。やがて、體の痛みをこらへて立ちあがり、しく〳〵泣きながら、下手へ行きかけるが、その時、ふと、足もとの貧乏徳利に氣がつき、拾ひあげて、恨しげに見詰める。悲しみが新たに湧き起つて來る。力なく投げ捨てゝ、またワツと泣き出す。）

（宇川、田舍の小學校の教師らしい詰襟の洋服にて上手より登場。すぐに太吉を認め、つか〳〵と側へよる。）

宇川。おい、宮崎、どうした。

（いきなり聲をかけられ、吃驚して泣きやみ、思はず逃げ出さうとする。）

同右。おい、ちよつとお待ち〳〵。一體、今時分、こんなところにたつた一人で、どうしたと云ふんだ。

（やさしく肩に手をかけ、顔をさし覗く。太吉も懷しげに見あげるが、すぐその目を伏せて了ふ。）

同右。まア、お前、泥だらけぢアないか。（着物をはたいてやりながら、）どうしたんだ、轉んだのか。

（太吉、頷く。）

同右。なんだ。轉んだくらゐのことで、そんな、往來なかで泣いてゐるやつがあるもんか。そんな弱いことつてあるもんか。なア、さうだらう、宮崎。（云ひながら落ちてゐる德利に氣がつく。）あゝ、これアなんだな、酒を買ひにやらされて、歸りにおツことして溢しちまつたんだな、さうだらう、それで泣いてたんだらう。

（太吉、しく〳〵泣き出す。）

同右。あゝ、うちへ歸つてさう云つたら叱られるだらうなア。よし〳〵、先生が一緒に行つてあやまつてやらう。た、さうしよう。

太吉。（慌てゝ、）先生、それだけは御免なさい。

宇川。え？　なぜ？

（太吉、口ごもる。宇川、はゝア思ひ當つて、ひとり頷く。）

同右。よし〳〵、ぢア先生は行くまい。（間）ときにお前、この頃心配ごとかなんかありやしないかい？　遊び時間でも

お前ひとり、目に立つて元氣がないし、なんか始終から考へ込んでゐる容子だが、心配なことゝか、辛いことゝか、なんでもいゝ、正直に先生にさう云つてごらん。若し人に聞かれて困るやうなことなら、先生は、決して誰にも話しやアしない。この間ぢうから、一ぺんゆつくりお前に訊いてみたいと思つたんだが、どんなことでも、お前の心にかゝつてゐることを、綺麗にうちあけてくれないか。ほんとに先生は誰にも喋りやアしないよ。どんな内證のことでも、安心してお話し。きつと、なんとか相談相手になつて、お前の氣の晴れるやうにあげるからねえ、お話し。

（太吉、深く考へ込んでゐる。）

同右。先生は、大へんお前のことを心配してゐるんだよ。誰でも、さう始終心に思ふことがないと云ふわけにはいかない。いろ〳〵心配ごともあるもんだ。さう云ふ時には、この人は、と思ふ人に話して、一緒にいろ〳〵考へて貰ふのが一番だ。さうお前のやうに、自分一人の胸におさめてゐては、それアお前、とてもやり切れるもんぢやアない。仕舞には、體を悪くする。

（痩せ衰へた太吉の顏を、いた〳〵しげにぢツと見詰めて、暫く無言。）

同右。ねえ、云つてごらん。先生は、決して悪いやうにはしないから。なんでも正直に話してお了ひ！　さうしたばかりでもいくらか氣持が輕くなるもんだから。ねえ、宮崎、お前は、先生が信用できないのかい？

（太吉、かぶりを振る。）

同右。そんなら、いゝぢやアないか。先生は、お前のために、どんなにでも骨を折つてあげる。どんなむづかしいことでも、きつとなんとか處置をつけてあげる。だから、どんな内證のことでも、ちつとも隠さずに話してごらん。

（太吉、まだ躊躇してゐる。）

同右。（嘆息して）　これほど云つても、宮崎は、先生を信用してくれないかねえ。

（太吉。いゝえそんなことはありません。

宇川。さうだらう？　さア話しな。

（太吉、何か云ひかけて、口ごもる。）

同右。倒へばだ、自分の目上の者のことでも、無理は矢つ張り無理なんだから、斟酌ばかりしてゐずに、構はず云つてごらん。お前の悪いことは云つてあげるし、また……。

太吉。（決心して、）　先生、僕、毎晩可怕い目にあふんです。

宇川。（熱心に、）　可怕い？どんな目にあはされるんだ。

（太吉、あゝ、矢つ張り話すのではなかつた、と云ふ風に、急に伏目になつて了ふ。）

同右。さア、そこまで云つたもんだ。どんな目にあはされるんだか、隠さずにあとを話してごらん。

太吉。（おづ／＼と、）　おばけが出るんです。

宇川。おばけ？

ト、呆れて顔を見詰める。太吉が、飽までも眞面目に、ぢつと見返してゐるので、）

宇川。ふうん。（ト、考へ込み、）一體それア……兎も角、もつと詳しく話してごらん。

太吉。毎晩、おそくなると、枕もとへ來て坐るんです。

宇川。どんなものが……。

太吉。……おばけです。
宇川。どんな顔をして、どんな風をしてゐるんだ。
太吉。一番初めの晩にちよつと見たつきり、可怕いから、いつでも堅く目をつぶつてゐますから……。
宇川。うん、それで、何か口を利くのかい。
太吉。なんにも云はずに、冷い舌で顔ぢう舐め廻すんです。
宇川。そんな馬鹿なことがあるものか。夢でも見るんだらう。
太吉。いゝえ、夢ぢアありません。毎晩宵から、僕は、ちつとも寝られやアしません。はつきりおきてゐて、ただ寝たふりをしてゐるのです。
宇川。一體いつ頃からのことなんだ。
太吉。十日ばかりになります。
宇川。ふうん。（ト、思ひ當つて、）丁度そんなものだ。お前がだん〳〵……。で、何かい、お前のそばには阿父さんや阿母さんや、妹も寝てゐるだらうが、その人たちは……？
太吉。僕、ひとりで寝てゐるんです。
宇川。別の部屋にかい？
太吉。僕だけ、御隠居さまの部屋に寝るんです。
宇川。うん、隠居に寝かされるのか。ぢア、ほかには誰もゐないんだね？
太吉。えゝ……。

宇川。なぜ阿父さんにさう云はないんだ。

太吉。この頃うちにゐませんから……。

宇川。ふうん、どこへ出かけたんだ。

太吉。繭を仕入に行つてます。

宇川。あゝ、秋繭だな。さうか、それアちつとも知らなかつた。それで、いつ頃から留守なんだい。

太吉。出かけてから、丁度半月になります。

宇川。阿母さんには……？

太吉。（しほれて、）誰にも話しません。先生に云ふのが初てです。

宇川。さうか。……然し宮崎、お前、世の中に幽霊なんてものが、實際あるものと思ふかね？

（太吉、深くうなだれて了ふ。）

同在。どうも先生には信じられないんだ。と云つて、お前が嘘をついてるんだとは思はないけれど、それア恐らく、なんかの間違ひだ。お前は大ぶん體が弱つてるから……。では、かうしようぢアないか。今夜、先生をお前のうちに泊めてくれないか。一晩一諸に寝てみよう。

太吉。（慌てゝ、）先生、後生ですから、それだけは……。

宇川。なぜ……？（自ら考へてみて、迷ふ）うん、さうさな……、然し……。

太吉。僕、辛抱できないことはありませんから、どうぞ先生も、もう心配しないでください。

宇川。阿父さんが留守だとすると……。（獨語に呟き、ふと、夕闇の迫つたのに心づいて、）よし〳〵ぢアまア、先生がゆ

つくり考へて置かう。どうしても先生には、そんな幽靈なんてあるものだとは信じられないが……。

太吉。(おづ／＼と、)先生、どうか、このことは……。

宇川。あゝ、誰にも云やアしないよ。兎に角、あんまりおそくなると、うちでも心配するだらうから、今日はこれで別れやう。先生は、決して聞きつばなしにはしやアしない。よく／＼考へてみた上で、なんとか處置をしてあげるから、決して心配しないがいゝ。

太吉、領き、いきなりヒョコリと頭をさげる

同右。あゝ、ぢア急いでお歸りよ。

(ト、共々に花道の附際まで來て、)

同右。なんなら先生も、お酒を笒したお詫びに行つてあげやうか、それとも却つて行かない方がいゝか。遠慮なく云つてごらん。

太吉。僕、ひとりで歸つた方がいゝと思ひます。

宇川。さう。そんならさうおし。ぢアさよなら。

(太吉、丁寧に禮をし、强ゐて活潑に、花道をはいる。中途でうしろを振り向き、あとを見送つてゐる教師と目を見合せると、急に澁面をつくり、駈け込む。

宇川、夕闇のなかに、暗然とし佇む。蟲の聲。

やがて下手へ歩き出す。)

幕。

第二場

景。蠶室。薄暗き柱ランプ一箇。正面板戸にて奥の間に通ず。上手窓。雨戸なし。窓のそと竹藪。下手土間より納屋へ續くあたり、甚だ暗し。

(煎餅布團の上に太吉がころがつてゐる。掛布團なし。ぼろ〳〵の寢間着に、無理に足をくるんだり、額を叩いたり、手首を掻いたり、頻りに蚊に攻められてゐる仕草。蟲の聲。

やゝ間があつて、正面板戸をそうツとあけて、お市登場。板戸のあく音で、すぐ太吉は、ぐつすり寢入つてゐる風を裝ふ。お市、寢息を覗ひながら、足音を忍ばせて、室を横切り、土間から納屋へはいる。)

(宇川、和服の上にオーヴアをはおり、丸太ン棒を持ちて、上手竹藪より姿を現はす。窓のやぶれ穴に目をあてる。太吉が靜に横たはつてゐるのに、やゝ安堵の態。ひそかに卷煙草に火をつけ、掌のなかにかこつて吸ふ。時々蚊に攻められる仕草。蟲の音しきり。)

(下手土間の暗がりに、幽靈現る。髮を振り亂し、眞ツ靑な顏に、眼爛々として、白い舌をダランと吐いてゐる。白衣。そろ〳〵と太吉の枕もとによる。太吉、微に呻く。幽靈、下手向きに坐り、こゞみかゝつて太吉の顏を舐める。太吉、呻く。)

(窓外にしやがんでゐた宇川、聞耳をたて、中腰にやぶれ穴よりうちを窺き、この態を見ると、ガラリと障子を引きあけ、踊り込む。)

太吉、(はね起き、)

太吉。阿母さん、あぶない、早くお逃げ！

（ト、殆ど同時に、宇川が打ちおろした丸太ン棒で、幽靈の頭が打ち割られる。それは、なかをくりぬいた西瓜に、髱をかぶせ、眼の部分を白くくりぬき、舌には蒟蒻をはめ込んだ面だ。キヤツと叫んで、化物の正體であるお市が逃げ出す。宇川は、襟がみを把つて引き戻す。上からはおつた白衣がぬけて、お市土間へ跳びおりやうとするが、引き戻されて、ちよつと揉み合ひ、とじねじ伏せられる。太吉、割つて入り、）

太吉。先生！ぶつちやいけません。

宇川。なに、こいつは化物だ！

（二つ三つ拳固を喰はす。）

太吉。先生！先生！

宇川。この人でなしめ！鬼婆め！

突き放す。お市、疊に突ツ伏して、穴へも入りたき思ひに、ちゞこまつて了ふ。太吉、そばへよつて、優しく、背をさすりながら、

太吉。阿母さん、堪忍してください！僕がつい餘計なお喋りをしちまつたもんだから。御免なさい、御免なさい。（宇川の方へ、）先生！　先生もどうか阿母さんを惡く思はないでください。ね、後生ですから、こんなこと、誰にも仰有らないでください。ほんと云へば、僕、可怕くもなんともなかつたんです。初めの晩は、それア死ぬほど可怕かつたんですけれど、その翌日、出すものがあつて、納屋へはいつて行つたら、おばけが、おばけのぬけがらが、米俵のうしろに隱してあるのを見附けちやつたんです。でも僕、折角阿母さんが、よる夜中に起きて、僕を……、

そんな……、折角そんなにまでなさるものを、僕が可怕がらなくつちア悪いと思つて……。僕、ちつとも可怕かアなかつたんだけれど、たゞ……、たゞ……、僕、どうして阿母さんは、それほど……、それほど僕が憎らしいのかと思ふと、僕、僕……、いつそ死んぢまつた方がましだと思つて、それからは、僕、御飯を食べないで……。でも、僕、悲しくつて、……、どうかして阿母さんに……、阿母さんに可愛いがられるやうになりたいと思つて……。(泣く)

宇川。阿母さん！あ、あなた……、あなたは……、この子の……、この子の……、あなたは……。

(感激のために口が利けず、終に、子供のやうに両手を顔にあてゝ泣き、すぐまた怒を發して。)

同右。こ、これアなんです。(ト、西瓜の破片を取りあげ)な、な、なんて眞似をするんです。馬鹿々々しいにもほどがある、髪だの蒟蒻なんぞくツつけ散かしてからに、子供だましで、罪がないと云ひたいが、もしこれが、宮崎のやうな、こ、こんな、こんな利口な子でなくつて、ほんとの幽靈だと思ひこんでたとしたら、一體、ど、どうなると思ふんです！死んじまいますよ、あゝ、死んじまいますとも！然も一番慘酷な殺し方だ！恐怖のためにちり〳〵ちり〳〵と衰へて行つて…… ほんとにあなと云ふ人は……。

(ト、激昂して、またもや打つてかゝらうとする。太吉、仲へはいつて、)

太吉。先生！堪忍してください！ 僕が悪いんです。僕が、阿母さんに見附られないやうに、時々死んだ阿母さんのお墓参りに行つたりするのが悪かつたんです。きつと阿母さんは、そんなことから、僕が嫌ひになつたんです。僕、僕、僕ほんたうに悪ござんした。ですから、先生、阿母さんを悪く思はないでください。阿母さんが僕を嫌ふのはあたり前で、矢ツ張り僕が悪かつたんです。ねえ、どうぞ堪忍してくださいね。

宇川。あ、あ、あれをお聞きなさい。阿母さん、この子の、こ、こ、この、この心が、この心が、あなたの胸へ通じないくらゐなら、あなたは……、あなたは……。

お市。（急に顔を振りあげ、）太吉！

太吉。阿母さん！

（互に堅く抱きつく。）

宇川。そ、そ、そ、さうだ！

お市。さア、太吉、すぐこれからせんの阿母さんのお墓へ行かう。あたし、せんのお阿母さんにあやまつて來なきア氣がすまない。お墓の前で、お前にも詫びる……。さア、すぐ一緒にいつとくれ！

宇川。そ、そ、そ、さうだ〳〵！

三人の泣聲。

幕。

（禁無斷興行）



身邊雜事

菊池寛

俥夫

正月の松の内のある寒い晩である。私は、吳服橋の停留場まで俥で來た。其處から、電車に乘り換へるためである。俥夫は、五十近い老人であつたが、堂々たる體格で、一くせありさうな面構へをしてゐた。私は、俥に乘るときつと、二三割の祝儀をやることにしてあるが、その晩は松の内なので、平素よりは澤山祝儀をやつた。「旦那ありがたうございます」と、云つて俥夫は私を離れ、一間ばかり向ふへ行つて、梶棒を下して、汗を拭いてゐた。すると、外套を着た官吏らしい男が「おゝ寒い、おゝ寒い！」と云ひながら私と俥夫との間には入つて來た。俥夫は、その男を見ると、突然云つた。

「あなたは、そんな溫いものを着て、それでお寒むいのですか。私は、裸一貫で、はしつてゐても、これで暖かですよ。暖くつて汗が出ますよ。こんな、雲助稼業をしてゐても暖くつて、金が儲かるなんて、何て間がいゝんでせう。」

俥夫は、大きい大きい聲で、づけ〳〵と云ふのであつた。官吏らしい男は、怒れも出來ず、抗議もできず、てれがくしにせゝら笑ひをしてゐた。俥夫は、再び梶棒を上げると、「旦那ありがたう」と、私に挨拶をして、昂然と歩き去つた。

この俥夫が、第四階級らしい反抗を持つてゐるわけではないだらう。たゞ、實際に働いてゐる者の、すが〳〵しさが

その偉大な體格に現はれてゐるやうで、私は何となく愉快であつた。

醫師

良心と營利とが、いろ〳〵交錯することは、あらゆる職業に免れないことだが、醫師にはそれが甚しくないだらうか。病院を持つてゐる醫師が、大抵の患者を入院させたがる。それは、患者の身命を重んずると云ふ口實（自分自身の良心に對し）の中に、營利の心が動いてゐないだらうか。それと同時に、病院を持つてゐない醫師は、患者を入院させたがらない。患者を、他の病院に入院させることは、結局自分の顧客を他へゆづることになるから、もつとよく解釋して、なるべく自分の手で、癒したいから。多くの醫師諸君は、或はもつと良心的に行動して居らるるかも知れないが、素人には、かうした邪推も動くのである。入院をさせたがることは、金錢の問題だから、まだいゝ。入院を、させたがらない場合には、人命に關する重大な問題が、起つてゐる場合もあるだらうと思ふ。

郵便局員

私は時々郵便局へ行く。書留を賴んだり、小爲替をこさへて貰つたりするためである。三等郵便局の中には親切な局員も偶にはあるが、一二等郵便局員は多くの場合、不親切である。小爲替などを、澤出一度に賴むと、いやな顏をして「こいつは大變だな」などと云ふ。女事務員なども大抵は、無愛想であるばかりでなく、不快な感じを與へる。郵便局へゆくと　きつと氣持を悪くさせられる。が、然し、かうした人々の、無愛相や不親切のために、彼等をとがめたくはない。私は、郵便局の事務が、どんなに無味乾燥であるかを彼等のために、同情する。窓口に溢れてゐる人々に、せつか

れながら、乾燥な機械的な仕事を、くり返してゆく。そして、どんなに忙しい目をしても、そのために一文だつて彼等の得にはならない。あの人々の神經や感情が、あれすさむのも、尤もだと思ふ。つひ、つつけんどんな言葉などを、公衆に向つて吐くのも、尤もだと思ふ。たゞ、私は、我々が拂ふ書留料小爲替料の內から、彼等が我々を親切に扱つてくれる程度に、仕事をはげむほどの俸給を、なぜ國家が拂はないのだらうかと思ふ。郵便局員の神經を、イラ〳〵させ、我々を不愉快にし、而して國家が、郵便收入として、何千萬圓の利益を計上してゐることは、甚だ怪しからないことだと思ふ。國家が、郵便局員をもつと、人間らしく扱へば、彼等も我々に對して、もつと親切にしてくれるのに違いない。我々は書留料や小爲替料は、もう一錢位上げられてもいゝから、郵便局へ行つて、あんな不愉快な思ひをしたくないのである。國家が、郵便收入などで、大金を計上する前に、郵便事務のために、働いてゐる人を、もつと人間らしく扱ふことは、當然なことだと思ふ。

小學校教員

私の近親と云つて、本當は兄だが、小學校教員をしてゐる。今年四十四、五になるが、今度退職させられることになつたから、何か仕事を見つけてくれと云つて、私の所に手紙をよこした。が、四十四五になつて、仕事などがあるわけはない。月給は、いくら取つて居たか知らないが、恐らく七八十圓であつたゞらう。そして、兄には子供が五六人ある。月給で、今まで生計を立てゝゐることさへ困難であつた。況んや、貯へをすることに於てをや。それを四十四五になつて、退職される。恩給はわずかに一年三百五十圓だと云ふことである。兄は、偶然私と云ふ弟があるので、路頭に迷はないだらう。だが、天下幾十萬の小學校教員は、五十近くになつて、退職させられ、それで三四百圓の恩給で、何うして妻子を連れて食つて行くのだらう。國家と云ふものは、殘酷なことをするものである。

編輯を了へて

□今後の我國の政局を擔當するものは、大學出の官僚であるか、勞働組合を根據とする人々であるか、ただしはブルジョア政黨の陣笠どもであるか。

□尤も今の大學出の青年に獨立心と、邁往の勇氣のないことは事實だ。そは大學教授も惡いが、社會が尙一層惡いからだ。金持の婿になる心理、權勢に從順なる心理は總ての人格を去勢する。ただ今の勞働組合があまりに偏狹で、純勞働者以外のものを排斥する心理では到底大をなすことが出來なかろう。「勞働組合が農民組合その他と聯合して經濟運動を出でて政治運動に參加することあらば、それは既成政黨の最大の矜威となるであろう。勞働組合もくだらぬ内輪喧嘩を熄め、智識階級其他と大同團結して政治的への方向轉換をやるべきだ。

□日露協商も相互の誤解で眞の交渉に這入れぬのは遺憾だ。英國も承認し、支那も承認するのであるから何とか協調は成立しそうな者だ。いつまでも〳〵腹の探り合ひは水臭い限りだ。

□何をいつても、我國の青年たちが自分の本當の力量と、使命を解することが出來ることによつて、そこに新日本の創造が出來るのだ。西洋文明にかぶれ、西洋文明の賜で紳士になつたものには眞の創造は出來ないのだ。

□阿富汗、波斯、土耳古等の東方民族の覺醒がレニン氏の政策の結果與つて力あつたといふことは三民族の均しく首肯する所である。我等は氏の偉大なる力量を今更に讚仰する。それにつけても我日本が東方文明の指導的地位が微弱であることに心ひかるるものだ。

□本月で我社も滿五週年の春を迎へた。本月は福田、長谷川、森戸、片山、フッサール氏等の五雄篇が堂々の陣を張り全く誌界の偉觀を呈しておる。内田魯庵氏の「典籍の廢墟」は百五十枚の長篇にて、震災で燒失せし百萬の典籍の調査を明確にした稀なる好文獻である。創作欄も百花撩亂として全く近來の盛觀たるを失はない。

□本社發行の「大正大震火災誌」は印刷の都合がつかず、その發行が四月末日になりましたことを幾重にもお詫びします、その代り内容は充實した立派な書籍として期待に叛かぬものと致します。

改造定價

冊數	定價	郵料
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共 郵税不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共 郵税不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は壹部につき郵税金拾錢を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾參年三月廿日　印刷納本
大正拾參年四月壹日　發行

東京芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　平田貫一郎
東京牛込區市ケ谷加賀町一ノ一
印刷所　秀英舍

（定價壹圓五拾錢）

發行所　改造社
東京芝區愛宕下一ノ一
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

大杉榮著

第廿五版

自叙傳

コロタイプ寫眞五頁入・三四三頁　定價二圓　送料十七錢

大杉君の著書中、尤も著者が意を用ゐたものは本書です。最初の思出(四一頁に亘る)がなかなか奇抜ですが、少年時代の腕白さを例の放膽な筆で三十頁かいてゐる。そして中學の不良少年時代(三一頁)や幼年學校の亂暴時代(四〇頁)は此人ならでは到底眞似の出來ない粗暴振りだ。そしてその初戀時代(三〇頁に亘る)は矢張り涙ににじむ人並み以上のローマンスがあり、母を追憶する場面(四〇頁)は彼も人の子との感じが湧く。葉山事件は尤も此人を有名にした場面だけに、たいへん力瘤がはいつてゐる。獄中生活の記事は全く此人獨特の壇場だ。

そして口繪の第一頁を見ては眞に、此人が未だ生きて原稿をかいてゐるやうな氣がするし、第二の寫眞では彼の母の顏と彼の顏とが瓜二つなるを感じ、第三の寫眞にては彼が中學校時代に左肩の上つた軒昂振りを追憶し、第四の寫眞では彼がラッセルと語るときの雍容振りが目にちらつく。最后の寫眞では彼が女房と子供とに甘かつたことに微笑まれつゝ涙下る。

東京　改造社　振替東京八四〇二

文學博士 桑田芳藏著

ヴントの民族心理學

定價參圓五十錢
送料廿一錢

新刊發賣

心理學の使命は、個人心理や、實驗心理に限定さるるものでなく、夫は實に社會及文化の心理解剖が尤も重要とさるべきだ。實驗心理の鼻祖にして又、其大成者たるヴントは遂に民族心理に到達したが、而も彼の民族心理學は、坊間の非科學的のものでなく、科學的心理學の體系に於て尤も重要なる一部門をなして居る。これ彼の該博無比なる哲學的、心理的智識の最後の總束であり、又結晶でもある。

著者は、ヴントに親しく師事した新鋭の心理學者である。彼が浩瀚なる十數卷は讀むに困難である、此一書を通讀して彼の蘊奧なる文化や社會の心理の科學的說明を聞け。

東京 改造社 振替東京八四〇二

◇本社殘留書整理の結果左の書籍若干部數を發見致しましたから貴需に應じます。

- 物理學と認識　桑木彧雄著　定價一圓五十錢　送料十五錢
- 一つの時代　犬養健著　定價二圓六十錢　送料十九錢
- 此世は如何にして終るか　フラマリオン作　高瀬毅譯　定價二圓　送料十七錢
- 二人の獨り者　近松秋江著　定價二圓　送料十五錢
- 勞農ロシア詩集　尾瀬敬止著　定價二圓　送料十七錢
- 脂粉の顔　藤村千代著　定價三圓三十錢　送料十九錢
- 現代哲學思潮　矢崎美盛著　定價一圓五十錢　送料十七錢
- 東京へ　藤森成吉著　定價三圓三十錢　送料十九錢
- 日本改造法案　北一輝著　定價一圓五十錢　送料十五錢
- 水泳　梅澤親光著　定價一圓八十錢　送料十五錢
- 山行　槇有恒著　定價三圓二十錢　送料十九錢
- 野球　三宅大輔著　定價三圓八十錢　送料十九錢
- 亂舞する焰　加藤一夫著　定價二圓　送料十五錢

- 文明病患者　武林無想庵著　定價二圓卅錢　送料十七錢
- 農夫喜兵衛の死　中西伊之助著　定價一圓七十錢　送料十五錢
- 轉換期の經濟學　ブハリン著　稻垣守克譯　定價一圓八十錢　送料十九錢
- アインスタイン講演錄　石原純著　定價一圓八十錢　送料十五錢
- ロシヤ現代思潮と文學　昇曙夢著　定價四圓八十錢　送料二十七錢
- 續編 國際經濟と國民經濟　堀江歸一著　定價一圓五十錢　送料十九錢
- 愛憎篇　長田秀雄著　定價一圓六十錢　送料十五錢
- 雷鳥の目醒むる前　賀川豐彦著　定價三圓三十錢　送料十七錢
- 近代女性の表現　北澤秀一著　定價一圓七十錢　送料十五錢
- 青銅の基督　長與善郎著　定價二圓　送料十七錢
- 印象と傾向　室伏高信著　定價二圓　送料十七錢
- 佗びしすぎる　佐藤春夫著　定價一圓六十錢　送料十五錢
- ジンメルの歴史哲學　恒藤恭著　定價二圓　送料十七錢

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

改造社增版數種

（目下增版中の書籍左の如し）

賀川豐彥著 **死線を越えて**
定價參圓 送料拾九錢

阿部次郎著 **北郊雜記**
定價壹圓五拾錢 送料拾五錢

山川均著 **レニンとトロツキー**
定價壹圓五拾錢 送料拾五錢

吉田絃二郎著 **芭蕉**
定價壹圓六拾錢 送料拾五錢

福田德三著 **社會政策と階級鬪爭**
定價貳圓八拾錢 送料拾九錢

原田指月著

四六版總布製箱入四百餘頁

忽ち拾版

創作 決勝點

定價貳圓五拾錢

（送料拾錢）

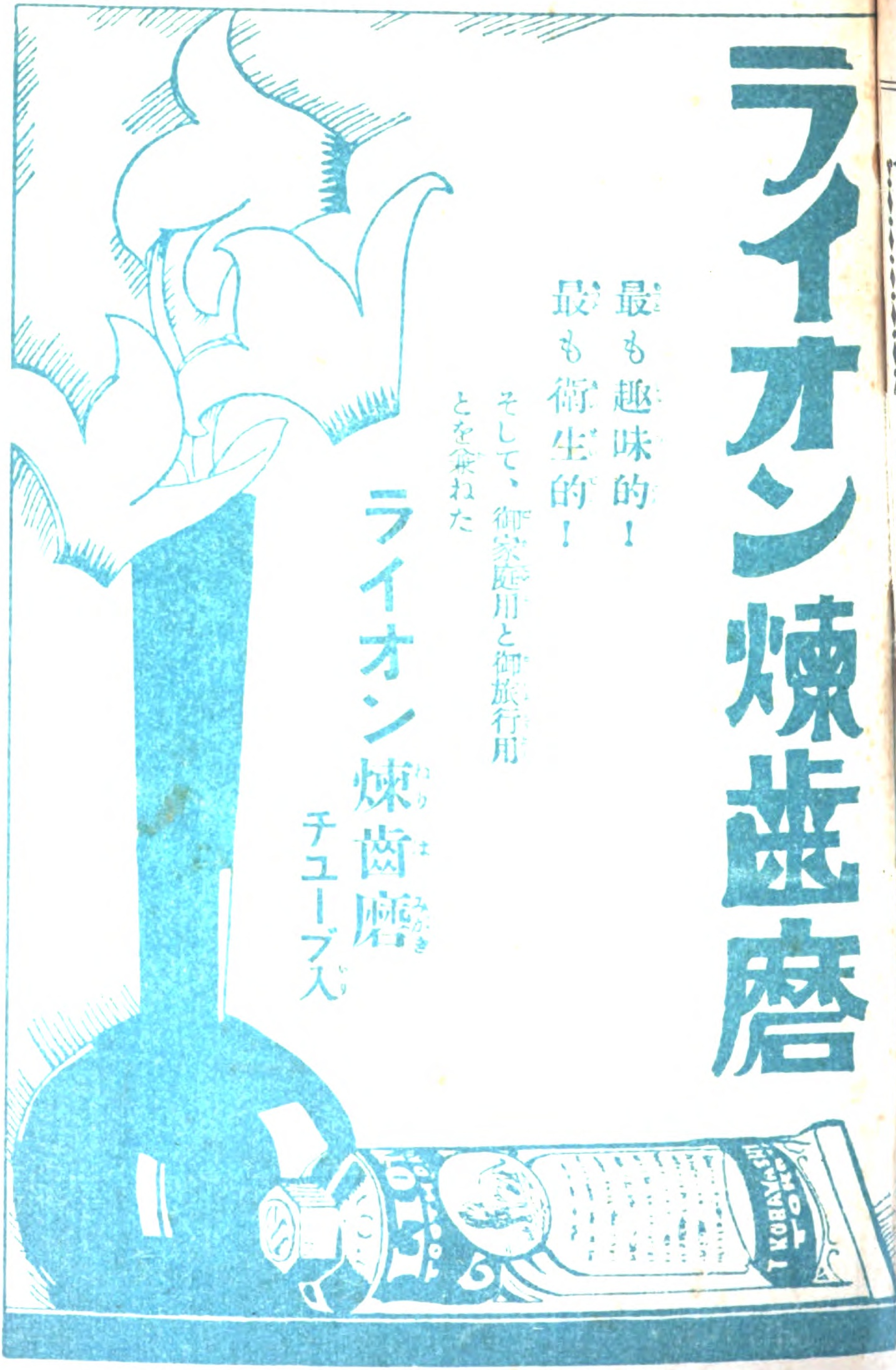
大歡迎

旬日を出でずして拾版賣出

（東京市赤阪區表町三ノ廿一 グランド社發行 振替東京六六四五五番）

曰く『問題の書現る!!』と――著者は近代人の鋭い神經を以て遂に冷き軍隊生活に堪へなかつた陸軍大尉である。軍人が小說を著し戀を語るの旣に異數なるに更に非戰論の叫をあぐ。悲壯な戲曲的衝動を與へるに允分ではないか。文辭淸艶詩の如く、凄慘の大戰場を舞臺として旗手たる靑年士官の死戀の葛藤、階級の鬪爭を臆するなく寫して空前の大悲劇を現出する。實に軍事界物議の種であると共に文壇驚異の的である。所謂遊蕩文士の追隨を許さぬ男性的精神の潑剌、刻苦十年に成る大雄篇を見よ。

爆烈彈的大問題の書


ライオン煉歯磨
最も趣味的！
最も衛生的！
そして、御家庭用と御旅行用
とを兼ねた
ライオン煉歯磨
チューブ入

原田指月著

四六版總布製箱入四百餘頁

忽ち拾版

創作 決勝點

定價貳圓五拾錢
（送料拾錢）

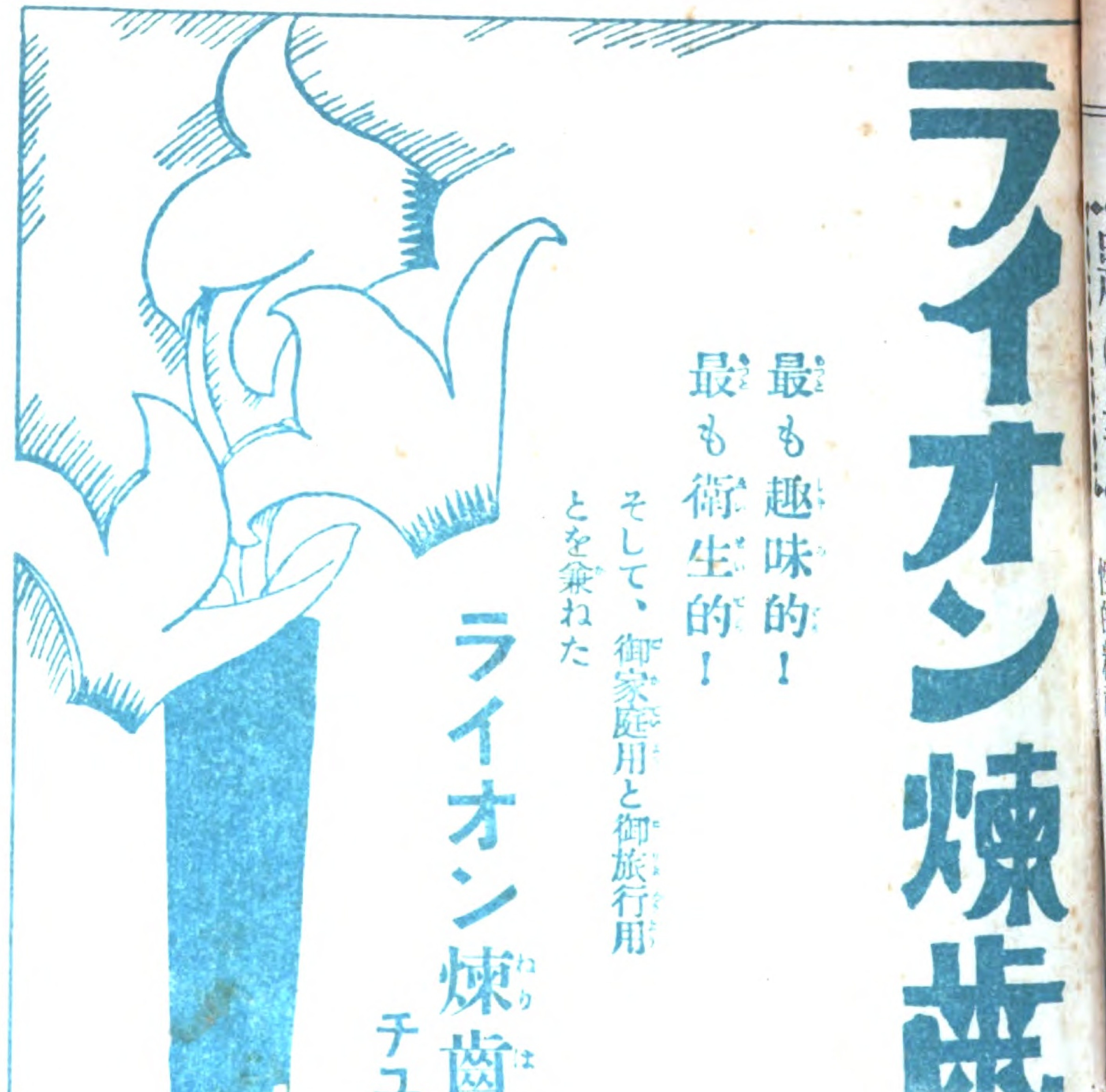
大歡迎

旬日を出でずして拾版賣出

爆烈彈的大問題の書

曰く『問題の書現る!!』と——著者は近代人の鋭い神經を以て遂に冷き軍隊生活に堪へなかつた陸軍大尉である。軍人が小説を著し戀を語るの既に異數なるに更に非戰論の叫をあぐ。悲壯な戯曲的衝動を與へるに充分ではないか。文辭清艶詩の如く、凄慘の大戰場を舞臺として旗手たる青年士官の死戀の葛藤、階級の鬪爭を臆するなく寫して空前の大悲劇を現出する。實に軍事界物議の種であると共に文壇驚異の的である。所謂遊蕩文士の追隨を許さぬ男性的精神の潑剌、刻苦十年に成る大雄篇を見よ。

東京市赤坂區表町三ノ廿一　グランド社發行　振替東京六六四五五番


ライオン煉歯磨
最も趣味的！
最も衛生的！
そして、御家庭用と御旅行用
とを兼ねた
ライオン煉歯磨
チューブ入

HE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
OLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
RICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR.
FFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO